

# 大川遺跡における考古学的調査Ⅰ

—余市川改修事業に伴う1989～1994年度大川遺跡発掘調査報告書 第1分冊(総説・竪穴状建物跡篇)—

2000年1月

北海道余市町教育委員会

## 【大川遺跡における考古学的調査】刊行にあたって

余市町は江戸時代よりニシンの千石場所として知られ、北海道内では温暖な気候に恵まれているところから海の幸・山の幸が豊富で、第一次産業を基盤として発展を続けてきました。また、宇宙飛行士の毛利 衛さん・ジャンプの斉藤選手・船木選手など世界的な活躍を遂げる人材をも輩出しています。

古い歴史をもつ本町の歴史を物語るように、町内には数多くの文化財が点在し、国指定重要文化財・史跡旧下ヨイチ運上家・国指定史跡フゴッペ洞窟・国指定史跡旧余市福原漁場を始め、道指定文化財2件・町指定文化財33件を数えています。

なかでも埋蔵文化財につきましては、町内で60数ヶ所の包蔵地が確認されており、古くからこの地の人々が生活を営んでいたことを示しています。

近年、町内各所で行われた発掘調査や範囲確認調査の結果、古代における人々の生活圏やそのありさまが、少しずつ明らかになってきています。今回刊行する報告書は、平成元年から平成6年度に大川遺跡で行われた、余市川河川改修に伴う発掘調査に関するものです。6年間に亘る調査の中で多数の遺構・遺物が検出され、また余市町の歴史に新たな頁が加わることとなりました。今後は、この発掘成果を広く地域の方々に紹介し、文化財保護活動の一助とする所存です。

今回の調査にあたりましては、北海道教育委員会と調査指導員をお引き受けいただいた北海道東海大学の岡田淳子先生始め、発掘調査とそれに引き続く整理作業に従事された皆様のご努力、さらには調査原因者である北海道小樽土木現業所のご理解や、地域の皆様のご協力によって成果をあげることができました。ここに衷心より厚くお礼申し上げ、【大川遺跡における考古学的調査】刊行にあたってのご挨拶といたします。

平成12年1月

北海道余市町教育委員会  
教育長 利 輝 夫



## 本文目次

序文	1
本文目次・表目次	11
目次	ii-iv
写真目次	iv-v
巻頭写真(写真1~21)	vi-xv

### 【第1章】調査の概要

第1節 発掘調査にいたる経緯	1
第2節 調査体制	2
第3節 作業方針	5
第4節 分析・測定・保存処理の方針	6
第5節 執筆等の方針	7
第6節 謝辞及び調査協力者	7

### 【第2章】大川遺跡の概要

第1節 大川遺跡の位置・地質と標準層序等について	10
第2節 発掘調査区域と発掘調査の経過	11
第3節 検出遺構と地味	15

### 【第3章】出土遺物の分類

第1節 土器	16
第2節 土製品	20
第3節 石器	22
第4節 石製品	25
第5節 竹内器・竹内製品	27
第6節 金属製品	28
第7節 漆器・木製品	30
第8節 陶磁器	31
第9節 ガラス製品	33
第10節 その他の遺物	33

### 【第4章】壱穴状遺物群の検出とその出土遺物

第1節 縄文前期・縄文中期の壱穴状遺物群	42
第2節 縄文期(古代)の壱穴状遺物群	144
第3節 後世の壱穴状遺物群	280
JH・SH・HP写真図録(白写真頁22~113)	282

### 【第5章】遺構・遺物の理化学的分析

第1節 <sup>14</sup> C年代測定結果報告	374
第2節 大川遺跡出土の炭化物選片について	376
第3節 大川遺跡検出の植体選片について	381
第4節 大川遺跡遺構伴出炭化木材の樹種判定	385
第5節 大川遺跡出土鉄副産物の自然科学的調査結果	443

### 【第6章】小 括

第1節 大川遺跡検出壱穴状遺物群調査の概要	463
第2節 大川遺跡検出壱穴状遺物群略誌	466
報告書抄録	468

## 表目次

表1 大川遺跡JH-1出土遺物一覧	40
表2 大川遺跡JH-2出土遺物一覧	45
表3 大川遺跡JH-3出土遺物一覧	49
表4 大川遺跡JH-4出土遺物一覧	64
表5 大川遺跡JH-5・JH-5a・JH-5b出土遺物一覧	76
表6 大川遺跡JH-6出土遺物一覧	73
表7 大川遺跡JH-7出土遺物一覧	79
表8 大川遺跡JH-8・JH-9出土遺物一覧	84
表9 大川遺跡JH-10出土遺物一覧	92
表10 大川遺跡JH-11出土遺物一覧	114
表11 大川遺跡JH-12・JH-12a出土遺物一覧	122
表12 大川遺跡JH-14出土遺物一覧	127
表13 大川遺跡JH-15出土遺物一覧	136
表14 大川遺跡JH-16・JH-17出土遺物一覧	141
表15 大川遺跡JH-17a出土遺物一覧	143
表16 大川遺跡SH-2・SH-3・SH-5・SH-6出土遺物一覧	150
表17 大川遺跡SH-7・SH-8出土遺物一覧	153
表18 大川遺跡SH-9出土遺物一覧	160
表19 大川遺跡SH-11-12-13-14-15-16出土遺物一覧	166
表20 大川遺跡SH-17出土遺物一覧	172
表21 大川遺跡SH-18出土遺物一覧	175
表22 大川遺跡SH-19出土遺物一覧	179
表23 大川遺跡SH-20出土遺物一覧	182
表24 大川遺跡SH-21・SH-22出土遺物一覧	186
表25 大川遺跡SH-23出土遺物一覧	191
表26 大川遺跡SH-24出土遺物一覧	195
表27 大川遺跡SH-25a出土遺物一覧	195
表28 大川遺跡SH-25b出土遺物一覧	199
表29 大川遺跡SH-27-34出土遺物一覧	208
表30 大川遺跡SH-35出土遺物一覧	213
表31 大川遺跡SH-36出土遺物一覧	213
表32 大川遺跡SH-37出土遺物一覧	220
表33 大川遺跡SH-38・SH-39出土遺物一覧	224
表34 大川遺跡SH-40・41出土遺物一覧	229
表35 大川遺跡SH-42-43-45-48出土遺物一覧	232
表36 大川遺跡SH-49出土遺物一覧	238
表37 大川遺跡SH-50-52出土遺物一覧	246
表38 大川遺跡SH-53・54出土遺物一覧	253
表39 大川遺跡SH-55-58出土遺物一覧	260
表40 大川遺跡SH-59-62出土遺物一覧	267
表41 大川遺跡SH-63-66・68出土遺物一覧	271
表42 大川遺跡SH-69-71出土遺物一覧	277
表43 大川遺跡HP-1出土遺物一覧	280
表44 大川遺跡(1989-1994)JH出土遺物選片一覧	376
表45 大川遺跡(1989-1994)SH出土遺物選片一覧	378
表46 大川遺跡(1989-1994)JH後世遺物選片一覧	381
表47 大川遺跡(1989-1994)SH後世遺物選片一覧	382
表48 資料の概要	454
表49 鉄鏡の分析結果	455
表50 鉄淨の化学組成	456
表51 №15-21の化学組成	455
表52 9-13世紀出土鉄鏡後の組成	455

## 図目次

図1 余市川改修事業計画断面図	1
図2 大川遺跡と人身遺跡の発掘調査区域	12
図3 大川遺跡検出壱穴状遺物群検出図(JH-1-17・SH-1-71・HP-1)	13-14
図4 土器の分類I(縄文前期)	16
図5 土器の分類II(縄文中期-晩期)	17
図6 土器の分類III(縄文晩期-縄文期)	18
図7 土器の分類IV(縄文晩期-縄文期)	19
図8 土器・土製品の分類(縄文晩期-縄文期)	20
図9 土製品の分類(縄文期)	21
図10 土製品・石器の分類(古時代)	22

0011	石器の分類Ⅰ（古時代）	23
0012	石器の分類Ⅱ（古時代）	24
0013	石器・石製品の分類（古時代）	25
0014	石製品の分類（古時代）	26
0015	骨角器・骨角製品の分類（古時代）	27
0016	金属製品の分類Ⅰ（古時代）	28
0017	金属製品の分類Ⅱ（古時代）	29
0018	金属製品の分類Ⅲ（中鉄・近代・現代）	30
0019	陶磁器の分類Ⅰ（中鉄）	31
0020	陶磁器の分類Ⅱ（近代・現代）	32
0021	ガラス製品の分類（古時代）	33
0022	その他の遺物の分類Ⅰ（古時代）	34
0023	その他の遺物の分類Ⅱ（中鉄・近代・現代）	35
0024	大川遺跡J H-1 検出状況	36
0025	大川遺跡J H-1 床面及び覆土出土の土器	37
0026	大川遺跡J H-1 覆土出土の土器	38
0027	大川遺跡J H-1 床面及び覆土出土の各種遺物	39
0028	大川遺跡J H-1 覆土出土の四石と磁石	40
0029	大川遺跡J H-2 検出状況	42
0030	大川遺跡J H-2 床面及び覆土出土の土器	43
0031	大川遺跡J H-2 覆土出土の土器	44
0032	大川遺跡J H-2 床面及び覆土出土の遺物	45
0033	大川遺跡J H-2 覆土出土の四石	46
0034	大川遺跡J H-3 検出状況	48
0035	大川遺跡J H-3 床面及び覆土出土の土器と石斧	48
0036	大川遺跡J H-3 覆土出土の土器	48
0037	大川遺跡J H-4 検出状況	50
0038	大川遺跡J H-4 床面及び覆土出土の縄文期の土器	51-52
0039	大川遺跡J H-4 覆土出土の土器	53
0040	大川遺跡J H-4 覆土出土の土器	54
0041	大川遺跡J H-4 覆土出土の土器	55
0042	大川遺跡J H-4 覆土出土の土器	56
0043	大川遺跡J H-4 覆土出土の縄文・縄文前期の土器	57
0044	大川遺跡J H-4 覆土出土の縄文中期・縄文後期の土器	58
0045	大川遺跡J H-4 覆土出土の磁石・磁石・四石	59
0046	大川遺跡J H-4 床面及び覆土出土の遺物	60
0047	大川遺跡J H-4 床面及び覆土出土の銅片石器	61
0048	大川遺跡J H-4 覆土出土の銅片石器	62
0049	大川遺跡J H-4 覆土出土の銅片石器	63
0050	大川遺跡J H-4 床面及び覆土出土の石鏃・石斧	64
0051	大川遺跡J H-5 a・5 b 検出状況	68
0052	大川遺跡J H-5 a・5 b 床面及び覆土出土の遺物	69
0053	大川遺跡J H-5 2 層位の検出状況	70
0054	大川遺跡J H-5 1 層位の各種遺物	71
0055	大川遺跡J H-5 覆土出土の遺物	72
0056	大川遺跡J H-5 5 b 床面及び覆土出土の遺物	73
0057	大川遺跡J H-6 検出状況	75
0058	大川遺跡J H-6 床面及び覆土出土の土器	76
0059	大川遺跡J H-6 床面及び覆土出土の土製品と銅片石器	76
0060	大川遺跡J H-7 検出状況	77
0061	大川遺跡J H-7 床面及び覆土出土の土器と石器	78
0062	大川遺跡J H-7 覆土出土の土器と石斧	79
0063	大川遺跡J H-7 床面及び覆土出土の土製品と銅片石器	80
0064	大川遺跡J H-7 覆土出土の各種遺物	81
0065	大川遺跡J H-8 検出状況	82
0066	大川遺跡J H-8 検出状況	83
0067	大川遺跡J H-8 8 床面及び覆土出土の土器と四石	83
0068	大川遺跡J H-8 8 床面及び覆土出土の土製品と銅片石器	84
0069	大川遺跡J H-10 検出状況	85
0070	大川遺跡J H-10 床面及び覆土出土の土器	86
0071	大川遺跡J H-10 覆土出土の土器と磁石・四石	87
0072	大川遺跡J H-10 覆土出土の土器と磁石	88
0073	大川遺跡J H-10 覆土出土の土器と磁石	89
0074	大川遺跡J H-10 覆土出土の各種遺物	90
0075	大川遺跡J H-10 覆土出土の遺物	91
0076	大川遺跡J H-11 検出状況	94
0077	大川遺跡J H-11 覆土出土の縄文中期末・縄文後期の土器	95
0078	大川遺跡J H-11 覆土出土の縄文中期末・縄文後期の土器	96
0079	大川遺跡J H-11 覆土出土の縄文中期前葉の土器	97

0080	大川遺跡J H-11 覆土出土の縄文後期の土器	98
0081	大川遺跡J H-11 覆土出土の縄文後期の土器	99
0082	大川遺跡J H-11 覆土出土の縄文後期前葉の土器	100
0083	大川遺跡J H-11 覆土出土の縄文後期の土器	101
0084	大川遺跡J H-11 覆土出土の縄文後期末・縄文後期の土器	102
0085	大川遺跡J H-11 覆土出土の縄文後期末・縄文後期の土器	103
0086	大川遺跡J H-11 覆土出土の土器	104
0087	大川遺跡J H-11 覆土出土の土器・イモガイ製品と各種土製品	105
0088	大川遺跡J H-11 覆土出土の土器・石斧・磁石	106
0089	大川遺跡J H-11 覆土出土の四石・石鏃・磁石	107
0090	大川遺跡J H-11 覆土出土の土器・磁石・銅片石器	108
0091	大川遺跡J H-11 覆土出土の土器・磁石・銅片石器	109
0092	大川遺跡J H-11 床面及び覆土出土の土製品と石器	110
0093	大川遺跡J H-11 覆土出土の銅片石器	111
0094	大川遺跡J H-11 覆土出土の土器と石器	112
0095	大川遺跡J H-11 覆土出土の各種遺物	113
0096	大川遺跡J H-12 検出状況	120
0097	大川遺跡J H-12 J H-13 覆土出土の土器と石斧	120
0098	大川遺跡J H-12 床面及び覆土出土の土器と土製品	121
0099	大川遺跡J H-13 検出状況	121
0100	大川遺跡J H-14 検出状況	123
0101	大川遺跡J H-14 床面出土の土器	124
0102	大川遺跡J H-14 床面及び覆土出土の土器と磁石	125
0103	大川遺跡J H-14 3層目・第2層目出土の遺物	126
0104	大川遺跡J H-14 覆土出土の土器	127
0105	大川遺跡J H-14 床面及び覆土出土の土製品と石器	129
0106	大川遺跡J H-14 覆土出土の土器と青銅	130
0107	大川遺跡J H-14 3層目・第2層目出土の遺物	131
0108	大川遺跡J H-15 検出状況	132
0109	大川遺跡J H-15 床面及び覆土出土の土器と磁石	133
0110	大川遺跡J H-15 覆土出土の土器と四石	134
0111	大川遺跡J H-15 床面及び覆土出土の土製品と石器	135
0112	大川遺跡J H-16 検出状況	137
0113	大川遺跡J H-16 床面及び覆土出土の土器と土器	137
0114	大川遺跡J H-16 覆土出土の縄文中期末・縄文後期の土器	138
0115	大川遺跡J H-16 覆土出土の磁石と四石	139
0116	大川遺跡J H-16 J H-17 床面及び覆土出土の遺物	140
0117	大川遺跡J H-17 検出状況	142
0118	大川遺跡J H-17 8層位の検出状況・検出状況・第2層目の検出状況	142
0119	大川遺跡J H-17 覆土出土の四石	143
0120	大川遺跡S H-1 検出状況	144
0121	大川遺跡S H-2 検出状況	144
0122	大川遺跡S H-3 検出状況	145
0123	大川遺跡S H-5 検出状況	146
0124	大川遺跡S H-6 検出状況	147
0125	大川遺跡S H-2・S H-3・S H-4 床面及び覆土出土の遺物	148
0126	大川遺跡S H-2・S H-3・S H-4 床面及び覆土出土の遺物	149
0127	大川遺跡S H-7 検出状況	151
0128	大川遺跡S H-7・S H-8 床面及び覆土出土の遺物	151
0129	大川遺跡S H-8 覆土出土の石斧・四石・石鏃・磁石	152
0130	大川遺跡S H-7・S H-8 床面及び覆土出土の土器	153
0131	大川遺跡S H-8 検出状況	154
0132	大川遺跡S H-9 検出状況	156
0133	大川遺跡S H-9 床面出土の土器	156
0134	大川遺跡S H-9 床面出土の土器	157
0135	大川遺跡S H-9 床面及び覆土出土の石斧・四石・土器	158
0136	大川遺跡S H-9 覆土出土の四石・磁石	159
0137	大川遺跡S H-9 床面及び覆土出土の土器・土製品	159
0138	大川遺跡S H-11 検出状況	161
0139	大川遺跡S H-13 検出状況	162
0140	大川遺跡S H-11 床面及び覆土出土の土器・石鏃	162
0141	大川遺跡S H-12・S H-13・S H-14 床面及び覆土出土の土器	163
0142	大川遺跡S H-15・S H-16 床面及び覆土出土の土器・土器	164
0143	大川遺跡S H-11・13・14・15・16 床面及び覆土出土の遺物	165
0144	大川遺跡S H-17 検出状況	167
0145	大川遺跡S H-17 床面及び覆土出土の土器と石器	168
0146	大川遺跡S H-17 覆土出土の土器・土製品と磁石	169
0147	大川遺跡S H-17 覆土出土の土器・土製品と磁石	170
0148	大川遺跡S H-17 床面及び覆土出土の土製品と石器	171

00149	大川遺跡 S H-17 覆土出土の土製品と石器	172
00150	大川遺跡 S H-18 検出状況	174
00151	大川遺跡 S H-18 断面及び覆土出土の遺物	174
00152	大川遺跡 S H-18 断面及び覆土出土の石器	175
00153	大川遺跡 S H-19 検出状況	176
00154	大川遺跡 S H-19 断面出土の土器	176
00155	大川遺跡 S H-19 断面出土の土器	177
00156	大川遺跡 S H-19 断面及び覆土出土の土器と土製品	178
00157	大川遺跡 S H-19 断面出土の石刀と石斧	179
00158	大川遺跡 S H-19 断面出土の土製品と銅片石器	180
00159	大川遺跡 S H-20 断面及び覆土出土の土器と土製品	181
00160	大川遺跡 S H-20 断面出土の石器と土製品	182
00161	大川遺跡 S H-21 検出状況	183
00162	大川遺跡 S H-22 検出状況	184
00163	大川遺跡 S H-21・S H-22 断面及び覆土出土の土器と石斧	185
00164	大川遺跡 S H-21・S H-22 断面及び覆土出土の遺物	186
00165	大川遺跡 S H-23 検出状況	187
00166	大川遺跡 S H-23 断面及び覆土出土の土器	187
00167	大川遺跡 S H-23 断面出土の土器	188
00168	大川遺跡 S H-23 断面出土の土器と銅器	189
00169	大川遺跡 S H-23 断面出土の土器・鉄錐・銅器	190
00170	大川遺跡 S H-23 断面出土の各種遺物	191
00171	大川遺跡 S H-24 断面出土の土器・石斧・棒石	193
00172	大川遺跡 S H-24・S H-25 断面及び覆土出土の土器	194
00173	大川遺跡 S H-24 断面出土の各種遺物	196
00174	大川遺跡 S H-25 断面出土の遺物	197
00175	大川遺跡 S H-26 検出状況	197
00176	大川遺跡 S H-26 断面及び覆土出土の土器	198
00177	大川遺跡 S H-26 断面出土の石器と土製品	198
00178	大川遺跡 S H-28 検出状況	200
00179	大川遺跡 S H-27-30 断面及び覆土出土の土器	200
00180	大川遺跡 S H-30-32 断面及び覆土出土の土器・石斧・鉄斧	201
00181	大川遺跡 S H-32-36 断面及び覆土出土の土器・銅器・銅器	202
00182	大川遺跡 S H-37-38-39-41 断面及び覆土出土の土器・石斧・棒石	203
00183	大川遺跡 S H-32 検出状況	204
00184	大川遺跡 S H-33 検出状況	205
00185	大川遺跡 S H-34 検出状況	206
00186	大川遺跡 S H-34 断面出土の土製品・石器・金銅器	207
00187	大川遺跡 S H-35 検出状況	210
00188	大川遺跡 S H-35 断面出土の土器	211
00189	大川遺跡 S H-35 断面及び覆土出土の土器	212
00190	大川遺跡 S H-35 断面及び覆土出土の土器と土製品	212
00191	大川遺跡 S H-36 検出状況	214
00192	大川遺跡 S H-36 断面出土の土器	214
00193	大川遺跡 S H-36 断面及び覆土出土の土器	215
00194	大川遺跡 S H-37 検出状況	216
00195	大川遺跡 S H-37 出土の土器	217
00196	大川遺跡 S H-37 断面及び覆土出土の遺物	218
00197	大川遺跡 S H-37 断面出土の銅器	219
00198	大川遺跡 S H-37 断面及び覆土出土の遺物	219
00199	大川遺跡 S H-39 検出状況	221
00200	大川遺跡 S H-38 断面出土の土器と石器	221
00201	大川遺跡 S H-38 断面出土の土器と銅器・土師器	222
00202	大川遺跡 S H-38 断面及び覆土出土の土器と土製品	223
00203	大川遺跡 S H-41 検出状況	225
00204	大川遺跡 S H-40-41 断面及び覆土出土の遺物	226
00205	大川遺跡 S H-41 断面及び覆土出土の土器	227
00206	大川遺跡 S H-41 断面及び覆土出土の土器・石器・鉄製品	228
00207	大川遺跡 S H-40-41 断面及び覆土出土の遺物	229
00208	大川遺跡 S H-42 検出状況	230
00209	大川遺跡 S H-43 検出状況	231
00210	大川遺跡 S H-42-43-48 断面出土の土器と銅器	231
00211	大川遺跡 S H-42-45 断面及び覆土出土の石器	232
00212	大川遺跡 S H-44 検出状況	233
00213	大川遺跡 S H-49 検出状況	235
00214	大川遺跡 S H-49 断面出土の土器	235
00215	大川遺跡 S H-49 断面出土の土器	236
00216	大川遺跡 S H-49 断面出土の土器	237
00217	大川遺跡 S H-49 断面及び覆土出土の土器と銅器	238

00218	大川遺跡 S H-49 断面出土の石器	239
00219	大川遺跡 S H-50 検出状況	240
00220	大川遺跡 S H-50 断面及び覆土出土の土器	240
00221	大川遺跡 S H-50 断面及び覆土出土の各種遺物	241
00222	大川遺跡 S H-51-52 断面及び覆土出土の遺物	242
00223	大川遺跡 S H-51 検出状況	243
00224	大川遺跡 S H-52 断面出土の土器・銅器・陶器	243
00225	大川遺跡 S H-52 断面出土の土器	244
00226	大川遺跡 S H-50-52 断面及び覆土出土の各種遺物	245
00227	大川遺跡 S H-52 断面出土の各種遺物	246
00228	大川遺跡 S H-53 断面及び覆土出土の土器と鉄製品	249
00229	大川遺跡 S H-54 検出状況	250
00230	大川遺跡 S H-53-54 断面及び覆土出土の各種遺物	251
00231	大川遺跡 S H-54 断面及び覆土出土の土器	252
00232	大川遺跡 S H-54 断面出土の土器	253
00233	大川遺跡 S H-53-54 断面及び覆土出土の石器	254
00234	大川遺跡 S H-57 検出状況	255
00235	大川遺跡 S H-55 断面出土の土器	255
00236	大川遺跡 S H-55-58 断面及び覆土出土の各種遺物	256
00237	大川遺跡 S H-58 断面及び覆土出土の各種遺物	257
00238	大川遺跡 S H-58 断面出土の土器	258
00239	大川遺跡 S H-55-58 断面出土の土器	259
00240	大川遺跡 S H-59 検出状況	261
00241	大川遺跡 S H-58 断面及び覆土出土の遺物	262
00242	大川遺跡 S H-60-61 断面及び覆土出土の土器	263
00243	大川遺跡 S H-61 検出状況	264
00244	大川遺跡 S H-61-62 断面及び覆土出土の土器	265
00245	大川遺跡 S H-59-62 断面及び覆土出土の各種遺物	266
00246	大川遺跡 S H-63 断面及び覆土出土の土器	269
00247	大川遺跡 S H-63-64 断面及び覆土出土の各種遺物	270
00248	大川遺跡 S H-66 断面出土の土器	271
00249	大川遺跡 S H-63-65-66 断面及び覆土出土の各種遺物	272
00250	大川遺跡 S H-69-71 断面及び覆土出土の土器	274
00251	大川遺跡 S H-71 断面出土の土器と石器	275
00252	大川遺跡 S H-69-71 断面及び覆土出土の各種遺物	276
00253	大川遺跡 H P-1 覆土出土の遺物	280
00254	№. 8 鉄錐の外観と組織観察結果	445
00255	№. 8 鉄錐の外観と組織観察結果	446
00256	鉄錐の外観と組織観察結果	447
00257	№. 5 鉄斧の外観と組織観察結果	448
00258	№. 1・№.11 鉄斧の外観と組織観察結果	449
00259	鉄斧の外観と組織観察結果(その1)	450
00260	鉄斧の外観と組織観察結果(その2)	451
00261	鑑定された年代の銅製製造法	454

## 写真目次

写真1	赤土河川口と大川遺跡(右岸)・人身遺跡(左岸)	V1
写真2	赤土河川口埋込跡とシロノ山	V11
写真3	現大川橋と大川遺跡(右岸)・人身遺跡(左岸)	V11
写真4	大川遺跡各年度の発掘区と航空写真	V11
写真5	大川遺跡発掘区概観図(1989-1994年度)	IX
写真6	大川遺跡発掘区・遺物検出状況・セクション観測状況・断面検出状況	X
写真7	大川遺跡 J H-1・2・5・7 遺物検出状況・遺物出土状況	X1
写真8	大川遺跡 J H-4 遺物検出状況・遺物出土状況	X11
写真9	大川遺跡 J H-10-11 遺物検出状況・遺物出土状況	X11
写真10	大川遺跡 J H-14 セクション観測状況・遺物出土状況	X1V
写真11	大川遺跡 J H-14-16-17 遺物検出状況・遺物出土状況	XV
写真12	大川遺跡 S H-1・2・7-8 断面検出状況・遺物検出状況	XV1
写真13	大川遺跡 S H-6 検出状況と検出遺物	XV11
写真14	大川遺跡 S H-9-11 遺物出土状況・遺物検出状況	XV11
写真15	大川遺跡 S H-13 検出状況・検出遺物出土状況	X1V
写真16	大川遺跡 S H-17-19 遺物出土状況・遺物検出状況	XX
写真17	大川遺跡 S H-21-23 セクション観測状況・遺物出土状況	XX1
写真18	大川遺跡 S H-26-28-33 遺物出土状況・遺物検出状況	XX11
写真19	大川遺跡 S H-34-35-36-37-38 遺物出土状況・遺物検出状況	XX11
写真20	大川遺跡 S H-41-49-50-51 遺物出土状況・遺物検出状況	XX1V
写真21	大川遺跡 S H-53-57-58-60-62-63-64-65-66-67-71 遺物出土状況・遺物検出状況	XXV

写真22	大川遺跡 J H-1 出土の土器と礫石	282
写真23	大川遺跡 J H-1-3 出土の遺物	283
写真24	大川遺跡 J H-2 出土の土器	284
写真25	大川遺跡 J H-2-4 出土の礫石	285
写真26	大川遺跡 J H-3-1 J H-4 出土の土器	286
写真27	大川遺跡 J H-4 出土の礫石と土器	287
写真28	大川遺跡 J H-4 出土の縄文土器 複文の土器	288
写真29	大川遺跡 J H-4 出土の縄文土器 複文の土器	289
写真30	大川遺跡 J H-3-4 出土の遺物	290
写真31	大川遺跡 J H-4 出土の土器	291
写真32	大川遺跡 J H-4 出土の土器と陶片1群	292
写真33	大川遺跡 J H-4 出土の土器	293
写真34	大川遺跡 J H-4 出土の土器	294
写真35	大川遺跡 J H-5 塚面及び竪土出土の遺物	295
写真36	大川遺跡 J H-5-2 J H-6 塚面及び竪土出土の遺物	296
写真37	大川遺跡 J H-5-2 J H-6 J H-7 塚面及び竪土出土の遺物	297
写真38	大川遺跡 J H-5-2 J H-6 J H-7 塚面及び竪土出土の遺物	298
写真39	大川遺跡 J H-5-2 J H-6 J H-7 塚面及び竪土出土の遺物	299
写真40	大川遺跡 J H-7-10 塚面及び竪土出土の遺物	300
写真41	大川遺跡 J H-8-9-10 塚面及び竪土出土の遺物	301
写真42	大川遺跡 J H-10 塚面及び竪土出土の遺物	302
写真43	大川遺跡 J H-10 塚面及び竪土出土の遺物	303
写真44	大川遺跡 J H-10 J H-11 塚面及び竪土出土の土器	304
写真45	大川遺跡 J H-11 出土の土器	305
写真46	大川遺跡 J H-11 塚面及び竪土出土の遺物	306
写真47	大川遺跡 J H-11 出土の土器	307
写真48	大川遺跡 J H-11 出土の土器	308
写真49	大川遺跡 J H-11 出土の土器	309
写真50	大川遺跡 J H-11 出土の土器	310
写真51	大川遺跡 J H-11 出土の土器	311
写真52	大川遺跡 J H-11 出土の土器	312
写真53	大川遺跡 J H-11 出土の土器	313
写真54	大川遺跡 J H-11 出土の土器	314
写真55	大川遺跡 J H-11 出土の土器	315
写真56	大川遺跡 J H-11 出土の遺物	316
写真57	大川遺跡 J H-11 出土の遺物	317
写真58	大川遺跡 J H-12 J H-13 J H-14 出土の遺物	318
写真59	大川遺跡 J H-12 J H-14 出土の遺物	319
写真60	大川遺跡 J H-14 出土の土器	320
写真61	大川遺跡 J H-14 J H-15 出土の遺物	321
写真62	大川遺跡 J H-14 出土の遺物	322
写真63	大川遺跡 J H-15 J H-16 J H-17 出土の遺物	323
写真64	大川遺跡 J H-15 J H-16 出土の遺物	324
写真65	大川遺跡 J H-16 J H-17 出土の遺物	325
写真66	大川遺跡 J H-15 J H-16 J H-17 出土の遺物	326
写真67	大川遺跡 S H-2-6-8 出土の土器	327
写真68	大川遺跡 S H-2-6-7-8-9 出土の遺物	328
写真69	大川遺跡 S H-5-7 出土の遺物	329
写真70	大川遺跡 S H-8-S H-9 出土の遺物	330
写真71	大川遺跡 S H-9 出土の土器 石罫・礫石	331
写真72	大川遺跡 S H-9-11-15-17-18 出土の土器	332
写真73	大川遺跡 S H-11-S H-12 出土の遺物	333
写真74	大川遺跡 S H-11-13-15-16-17 出土の遺物	334
写真75	大川遺跡 S H-15-16-17 出土の遺物	335
写真76	大川遺跡 S H-17-S H-18 出土の遺物	336
写真77	大川遺跡 S H-18-19-20-21-22 出土の遺物	337
写真78	大川遺跡 S H-19 出土の土器	338
写真79	大川遺跡 S H-19 出土の遺物	339
写真80	大川遺跡 S H-20-22 出土の土器	340
写真81	大川遺跡 S H-20-21-22 出土の遺物	341
写真82	大川遺跡 S H-23 出土の遺物	342
写真83	大川遺跡 S H-23-25 出土の土器	343
写真84	大川遺跡 S H-23-S H-24 出土の土器	344
写真85	大川遺跡 S H-23-S H-24-26 出土の各種遺物	345
写真86	大川遺跡 S H-24-25-28-30 出土の土器	346
写真87	大川遺跡 S H-28-27-31-32-35 出土の土器	347
写真88	大川遺跡 S H-27-28-30-31-34 出土の各種遺物	348
写真89	大川遺跡 S H-30-32-33-34 出土の各種遺物	349
写真90	大川遺跡 S H-35-36 出土の土器	350

写真91	大川遺跡 S H-35-36 出土の遺物	351
写真92	大川遺跡 S H-37 出土の土器	352
写真93	大川遺跡 S H-38-41 出土の土器	353
写真94	大川遺跡 S H-38-41 出土の土器	354
写真95	大川遺跡 S H-35-37-40-41 出土の各種遺物	355
写真96	大川遺跡 S H-41-42-48 出土の土器	356
写真97	大川遺跡 S H-40-41-43-49-50 出土の各種遺物	357
写真98	大川遺跡 S H-42-45-49-50-51-52 出土の各種遺物	358
写真99	大川遺跡 S H-48-49 出土の土器	359
写真100	大川遺跡 S H-49-51-52 出土の土器	360
写真101	大川遺跡 S H-49-51 出土の土器	361
写真102	大川遺跡 S H-51-52 出土の各種遺物	362
写真103	大川遺跡 S H-53-54 出土の土器	363
写真104	大川遺跡 S H-53-55 出土の土器	364
写真105	大川遺跡 S H-53-54-56-62 出土の土器	365
写真106	大川遺跡 S H-54-55-57-58 出土の遺物	366
写真107	大川遺跡 S H-56-60 出土の各種遺物	367
写真108	大川遺跡 S H-59-63 出土の土器	368
写真109	大川遺跡 S H-61-63 出土の各種遺物	369
写真110	大川遺跡 S H-63-64-66-69-71 出土の土器	370
写真111	大川遺跡 S H-63-65-68-71 出土の各種遺物	371
写真112	大川遺跡 S H-65-69-70 出土の各種遺物	372
写真113	大川遺跡 S H-71-H P-1 出土の各種遺物	373
写真114	大川遺跡検出の植物遺体	386
写真115	大川遺跡検出の植物遺体	387
写真116	大川遺跡検出の植物遺体	388
写真117	大川遺跡検出の植物遺体	389
写真118	大川遺跡検出の植物遺体	390
写真119	大川遺跡検出の植物遺体	391
写真120	大川遺跡検出の植物遺体	392
写真121	大川遺跡検出の植物遺体	393
写真122	大川遺跡検出の植物遺体	394
写真123	大川遺跡 J H-10 伴出炭化材の樹種 I	399
写真124	大川遺跡 J H-10 伴出炭化材の樹種 II	400
写真125	大川遺跡 J H-10 伴出炭化材の樹種 III	401
写真126	大川遺跡 J H-10 伴出炭化材の樹種 IV	402
写真127	大川遺跡 J H-10 伴出炭化材の樹種 V	403
写真128	大川遺跡 J H-10 伴出炭化材の樹種 VI	404
写真129	大川遺跡 J H-10 伴出炭化材の樹種 VII	405
写真130	大川遺跡 J H-10 伴出炭化材の樹種 VIII	406
写真131	大川遺跡 J H-10 伴出炭化材の樹種 IX	407
写真132	大川遺跡 J H-10 伴出炭化材の樹種 X	408
写真133	大川遺跡 J H-10 伴出炭化材の樹種 XI	409
写真134	大川遺跡 J H-10 伴出炭化材の樹種 XII	410
写真135	大川遺跡 S H-6 伴出炭化材の樹種 I	415
写真136	大川遺跡 S H-6 伴出炭化材の樹種 II	416
写真137	大川遺跡 S H-6 伴出炭化材の樹種 III	417
写真138	大川遺跡 S H-6 伴出炭化材の樹種 IV	418
写真139	大川遺跡 S H-6 伴出炭化材の樹種 V	419
写真140	大川遺跡 S H-6 伴出炭化材の樹種 VI	420
写真141	大川遺跡 S H-6 伴出炭化材の樹種 VII	421
写真142	大川遺跡 S H-6 伴出炭化材の樹種 VIII	422
写真143	大川遺跡 S H-6 伴出炭化材の樹種 IX	423
写真144	大川遺跡 S H-6 伴出炭化材の樹種 X	424
写真145	大川遺跡 S H-6 伴出炭化材の樹種 XI	425
写真146	大川遺跡 S H-6 伴出炭化材の樹種 XII	426
写真147	大川遺跡 S H-6 伴出炭化材の樹種 XIII	427
写真148	大川遺跡 S H-6 伴出炭化材の樹種 XIV	428
写真149	大川遺跡 S H-6 伴出炭化材の樹種 XV	429
写真150	大川遺跡 S H-6 伴出炭化材の樹種 XVI	430
写真151	大川遺跡 S H-6 伴出炭化材の樹種 XVII	431
写真152	大川遺跡 S H-6 伴出炭化材の樹種 XVIII	432
写真153	大川遺跡 S H-6 伴出炭化材の樹種 XIX	433
写真154	大川遺跡 S H-6 伴出炭化材の樹種 XX	434
写真155	大川遺跡 S H-6 伴出炭化材の樹種 XXI	435
写真156	大川遺跡 S H-6 伴出炭化材の樹種 XXII	436
写真157	大川遺跡 S H-6 伴出炭化材の樹種 XXIII	437
写真158	大川遺跡 S H-6 伴出炭化材の樹種 XXIV	438
写真159	大川遺跡 S H-6 伴出炭化材の樹種 XXV	439
写真160	大川遺跡 S H-6 伴出炭化材の樹種 XXVI	440
写真161	大川遺跡 S H-6 伴出炭化材の樹種 XXVII	441
写真162	大川遺跡 S H-6 伴出炭化材の樹種 XXVIII	442



写真1 余市川河口と大川遺跡（右岸）・入舟遺跡（左岸）



写真2 余市川河口部周辺とシリバ山



写真3 現大川橋と大川遺跡（右岸）・入舟遺跡（左岸）



1) 1990年度の発掘区 (大川橋中程より撮影)



2) 1990年度の発掘区 (対岸入舟遺跡海側より撮影)



3) 1990年度遺構配置状況 (南西より撮影)



4) 1991年度発掘区 (対岸入舟遺跡より撮影)



5) 1991年度発掘区と作業状況 (北西より撮影)

写真4 大川遺跡各年度の発掘区と航空写真



6) 1992年度発掘区 (対岸モイレ山麓より撮影)



7) 大川遺跡航空写真 (北側モイレ山上空より撮影)



8) 1993年度の発掘区 (航空写真)



9) 1994年度発掘区 (対岸モイレ山麓より撮影)



1) 1989年度発掘調査状況 (中央は矢来)



2) 1991年度発掘調査状況 (手前は住居址)



3) 1991年度発掘調査状況 (東から撮影)



4) 1992年度発掘調査状況 (遺物実測状況)



5) 1992年度発掘調査状況 (MO-10によって分断)

写真5 大川遺跡発掘調査状況 (1989～1994年度)



6) 1992年度発掘調査状況 (手前はJH-10)



7) 1992年度発掘調査状況 (MO-10によって分断)



8) 1993年度発掘調査状況 (手前は推文竪穴)



9) 1994年度発掘調査状況 (西から撮影)



写真6 大川遺跡遺構・遺物実測状況、  
セクション観察状況・曝出土状況



1) 1980年度  
露城実測状況  
(GP-1、  
近世アイヌ館)



2) 1990年度遺物実測状況



3) 1991年度JH-2セクション取得状況



4) 1991年度JH-2遺物実測状況



5) S38Gridセクション観察状況



6) S41Gridセクション観察状況



7) S41Gridセクション観察状況



8) 曝出土状況 (1991年度発掘調査区)



9) 曝出土状況 (1991年度発掘調査区)



1) JH-1 7層出土の後北C<sub>a</sub>・D式石器



2) JH-1 7層出土のコハク垂飾



3) JH-1 検出状況 (ベンチ状構造を有する住居址)



4) JH-2 遺物出土状況 (覆土出土土器片約2,500点)



5) JH-2 ベルト残存状況 (覆土中から夥しい数の遺物出土)

写真7 大川遺跡JH-1・2・5a・7  
遺構検出状況・遺物出土状況



6) JH-2 完掘状況 (統縄文恵山期)



7) JH-5 a 遺物等出土状況



8) JH-5 a 完掘状況 (統縄文恵山期)



9) JH-7 伴出土器出土状況 (床面出土、Ⅳ群43類)



1) JH-4 4層出土の片口鉢 (Ⅱ群e類)



2) JH-4 5層出土の摺文式土器と恵山式土器



3) JH-4 5層出土の摺文式土器 (Ⅰ群a 2類)



4) JH-4 5層出土の内黒の環 (Ⅰ群b 2類)



5) JH-4 覆土遺物・礎出土状況

写真8 大川遺跡JH-4遺構検出状況・遺物出土状況



6) JH-4 5層出土の恵山式土器 (Ⅳ群d 1類)



7) JH-4 地床が検出状況 (炭化クワミ多数伴出)



8) JH-4 地床が検出状況



9) JH-4 床面伴出土器出土状況 (Ⅳ群e 3類)



10) JH-4 完掘状況 (最大径約10m)

写真9 大川遺跡JH-10・11  
遺構検出状況・遺物出土状況



1) JH-10炭化材出土状況



2) JH-10炭化材出土状況



3) JH-11竪穴覆土上部動物遺体出土状況



4) JH-11竪穴覆土上部セクション観察状況



5) JH-11竪穴覆土上部セクション観察状況



6) JH-11覆土出土のイモガイ状土製品



7) JH-11覆土出土の土偶(左)と土製品(右)



8) JH-11覆土出土の土偶頭部



9) JH-11覆土出土の土偶頸部(左)と土器(右)



10) JH-11覆土出土の板状土偶

写真10 大川遺跡JH-14  
セクション観察状況・遺物出土状況



1) JH-14鹿角製埋口出土状況(第2貝層)



2) JH-14第2貝層出土の鹿角製埋口頭部先



3) 魚骨出土状況(第2貝層出土, エゾシカの中手ないし中足骨)



4) 第2貝層遺物出土状況(右下は藁, 左下がキヌ)



5) JH-14鹿角出土状況(第2貝層, 魚骨夥しい)



6) JH-14第2貝層出土の鹿角(鹿角の周辺は魚骨)



7) セクション観察状況(第2貝層上部は貝, 下部は魚骨)



8) JH-14中世陶器出土状況(第2貝層)



9) 第2貝層遺物出土状況(片口鉢の手前は鹿角製品)



10) 第2貝層出土の珠洲片口鉢(右)と獣骨(左)



11) JH-14獣骨・珠洲系陶器等出土状況



1) JH-14セクション観察状況



2) JH-14第2層観察状況



3) JH-14、3層出土の櫛文式土器小杯



4) JH-14覆土上部セクション観察状況



5) JH-14セクション観察状況



6) JH-14発掘状況 (統縄文恵山期)

写真11 大川遺跡JH-14・16・17  
遺構検出状況・遺物出土状況



7) JH-16遺物出土状況 (床面出土の土鈴と土器)



8) JH-16遺物出土状況 (床面にスポットあり)



9) JH-16遺構検出状況 (統縄文後北期)



10) JH-17遺構検出状況 (統縄文期)





1) SH-1 検出状況 (右手前はUP-1)



2) SH-2 伴出炭化柱材検出状況 (立ったまま検出)



3) SH-2 完掘状況 (プランは添)



4) SH-7 完掘状況 (南から撮影)



5) SH-7 完掘状況 (東から撮影)

写真12 大川遺跡SH-1・2・7・8  
伴出炭化材出土状況・遺構検出状況



6) SH-8 セクションベルト設定状況 (北から撮影)



7) SH-8 セクションベルト設定状況 (東から撮影)



8) SH-8 伴出炭化材出土状況 (柱が倒れた状態で検出)



9) SH-8 完掘状況 (南東から撮影)

写真13 大川遺跡SH-6  
伴出炭化材と検出遺構



1) 柱等伴出炭化材出土状況 (柱が立ったまま検出)



2) 伴出炭化柱材出土状況 (出入口部分の柱材とみられる)



3) 伴出炭化材出土状況 (屋根材とみられる)



4) 伴出炭化材出土状況 (中には未炭化のものもあり)



5) 伴出炭化材検出状況 (床面から高い位置での検出)



6) 伴出板状炭化材出土状況 (左は土鍬)



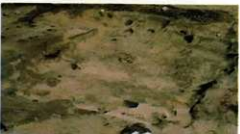
7) 伴出炭化材出土状況 (右が屋根材とみられる)



8) 炭化材及び遺物出土状況 (西から撮影)



9) 炭化材分布状況 (概ね5m×4.5m)



10) 竪穴完掘状況 (左側奥が出入口とみられる)





1) SH-9 煙道天井石検出状況 (南から撮影)



2) SH-9 煙道天井石検出状況 (東から撮影)



3) SH-9 カマド・煙道検出状況 (煙道天井石除去後撮影)



4) SH-9  
遺物出土状況  
(甕・瓦等  
遺物多数出土)

写真14 大川遺跡 SH-9・11  
遺物出土状況・遺構検出状況



5) SH-9 遺物出土状況 (手前が煙道)



6) SH-9 竪穴検出状況 (左がカマド)



7) SH-11 遺物出土状況 (南から撮影)



8) SH-11 竪穴完掘状況 (北西から撮影)

写真15 大川遺跡SH-13炭化材・炭化種子  
伴出状況・遺構検出状況



1) 竪穴検出状況(北から撮影)



2) 炭化材出土状況(北東から撮影)



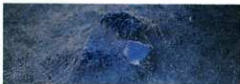
3) 炭化材出土状況(北西から撮影)



4) 炭化材・遺物等出土状況(南側から撮影)



5) 伴出炭化ソバ出土状況(出入口部分より出土)



6) 伴出炭化米出土状況(擦文土器片と伴出)



7) 伴出炭化米出土状況(床面出土)



8) 伴出炭化ソバ出土状況(炭化材と伴出)



9) 竪穴完掘状況(南から撮影)



1) SH-17カマド検出状況(北から撮影)



2) SH-17煙道検出状況(奥はIX群a1類土器)



3) SH-17土器出土状況(煙道上部より出土)



4) SH-17環出土状況(IX群b3類土器)



5) SH-17遺物出土状況(北から撮影)



6) SH-17完掘状況(北から撮影)

写真16 大川遺跡SH-17・19  
遺物出土状況・遺構検出状況



7) SH-19ベルト残存状況(覆土は夥しい数の礫)



8) SH-19土器出土状況(IX群a1類土器)



9) SH-19土器出土状況(IX群a4類土器)



10) SH-19カマド検出状況(南壁中央部に所在)



11) SH-19カマド・焼土・推文土器出土状況



1) SH-21  
石鎌出土状況  
(東隅に集中)



2) SH-21セクション観察状況 (礫・炭化物多い)



3) SH-23覆土遺物出土状況 (海獣骨・礫多い)



4) SH-23覆土遺物出土状況 (海獣骨)



5) SH-23覆土遺物出土状況 (トド・土器等)

写真17 大川遺跡SH-21・23  
セクション観察状況・遺物出土状況



6) SH-23覆土遺物出土状況 (鉄鍋・炭化材)



7) SH-23堆文土器出土状況 (IX群 a4 類)



8) SH-23カマド周辺遺物出土状況 (左2点坏)



9) SH-23発掘状況 (手前がカマド)



1) SH-26  
遺物出土状況  
(瓦群土器  
覆土出土)



2) SH-32袋柄鉄斧伴出状況 (床面出土)



3) SH-32曜出土状況 (pit 23伴出)



4) SH-32柱穴検出状況 (樹皮残存)



5) SH-32桶石検出状況 (南東カマド)



6) SH-32板状曜出土状況 (壁穴中央部)



7) SH-32壁穴検出状況 (南東カマド)



8) SH-33覆土遺物出土状況 (動物遺体・鉄鍋他)



9) SH-33カマド桶石出土状況 (南東カマド)



10) SH-33壁穴完備状況 (概ね6m×5.5m)



1) SH-34覆土上部貝層確認状況 (明治期)



2) SH-34検出状況 (南カマド, 概ね5m×4.5m)



3) SH-35完掘状況 (概ね7m×6.5m)



4) SH-36土器伴出状況 (IX群a2類土器)



5) SH-34 IX群a2類土器伴出状況



6) SH-36土器出土状況 (IX群a3類)

写真19 大川遺跡SH-34・35・36・37・38  
遺物出土状況・遺構検出状況



7) SH-37支脚・坏伴出状況 (カマド伴出)



8) SH-37完掘状況 (ベンチ状構造を有する竪穴)



9) SH-37完掘状況 (中央部よりGP-596検出)



10) SH-38遺物出土状況 (IX群a4類土器)



11) SH-38遺物出土状況 (左奥ナタ, 中央礫石器)





1) SH-41刀子出土状況(床面, 長さ約20cm)



2) SH-41環出土状況 (IX群b3類土器)



3) SH-41完胴状況 (概ね6m×6m)



4) SH-49カマド検出状況 (左は支脚, 右が環)



5) SH-49覆土遺物出土状況 (甕・環・礫)



6) SH-49土器出土状況 (IX群a2類土器)

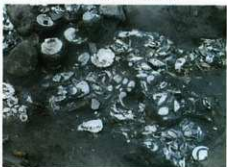
写真20 大川遺跡SH-41・49・50・51  
遺物出土状況・遺構検出状況



7) SH-49検出状況 (概ね4m×4m)



8) SH-50覆土上部動物遺物等出土状況



9) SH-50ホタテ・イガイ・刀子他出土状況



10) SH-51カマド検出状況 (両袖近くに礎集中)



1) SH-53遺物出土状況(動物遺体・陶磁器他)



2) SH-53石鋪出土状況(床面出土)



3) SH-53支脚出土状況(南西カマド)



4) SH-57環出土状況(IX群b4類土器)



5) SH-58カマド検出状況(へっつい凝灰岩製)



6) SH-60カマド検出状況(支脚2点出土)

写真21 大川遺跡SH-53・57・58・60・62・63・65・69, HP-1遺物出土状況・遺構検出状況



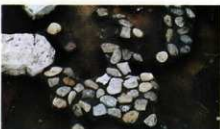
7) SH-62遺物出土状況(刃先矢板で切られている)



8) SH-63カマド検出状況(南カマド)



9) SH-65遺物出土状況(コタマガイ・中刀等出土)



10) SH-69石鋪出土状況(北東隅に集中)



11) HP-1実掘状況(概ね8m×5m)



# 第1章 調査の概要

## 第1節 発掘調査にいたる経緯

余市町は北海道の南西部、積丹半島の基部に位置する人口約2万4千人の町である。町の中央部を縦断して流れる2級河川余市川は過去に度々氾濫を起こし、その治水対策は急務の課題であったが、各種調査の結果、1984年度より「余市川改修事業」が着手されることとなった。

これにより、当該事業用地内に分布する埋蔵文化財包蔵地の取り扱いが問題となった。

余市川河口部の両岸には大川遺跡・入舟遺跡の包蔵地が分布しており、縄文後期から近代に至る遺構・遺物が確認される複合遺跡として知られている。このため、余市町教育委員会は余市川改修事業の実施主体である北海道小樽土木現業所より事業の詳細を聴取したところ、当該地区の除外及び変更は不可能との判断により、文化財保護法による手続きを取り進めることとなった。

1987年5月25日、北海道小樽土木現業所より同事業に係る事前協議書の提出があり、これに基づき、1988年5月より北海道教育庁文化課による範囲確認調査が数次に亘って実施され、その結果、発掘調査が必要との判断がなされ、余市町教育委員会及び事業主体者である北海道小樽土木現業所に通知された。これにより1989（平成元）年度より大川遺跡の発掘調査が開始されることとなった。

(盛)



図1 余市川改修事業計画平面図

## 第2節 調査体制

1989年度の事務局並びに調査体制は、以下のとおりである。

調査主体者 教 育 長 笹山義孝 調査担当者 宮 宏明 (日本考古学協会々員)  
事務局 水産博物館々長 三浦清治 調査補助員 熊崎農夫博 (現 厚岸町教育委員会勤務)  
文化財係主事 小林広勝 鎌田 望 (現 北海道埋蔵文化財  
センター勤務)  
高田 純子 (旧姓、現在 余市町在住)

作業員 菅原宏文・片岡常夫・平野政秋・和田雅男・西村則夫・久保田浩章・滝山 烈  
杉本英二・畠山義之・相川卓也・千葉信司・山下哲史・生玉さく子・扇谷陽子  
柏谷龍子・徳引葉子・斉藤麻紀・田村裕美・野村晴美・畠山香代子・堀 いずみ  
前田貞子・三上勢津子・米谷登志子・石栗伸子・今井福子・加藤輝美・柏谷スミエ  
川島スミ子・川又智恵子・久保照代・久保文恵・小池シズエ・後藤文栄・斉藤保子  
神 親子・鈴木百合子・田川幸子・高橋千代子・土門信子・東門ルミ子・中村真由美  
原田初江・堀川君子・松田文枝・宮川典子・山口路子・横本京子・横山由紀子  
吉野葉子・増田直美・江川美智子

1990年度の事務局並びに調査体制は、以下のとおりである。

調査主体者 教 育 長 笹山義孝 調査担当者 宮 宏明 (日本考古学協会々員)  
事務局 水産博物館々長 三浦清治 調査補助員 熊崎農夫博 (現 厚岸町教育委員会勤務)  
文化財係主事 小林広勝 鎌田 望 (現 北海道埋蔵文化財  
センター勤務)  
小林 純子 (現在 余市町在住 主婦)

作業員 生玉さく子・石栗 満・扇谷陽子・大黒由貴子・長船奈緒子・柏谷龍子・片岡常夫  
川又智恵子・徳引葉子・久保照代・久保田浩章・斉藤麻紀・佐藤主計・神 親子  
菅原宏文・中村真由美・野村晴美・畠山香代子・平野政秋・藤田香代子・堀川君子  
前田貞子・三上勢津子・横山由紀子・米谷登志子・和田雅男・川島スミ子・工藤六郎  
熊木明美・小林美津子・斉藤保子・榎 明美・佐藤京子・高橋志津子・田川幸子  
田村裕美・千葉信司・津田祐志・東門ルミ子・高岡きみ・土門信子・畑澤理佳  
広瀬 勝・堀 いずみ・藤原悦子・湯田幸子・横山 慎・吉野葉子・増田直美

1991年度の事務局並びに調査体制は、以下のとおりである。

調査主体者 教 育 長 笹山義孝 調査指導員 岡田 淳子 (北海道東海大学教授)  
事務局 教育次長 三浦清治 調査担当者 宮 宏明 (日本考古学協会々員)

文化財係主事 小林広勝 調査補助員 熊崎農夫博 (現 厚岸町教育委員会勤務)

調査実習生 秋山 洋司 (当時 北海道東海大学学生, 現 札幌市埋蔵文化財センター勤務)

五郎丸 昇 (当時 北海道東海大学学生, 現 北海道東海大学職員)

作業員 阿部マチ子・生玉さく子・石黒 晶・扇谷陽子・長船奈緒子・片岡常夫・川島スミ子  
川又智恵子・櫛引葉子・久保照代・小林和夫・近藤宏史・斉藤麻紀・佐藤主計  
神 親子・菅原宏文・千葉信司・中村真由美・野村晴美・島山香代子・平野政秋  
藤田香代子・前田貞子・増田豊実・三上勢津子・山口幸子・横山由紀子・横山 慎  
山下哲史・米谷登志子・和田雅男・相川卓也・青木栄子・荒岡民雄・井口忠男  
岩本智恵子・加藤征子・熊木明美・小林美津子・榊 明美・佐藤京子・田川幸子  
高橋志津子・照井和子・東門田ルミ子・富岡きみ・原田珠代・平田久美・藤原悦子  
宮崎文治郎・山田恭子・湯田幸子・吉野葉子・増田直美

1992年度の事務局並びに調査体制は、以下のとおりである。

調査主体者 教 育 長 笹山義孝 調査指導員 岡田 淳子 (北海道東海大学教授)

事 務 局 教 育 次 長 三浦清治 調査担当者 宮 宏明 (日本考古学協会々員)

水産博物館々長 高橋慶紀 調査補助員 熊崎農夫博 (現 厚岸町教育委員会勤務)

文化財係主事 小林広勝 青木 誠 (現 小樽市教育委員会勤務)

調査実習生 水崎 慎 (当時 北海道東海大学学生, 現 ネブラスカ州立大学大学院生)

作業員 荒岡民雄・石黒 晶・扇谷陽子・柏谷忠勝・片岡常夫・川又智恵子・櫛引葉子  
久保照代・小林和夫・佐藤主計・佐藤京子・斉藤麻紀・菅原宏文・東門田ルミ子  
野村晴美・箱谷和雄・島山香代子・平野政秋・藤田香代子・前田貞子・山口幸子  
米谷登志子・横山由紀子・和田雅男・生玉さく子・井口忠男・泉川和子・内田由美子  
長船奈緒子・川島スミ子・川内みゆき・小林美津子・神 親子・田川幸子・津川政廣  
照井和子・富岡きみ・中村真由美・藤原悦子・船橋輝雄・山田恭子・山貝裕子  
河村直美・吉野葉子

1993年度の事務局並びに調査体制は、以下のとおりである。

調査主体者 教 育 長 笹山義孝 調査指導員 岡田 淳子 (北海道東海大学教授)

事 務 局 教 育 次 長 三浦清治 調査担当者 宮 宏明 (日本考古学協会々員)

水産博物館々長 高橋慶紀 調査補助員 青木 誠 (現 小樽市教育委員会勤務)

文化財係長 盛 昭史 中山 昭大 (現 北海道埋蔵文化財  
センター勤務)

秋山 洋司 (現 札幌市埋蔵文化財  
センター勤務)

荒川 暢雄 (現 札文町教育委員会勤務)

調査実習生 青野友哉 (当時 明治大学学生, 現 伊達市教育委員会勤務)

三澤壮太 (当時 北海道東海大学学生, 現在 三重県で発掘調査に従事)

岡田基哉 (当時 北海道東海大学学生, 現在 俳優)

作業員 安芸ゆかり・阿部栄子・荒岡民雄・荒川亀雄・井川幸子・石黒 晶・石山ツイ子  
岩崎靖子・扇谷陽子・片岡常夫・川又智恵子・櫛引葉子・工藤忠幸・久保照代  
小林和夫・斉藤麻紀・佐藤主計・澤本明彦・篠谷歳夫・菅原宏文・杉山賢治・田川幸子  
武田勇三・東門田邦子・東門田ルミ子・富岡きみ・中井朋春・浪岡達也・西村則夫  
野田真紀子・野村晴美・箱谷和雄・畠山香代子・羽二生寿子・平野政秋・藤田香代子  
船橋輝雄・古田千穂・前田貞子・山口幸子・山口路子・横山由紀子・米谷登志子  
若林一保・和田雅男

1994年度の事務局並びに調査体制は、以下のとおりである。

調査主体者 教 育 長 笹山孝義 調査指導員 岡田淳子 (北海道東海大学教授)

事 務 局 教 育 次 長 三浦清治 調査担当者 宮 宏明 (日本考古学協会々員)

水産博物館々長 高橋慶紀 調査補助員 青木 誠 (現 小樽市教育委員会勤務)

文化財係長 盛 昭史 荒川暢雄 (現 札文町教育委員会勤務)

小川康和 (北海道考古学会々員)

青野友哉 (当時 明治大学学生, 現 伊達市教育委員会勤務)

三澤壮太 (当時 北海道東海大学学生, 現在 三重県で発掘調査に従事)

大波紀子 (当時 福島大学学生, 現 福島県文化センター勤務)

酒井秀治 (当時 福島大学学生, 現 北海道埋蔵文化財センター勤務)

山岸 寛 (当時 東京大学学生, 現 筑波大学勤務)

作業員 東 五月・阿部栄子・荒岡民雄・荒川亀雄・井川幸子・岩崎靖子・及川京子・扇谷陽子  
岡西美喜子・奥谷誠一・片岡常夫・門野利郎・川又智恵子・神成弘美・菊池由起  
北川千登世・櫛引葉子・工藤忠幸・久保忠章・久保照代・小林和夫・小見玲子  
斉藤麻紀・佐藤洋子・佐藤主計・茂野憲一・菅野賢治・菅原宏文・杉山賢治・高島武夫  
武田勇三・寺崎和歌子・東門田ルミ子・富岡きみ・富永順子・鍋島弘明・浪岡達也  
野田真紀子・橋本広子・長谷川清道・畠山香代子・浜川ひとみ・平野政秋・古田千穂  
堀野香織・本城まこと・前田貞子・水田るり子・宮崎 建・武藤 康・山口路子  
横山由紀子・米谷登志子・渡辺エミ子

### 第3節 作業分担

主な作業分担は、以下のとおりである。

写真撮影 現場 宮 宏明、室内 市川靖雄・宮 宏明・武山訓久・中野 秋

遺物の水洗・注記 東門田ルミ子・古田千穂・扇谷陽子・櫛引葉子・吉野葉子・野村晴美  
斉藤麻紀・畠山香代子・生玉さく子・三上勢津子・増田直美・川島スミ子  
神 親子・佐藤京子・川又智恵子・山口幸子

遺物の集計 扇谷陽子・熊崎農夫博・青木 誠

遺物の実測 斉藤麻紀・五郎丸 昇・増田直美・熊崎農夫博・森 秀之・櫛引葉子・長船奈緒子  
増田直美・橋本広子・平野政秋・寺崎和歌子・石黒 晶・和田雅男・田川幸子  
野村晴美・中井朋春・西村則夫・荒川暢雄・扇谷陽子・前田貞子・茂野憲一  
川又智恵子・奥寺祐二・中野 秋・木下 洋・久保照代・横山由紀子・米谷登志子  
吉野葉子・阿部栄子・青野友哉・浜川ひとみ・奥谷誠一・中岡直幸・堀野香織  
門野利郎・畠山香代子・小林和夫・菅原宏文・山口路子・青木 誠・秋山洋司  
小川康和・中山昭大・片岡常夫・岡崎次郎・浪岡達也・武田 龍

下図のトレース 斉藤麻紀・櫛引葉子

土器の接合・接着・復原 佐藤主計・荒岡民雄・荒川亀雄・工藤忠幸・岡崎次郎・宮 宏明  
遺物の拓影・拓影土器の断面実測・トレース 米谷登志子・横山由紀子・小川康和・宮 宏明  
土壌水洗・フローテーション・ふるい 米谷登志子・柏谷龍子・大黒由貴子・久保照代  
片岡常夫・横山 慎・山下哲史

植物遺体の選別・分類 米谷登志子・柏谷龍子・大黒由貴子・久保照代・生玉さく子・橋本広子  
武藤 康・門野利郎・古田千穂

動物遺体の選別・分類 前田貞子・東門田ルミ子・扇谷陽子・野村晴美・畠山香代子・櫛引葉子  
三上勢津子・生玉さく子・斉藤保子・堀川君子・藤田香代子・堀野香織  
石栗 満・佐藤主計・箱谷和雄・荒岡民雄・奥谷誠一・佐藤京子  
川島スミ子・武藤 康・神 親子・山口幸子・藤原悦子・横山 慎  
阿部マチ子・菊池由起・小林和夫・古田千穂・高島武夫・小林純子

遺物の保存処理 横山由紀子・佐藤京子・藤原悦子・富岡きみ・小川康和・川又智恵子  
神 親子・長船奈緒子・福 いずみ・田村裕美・橋本広子・山口幸子  
久保照代・川島スミ子・中村真由美・前田貞子・生玉さく子・久保田浩章  
奥谷誠一・浪岡達也・箱谷和雄・和田雅男・横山 慎・山下哲史・榎 明美  
高橋志津子・山田恭子・菊池由起・青木 誠・熊崎農夫博

遺物の計測・計量 小川康和・吉野葉子・丹下晶之・米谷登志子・斉藤麻紀

各種図版・一覧表の作成 小川康和・吉野葉子・丹下晶之・熊崎農夫博・青木 誠・宮 宏明

## 第4節 分析・同定・保存処理の分担

遺跡・遺物の分析・鑑定・同定・指導・年代測定・保存処理等については、下記の各位及び機関に依頼した。

スラグの分析	深沢百合子（札幌国際大学人文・社会学部教授） 赤沼英男（岩手県立博物館主任専門学芸調査員） 咲山まどか（岩手県立博物館学芸調査員）
遺構出土炭化物の放射性炭素年代測定	木越邦彦（学習院大学理学部名誉教授）
動物遺存体の同定・分類	金子浩昌（日本考古学協会員） 西本豊弘（国立歴史民俗博物館考古研究部教授）
炭化種子の同定・指導	吉崎昌一（札幌国際大学大学院教授） 椿坂恭代（北海道大学埋蔵文化財調査室助手） 松谷暁子（東京大学総合研究資料館客員研究員） 矢野牧夫（元北海道開拓記念館学芸部長）
炭化米の分析	佐藤洋一郎（静岡大学農学部助教授）
炭化米の <sup>14</sup> C年代の測定	Gary, W. Crawford（トロント大学人類学部教授）
炭化ソバ・キビの <sup>14</sup> C年代の測定	名古屋大学年代測定資料研究センター
遺構出土炭化材の樹種同定	大谷 諒（北海道大学農学部森林科学科教授） 斉藤智子（元北海道大学大学院農学研究科林産学専攻）
中世陶磁器の鑑定・指導	吉岡康暢（国立歴史民俗博物館考古研究部教授）
土器の鑑定・指導	大沼忠春（北海道教育長生涯学習部文化課主査）
墨書・瓦書土器の鑑定・指導	平川 南（国立歴史民俗博物館考古研究部教授）
地形・地質に関する指導	松田義章（北海道立理科教育センター）
近世・近代陶磁器の鑑定・指導	大橋康二（佐賀県教育長文化財課） 藤澤良祐（瀬戸市埋蔵文化財センター事務局次長）
漆器の分析・同定	北野信彦（くらしき作陽大学食文化学部専任講師）
アイヌ文化関連資料の鑑定・指導	藤村久和（北海学園大学人文学部教授）
須臾器の鑑定	山本哲也（国学院大学文学部博物館学研究室助手）
花粉分析	ジオサイエンス、五十嵐八枝子（理学博士）
土器及び陶器の胎土分析	三辻利一（奈良教育大学教育学部教授）
土器・土製品の石質の同定	木村方一（北海道教育大学札幌校地学研究室教授）
金属製造物の保存処理	岩手県立博物館
剥片石器の実測・トレース	シン技術コンサル文化財調査部

## 第5節 執筆等の分担

本書の執筆は、以下の各位並びに調査指導員・調査員・調査補助員他がそれぞれ分担し、岡田淳子が監修し、宮 宏明が編集した。

岡田 淳子	第6章第2節	盛 昭史	第1章第1節
池田 晃子	第5章第1節 a	熊崎農夫博	第4章第1・2節
Gary. W. Crawford	第5章第1節 b	前田 貞子	第5章第2節
木越 邦彦	第5章第1節 c	米谷登志子	第5章第3節
大谷 諄・斉藤 智子	第5章第4節	小川 康和	第2章第2節、第4章
赤沼 英男	第5章第5節	宮 宏明	上記以外の各章各節

## 第6節 謝辞及び調査協力者

下記の各位より図・写真・文献その他で御指導・御配慮頂き記して感謝申し上げます次第です。

林 謙作・菊池俊彦・南部 昇・小杉 康・天野哲也・椿坂恭代・小野裕子・大西秀之  
高倉 純・高瀬克範（北海道大学）、大井晴男（北海道大学名誉教授）、武廣亮平（道都大学）  
吉崎昌一・深沢百合子・長崎潤一（札幌国際大学）、木村英明・高宮広土（札幌大学）  
印東道子・沖野慎二（北海道東海大学）、佐倉 朔・船津 功・鶴丸俊明（札幌学院大学）  
辻 秀子（帯広畜産大学）、羽深久夫（札幌市立高等専門学校）、藤沼邦彦（弘前大学）  
熊田亮介（秋田大学）、大平 聡（宮城学院女子大学）、須藤 隆・藤澤 敦（東北大学）  
工藤雅樹（福島大学）、前田 潮・福田正宏（筑波大学）、酒寄雅志（国学院大学栃木短期大学）  
岩崎卓也（東京家政学院大学）、野崎欽吾（日本大学）、伊藤玄三・小口雅史（法政大学文学部）  
阿部朝衛（帝京大学）、酒井清治（駒澤大学）、菊池徹夫（早稲田大学）、山浦 清（立教大学）  
村井章介・大貫静夫・佐藤宏之・熊木俊朗・成瀬晃司（東京大学）、田村晃一（青山学院大学）  
戸沢克則・安藤政雄・矢島國雄・石川日出志（明治大学）、木下正史・二宮修治（東京学芸大学）  
萩原三雄・鈴木 稔・鶴原功一（帝京大学山梨文化財研究所）、斉藤 忠（大正大学名誉教授）  
小林達雄・鈴木靖民・青木 豊・山本哲也（国学院大学）、坂詰秀一・池上 悟（立正大学）  
小野 昭・山田昌之（東京都立大学）、近藤英夫（東海大学）、小野山 節（京都大学名誉教授）  
小笠原好彦（滋賀大学）、森下章司（京都大学）、渡辺 誠・丹下昌之（名古屋大学）  
堀田啓一（高野山大学）、都出比呂志（大阪大学）、置田雅昭（天理大学）  
稲田孝司・新納 泉（岡山大学）、高岡直人（岡山理科大学）、西谷 正（九州大学）  
小川 勝（鳴門教育大学）、高倉洋彰（西南学院大学）、上村俊雄・大西智和（鹿児島大学）  
任 孝幸（ソウル大学）、Gary. W. Crawford（トロント大学）

岡村道雄・坂井秀弥・原田昌幸・岸本直文（文化庁）、佐々木利和・井上洋一（東京国立博物館）  
春成秀爾・平川 南・阿部鏡平・小野正敏・設楽博己（国立歴史民俗博物館）  
巽 淳一郎・高橋克壽（奈良国立文化財研究所）

木村尚俊・千葉英一・田才雅彦・西脇対名夫・藤原秀樹・宗像公司（北海道教育庁）  
畑 宏明・鬼柳 彰・種市幸生・越田賢一郎・遠藤香澄・西田 茂・佐藤和雄・長沼 孝  
花岡正光・高橋和樹・佐川俊一・熊谷仁志・三浦正人・和泉田 毅・中田裕香・谷島由貴  
鈴木 信・鎌田 望・立川トマス・田中哲郎・工藤研治・村田 大・中山昭大・菅川洋一  
末光正卓・富永勝也・福井淳一・広田良成・影浦 覚・酒井秀治・佐藤 剛・土肥研晶  
大塚司 統・藤本昌子（北海道埋蔵文化財センター）  
渡部 裕・笹倉いる美（北海道立北方民族博物館）、野村 崇（北海道開拓の村）  
平川善祥・小林幸雄・出利葉浩司・手塚 薫・右代啓視（北海道開拓記念館）  
中村和之（北海道釧路湖陵高等学校）、吉嶺茂樹（北海道札幌西高等学校）

成田誠治・木村 高・平山明寿（青森県埋蔵文化財調査センター）  
三宅徹也・鈴木克彦（青森県立郷土館）、戸根貴之（岩手県教育庁）  
高橋興右衛門（岩手県埋蔵文化財センター）、安部 実（山形県埋蔵文化財センター）  
船木義勝・桜田 隆・高橋 学・児玉 準・利部 修・五十嵐一治（秋田県埋蔵文化財センター）  
上野修一（栃木県埋蔵文化財センター）、石岡憲雄（埼玉県立博物館）  
小田静夫（東京都教育庁）、安孫子昭二・竹尾 進（東京都埋蔵文化財センター）  
鈴木次郎（神奈川県立埋蔵文化財センター）、本間元樹（大阪文化財センター）  
小嶋芳孝・垣内光次郎（石川県立埋蔵文化財センター）  
柳田康雄（福岡県教育庁）、横田賢次郎（九州歴史資料館）  
安里嗣淳（沖縄県文化振興会史料編集室）

氏江敏文・鈴木邦輝（名寄市北国博物館）、米村 衛（網走市立郷土博物館）  
内山真澄（稚内市教育委員会）、佐藤和利（紋別市博物館）  
遠藤龍欽（北広島市教育委員会）、大島直行（伊達市教育委員会）  
加藤邦雄・羽賀寛二・上野秀一・秋山洋司（札幌市埋蔵文化財センター）  
野中一宏・佐藤一志・葦平一志（江別市郷土資料館）、石神 敏（小樽市博物館）  
大谷敏三・田村俊之・豊田宏良・手塚新太（千歳市埋蔵文化財センター）  
佐藤一夫（苫小牧市埋蔵文化財調査センター）、石川直章・青木 誠（小樽市教育委員会）  
上屋真一・松谷純一・森 秀之・阿部将樹（恵庭市教育委員会）  
石橋孝夫・工藤義衛（石狩市教育委員会）、杉浦重信・澤田 健（高良野市立郷土館）



西 幸隆・松田 猛・石川 朗（釧路市立埋蔵文化財調査センター）  
長谷部一弘・田原良信・佐藤智雄・野村祐一（函館市教育委員会）  
長谷山隆博（声別市星の降る里記念館）、福土廣志（留萌市海のふるさと館）  
葛西智義（深川市教育委員会）、北沢 実・山原敏朗（帯広百年記念館）

遠藤正夫・児玉大成（青森市教育委員会）、宇部則保・大野 亨（八戸市教育委員会）  
小松正夫（秋田市教育委員会）、八木光則・神原雄一郎（盛岡市教育委員会）  
中島広樹（東京都北区教育委員会）、大工原 豊（安中市教育委員会）  
大塚昌彦（渋川市教育委員会）、小林康幸（鎌倉市教育委員会）、杉浦裕二（豊田市郷土資料館）  
中野晴久（常滑市民俗資料館）、嶋谷和彦（堺市教育委員会）、乾 哲也（礼文町教育委員会）  
土本典生・久保禎子（一宮市博物館）、岡本一士・宮本佳典（加古川市教育委員会）  
中村修身（北九州市教育文化事業団）、扇浦正義（長崎市教育委員会）

高島孝宗（枝幸町教育委員会）、後藤秀彦（浦幌町教育委員会）  
西谷栄治（利尻町教育委員会）、阿部千春・福田裕二（南茅部町教育委員会）  
山宮克彦（中標津町郷土館）、武田 修（常呂町教育委員会）、大久義明（幕別町教育委員会）  
大橋 毅・大島居 仁（芽室町教育委員会）、川内谷 修（門別町教育委員会）  
嶋井康夫（仁木町教育委員会）、今井真司（下川町教育委員会）、松田 功（斜里町教育委員会）  
三浦孝一・柴田信一（八雲町教育委員会）、久保 泰・前田正憲（松前町教育委員会）  
松崎水穂・斉藤邦典・松田輝哉（上ノ国町教育委員会）、石本省三（七飯町教育委員会）  
森岡健治・長田佳宏（平取町教育委員会）、藤田 登（森町教育委員会）  
工藤清泰（青森県浪岡町史編纂室）、古屋敷則雄（青森県東北町教育委員会）  
磯原滋高（青森県市浦村教育委員会）、勝部 衛・片岡詩子（島根県玉湯町立出雲玉作資料館）

佐藤新康（日本美術刀剣保存協会評議員）、並木正男（元中央宝石研究所々長）  
金刺伸吾（日本どろめんこの会々長）、秋野茂樹（アイヌ民族博物館）  
手塚直樹・大河内 勉・馬淵和雄・汐見一雄（鎌倉考古学研究所）  
谷田有史（たばこと塩の博物館）、福岡イト子（北海道考古学々員）  
竹田輝雄・大島秀俊・谷岡康孝・長谷川 徹（北海道文化財保護協会）  
佐藤利雄・青木延広（北海道文化財保護協会理事）、福井光行（尚科医）  
中村二郎・鎌田俊明・千代 肇・斉藤基生・長崎元廣・関 俊彦・計良勝範・高橋 理  
大槻 巖・高橋正勝・平井尚志・豊原照司・鈴木重治・横山英介・澤井 玄  
石橋次雄・桐生正一・高宮廣衛・仲光克顕（日本考古学協会員）、Barbara Mattick (USA)  
デリュージン・ワレリー（東京大学大学院生）

## 第2章 大川遺跡の概要

### 第1節 大川遺跡の位置・地質と標準層序等について

大川遺跡の概要については、1989年度～1994年度に亘る概観計6冊で、さまざまな角度から述べられているところである。本書では、期間及び予算等の制約もあり、できるだけ、重複を避け、既刊概観を本書とともに活用して頂きたい。そんな形で費を果たしたいと考えている。次に本節のタイトルの主な項目について、既刊概観の参照、その他の主要な出典について述べておきたい。

大川遺跡の位置（写真1～4）及び周辺の地誌等については、佐藤利雄 1990 「大川遺跡周辺の歴史的背景と旧上ヨイチ運上家について」【1989年度大川遺跡発掘調査概観】所収及び佐藤利雄 1994 「余市のアイヌコタンと大川遺跡」【1993年度大川遺跡発掘調査概観】所収の両論文に詳しい。更に拙稿で恐縮ではあるが、さまざまな雑誌（『入舟遺跡における考古学的調査』第2章第2節参照）の所収原稿として、大川遺跡における各時代の特異な事例や遺物について紹介する際にも述べているところである。

地質や堆積構造等については、松田義章 1990 「大川遺跡周辺地域の地質」【1989年度大川遺跡発掘調査概観】所収及び、松田義章 1992 「余市大川遺跡における氾濫原堆積物—その堆積学的検討—」【1991年度大川遺跡発掘調査概観】所収の両論文を参照頂きたい。両論文は考古学をやっている者にとっては、いささか難解ではあるが、氏の地質学者としてのアカデミックな面は敬服に値する。特に、氾濫原堆積物としての礫層（本書写真6-7、8）及び図3中央部スクリントーンに注目）の産状は、大川砂丘遺跡がのる基盤をなすものであり、いわば大川砂丘（久保武夫 1996 「余市海岸の砂丘」【北海道余市高等学校研究紀要】所収）のバックボーンともいうべきものである。大川砂丘の形成及びその時期ともかかわって重要である。

標準層序等については、前述の松田論文（1992）でも基本層序について詳細に述べられている他、【1989年度大川遺跡発掘調査概観】のI bでも紹介しているところである。遺跡の発掘調査では調査の終盤までセクションベルトを残すことが常識であるが、砂丘遺跡のため、崩落が顕著であり、地層断面を実測することは、なかなか困難であった。土層上部は、発掘以前には、工場・商店・造船所・住宅他が所狭しと軒を並べて建っていたところでもある。その結果上部の攪乱は著しい。しかし河口部という要の立地にあつて、各時代における遺構の夥しい重複は、拠点的集落としての大川遺跡の位置付けからも当然のことと理解できる。これは、砂が厚く堆積していたことで、多くの遺構・遺物が幸運にも保存されていたからこそ言えることでもある。

こんなことで、本節の内容として相応しくない文章で1頁を費してしまった。しかし、再録あるいは、執筆者を変え再論するということになれば、更に数十頁を費やすことになる。（宮）

## 第2節 発掘調査区域と発掘調査の経過

1989～1994年度に亘る発掘調査区域は、余市川河口部右岸に位置し、対岸に入舟遺跡（図2）を望む。1989年度に河口部海側より発掘調査に着手し、1993年度と1994年度とで前後するもの、年を追うごとに発掘区は上流側へと移動した。

グリッドについては、発掘区のほぼ中央を北西～南東へ縦断する道々豊丘余市停車場線歩道上の基点（小樽土木現業所設定）を基準として、発掘区全域に一辺5mのグリッドを設定した。総グリッド数は719を数え、表示は北東から南西へ7～63の算用数字、北西から南東へA～Zのアルファベットを用い、南西隅のライン交点で表した（図3）。

本遺跡は砂丘上に形成されている上、最深部では2m以上掘り下げる必要があるため、年度毎に発掘区の周囲を矢板で仕切り（写真4・5）、周囲の家屋等への影響を抑え、発掘作業上の安全を確保するように努めた。

発掘調査期間は年度により若干異なるが、ほぼ5月中旬から10月末若しくは11月上旬にかけて実施し、その他の期間に、遺物の復原・実測・保存処理や図面・写真整理等の整理作業及び器材の整備・修理や杭打ち・地形測量等の発掘調査に関わる準備作業を行った。年度毎の日程の詳細や発掘調査面積は以下の通りである。

年度	遺物整理・準備作業	発掘調査作業	遺物等整理作業	発掘調査面積 (㎡)
1989	4/1～5/31	6/1～10/31	11/1～3/31	3,500
1990	4/1～5/9	5/10～11/9	11/10～3/31	3,800
1991	4/1～5/9	5/10～10/31	11/1～3/31	3,800
1992	4/1～5/16	5/18～11/7	11/9～3/31	2,410
1993	4/1～6/14	6/15～11/19	11/20～3/31	1,910
1994	4/1～5/15	5/16～10/31	11/1～3/31	1,962

縄文後期～近代に亘る各時代、特に縄文晩期・続縄文期・糠文期を中心に、建物跡や墓塚等の各種遺構が2,000基以上にのぼり、それらに伴う多種多様な遺物が確認され、遺構外のものを含めると150万点を超える膨大な点数が出土した。そのような中で、6年という長期に亘る調査という事もあり、当然のように複数年度に跨がる遺構も出てくるため、以前の調査結果と照合し、位置関係等を確認しながら慎重に調査を進めねばならなかった。また、発掘区の周辺地域において、上下水道や家屋の立て替え等の工事に伴い、多数の遺構・遺物が確認されたため、可能な限り地点・土層状態等を記録し、遺物を採取した。年度毎の発掘調査面積は上記の通りで、6年間の総発掘調査面積は17,382㎡に達した。

(小川)

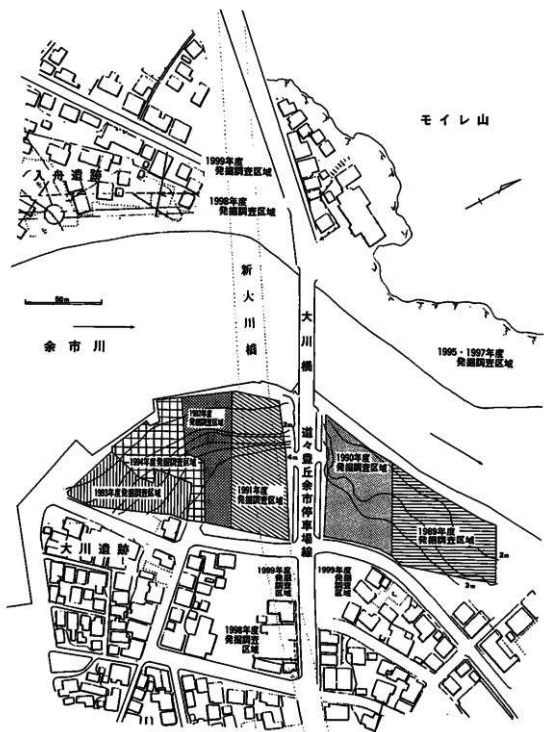
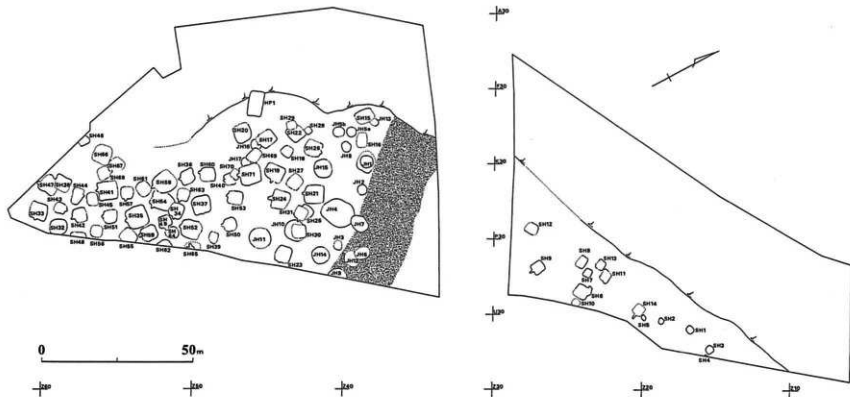


図2 大川遺跡 (1989～1994・1998・1999年度) と入舟遺跡 (1995・1997～1999年度) の発掘調査区域

图 2 大川渡部整穴状堆积物群配置图 (JH-1~17·SH-1~71·HP-1)



### 第3節 検出遺構と略称

図2・3に示したように、1989～1994年に亘る大川遺跡の発掘調査によって検出された主要遺構の数・時期等は以下の通りである。尚、第1分冊ではJ・H・SH・HPの合計90の遺構についてのみ報告する。

竪穴状建物跡	90 (JH-1～17, SH-1～71, HP-1, 縄文晩期・統縄文期・擦文期・近世)
区画墓	3 (SX-1・2, SY-1, 縄文晩期前葉～中葉)
墓壇	971 (GP-1～958, 縄文後期・縄文晩期・統縄文期・擦文期・中世・近世)
土壌	68 (UP-1～118, 縄文晩期・統縄文期・擦文期・近世)
壕状遺構	16 (MO-1～16, 中世)
溝状遺構	4 (中世)
焼土	70 (FP-1～70, 縄文晩期・統縄文期・擦文期・近世・近代)
貝塚	17 (SM-1～17, 近世～近代)
立石・列石	5 (縄文晩期・擦文期)
矢来	11 (1～11号, 近世～近代, 19C)
礎石	290 (近世～近代, 19C)
石組炉	51 (縄文後期, 19～20C)

大川遺跡の1989年度～1994年度に亘る発掘調査によって検出された遺構については、便宜上、下記のような略称をもって示した。(宮)

JH	縄文期の竪穴状建物跡 (Jomon House Pit)
SH	擦文期の竪穴状建物跡 (Satsumon House Pit)
HP	後出の竪穴状建物跡 (House Pit)
GP	墓壇 (Grave Pit)
UP	土壌 (性格不明のピット, Unidentified Pit)
MO	壕状遺構 (Moat)
FP	焼土 (焼土及び地床炉, Fire Place)
SM	貝塚 (Shell Mound)
SP	柱穴・杭穴等小ピット (Small Pit)
HS	縄文時代の石組炉 (Hearth of Stone)

## 第3章 出土遺物の分類

### 第1節 土 器

大川遺跡から出土した土器は縄文時代中期～擦文期（古代）に亘るものである。土器型式については帰属が明確ではないものがあり、細分を避けた。尚、Ⅰ～Ⅴ群については第1分冊では該当するものがない。以下、分類ごとに略述する。

<Ⅰ群> 縄文草創期に属する土器群

<Ⅱ群> 縄文早期に属する土器群

<Ⅲ群> 縄文前期に属する土器群

<Ⅳ群> 縄文中期に属する土器

a類 円筒上層式

- a 1 円筒上層 a 式      a 2 円筒上層 b 式
- a 3 円筒上層 c 式      a 4 サイベ沢Ⅷ式
- a 5 見晴町式

b類 椀林式・最花式

c類 天神山式

d類 柏木川式

e類 北筒式

<Ⅴ群> 縄文後期に属する土器群

a類 余市式

- a 1 円形刺突文と貼付帯が文様の主体となるもの
- a 2 貼付帯が主体となるもの
- a 3 貼付帯に刺突文を施すもの
- a 4 貼付帯に縄線文を施すもの
- a 5 縄線文が主体となるもの
- a 6 刺突文が主体となるもの
- a 7 縄文のみが施文されるもの
- a 8 口縁部に沈線文を施すもの
- a 9 無文のもの

b類 ニセコ式

- b 1 縄文施文の貼付帯を有し、突起のあるもの
- b 2 貼付帯を有し、半截竹管文（沈線文）を施すもの



図4 土器の分類Ⅰ  
(縄文後期)

- b 3 縄文施文と指圧による貼付帯を有し、半截竹管文を施すもの
- b 4 貼付帯に縄線文を有し、半截竹管文を施すもの
- b 5 貼付帯に縄線文を施すもの
- b 6 ボタン状の貼付を有するもの
- b 7 口縁部に縄線文を施すもの
- b 8 指圧による貼付帯を有するもの
- b 9 地文の縄文に半截竹管文（沈線文）を施すもの
- b 10 縄文のみが施文されるもの
- b 11 無文のもの

c 類 曲線による沈線文を多用する土器

- c 1 入江式                      c 2 涌元式
- c 3 大津7群

d 類 磨消と沈線文が主体となるもの

- d 1 手稲式                      d 2 鮭淵式

e 類 突瘤文を主体とし沈線文等が加わる土器（堂林式）

< VI 群 > 縄文晩期に属する土器群

大洞系土器及び非大洞系土器の分類にあたっては、  
 中田裕香 1998 「北海道美沢川流域における縄文時代晩期中葉から後葉の土器について」 『北方の考古学』（野村 崇先生還暦記念論文集刊行会刊）を参考にした。

a 類 大洞式土器

- a 1 三叉・弧線・波状文等が主体となるもの  
 （大洞B式あるいは大洞BC式）
- a 2 羊歯状文や沈線文等が主体となるもの  
 （大洞BC式あるいは大洞C<sub>1</sub>式）
- a 3 雲形・工字文等が主体となるもの  
 （大洞C<sub>1</sub>式あるいは大洞C<sub>2</sub>式）
- a 4 雲形・変形工字文等が主体となるもの  
 （大洞C<sub>2</sub>式あるいは大洞A式）
- a 5 粘土瘤と変形工字文が主体となるもの  
 （大洞A式あるいは大洞A'式）

b 類 大洞系土器

- b 1 突瘤・渦巻・弧線、L・S状の文様が主体となる

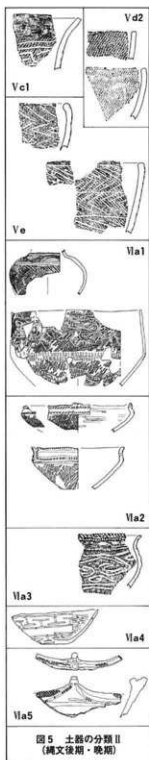


図5 土器の分類Ⅱ  
 （縄文後期・晩期）



もの（三ツ谷式・高野式）

b 2 爪形・縄端圧痕・刺突文等が主体となるもの  
（上ノ国式）

b 3 条痕文が主体となるもの（桃内式）

b 4 工字・変形文等が主体となるもの（日の浜式）

c 類 非大洞系土器

c 1 ヌサマイ式                      c 2 タンネットーL式

c 3 緑ヶ岡式

<Ⅳ群> 続縄文期に属する土器群

弥生系土器の分類にあたっては、

佐藤 剛 1998 「北海道出土のいわゆる赤穴式土器について  
—主に道央部を中心として—」 『北方の考古学』

（野村 崇先生還暦記念論文集刊行会刊）を参考にした。

a 類 弥生系土器

a 1 太い沈線、大きな粘土瘤による文様帯幅の広い変  
形工字文を有するもの（砂沢式）

a 2 複数本の沈線による変形工字文・整った結節沈線・  
頸部無文帯を有するもの（二枚橋式）

a 3 スリットによる簡略化した変形工字文の結節点・  
磨消縄文等を有するもの（字鉄Ⅱ～田舎館式）

a 4 沈線と交互刺突文を特徴とし、単節縄文を主体と  
するもの（天王山式）

a 5 沈線や刺突文が残存するものもあるが燃糸文を主  
体とするもの（赤穴式）

b 類 大狩部式・東歌別式

c 類 港大照寺式

c 1 突瘤文を施すもの

c 2 変形工字文や弧線文が主要文様となるもの

c 3 横走・矢羽根状沈線が主要文様となるもの

c 4 刺突文を施すもの

c 5 縄線文を施すもの

c 6 貼付帯を有するもの

c 7 地文の縄文のみを施すもの

c 8 無文のもの

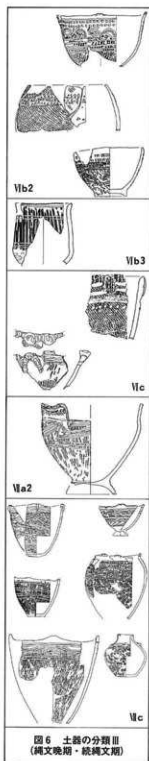


図6 土器の分類Ⅲ  
（縄文晩期・続縄文期）

d類 恵山式

- d 1 変形工字文・波状工字文が主体となるもの(恵山Ⅰ)
- d 2 波状工字文や弧線文が主体となるもの(恵山Ⅱ)
- d 3 平行する沈線文が主体となるもの(恵山Ⅲ)
- d 4 鋸歯状沈線文と縦走縄文が主体となるもの(恵山Ⅳ)
- d 5 鋸歯状沈線文と横位帯縄文が主体となるもの(恵山Ⅴ, 1c前後)
- d 6 地文の縄文のみが施文されるもの
- d 7 いわゆる軽川式
- d 8 無文のもの

e類 後北式

- e 1 江別太ないし後北A (1c前後)
- e 2 後北B (2c前後)
- e 3 後北C<sub>1</sub> (3c前後)
- e 4 後北C<sub>2</sub>・D (3c~4c)

f類 北大式

- f 1 モヨロ式 (4c~5c)
- f 2 北大Ⅰ式 (5c前後)
- f 3 北大Ⅱ式 (最後の縄文施文の土器, 6c前後)

<Ⅷ群> 須恵器

- a類 蓋
- b類 坏・碗
- c類 壺
- d類 甕

<Ⅸ群> 土師器・擦文土器

擦文土器の後出の分類にあたっては、瀬川拓郎 1996

『擦文文化の終焉—日本海沿岸集団の形成と日本海交易の展開—』

『物質文化』61号(物質文化研究会刊)を参考にした。

a類 甕あるいは壺

- a 1 突瘤文・鋸歯状文あるいはヘラミガキを顕著に施すもの(北大Ⅲ式, 十勝茂寄式, 7~8c)
- a 2 横走沈線・段状沈線等が主体となるもの(8~9c)
- a 3 横走沈線に縦や斜めの沈線が付加されるもの(9~10c)

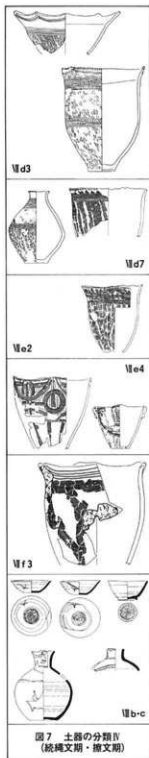


図7 土器の分類Ⅳ  
(続縄文期・擦文期)

a 4 縦・斜め・鋸歯状の沈線が主体となるもの  
(10~11c)

a 5 退化した沈線や貼付帯が主体となるもの(11~12c)

**b類 坏**

b 1 丸底で段状あるいは凹線を有するもの  
(内黒多い, 7~8c)

b 2 丸底が平坦化し、段あるいは凹線が残存するもの  
(内黒多い, 8c前後)

b 3 平底でロクロびき、糸切のもの  
(内黒多い, 8~9c)

b 4 底部糸切で口端部が直線化されたもの(9~10c)

b 5 平底・手捏ねで鋸歯状沈線を施し、厚手の器壁を有するもの(10~11c)

**c類 皿類**

**d類 高坏・台付土器**

d 1 坏部に鋸歯状の沈線文が主体となるもの(10~11c)

d 2 退化した沈線文が主体となるもの(11~12c)

< X群 > 大陸系の可能性のある土器

a類 内外面黑色塗

b類 貼付帯・連続刺突文等による壺(アムール川流域に類例)

## 第2節 土製品

< I群 > 縄文時代に属する土製品

**a類 土偶・土面**

a 1 板状土偶                      a 2 中空土偶

a 3 土偶様土製品                a 4 土面

**b類 動物形土製品**

**c類 土版**

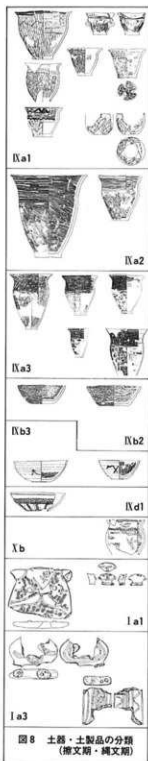
c 1 手形付土版

c 2 手形・足形付土版

c 3 足形付土版

c 4 オロシガネ状土版

c 5 その他の土版



d類 耳飾

- d 1 滑車状耳飾
- d 2 耳栓

e類 スタンプ状土製品

- e 1 無文のもの
- e 2 同心円状の印刻のあるもの
- e 3 渦巻状の印刻のあるもの
- e 4 女性器をモチーフにしていると考えられるもの
- e 5 矢羽根や鋸歯状の印刻のあるもの
- e 6 その他の文様を有するもの

f類 土鈴・土笛

- f 1 無文の土鈴
- f 2 文様のある土鈴
- f 3 無文の土笛
- f 4 文様のある土笛

g類 円形土器片・分銅形土製品・土器片鏝

- g 1 円形土器片
- g 2 有孔円形土器片
- g 3 分銅形土製品
- g 4 土器片鏝

h類 紡錘車

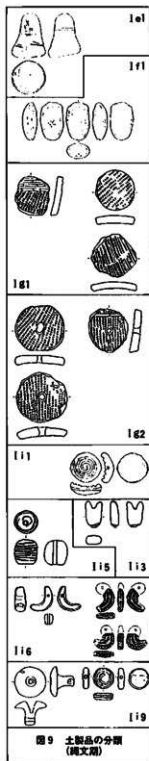
- h 1 無文のもの
- h 2 文様のあるもの

i類 その他の土製品

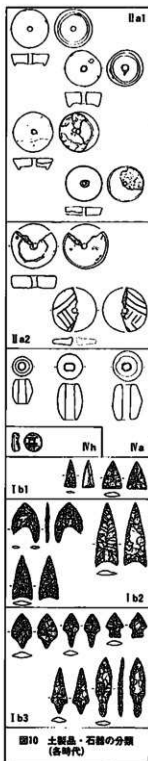
- i 1 イモガイ状土製品
- i 2 ビーナッツ状土製品
- i 3 V字形土製品
- i 4 有孔土製品
- i 5 土玉
- i 6 勾玉状土製品
- i 7 きのか状土製品
- i 8 斧状土製品
- i 9 上記以外の土製品

<Ⅱ群> 縄文期(古代)に属する土製品

a類 紡錘車



- a 1 無文のもの
- a 2 文様のあるもの
- b類 輪羽口
  - b 1 無文のもの
  - b 2 文様のあるもの
- c類 土鍾
- d類 土鈴
- <Ⅲ群> 中世に属する土製品
  - a類 土鍾
  - b類 輪羽口
    - b 1 無文のもの
    - b 2 文様のあるもの
  - c類 土鈴
- <Ⅳ群> 近世・近代に属する土製品
  - a類 土鍾
  - b類 輪羽口
    - b 1 無文のもの
    - b 2 文様のあるもの
  - c類 土鈴
  - d類 泥人形
  - e類 手焙り
  - f類 七厘
  - g類 土玉
  - h類 泥メンコ
  - i類 その他の土製品



### 第3節 石 器

- <Ⅰ群> 石鏃・石槍 (あるいはナイフ) 類
  - a類 石刃鏃
  - b類 石鏃
    - b 1 三角形
    - b 2 基部が湾入するもの
    - b 3 有茎

- b 4 柳葉形・木葉形
- b 5 菱形
- b 6 五角形あるいはそれに近い形状を呈するもの
- b 7 基部側の両側縁に挿入部を有するもの(アメリカ型)
- b 8 その他の石鏃
- c 類 石槍・石銛あるいは両面剝離のナイフ
  - c 1 三角形
  - c 2 基部が湾入するもの
  - c 3 有茎
  - c 4 柳葉形・木葉形
  - c 5 菱形(基部が明瞭ではないもの)
  - c 6 五角形ないし六角形に近い形状を呈するもの
  - c 7 その他の当該石器

< II群 > 石匙・削器類

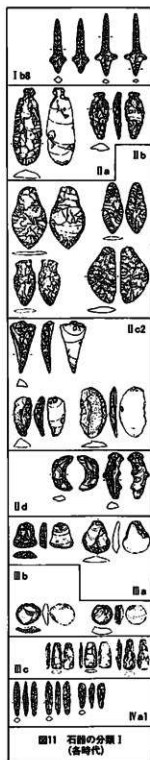
- a 類 石匙(つまみ付ナイフ)
  - a 1 縦型で両面調整のもの
  - a 2 縦型で片面調整のもの
  - a 3 横型で両面調整のもの
  - a 4 横型で片面調整のもの
- b 類 ナイフ(靴形石器を含む)
- c 類 削器(サイド・スクレイパー)
  - c 1 両面調整のもの
  - c 2 片面調整のもの
- d 類 挿入削器(ノッチド・スクレイパー)
  - d 1 挿入部が一侧縁にのみあるもの
  - d 2 挿入部が両側縁にあるもの
  - d 3 その他の挿入削器

< III群 > 撻器・莖状石器類

- a 類 先端撻器(エンド・スクレイパー)
- b 類 円形撻器(ラウンド・スクレイパー)
- c 類 莖状石器(いわゆる石筥)

< IV群 > 石錐・楔形石器類

- a 類 石錐
  - a 1 棒状のもの(両面調整)



- a 2 棒状のもの (片面調整)
- a 3 つまみ部を有し刺突部を作出 (両面調整)
- a 4 つまみ部を有し刺突部を作出 (片面調整)

b 類 楔形石器 (ピエス・エスキュー)

< V 群 > 石斧・石鑿

a 類 磨製石斧

- a 1 両刃
- a 2 片刃
- a 3 丸鑿形石斧

b 類 局部打製石斧

- b 1 両刃
- b 2 片刃

c 類 打製石斧

- c 1 両刃
- c 2 片刃

d 類 石鑿 (小型石斧)

- d 1 両刃
- d 2 片刃

< VI 群 > 敲石・凹石

a 類 敲石

- a 1 棒状礫等の先端部に敲打痕のあるもの
- a 2 円礫あるいは球状礫の周縁部に敲打痕のあるもの

b 類 凹石

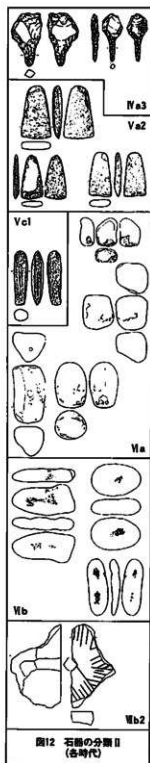
- b 1 自然礫の一面にのみ窪みが残存しているもの
- b 2 自然礫の二面に窪みが残存しているもの
- b 3 自然礫の三面に窪みが残存しているもの
- b 4 自然礫の四面に窪みが残存しているもの
- b 5 自然礫の五面に窪みが残存しているもの
- b 6 自然礫の六面に窪みが残存しているもの

< VII 群 > 石皿・石臼

a 類 石皿

- a 1 窪みが明瞭なもの
- a 2 窪みが不明瞭なもの

b 類 石臼・茶臼



b 1 石臼

b 2 茶臼

<Ⅷ群> 石冠・擦石類

a類 石冠（いわゆる北海道式石冠）

b類 扁平打製石器

c類 擦石

c 1 角柱状の自然礫の稜線に擦痕を有するもの

c 2 礫面に擦痕を有するもの

<Ⅸ群> 砥石・石錘類

a類 矢柄研磨器

b類 石錘

c類 砥石

c 1 荒砥石（砂岩系の石材を使用）

c 2 中砥石（各地の石材を使用）

c 3 仕上げ砥石（各地の石材を使用、罫目残存）

<Ⅹ群> 石錘

a類 扁平な礫を素材とし、作出されたもの

a 1 4ヶ所に打ち欠きを有するもの

a 2 長軸の両端に打ち欠きを有するもの

a 3 短軸の両端に打ち欠きを有するもの

b類 円礫等を素材とし、作出されたもの

b 1 有溝

b 2 有孔

c類 魚形石錘（いわゆる魚形石器）

c 1 有溝

c 2 無溝

## 第4節 石製品

<Ⅰ群> 縄文時代に属する石製品

a類 装飾品あるいは小型の呪具と考えられるもの

a 1 ヒスイ製の玉      a 2 碧玉製の玉

a 3 蛇紋岩製の玉      a 4 コハク製の玉

a 5 滑石製の玉      a 6 石炭製の玉

a 7 その他の石質の玉      a 8 いわゆる環石

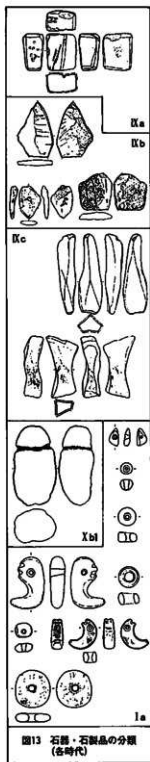


図13 石器・石製品の分類（各時代）



- a 9 棒状垂飾                      a 10 有孔石製品
- b 類 威信財あるいは大型の呪具と考えられるもの
- b 1 単頭石棒 (安山岩系)
- b 2 両頭石棒 (粘板岩系)
- b 3 石剣
- b 4 石刀
- c 類 その他の石製品
- c 1 石枕
- c 2 握石

<Ⅱ群> 縄文期 (古代) に属する石製品

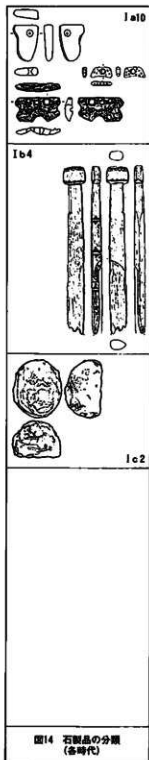
- a 類 硯
- b 類 竈 (凝灰岩製)

<Ⅲ群> 中世に属する石製品

- a 類 硯
- b 類 温石

<Ⅳ群> 近世・近代に属する石製品

- a 類 硯
  - a 1 高嶋硯                      a 2 赤間関硯
  - a 3 雨畑硯                      a 4 天草硯
  - a 5 その他の硯
- b 類 火皿 (アベオプ)
  - b 1 凝灰岩製                      b 2 砂岩製
- c 類 有孔石製品 (サイモン?)
  - c 1 無文のもの
  - c 2 刻線文を有するもの
- d 類 石キセル
- e 類 石灯笼
  - e 1 宝珠                              e 2 笠
  - e 3 火袋                              e 4 中台
  - e 5 竿                                e 6 基礎
- f 類 石盤
- g 類 石筆
- h 類 燧石
- i 類 鈍型



j 類 玉

j 1 コハク製の玉

j 2 石炭製の玉

## 第5節 骨角器・骨角製品

<Ⅰ群> 縄文時代に属する骨角製品

<Ⅱ群> 縄文期(古代)に属する骨角製品

<Ⅲ群> 中世に属する骨角製品

a 類 筈

b 類 離頭銛先

b 1 鐵を装着せるもの

b 2 鐵を装着しないもの

c 類 中柄

d 類 針

e 類 鯉口

f 類 針入

g 類 玉

g 1 牙玉

g 2 齒玉

h 類 不明骨角器

<Ⅳ群> 近世・近代に属する骨角製品

a 類 筈

b 類 離頭銛先

b 1 鐵を装着せるもの

b 2 鐵を装着しないもの

c 類 中柄

d 類 鯉口

e 類 サイコロ

f 類 針入

g 類 玉

g 1 牙玉

g 2 齒玉

h 類 ブラシ柄

i 類 篋

j 類 筥

k 類 緒締

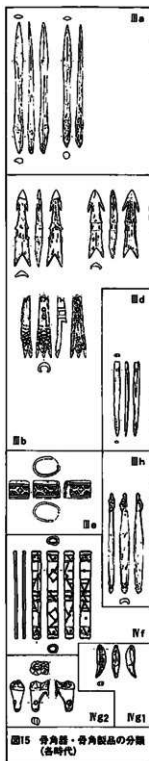


図15 骨角器・骨角製品の分類 (古時代)



- a類 内耳鉄鍋
- b類 吊耳鉄鍋
- c類 燗鍋
- <V群> 釜類
  - a類 茶釜
  - b類 釣釜
- <VI群> 鉄瓶
- <VII群> その他の鉄製品
  - a類 燈
  - b類 馬具
    - b 1 轡
    - b 2 籠
    - b 3 蹄鉄
  - c類 火打金
  - d類 鎖
  - e類 鉄環 (道具の柄の留金?)
  - f類 紡錘車
  - g類 用途不明の鉄製品
- <VIII群> 鉄銭
  - a類 寛永通寶
  - b類 仙台通寶
  - c類 函館通寶
- <IX群> 銅銭
  - a類 渡来銭
  - b類 寛永通寶
  - c類 天保通寶
  - d類 文久永寶
  - e類 近代硬貨
- <X群> 非鉄金属製品
  - a類 燈
  - b類 小柄・刀装具
    - b 1 小柄 (小刀柄)
    - b 2 鈎
    - b 3 その他の刀装具
  - c類 銅鏡
  - d類 鏡
    - d 1 中世和鏡
    - d 2 近世柄鏡
  - e類 キセル・タバコ入れ関連金具
    - e 1 雁首
    - e 2 吸口

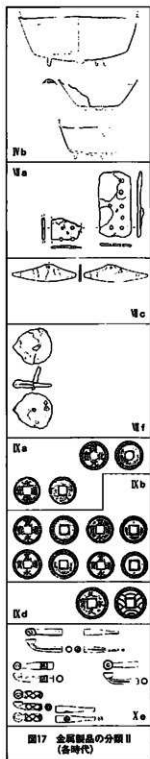


図17 金属製品の分類Ⅱ (各時代)

- e 3 延べギセル                      e 4 鈍豆ギセル  
 e 5 タバコ入れ関連金具
- f 類 写飾り (ニンカリ)  
 f 1 ガラス玉が装着されるもの  
 f 2 真鍮玉が装着されるもの  
 f 3 本体だけのもの
- g 類 腕輪 (テクンカニ)  
 g 1 無文のもの                      g 2 文様のあるもの
- h 類 鋼釘
- i 類 その他の非鉄金属製品  
 i 1 鈴                                      i 2 弁  
 i 3 トンビ                                i 4 矢立  
 i 5 杓子                                  i 6 蓋  
 i 7 鉄砲の弾                            i 8 鍾  
 i 9 指貨                                  i 10 指輪  
 i 11 不明青銅製品

## 第7節 漆器・木製品

木製品の分類にあたっては、田口 尚・鈴木 信 1997

『美沢川流域の遺跡群 X』(美々8遺跡低湿度 第1分冊)  
 北海道埋蔵文化財センター刊を参考にした。

<Ⅰ群> 縄文時代に属する木製品

- a 類 漆器  
 b 類 炭化材 (竪穴住居の建築材)

<Ⅱ群> 縄文期 (古代) に属する木製品

- a 類 漆器  
 b 類 炭化材 (竪穴住居の建築材)

<Ⅲ群> 中世に属する木製品

- a 類 漆器  
 b 類 炭化材

<Ⅳ群> 近世・近代に属する木製品

- a 類 船部材  
 a 1 船材                                  a 2 舷側板  
 a 3 車權受台部輪                      a 4 糸巻



- |               |            |
|---------------|------------|
| b類 農耕・採集具     |            |
| b 1 土掘棒       |            |
| c類 桶・樽        |            |
| c 1 桶         | c 2 樽栓     |
| c 3 樽蓋板       | c 4 樽底板    |
| c 5 樽側板       |            |
| d類 曲物         |            |
| d 1 曲げ物把手     | d 2 曲物底板   |
| d 3 曲物側板      |            |
| e類 箱物         |            |
| e 1 箱側板       | e 2 箱底板    |
| f類 柄          |            |
| f 1 マキリ柄      | f 2 タシロ柄   |
| f 3 ノコギリ柄     |            |
| g類 漆器         |            |
| g 1 椀・トッキ類    | g 2 膳      |
| g 3 シントコ (行器) | g 4 その他の漆器 |
| h類 その他の木製品    |            |

## 第8節 陶磁器

<Ⅰ群> 埴文期 (古代) に属する陶磁器

<Ⅱ群> 中世に属する陶磁器

本群 c 類の搦鉢については、吉岡康暢 1991

「大川遺跡出土の中世陶磁器」『1990年度大川遺跡発掘調査概報』

(余市町教育委員会刊) 及び吉岡康暢 1993

「大川中世遺跡の概要と史的意義」

『1992年度大川遺跡発掘調査概報』(同上) 所収論文

による分類規準に従った。

- |          |          |
|----------|----------|
| a類 碗     |          |
| a 1 白磁碗  | a 2 青磁碗  |
| b類 皿     |          |
| b 1 白磁皿  | b 2 青磁皿  |
| c類 珠洲片口鉢 |          |
| c 1 吉岡Ⅰ群 | c 2 吉岡Ⅱ群 |

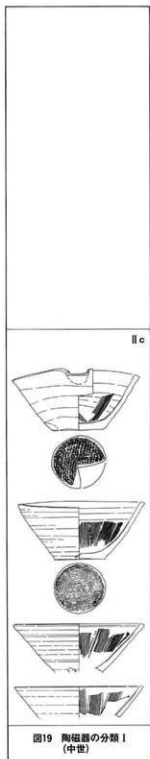


図19 陶磁器の分類Ⅰ  
(中世)

c 3 吉岡Ⅲ群

d類 壺・壺類

<Ⅲ群> 近世に属する陶磁器

a類 碗・小杯・猪口類

b類 皿類

c類 鉢・楕鉢類

d類 德利・銚子・瓶類

e類 壺・壺類

f類 火道具類

g類 焙烙・行平・土鍋類

h類 神仏具類

i類 土瓶・急須類

j類 化粧具類

k類 七輪・焔炉類

l類 植木鉢類

m類 陶鉢（沈子）

n類 その他の陶磁器

<Ⅳ群> 近代に属する陶磁器

a類 碗・小杯・猪口類

b類 皿類

c類 鉢・楕鉢類

d類 德利・銚子・瓶類

e類 壺・壺類

f類 火道具類

g類 焙烙・行平・土鍋類

h類 神仏具類

i類 土瓶・急須類

j類 化粧具類

k類 七輪・焔炉類

l類 植木鉢類

m類 陶鉢（沈子）

n類 その他の陶磁器

c 4 吉岡Ⅳ群

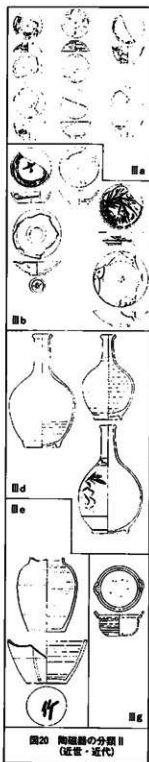


図20 陶磁器の分類Ⅱ  
(近世・近代)

## 第9節 ガラス製品

<Ⅰ群> 縄文時代に属するガラス製品

a類 玉

<Ⅱ群> 縄文期(古代)に属するガラス製品

a類 玉

<Ⅲ群> 中世に属するガラス製品

a類 玉

a 1 紺・青系ガラス玉

a 2 トンボ玉

<Ⅳ群> 近世・近代に属するガラス製品

a類 玉

a 1 黒・紺・紫系ガラス玉

a 2 青・水色系ガラス玉

a 3 緑系ガラス玉

a 4 赤・桃・樹色系ガラス玉

a 5 黄色系ガラス玉

a 6 白色・透明系ガラス玉

a 7 トンボ玉

a 8 その他の色のガラス玉

b類 瓶

c類 罎

d類 ガラスメンコ(おはじき)

e類 弁

f類 その他のガラス製品

## 第10節 その他の遺物

<Ⅰ群> 縄文時代に属するその他の遺物

a類 原石

a 1 角礫

a 2 棒状原石

a 3 円礫



図21 ガラス製品他の分類(各時代)



**b類** 石器素材・利用礫

- b 1 石核
- b 2 細部剥離のある剥片(リタッチド・フレーク)
- b 3 使用痕のある剥片(ユーティライズド・フレーク)
- b 4 剥片(フレーク)
- b 5 石屑(チップ)
- b 6 礫

**c類** 動物遺体

- c 1 貝類
- c 2 魚類
- c 3 鳥類
- c 4 哺乳類

**d類** 植物遺体

- d 1 炭化種子
- d 2 未炭化種子

<Ⅱ群> 縄文期(古代)に属するその他の遺物

**a類** 原石

- a 1 角礫
- a 2 棒状原石
- a 3 円礫

**b類** 利用礫

- b 1 石錘とみられる利用礫
- b 2 その他の利用礫

**c類** 石器素材・剥片等

- c 1 石核
- c 2 細部剥離のある剥片(リタッチド・フレーク)
- c 3 使用痕のある剥片(ユーティライズド・フレーク)
- c 4 剥片(フレーク)
- c 5 石屑(チップ)
- c 6 礫

**d類** 金属関連遺物

- d 1 鉄滓
- d 2 鍛造剥片

**e類** 動物遺体

- e 1 貝類
- e 2 魚類

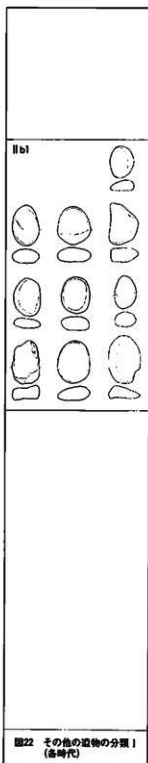
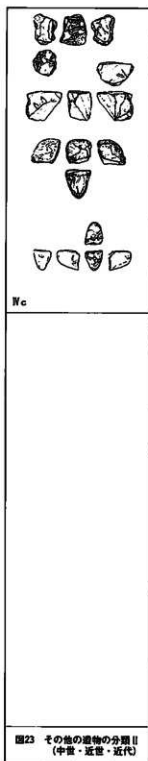


図22 その他の遺物の分類 I (各時代)

- |          |           |
|----------|-----------|
| e 3 鳥類   | e 4 哺乳類   |
| f 類 植物遺体 |           |
| f 1 炭化種子 | f 2 未炭化種子 |
- < III 群 > 中世に属するその他の遺物
- |            |           |
|------------|-----------|
| a 類 原石     |           |
| b 類 利用礫    |           |
| c 類 金属関連遺物 |           |
| c 1 鉄滓     |           |
| c 2 鍛造剣片   |           |
| d 類 動物遺体   |           |
| d 1 貝類     | d 2 魚類    |
| d 3 鳥類     | d 4 哺乳類   |
| e 類 植物遺体   |           |
| e 1 炭化種子   | e 2 未炭化種子 |
- < IV 群 > 近世に属するその他の遺物
- |            |           |
|------------|-----------|
| a 類 原石     |           |
| b 類 利用礫    |           |
| c 類 火打石    |           |
| d 類 金属関連遺物 |           |
| d 1 鉄滓     |           |
| d 2 鍛造剣片   |           |
| e 類 動物遺体   |           |
| e 1 貝類     | e 2 魚類    |
| e 3 鳥類     | e 4 哺乳類   |
| f 類 植物遺体   |           |
| f 1 炭化種子   | f 2 未炭化種子 |
- < V 群 > 近代に属するその他の遺物
- |          |           |
|----------|-----------|
| a 類 原石   |           |
| b 類 利用礫  |           |
| c 類 動物遺体 |           |
| c 1 貝類   | c 2 魚類    |
| c 3 鳥類   | c 4 哺乳類   |
| d 類 植物遺体 |           |
| d 1 炭化種子 | d 2 未炭化種子 |



(宮)

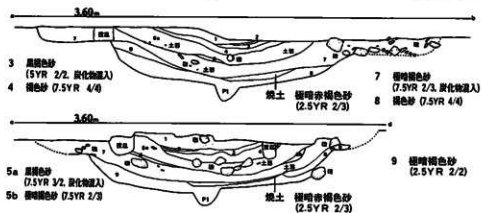
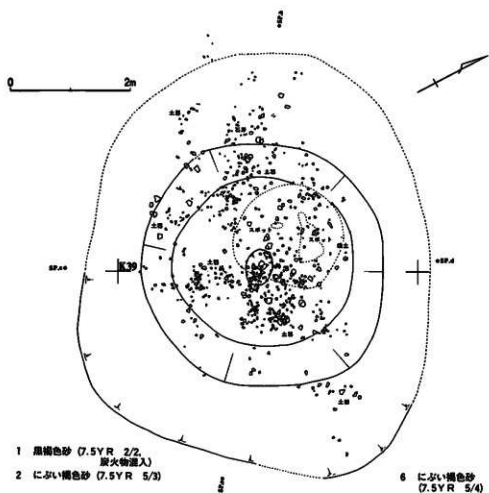


図24 大川遺跡JH-1 検出状況

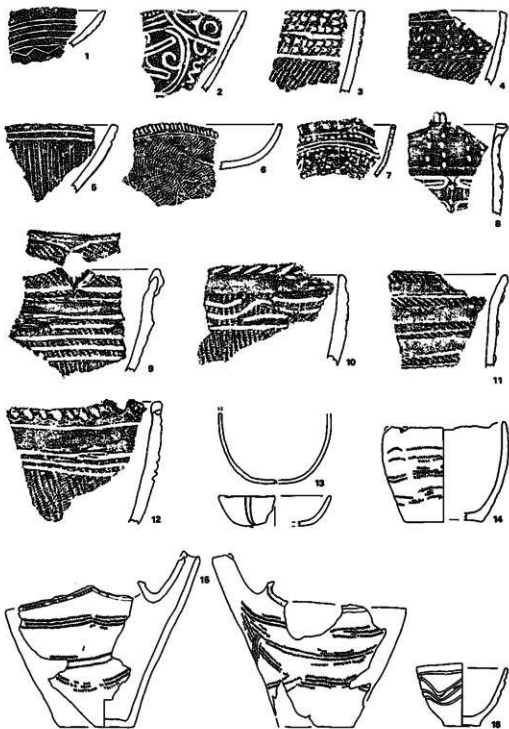


図25 大川遺跡JH-1 塚園及び壱土出土の土器

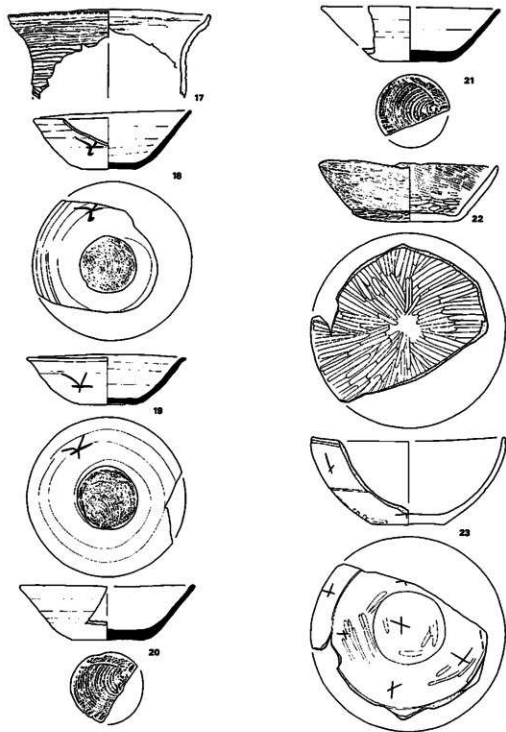


図26 大川遺跡JH-1 覆土出土の土器

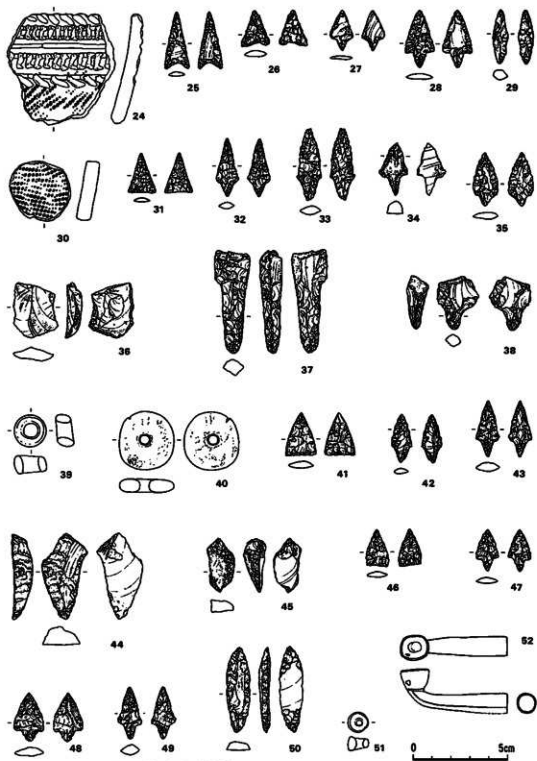


図27 大川遺跡JH-1発掘及び覆土出土の各種遺物

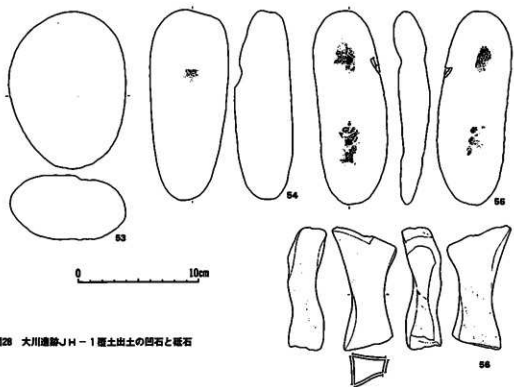


図26 大川遺跡JH-1層土出土の凹石と砥石

表1 大川遺跡JH-1出土遺物一覧

図番号	種別	分類	層位	遺物番号	各部の大きさ (mm) と重さ (g)	備 考
DB25-1	土器	Ⅳd4	床面	609		口縁部、横走沈線、縦線状沈線、R.L.斜行縄文、埴形土器
DB25-2	土器	Ⅳb2	5層	—		爪形、沈線、埴形土器
DB25-3	土器	Ⅳb2	7層	1		爪形、横走沈線、L.R.斜行縄文、深鉢
DB25-4	土器	Ⅳb2	7層	269		爪形、横走沈線、L.R.斜行縄文、深鉢
DB25-5	土器	Ⅳb3	7層	176		条痕、横走沈線、深鉢
DB25-6	土器	Ⅳa3	7層	—		キザミ、横走沈線、L.R.斜行縄文、浅鉢
DB25-7	土器	Ⅳb2	7層	144他		爪形、横走沈線
DB25-8	土器	Ⅳc2	7層	—		斜突、沈線、R.L.縦行縄文、深鉢
DB25-9	土器	Ⅳa5	5層	—		貼瘤、横走沈線、R.L.斜行、縦行縄文
DB25-10	土器	Ⅳc2	覆土	—		竹管、キザミ、沈線、弧線、L.R.縦行縄文
DB25-11	土器	Ⅳc6	覆土	—		貼付帯、R.L.斜行縄文、深鉢
DB25-12	土器	Ⅳc3	7層	327	口径109mm、底径61mm、高さ117mm	キザミ、横走沈線、R.L.縦行縄文
DB25-13	土器	Ⅳb2	5層	—	高さ約25mm	無文?、浅鉢
DB25-14	土器	Ⅳe4	7層他	113他	口径99mm、高さ78mm	R.L.部状縄文、埴形土器
DB25-15	土器	Ⅳe4	7層他	114他	口径107mm、底径61mm、高さ117mm	R.L.部状縄文、注口土器
DB25-16	土器	Ⅳc3	7層	259	高さ51mm	沈線、埴形土器

図番号	種別	分類	層位	遺物番号	各部の大きさ(mm)と重さ(g)	備考
B26-17	土器	Ⅸa 2	1 層	—	口径168mm	キザミ、横走沈殿、深鉢
B26-18	土器	Ⅸb	1 層	21	底径 45mm、高さ 42mm	扇形須恵器「大」、未切底、坏
B26-19	土器	Ⅸb	1層解	—	口径132mm、底径 46mm、高さ 37mm	扇形須恵器「大」、未切底、坏
B26-20	土器	Ⅸb	1 層	101	底径 59mm、高さ 45mm	須恵器、未切底、坏、21と同一向違
B26-21	土器	Ⅸb	1 層	101	底径 56mm、高さ 46mm	須恵器、未切底、坏、20と同一向違
B26-22	土器	Ⅸb	1 層	20	L径148mm、底径 75mm、高さ 46mm	土師器、内黒、段状沈殿、坏
B26-23	土器	Ⅸb 2	1 層	61他	底径 59mm、高さ 68mm	鹿野土師器「十」、内黒、横走沈殿、坏
B27-24	円形土器片	I g 1	地 上	442	59 mm×55 mm×70 mm、29.4g	大洞 C <sub>1</sub> 、口縁部破片利用、横走沈殿、L R斜行縄文
B27-25	石 鏡	I b 2	地 上	—	30 mm×12 mm×2 mm、0.7g	黒曜石、表面に1次刺蝮面残存
B27-26	石 鏡	I b 2	床 面	—	20 mm×14 mm×3 mm、0.7g	黒曜石、球類多
B27-27	石 鏡	I b 3	床 面	—	20 mm×12 mm×2 mm、0.3g	黒曜石、表面に1次刺蝮面残存
B27-28	石 鏡	I b 3	床 面	—	30 mm×15 mm×3 mm、1.0g	黒曜石、表面に1次刺蝮面残存
B27-29	石 鏡	I b 4	床 面	—	29 mm×8 mm×5 mm、1.0g	—
B27-30	円形土器片	I g 1	7 層	—	33 mm×32 mm×7 mm、9.8g	大洞 C <sub>1</sub> 、刺蝮破片利用、L R斜行縄文
B27-31	石 鏡	I b 2	7 層	—	21 mm×14 mm×2 mm、0.5g	—
B27-32	石 鏡	I b 3	7 層	—	31 mm×12 mm×3 mm、0.9g	黒曜石、球類多
B27-33	石 鏡	I b 3	7 層	—	38 mm×13 mm×3 mm、(1.7)g	黒曜石、刺蝮部若干欠損
B27-34	削 器 ?	II c 2	7 層	—	28 mm×15 mm×6 mm、1.3g	黒曜石、表面に自然面残存、球類少
B27-35	石 鏡	I b 3	7 層	365	28 mm×13 mm×3 mm、1.2g	黒曜石、表面に1次刺蝮面残存
B27-36	削 器 ?	II c 2	7 層	—	29 mm×24 mm×6 mm、4.8g	黒曜石、球類少
B27-37	石 鏡	IV a 3	7 層	—	54 mm×17 mm×8 mm、8.8g	黒曜石、球類少、自然面残存、角礫利用
B27-38	石 鏡	IV a 3	7 層	130	28 mm×22 mm×6 mm、4.5g	黒曜石、自然面残存、角礫利用
B27-39	玉	I a	7 層	111	径 17 mm、厚さ 10 mm、3.6g	—
B27-40	玉	I a	7 層	110	径 29 mm、厚さ 7 mm	—
B27-41	石 鏡	I b 2	5 層	—	22 mm×16 mm×4 mm、1.1g	黒曜石、球類少
B27-42	石 鏡	I b 3	5 層	—	25 mm×11 mm×3 mm、0.6g	黒曜石、表面に1次刺蝮面残存
B27-43	石 鏡	I b 3	5 層	—	29 mm×12 mm×4 mm、1.0g	黒曜石
B27-44	ナイフ	II b	5 層	—	45 mm×20 mm×10 mm、8.7g	—
B27-45	削 器 ?	II c 2	5 層	—	28 mm×15 mm×7 mm、3.5g	黒曜石、自然面大きく残存、角礫利用
B27-46	石 鏡	I b 1	覆 土	—	19 mm×12 mm×3 mm、0.6g	黒曜石、1次刺蝮面残存
B27-47	石 鏡	I b 3	覆 土	—	22 mm×12 mm×3 mm、0.5g	黒曜石、球類混入
B27-48	石 鏡	I b 3	覆 土	—	25 mm×16 mm×4 mm、1.4g	黒曜石、球類少、表面に自然面残存、角礫利用
B27-49	石 鏡	I b 3	覆 土	—	27 mm×13 mm×5 mm、1.1g	黒曜石、球類少、厚手
B27-50	削 器 ?	II c 2	覆 土	—	50 mm×12 mm×4 mm、3.4g	—
B27-51	玉	I a	覆 土	—	径 10 mm、厚さ 7 mm、0.9g	—
B27-52	キセル	Ⅹ e 1	覆 土	—	長さ57mm、大径径15mm、管径大径10mm	青銅製
B28-53	凹石	Ⅸb 1	7 層	—	131 mm×97 mm×53 mm、710g	安山岩
B28-54	凹石	Ⅸb 1	5 層	—	158 mm×65 mm×47 mm、800g	安山岩
B28-55	凹石	Ⅸb 2	1 層	1	160 mm×55 mm×26 mm、390g	安山岩
B28-56	砥石	Ⅸc 2	7 層	—	102 mm×56 mm×23 mm、150g	砂岩、四面砥石



## 第4章 竪穴状建物跡の検出とその出土遺物

### 第1節 縄文晩期・続縄文期の竪穴状建物跡

当該期の竪穴状建物跡として分類したものは、JH-1~17がありJH-5については5aと5bの2軒が存在する。したがって図3のように、合計18軒検出された。以上、番号順に紹介する。

**JH-1** K38・39・40、L38・39・40Gridに跨って検出(図3)された。竪穴上部及び東側と西側部分は、攪乱を受けているが、プランは概ね7.10m×6.25mと類推される。確認面からの深さは、概ね20cmであるが、図24のようにベンチ状になっており、最深部は確認面から1mを測る。中央部北側に1.90m×1.70m、厚さ20cm程の焼土の広がり確認された。床面中央部の焼土の下面より60cm×40cm、確認面からの深さが、50cm程のピットを検出したが、柱穴かどうかは不明である。GP-143・147に切られており、UP-28を切っている。また、FP-61の上面及びGP-257bの一部を切っている。

床面の土及び焼土については、フローテーションを実施し、第5章第3節のような結果を得た。そのソイル・サンプル中にウグイ・ホウボウ・トリ類の骨も検出(第5章第2節)された。動物遺体としては、この他に覆土中からイヌやヒグマの骨も出土した。

床面からは多数の縄文晩期・続縄文期の土器が出土したが、このうち最も後出の土器が、図25-1のような恵山期のものであり、本竪穴遺構の時期と考えられる。主要出土遺物の分布は、図

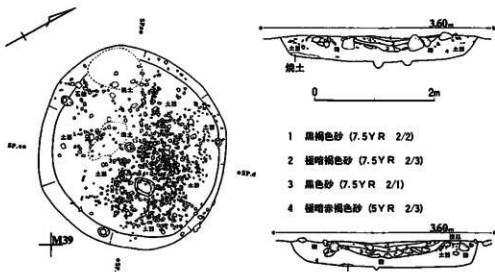


図29 大川遺跡JH-2検出状況

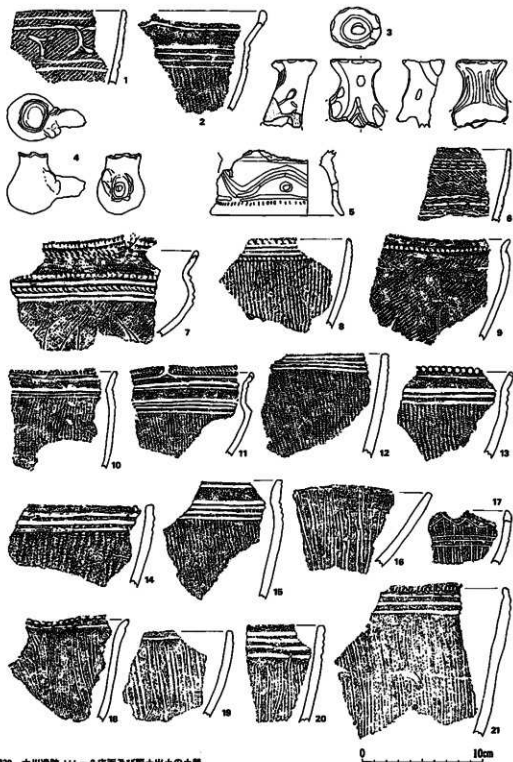


図30 大川遺跡JH-2 床面及び掘土出土の土器



図31 大川遺跡JH-2 覆土出土の土器

24のとおりである。特にスポットからは、夥しい量のチップやフレークが出土した。石器製作の工房跡としても利用されたものと類推される。全出土遺物点数は、数万点を超えるチップ・フレークを除いて、5,737点であり、そのうち5,000点以上が覆土遺物である。廃絶後の竪穴の窟みを捨て場あるいは送り場として縄文晩期～近世にいたるまで利用したものと考えられる。

JH-2 M39・40, N39Gridに跨って検出された。プランは、ほぼ円形で3.42m×3.19mを測る。確認面からの深さは約35cmで、最深部は45cmである。床面中央部西側と西壁際からは焼土が検出(図29)された。前者は概ね80cm×35cm、厚さ6cm、後者は概ね90cm×68cm、厚さ17cmである。また、JH-2はUP-31を切って構築されている。

柱穴等とみられる小ピットが7基検出された。3基が壁際に、他は中央部に所在する。これらのピットは、径が概ね10～20cm、確認面からの深さが10～20cmを測る。

床面の土や焼土については、フローテーションを実施し、第5章第3節のような結果を得た。また、床面等の土から検出された動物遺体(第5章第2節)の絶てが焼骨であった。この他に、床面からは数千点のチップ・フレークが出土しており、石器製作を実施したことが明確である。

出土遺物のほとんどが、縄文晩期のものであり、床面出土の土器で最も後出のものが、縄文晩期後葉(図30-3)のものとみられることから、本竪穴の時期を示しているものと考えられる。

遺物は床面から覆土上部に跨って多量に出土した。合計11,098点の遺物が出土したが、その多くが覆土遺物であり、当該竪穴も廃絶後は、捨て場あるいは送り場として利用されたと類推される。

JH-3 Q41Gridから検出された小竪穴である。MO-10に北西側の約半分が切られており、プランは概ね2.65m×1.17m、確認面からの深さは約30cmを測る。柱や柱穴等は確認されなかった。

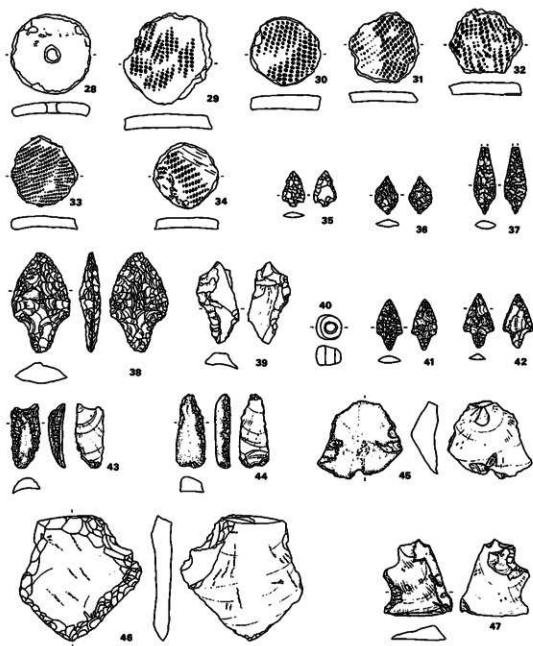


図32 大川遺跡JH-2床面及び覆土出土の遺物

0 5cm

表2 大川遺跡JH-2出土遺物一覧

図番号	種別	分類	層位	遺物番号	各部の大きさ (mm) と重さ (g)	備 考
図30-1	土器	Va1	床面	17		横走沈線、三叉、L・R斜行縄文、深鉢
図30-2	土器	Va4	床面	190		横走沈線、R・L縦行縄文、深鉢
図30-3	土器	Va5	床面	317		貫通孔(横位・斜位)、突起部

図番号	種別	分類	層位	遺物番号	各部の大きさ (mm) と重さ (g)	備 考
図30-4	土器	?	覆土	—	口径 14 mm、高さ 51 mm、(69)g 台部径 110mm	無文、注口風袖珍土器
図30-5	土器	Ⅴa 3	覆土	—		刺突、貫通孔、波状沈線、台付土器
図30-6	土器	Ⅴa 1	覆土	—		横走・波状・断続沈線、R L斜行縄文
図30-7	土器	Ⅴa 2	覆土	—		キザミ、押し、横走沈線、刺突、L R斜行縄文
図30-8	土器	Ⅴa 3	覆土	—		キザミ、横走沈線、押し、R L縦行縄文
図30-9	土器	Ⅴa 2	覆土	—		刺突、L R斜行縄文
図30-10	土器	Ⅴa 4	覆土	—		キザミ、横走沈線、L R縦行縄文
図30-11	土器	Ⅴa 4	覆土	—		キザミ、突起、横走沈線、L R縦行縄文

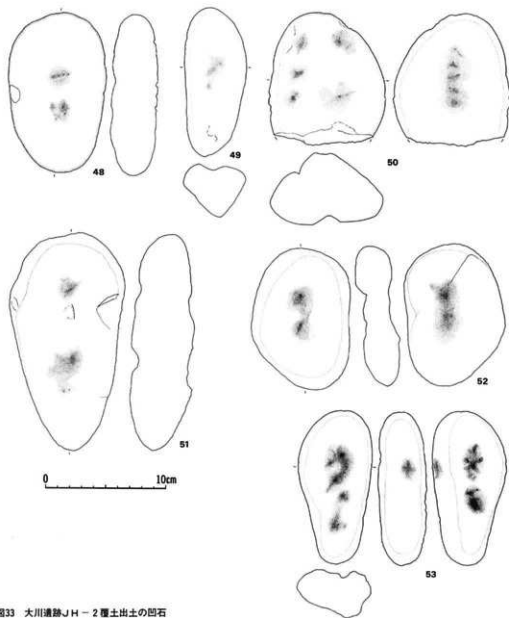


図33 大川遺跡JH-2 覆土出土の凹石

図番号	種別	分類	層位	遺物番号	各部の大きさ (mm) と重さ (g)	備 考
図30-12	土器	Ⅴa 4	覆土	—		横走沈線、L R 縦行縄文
図30-13	土器	Ⅴa 4	覆土	—		キヅミ、横走沈線、R L 縦行縄文
図30-14	土器	Ⅴa 4	覆土	—		横走沈線、R L 縦行縄文
図30-15	土器	Ⅴa 4	覆土	—		横走沈線、R L 縦行縄文
図30-16	土器	Ⅴb 3	覆土	—		条痕、平線、鉢形土器
図30-17	土器	Ⅴb 3	覆土	—		条痕、突起、波状沈線、横走沈線
図30-18	土器	Ⅴb 3	覆土	—		条痕、キヅミ、横走沈線、双口土器ないし異形土器
図30-19	土器	Ⅴb 3	覆土	—		条痕、横走沈線、鉢形土器
図30-20	土器	Ⅴb 3	覆土	—		条痕、横走沈線、深鉢
図30-21	土器	Ⅴb 3	覆土	—		条痕、キヅミ、横走沈線、深鉢
図31-22	土器	Ⅴa 4	覆土	—		横走沈線、貼瘤、R L 縦行縄文
図31-23	土器	Ⅴa 4	覆土	—		突起、波状・横走沈線、押し、貼瘤
図31-24	土器	Ⅴa 4	覆土	—		キヅミ、横走沈線、貼瘤、L R 縦行縄文
図31-25	土器	Ⅴa 4	覆土	—		キヅミ、突起、横走沈線、波状沈線、R L 縦行縄文
図31-26	土器	Ⅴa 4	覆土	—		キヅミ、貼付、波状沈線、R L 縦行縄文、鉢形土器
図31-27	土器	Ⅴa 3	覆土	—		横走沈線、R L 斜行縄文、浅鉢
図32-28	瓦片	I g 2	覆土	—	径43mm、厚さ6mm、孔径9mm、11.6g	無文、上ノ国式割部破片利用
図32-29	瓦片	I g 1	覆土	—	48mm×47mm、厚さ7mm、17.0g	R L 斜行縄文、大洞 C；式割部破片利用
図32-30	瓦片	I g 1	覆土	—	径37mm、厚さ8mm、12.2g	R L 斜行縄文、大洞 C；式割部破片利用
図32-31	瓦片	I g 1	覆土	—	37mm×37mm、厚さ5mm、9.4g	L R 斜行縄文、大洞 C；式割部破片利用
図32-32	瓦片	I g 1	覆土	—	33mm×39mm、厚さ6mm、8.7g	R L 斜行縄文、大洞 C；式割部破片利用
図32-33	瓦片	I g 1	覆土	—	37mm×35mm、厚さ6mm、8.9g	L R 斜行縄文、大洞 C；式割部破片利用
図32-34	瓦片	I g 1	覆土	—	径34mm、厚さ5mm、8.0g	?、大洞 C；式割部破片利用
図32-35	石	I b 3	床面	—	18mm×12mm×2mm、0.6g	黒曜石、被熱
図32-36	石	I b 4	床面	—	20mm×12mm×4mm、0.7g	黒曜石、球痕少
図32-37	石	I b 4	床面	460	(35)mm×12mm×4mm、(1.5)g	黒曜石、割突部欠損
図32-38	石	I c 3	床面	906	(52)mm×31mm×11mm、(10.8)g	黒曜石、割突部若干欠損、球痕、表面に若干自然面残存
図32-39	削器	I c 1	床面	270	43mm×20mm×6mm、5.3g	
図32-40	石	I a	床面	—	径13mm、厚さ10mm、2.5g	
図32-41	瓦	I b 3	覆土	—	27mm×13mm×4mm、1.0g	黒曜石、球痕少
図32-42	石	I b 3	覆土	—	(28)mm×16mm×3mm、(1.2)g	黒曜石、割突部若干欠損、被熱
図32-43	削器	II c 2	覆土	—	35mm×15mm×5mm、4.5g	黒曜石、表面に自然面を大きく残存、内面を利用
図32-44	削器	II c 2	覆土	—	39mm×14mm×8mm、6.5g	黒曜石、表面に自然面を大きく残存、内面を利用
図32-45	削器	II c 2	覆土	—	41mm×45mm×12mm、18.6g	黒曜石、表面に自然面を大きく残存、内面を利用
図32-46	搔器	III a	覆土	—	67mm×65mm×10mm、50.0g	基部に自然面残存
図32-47	抉人削器	III d 1	覆土	—	40mm×36mm×7mm、11.0g	黒曜石、表面に自然面残存、角端を利用
図33-48	凹石	V b 1	覆土	—	132mm×81mm×38mm、520g	
図33-49	凹石	V b 1	覆土	—	123mm×48mm×41mm、300g	
図33-50	凹石	V b 2	覆土	—	(109)mm×96mm×59mm、(490)g	下部欠失
図33-51	凹石	V b 2	覆土	—	180mm×95mm×51mm、820g	
図33-52	凹石	V b 2	覆土	—	117mm×81mm×30mm、300g	
図33-53	凹石	V b 3	覆土	—	127mm×61mm×39mm、370g	

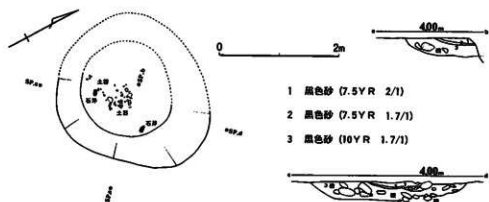


図34 大川遺跡JH-3 検出状況

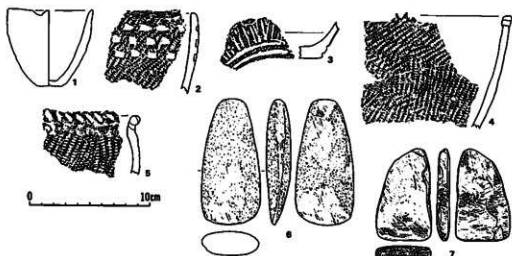


図35 大川遺跡JH-3 床面及び覆土出土の土器と石斧



図36 大川遺跡JH-3 覆土出土の断片石器

表3 大川遺跡JH-3出土遺物一覧

図番号	種別	分類	解位	遺物番号	各部の大きさ(mm)と重さ(g)	備考
D435-1	土器	Ⅵc 8	覆土	—	高63mm、口径20mm	無文、深鉢、小型土器
D435-2	土器	Ⅵb 2	覆土	—		刺突、L.R斜行縄文
D435-3	土器	Ⅵb 3	覆土	—		横走沈輪、朱痕というよりは沈輪、深鉢底部
D435-4	土器	Ⅵb 2	覆土	—		突起、L.R斜行・縦行縄文、深鉢
D435-5	土器	Ⅵc 7	覆土	—		キザミ、R.L斜行縄文
D435-6	石器	Va 2	床面	46	104 mm×48 mm×20 mm、160g	裏面に赤色顔料若干付着残存
D435-7	石器	Va 1	床面	45	76 mm×44 mm×10 mm、70g	刃部が潰れている
D436-8	ナイフ	Ⅱb	覆土	—	51 mm×24 mm×7 mm、7.8g	湖沼石、花十物
D436-9	石器	Ⅱa 2	覆土	—	50 mm×19 mm×9 mm、8.1g	
D436-10	石器	Ⅱc 2	覆土	—	41 mm×29 mm×8 mm、8.1g	湖沼石、表面に自然面を大きく残存、円礫利用

床面出土の最も後出の土器が恵山式土器であり、当該期の竪穴と類推される。出土遺物の総数が585点であり、その大半が覆土から出土したものである。

JH-4 N40・41・42、O40・41・42、P40・41 Grid に跨がって検出された大型の竪穴であり、1991年度と1992年度の両年度に亘って調査した。東側の壁際の一部分がJH-7に切られている他、GP-277と290を切ってJH-4が構築されている。

プランは、概ね10.8m×9.06mの卵形であり、確認面からの深さは壁直下で60～80cm、床面は中央部に向かって緩やかに傾斜しており、最深部は確認面より156cmを測る。壁際より1m程度は、図38のセクションのようにベンチ様を呈している。中央部床面には概ね2.10m×1.60m程の地床が検出され、多量の炭化クルミ（写真8-7-a）、第5章第3節）が伴出した。床面からは径20～55cm、深さ10～40cmの柱穴を含む小ピットが10ヶ所検出された。

覆土は基本的には8層からなっており、中位の4層（魚骨層）から大量の魚骨や若干の獣骨及び貝が出土（第5章第2節）している。これについては、熊崎農夫・前田貞子 1993 「住居址覆土出土の中世の一括動物遺体と骨角器」 『1992年度大川遺跡発掘調査概報』 余市町教育委員会刊 も参照して頂きたい。中世とみられる大量の魚骨と伴出したのが図45-60・61の珠洲片口鉢である。

大型竪穴でもあり、合計14,215点という大量の遺物が出土している。その多くが覆土からの出土である。

本竪穴の床面に伴う主体的な土器は、縄文晩期末～縄文期初頭の港大照寺式である。図のように覆土からもさまざまな遺物が出土している。図43-47は靱の可能性のある圧痕が底面に付着している土器である。大川遺跡検出のSH-1・3・6・8・13等（後述、第5章第3節参照）のコメの出土状況等と関連する可能性もある。他に図示していないが、4層から開元通寶、3層から寛永通寶各1枚、覆土から鉄製の箆（長さ25cm、2本ないし3本を組み合わせて使用したのか）1本等が出土している。



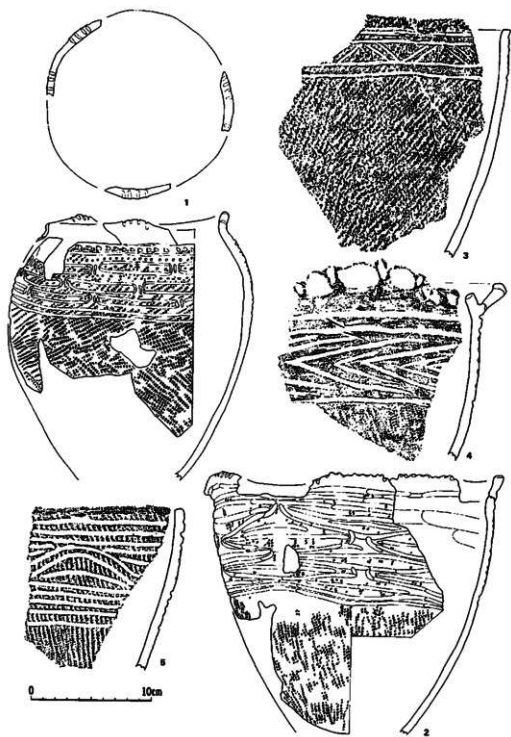
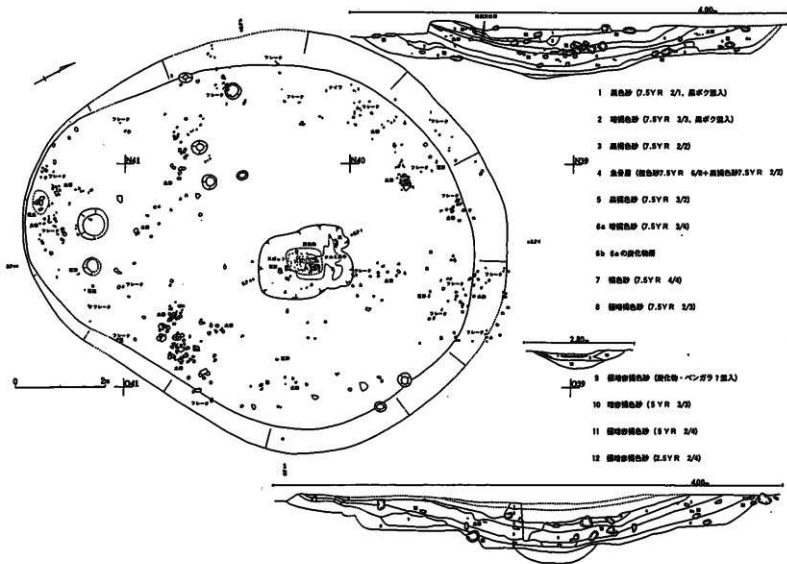


図37 大川遺跡JH-4 扉面及び甍土出土の幾何文様の土器



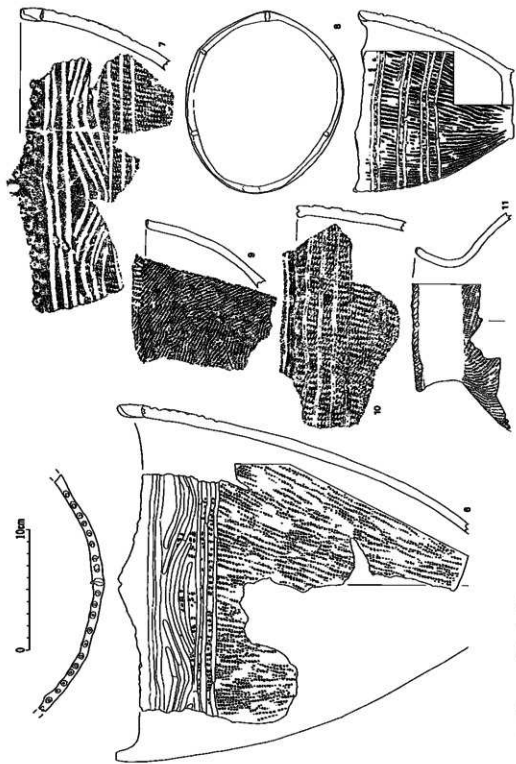


图39 大川遺跡JH-4 灰面土器土器

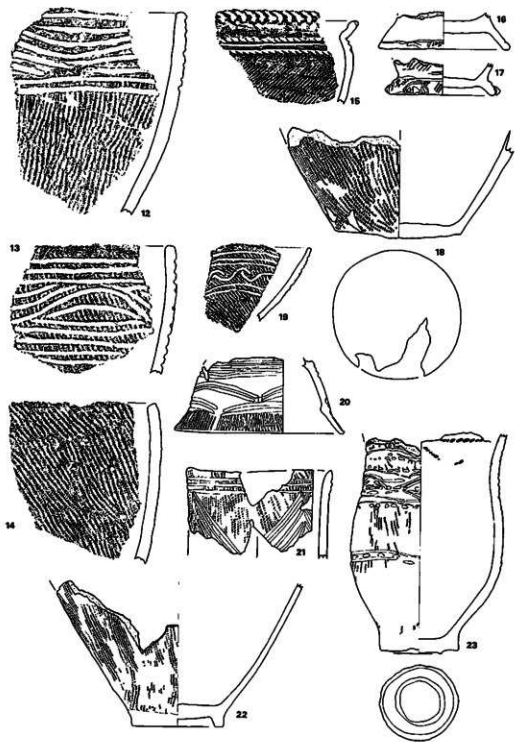


図40 大川遺跡JH-4 覆土出土の土器

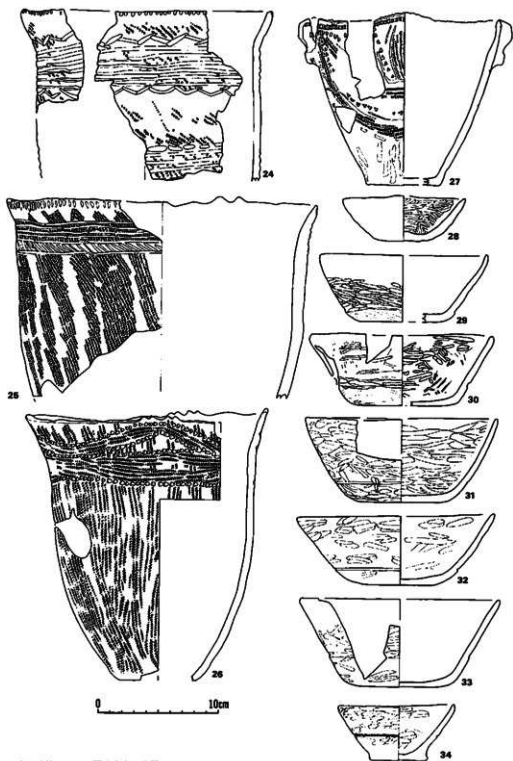


図41 大川遺跡JH-4層土出土の土器

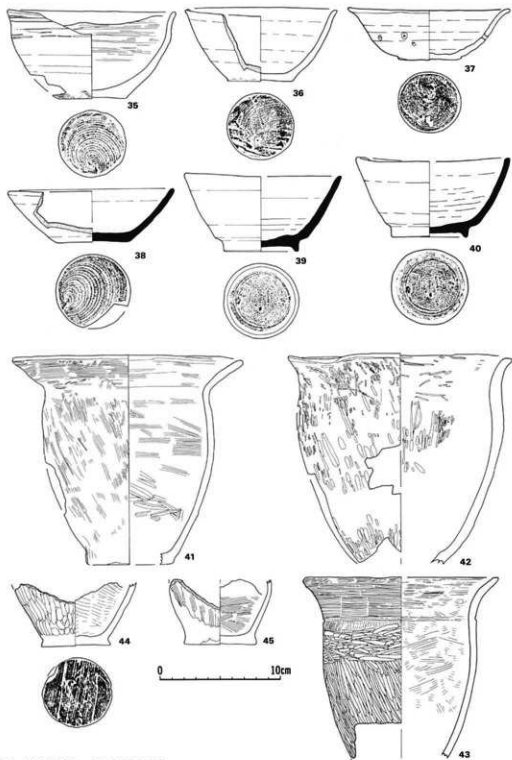


図42 大川遺跡JH-4 覆土出土の土器

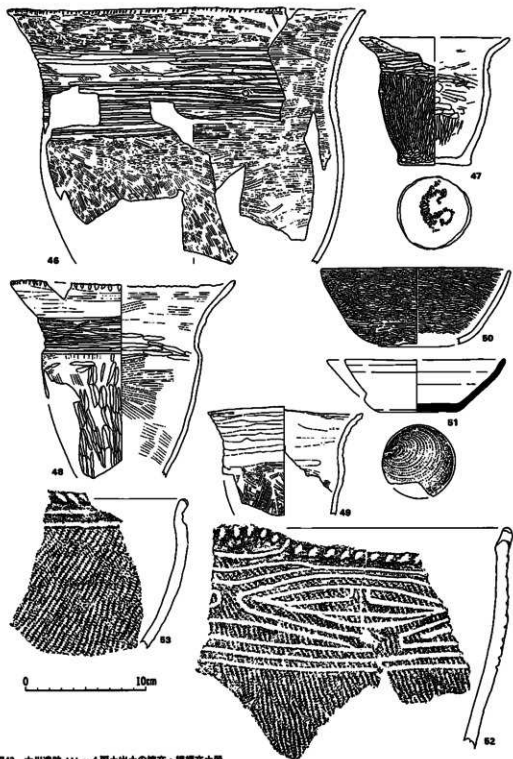


図43 大川遺跡JH-4 層土出土の縞文・縞縄文土器

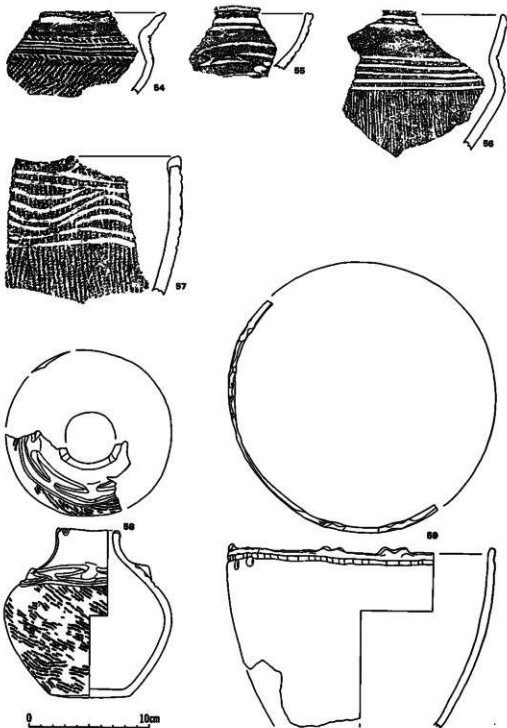


図44 大川遺跡JH-4 壺土出土の縄文晩期・畿縄文期の土器



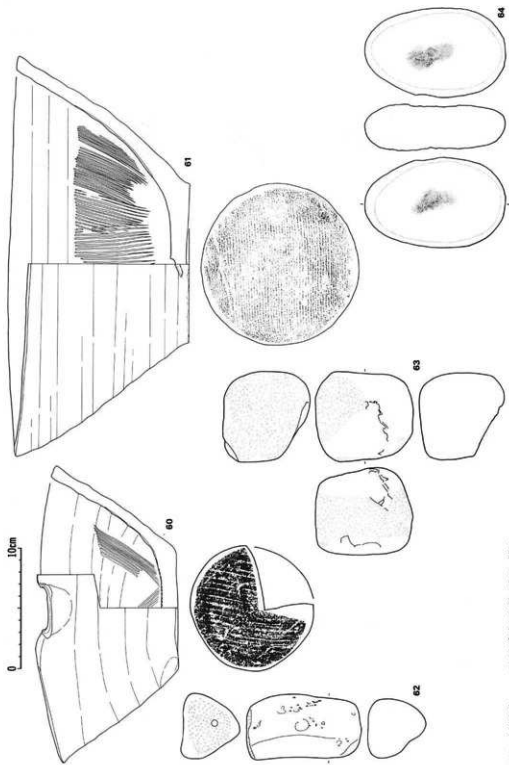


図45 大川遺跡JH-4層土出土の漆鉢・磁石・凹石

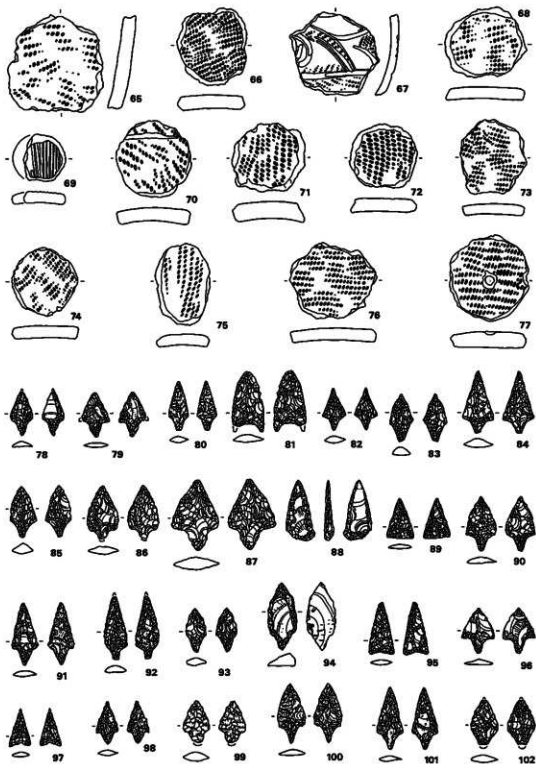


図46 大川遺跡JH-4 塚面及び覆土出土の遺物

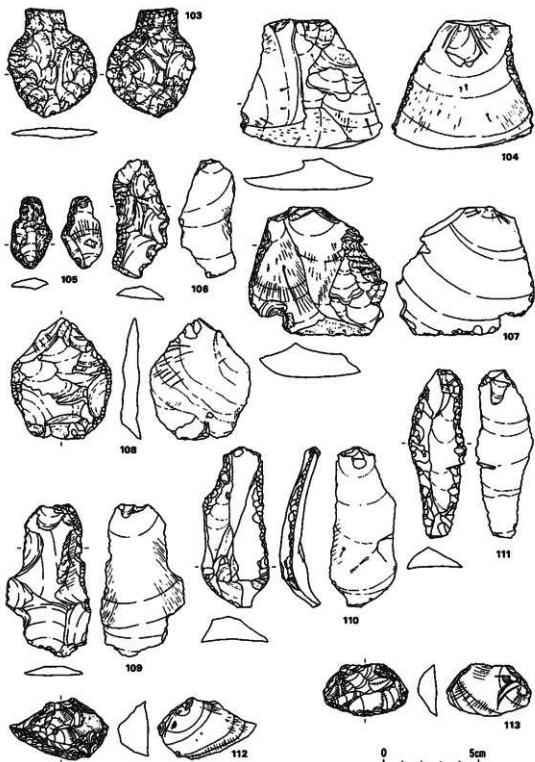


図47 大川遺跡JH-4床面及び壁土出土の剥片石器

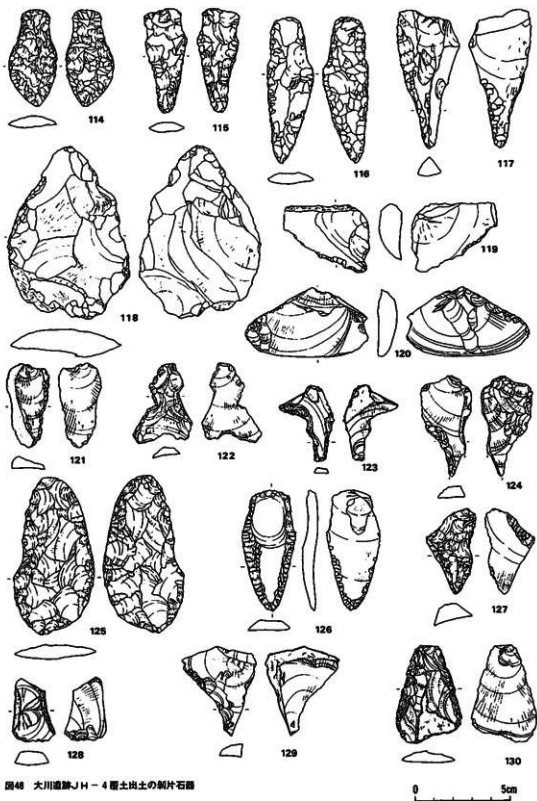


図44 大川遺跡JH-4層土出土の剥片石器

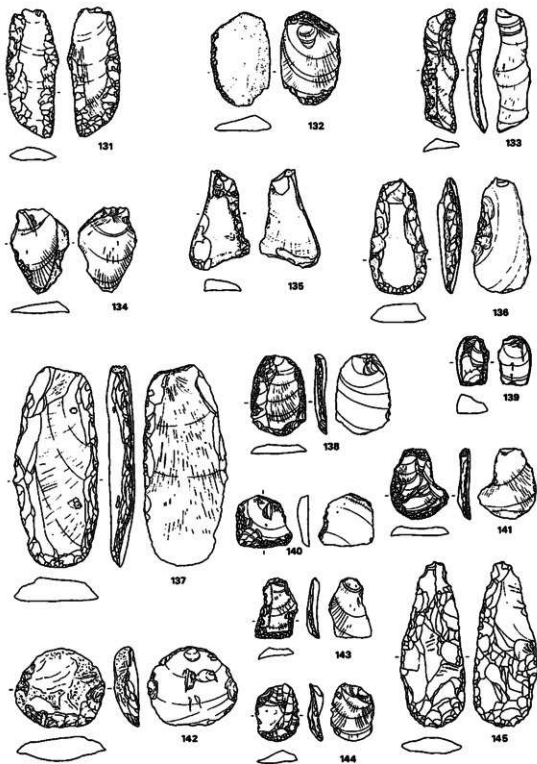


図49 大川遺跡JH-4 覆土出土の制片石器

0 5cm

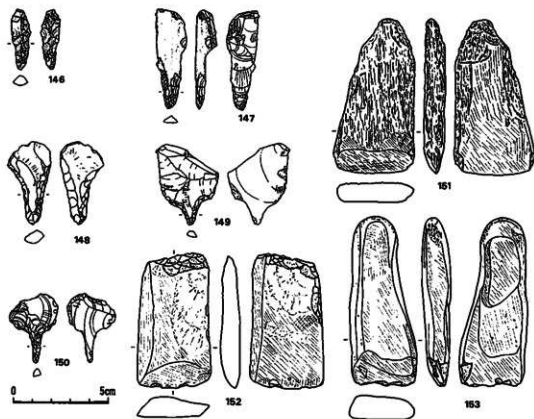


図50 大川遺跡JH-4 床面及び覆土出土の石鏢と石斧

表4 大川遺跡JH-4 出土遺物一覧

図番号	種別	分類	層位	遺物番号	各部の大きさ (mm) と重さ (g)	備考
図37-1	土器	Ⅴc2	7層地	—	□径155mm	工字文、横走沈線、刺突、R L・L R斜行縄文
図37-2	土器	Ⅴc2	床面	289他		変形工字文、横走沈線、口特にキザミ、R L縦行縄文
図37-3	土器	Ⅴa5	床面地	23他		口鈔縄文施文、横走・縦曲状沈線、L R斜行縄文
図37-4	土器	Ⅴc3	床面	248他		二重L線(?)、キザミ、矢羽根状横走沈線、R L縦行縄文
図37-5	土器	Ⅴc2	床面	298他		平縁、横走沈線、弧線文、R L縦行縄文
図39-6	土器	Ⅴc2	床面	244他		弧線文、横走沈線、口特に刺突、R L縦行縄文
図39-7	土器	Ⅴc3	床面	254他		6と7は同一個体
図39-8	土器	Ⅴc3	床面	231	□径153mm、底径55mm、高さ132mm	6突起突起キザミ、横走沈線、R L縦行縄文、口び変形
図39-9	土器	Ⅴa5	床面	355		口鈔部キザミ、R L斜行縄文、鉢形土器
図39-10	土器	Ⅴc3	床面	284他		□鈔部沈線、横走沈線、R L縦行縄文
図39-11	土器	Ⅴa3	床面	375	□径119mm	口鈔部キザミ、R L斜行縄文、逆

図番号	種別	分類	対応	遺物番号	各部の大きさ (mm) と重さ (g)	備 考
図40-12	土器	Vc 2	8 層	—	底径75mm 底径65mm	平縁、弧線文、横走沈線、R.L.縦行縄文
図40-13	土器	Vc 2	8 層	—		平縁、弧線文、横走沈線、R.L.縦行縄文
図40-14	土器	Va 5	8 層	—		R.L.斜行縄文、深鉢
図40-15	土器	Va 2	6 層	—		キザミ、割突、横走沈線、L.R.斜行縄文
図40-16	土器	Va 2	6 層	—		L.R.斜行縄文、台付土器の台
図40-17	土器	Va 2	6 層	—		L.R.斜行縄文、底部
図40-18	土器	Vc 6	6 層	—		R.L.縦行縄文、底部
図40-19	土器	Va 1	5 層	—		横走・曲線状沈線、R.L.縦行縄文、口をいし片口土器
図40-20	土器	Vd 2	5 層	—		沈線、台付土器の台、未焼
図40-21	土器	Vd 7	5 層	—		横走・曲線状沈線、平縁、R.L.縦行縄文、深鉢
図40-22	土器	Vd	6層他	—	R.L.帯状縄文	
図40-23	土器	Vd 7	5 層	—	割突、横走沈線、R.L.縦行縄文、二重底	
図41-24	土器	Vd 7	5 層	—	口径207mm	キザミ、曲線状・横走・折線沈線、R.L.斜行縄文
図41-25	土器	Vd 7	5 層	—	口径(257)mm	突起、キザミ、横走沈線、R.L.帯状縄文
図41-26	土器	Ve 2	5 層	—	口径202mm	押引、帯状縄文、深鉢
図41-27	土器	Ve 4	5 層	—	高さ144mm	貼付帯、キザミ、三角列点、突起、帯状縄文
図41-28	坏	Ib 2	5 層	—	口径102mm、高さ37mm	内面ヘラムミガキ
図41-29	坏	Ib 2	4 層	—	口径140mm、高さ(57)mm	表面ヘラムミガキ、有段、内黒
図41-30	坏	Ib 2	5 層	—	高さ59mm	表面ヘラムミガキ、有段、内黒
図41-31	坏	Ib 2	5 層	—	口径160mm、高さ70mm	表面ヘラムミガキ、有段、内黒
図41-32	坏	Ib 2	5 層	—	口径164mm、高さ57mm	風化脆弱、有段、内黒
図41-33	坏	Ib 2	5 層	—	高さ72mm	表面ヘラムミガキ、有段、内黒
図41-34	坏	Ib 2	5 層	—	口径97mm、底径47mm、高さ45mm	表面ヘラムミガキ、沈線、内黒平底
図42-35	坏	Ib 3	5 層	—	底径56mm、高さ72mm	未切底
図42-36	坏	Ib 3	5層他	—	口径126mm、底径54mm、高さ56mm	未切底、非焼土器
図42-37	坏	Ib 3	覆土	—	口径135mm、底径49mm、高さ42mm	未切底、補修孔
図42-38	坏	Vb	4・5層	—	底径58mm、高さ42mm	未切底、須臾器、51と同一向違
図42-39	坏	Vb	5層他	—	口径130mm、底径261mm、高さ65mm	高台付坏、未切底、須臾器
図42-40	坏	Vb	5層他	—	39と40は同一向違	口縁部はヨコナデ、裏面は刷毛目とヘラムミガキ
図42-41	土器	Ia 3	5 層	—	口径192mm、底径71mm、高さ174mm	器表はヘラムミガキ、裏面は刷毛目とヘラムミガキ
図42-42	土器	Ia 1	5層他	—	口径186mm	口縁部はヨコナデ、裏面はヘラムミガキ、裏面は刷毛目
図42-43	土器	Ia 3	5 層	—	口径163mm	刷毛目とヘラムミガキ、内面刷毛目、底部マイヅク痕
図42-44	土器	Ia 3	5 層	—	底径57mm	表面とも刷毛目
図42-45	土器	Ia 3	5 層	—	底径59mm	
図43-46	土器	Ia 3	5 層	—	口径298mm	キザミ、横走沈線、表面とも刷毛目
図43-47	土器	Ia 3	5 層	—	底径58mm、高さ117mm	口縁部はヨコナデ、裏面は刷毛目とヘラムミガキ
図43-48	土器	Ia 3	5 層	—	口径187mm	キザミ、横走沈線
図43-49	土器	Ia 3	4・5層	—	口径128mm	段状沈線、表面刷毛目
図43-50	坏	Ib 2	5 層	—		表面ヘラムミガキ、底面刷毛目、内黒
図43-51	坏	Vb	4・5層	—		38と同一向違、須臾器
図43-52	土器	Vc 2	3 層	—		キザミ、弧線文、横走沈線、R.L.縦行縄文
図43-53	土器	Va 4	3 層	—		キザミ、L.R.斜行縄文
図44-54	土器	Va 2	覆土	—		キザミ、横走沈線、L.R.斜行縄文
図44-55	土器	Va 3	覆土	—		雷形、L.R.斜行縄文、口唇部沈線、未焼洗鉢
図44-56	土器	Vb 3	覆土	—		折縁・横走沈線、未焼
図44-57	土器	Vc 2	覆土	—		突起、弧線文、横走沈線、R.L.縦行縄文
図44-58	土器	Vc 3	覆土	—		キザミ、貼附、横走沈線、r縄文、壺
図44-59	土器	Va 3	覆土	—	口径222mm	突起、押引、補修孔、無文
図45-60	磁 鉢	Ic 3	4 層	—	口径246mm、底径96mm、高さ118mm	珠洲系陶器、帯目流ろ

図番号	種別	分類	層位	遺物番号	各部の大きさ (mm) と重さ (g)	備考
図45-61	鐘	II c 3	4層他	—	口径331mm、底径130mm、高さ150mm	珠洲系陶器、酸化灰状胎
図45-62	敲石	VI a 1	6層	—	95mm×52mm×48mm、390g	上面及び下面に敲打痕あり
図45-63	敲石	VI a 2	6層	—	81mm×71mm×70mm、650g	2面に敲打痕あり
図45-64	凹石	VI b 3	6層	—	117mm×75mm×39mm、500g	3面に敲打痕あり
図46-65	円形土器片	I g 1	床面	—	61mm×50mm×8mm、23.4g	上ノ国式土器割部破片利用、L.R斜行縄文
図46-66	円形土器片	I g 1	床面	—	41mm×36mm×7mm、13.8g	大洞C：式土器割部破片利用、L.R斜行縄文
図46-67	円形土器片	I g 1	8層	—	43mm×44mm×4mm、10.8g	上ノ国式土器口縁部破片利用、L.R斜行縄文
図46-68	円形土器片	I g 1	8層	—	37mm×43mm×6mm、12.8g	大洞C：式土器割部破片利用、L.R斜行縄文
図46-69	円形土器片	I g 1	8層	—	24mm×(22)mm×6mm、(4.1)g	碗内式土器割部破片利用、条痕
図46-70	円形土器片	I g 1	6層	—	径39mm、厚さ8mm、16.4g	大洞C：式土器割部破片利用、L.R斜行縄文
図46-71	円形土器片	I g 1	6層	—	35mm×38mm×9mm、15.2g	大洞C：式土器割部破片利用、L.R斜行縄文
図46-72	円形土器片	I g 1	6層	—	33mm×35mm×7mm、11.6g	大洞C：式土器割部破片利用、L.R斜行縄文
図46-73	円形土器片	I g 1	6層	—	38mm×34mm×5mm、9.4g	大洞C：式土器割部破片利用、L.R斜行縄文
図46-74	円形土器片	I g 1	5層	—	径36mm、厚さ6mm、10.4g	大洞C：式土器割部破片利用、L.R斜行縄文
図46-75	円形土器片	I g 1	覆土	—	43mm×28mm×6mm、10.0g	大洞C：式土器割部破片利用、L.R斜行縄文
図46-76	円形土器片	I g 1	覆土	—	40mm×45mm×6mm、13.8g	大洞C：式土器割部破片利用、L.R斜行縄文
図46-77	円形土器片	I g 2	覆土	—	45mm×42mm×8mm、18.2g	大洞C：式土器割部破片利用、L.R斜行縄文、首穴
図46-78	石	II b 3	焼土	—	(23)mm×12mm×3mm、(0.6)g	黒曜石、1次割断面を大きく残存、先端部若干欠損
図46-79	石	II b 3	床面	—	24mm×(14)mm×2mm、(0.7)g	黒曜石、表面に1次割断面を残存、基部若干欠損
図46-80	石	II b 3	床面	106	(26)mm×10mm×3mm、(0.8)g	柄部若干欠損
図46-81	石	II b 2	8層	—	(33)mm×16mm×4mm、(2.1)g	黒曜石、球頭部、先端部・基部若干欠損
図46-82	石	II b 3	8層	—	22mm×12mm×3mm、0.6g	黒曜石、厚手
図46-83	石	II b 3	8層	—	25mm×12mm×4mm、1.0g	黒曜石、厚手
図46-84	石	II b 3	7層	—	(33)mm×16mm×5mm、(1.5)g	黒曜石、柄部若干欠損
図46-85	石	II b 3	6層	—	(27)mm×14mm×6mm、(1.6)g	黒曜石、柄部若干欠損
図46-86	石	II b 3	6層	—	(28)mm×17mm×4mm、(1.5)g	黒曜石、球頭多、柄部欠損
図46-87	石	II b 3	6層	—	(37)mm×25mm×6mm、(4.2)g	黒曜石、球頭部、先端部若干欠損
図46-88	石	II b 8	6層	—	32mm×15mm×5mm、1.8g	黒曜石、表面に1次割断面を大きく残存
図46-89	石	II b 1	5層	—	21mm×14mm×2mm、0.6g	黒曜石、球頭多
図46-90	石	II b 3	5層	—	29mm×15mm×3mm、1.2g	黒曜石、表面に1次割断面を残存
図46-91	石	II b 3	5層	—	33mm×14mm×3mm、1.1g	黒曜石、表面に1次割断面を残存
図46-92	石	II b 3	5層	—	(33)mm×12mm×3mm、(1.4)g	黒曜石、先端部・柄部欠損、表面に1次割断面を残存
図46-93	石	II b 3	5層	—	23mm×10mm×4mm、0.8g	黒曜石
図46-94	削器	II c 2	5層	—	35mm×15mm×6mm、2.9g	黒曜石、球頭部
図46-95	石	II b 2	3層	—	(27)mm×13mm×2mm、(0.8)g	黒曜石、先端部欠損
図46-96	石	II b 3	2層	—	24mm×17mm×3mm、0.7g	黒曜石、球頭混入
図46-97	石	II b 2	覆土	—	(18)mm×12mm×2mm、(0.4)g	黒曜石、球頭混入、先端部若干欠損
図46-98	石	II b 3	覆土	—	22mm×12mm×3mm、0.6g	黒曜石、表面に自然面若干残存
図46-99	石	II b 3	覆土	—	(22)mm×14mm×5mm、(1.2)g	黒曜石、焼熱、先端部・柄部若干欠損
図46-100	石	II b 3	覆土	—	31mm×19mm×3mm、1.1g	黒曜石、球頭混入
図46-101	石	II b 3	覆土	—	33mm×14mm×3mm、1.0g	黒曜石、球頭混入、表面に自然面残存
図46-102	石	II b 5	覆土	—	(23)mm×14mm×4mm、(1.2)g	黒曜石、球頭混入、先端部・基部欠損
図47-103	ナイフ	II b	床面	66	(57)mm×47mm×5mm、(162)g	柄部折損
図47-104	削器	II c 2	床面	42	68mm×74mm×17mm、6.7g	フェザーエンド
図47-105	ナイフ	II b	8層	—	38mm×21mm×6mm、5.1g	
図47-106	削器	II c 2	8層	—	62mm×27mm×6mm、11.4g	
図47-107	削器	II c 2	8層	—	67mm×73mm×18mm、77.5g	
図47-108	掘器	II b	8層	—	64mm×52mm×9mm、32.0g	バルブ残存
図47-109	削器	II c 2	8層	—	80mm×44mm×5mm、23.4g	



図番号	種別	分類	層位	遺物番号	各部の大きさ(mm)と重さ(g)	備考
図47-10	削	器 II c 2	8 層	—	85 mm×35 mm×17 mm, 39.6g	バルブ除去
図47-11	削	器 II c 2	8 層	—	89 mm×31 mm×10 mm, 27.2g	バルブ除去
図47-12	挿	器 III a	7 層	—	32 mm×52 mm×29 mm, 20.2g	黒曜石、表面に自然面残存、円礫利用
図47-13	挿	器 III a	7 層	—	27 mm×44 mm×27 mm, 10.8g	黒曜石
図48-14	ナイフ	器 II b	6 層	—	51 mm×25 mm×6 mm, 8.6g	
図48-15	ナイフ	器 II b	6 層	—	55 mm×22 mm×5 mm, 7.8g	
図48-16	ナイフ	器 II b	6 層	—	77 mm×24 mm×5 mm, 14.2g	
図48-17	石 鏃	IV a 4	6 層	—	(74)mm×(32)mm×10 mm, (258)g	基部欠損
図48-18	削	器 II c 1	6 層	—	91 mm×64 mm×8 mm, 84.5g	基部周辺に自然面残存
図48-19	削	器 II c 2	6 層	—	36 mm×44 mm×30 mm, 16.6g	基部側に自然面大きく残存
図48-20	削	器 II c 2	6 層	—	36 mm×64 mm×35 mm, 20.2g	黒曜石、花十部、基部近くに自然面残存、角礫を利用
図48-21	削	器 II c 2	6 層	—	44 mm×22 mm×6 mm, 6.6g	黒曜石、表面に自然面大きく残存、円礫を利用
図48-22	挿入削器	器 II d 3	6 層	—	45 mm×31 mm×4 mm, 5.3g	黒曜石、球状選入
図48-23	挿入削器	器 II d 1	6 層	—	40 mm×30 mm×3 mm, 4.3g	黒曜石、自然面大きく残存、角礫を利用
図48-24	挿入削器	器 II d 2	6 層	—	53 mm×27 mm×6 mm, 10.4g	黒曜石
図48-25	ナイフ	器 II b	5 層	—	83 mm×42 mm×8 mm, 29.8g	
図48-26	ナイフ	器 II b	5 層	—	64 mm×28 mm×5 mm, 12.2g	
図48-27	ナイフ	器 II b	5 層	—	45 mm×24 mm×9 mm, 10.8g	
図48-28	削	器 II c 2	5 層	—	33 mm×22 mm×7 mm, 5.4g	黒曜石、自然面残存、球状少
図48-29	削	器 II c 2	5 層	—	48 mm×39 mm×7 mm, 12.8g	黒曜石、自然面大きく残存、表面に自然面残存、角礫利用
図48-30	削	器 II c 2	3 層	—	51 mm×34 mm×6 mm, 9.5g	黒曜石、表面に自然面大きく残存、バルブ除去、円礫利用
図49-31	ナイフ	器 II b	覆土	—	(69)mm×22 mm×7 mm, (14.2)g	基部欠損
図49-32	削	器 II c 2	覆土	—	49 mm×30 mm×8 mm, 13.4g	黒曜石、表面に自然面をほとんど残存、角礫を利用
図49-33	挿入削器	器 II d 2	覆土	—	(66)mm×19 mm×5 mm, (7.9)g	黒曜石、表面に自然面残存、球状多、角礫を利用
図49-34	削	器 II c 2	覆土	—	45 mm×31 mm×5 mm, 9.1g	黒曜石、自然面大きく残存、角礫を利用
図49-35	削	器 II c 2	覆土	—	52 mm×32 mm×6 mm, 11.0g	黒曜石、自然面大きく残存、角礫を利用
図49-36	挿	器 III a	8 層	—	61 mm×31 mm×10 mm, 24.4g	狭長削片利用
図49-37	挿	器 III a	6 層	—	106 mm×44 mm×12 mm, 8.7g	基部側に自然面残存、角礫を利用
図49-38	挿	器 III a	5 層	—	42 mm×29 mm×5 mm, 7.6g	黒曜石、被熱、被熱後にも再使用?
図49-39	挿	器 III a	5 層	—	26 mm×17 mm×10 mm, 6.1g	黒曜石、草履型入、自然面大きく残存、円礫を利用
図49-40	挿	器 III a	5 層	—	28 mm×29 mm×6 mm, 5.2g	黒曜石、基部側に自然面を残存、角礫を利用
図49-41	挿	器 III a	5 層	—	37 mm×30 mm×5 mm, 5.2g	黒曜石、花十部
図49-42	挿	器 III b	5 層	—	42 mm×47 mm×12 mm, 28.0g	、自然面を大きく残存、円礫を利用
図49-43	挿	器 III a	覆土	—	31 mm×20 mm×4 mm, 3.8g	黒曜石、表面に自然面残存、角礫を利用
図49-44	挿	器 III a	覆土	—	30 mm×22 mm×6 mm, 4.0g	黒曜石、バルブ除去
図49-45	石 鏃	器 IV c	覆土	—	87 mm×34 mm×8 mm, 27.6g	
図50-46	石 鏃	器 IV a 1	覆土	—	32 mm×10 mm×5 mm, 1.7g	黒曜石
図50-47	石 鏃	器 IV a 2	覆土	—	53 mm×16 mm×4 mm, 5.5g	黒曜石、表面に大きく自然面残存、球状黒石を利用
図50-48	石 鏃	器 IV a 1	6 層	—	43 mm×23 mm×7 mm, 6.1g	
図50-49	石 鏃	器 IV a 4	6 層	—	(44)mm×31 mm×3 mm, (6.7)g	割変部若干欠損
図50-50	石 鏃	器 IV a 4	6 層	—	31 mm×26 mm×3 mm, 3.7g	黒曜石
図50-51	石 斧	V a 2	床面	182	82 mm×42 mm×10 mm, 62.0g	
図50-52	石 斧	V a 2	床面	223	(70)mm×38 mm×11 mm, (48.4)g	基部欠損?
図50-53	石 斧	V a 2	床面	371	89 mm×34 mm×7 mm, (75.0)g	刃部若干欠損、刃部のみを作成

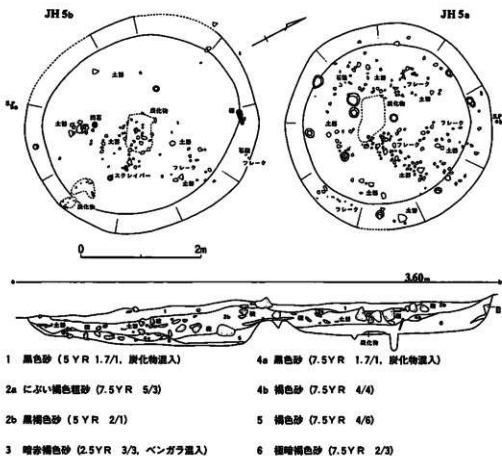


図51 大川遺跡JH-5a・5b検出状況

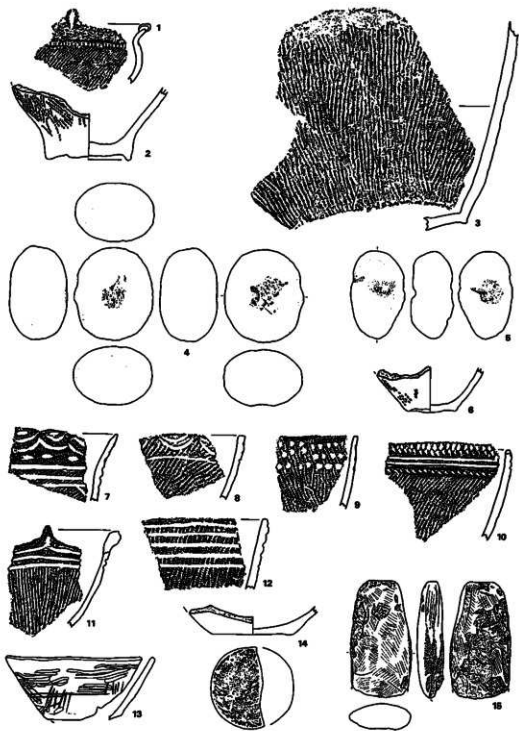


図52 大川遺跡JH-5a・5b 床面及び甌土出土の遺物

0 10cm

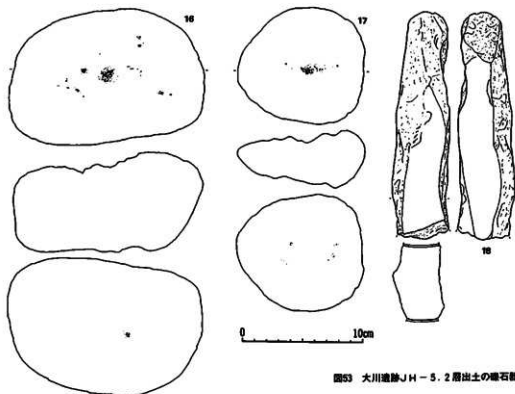


図53 大川遺跡JH-5. 2層出土の竪穴群

**JH-5a・5b** 図51のセクションでもわかるように、確認面からのプランは当初長円形とみられた。しかし、掘り下げたところほぼ円形の2軒の竪穴であることが判明した。したがって、覆土から大量に出土した遺物はJH-5として取り上げた。2軒の竪穴の内、北側をJH-5a、南側をJH-5bと呼称した。

JH-5aは、I40とJ40Gridに跨がって検出され、径は概ね3.43m×3.40mのほぼ円形プランで確認面からの深さは概ね57cmである。床面中央には、地床炉とみられ、概ね70cm×40cmの炭化物の範囲が確認された。床面には径10cm～20cm、深さ10cm～20cm程の柱穴様の小ピットが4個、壁際には6個検出された。床面からは多くの遺物が出土したが、図示できたものは少ない。床面出土の土器の内、本竪穴の時期を示すものは恵山式土器とみられる。

JH-5bは、I40・41、J40・41Gridに跨がって検出(図3)された。JH-5aとは50cm程の間隔である。径は概ね3.90m×3.60mとほぼ円形で、確認面からの深さは65cm～78cm前後である。床面中央部には、60cm×40cm程の地床炉とみられる炭化物の範囲が認められた。柱穴様の小ピットが床面中央部北側から1個、南側から2個検出された。いずれも径10cm程で、深さが6cm～10cmである。JH-5a同様恵山期の竪穴とみられる。JH-5・5a・5bとして取り上げた遺物は、合計5,527点であり、そのうち、4,804点が土器であった。

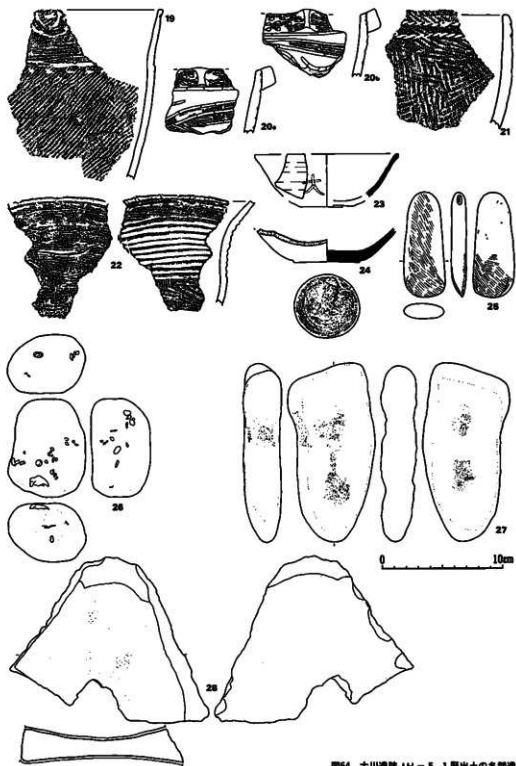


図54 大川遺跡JH-5. 1層出土の各種遺物

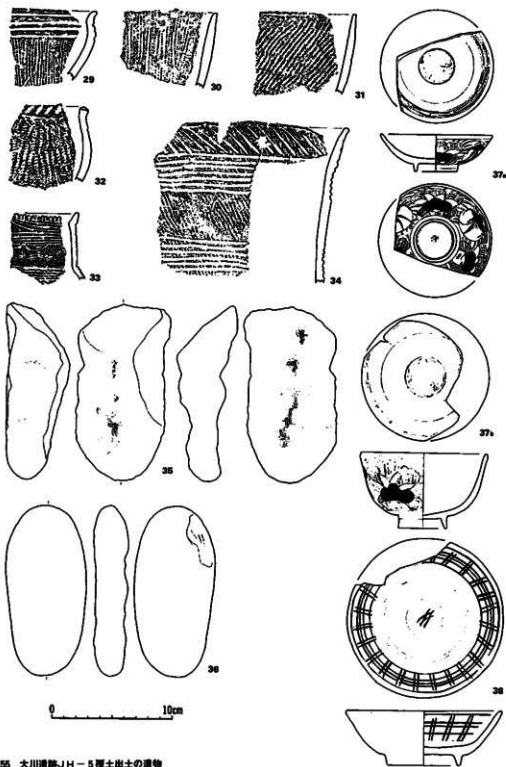


図55 大川遺跡JH-5 種土出土の遺物



図56 大川遺跡JH-5-5b床面及び覆土出土の遺物

表5 大川遺跡JH-5-5a・5b床面及び覆土出土の遺物

図番号	種別	分類	層位	遺物番号	各部の大きさ (mm) と重さ (g)	備考
図52-1	土器	Va 2	床面	145	底径 7mm	突起、キズミ、爪形、L.R斜行縄文、内付土器 (5a) R.L.羽状縄文、揚げ底、深鉢 (5a)
図52-2	土器	Vd 7	床面	139		
図52-3	土器	Vc	床面	54他		R.L.縦行縄文 (5b)
図52-4	敲石	Va 2	床面	30	77mm × 65mm × 48mm, 350g	表面面及びほぼ全縁に敲打部あり (5b)
図52-5	凹石	Vb 4	6解	—	73mm × 45mm × 34mm, 110g	
図52-6	土器	Vc	3解	—	底径40mm	R.L.縦行縄文
図52-7	土器	Va 1	2解	—		低輪文、斜突文、横走沈線、L.R斜行縄文

図番号	種別	分類	層位	遺物番号	各部の大きさ (mm) と重さ (g)	備考	
B852-8	土器	Wa 1	2 層	—	(97)mm×50mm×20mm, 160g	弧線文、横走沈線、L R斜行縄文	
B852-9	土器	Wb 2	2 層	—		連続刺突、R L縦行縄文	
B852-10	土器	Wa 2	2 層	—		キザミ、横走沈線、刺突、L R斜行縄文	
B852-11	土器	Wa 4	2 層	—		突起、横走沈線、R L縦行縄文	
B852-12	土器	Wa 4	2 層	—		横走沈線、R L縦行縄文	
B852-13	坏	Ib 1	2 層	—		刺文、内黒、表面ともヘラミガキ	
B852-14	坏	Ib 3	1・2層	—		糸切底、内黒、内面ヘラミガキ	
B852-15	石斧	Va	2 層	—		刃部欠損	
B853-16	凹石	Wb 2	2 層	—		162mm×110mm×81mm, 1110g	下部折損
B853-17	凹石	Wb 4	2 層	—		105mm×96mm×47mm, 460g	
B853-18	砥石	Ic 1	2 層	—	(188)mm×46mm×39mm, 700g		
B854-19	土器	Wa 1	1 層	—	底径 54mm	刺突、弧線、L R斜行縄文、深鉢	
B854-20	土器	Wa 1	1 層	—		突起、刺突、横走、矢羽根状沈線、無節	
B854-21	土器	Wc 5	1 層	—		縄線、R L斜行縄文	
B854-22	土器	Ia 3	1 層	—		横走凹線、表面刷毛目	
B854-23	須恵器	Wb	1 層	—		鬚杵須恵器、「大」の可能性あり	
B854-24	須恵器	Wb	1 層	—		糸切底、坏	
B854-25	石斧	Va 2	1 層	—		転石をうまく利用	
B854-26	砥石	Wa 2	1 層	—		81mm×63mm×49mm, 380g	上・下2面に敲打痕あり
B854-27	凹石	Wb 3	1 層	—		149mm×68mm×29mm, 320g	表面以外ほぼ全縁欠損
B854-28	砥石	Ic 1	1 層	—			
B855-29	土器	Wb 3	覆土	—	(146)mm×(74)mm×(43)mm, (390)g 141mm×66mm×29mm, 370g	横走沈線、条痕	
B855-30	土器	Wb 3	覆土	—		条痕	
B855-31	土器	Wa 1	覆土	—		平縁、L R斜行縄文	
B855-32	土器	Wc 7	覆土	—		キザミ、R L縦行縄文	
B855-33	土器	Wd 3	覆土	—		キザミ、横走・扇状沈線	
B855-34	土器	Wd 7	覆土	—		横走沈線、R L斜行縄文	
B855-35	凹石	Wb 4	覆土	—		二面欠損、欠損後も使用	
B855-36	凹石	Wb 2	覆土	—			
B855-37	磁器	Ia	覆土他	—		口径94mm、高さ31mm、碗底径41mm、碗底56mm	
B855-38	磁器	Ib	覆土他	—		口径130mm、底径60mm、高さ45mm	
B856-39	削器	Ic 2	床面	26	76mm×48mm×10mm, 22.4g	黒曜石、バルブ除去 (5b)	
B856-40	石錐	Ib 3	6 層	—	31mm×10mm×4mm, 1.3g	黒曜石、表面に1次割痕・表面に自然面を残り、琢磨入り	
B856-41	削器	Ic 2	6 層	—	25mm×12mm×4mm, 1.7g	黒曜石、表面に1次割痕・表面に自然面を残り、琢磨入り	
B856-42	円形土器片	Ig 1	2 層	—	39mm×45mm×7mm, 15.2g	大割C式土器破片片を利用、扇状沈線、連続刺突、R L斜行縄文	
B856-43	円形土器片	Ig 1	2 層	—	46mm×45mm×7mm, 16.8g	大割C-C式土器破片片を利用、R L斜行縄文	
B856-44	有孔土製品	Ii 4	2 層	—	24mm×24mm×8mm, 4.5g	石孔、渦巻状沈線、孔径3mm	
B856-45	石錐	Ib 5	2 層	—	(25)mm×13mm×3mm, (0.9)g	黒曜石、柄部欠損、琢磨少	
B856-46	石錐	Ib 2	2 層	—	(28)mm×11mm×3mm, 0.9g	黒曜石、先端部・基部若干欠損	
B856-47	削器	Ic 2	2 層	—	31mm×18mm×4mm, 2.6g	黒曜石、バルブ除去	
B856-48	ナイフ	Ii b	2 層	—	55mm×23mm×8mm, 11.6g	黒曜石、琢磨多、刃部頂上に自然面を残り、角磨を利用	
B856-49	削器	Ic 2	2 層	—	52mm×27mm×5mm, 11.6g	黒曜石、バルブ除去、角磨を利用	
B856-50	円形土器片	Ig 1	1 層	—	32mm×37mm×7mm, 10.4g	大割C式土器破片片を利用、R L斜行縄文	
B856-51	系	Ii 5	1 層	—	11mm×11mm×11mm, 1.4g	上王。	
B856-52	R・F	Ib 3	2 層	—	23mm×39mm×6mm, 5.6g	リッタード・フック、側面若干欠損	
B856-53	石錐	Ia 3	1 層	—	50mm×53mm×6mm, 25.2g	基に大きく原形面を残り	
B856-54	円形土器片	Ig 1	1 層	—	42mm×41mm×5mm, 12.8g	上ノ四式土器破片片を利用、無文	
B856-55	ナイフ	Ii b	覆土	—	61mm×28mm×6mm, 12.4g		
B856-56	抉入削器	Ii d 2	覆土	—	57mm×27mm×12mm, 17.8g	黒曜石、琢磨多、自然面を大きく残り、角磨を利用	



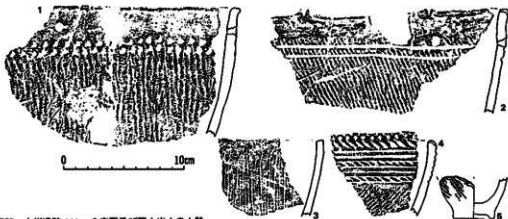
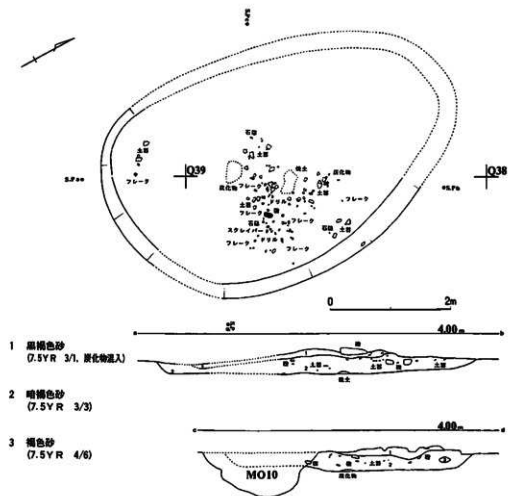


図56 大川遺跡JH-6床面及び覆土出土の土器

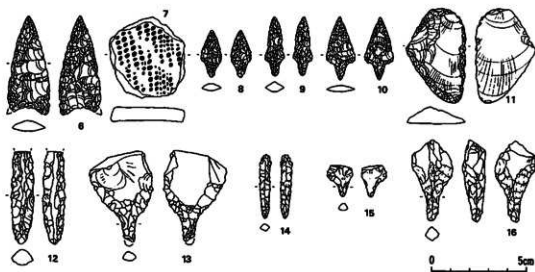


図59 大川遺跡JH-6床面及び覆土出土の土製品と銅片石器

表6 大川遺跡JH-6出土遺物一覧

図番号	種別	分類	層位	遺物番号	各部の大きさ (mm) と重さ (g)	備考
図58-1	土器	Vc4	床面	70槍		平縁、指降孔、連続刺突、R.L.縦行縄文
図58-2	土器	Va5	2層	6		小突起、指降孔、横走沈線、R.L.縦行縄文
図58-3	土器	Vb3	2層	6		条痕、深鉢
図58-4	土器	Va2	覆土	—		キザミ、横走沈線、L.R.斜行縄文
図58-5	土器	Vc	覆土	—	底径34mm	上げ底、R.L.縦行縄文
図59-6	石鏃	Ib2	床面	42	53 mm × 22 mm × 5 mm, (4.8)g	黒曜石、球顆若干混入、基部若干欠損
図59-7	円形土器片	Ig1	2層	21	43 mm × 39 mm × 8 mm, 17.6 g	縄文陶器といふ疑陶文類と認められず、R.L.縦行縄文
図59-8	石鏃	Ib3	2層	8	25 mm × 11 mm × 3 mm, 0.9 g	黒曜石
図59-9	石鏃	Ib3	2層	24	31 mm × 10 mm × 5 mm, 1.2 g	黒曜石、球顆若干混入、
図59-10	石鏃	Ib3	2層	56	33 mm × 15 mm × 3 mm, 1.2 g	黒曜石、表面に1次節離面残存
図59-11	ナイフ	Iib	2層	22	51 mm × 32 mm × 19 mm, 11.4 g	黒曜石、花弁部、バルブ残存
図59-12	石鏃	Va1	2層	63	(48) mm × 12 mm × 8 mm, (5.7)g	硬質砂岩、基部欠損
図59-13	石鏃	Va3	2層	53	(47) mm × 31 mm × 4 mm, (12.6)g	頁岩、刺突部欠損
図59-14	石鏃	Va1	覆土	—	33 mm × 6 mm × 3 mm, 1.0 g	赤色砂岩 (鉄石英)
図59-15	石鏃	Va4	覆土	—	17 mm × 14 mm × 3 mm, 1.2 g	赤色砂岩 (鉄石英)
図59-16	石鏃	Va3	覆土	—	(42) mm × 21 mm × 7 mm, (7.7)g	硬質頁岩、基部欠損?

JH-6 Q39・40, R39・40Grid に跨がって検出された。北側の概ね半分はMO-10によって切られている。また、JH-12の北側の一部分を切って構築している。残存している部分から類推すれば、5m×4m前後の大きさで、楕円形のプランを呈していたと考えられる。確認面からの深さは、21cm前後、床面はほぼ水平であるが、柱穴様の小ピット等は確認できなかった。

中央部東側には、40cm×20cm程の地床炉とみられる焼土が確認された。大半がMO-10によって失われているとはいうものの、本竪穴の全出土遺物は1,001点であった。本竪穴の所属時期は、港大照寺期とみられる。

JH-7 O39・40, P39・40 Grid に跨がって検出された。JH-4 の東壁の一部を切って構築されている。5.70m×4.70m 程の大きさで、楕円形のプランを呈する。確認面からの深さは、概ね25cm~40cm程度である。東壁際には50cm×40cm程の焼土が確認された。柱穴様的小ピットは東側に4個、西側に6個検出された。いずれも径20cm~30cm、深さ10cm~40cm程度のものである。

出土遺物の総数は2,946点、内、土器が2,545点で銅片が341点であった。

図61-1~6は床面出土の土器であるが、特に1が後出の土器とみられる。したがって、1の土器の時期に構築されたものと考えられる。1には全面赤色顔料が付着しており、かつ又、床面出土の完形土器ということで、墓塚等の関連から留意しなければならないと考えている。

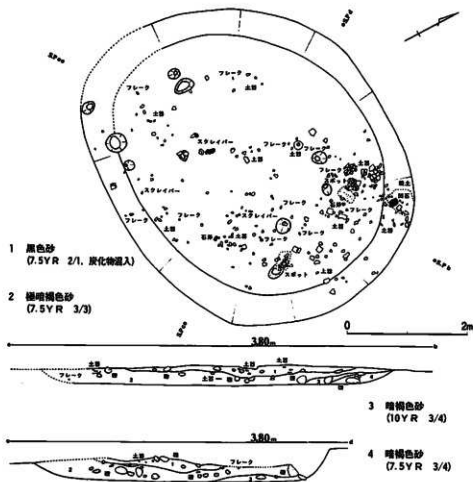


図60 大川遺跡JH-7 検出状況

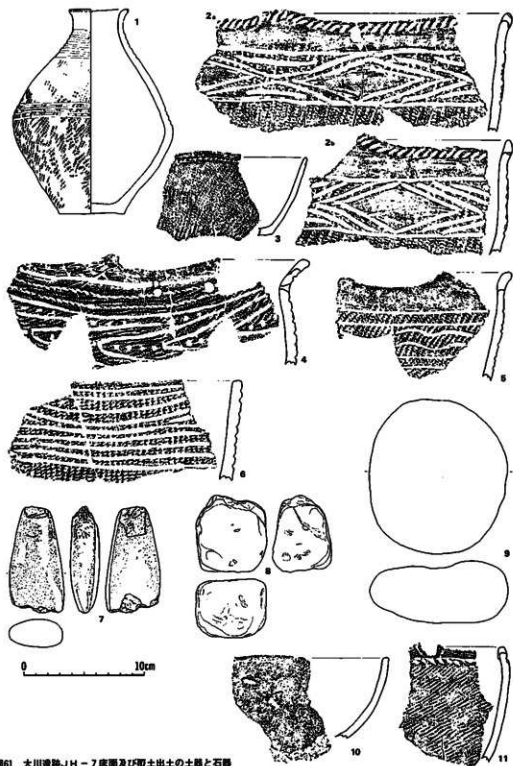


図61 大川遺跡JH-7 床面及び習土出土の土器と石器

表7 大川遺跡JH-7出土遺物一覧

図番号	類別	分組	層位	遺物番号	各部の大きさ (mm) と重さ (g)	備 考
図61-1	土	Ⅴd7	床面	1	口径49mm、底径54mm、高さ171mm	キザミ、横走沈線、L.R斜行縄文、赤色顔料付着、並
図61-2	土	Ⅴe2	床面	192他	高さ 71mm	キザミ、弧線文、欠頭状文、横走沈線、竹管、R.L縦行縄文
図61-3	土	Ⅴa2	床面	45		爪形、L.R斜行縄文、浅鉢
図61-4	土	Ⅴc	床面	180他		突起、輪飾孔、横走沈線、縄線文、平巻竹管、L.R横走縄文
図61-5	土	Ⅴc3	床面他	107他		液状口縁、横走沈線、L.R斜行縄文、深鉢
図61-6	土	Ⅴe2	床面他	28他		弧線文、横走沈線、R.L斜行縄文
図61-7	石	Ⅴa1	床面	43	(89)mm×45mm×23mm、(170)g	玄武岩、磨部及び刃部欠損
図61-8	融石	Ⅴa2	床面	11	63mm×58mm×48mm、280g	赤色地岩
図61-9	凹石	Ⅴb1	床面	81	129mm×114mm×51mm、1020g	安山岩、表面とも焦げている
図61-10	土	Ⅴb2	覆土	—		平縁?、無文、鉢形土器
図61-11	土	Ⅴa2	覆土	—		小突起、連続刺突、L.R斜行縄文
図62-12	土	Ⅴa2	覆土	—		キザミ、押引、L.R斜行縄文
図62-13	土	Ⅴa2	覆土	—		キザミ、連続刺突、横走沈線、L.R斜行縄文
図62-14	土	Ⅴa5	覆土	—		小突起、キザミ、横走沈線、L.R斜行縄文

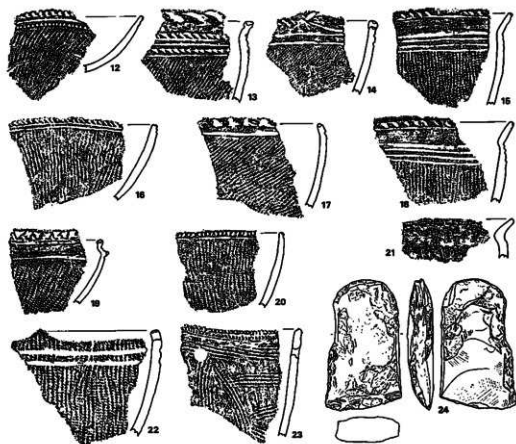


図62 大川遺跡JH-7 覆土出土の土器と石斧

0 10cm

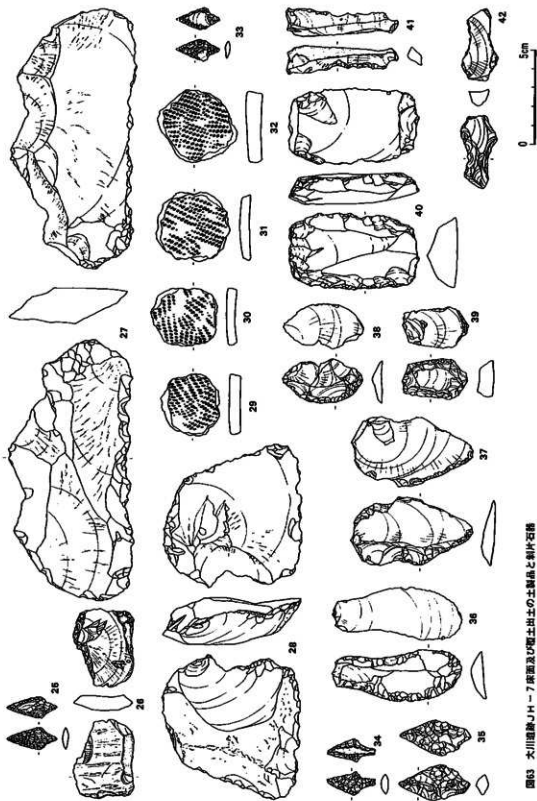


図63 大川遺跡JH-7 灰面及び磁土出土の土製品と削片石類

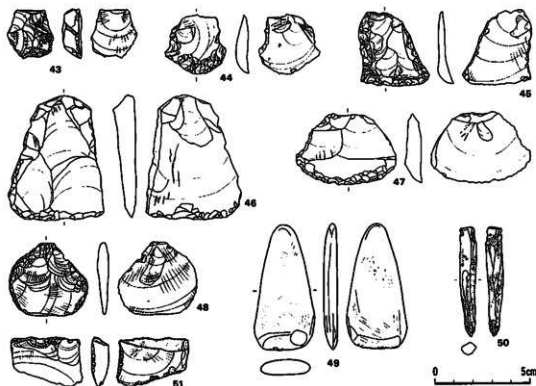


図64 大川遺跡JH-7 覆土出土の各種遺物

図番号	種別	分類	層位	遺物番号	各部の大きさ (mm) と重さ (g)	備 考
図62-15	土器	Va3	覆土	—		平縁?、キザミ、横走沈線、LR縦行縄文
図62-16	土器	Va3	覆土	—		平縁?、キザミ、横走沈線、LR縦行縄文
図62-17	土器	Va3	覆土	—		キザミ、横走沈線、LR斜行縄文
図62-18	土器	Va3	覆土	—		キザミ、横走沈線、LR縦行縄文
図62-19	土器	Va3	覆土	—		キザミ、横走沈線、粘土附、LR斜行縄文
図62-20	土器	Va3	覆土	—		キザミ、横走沈線、LR縦行縄文
図62-21	土器	Vb3	覆土	—		平縁、桑痕文
図62-22	土器	Vc3	覆土	—		小突起、横走沈線、LR縦行縄文
図62-23	土器	Ve4	覆土	—		キザミ、補修孔、帯状縄文、深縁
図62-24	石器	Va	覆土	—	(109)mm×(63)mm×22mm、(260)g	緑色片岩、刃部他端縁部欠損、表面風化の痕跡残存
図63-25	石器	Ib3	床面	86	(26)mm×12mm×3mm、(0.7)g	黒曜石、先端部若干欠損
図63-26	R、F	Ib2	床面	39	33mm×41mm×8mm、12.6g	黒曜石、一部自然面残存、角端を利用、球顆混入
図63-27	削器	Iic2	床面	12	64mm×138mm×18mm、160g	硬質砂岩、横長削片
図63-28	搔器	Iia	床面	17	72mm×74mm×25mm、130g	珧岩、バルブ大きく残存
図63-29	円形土器片	Ig1	覆土	—	31mm×32mm×6mm、8.3g	大洞C <sub>1</sub> 式土器胴部破片利用
図63-30	円形土器片	Ig1	覆土	—	35mm×30mm×5mm、6.7g	大洞C <sub>2</sub> 式土器胴部破片利用
図63-31	円形土器片	Ig1	覆土	—	38mm×37mm×5mm、9.3g	大洞C <sub>2</sub> 式土器胴部破片利用
図63-32	円形土器片	Ig1	覆土	—	42mm×38mm×8mm、13.0g	大洞C <sub>2</sub> 式土器胴部破片利用
図63-33	石器	Ib3	覆土	—	(21)mm×11mm×2mm、0.5g	黒曜石、先端部欠損、表面に1次剥離面残存
図63-34	石器	Ib3	覆土	—	(25)mm×12mm×4mm、(0.8)g	黒曜石、先端部及び側部若干欠損、表面に自然面大く残存
図63-35	石器?	Ib4	覆土	—	(37)mm×18mm×6mm、(3.6)g	黒曜石、基部若干欠損、表面に1次剥離面若干残存
図63-36	搔器?	Iia	覆土	—	68mm×27mm×6mm、19.2g	硬質頁岩

図番号	種別	分類	層位	遺物番号	各部の大きさ (mm) と重さ (g)	備考
図63-37	ナイフ	Ⅱ b	覆土	—	64 mm × 34 mm × 6 mm, 17.0g	黒曜石。基部にバンプ状の残存。基部に自然面残存。角礫層
図63-38	削器	Ⅱ c 2	覆土	—	42 mm × 23 mm × 5 mm, 5.6g	黒曜石
図63-39	掻器	Ⅲ a	覆土	—	34 mm × 21 mm × 8 mm, 7.9g	黒曜石。バンプ除去
図63-40	削器	Ⅱ c 2	覆土	—	69 mm × 40 mm × 16 mm, 58.0g	硬質頁岩。バンプ除去
図63-41	挟入削器	Ⅱ d 1	覆土	—	59 mm × 14 mm × 7 mm, 6.3g	黒曜石。棒状部石利用。自然面大きく残存。縁部破入
図63-42	挟入削器	Ⅱ d 2	覆土	—	19 mm × (38) mm × 10 mm, 5.4g	黒曜石。側縁部欠損。自然面若干残存。角礫を利用
図64-43	掻器	Ⅲ a	覆土	—	25 mm × 24 mm × 10 mm, 6.1g	黒曜石。バンプ残存。自然面残存。縁部若干破入
図64-44	掻器	Ⅲ a	覆土	—	31 mm × 32 mm × 6 mm, 8.6g	黒曜石。基部に自然面残存。縁部若干破入
図64-45	掻器	Ⅲ a	覆土	—	39 mm × 36 mm × 6 mm, 9.1g	黒曜石。バンプ除去。花十摺
図64-46	掻器	Ⅲ a	覆土	—	66 mm × 49 mm × 11 mm, 45.2g	硬質砂岩。側縁部自然面残存。角礫を利用
図64-47	掻器	Ⅲ a	覆土	—	38 mm × 53 mm × 8 mm, 20.2g	硬質砂岩。横長割片。バンプ除去
図64-48	掻器	Ⅲ b ?	覆土	—	38 mm × 41 mm × 6 mm, 8.0g	黒曜石。バンプ除去
図64-49	石斧	V a 1	覆土	—	66 mm × 32 mm × 8 mm, 19.8g	細粒砂岩。刃部のみ研磨
図64-50	棒状原石	I a 2	覆土	—	58 mm × 9 mm × 6 mm, 3.6g	黒曜石の棒状原石の自然面を剥取。著10部参照
図64-51	U. F	I b 3	覆土	—	25 mm × (36) mm × 9 mm, (9.0)g	黒曜石。側縁部欠損。バンプ残存。基部1次削面残存

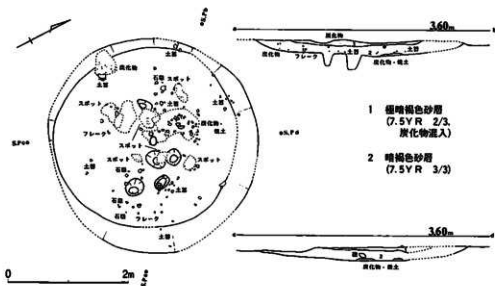


図65 大川遺跡JH-8 検出状況

JH-8 J40・41, K40・41 Grid に跨って検出された。竪穴の上部は削平されており、比較的床面近くでの検出である。竪穴の大きさは、概ね3.55m×3.40mとほぼ円形であり、確認面から床面までの深さは15cm～25cm前後である。竪穴中央部よりやや北側に70cm×45cm、西壁際に40cm×32cm前後の焼土と炭化物の広がりを確認した。柱穴様の小ピットは、中央より南東側に4個(径20cm前後、深さ20～50cm)、北側に1個(径20cm、深さ15cm)、合計5個検出された。特筆すべきは、床面から移しくチップが集中するスポットが6ヶ所検出された。石器作りに携わっていた様子が伺われる。床面出土の土器(小破片)を図示していないが、本竪穴の所属時期は恵山期とみられる。出土遺物総数は765点と少ないが、スポットの遺物を含んでいない。



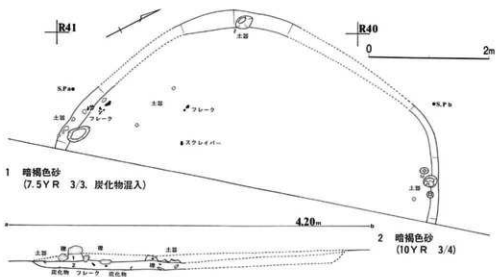


図66 大川遺物JH-9 検出状況

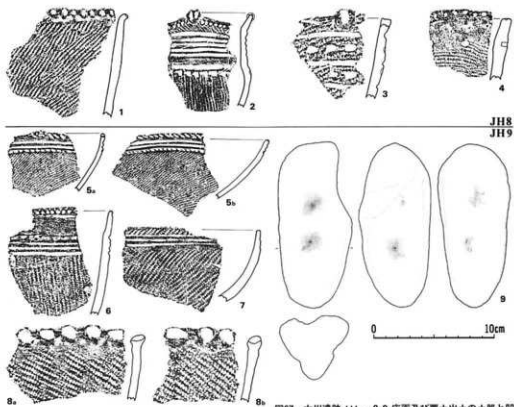


図67 大川遺跡JH-8-9 床面及び覆土出土の土器と凹石

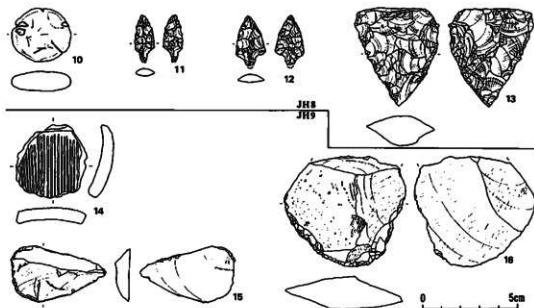


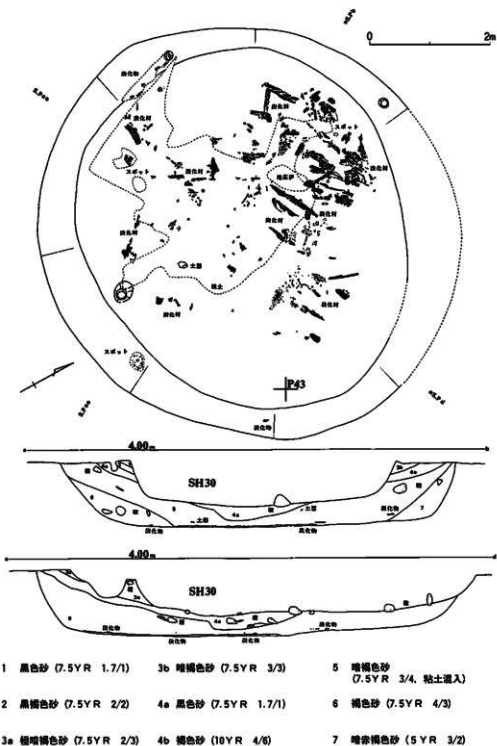
図68 大川遺跡JH-8・9床面及び囲土出土の土製品と制片石器

表8 大川遺跡JH-8(1~4・10~13)・JH-9(5~9・14~16) 出土遺物一覧

図番号	種別	分類	層位	遺物番号	各部の大きさ (mm) と重さ (g)	備考
図67-1	土器	V a 4	2 層	—		キザミ、L.R斜行縄文、深鉢
図67-2	土器	V d 3	2 層	—		小突起、キザミ、横走沈線、連続削突、R.L斜行縦行縄文
図67-3	土器	V e	覆土	—		小突起、キザミ、横走沈線、連続削突、L.R横走縄文
図67-4	土器	V f 1	覆土	—		口縁部彫削突、インサイド突刺文、R.L斜行縄文
図67-5	土器	V a 3	床面他	4他		小突起、キザミ、横走沈線、押引、L.R斜行縄文
図67-6	土器	V a 3	覆土	—		キザミ、押引、横走沈線、L.R縦行縄文
図67-7	土器	V a 3	覆土	—		平線?、横走沈線、L.R斜行縄文
図67-8	土器	V e 7	覆土	—		口縁部指頭凹痕、R.L斜行縄文
図67-9	囲石	V b 3	覆土	—	138 mm × 61 mm × 53 mm, (395) g	安山岩、断面三角形
図68-10	土製品?	?	床面	76		円盤状の粘土が焼けたものか
図68-11	石	I b 3	床面	29	(25) mm × 10 mm × 4 mm, (0.8) g	黒曜石、先端部及び柄部若干欠損、球頭片子器入
図68-11	石	I b 3	床面	115	(26) mm × 16 mm × 4 mm, (1.5) g	黒曜石、柄部欠損
図68-13	削器	I c 1	床面	15	(52) mm × 45 mm × 16 mm, (28.0) g	黒曜石、先端部欠損
図68-14	円形土器片	I g 1	覆土	—	38 mm × 37 mm × 7 mm, 11.6g	筒内式土器口縁部破片を利用、条痕文
図68-15	U・F	I b 3	床面	3	30 mm × 50 mm × 8 mm, 10.6g	頁岩、バルブ残存、第10節参照
図68-16	掘器	I a	覆土	—	(58) mm × (64) mm × (17) mm, (63.0) g	硬質砂岩、表面に自然面欠く痕存、平斧、角端を利用

JH-9 R41, S40・41Gridに跨がって検出された。南側の半分程度が今回の発掘区に入っていないが、径6 m ないし7 m 前後で、円形ないし楕円形のプランを呈すると類推される。柱穴様の小ピットは、北側壁際(径30cm×20cm、深さ32cm)と西側壁際(径40cm×20cm、深さ5cm)が各1個、東側壁際(径10cm~20cm、深さ6cm~16cm)からは3個、合計5個検出された。図示していないが、床面からは恵山式土器の小破片が出土している。出土遺物総数557点。

図69 大川遺跡JH-10検出状況



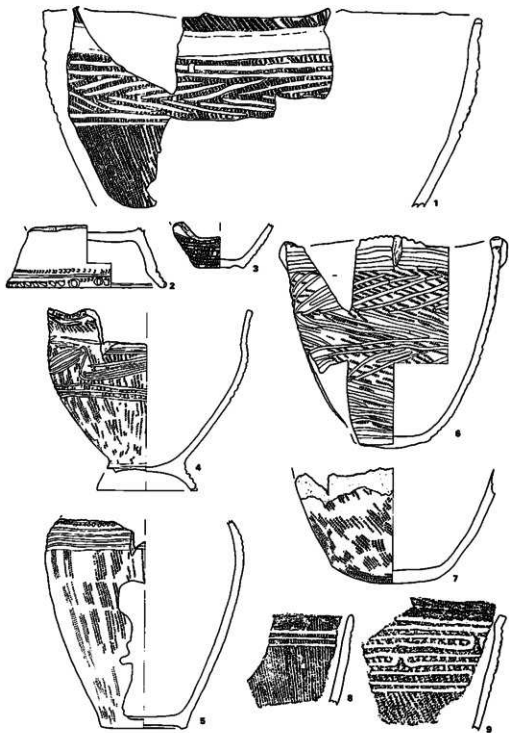


図70 大川遺跡JH-10断面及び掘土出土の土器

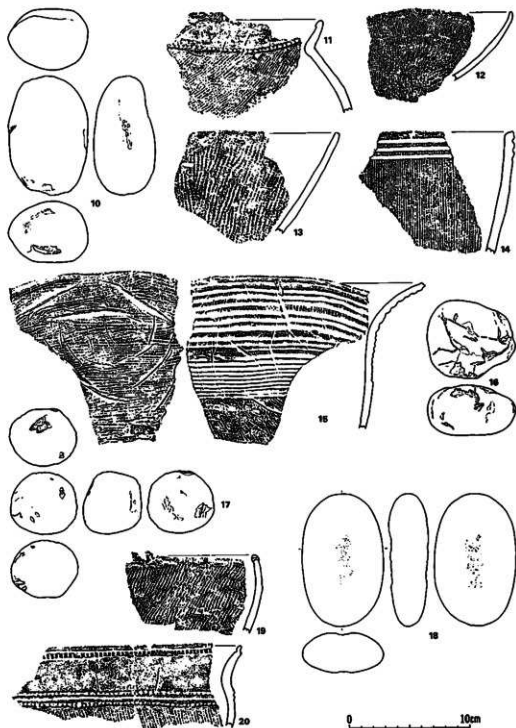


図71 大川遺跡JH-10期土器の土器と石器・凹石

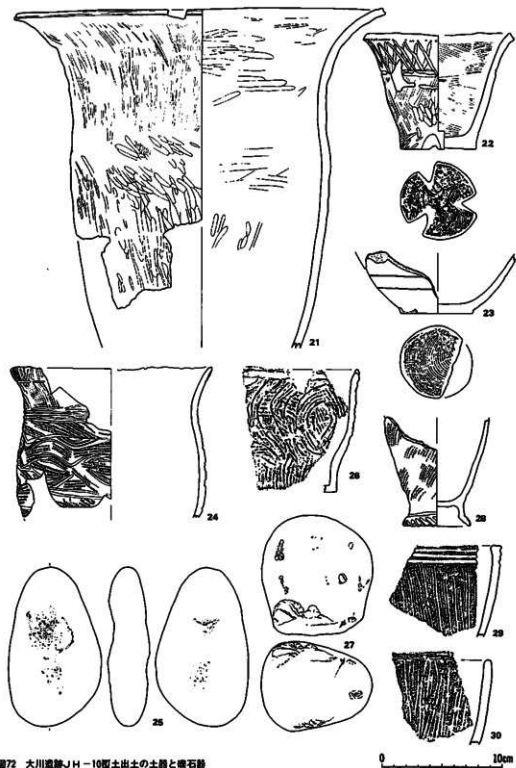


図72 大川遺跡JH-10層土出土の土器と礫石跡

JH-10 O43・44, P43・44, Q43・44と6Gridに跨って検出された。東側はSH-30によって切られているが、7.10m×6.66m程の楕円形プランである。確認面からの深さは、最下部では概ね1mを超える。図69のように床面から柱材を含む炭化材及びヨシ状の炭化物が多量に出土（写真9-11・2）、焼失住居であることが判明した。この炭化材の樹種同定については、本書第5章第4節aを参照願いたい。地床がとみられる焼土範囲は、床面中央部よりやや北側から検出され、70cm×30cm程の広がりを示す。柱穴様の小ピットは、北側の壁際（径15cm、深き26cm）・西側の壁際（径15cm、深き41cm）・南側の壁近く（38cm×20cm、深き18cm）より各1個、合計3個検出された。

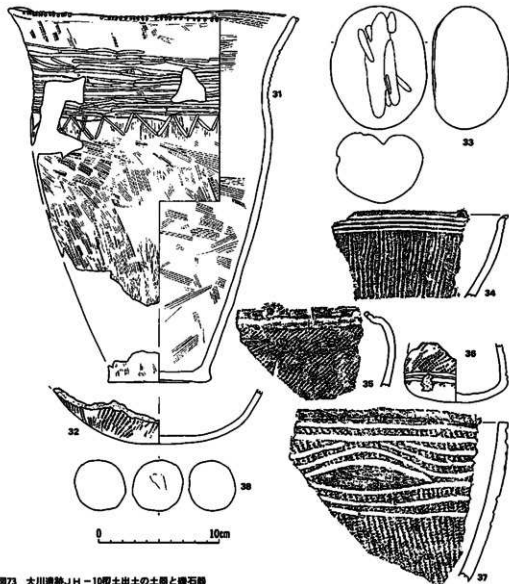


図73 大川遺跡JH-10覆土出土の土器と礎石類

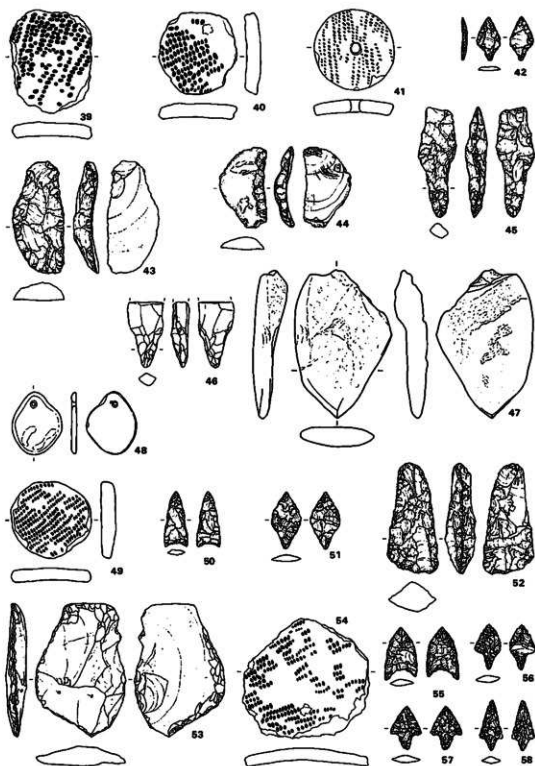


図74 大川遺跡JH-10層土出土の各種遺物

0 5cm



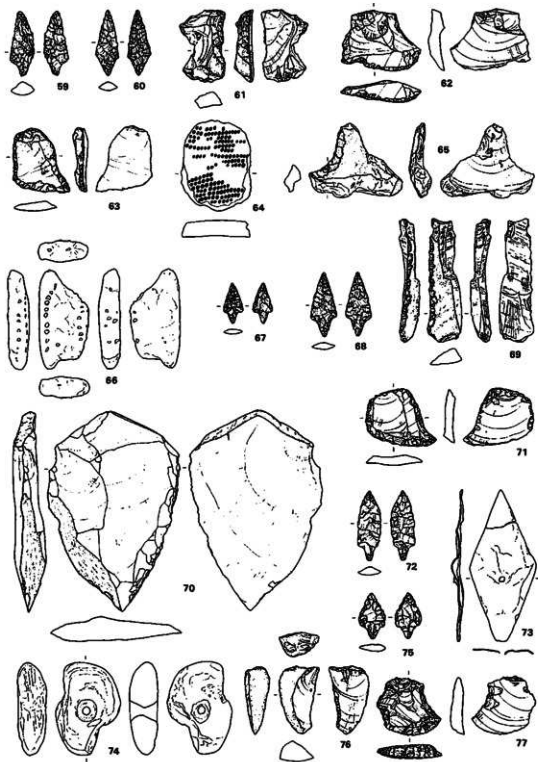


図75 大川遺跡JH-10層土出土の遺物

0 5cm

図69のように、竪穴の北側と西側及び南側に各1ヶ所のチップ及びフレークが集中するスポットが合計3ヶ所確認された。これも石器製作や石器再製等の作業を行なった場であったと断定できる。JH-10からは合計8,268点の遺物が出土している。図70-1・2は床面出土の土器であるが、2は明らかに先行するものであろう。他に1と同タイプの土器が出土しているが、いずれも小破片であり、図示しなかった。図70-6や9は6層出土のⅤ群C類土器である。6層は床面直上の層位でもあり、1と同様に考えてもさしつかえないものとみられる。尚、6はJH-10・JH-11出土の土器が接合したものであり、両竪穴間の強い関連を伺わせるとともに、当該期（港大照寺期）に両竪穴が帰属することの追証ともなった。図70-4は二枚構式土器であり、港大照寺式土器群との同時性を確認する良好な資料となった。図72-21は土師器の甕であり、道内では、まだ決して類例が多いとは言えない貴重な資料である。図72-22はⅢ群a1類土器であり、注目すべきは底部形状である。当該期の一般的な底部よりも、むしろ安定するとも考えられる。同図拓本でもわかるように、底面にも刷毛目が認められる。

表9 大川遺跡JH-10出土遺物一覧

図番号	種別	分類	層位	遺物番号	各部の大きさ (mm) と重さ (g)	備 考
図70-1	土器	Ⅴc	床面	158		小突起、横走沈線、矢筈型状沈線、R斜行・縦行縄文
図70-2	土器	Ⅴa4	床面	25	台径97mm 底径40mm	通線刺突、横走沈線、キヅミ、胎土層、台付土器の台
図70-3	土器	Ⅴd3	6層	—		通線刺突、横走沈線、上付底、R.L.縦行縄文
図70-4	土器	Ⅴa2	6・5層	—	LJ径170mm、高さ150mm	キヅミ、横走沈線、彫刻状L字文、糸底、R.L.斜行・縦行縄文
図70-5	土器	Ⅴd3	6層他	—	底径72mm	通線刺突、横走沈線、R.L.帯状縄文
図70-6	土器	Ⅴc3	6層他	—	LJ径181mm、底径59mm、高さ175mm	4突起、キヅミ、横走・矢筈型状沈線、R.L.横走縄文
図70-7	土器	Ⅴc1	6層	—	底径100mm	丸底、R.L.斜行縄文
図70-8	土器	Ⅴb3	6層	—		平縁？、横走沈線、糸痕文
図70-9	土器	Ⅴe2	6層	—		平縁？、口唇部R.L.縄文、横走沈線、L字文、R.L.斜行縄文
図71-10	燧石	Ⅴa2	6層	—	99 mm × 66 mm × 51 mm、440g	鋭角
図71-11	土器	Ⅴa2	5層	—		通線刺突、口唇部・胴部R.L.斜行縄文、底
図71-12	土器	Ⅴa3	5層	—		平縁、L.R.斜行縄文、浅鉢
図71-13	土器	Ⅴa4	5層	—		平縁、L.R.斜行縄文
図71-14	土器	Ⅴb3	5層	—		平縁？、横走沈線、糸痕文
図71-15	土器	Ⅴa2	5層	—		平縁、横走沈線、刷毛目
図71-16	燧石	Ⅴa2	5層	—	64 mm × 74 mm × 42 mm、280g	石英閃緑斑岩
図71-17	燧石	Ⅴa2	5層	—	51 mm × 55 mm × 47 mm、190g	石英閃緑斑岩
図71-18	燧石	Ⅴb2	5層	—	110 mm × 67 mm × 33 mm、335g	安山岩
図71-19	土器	Ⅴa3	4層	—		小突起、L.R.斜行縄文
図71-20	土器	Ⅴb3	4層他	—		平縁？キヅミ、通線刺突、横走沈線、糸痕文
図72-21	土器	Ⅲ	4・3層他	—		土師器、刷毛目、ヘラミガキ
図72-22	土器	Ⅲa1	4層	—	LJ径120mm、底径62mm、高さ96mm	平縁、キヅミ、彫刻状沈線、丸底刷毛目、底部切込
図72-23	土器	Ⅲb4	5・4層	—	底径59mm	内黒灰、糸切底
図72-24	土器	Ⅴd5	4・2層他	—		キヅミ、R.L.縦行・帯状縄文、横走・彫刻状沈線・糸痕
図72-25	燧石	Ⅴb2	4層	—	131 mm × 77 mm × 33 mm、450g	安山岩
図72-26	土器	Ⅴe3	3層	—	高さ102mm	小突起、彫刻状沈線、刺突
図72-27	燧石	Ⅴa2	3層	—	99 mm × 92 mm × 74 mm、955g	花崗斑岩
図72-28	土器	Ⅴa2	2層	—	底径55mm	L.R.斜行縄文、横走沈線、キヅミ、台付浅鉢

図番号	種別	分類	層位	遺物番号	各部の大きさ (mm) と重さ (g)	備 考
図72-29	土 器	Ⅱb 3	2 層	—	—	平縁、横走沈線、条痕、深鉢
図72-30	土 器	Ⅱb 3	2 層	—	—	平縁、条痕、深鉢
図73-31	土 器	Ⅱa 3	2 層	—	口径242mm、底径86mm、高さ310mm	キズミ、横走・縦溝状沈線、赤黒帯目、底面凹凸
図73-32	土 器	Ⅱc 1	1 層	—	—	L.R斜行縄文、丸底、浅鉢
図73-33	矢筈筒	Ⅱa	1 層	—	102 mm × 80 mm × 60 mm、340g	安山岩?、表面褐色
図73-34	土 器	Ⅱa 3	覆土	—	—	小突起、横走沈線、R.L縦行縄文
図73-35	土 器	Ⅱa 3	覆土	—	—	小突起、L.R斜行縄文
図73-36	土 器	Ⅱa 3	覆土	—	底径85mm	横走沈線、L.R斜行縄文、丸底
図73-37	土 器	Ⅱc 2	覆土	—	—	平縁、横走沈線、弧線文、R.L縦行縄文
図73-38	磁 石	Ⅱa 2	覆土	—	41 mm × 43 mm × 38 mm、100g	安山岩
図74-39	円形土器片	Ⅱg 1	6 層	—	55 mm × 43 mm × 8 mm、19.8g	大洞C1式土器割部破片利用、R.L斜行縄文
図74-40	円形土器片	Ⅱg 1	6 層	—	43 mm × 41 mm × 7 mm、15.4g	大洞C1式土器割部破片利用、L.R斜行縄文
図74-41	円形土器片	Ⅱg 2	6 層	—	42 mm × 42 mm × 7 mm、14.2g	大洞C2式土器割部破片利用、L.R縦行縄文
図74-42	石 鏡	Ⅱb 3	6 層	—	(23) mm × 12 mm × 2 mm、(0.7) g	黒曜石、柄部欠損若干欠損、表面に大きく1次割断面残存
図74-43	ナイフ	Ⅱb	6 層	—	(59) mm × 27 mm × 9 mm、(18.2) g	硬質頁岩、基部欠損?
図74-44	削 器	Ⅱc 2	6 層	—	42 mm × 23 mm × 6 mm、7.0g	黒曜石、自然面大きく残存、刃部を利用、琢磨面入
図74-45	石 鏡	Ⅱa 3	6 層	—	58 mm × 19 mm × 8 mm、10.2g	硬質頁岩
図74-46	石 鏡	Ⅱa 3	6 層	—	(34) mm × (8) mm × (6) mm、(6.1) g	硬質砂岩、つまみ部平欠
図74-47	石 鏡	Ⅱb	6 層	—	(73) mm × (51) mm × (10) mm、(47.4) g	砂岩、基部欠損
図74-48	有孔石製品	Ⅱa 10	6 層	—	33 mm × 26 mm × 2 mm、3.8g	硬質砂岩、両穴
図74-49	円形土器片	Ⅱg 1	5 層	—	40 mm × 43 mm × 7 mm、14.4g	大洞C1式土器割部破片利用、L.R斜行縄文
図74-50	石 鏡	Ⅱb 2	5 層	—	29 mm × 12 mm × 2 mm、1.0g	黒曜石、被熱、琢磨面入
図74-51	石 鏡	Ⅱb 4	5 層	—	(30) mm × 15 mm × 3 mm、1.2g	黒曜石、両端部とも若干欠損
図74-52	ナイフ	Ⅱb	5 層	—	59 mm × 28 mm × 16 mm、21.0g	砂岩
図74-53	ナイフ	Ⅱb	5 層	—	70 mm × 47 mm × 10 mm、35.6g	硬質砂岩、バルブ除去、横長割片
図74-54	円形土器片	Ⅱg 1	4 層	—	62 mm × 66 mm × 6 mm、31.6g	大洞C1式土器割部破片利用、L.R斜行縄文
図74-55	石 鏡	Ⅱb 2	4 層	—	29 mm × 17 mm × 3 mm、1.1g	黒曜石
図74-56	石 鏡	Ⅱb 3	4 層	—	24 mm × 13 mm × 3 mm、0.8g	黒曜石、裏面に1次割断面大きく残存
図74-57	石 鏡	Ⅱb 3	4 層	—	23 mm × 16 mm × 4 mm、0.9g	黒曜石
図74-58	石 鏡	Ⅱb 3	4 層	—	26 mm × (12) mm × 3 mm、(0.7) g	黒曜石、側部欠損
図75-59	石 鏡	Ⅱb 3	4 層	—	34 mm × 12 mm × 7 mm、2.1g	黒曜石、重、琢磨面入
図75-60	石 鏡	Ⅱb 4	4 層	—	35 mm × 13 mm × 4 mm、1.3g	黒曜石、被熱
図75-61	削 器	Ⅱc 2	4 層	—	38 mm × 23 mm × 7 mm、8.4g	黒曜石、自然面大きく残存、刃部利用
図75-62	搔 器	Ⅱa	4 層	—	34 mm × 42 mm × 6 mm、10.8g	黒曜石
図75-63	ナイフ	Ⅱb	4 層	—	39 mm × 31 mm × 5 mm、6.8g	硬質頁岩、バルブ残存
図75-64	円形土器片	Ⅱg 1	3 層	—	48 mm × 37 mm × 8 mm、16.4g	大洞C1式土器割部破片利用、L.R斜行縄文
図75-65	挟入削器	Ⅱd 3	3 層	—	39 mm × 49 mm × 9 mm、14.4g	黒曜石、自然面大きく残存、刃部利用
図75-66	土 鏡 品	Ⅱi 9	2 層	—	52 mm × 26 mm × 11 mm、12.4g	透絵刺突、黒化銅器、胎土に長石・石英多い
図75-67	石 鏡	Ⅱb 3	2 層	—	21 mm × 10 mm × 2 mm、0.4g	黒曜石、花十勝
図75-68	石 鏡	Ⅱb 3	2 層	—	34 mm × 14 mm × 3 mm、1.2g	黒曜石
図75-69	削 器	Ⅱc 2	2 層	—	(64) mm × 17 mm × 7 mm、(9.1) g	黒曜石、自然面残存、柄部石利用、基部及び先端部欠損
図75-70	削 器	Ⅱc 2	2 層	—	105 mm × 69 mm × 12 mm、115g	硬質砂岩、基部及び先端部に自然面残存、刃部利用
図75-71	ナイフ	Ⅱb	2 層	—	33 mm × 37 mm × 5 mm、7.0g	黒曜石、バルブ除去、花十勝
図75-72	石 鏡	Ⅱb 3	1 層	—	37 mm × 12 mm × 4 mm、1.5g	黒曜石
図75-73	青銅製品	X 110	1 層	—	(79) mm × 30 mm × 4 mm、(4.9) g	有孔、先端部破損
図75-74	有孔石製品	Ⅱa 6	1 層	—	48 mm × 34 mm × 15 mm、18.0g	石炭、両挟り
図75-75	石 鏡	Ⅱb 3	覆土	—	24 mm × 14 mm × 3 mm、0.9g	黒曜石、1次割断面残存
図75-76	U、F	Ⅱb 3	覆土	—	36 mm × 19 mm × 10 mm、7.7g	黒曜石、自然面大きく残存、刃部利用、帯10部参照
図75-77	搔 器	Ⅱa	覆土	—	31 mm × 30 mm × 6 mm、7.5g	黒曜石、バルブ残存



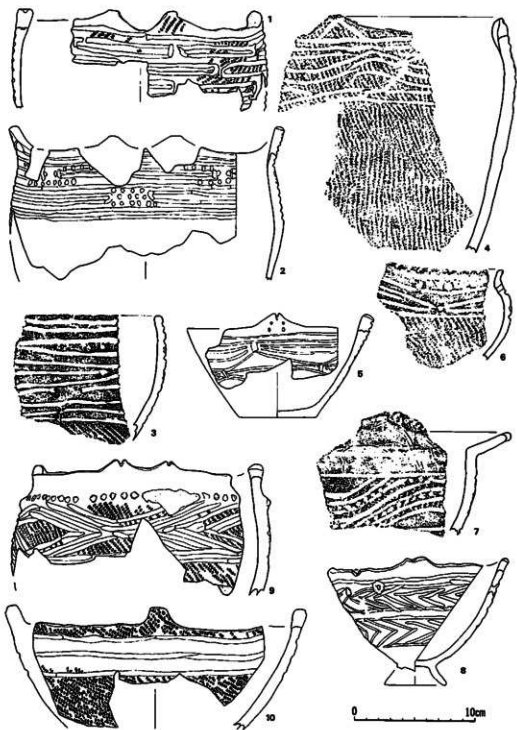


図77 大川遺跡JH-11層出土の縄文晩期末・統縄文期の土器

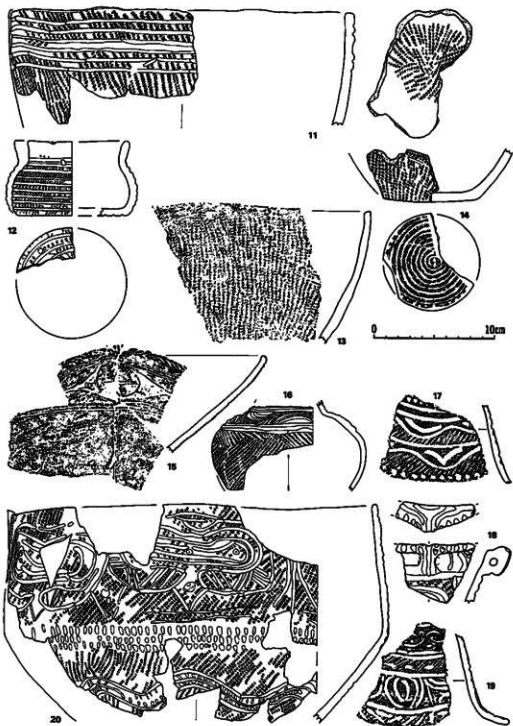


図78 大川遺跡JH-11層土出土の縄文晩期・統縄文期の土器

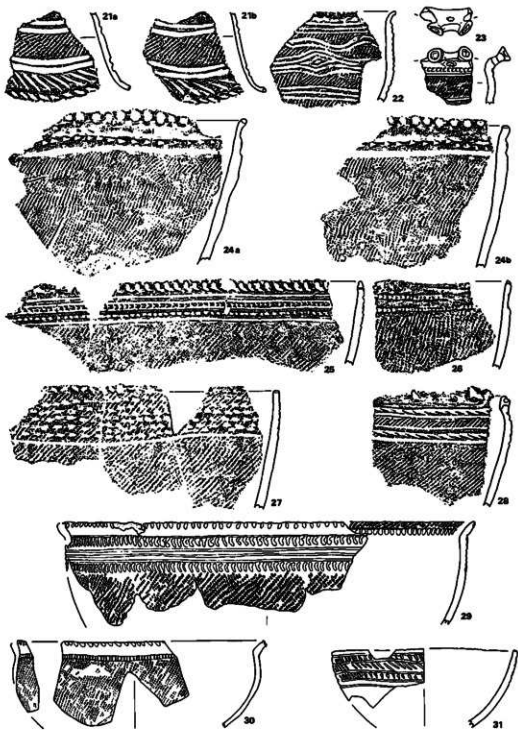


図79 大川遺跡JH-11層出土の縄文晩期前葉の土器

0 10cm



図90 大川遺跡JM-11層出土の縄文晩期の土器



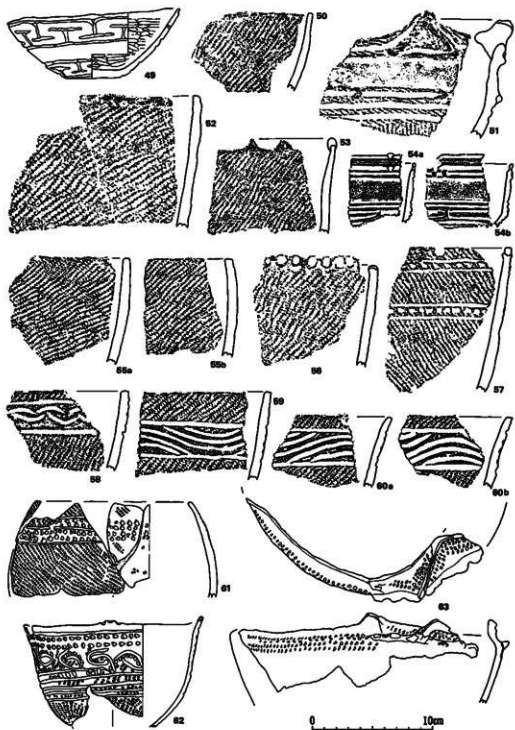


図61 大川遺跡JH-11層出土の縄文晩期の土器

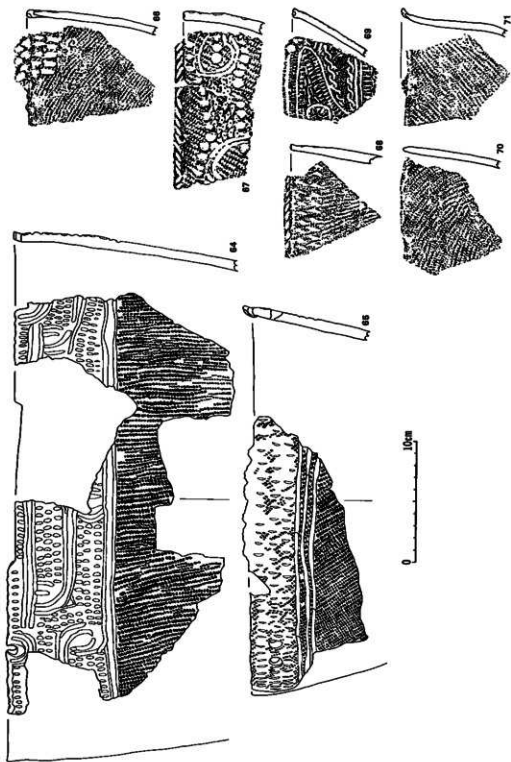


図82 大川遺跡JH-11層出土の縄文時代前期の土器

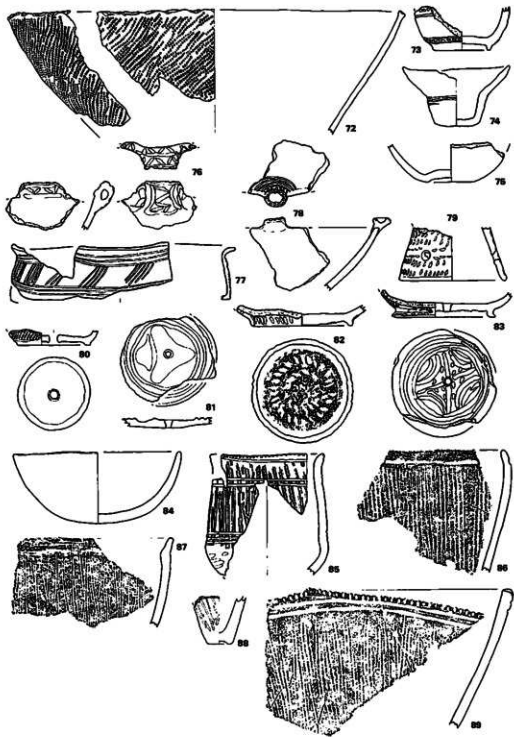


図83 大川遺跡JH-11層土出土の縄文晩期の土器

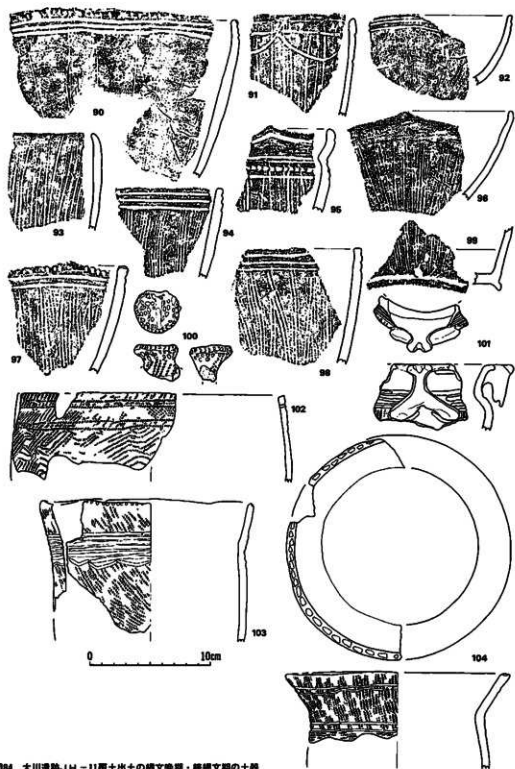


図84 大川遺跡JH-11層出土の縄文晩期・縄縄文期の土器

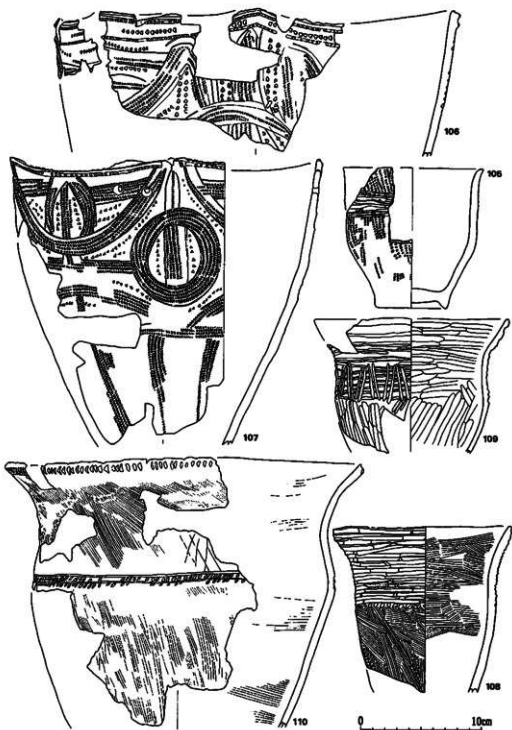


図85 大川遺跡JH-11 壱土出土の統純文期・徳文期の土器

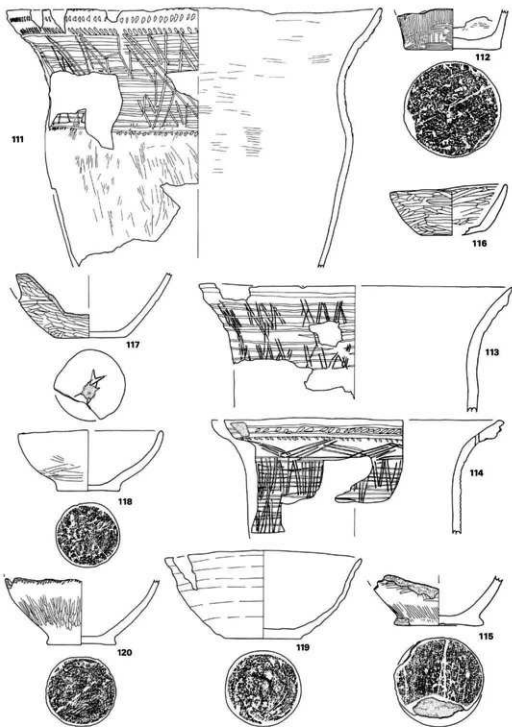
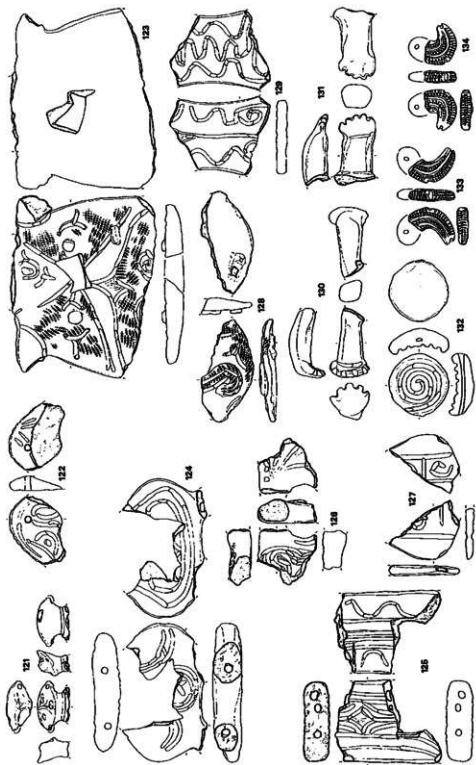


図96 大川遺跡JH-11層出土の土器



0 10cm

図27 大川遺跡JH-11層出土の土器・イモガイ状土器品他の各種土器品

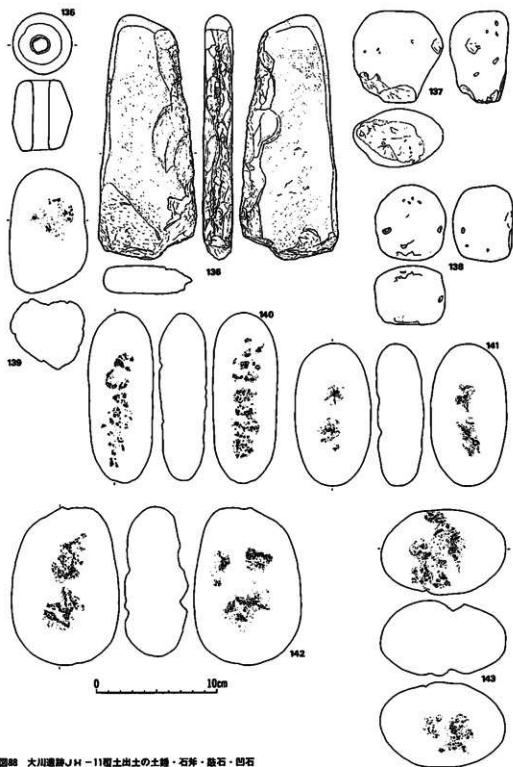


図88 大川遺跡JH-11層出土の土器・石斧・磨石・凹石



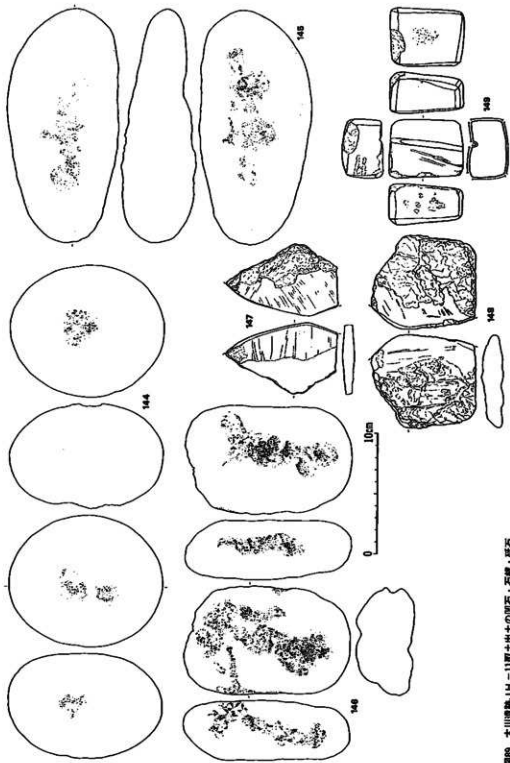


図89 大川遺跡の片一川層土出土の化石・地層・地石

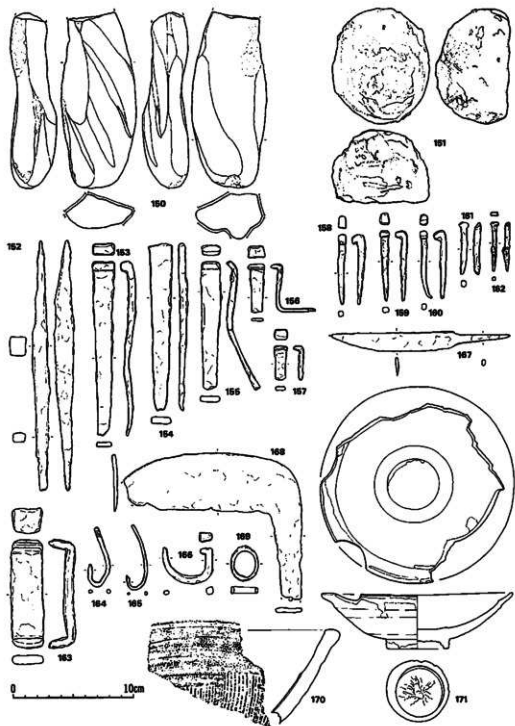


図90 大川遺跡JH-11期土出土の砥石・磨石・鉄製品・陶磁器

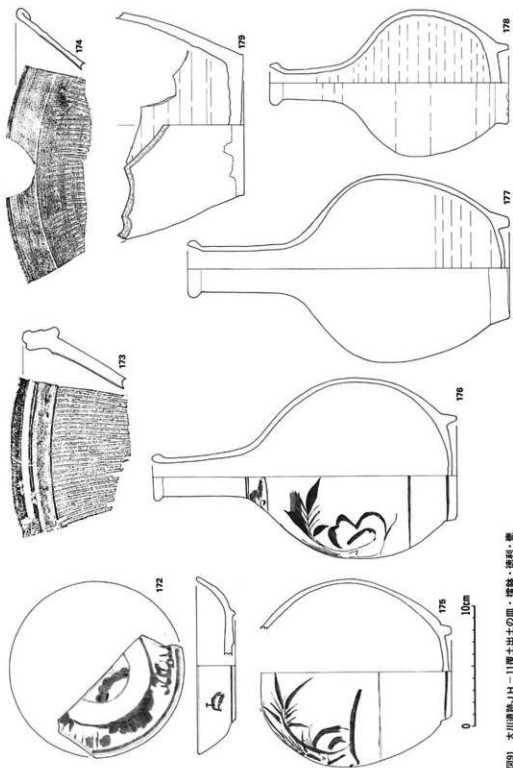


図91 大川遺跡J1片 - 11層土出土の皿・甗鉢・甗鉢・徳利・甗

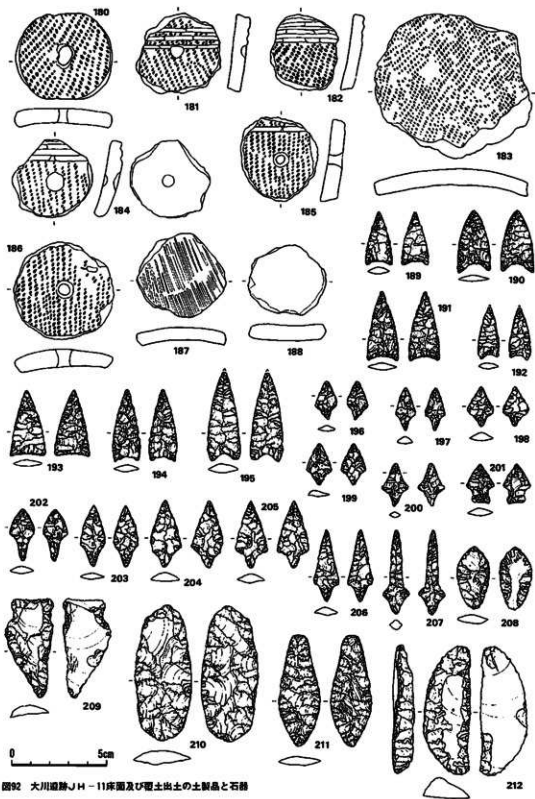


図92 大川遺跡JH-11床面及び習土出土の土製品と石器

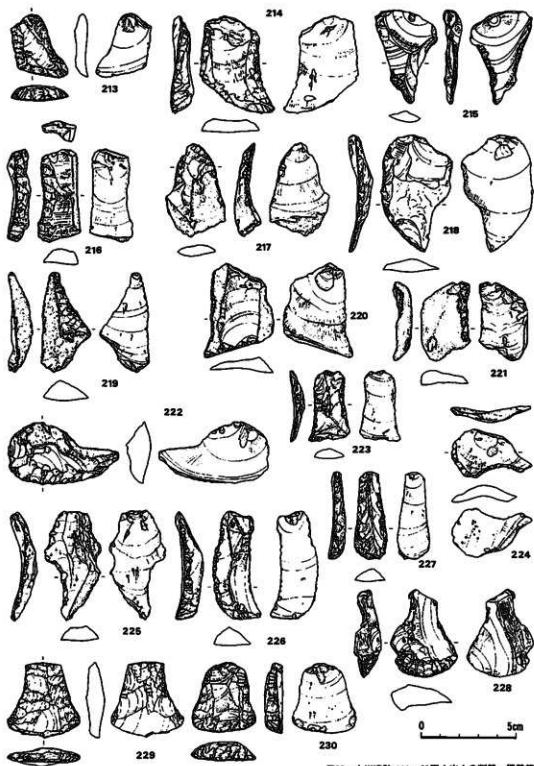


图93 大川遺跡JH-11層出土の附器・須石等

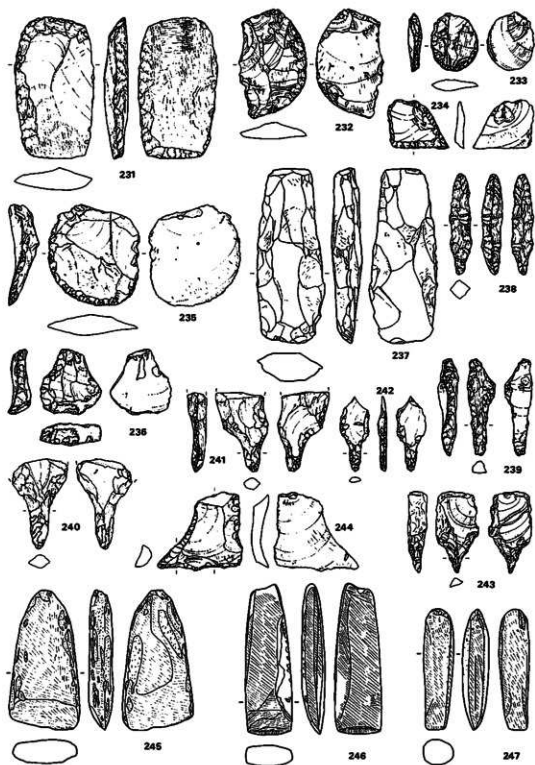


図94 大川遺跡JH-11層土出土の石器各種

0 5cm

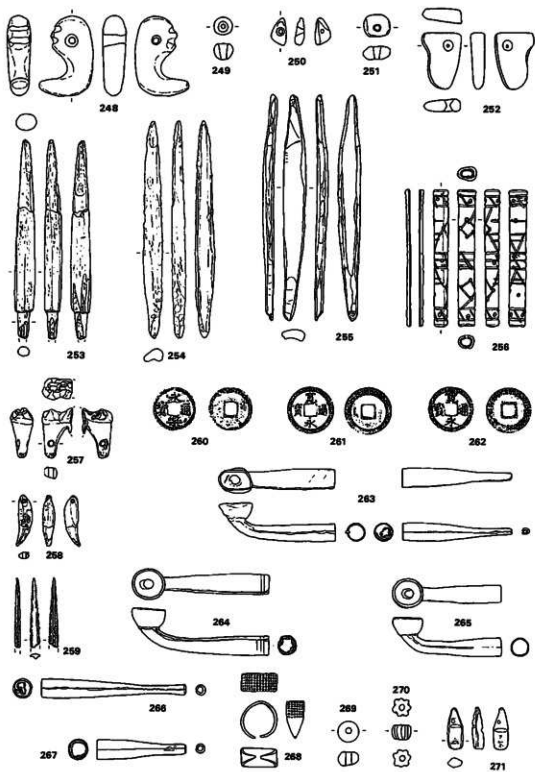


図95 大川遺跡JH-II期土出土の各種遺物

0 5cm

JH-11 P45・46・47, Q45・46・47 Gridに跨って検出された。径は概ね7.30m×7.10m  
 でほぼ円形プランを呈し、壁高は50～80cm程度であるが、最深部は確認面より約1.60mもある。

図76のようにベンチ状構造を有する竪穴であるが、明瞭に確認できたのは南西部分のみに限定  
 される。柱穴様の小ピットは合計18個確認された。径15～50cm、深さ5～36cm程のピットである。  
 竪穴の北側(概ね50cm×50cm)及び東側(概ね90cm×70cm)から地床炉とみられる焼土範囲が確  
 認された。更に、東側の焼土の南東1m程のところには、チップ・フレークが集中するスポット(  
 径80cm×50cm)が1ヶ所確認された。

本竪穴出土遺物の総数は44,995点であった。1遺跡の遺物総数ではなく、1竪穴住居の遺物総  
 数である。これらのほとんどが覆土遺物であるが、非常に重要な遺物が多数出土しているので後  
 述(第6章第1節)する。床面出土の遺物で図示したものは1点しかないが、港大照寺式土器の  
 破片が伴っている。

表10 大川遺跡JH-11出土遺物一覧

図番号	種別	分類	層位	遺物番号	各部の大きさ(mm)と重さ(g)	備考
図77-1	土器	Vc2	覆土	—	径210mm	円筒部竹管、流状突起、横走沈線、工字文、L.R斜行縄文 多突起?、横走沈線、粘土層、刺突、ミダキ、舟状器片
図77-2	土器	Vc2	覆土他	—		
図77-3	土器	Vc2	覆土	—		弧線文、横走沈線、竹管文、R.L斜行縄文 突起、弧線文、横走沈線、R.L縦行縄文
図77-4	土器	Vc2	覆土	—		円筒部沈線、横走沈線、変形工字文、浅鉢 キザミ、有孔、横走沈線、円形刺突、R.L斜行縄文 突起、円筒部、横走沈線、弧線文、溝部凹線、R.L縄文 突起、浅鉢片、横走沈線、矢羽状沈線、右付土器 下部の突起、円筒部L縄文、溝部刺突、弧線、R.L斜行縄文 突起、横走沈線、R.L斜行縄文
図77-5	土器	Vc2	覆土	—		
図77-6	土器	Vc2	覆土	—		
図77-7	土器	Vc2	覆土	—		
図77-8	土器	Vc3	覆土	—	径150mm、底径51mm、高さ106mm	
図77-9	土器	Vc2	覆土	—	径190mm	
図77-10	土器	Vc3	覆土	—		
図78-11	土器	Vc3	覆土	—		平鉢、横走沈線、R.L縦行縄文
図78-12	土器	Vc3	覆土	—	高さ62mm	平鉢、横走沈線、R.L縦行縄文、底部同心円状沈線?
図78-13	土器	Vc7	覆土	—		平鉢、R.L縦行縄文
図78-14	土器	Vc3	覆土	—	径80mm	L.R斜行縄文、底面溝条状沈線、底面連続刺突
図78-15	土器	Va1	覆土	—		円筒キザミ、横走沈線、連続刺突、片口深鉢 横走沈線、弧線文、L.R・R.L斜行縄文
図78-16	土器	Va1	覆土	—		成形刺突、横走沈線、弧線文、L.R斜行縄文、赤色顔料付 キザミ、沈線、把手
図78-17	土器	Va1	覆土	—		
図78-18	土器	Va1	覆土	—		
図78-19	土器	Va1	覆土	—		横走沈線、連続刺突、弧線文、L.R斜行縄文、赤色顔料付 沈線、連続刺突、L.R斜行縄文
図78-20	土器	Va1	覆土	—		
図79-21	土器	Va2	覆土	—		横走沈線、L.R斜行縄文、赤色顔料付片、右付土器の右 横走 - 液状沈線、弧線文、L.R斜行縄文 突起、有孔、溝部刺突、横走沈線、L.R斜行縄文 キザミ、連続刺突、横走沈線、L.R斜行縄文 キザミ、横走沈線、連続刺突、L.R斜行縄文 押引、L.R縦行縄文
図79-22	土器	Va2	覆土	—		
図79-23	土器	Va3	覆土	—		
図79-24	土器	Va3	覆土	—		
図79-25	土器	Va3	覆土	—		
図79-26	土器	Va3	覆土	—		
図79-27	土器	Va3	覆土	—		
図79-28	土器	Va3	覆土	—		
図79-29	土器	Va3	覆土	—		
図79-30	土器	Va3	覆土	—		キザミ、連続系形、横走沈線、L.R斜行縄文 キザミ、押引、L.R斜行縄文



図番号	種別	分類	層位	遺物番号	各部の大きさ (mm) と重さ (g)	備考
I479-31	土器	Va 3	覆土	—	—	キザミ、横走沈線、連続刺突、浅鉢
I480-32	土器	Va 4	覆土	—	—	小突起、横走沈線、R.L.斜行縄文
I480-33	土器	Va 4	覆土	—	—	横走沈線、R.L.斜行縄文
I480-34	土器	Va 4	覆土	—	—	キザミ、横走沈線、R.L.斜行縄文
I480-35	土器	Va 4	覆土	—	—	キザミ、横走沈線、L.R.斜行縄文
I480-36	土器	Va 4	覆土	—	—	平縁、横走沈線、R.L.斜行縄文、浅鉢
I480-37	土器	Va 4	覆土	—	—	平縁、横走沈線、L.R.斜行縄文
I480-38	土器	Va 4	覆土	—	—	平縁、横走沈線、R.L.斜行縄文
I480-39	土器	Va 3	覆土	—	—	横走沈線、L.R.斜行縄文
I480-40	土器	Va 3	覆土	—	—	横走沈線、L.R.斜行縄文
I480-41	土器	Va 4	覆土	—	—	キザミ、横走沈線、無文、4突起
I480-42	土器	Vb 3	覆土	—	—	縦の沈線なしは赤版、R.L.斜行縄文、超深鉢?
I480-43	土器	Va 4	覆土	—	—	平縁、縄線文、R.L.斜行縄文
I480-44	土器	Va 4	覆土	—	—	キザミ、縄線文、R.L.斜行縄文
I480-45	土器	Va 2	覆土	—	—	キザミ、L.R.斜行縄文
I480-46	土器	Va 4	覆土	—	—	キザミ、横走沈線、L.R.斜行縄文
I480-47	土器	Va 3	覆土	—	—	平縁、連続刺突、横走沈線、赤版、赤版付、L.R.斜行縄文、L.R.斜行縄文、朱塗浅鉢
I480-48	土器	Va 3	覆土	—	—	—
I481-49	土器	Va 4	覆土	—	—	工字文、浅鉢
I481-50	土器	Va 4	覆土	—	—	平縁、L.R.斜行縄文
I481-51	土器	Va 5	覆土	—	—	突起、横走沈線、R.L.斜行縄文
I481-52	土器	Va 4	覆土	—	—	平縁、L.R.斜行縄文
I481-53	土器	Va 4	覆土	—	—	突起、L.R.斜行縄文
I481-54	土器	Va 5	覆土	—	—	細指孔、横走沈線、工字文、いびき罫、浅鉢
I481-55	土器	Va 4	覆土	—	—	平縁、L.R.斜行縄文
I481-56	土器	Va 4	覆土	—	—	キザミ、L.R.斜行縄文
I481-57	土器	Va 5	覆土	—	—	横走沈線、連続刺突、R.L.斜行縄文
I481-58	土器	Va 5	覆土	—	—	平縁、横走沈線、弧線文、L.R.斜行縄文
I481-59	土器	Va 5	覆土	—	—	平縁、横走沈線、弧線文、L.R.斜行縄文
I481-60	土器	Va 5	覆土	—	—	平縁、横走沈線、弧線文、L.R.斜行縄文
I481-61	土器	Vb 2	覆土	—	—	平縁、横走沈線、連続刺突、R.L.斜行縄文
I481-62	土器	Vb 2	覆土	—	—	突起、横走沈線、連続刺突、弧線文、L.R.斜行縄文
I481-63	土器	Vb 2	覆土	—	—	連続刺突、異形土器?
I482-64	土器	Vb 2	覆土	—	—	キザミ、爪形文、沈線、弧線、R.L.斜行縄文
I482-65	土器	Vb 2	覆土	—	—	突起、細指孔、爪形、横走沈線、R.L.斜行縄文
I482-66	土器	Vb 2	覆土	—	—	突起、キザミ、刺突?、R.L.斜行縄文
I482-67	土器	Vb 2	覆土	—	—	キザミ、爪形、沈線、L.R.斜行縄文
I482-68	土器	Vb 2	覆土	—	—	キザミ、連続刺突、R.L.斜行縄文
I482-69	土器	Vb 2	覆土	—	—	口唇部沈線、連続刺突、S字状沈線
I482-70	土器	Vb 2	覆土	—	—	平縁?、R.L.斜行縄文
I482-71	土器	Vb 2	覆土	—	—	突起、L.R.斜行縄文
I483-72	土器	Vb 2	覆土	—	—	口唇部キザミ、L.R.斜行縄文
I483-73	土器	Vb 2	覆土	—	底径47mm	連続刺突、横走沈線、無文、上:底
I483-74	土器	Vb 2	覆土	—	底径38mm	平縁、無文、小型土器
I483-75	土器	Vb 2	覆土	—	—	無文、上:底
I483-76	土器	Vb 2	覆土	—	—	把手、扇状沈線
I483-77	土器	Vb 2	覆土	—	—	横走沈線、斜線、無文、浅鉢
I483-78	土器	Vb 2	覆土	—	—	弧線文、連続刺突、無文、浅鉢
I483-79	土器	Vb 2	覆土	—	—	爪形、有孔、台付土器の台部

図番号	種別	分類	解位	遺物番号	各部の大きさ (mm) と重さ (g)	備 考
図83-80	土 器	V b 2	甌 土	—	底径60mm	底部有孔, L R斜行縄文, 横走沈線
図83-81	土 器	V b 2	甌 土	—		底部有孔, 同心円状沈線
図83-82	土 器	V b 2	甌 土	—	底径83mm	連続刺突, 上付底
図83-83	土 器	V b 2	甌 土	—	底径85mm	L R斜行縄文, 同心円状沈線, 弧線文, 底部有孔
図83-84	土 器	V b 2	甌 土	—	11径139mm, 高さ58mm	平縁, 周文, 沈線
図83-85	土 器	V b 3	甌 土	—		キザミ, 横走沈線, 条痕文
図83-86	土 器	V b 3	甌 土	—		平縁, 横走沈線, 条痕文
図83-87	土 器	V b 3	甌 土	—		平縁, 条痕文
図83-88	土 器	V b 3	甌 土	—	底径21mm	上付底, 条痕文
図83-89	土 器	V b 3	甌 土	—		突起, キザミ, 横走沈線, 条痕文, 卵と同一個体
図84-90	土 器	V b 3	甌 土	—		キザミ, 横走沈線, 条痕文
図84-91	土 器	V b 3	甌 土	—		平縁?, 条痕文 (沈線文)
図84-92	土 器	V b 3	甌 土	—		平縁, 横走沈線, 条痕文
図84-93	土 器	V b 3	甌 土	—		平縁, 条痕文
図84-94	土 器	V b 3	甌 土	—		平縁, 横走沈線, 条痕文
図84-95	土 器	V b 3	甌 土	—		突起, 横走沈線, 連続刺突, 条痕文
図84-96	土 器	V b 3	甌 土	—		突起, 条痕文
図84-97	土 器	V b 3	甌 土	—		突起, キザミ, 横走沈線, 条痕文, 卵と同一個体
図84-98	土 器	V b 3	甌 土	—		平縁, 横走沈線, 条痕文
図84-99	土 器	V b 3	甌 土	—		条痕文, 横走沈線, 上付底
図84-100	土 器	V b 2	甌 土	—		円形刺突, 連続爪形, 沈線, L R縦行縄文, 突起
図84-101	土 器	V a 4	甌 土	—		把手, 横走沈線, R L縦行縄文
図84-102	土 器	V c 1	甌 土	—		円形・円形部L R斜行縄文, 円形刺突(爪形), 連続
図84-103	土 器	V d 7	甌 土	—	11径176mm	キザミ, 横走・鋸歯状沈線, R L斜行縄文
図84-104	土 器	V d 4	甌 土	—		口唇部連続刺突, 横走・鋸歯状沈線, R L帯状縄文
図85-105	土 器	V e 1-2	甌 土	—	底径59mm, 高さ116mm	横走沈線, R L斜行縄文
図85-106	土 器	V e 4	甌 土	—		キザミ, 連続起線, 三角列点, 帯状縄文
図85-107	土 器	V e 4	甌 土	—	11径257mm	キザミ, 連続起線, 三角列点, 帯状縄文
図85-108	土 器	V a 2	甌 土	—	11径148mm	表裏刷毛目, 横走沈線, 連続刺突
図85-109	土 器	V a 3	甌 土	—		凹線文, 沈線文, 鋸歯状沈線文, ヘラミガキ
図85-110	土 器	V a 3	甌 土	—		キザミ, 刷毛目, 連続刺突, 横走沈線
図86-111	土 器	V a 3	甌 土	—	11径310mm	キザミ, 横走沈線, 連続刺突, 表裏刷毛目
図86-112	土 器	V a 3	甌 土	—	底径80mm	刷毛目, 底面襷形痕
図86-113	土 器	V a 3	甌 土	—		凹線文, 刺線文
図86-114	土 器	V a 4	甌 土	—		キザミ, 鋸歯状沈線, 刺線, 横走沈線
図86-115	土 器	V a 4	甌 土	—	底径74mm	刷毛目, 内黒, 底面襷形痕
図86-116	土 器	V b 2	甌 土	—		内黒?
図86-117	土 器	V b 2	甌 土	—	底径60mm	内黒, 横走沈線, 朱塗りの環
図86-118	土 器	V b 5	甌 土	—	底径51mm, 高さ50mm	環
図86-119	土 器	V b 5	甌 土	—	底径63mm, 高さ73mm	環
図86-120	土 器	V b 5	甌 土	—	底径57mm	刺線, 底面襷形痕
図87-121	土 製品	I a 1	甌 土	3	(26)mm×(41)mm×(17)mm	顔部
図87-122	土 製品	I c 5	甌 土	—		有孔, 沈線, 弧線文, 有孔周辺部
図87-123	土 製品	I a 1	甌 土	2・5他	(117)mm×(150)mm×(16)mm	二叉文や弧線文, 両耳・両脚・腹部周縁残存
図87-124	土 製品	I a 3	甌 土	7・15	(114)mm	沈線文・弧線文, 表裏赤色顔料付着, 2孔あり
図87-125	土 製品	I a 3	甌 土	6	(67)mm	沈線文・弧線文, 表裏赤色顔料付着, 3孔あり
図87-126	土 製品	I a 3	甌 土	—		沈線文・弧線文, 釘部周縁?
図87-127	土 製品	I a 3	甌 土	—		沈線文・弧線文, 表裏赤色顔料付着
図87-128	土 製品	I a 3	甌 土	13		二叉文, R L斜行縄文

四番号	種別	分類	層位	遺物番号	各部の大きさ (mm) と重さ (g)	備 考
I487-129	土製品	I a 3	覆土	—	(85)mm×(66)mm×(9)mm	沈積文、表面赤色顔料付否
I487-130	土製品	I b	覆土	—		動物の手ないし足
I487-131	土製品	I b	覆土	4		動物の手ないし足、表面に赤色顔料付否
I487-132	土製品	I i 1	覆土	—	50 mm× 51 mm× 14 mm、 39 g	渦巻状沈線、横孔あり
I487-133	土製品	I i 6	覆土	—		キザミ、押引
I487-134	土製品	I i 6	覆土	—		キザミ、押引
I488-135	土 鏡	?	覆土	—	50 mm× 49 mm× 58 mm、 130 g	ソロバン玉型
I488-136	礫石	Ⅷ b ?	覆土	—	(203)mm× 79 mm× 24 mm、(650)g	砂岩、扁平打製石器あるいは礫石
I488-137	礫石	Ⅷ a 2	覆土	—	76 mm× 74 mm× 49 mm、 315 g	花崗斑岩
I488-138	礫石	Ⅷ a 2	覆土	—	62 mm× 59 mm× 52 mm、 270 g	花崗斑岩
I488-139	凹石	Ⅷ b 1	覆土	—	103 mm× 63 mm× 62 mm、 345 g	安山岩
I488-140	凹石	Ⅷ b 2	覆土	—	140 mm× 54 mm× 38 mm、 450 g	安山岩
I488-141	凹石	Ⅷ b 2	覆土	—	117 mm× 62 mm× 36 mm、 375 g	安山岩
I488-142	凹石	Ⅷ b 2	覆土	—	129 mm× 88 mm× 52 mm、 525g	安山岩
I488-143	凹石	Ⅷ b 2	覆土	—	103 mm× 70 mm× 60 mm、 465g	安山岩
I489-144	凹石	Ⅷ b 3	覆土	—	127 mm× 109 mm× 84 mm、 1750 g	安山岩
I489-145	凹石	Ⅷ b 2	覆土	—	195 mm× 91 mm× 62 mm、 880 g	安山岩
I489-146	凹石	Ⅷ b 4	覆土	—	138 mm× 88 mm× 49 mm、 595 g	安山岩
I489-147	石 錘	Ⅷ b	覆土	—		砂岩
I489-148	石 錘	Ⅷ b	覆土	—		砂岩
I489-149	矢鏃研磨器	Ⅷ a	覆土	—	61 mm× 48 mm× 30 mm、 160 g	砂岩
I490-150	砥石	Ⅷ c 2	覆土	19	(146)mm× 62 mm× 28 mm、 340 g	細粒砂岩、一部欠損
I490-151	凹石	I c 2	覆土	16	96 mm× 81 mm× 61 mm	石英安山岩、湯鉄鉱沈着、第 3 章第 4 節参照
I490-152	錐	I a	覆土	—	207 mm× 13 mm× 13 mm	
I490-153	船釘	I c	覆土	—	143 mm× 18 mm× 3 mm	鉛曲
I490-154	船釘	I c	覆土	—	138 mm× 20 mm× 5 mm	
I490-155	船釘	I c	覆土	—	106 mm× 17 mm× 4 mm	鉛曲
I490-156	船釘	I c	覆土	—	40 mm× 14 mm× 2 mm	鉛曲
I490-157	船釘	I c	覆土	—	28 mm× 11 mm× 3 mm	
I490-158	和釘	I d	覆土	—	58 mm× 5 mm× 4 mm	
I490-159	和釘	I d	覆土	—	58 mm× 8 mm× 4 mm	
I490-160	和釘	I d	覆土	—	56 mm× 5 mm× 4 mm	
I490-161	和釘	I d	覆土	—	42 mm× 8 mm× 5 mm	
I490-162	和釘	I d	覆土	—	40 mm× 7 mm× 2 mm	
I490-163	鍬	I e	覆土	—	90 mm× 27 mm× 7 mm	
I490-164	釣針	I a	覆土	—	45 mm× 4 mm× 3 mm	
I490-165	釣針	I a	覆土	—	53 mm× 3 mm× 3 mm	
I490-166	鈎	I c	覆土	—	29 mm× 10 mm× 6 mm	
I490-167	刀子	I a 3	覆土	—	(148)mm× 15 mm× 3 mm	刀先若干欠損
I490-168	鎌	I e	覆土	—		刀先及び柄部先端欠損
I490-169	鉄環?	Ⅷ e	覆土	—	121 mm× 48 mm× 4 mm	
I490-170	珠洲片貝	I c 2	覆土	—		
I490-171	鉢	I c	覆土	—	底径55mm、高さ45mm	肥前陶器、蛇ノ目軸光、葦灰釉、18c前半
I491-172	鉢	I b	覆土	—		肥前陶器、蛇ノ目四高台、葦、19c前半
I491-173	鉢	I c	覆土	—		備前系等、光沢のある良好な焼締の、18c後半
I491-174	鉢	I c	覆土	—		葦、小笠原、五輪窯の6段焼、17c半-18c前半
I491-175	鉢	I d	覆土	—	底径75mm	肥前陶器、18c末-幕末
I491-176	鉢	I d	覆土	—	口径39mm、底径96mm、高さ252mm	肥前陶器、18c末-幕末
I491-177	鉢	I d	覆土	—	口径47mm、底径83mm、高さ267mm	肥前陶器、18c末-幕末

図番号	種別	分類	解位	遺物番号	各部の大きさ(mm)と重さ(g)	備考
K91-170	総利	田d	覆上	—	底径65mm, 高さ198mm	肥前磁器, 18c末—幕末
K91-179	変ないし差	田e	覆土	—	底径117mm	東北諸宗, 船輪, 19c中葉
K92-180	内形土器片	I g 2	覆土	—	45 mm × 50 mm × 9 mm, 20.0g	大洞C: 式土器胴部破片利用, R.L.斜行縄文
K92-181	内形土器片	I g 1	覆土	—	45 mm × 44 mm × 7 mm, 16.6g	大洞C: 式土器胴部破片利用, R.L.斜行, 五孔
K92-182	内形土器片	I g 1	覆土	—	40 mm × 35 mm × 6 mm, 11.8g	大洞C: 式土器胴部破片利用, R.L.斜行縄文, 五孔
K92-183	内形土器片	I g 1	覆土	—	77 mm × 82 mm × 9 mm, 59.5g	大洞C: 式土器胴部破片利用, R.L.斜行縄文
K92-184	内形土器片	I g 2	覆土	—	41 mm × 42 mm × 8 mm, 14.0g	大洞C: 式土器胴部破片利用, R.L.斜行縄文, 五孔
K92-185	内形土器片	I g 2	覆土	—	46 mm × 41 mm × 9 mm, 16.0g	大洞C: 式土器胴部破片利用, R.L.斜行縄文, 五孔
K92-186	内形土器片	I g 2	覆土	—	51 mm × 53 mm × 9 mm, 26.2g	大洞C: 式土器胴部破片利用, R.L.斜行縄文
K92-187	内形土器片	I g 1	覆上	—	49 mm × 47 mm × 7 mm, 14.0g	縄内式土器胴部破片利用, 条痕文
K92-188	内形土器片	I g 1	覆上	—	36 mm × 41 mm × 8 mm, 14.4g	縄文晩期土器底部破片利用, 無文
K92-189	石 鏡	I b 2	覆土	—	29 mm × 14 mm × 3 mm, 1.1g	黒曜石
K92-190	石 鏡	I b 2	床 面	20	34 mm × 17 mm × 3 mm, 1.6g	黒曜石, 球磨少く混入
K92-191	石 鏡	I b 2	覆土	—	37 mm × 16 mm × 4 mm, 1.7g	黒曜石, 花十勝
K92-192	石 鏡	I b 2	覆土	—	(27) mm × 11 mm × 3 mm, (0.9)g	黒曜石, 先端部欠損
K92-193	石 鏡	I b 2	覆土	—	35 mm × 19 mm × 3 mm, 1.8g	黒曜石, 透明部分有
K92-194	石 鏡	I b 2	覆土	—	39 mm × 15 mm × 4 mm, 1.6g	黒曜石
K92-195	石 鏡	I b 2	覆土	—	(47) mm × 18 mm × 5 mm, (3.2)g	緑岩, 先端部若干欠損
K92-196	石 鏡	I b 3	覆土	—	20 mm × 11 mm × 3 mm, 0.5g	黒曜石
K92-197	石 鏡	I b 3	覆上	—	22 mm × 10 mm × 4 mm, 0.7g	黒曜石
K92-198	石 鏡	I b 3	覆上	—	21 mm × 14 mm × 4 mm, 0.8g	黒曜石
K92-199	石 鏡	I b 3	覆上	—	21 mm × 13 mm × 3 mm, 0.7g	黒曜石
K92-200	石 鏡	I b 3	覆土	—	22 mm × 14 mm × 3 mm, 0.5g	黒曜石
K92-201	石 鏡	I b 3	覆土	—	21 mm × 15 mm × 4 mm, 0.9g	黒曜石
K92-202	石 鏡	I b 3	覆土	—	27 mm × 13 mm × 4 mm, 0.9g	黒曜石
K92-203	石 鏡	I b 3	覆上	—	32 mm × 13 mm × 3 mm, 0.9g	黒曜石
K92-204	石 鏡	I b 3	覆土	—	(35) mm × (17) mm × 5 mm, (2.2)g	黒曜石, 側縁部及び柄部若干欠損
K92-205	石 鏡	I b 3	覆土	—	35 mm × 17 mm × 5 mm, 1.9g	黒曜石
K92-206	石 鏡	I b 3	覆土	—	38 mm × 13 mm × 4 mm, 1.3g	黒曜石
K92-207	石 鏡 ?	I b 8 ?	覆土	—	44 mm × 14 mm × 5 mm, 1.6g	緑岩, 異形石鏡?
K92-208	石 鏡 ?	I b 8 ?	覆土	—	33 mm × 17 mm × 4 mm, 2.4g	黒曜石, 表裏に1次割面残存, 花十勝
K92-209	ナイフ	II b	覆土	—	52 mm × 26 mm × 4 mm, 9.5g	硬質頁岩
K92-210	ナイフ	II b	覆上	—	71 mm × 30 mm × 7 mm, 18.0g	硬質頁岩
K92-211	ナイフ	II b	覆上	—	59 mm × 22 mm × 4 mm, 6.6g	硬質頁岩
K92-212	削 器	II e 2	覆上	—	68 mm × 25 mm × 10 mm, 20.2g	赤色緑岩
K93-213	ナイフ	II b	覆土	—	32 mm × 27 mm × 7 mm, 7.3g	緑岩, バルブ除去
K93-214	ナイフ	II b	覆土	—	56 mm × 41 mm × 7 mm, 20.4g	緑岩, バルブ残存
K93-215	削 器	II e 1	覆上	—	50 mm × 35 mm × 6 mm, 8.5g	黒曜石, バルブ残存, 基部に自然面残存, 角礫利用
K93-216	削 器	II e 2	覆土	—	49 mm × 23 mm × 8 mm, 12.4g	黒曜石, バルブ・自然面残存, 角礫利用
K93-217	削 器	II e 2	覆土	—	49 mm × 34 mm × 5 mm, 13.0g	黒曜石, 自然面大きく残存, 角礫を利用
K93-218	削 器	II e 2	覆土	—	62 mm × 37 mm × 7 mm, 15.6g	硬質頁岩, バルブ除去
K93-219	削 器	II e 2	覆土	—	53 mm × 30 mm × 10 mm, 9.3g	黒曜石, 自然面大きく残存, 角礫を利用
K93-220	U	F	覆土	—	51 mm × 38 mm × 8 mm, 10.6g	黒曜石, 自然面大きく残存, 角礫を利用, 基部に自然面残存
K93-221	削 器	II e 2	覆土	—	44 mm × 25 mm × 7 mm, 9.0g	黒曜石, 自然面大きく残存, 角礫を利用
K93-222	削 器 ?	II e 2 ?	覆土	—	33 mm × 58 mm × 13 mm, 20.4g	黒曜石, 自然面大きく残存, バルブ除去, 角礫を利用
K93-223	削 器	II e 2	覆上	—	38 mm × 22 mm × 5 mm, 3.4g	黒曜石, 球磨少
K93-224	挟入削器	II d 1	覆土	—	43 mm × 26 mm × 6 mm, 4.6g	黒曜石, 球磨混入, 基部に自然面残存, 角礫を利用
K93-225	挟入削器	II d 2	覆土	—	58 mm × 30 mm × 8 mm, 11.8g	黒曜石, 球磨混入, 自然面残存, 角礫を利用
K93-226	掘 器	III a	覆上	—	57 mm × 19 mm × 10 mm, 13.6g	硬質頁岩, バルブ除去

図番号	種別	分類	層位	遺物番号	各部の大きさ (mm) と重さ (g)	備 考
I493-227	播 器	II a	履 土	—	40 mm × 17 mm × 7 mm, 5.2g	黒曜石, バルブ残存
I493-228	播 器	II a	履 土	—	46 mm × 36 mm × 14 mm, 12.4g	黒曜石, 自然面大きく残存, 角礫を利用
I493-229	播 器	II a	履 土	—	39 mm × 38 mm × 9 mm, 13.0g	珪岩
I493-230	播 器	II a	履 土	—	37 mm × 33 mm × 10 mm, 13.8g	珪岩
I494-231	播 器	II a	履 土	—	75 mm × 42 mm × 12 mm, 50.5g	硬質砂岩
I494-232	ナイフ	II b	履 土	—	50 mm × 37 mm × 9 mm, 17.4g	黒曜石, バルブ残存, 球顆凝入
I494-233	播 器	II b	履 土	—	31 mm × 25 mm × 6 mm, 4.6g	黒曜石, バルブ残存
I494-234	播 器	II a	履 土	—	26 mm × 31 mm × 4 mm, 4.6g	珪岩, バルブ除去
I494-235	播 器	II b	履 土	—	(56) mm × 48 mm × 11 mm, (31.8) g	硬質頁岩, 基部欠損
I494-236	播 器	II a	履 土	—	35 mm × 32 mm × 12 mm, 11.6g	黒曜石, 自然面残存, バルブ残存
I494-237	石 瓦	II c	履 土	—	(92) mm × 36 mm × 15 mm, (56.5) g	硬質砂岩, 基部欠損
I494-238	石 鏃	IV a 1	履 土	—	53 mm × 11 mm × 10 mm, 6.5g	硬質頁岩
I494-239	石 鏃	IV a 4	履 土	—	51 mm × 15 mm × 6 mm, 6.6g	珪岩
I494-240	石 鏃	IV a 3	履 土	—	(47) mm × (30) mm × (7) mm, (10.4) g	硬質砂岩, つまみ部欠損
I494-241	石 鏃	IV a 3	履 土	—	(42) mm × (10) mm × (6) mm, (10.4) g	硬質砂岩, つまみ部欠損
I494-242	石 鏃	IV a 3	履 土	—	(39) mm × (15) mm × 3 mm, (2.2) g	硬質砂岩, つまみ部欠損
I494-243	石 鏃	IV a 3	履 土	—	43 mm × 22 mm × 4 mm, 8.5g	黒曜石, 基部に自然面残存, 角礫を利用
I494-244	ナイフ?	II b?	履 土	—	44 mm × 45 mm × 7 mm, 9.8g	黒曜石, 球顆著干混入
I494-245	石 斧	V a 2	履 土	—	74 mm × 37 mm × 12 mm, 52.0g	硬質砂岩
I494-246	石 斧	V a 2	履 土	—	79 mm × 24 mm × 11 mm, 43.6g	シルト岩
I494-247	石 鏃	V d 1	履 土	—	64 mm × 16 mm × 13 mm, 22.4g	シルト岩
I495-248	切 玉	I a 1?	履 土	—	43 mm × 27 mm × 9 mm, 19.2g	珪岩, 風化顕著, ヒスイ?, 両挟
I495-249	玉	I a 1	履 土	—	9 mm × 10 mm × 9 mm, 1.4g	珪岩, 丸玉, ヒスイ?, 片挟
I495-250	玉	I a 1	履 土	—	15 mm × 8 mm × 5 mm, 0.8g	珪岩, ヒスイ?, 片挟
I495-251	玉	I a 4	履 土	—	12 mm × 14 mm × 7 mm, 0.8g	コハク, 赤褐色
I495-252	有孔石製品	I a 10	履 土	—	30 mm × 21 mm × 7 mm, 5.7g	砂岩, 両挟, 上部欠損の可能性あり
I495-253	骨角器	IV c	履 土	(105) mm × 10 mm × 5 mm,	鯨骨?, 基部欠損	
I495-254	骨角器	IV a	履 土	—	115 mm × 10 mm × 6 mm	指?
I495-255	骨角器未成品	IV a?	履 土	—	119 mm × 12 mm × 5 mm	指の未成品の可能性, 陸獣骨使用
I495-256	針 入	IV f	履 土	—	72 mm × 9 mm × 7 mm	7mmドリル等中部利用, 根巻・墨状埋藏, 射貫
I495-257	有孔骨角製品	IV g 2	履 土	—	25 mm × 15 mm × 5 mm	クマの左下顎第1大臼歯に穿孔
I495-258	有孔骨角製品	IV g 1	履 土	—	27 mm × 7 mm × 3 mm	イヌの右上顎犬歯に穿孔
I495-259	骨角製刺貫具	IV e 2	履 土	—	(37) mm × (5) mm × (2) mm	7mmの尾端を刺貫具として利用?, 第3番目10mm部分
I495-260	古 銭	IX a	履 土	—	22 mm × 22 mm	1.5g 永安通寶, 無背
I495-261	古 銭	IX b	履 土	—	24 mm × 24 mm	3.4g 寛永通寶, 無背
I495-262	古 銭	IX b	履 土	—	23 mm × 23 mm	寛永通寶, 無背
I495-263	キセル	Xe1-2	履 土	—	大皿径17mm, 管径大径11mm, 吸口径9mm	大皿部変形, 青銅製, 羅字残存
I495-264	キセル	Xe1	履 土	—	大皿径17mm, 管径大径11mm	青銅製, 羅字残存
I495-265	キセル	Xe1	履 土	—	大皿径16mm, 管径大径9mm	青銅製
I495-266	キセル	Xe2	履 土	—	管径大径10mm, 吸口径5mm	青銅製, 羅字残存
I495-267	キセル	Xe2	履 土	—	管径大径10mm, 吸口径5mm	青銅製, 羅字残存
I495-268	指 貫	Xi 9	履 土	—	20 mm × 19 mm × 10 mm, 2.6g	真鍮製, 歪
I495-269	ガラス玉	V a 2	履 土	—	11 mm × 11 mm × 7 mm, 1.2g	丸玉, 水色
I495-270	ガラス玉	V a 2	履 土	—	9 mm × 10 mm × 8 mm, 0.9g	みかん玉, 水色
I495-271	ガラスメンコ	V d	履 土	—	22 mm × 8 mm × 5 mm, 1.5g	ガラスメンコ, 青

JH-12 Q40・R40Gridに跨がって検出された。覆土上部にFP-59と列石がある等削平を受けている。更にJH-6に北側部分を切られている他、東側も後世の攪乱を受けている。元来は、径5m～6m前後の円形ないし楕円形のプランを有していた竪穴と類推される。

壁高は概ね20cm、床面西側には2.20m×1.50m程の広い焼土範囲を確認した。柱穴様の小ピットが中央部に3個、南側壁際に2個検出された。径は、それぞれ10cm～20cm、深11cm～23cmであった。床面からは港大照寺式土器が出土している。

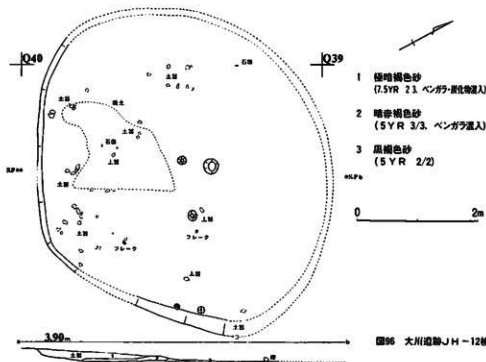


図96 大川遺跡JH-12検出状況

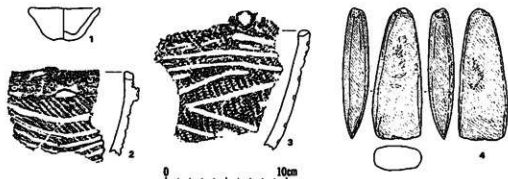


図97 大川遺跡JH-12 (1～3)・JH-13 (4) 覆土出土の土器と石并



図98 大川遺跡JH-12塚面及び習土出土の石器と土製品

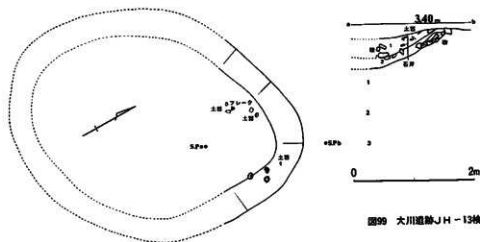


図99 大川遺跡JH-13検出状況

JH-13 H39・I38・I39Gridに跨がって存在したと考えられる。西側の大部分が後世の擾乱により失われているため、北東側の壁周囲のみの検出にとどまっている。また、SH-15により北西部分も切られている。確認部分からすれば壁高は、概ね66cmである。竪穴のプランや径についての推測は困難であるが、概ね5m～6m前後の円形ないし楕円形のプランであったと思われる。

東側の壁際に径10cm、深さ3～7cm程の柱穴様の小ピットが2個検出された。床面出土の遺物は少ないが、恵山式期の竪穴と考えられる。

表11 大川遺跡JH-12 (1~3・5~11)・JH-13 (4) 出土遺物一覧

図番号	種別	分類	層位	遺物番号	各部の大きさ (mm) と重さ (g)	備考
図97-1	土器	Ⅴ	覆土	—	高さ 27 mm	黒文、浅鉢 突起、竹管・弧線文、R.L斜行縄文
図97-2	土器	Ⅴc 2	覆土	—		
図97-3	土器	Ⅴc 3	覆土	—		
図97-4	石器	Ⅴa 2	覆土	—		
図98-5	石器	Ⅰb 3	床面	42	37 mm×15 mm×4 mm, 1.8g	黒曜石
図98-6	石器	Ⅰb 4	床面	33	40 mm×16 mm×4 mm, 2.3g	黒曜石
図98-7	円形土器片	Ⅰg 1	覆土	—	45 mm×45 mm×9 mm, 20.6g	縄文晩期土器胴部破片利用、穿孔あり、未成品
図98-8	石器	Ⅰb 3	覆土	—	(25) mm×(13) mm×3 mm, (0.9) g	黒曜石
図98-9	石器	Ⅰc 2	覆土	—	73 mm×55 mm×9 mm, 22.0g	硬質頁岩、フェザーエンド
図98-10	石器	Ⅴa 1	覆土	—	55 mm×11 mm×7 mm, 5.4g	硬質砂岩
図98-11	石器	Ⅴa 1	覆土	—	57 mm×10 mm×7 mm, 4.5g	硬質頁岩

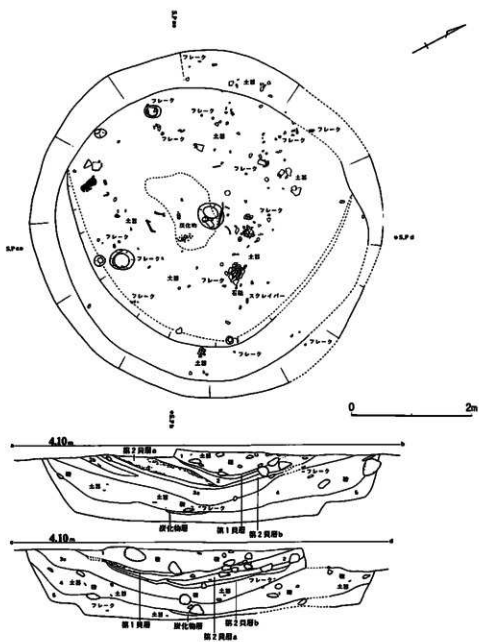
JH-14 Q41・42・43, R41・42・43 Gridに跨がって検出された。竪穴の大きさは5.85 m×5.75 mとほぼ円形プランである。壁高は概ね66cm~85cmであり、壁の立ち上がりはやや急である。確認面から床面まで最も深いところで1.17 mを測る。南東壁から南壁そして南西壁にかけて幅55cm~60cm前後のベンチ状構造が確認された。ベンチは床面から20cm前後と比較的低い。

柱穴様の小ピットとみられる穴がベンチの下場近くに2個確認された。径は15cm~20cm、深さが24cm~26cm程のものである。更に床面中央部には45cm×40cm、深さ39cm程のピット、南側には径40cm、深さ12cm程のピットが各々1個、西壁にも28cm~20cm、深さ10cm程のピットが2個検出された。床面中央部には1.40 m×70cm程の炭化物の範囲も確認された。

竪穴床面及び覆土からは非常に多くの遺物が出土している。総数で12,295点、この内、土器が5,871点、石器が166点、骨角器が22点、剥片1,248点、骨536点、貝4,383点等である。骨と貝とで、合計5,000点近くを占める。これは図100のセクションのように、覆土上部の貝層出土のものである。床面伴出の土器は港大照寺式及び恵山式のものである。

覆土は概ね6層と貝層から構成されている。貝層には第1貝層(近世)と第2貝層(中世)があり、このうち、第2貝層は、a・b 2層に分層された。上面より4層目の第2貝層の(混砂貝層、イガイ・コタマガイ・アワビ他)と5層目の第2貝層b(魚骨層、ニシン・ホッケ・カレイ他)から大量の貝や魚骨が出土した。第2貝層bは、径3.25 m程の範囲で南側は7 cm、中央部では5 cm、北~北西側では5~7 cm程の厚みがあった。これはJH-4同様、竪穴が完全に埋まりきらない状態での窺み部分に中世及び近世において、貝や魚骨をはじめとする生業活動にかかわって出たゴミを捨てたものとみられる。捨てたのか、送ったのかについての判断は困難である。魚骨の主体はニシンであり、これについても頭部の骨が多いのに比して椎骨が少ないことが特徴であり、中世においてどのように解体し処理したのか、これは伴出の珠洲の鯨鯨(図103-22・23)等ともかかわって興味深いところである。詳細については、本書第5章第2節及び熊崎農夫・前田貞子 1993 「住居址覆土出土の中世の一括動物遺体と骨角器」 『1992年度大川遺跡発掘調査概報』 余市町教育委員会刊を参照願いたい。





- |                    |                     |                    |
|--------------------|---------------------|--------------------|
| 1 黒褐色砂 (7.5YR 2/2) | 3a 黒褐色砂 (7.5YR 3/5) | 4 褐色砂 (7.5YR 4/4)  |
| 2 暗褐色砂 (7.5YR 3/4) | 3b 灰褐色砂 (7.5YR 4/2) | 5 暗褐色砂 (7.5YR 3/3) |

図100 大川遺跡JH-14検出状況

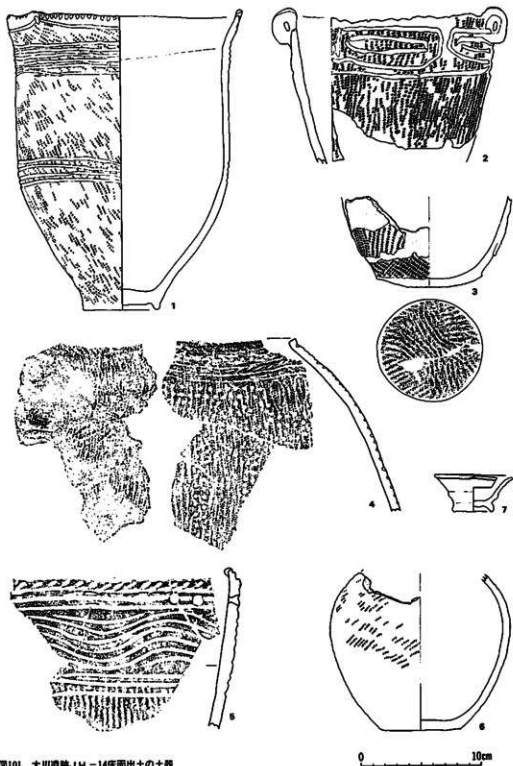


図101 大川遺跡JH-14塚面出土の土器

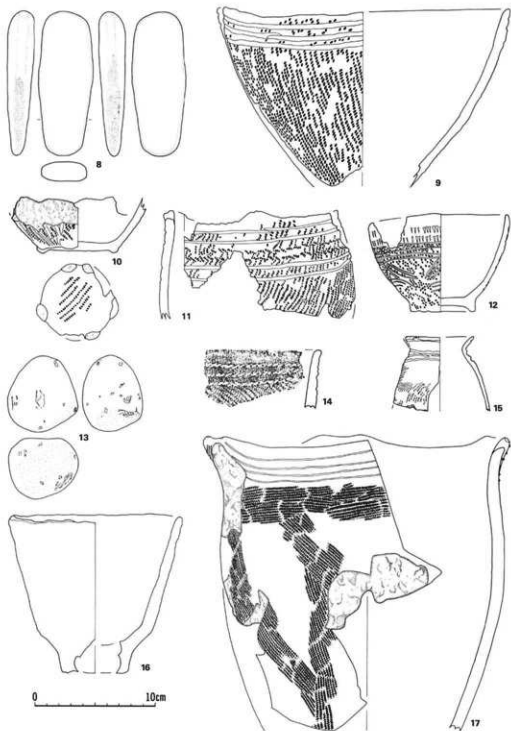


図102 大川遺跡JH-14床面及び覆土出土の土器と礫石器

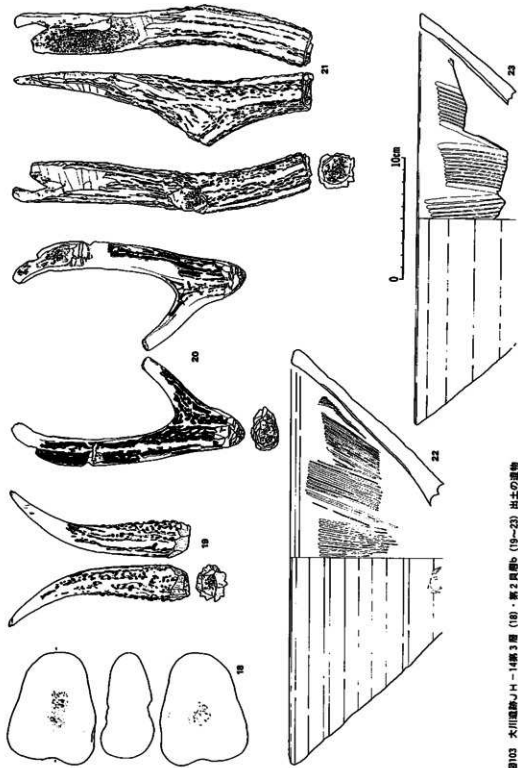


図103 大川遺跡JH-14第3層(18)・第2貝層b(19~23)出土の遺物

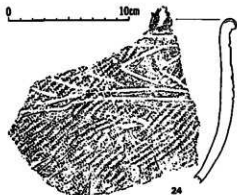


図104 大川遺跡JH-14覆土出土の土器

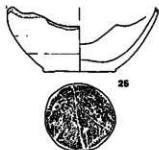


表12 大川遺跡JH-14出土遺物一覧

図番	種別	分類	層位	遺物番号	各部の大きさ(mm)と重さ(g)	備考
図101-1	土器	Ⅴd 3	床面	19他	口径195mm, 底径64mm, 高さ248mm	キズミ, 4突起, 横走沈線, R.L.斜行縄文
図101-2	土器	Ⅴc 2	床面	128他	底径88mm	キズミ, 把手, 沈線, 斜行縄文
図101-3	土器	Ⅴc 2	床面	44		R.L・L.R斜行縄文, 丸底
図101-4	土器	Ⅴe 4・5	床面他	158他	底径65mm	口唇部縄文, 連続刺突, 縄線, R.L.縦行縄文
図101-5	土器	Ⅴc 2	床面他	99他		キズミ, 横走沈線, 弧線文, R.L.縦行縄文
図101-6	土器	Ⅴa	床面	157他	口径65mm, 底径34mm, 高さ31mm	L.R斜行縄文, 逆
図101-7	土器	?	床面	20他		小耳, 横走沈線, 無文
図102-8	礫石器	?	床面	167	119 mm× 45 mm× 16 mm, 195 g	砂岩
図102-9	土器	Ⅴc 3	床面他	59他	底径65mm	横走沈線, R.L.縦行縄文
図102-10	土器	Ⅴa 5?	4層	—		縦走沈線, 底部に6ヶ所の粘土層, R.L.縦行縄文
図102-11	土器	Ⅴc 1	4層	—	口径117mm, 底径53mm, 高さ81mm	突起, 横走沈線, 縄線, L.R斜行縄文
図102-12	土器	Ⅴb 2	床面他	106他		平縁, 袖刺突, 連続刺突, 横走沈線, 弧線文, R.L.縦行縄文
図102-13	礫石	Ⅴa 2	4層	—	62 mm× 58 mm× 50 mm, 230 g	花崗閃岩
図102-14	土器	Ⅴc 5	3層	—	口径142mm	縄線文, R.L.斜行縄文
図102-15	土器	Ⅴa 3	3層	—		横走沈線, L.R斜行縄文
図102-16	土器	Ⅴe 4	3・4層	—	高さ130mm	平縁, 無文
図102-17	土器	Ⅴf 2	3層他	—		方形口縁, 微隆起縁, 帯状縄文
図103-18	陶石	Ⅴb 2	3層	—	93 mm× 72 mm× 42 mm, 260 g	安山岩
図103-19	鹿角	Ⅴd 4	第2層	9	149 mm× 29 mm× 26 mm	未成品, 角縁側に切痕あり, 第3章第10節参照
図103-20	鹿角	Ⅴd 4	第2層	10	(193)mm× (85)mm× 22 mm	未成品, 角縁側に切痕あり, 第3章第10節参照
図103-21	鹿角	Ⅴd 4	第2層	35	(247)mm× 55 mm× 29 mm	未成品, 角縁側に切痕あり, 第3章第10節参照
図103-22	鹿角片口縁	Ⅴc 2	第2層	13	—	12本前後の櫛目, 櫛目粗
図103-23	鹿角片口縁	Ⅴc 4	第2層	—	—	11本の櫛目
図104-24	土器	Ⅴc 3	覆土	—	底径59mm	キズミ, 横走沈線, 矢羽根状沈線, L.R斜行縄文
図104-25	土器	Ⅴb 4	覆土	—		内周土師器耳, 糸切底
図106-26	土製品	Ⅴf 3?	床面	74	(63)mm× 34 mm× 32 mm, (58.5)g	土笛?, 穴は中でつながつている

図番号	種別	分類	層位	遺物番号	各部の大きさ (mm) と重さ (g)	備考
図55-27	石 錘	1 b 3	床 面	—	17 mm × 12 mm × 3 mm, 0.6 g	黒曜石
図55-28	石 錘	1 b 2	床 面	73	(40) mm × 21 mm × 4 mm, (3.4) g	黒曜石, 先端部若干欠損
図55-29	石 錘	1 b 2	床 面	41	46 mm × 27 mm × 7 mm, 8.0 g	黒曜石, 球頭部
図55-30	ナイフ	1 b	柱 穴	15	48 mm × 26 mm × 4 mm, 5.4 g	黒曜石
図55-31	ナイフ	1 b	床 面	43	83 mm × 33 mm × 5 mm, 16.8 g	硬質頁岩
図55-32	ナイフ	1 b	床 面	24	76 mm × 36 mm × 6 mm, 24.2 g	頁岩
図55-33	播 器	1 a	床 面	—	40 mm × 35 mm × 6 mm, 5.5 g	黒曜石, 花十割, パルプ除去
図55-34	石 錘	1 b 2	5 層	—	(26) mm × (12) mm × 3 mm, (0.5) g	黒曜石, 基部片方欠損
図55-35	石 錘	1 b 3	5 層	—	18 mm × 14 mm × 3 mm, 0.6 g	黒曜石
図55-36	石 錘	1 a 2	5 層	—	56 mm × 22 mm × 8 mm, 9.1 g	黒曜石, 球頭多く混入
図55-37	削 器	1 c 2	5 層	—	83 mm × 43 mm × 10 mm, 44.0 g	頁岩, 自然面大きく残存
図55-38	抉入削器	1 d 2	5 層	—	54 mm × 20 mm × 8 mm, 9.1 g	黒曜石, 自然面各部に残存, 角礫利用
図55-39	播 器	1 a	5 層	—	41 mm × 32 mm × 6 mm, 10.2 g	黒曜石, パルプ除去, 花十割
図55-40	円形土器片	1 g 1	4 層	—	37 mm × 37 mm × 7 mm, 11.6 g	無文土器胴部破片利用
図55-41	円形土器片	1 g 1	4 層	—	42 mm × 43 mm × 6 mm, 11.8 g	縄文晩期中重土器胴部破片利用, I.R 斜行横文
図55-42	円形土器片	1 g 1	4 層	—	48 mm × 48 mm × 7 mm, 20.2 g	縄文晩期中重土器胴部破片利用, I.R 斜行横文
図55-43	石 錘	1 b 2	4 層	—	39 mm × 13 mm × 4 mm, 1.5 g	硬質頁岩, 先端部若干欠損
図55-44	ナイフ	1 b	4 層	—	54 mm × 24 mm × 5 mm, 8.7 g	緑岩
図55-45	ナイフ	1 b	4 層	—	103 mm × 58 mm × 5 mm, 47.0 g	硬質頁岩
図55-46	削 器	1 c 2	4 層	—	77 mm × 41 mm × 9 mm, 19.6 g	頁岩, パルプ残存
図55-47	削 器	1 c 2	4 層	—	55 mm × 25 mm × 2 mm, 6.0 g	硬質頁岩, パルプ残存
図55-48	削 器	1 c 2	4 層	—	76 mm × 28 mm × 12 mm, 23.2 g	頁岩
図55-49	抉入削器	1 d 3	4 層	—	47 mm × 44 mm × 9 mm, 17.0 g	黒曜石, 基部に自然面残存, 角礫を利用
図55-50	播 器	1 a	4 層	—	43 mm × 23 mm × 4 mm, 4.4 g	黒曜石, パルプ除去
図55-51	播 器	1 a	4 層	—	55 mm × 38 mm × 8 mm, 17.0 g	黒曜石
図55-52	播 器	1 a	4 層	—	54 mm × 39 mm × 5 mm, 11.0 g	黒曜石, パルプ残存
図55-53	削 器	1 c 2	3 層	—	41 mm × 48 mm × 7 mm, 18.8 g	黒曜石, 球頭混入
図55-54	石 錘	1 a 4	3 層	—	38 mm × 27 mm × 5 mm, 6.7 g	黒曜石, 自然面大きく残存, 角礫を利用
図55-55	石 斧	V a 2	3 層	—	58 mm × 40 mm × 10 mm, 43.6 g	砂岩
図55-56	円形土器片	1 g 1	覆 土	—	34 mm × 38 mm × 6 mm, 7.2 g	大塚C1式口縁部破片利用, I.R 斜行横文
図55-57	石 錘	1 b 4	覆 土	—	(34) mm × 13 mm × 5 mm, (1.3) g	黒曜石, 基部欠損, 球頭混入
図55-58	削 器	1 c 2	覆 土	—	48 mm × 39 mm × 8 mm, 12.8 g	黒曜石, 自然面を大きく残存, 角礫を利用
図55-59	古 銭	X a	1 層	—	径24mm, 2.7g	淳化元寶
図55-60	竹角器	1 b 2	第2層	1	(82) mm × 18 mm × 5 mm	鹿角製, 先端部欠損, 筋跡付着?
図55-61	竹角器	1 b 2	第2層	19	82 mm × 19 mm × 4 mm	鹿角製, 胴縁部欠損, 筋跡付着?
図55-62	竹角器	1 b 1	第2層	—	—	鹿角製, 有2孔, 刺突角, 筋跡文, 先端部・基部欠損
図55-63	竹角器	1 b	第2層	31	119 mm × 12 mm × 5 mm	エゾシカの中手ないし中足骨製, 先端部に筋跡品を結着?
図55-64	竹角器	1 a	第2層	3	156 mm × 12 mm × 6 mm	エゾシカの中手ないし中足骨製, 刺突部若干欠損
図55-65	竹角器	1 a	第2層	—	146 mm × 9 mm × 8 mm	ツクラ類
図55-66	竹角器	?	第2層	—	—	ツクラ類, 未成品
図55-67	竹角器	1 d	第2層	16	89 mm × 7 mm × 2 mm	エゾシカの中手ないし中足骨
図55-68	動物遺体	1 d	第2層	—	76 mm × 14 mm × 10 mm	ウミガメの趾骨, 先端部を削っている
図55-69	竹角器	1 h	第2層	—	—	エゾシカの中足骨, 強く火を受けて黒焦げ状態
図55-70	竹角器	1 h	第2層	—	—	エゾシカの中手ないし中足骨, 強く火を受けて黒焦げ状態
図55-71	竹角製品	1 e	第2層	17	—	鹿角製, 横走筋線, 筋跡文, 有2孔
図55-72	竹角製品	1 h	第2層	—	29 mm × 33 mm × 8 mm	鹿角製, 環状
図55-73	骨角未成品	?	第2層	—	27 mm × 11 mm × 2 mm	鹿角製, 板状スライス

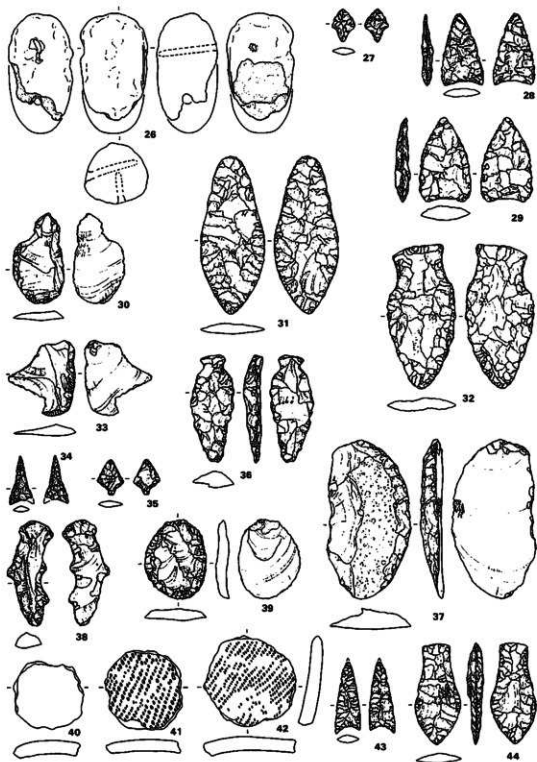


図105 大川遺跡JH-14発掘及び型土出土の土製品と石器

0 5cm

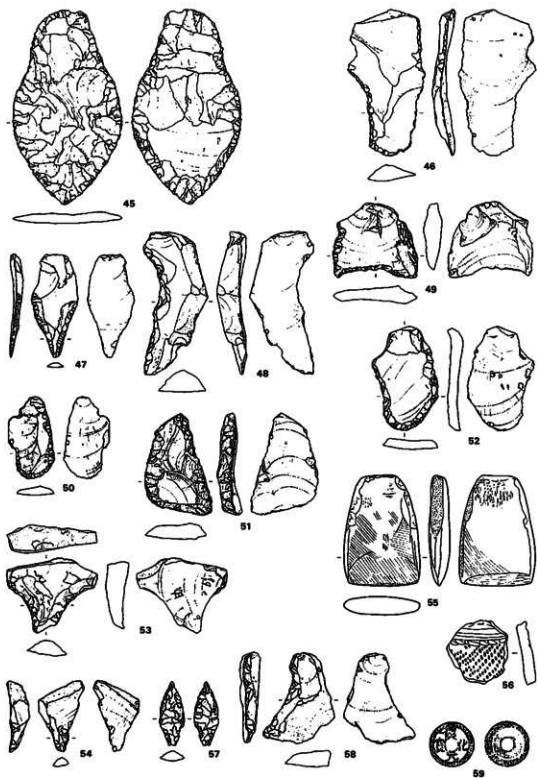


図106 大川遺跡JH-14層土出土の石器と古銭



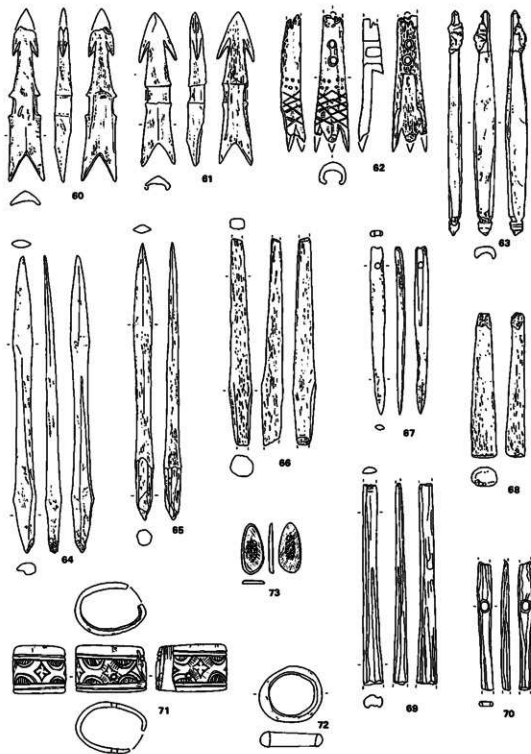


図107 大川遺跡JH-14第2貝層b坪出の遺物

0 5cm

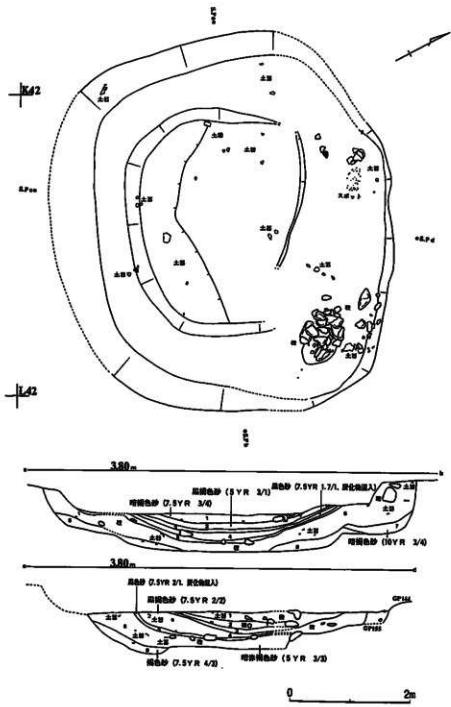


图108 大川遺跡JH-15出土状況

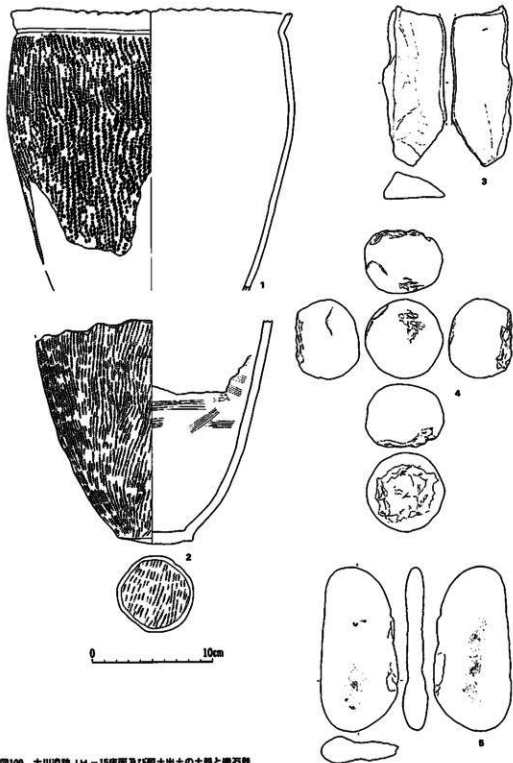


図109 大川遺跡JH-15塚園及び壱土出土の土器と礫石器

JH-15 K41・42, L41・42, M41・42の6 Gridに跨って検出された。径が6.60m×5.80m程の楕円形プランを呈する。壁高は約90cmで、壁はゆるやかに立ち上がっている。確認面より床面中央部まで、1.21m程もある。柱穴様の小ピットや地床が等は確認できなかったが、竪穴内部はベンチ状構造を呈している。そして、そのベンチの内側は三ヶ月形の溝状になっている。

床面の広い範囲から赤色顔料が735g程も確認された。これは前述したように柱穴様の小ピットや地床がさえも認められなかったことと何か関係があるのだろうか、不明である。また床面中央部北側からチップの集中するスポットが確認された。これは重量で100gにもなり、チップの數に

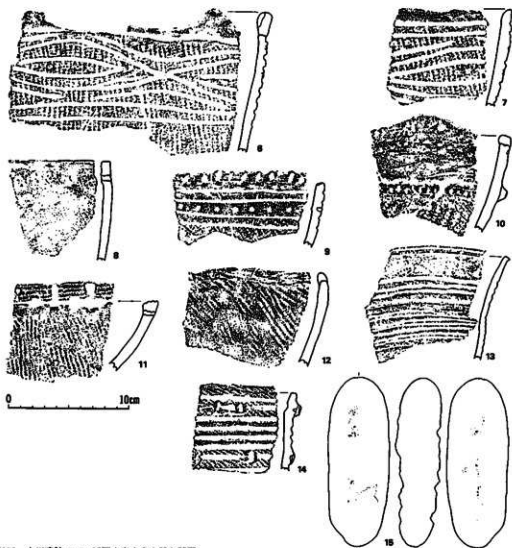


図110 大川遺跡JH-15掘土出土の土器と凹石

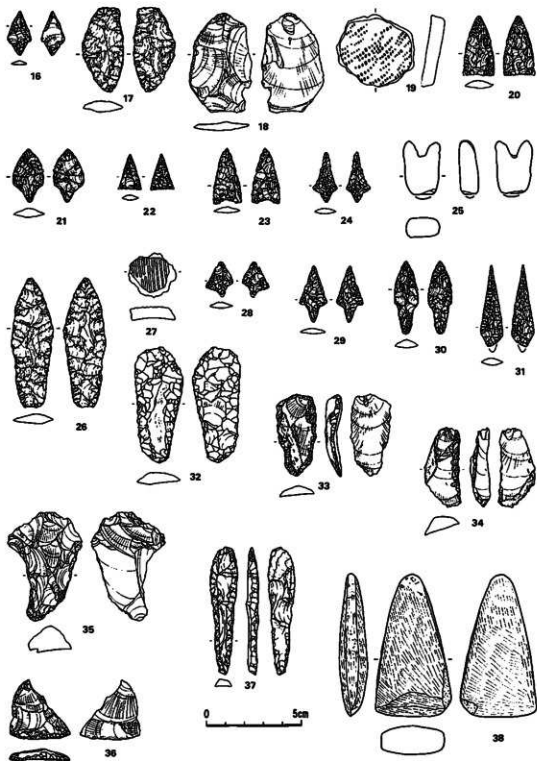
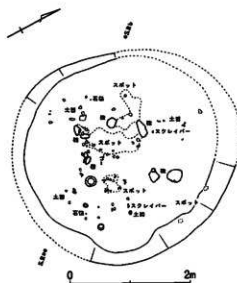


図111 大川遺跡床面及び出土JH-15出土の土製品と石器

表13 大川遺跡JH-15出土遺物一覧

図番号	種別	分類	層位	遺物番号	各部の大きさ(mm)と重さ(g)	備考
図109-1	土器	Ⅴc 7	床面	72施	口徑 234 mm	口唇部キザミ、R L縦行縄文
図109-2	土器	Ⅴc	床面	17	底徑 63 mm	丸底、L R縦行縄文
図109-3	石器	Ⅴa b	床面	89		砂岩
図109-4	石器	Ⅴa 2	6層	—	65 mm×64 mm×52 mm, 300 g	珉岩、赤色顔料付否
図109-5	石器	Ⅴb 2	6層	—	136 mm×63 mm×22 mm, 220 g	安山岩
図110-6	土器	Ⅴc 2	6層	—		突起、弧線文、横走沈線、竹管文、R L縦行縄文
図110-7	土器	Ⅴc 2	6層	—		横走沈線、弧線文、竹管文、R L縦行縄文
図110-8	土器	Ⅴf 2	6層	—		平縁、円形刺突
図110-9	土器	Ⅴc 1	5層	—		キザミ、横走沈線、インサイド突線文、R L斜行縄文
図110-10	土器	Ⅴc 4-6	5層	—		口唇部端の窪み、円形刺突、貼付帯、L R斜行縄文
図110-11	土器	Ⅴc 1	3層	—		縄線文、R L斜行縄文、浅鉢
図110-12	土器	Ⅴc 7	3層	—		口唇部端の窪み、キザミ、R L斜行縄文
図110-13	土器	Ⅴa 2	1層	—		凹線文、裏面ヘラミガキ
図110-14	土器	Ⅴa 5	覆土	—		口唇部・口縁部R L斜行縄文、横走沈線、粘土層
図110-15	石器	Ⅴb 2	覆土	—	140 mm×51 mm×37 mm, 290 g	安山岩
図111-16	石器	Ⅰb 3	床面	113	24 mm×18 mm×2 mm, 0.5g	黒曜石
図111-17	ナイフ	Ⅱb	床面	132	45 mm×22 mm×6 mm, 6.8g	硬質頁岩、基部に不明付着物あり
図111-18	ナイフ	Ⅰb 3	床面	123	53 mm×33 mm×4 mm, 8.6g	黒曜石、バルブ除去、球痕がわずかに残り、第3章参照参照
図111-19	円形土器片	Ⅰg 1	6層	—	38 mm×42 mm×7 mm, 12.6g	縄文地陶中重土器割部破片利用、L R斜行縄文
図111-20	石器	Ⅰb 2	6層	—	33 mm×(16)mm×4 mm, (2.1)g	黒曜石、基部若干欠損、球痕混入
図111-21	石器	Ⅰb 3	6層	—	28 mm×16 mm×4 mm, 1.8g	黒曜石
図111-22	石器	Ⅰb 1	5層	—	20 mm×12 mm×2 mm, 0.4g	黒曜石
図111-23	石器	Ⅰb 2	5層	—	30 mm×15 mm×3 mm, 1.0g	黒曜石
図111-24	石器	Ⅰb 3	2層	—	27 mm×13 mm×3 mm, 0.8g	黒曜石
図111-25	土製品	Ⅰi 3	1層	—	(29)mm×20 mm×10 mm, (5.5)g	下部欠損、横走沈線
図111-26	石器	Ⅰc	1層	—	68 mm×22 mm×5 mm, 9.6g	硬質頁岩
図111-27	円形土器片	Ⅰg 1	覆土	—	23 mm×25 mm×6 mm, 4.3g	焼内式土器割部破片利用
図111-28	石器	Ⅰb 3	覆土	—	(17)mm×14 mm×3 mm, (0.6)g	黒曜石、柄部欠損
図111-29	石器	Ⅰb 3	覆土	—	30 mm×14 mm×3 mm, 0.9g	黒曜石
図111-30	石器	Ⅰb 3	覆土	—	38 mm×12 mm×4 mm, 1.5g	黒曜石
図111-31	石器	Ⅰc 4	覆土	—	(43)mm×12 mm×4 mm, (1.4)g	黒曜石、基部欠損
図111-32	ナイフ	Ⅱb	覆土	—	61 mm×25 mm×6 mm, 13.8g	珉岩、刃部が上・下逆の可能性あり
図111-33	削器	Ⅰc 2	覆土	—	43 mm×20 mm×5 mm, 5.6g	黒曜石、自然面大きく残存、バルブ残存、角端を利用
図111-34	削器	Ⅰc 2	覆土	—	42 mm×18 mm×7 mm, 6.0g	黒曜石、自然面大きく残存、角端を利用
図111-35	削器	Ⅰc 2	覆土	—	58 mm×39 mm×13 mm, 24.0g	黒曜石、花十層、バルブ大きく除去
図111-36	掘器	Ⅲa	覆土	—	(35)mm×(32)mm×5 mm, 3.4g	黒曜石、花十層、2ヶ所欠損
図111-37	石器	Ⅳa 4	覆土	—	67 mm×14 mm×4 mm, 6.4g	硬質頁岩
図111-38	石器	Ⅴa 2	6層	—	75 mm×(40)mm×15 mm, (65.0)g	緑色片岩、刃部端欠損

すれば数千点になるものとみられる。床面出土の土器は図109-1・2に代表される港大照寺式期のものである。図111-25は覆土中の出土資料とはいももの、これまでに北海道内での出土例を筆者管見の限りこれを知らず、青森県周辺に出土例が認められているV字形土製品の類似資料と考えられる。三内遺跡(11点出土、鈴木克彦 1987「V字形土製品について」『青森県立郷土館調査研究年報』第11号)及び鶴籠遺跡(2点出土、青森県教育委員会 1983「鶴籠遺跡」)から出土しているようであるが、前者の例に、より類似する。しかし、横孔は認められない。



- |                            |                             |
|----------------------------|-----------------------------|
| 1 暗褐色砂 (7.5YR 3/3, 炭化物混入)  | 8 黒色砂 (7.5YR 2/1, 炭化物混入)    |
| 2 褐色砂 (7.5YR 4/4, 炭化物混入)   | 9 黒褐色砂 (7.5YR 2/2, 炭化物混入)   |
| 3 暗褐色砂 (7.5YR 3/4, 炭化物混入)  | 10 黒色砂 (7.5YR 2/1, 炭化物混入)   |
| 4 褐色砂層 (7.5YR 4/3, 炭化物混入)  | 11 暗褐色砂 (7.5YR 3/3, 炭化物混入)  |
| 5 極暗褐色砂 (7.5YR 2/3, 炭化物混入) | 12 暗褐色砂 (7.5YR 3/4, 炭化物混入)  |
| 6 暗褐色砂 (7.5YR 3/4, 炭化物混入)  | 13 褐色砂 (7.5YR 4/4, 炭化物混入)   |
| 7 黒褐色砂 (7.5YR 3/2, 炭化物混入)  | 14 極暗褐色砂 (7.5YR 2/3, 炭化物混入) |

図112 大川遺跡JH-16検出状況

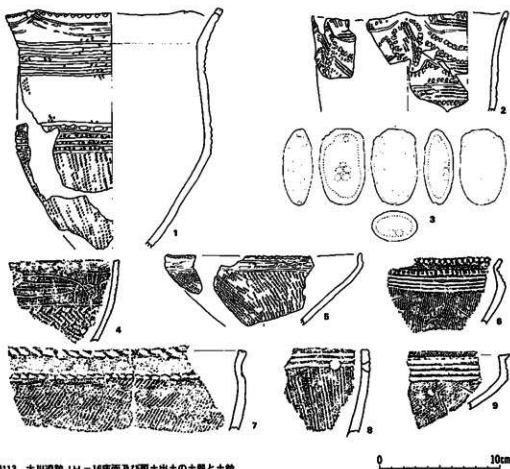


図113 大川遺跡JH-16検出及び習土出土の土層と土物

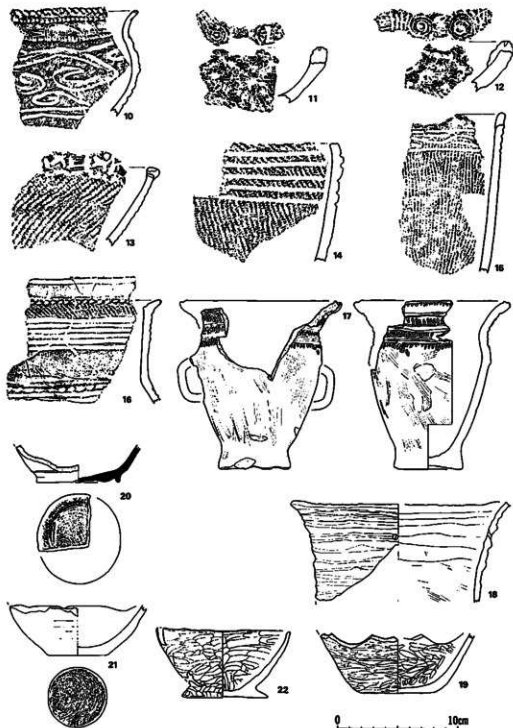


図114 大川遺跡JH-16層土出土の縄文晩期・縄縄文期・彌文期の土器



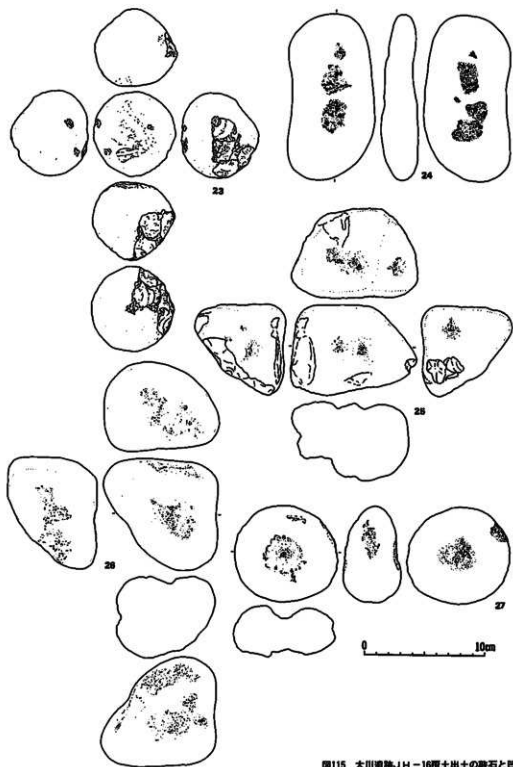


図115 大川遺跡JH-16層土出土の磁石と凹石

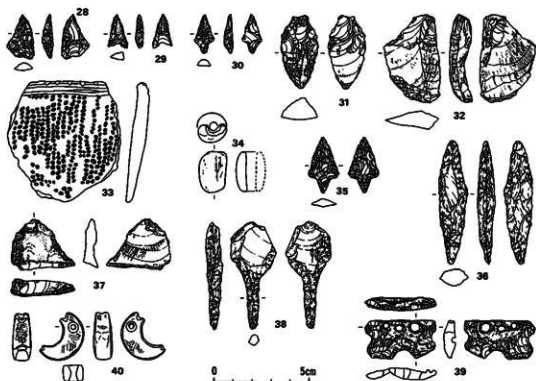


図116 大川遺跡JH-16 (28~39)・JH-17 (40) 床面及び覆土出土の遺物

JH-16 J46・47, K46・47Gridに跨がって検出された。北側の部分をSH-17に、南東側の部分をSH-69(図3)に切られている。プランは楕円形で、3.82m×3.44m程の径を有するとみられる。壁高は概ね50~62cmで、壁の立ち上がりは、やや急である。柱穴様の小ビットは、床面の南側に3個確認された。径は概ね5cm~15cm、深さ10cm~38cm程のビット(図112)である。床面中央部からは3ヶ所のチップやフレークの集中するスポットが確認された。いずれも、径25cm~1m程の広がりを持つものである。また、竪穴東壁際の床面近くにも径7~8cmと小範囲のスポット2ヶ所が検出された。JH-16の出土遺物総数は3,492点、内訳は土器が3,150点、土製品が2点、石器が201点、剥片が130点等である。このうち大半が覆土からの出土遺物である。

図113-1・2等の土器が床面出土のものである。このうち、2の土器がJH-16の竪穴の使用された時期を示すものと考えられる。図113-3の土鈴は縄文期の初出例となった。表紙写真のように内部には土の玉6個が封じ込められているようである。図114-17は覆土から出土した擦文土器である。当該期の土器としては、2つの把手が付されているという非常に珍しい形状を呈している。どのような目的のために作られた土器なのか興味深い。図114-22も非常に稀な底部形状を呈している坏である。表裏ともヘラミガキが顕著である。

表14 大川遺跡JH-16(1~39)・JH-17(40)出土遺物一覧

図番号	種別	分類	層位	遺物番号	各部の大きさ(mm)と重さ(g)	備考
図13-1	土器	W d 3	床面他	37.41他	63 mm×39 mm×25 mm	キザミ、波状口縁4突起、横走沈線、R L斜行縄文
図13-2	土器	W e 2	床面他	52.56他		キザミ、小突起、横走沈線、三角列点、巻状縄文
図13-3	土器	J f 1	床面	23		「おやのい」層底、瓦葺の土の玉がのりついている
図13-4	土器	W a 1	覆土	—		弧線文、爪形文、横走沈線、R L斜行縄文
図13-5	土器	W a 2	覆土	—		キザミ、半巻状文、横走沈線、R L斜行縄文
図13-6	土器	W a 3	覆土	—		キザミ、押引、横走沈線、L R縦行縄文
図13-7	土器	W a 2	覆土	—		キザミ、刺突列、L R斜行縄文
図13-8	土器	W b 3	覆土	—		平縁、横走沈線、袖輪孔、条痕文
図13-9	土器	W a 3	覆土	—		平縁、キザミ、横走沈線、L R斜行縄文
図13-10	土器	W a 3	覆土	—	キザミ、押引、雲形文、L R斜行縄文	
図13-11	土器	W c 1	覆土	—	突起、渦巻状縄線、刺突、浅鉢	
図13-12	土器	W c 1	覆土	—	突起、渦巻状縄線、刺突、竹管、浅鉢	
図13-13	土器	W c 1	覆土	—	突起、L R斜行縄文、浅鉢	
図13-14	土器	W c 3	覆土	—	平縁、横走沈線、R L縦行縄文	
図13-15	土器	W c 2	覆土	—	突起、横走沈線、弧線文、L R縦行縄文	
図13-16	土器	W d 3	覆土	—	キザミ、横走沈線、刺突列、R L斜行縄文	
図13-17	土器	W a 2	覆土	—	底径58mm高さ139mm	
図13-18	土器	W a 2	覆土	—	平縁、段状沈線	
図13-19	土師器	W b 3	覆土	—	底径65mm	
図13-20	灰土器	W b	覆土	—	内黒灰、表面ともへらミガキ顯著	
図13-21	土器	W b 4	覆土	—	底径49mm	
図13-22	土器	W b 4	覆土	—	L径111mm、底径71mm、高さ57mm	
図15-23	酸石	W a 2	覆土	—	68 mm×70 mm×64 mm、365g	玄武岩
図15-24	凹石	W b 2	覆土	—	139 mm×71 mm×31 mm、430g	安山岩
図15-25	凹石	W b 5	覆土	—	105 mm×74 mm×66 mm、420g	安山岩
図15-26	凹石	W b 4	覆土	—	95 mm×89 mm×67 mm、500g	安山岩
図15-27	凹石	W b 3	覆土	—	86 mm×80 mm×42 mm、250g	安山岩
図16-28	銅片石器	?	床面	S P-2	(24)mm×16 mm×4 mm、(1.0)g	黒曜石、スポット出土の未成品か失敗作?
図16-29	石鏃	J b 2	床面	S P-2	19 mm×11 mm×4 mm、0.5g	黒曜石、自然面残存、スポット出土の未成品?、刃端利用
図16-30	石鏃	J b 3	床面	S P-1	21 mm×11 mm×3 mm、0.5g	黒曜石、ユフェイス、スポット出土の未成品?
図16-31	削器	J c 2	床面	22	(39)mm×20 mm×11 mm、(6.8)g	黒曜石、自然面残存、刃端利用、基部欠損、準頭部不顕
図16-32	搔器	W a	床面	11	47 mm×31 mm×8 mm、10.2g	黒曜石、基部自然面残存、刃端利用、球部多く混入
図16-33	円形土器片	J g 1	覆土	—	66 mm×61 mm×7 mm、32.6g	大割C土器の破片、削器、平口沈線、L R縦行縄文
図16-34	土玉	J i 5	覆土	—	22 mm×(14)mm×15 mm、(2.6)g	ほぼ半欠
図16-35	石鏃	J b 3	覆土	—	29 mm×16 mm×4 mm、1.1g	黒曜石、球部混入
図16-36	石鏃?	J a 1?	覆土	—	65 mm×15 mm×9 mm、8.5g	硬質砂岩、石槍ないしは石鏃
図16-37	搔器	W a	覆土	—	27 mm×33 mm×7 mm、4.7g	黒曜石、自然面大く残存、刃端利用、球部不顕
図16-38	石鏃	W a 3	覆土	—	56 mm×24 mm×6 mm、7.6g	砂岩
図16-39	有孔石鏃	J a 10	覆土	—	20 mm×37 mm×6 mm、5.5g	黒曜石、自然面大く残存、刃端自然面利用、球部混入
図16-40	勾玉	J a 7	覆土	—	25 mm×11 mm×9 mm、4.7g	砂岩、勾玉、両縁あり

石器製作にかかわる工房址といったような性格の強い本型穴において、当該伴出土鈿が、石器製作と何らかの形で関連するものか否か、興味あるところである。

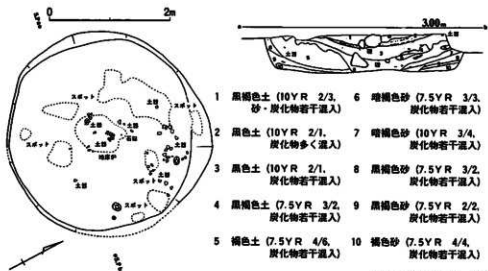


図117 大川遺跡JH-17発出状況

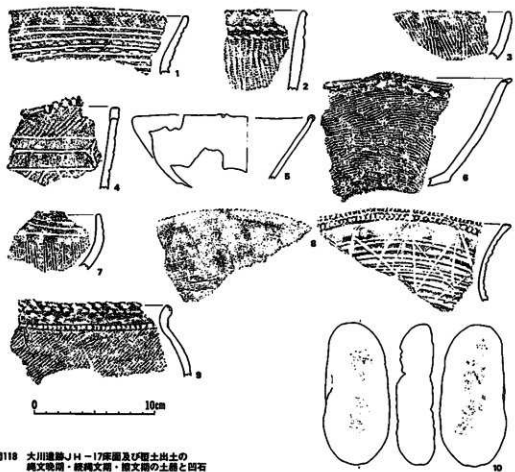


図118 大川遺跡JH-17発出及び埋土出土の  
縄文晩期・縄文中期・縄文前期の土器と凹石

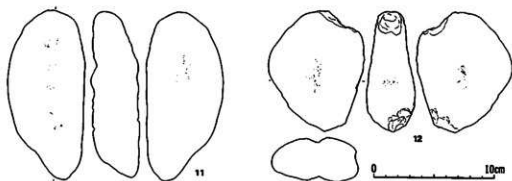


図119 大川遺跡JH-17覆土出土の陶石

表15 大川遺跡JH-17出土遺物一覧

図番号	種別	分類	層位	遺物番号	各部の大きさ (mm) と重さ (g)	備考
図116-1	土器	Ⅴd 3	覆土	—	—	キズミ、横走沈線、断続沈線、R.L斜行縄文
図116-2	土器	Ⅴc 5	覆土	—	—	キズミ、縄線文、R.L縦行縄文
図116-3	土器	Ⅴc 7	覆土	—	—	平線、R.L縦行縄文
図116-4	土器	Ⅴa 1	覆土	—	—	キズミ、突起、横走沈線、孤線文、L.R斜行縄文
図116-5	土器	Ⅴb 2	2層他	—	—	小突起、無文、洗鉢
図116-6	土器	Ⅴc 1	覆土	—	—	口唇部に縄線文、L.R横走縄文、洗鉢
図116-7	土器	Ⅴb 3	床面	23	—	平線、横走沈線、条痕文
図116-8	土器	Ⅴa 3	覆土	—	—	口縁部黒キズミ、横走沈線、罫・罫の筋文、罫目
図116-9	土器	Ⅴa 3	覆土	—	—	キズミ、断突、押引、L.R斜行縄文、罫
図116-10	陶石	Ⅴb 2	覆土	—	118 mm×54 mm×32 mm, 325 g	安山岩
図119-11	陶石	Ⅴb 2	覆土	—	141 mm×63 mm×39 mm, 385 g	安山岩
図119-12	陶石	Ⅴb 3	覆土	—	100 mm×79 mm×38 mm, 250 g	安山岩

JH-17 K47・L47 Gridに跨って検出された。北側はSH-69に、東側はSH-71に切られ、GP-935とは南西部分で重複している。径は3.40m×3.36mとほぼ円形プランを呈する小型の竪穴である。壁高は35cm～60cm程で、壁は全体的に急に立ち上がっている。床面中央部には85cm×60cm程の地床炉が検出された。その地床炉を囲むように20cm～40cm程のチップやフレークの集中範囲が8ヶ所確認された。チップ・フレークの総重量は760gにもなり、点数は集計していないが、これだけで数万点にはなるだろう。JH-17の出土遺物総数は1,598点であり、内訳は土器1,314点、石器214点等であり、大半が覆土遺物である。図116-39は黒曜石の有孔石製品である。黒曜石角礫の自然面の3孔を利用し、作出している。余市町内では沢町遺跡（余市町教育委員会 1989『沢町遺跡』）の墓塚伴出例や遺構外出土事例等、合計5点が確認されている。沢町遺跡の当該資料は、いずれも縄文晩期前葉のものとみられる。

床面伴出土器には、図示していないが恵山式土器の小破片がある。したがって、当該期の竪穴とみられる。6ヶ年に亘る大川遺跡の縄文文化期の竪穴中、最も石器製作の痕跡を顕著に示しているのが本竪穴である。

(熊崎・小川・宮)

## 第2節 擦文期（古代）の竪穴状建物跡

当該期の竪穴状建物跡は、SH-1～71まで71軒検出された。これらの総てが住居址ではないと考えられるため、あえて竪穴状建物跡と表示したものである。以下、詳細については竪穴の番号順に報告する。

**SH-1** V17・W17Gridに跨がって検出された。隅丸方形のプランを有し、東西約2.80m、南北2.20m程の小型の竪穴である。床面の西側からは、1.10m×80cm程の炭化物の広がりも確認された。規模も小さく、カマドや柱穴様の小ピットも確認されなかった。北側に近接するUP-1はSH-1と同時併存かと思われる。

SH-1からは合計57点の遺物が出土している。このうち、ほとんどが覆土遺物である。床面出土のものも小破片であり、図示しなかったが、Ⅲ群a 3類の土器が床面から出土しているのが当該期の竪穴とみられる。

床面及び覆土からは、炭化米・アワ・ヒエ・キビ等の多量の植物遺体が検出（第5章第3節）されている。また、本竪穴出土の炭化米・炭化アワ・炭化ヒエについて<sup>14</sup>C年代測定を実施（第5章第1節参照）した。

**SH-2** V19Gridで検出された。南北1.95m、東西2.20mの歪な形状を呈している竪穴である。壁高は確認面より西側約25cm、東側約10cmを測るが壁の崩落が激しい為、平面プラン、

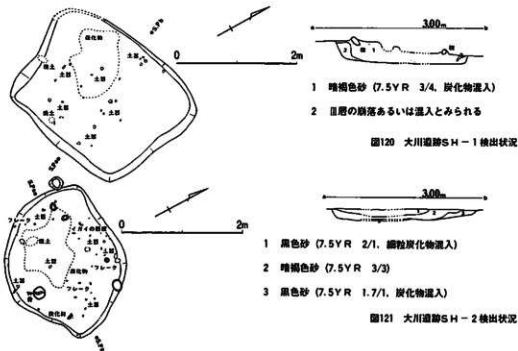


図120 大川遺跡SH-1 検出状況

図121 大川遺跡SH-2 検出状況

壁高とも明確ではない。竪穴内には大小4個のピット、壁際には径20cm×15cm、深さ25cmのピット1個、西側の壁外にも径20cm、深さ13cm程の小ピットが1個検出された。床面西側に炭化物の広がり確認された他、20cm×13cm程の焼土も確認された。また、床面南東部からは、10cm×5cm程の柱材の一部かとみられる炭化材が出土したが、下部には柱穴とみられる小ピット等は確認されなかった。

本竪穴からは、合計163点の遺物が出土している。図125-1が床面出土の土器である。したがって、Ⅸ群a1類土器の時期の竪穴とみられる。

本竪穴の床面及び焼土からは、コメ・アワ・ヒエ・キビ・ソバ他の炭化種子が検出（第5章第3節参照）されている。

**SH-3 W16, X15・16Grid**に跨がって検出された。南北の径は、2.70m、東西の径は、2.60mを測り、平面形は隅丸方形を呈する。壁高は確認面より北側壁約60cm、東側壁約55cm、南側壁約70cm、西側壁約55cmを測り、傾斜は緩やかで深めに掘られている小型の竪穴である。

焼失竪穴であり、確認面下10cm程で炭化材が多量に出土した。また、炭化材の下部より径60cm程の焼土の広がり大・小の礫多数が確認された。柱穴他の小ピットが床面北西側（図122）から1個確認された。

本竪穴から出土した遺物の総数は94点であり、図示した遺物は図126-22、1点にすぎないがⅨ群a3類土器が床面から出土している。したがって、当該期の竪穴とみられる。

焼失竪穴ということもあってか、多量の植物遺体が検出されている。覆土中からの検出ではあるが、焼失した上屋構造とのかかわりから、竪穴伴出（第6章第1節参照）植物遺体と考えている。コメ・アワ・ヒエ・キビ・ソバ他の多量の炭化種子が検出（第5章第3節参照）された。

また、本竪穴検出の炭化米・炭化キビ・炭化ソバについて<sup>14</sup>C年代測定を実施（第5章第1節参照）した。

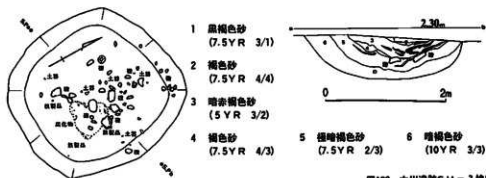


図122 大川遺跡SH-3 検出状況

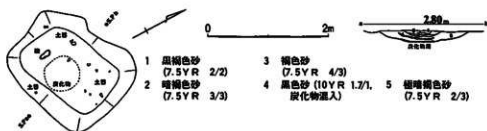


図123 大川遺跡SH-5 検出状況

SH-4 X15Gridで検出されたが、矢板で切られており、発掘区外にほとんどが残存しているものとみられる。SH-3の南東側に40cm程離れて位置(図3)する。小規模であり、かつ大半が確認できなかったため、遺構検出図は示していないが、焼失竪穴とみられ、床中央部に炭化材が出土している。

北側の辺が1m、西側の辺が1.10m程度とみられ、竪穴の隅丸部分である可能性もある。確認面からの深さは35cm前後である。柱穴様の小ピット等は確認されなかった。

出土遺物の総数は5点と全竪穴中最少であり、図示した遺物は皆無である。覆土から出土した糠文土器は、Ⅹ群a2類土器である。覆土からは他に、コメ・ヒエ・キビ他の炭化種子が若干検出(第5章第3節参照)されている。

SH-5 V20Gridの西側に位置し、東壁が概ね1.60m、西壁が1.15m、南壁が1.80m、北壁が1.95m程であり、壁高は確認面より15cm程を測る。平面形は隅丸方形を呈する。

竪穴中央よりやや南側から円形の炭化物の広がり認められたが、焼土は伴っていなかった。柱穴様の小ピット等も検出されなかった。竪穴出土の遺物総数も32点と少ないが、床面からⅩ群a2類の糠文土器が出土しており、当該期の竪穴とみられる。

覆土のソイルサンプルについて、フローテーションを実施した結果、コメ・オオムギ他の遺体(第5章第3節参照)が検出された。

SH-6 T24・25、S25Gridに跨って検出された。焼失竪穴であり、覆土上部より上層の炭化材及び屋根を葺いたとみられる葦状の炭化物が竪穴東側を中心に良好な状態で検出(写真13、図124)された。

竪穴南壁が21号石組炉により壊されているが、径5.17m×4.58m程の大きさで、隅丸長方形を呈している。北東隅には1.25m程の張り出し部があり、出入口であったとみられる。張り出し部は、川の方(図3)に向いている。また、東壁の出入口寄りの壁が若干広がっている。これは、





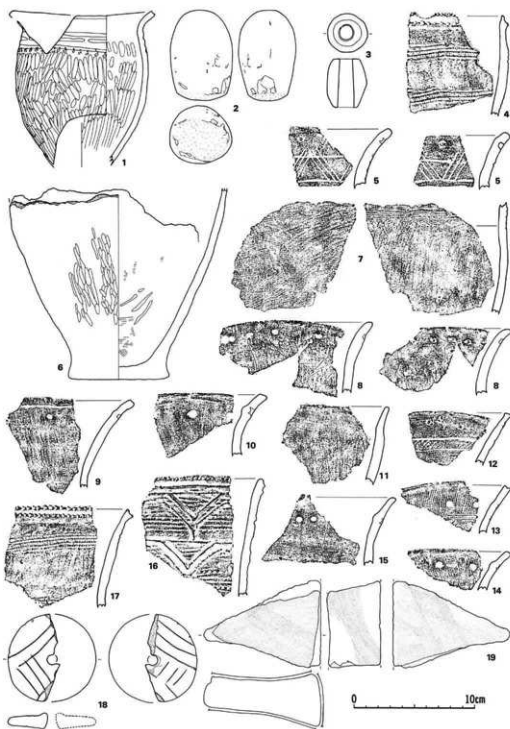


図125 大川遺跡SH-2 (1)・SH-5 (2・3)・SH-6 (4~19) 床面及び覆土出土の遺物

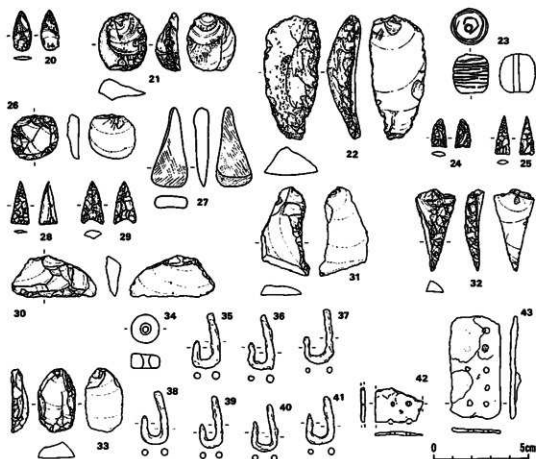


図126 大川遺跡SH-2 (20・21)・SH-3 (22)・SH-6 (23~43) 床面及び覆土出土の遺物

出入口に接続していることと関係がありそうである。壁高は、28cm~46cmであり、床面中央部より南東側に径50cm程の焼土が確認された。カマド等は検出されなかった。図124のセクションを観察すれば、焼失後一気に埋め戻された竪穴であると推察される。壁際を中心に大・小26個の柱穴様のピットが検出されたが、このうち2個のピットには、炭化した柱材（第5章第4節参照）が残存していた。尚、SH-6は、GP-55・62を切つて構築されている。また、GP-45は、SH-6の覆土を掘り込んでおり、SH-6より後出のピットである。更にGP-52は、SH-6を切っている。

本竪穴からは合計4,154点と、多数の遺物が出土している。本竪穴床面伴出土器がSH-2同様、Ⅰ群a1類（図125-5~11）つまり、北大Ⅲ式土器であることは特筆すべきことである。これまで、確たる北大Ⅲ式の北海道内における竪穴床面伴出例は皆無であった。とはいうものの、当該期の竪穴であることは、何の疑問の余地もないと考えている。

本竪穴の床面・焼土・ピット・覆土から多量の炭化米・ヒエ・アワ・キビ・ソバ他の遺体が検出（第5章第3節）された。炭化米については、学習院大学に<sup>14</sup>C年代測定を依頼し、第5章第1節のような結果がえられている。

表16 大川遺跡 SH-2(1・20・21)・SH-3(22)・SH-5(2・3)・SH-6(4~19・23~43)出土遺物一覧

図番号	種別	分類	層位	遺物番号	各部の大きさ (mm) と重さ (mm)	備 考
図15-1	土器	Ⅰa1	床面他	113他	口径121mm	平縁、四縁文、連続刺突、器表ヘラミダギキ爾著
図15-2	磁石	Ⅰa1	1 層	—	76mm×51mm×48mm, 270g	流紋岩
図15-3	陶器	Ⅲ	覆土	—	41mm×33mm×32mm, 40g	沈子、鉄軸
図15-4	土器	Ⅳe4	床面	113		キザミ、隆帯、R.L帯状縄文
図15-5	土器	Ⅰa1	床面他	—		平縁、インサイド突縁文、横走沈線、刺突
図15-6	土器	Ⅰa1	床面	96	底径84mm	ヘラミダギキ爾著
図15-7	土器	Ⅰa1	床面	32		口縁部~胴部破片、横走沈線、刷毛目後ヘラミダギ
図15-8	土器	Ⅰa1	床面他	77・92他		平縁、円形刺突文、器表ヘラミダギ爾著
図15-9	土器	Ⅰa1	床面	93		平縁、インサイド突縁文、四縁文、器表ヘラミダギ爾著
図15-10	土器	Ⅰa1	床面	91		平縁、インサイド突縁文、裏面刷毛目
図15-11	土器	Ⅰa1	床面	265		平縁、器表ヘラミダギ爾著
図15-12	土器	Ⅳf2	覆土	—		平縁、インサイド突縁文、横走沈線、L.R縄文
図15-13	土器	Ⅰa1	覆土	—		平縁、円形刺突、横走沈線、表裏面とも刷毛目
図15-14	土器	Ⅰa1	覆土	—		平縁、インサイド突縁文、表裏面ともヘラミダギ爾著
図15-15	土器	Ⅰa1	覆土	—		平縁、インサイド突縁文、器表ヘラミダギ爾著
図15-16	土器	Ⅳe3	覆土	—		平縁、横走沈線、爪形文、R.L帯状縄文
図15-17	土器	Ⅳe4	覆土	—		キザミ、隆帯、R.L帯状縄文
図15-18	紡錘車	Ⅱa2	覆土	—		刺突、半欠
図15-19	磁石	Ⅰc1	覆土	—	径73mm, 厚さ13mm, 孔径9mm	砂岩、砥石破片
図15-20	石鏡	Ⅰb1	床面	—	21mm×9mm×1mm, 0.2g	黒曜石、フローテーションより採取、バルブ残存、ユニフェイス
図15-21	播磨	Ⅲa	1 層	15	31mm×25mm×11mm, 9.8g	黒曜石、自然面大きく残存、バルブ残存、円縁を利用
図15-22	削器	Ⅱc2	3 層	1	65mm×29mm×15mm, 26.6g	磁石、バルブ除去、自然面大きく残存
図15-23	土玉	Ⅰ15?	床面	—	21mm×19mm×19mm, 7.8g	フローテーションにより採取、横走沈線
図15-24	石鏡	Ⅰb2	床面	—	(15)mm×8mm×2mm, (0.3)g	黒曜石、先端部欠損
図15-25	石鏡	Ⅰb2	床面	—	20mm×8mm×2mm, 0.2g	黒曜石、フローテーションにより採取
図15-26	播磨	Ⅲb	床面	234	23mm×24mm×6mm, 4.1g	黒曜石、バルブ除去
図15-27	石斧	Ⅰd1	床面	—	42mm×18mm×6mm, 5.2g	片岩、超小型石斧
図15-28	石鏡	Ⅰb1	覆土	—	23mm×9mm×1mm, 0.3g	頁岩、ユニフェイス
図15-29	石鏡	Ⅰb2	覆土	—	24mm×12mm×4mm, 0.8g	黒曜石
図15-30	削器	Ⅱc2	覆土	—	44mm×22mm×8mm, 6.7g	黒曜石、球顆若干混入、バルブ除去
図15-31	削器	Ⅱc2	覆土	—	48mm×26mm×5mm, 6.4g	黒曜石、自然面残存、バルブ残存、円縁を利用
図15-32	削器	Ⅱc2	覆土	—	(43)mm×(21)mm×5mm, (5.0)g	黒曜石、基部欠損?、自然面残存、円縁を利用
図15-33	播磨	Ⅲa	覆土	—	34mm×20mm×8mm, 6.2g	黒曜石、バルブ残存、自然面若干残存、円縁を利用
図15-34	玉	Ⅰa7	覆土	—	径15mm, 厚さ8mm, 孔径6mm, 3.2g	片岩、表面風化あるいは焼熱
図15-35	釣針	Ⅱa	覆土	—	29mm×15mm×4mm	
図15-36	釣針	Ⅱa	覆土	—	29mm×14mm×4mm	
図15-37	釣針	Ⅱa	覆土	—	29mm×16mm×3mm	
図15-38	釣針	Ⅱa	覆土	—	29mm×14mm×3mm	
図15-39	釣針	Ⅱa	覆土	—	28mm×12mm×3mm	
図15-40	釣針	Ⅱa	覆土	—	25mm×14mm×3mm	
図15-41	釣針	Ⅱa	覆土	—	25mm×14mm×3mm	
図15-42	小札	Ⅳa	覆土	—		断片
図15-43	小札	Ⅳa	覆土	—	55mm×27mm×3mm	上部欠損、上半部錆化顯著



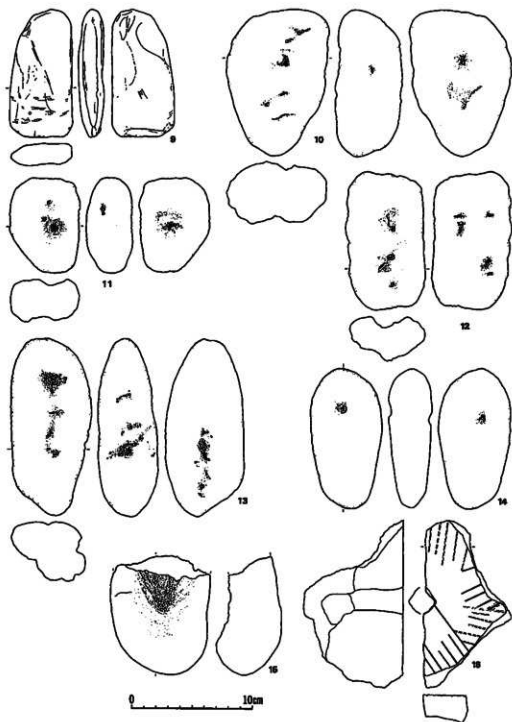


図129 大川遺跡SH-8層出土の石斧・凹石・石皿・茶臼

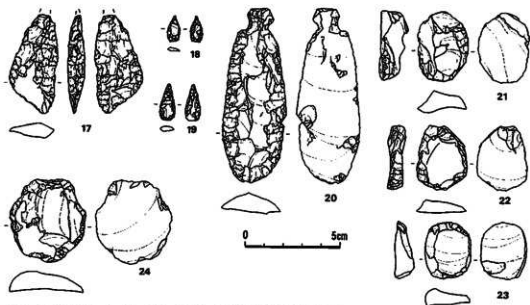


図130 大川遺跡SH-7 (17)・SH-8 (18~24) 床面及び覆土出土の石器

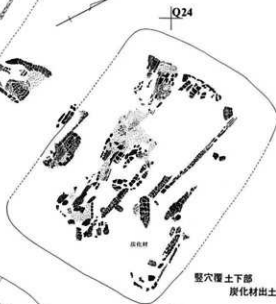
表17 大川遺跡SH-7 (1・2・17)・SH-8 (3~16・18~24) 出土遺物一覧

図番号	種別	分類	層位	遺物番号	各部の大きさ (mm) と重さ (g)	備 考
図18-1	土器	Ⅸ a 2	床面地	18・52地		横走沈線、刷毛目
図18-2	陶石	Ⅶ b 2	床面	17		安山岩、長石多く含有
図18-3	土器	Ⅶ e 4	覆土地	—		平縁、節目文、深鉢
図18-4	土器	Ⅸ a 1	覆土	—		沈線、連続刺突
図18-5	土器	Ⅸ a 1	覆土	—		平縁、深鉢
図18-6	土器	Ⅸ a 1	覆土地	—		平縁、インサイド突脚文
図18-7	土器	Ⅸ c 1	覆土	—	高さ 55mm	刻線、連続刺突、高坪台部
図18-8	磁石	Ⅸ c 2	覆土	—	(60)mm×29mm×20mm (56.5g)	凝灰質砂岩、平折、天草底
図18-9	石	Ⅴ a 2	覆土	—	(107)mm×52mm×18mm (195g)	硬質砂岩
図18-10	陶石	Ⅶ b 4	覆土	—	124mm×84mm×53mm, 465g	安山岩
図18-11	陶石	Ⅶ b 3	覆土	—	79mm×58mm×35mm, 160g	安山岩
図18-12	陶石	Ⅶ b 2	覆土	—	115mm×64mm×31mm, 240g	安山岩
図18-13	陶石	Ⅶ b 3	覆土	—	148mm×67mm×50mm, 410g	安山岩
図18-14	陶石	Ⅶ b 2	覆土	—	115mm×60mm×36mm, 250g	安山岩
図18-15	石	Ⅶ a 1	覆土	—	(98)mm×(82)mm×52mm (540g)	安山岩、窪み部分に赤色顔料付着
図18-16	茶	Ⅶ b 2	覆土	—		玄武岩
図18-17	ナイフ	Ⅱ b	床面	53	(52)mm×24mm×8mm (9.8g)	緑岩、つまみ部あるいは基部欠損
図18-18	石	Ⅰ b 1	覆土	—	14mm×7mm×1mm, 0.2g	黒曜石、表面に1次剥離面残存、超小型石核
図18-19	石	Ⅰ b 1	覆土	—	19mm×8mm×2mm, 0.3g	黒曜石、表面に1次剥離面残存
図18-20	石	Ⅱ a 2	覆土	—	97mm×33mm×9mm, 28.4g	硬質頁岩
図18-21	播器	Ⅲ a	覆土	—	37mm×27mm×13mm, 12.2g	黒曜石、自然面大きく残存、角礫を利用
図18-22	播器	Ⅲ a	覆土	—	34mm×26mm×7mm, 8.0g	黒曜石、パルプ除去、自然面大きく残存、角礫を利用
図18-23	播器	Ⅲ a	覆土	—	30mm×24mm×10mm, 6.9g	黒曜石、自然面大きく残存、母岩子混入、円礫を利用
図18-24	播器	Ⅲ b 2	覆土	—	44mm×40mm×10mm, 18.4g	黒曜石、自然面大きく残存、円礫を利用

竪穴覆土上部  
炭化材出土状況



図131 大川遺跡SH-8 検出状況

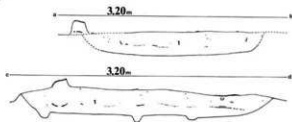


床面・小ピット・溝等  
検出状況



竪穴覆土下部  
炭化材出土状況

1 黒褐色砂 (7.5YR 3/2, 炭化物混入)





SH-7 R24・S24・25Gridに跨がり検出された。SH-6の3m北に位置(図3)する小竪穴である。南西壁をMO-4に切られているが、東西2.80m、南北2.74mで、北壁が短い台形様の隅丸方形を呈する。壁高は概ね南側44cm、北側24cmで、カマドは検出されなかったが床面東側から65cm×50cm程の地床炉とみられる焼土が検出された。柱穴様の小ピットが図127のように4個検出された。また、竪穴東隅には長さ2m、幅10cm程のL字状の溝が確認された。

SH-7からは合計773点の遺物が出土しているが、その多くは覆土遺物である。このうち、686点が土器の小破片である。図示した遺物は3点(図128-1・2、図130-17)にすぎないが、床面伴出の図128-1が本竪穴の時期を示す土器であると考えられる。SH-7の床面・地床炉・ピット・覆土のソイルサンプルで、フローテーションを実施したところ、コメ・アワ・ヒエ・キビ・ソバ他の遺体(第5章第3節参照)が検出された。

SH-8 R24・25Gridに跨がり検出された。SH-7の1m程西に位置(図3)する。焼失竪穴であり、覆土上部より覆土下部に亘って多数の炭化材(図131)が出土した。

南北4.20m、東西3mの隅丸長方形プランを呈し、壁高は概ね20cm~30cmである。カマドは検出されなかったが、床面北側部分には径30cm程の地床炉とみられる焼土が確認された。柱穴様の小ピットが6個、竪穴の南側から検出されている。また、竪穴南側壁際には、長さ1.90m、幅10~35cm程の溝も検出された。図131のセクションを観察すれば、焼失後、一気に埋め戻しがなされたと推察される。

SH-8出土遺物の総数は、3,055点であり、内訳は、土器が2,102点、フレークが752点、石器が25点他となっている。このうち、図示したものは全点覆土遺物であり、図131の遺物出土状況からも明確なように、床面伴出遺物が非常に少ない。しかし、床面出土のわずかな小破片は、Ⅸ群a1類土器である。

SH-8の覆土から、後世のものと思われるが、ニシン・ホッケ・アイナメ・カレイ・ヒラメ他の一括魚骨が土壌水洗により採取(第5章第2節参照)されている。また、床面・ピット・溝・覆土から、コメ・ヒエ・アワ・キビ・ソバ他の大量の植物遺体が検出(第5章第3節)されている。本竪穴伴出炭化材の樹種同定結果については、第5章第4節を参照願いたい。また、伴出炭化材についても<sup>14</sup>C年代測定結果(第5章第1節c参照)がえられている。

SH-9 R27・28, S27・28Gridに跨がって検出された。東西4.20m、南北4.10mと隅丸方形を呈し、壁高は約35cmである。カマドは南側壁中央に位置し、扁平な角礫とその間に粘土を充填し構築(写真14-11-sj、図132)している。煙道にも板石を両袖に立てており、同様の天井石で塞いでいる。煙道を囲う、このような構築方法は、小樽市チブタシナイ遺跡(大島秀俊ほか1992「チブタシナイ遺跡」小樽市教育委員会、同書1-7号竪穴式住居跡)でもみられるが、他に類例を知らず、恐らく砂丘遺跡において、煙道を維持する為の配慮とみられる。煙

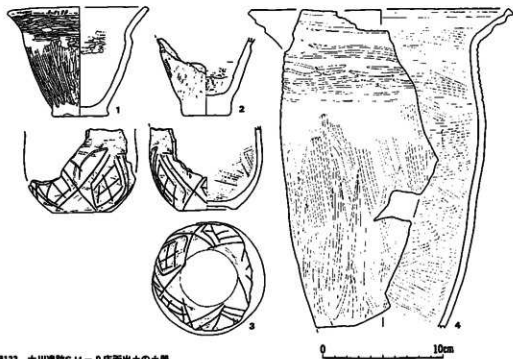
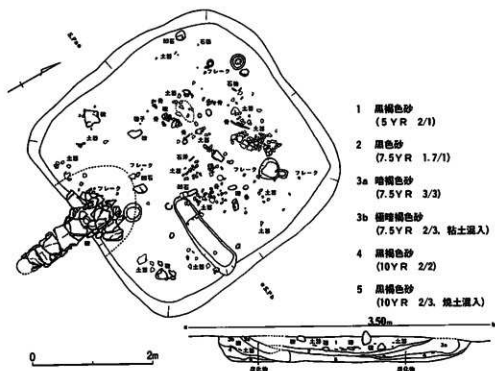


図133 大川遺跡SH-9 床面出土の土器

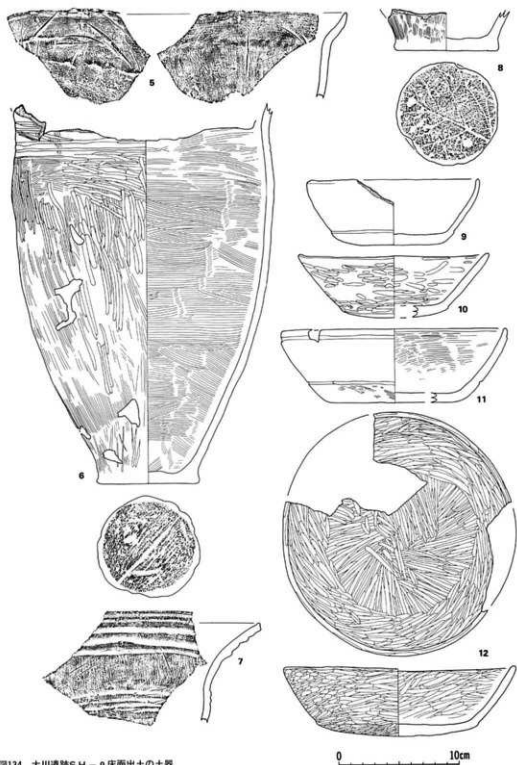


図134 大川遺跡SH-9床面出土の土器

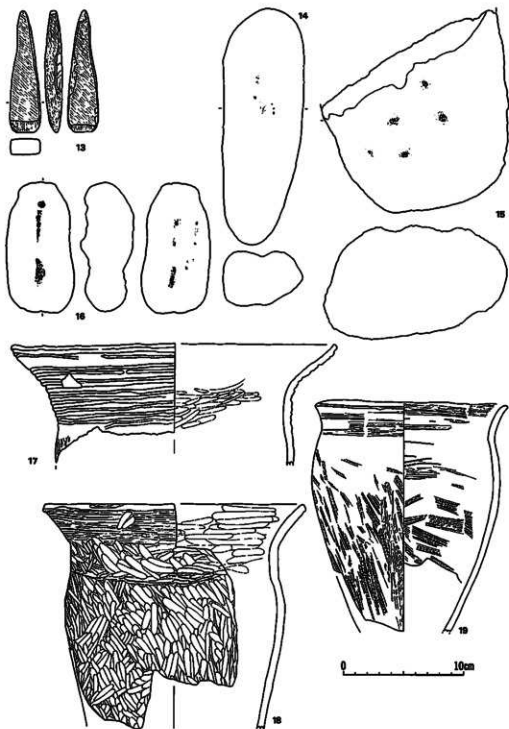


図135 大川遺跡SH-9発掘及び覆土出土の石斧・凹石・土器

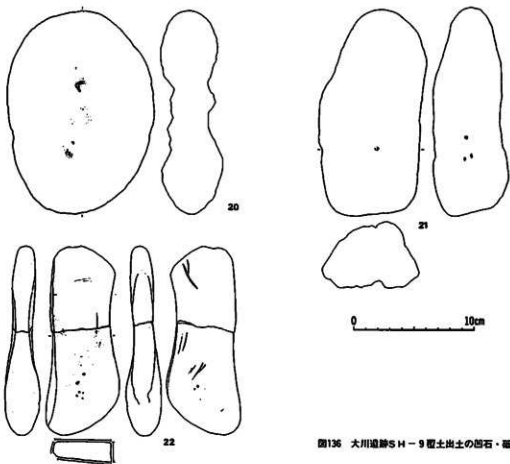


図136 大川遺跡SH-9 覆土出土の凹石・砥石

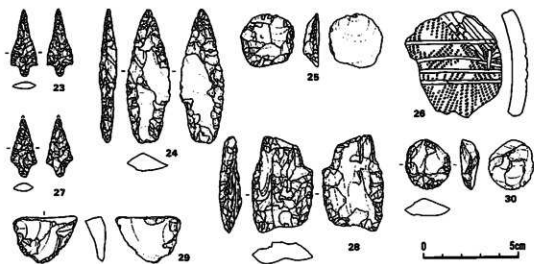


図137 大川遺跡SH-9 床面及び覆土出土の石器・土製品

表18 大川遺跡SH-9出土遺物一覧

図番号	種別	分類	部位	遺物番号	各部の大きさ(mm)と重さ(g)	備考		
図133-1	土器	Ⅹa1	床面他	57他	口径118mm、底径47mm、高さ91mm 底径48mm	平縁、キザミ、表裏ともヘラミガキ顯著 段状沈線?、器表面ヘラミガキ、裏面刷毛目 刷縁、上げ底 横走沈線、表裏刷毛目		
図133-2	土器	Ⅹa2	床面	75				
図133-3	土器	Ⅹa1	床面	110				
図133-4	土器	Ⅹa2	床面	149				
図134-5	土器	Ⅹa2	床面他	34他	底径85mm 底径85mm 高さ55mm 高さ61mm	表裏面刷毛目 ヘラミガキと刷毛目、磨面目、凹縁文、底面キザミ 凹縁文、表裏とも刷毛目 表裏とも刷毛目、底面木葉痕 土師器環、有段 内黒土師器環、有段、表裏ともヘラミガキ顯著 内黒土師器環、横走沈線、表裏ともヘラミガキ顯著 内黒土師器環、有段、表裏ともヘラミガキ顯著		
図134-6	土器	Ⅹa2	床面	112				
図134-7	土器	Ⅹa2	床面	18				
図134-8	土器	Ⅹa2	床面	55				
図134-9	土器	Ⅹb1	床面	35				
図134-10	土器	Ⅹb1	床面	27				
図134-11	土器	Ⅹb1	床面他	40他				
図134-12	土器	Ⅹb1	床面他	109他			口径194mm、底径33mm、高さ56mm	
図135-13	石片	V d 2	床面	73			101 mm × 25 mm × 13 mm, (60)g	硬質砂岩、片刀、側縁部若干欠損
図135-14	凹石	Ⅶ b 1	床面	38			192 mm × 67 mm × 45 mm, 700 g	安山岩
図135-15	凹石	Ⅶ b 1	床面	232				安山岩、平欠
図135-16	凹石	Ⅶ b 3	床面	19			108 mm × 56 mm × 43 mm, 310 g	安山岩
図135-17	土器	Ⅹa2	覆土	—		平縁、横走沈線		
図135-18	土器	Ⅹa1	覆土	—		平縁、表面ヘラミガキ顯著		
図135-19	土器	Ⅹa1	覆土他	—	口径160mm	平縁、表裏とも刷毛目		
図136-20	凹石	Ⅶ b 1	覆土	—	169 mm × 122 mm × 52 mm, 950 g	安山岩		
図136-21	凹石	Ⅶ b 2	覆土	—	174 mm × 84 mm × 55 mm, 825 g	安山岩		
図136-22	砥石	Ⅶ c	床面他	189他	157 mm × 65 mm × 16 mm, 325 g	硬質砂岩		
図137-23	石鏝	I b 3	床面	225	35 mm × 14 mm × 3 mm, 1.6g	黒曜石		
図137-24	石鏝	I c 4	床面	103	70 mm × 23 mm × 9 mm, 11.2g	硬質頁岩		
図137-25	石鏝	Ⅱ a	床面	172	28 mm × 28 mm × 8 mm, 5.9g	黒曜石、角縁の自然面残存		
図137-26	内形土器片	I g 1	覆土	—	56 mm × 51 mm × 8 mm, 23.4g	恵山式土器(縁部破片利用、横走沈線、器状異文)		
図137-27	石鏝	I b 3	覆土	—	(30)mm × 13 mm × 4 mm, (0.5)g	黒曜石、先端部若干欠損		
図137-28	ナイフ	Ⅱ b	覆土	—	50 mm × 32 mm × 11 mm, 16.8g	硬質頁岩		
図137-29	石鏝	Ⅱ a	覆土	—	34 mm × 27 mm × 9 mm, 6.9g	黒曜石、縁部若干欠損、凹縁による自然面残存		
図137-30	石鏝	Ⅱ a	覆土	—	26 mm × 32 mm × 11 mm, 5.0g	黒曜石		

穴は、壁際より1.35m南にあり、径25cm、深さ20cm程である。床面中央部より北西側からは、35cm×25cm程の地床炉とみられる焼土も確認された。柱穴様の小ピットが5個検出された。また、東側には1.50m×35cm程の溝も確認された。

SH-9からは総数で2,649点の遺物が出土した。そのうち、2,254点が土器で、201点がフレイクである。図133・134のように、床面からはセット関係を示す良好な土器が伴出した。

床面・カマドの焼土・地床炉・溝・ピットのソイルサンプルでフローテーションを実施したところ、コメ・アワ・ヒエ・キビ他の植物遺体が出検された。特に溝から比較的多くの遺体が出検(第5章第3節参照)されたことから、この溝の性格について、更に詳細に検討すべきかもしれない。また、当該遺構は、溝というよりは竅穴に伴う土壌あるいは溝状ピットと呼ぶ方が相応しいと考えられる。

SH-10 U25Gridで検出されたが、本来はT25Gridにも跨っていたと考えられる。後世の攪乱で破壊されており、南西隅周辺部のみ残存していた。したがって、検出状況図を図示していないので、図3で位置関係等は、ご確認頂きたい。竪穴は、GP-64を切って構築されており、現存部分は90cm×50cm程にすぎない。おそらく、1辺3m前後の隅丸方形の竪穴ではなかったかと類推される。壁高は概ね22cmである。

出土遺物総数は、わずかに24点であり、フレーク1点と海獣骨1点を除く全点は、縄文期と擦文期の土器片であった。ほとんどが覆土遺物であるが、どちらかという区群a3類土器の時期かと考えている。図示した遺物は皆無である。

SH-11 R23・S23Gridに跨って検出された。西側壁の一部が攪乱を受けているが、南北4.12m、東西3.42m程の隅丸長方形プランを呈する竪穴である。壁高は約40cmで、カマドは検出(写真14-77, a), 図138)されなかったが、竪穴中央西側から径1m程の地床炉が確認された。柱穴他の小ピットは8個検出された。

本竪穴からは、合計987点の遺物が出土したが、内760点が土器、190点がフレークである。床面からは、図140-1・2のような土器が出土しているが、2の時期、つまり、区群a1類土器期の竪穴とみられる。床面出土の当該期の土器は、他にも数点出土しているが、小破片のため図示していない。注目すべき遺物としては、床面伴出の石鏃(図140-3)がある。図のような

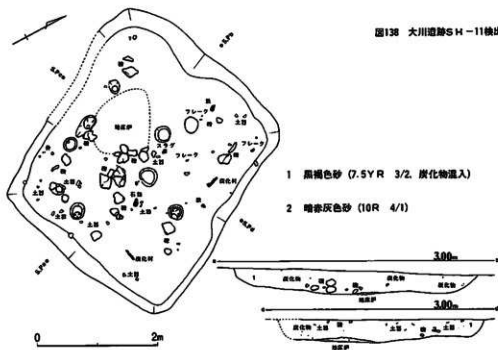


図138 大川遺跡SH-11検出状況





床がとみられる焼土が確認された。また、柱穴他の小ピット等は確認されなかった。攪乱による大部分の喪失にもかかわらず、遺物総数は437点と、比較的多く、土器が386点、フレークが47点他の内訳であった。図141-6・7が床面伴出の土器であり、当該期の竪穴とみられる。

SH-13 R23・24, S23・24Gridに跨って検出された。SH-11の西側に隣接している。南北3.42m、東西3.02mと小振りの隅丸長方形プランを呈する。南東壁隅には幅90cm程の張り出し部が検出(写真15, 図139)され、出入口と考えられる。この出入口部分の確認面からの深さは、概ね12cmであった。壁高は、約30cmでカマドは検出されなかったが、中央よりやや南側に地床が検出された。

柱穴他の小ピットは5個あり、内2個が支柱穴とみられる。焼失竪穴であり、南側部分からは炭化材及び炭化米の集中が認められた。出入口とみられる部分からは、470g程の炭化ソバの集中(写真15-a)も認められた。床面・地床が・ピット及び覆土中の土でフローテーションを実施したところ、コメ・ヒエ・アワ・ソバ・キビ他の大量の遺体が確認(第5章第3節参照)され

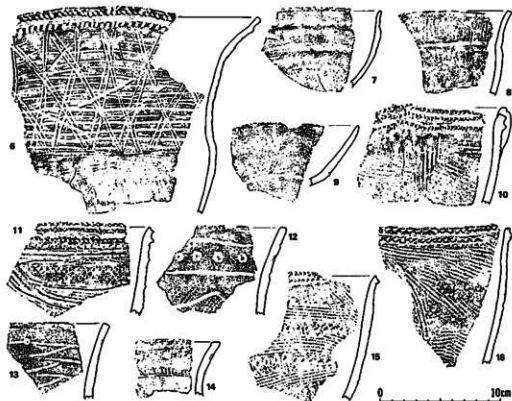


図141 大川遺跡SH-12(6~11)・SH-13(12~15)・SH-14(16)床面及び覆土出土の土器



図142 大川遺跡 SH-15 (17~23)・  
SH-16 (24・25) 床面及び覆土出土の土器・石器

た。本竪穴の植物遺体の大量の伴出は、道内最多であることは言うまでもないことである。

合計975点の遺物が出土した。土器が742点、フレイクが185点他である。しかし、図139のように炭化種子以外の床面伴出遺物は少ない。しかし、Ⅸ群a1類の小破片を図示していないが床面から出土している。したがって、SH-2・6・8・9・11と同様の時期の竪穴とみられる。特に、SH-6とは出入口部とみられる張り出し部の存在という点でも類似性がある。

SH-13については、<sup>14</sup>C年代測定を炭化米・炭化ソバ及び炭化材の3点について実施した。詳細については第5章第1節を参照願いたい。また、伴出炭化材の樹種同定についても第5章第4節を参照願いたい。

SH-14 U21・V21Gridに跨がって検出された。後世の攪乱及びMO-7により、竪穴

主体部が切られており、煙道部分のみの検出となってしまった。したがって、遺構検出図は省略し、図3でプランや位置関係を確認頂きたい。

煙道は現存で長さ1.66m、幅66cm、確認面からの深さが37cm程であった。煙道は煙出し穴に向けて傾斜が上向きになっていた。煙道の規模や周囲の遺構の配置等から、径4m前後の隅丸方形プランの竪穴であったと類推される。煙道部分のみとはいえ、合計327点の遺物が出土した。しかし、この竪穴の煙道が構築された時期を特定するのは難しい。図141-16と図143-33が図示した本竪穴の煙道出土の遺物であるが、正確には煙道の覆土遺物ということになる。

SH-15 H38・39・40, I38・39・40Gridに跨って検出された。南東側の概ね半分を後世の攪乱によって切られているが、径約6.75m×4.50m、壁高約18cmの南北に長い隅丸長方形を呈する竪穴と推察される。床面中央より西側から1m×90cm程の炭混りの焼土が確認された。南側部分からは、柱穴様の小ビットとみられるものが5個、それぞれ径10cm~20cm、深さ5cm~

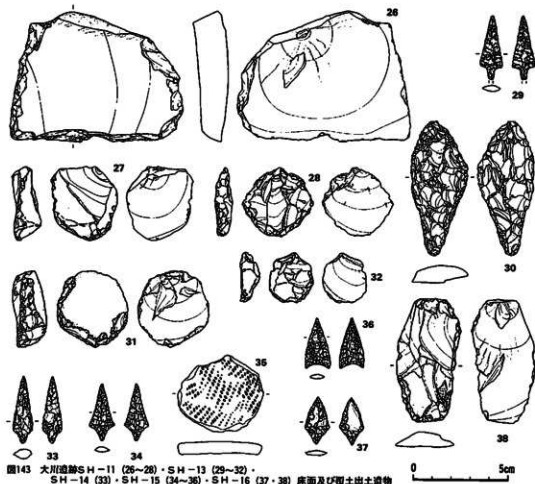


表19 大川遺跡SH-11 (1~5・26~28)・SH-12 (6~11)・SH-13 (12~15・29~32)・

SH-14 (16・33)・SH-15 (17~23・34~36)・SH-16 (24・25・37・38) 出土遺物一覧

図番号	種別	分類	解位	遺物番号	各部の大きさ (mm) と重さ (g)	備 考
図10-1	土器	V e 4	床面他	41他	(132)mm×72mm×54mm,(690)g	キザミ、微隆起線、帯状縄文
図10-2	土器	IX a 1	床面他	86他		平縁、竹管文、ヘラミガキ類著
図10-3	石器	X b 1	床面	24		安山岩、被熱のため赤色化
図10-4	土器	V f 3	覆土	—		平縁、(イヤイ)実線文、沈線、平縁竹管、L.R斜行縄文
図10-5	土器	V f 3	覆土	—		平縁、イヤイ実線文、系線文、L.R斜行縄文
図10-6	土器	IX a 3	床面	58・72	(99)mm×(46)mm×23mm,(700)g	キザミ、横走沈線、斜行沈線、表面ともヘラミガキ
図10-7	土器	IX b 3	床面	85		内周土師器環、器表面赤色化
図10-8	土器	IX a 1	覆土	—		平縁、刷毛目
図10-9	土器	IX b 1	覆土	—		内周土師器環、段状沈線
図10-10	土器	V e 4	覆土	—		キザミ、微隆起線、三角列点、帯状縄文、突起
図10-11	土器	V e 4	覆土	—		キザミ、微隆起線、三角列点、帯状縄文
図10-12	土器	V f 2	覆土	—		平縁、横走沈線、竹管文、L.R斜行縄文
図10-13	土器	V f 2	覆土	—		平縁、竹管文、沈線文
図10-14	土器	IX a 1	覆土	—		平縁、イヤイ実線文、連続実線、表面ともヘラミガキ
図10-15	土器	V e 4	覆土	—		キザミ、微隆起線、三角列点、帯状縄文
図10-16	土器	V e 4	埋道	—	内周土師器環、刷毛目、三角列点、沈線文、L.R斜行縄文	
図10-17	土器	IX a 2	床面	106	(99)mm×(46)mm×23mm,(700)g	平縁、横走四線文、表面とも刷毛目
図10-18	土器	IX a 3	床面	106他		平縁、横走沈線、斜行沈線
図10-19	土器	IX b 4	床面	214他		土師器環
図10-20	土器	IX b 1	床面	67		内周土師器環、口縁部及び胴部に段あり
図10-21	石器	V a 1	床面	249		ホルンフェルス(熱変成岩)、各部欠損
図10-22	門石	V b 1	床面	253		石質安山岩、門部深い
図10-23	土器	IX a 2	覆土	—		キザミ、横走沈線
図10-24	土器	V a 3	床面	196		L.R斜行縄文
図10-25	土器	IX b 1	床面	116		坏蓋破片
図10-26	播磨	III a	覆土	—		硬質砂岩、基部に自然面残存
図10-27	播磨	III a	覆土	—	92mm×69mm×16mm, 16.4g 黒曜石、球顆著干泥入、角礫の自然面残存、パルマ残存	
図10-28	播磨	III a	覆土	—	37mm×37mm×9mm, 9.8g 黒曜石、球顆混入、角礫の自然面残存	
図10-29	石器	I b 3	床面	—	(34)mm×12mm×3mm,(0.9)g 頁岩、柄部若干欠損	
図10-30	ナイフ	II b	覆土	—	71mm×30mm×9mm, 18.0g 黒曜石、球顆若干混入	
図10-31	播磨	III a	覆土	—	40mm×37mm×16mm, 28.2g 黒曜石、円礫の自然面大きく残存	
図10-32	播磨	III a	覆土	—	26mm×37mm×9mm, 5.1g 黒曜石、角礫の自然面大きく残存	
図10-33	石器	I b 3	埋道	—	35mm×10mm×5mm, 1.2g 黒曜石、球顆多く混入	
図10-34	石器	I b 3	床面	153	30mm×13mm×2mm, 0.7g 黒曜石	
図10-35	円形土器片	I g 1	覆土	—	40mm×45mm×6mm, 14.2g 大溝のないC式と認められる片を判別、L.R斜行縄文	
図10-36	石器	I b 2	覆土	—	27mm×13mm×2mm, 5.2g 黒曜石	
図10-37	石器	I b 4	覆土	—	25mm×13mm×2mm, 0.6g 黒曜石、球顆混入	
図10-38	播磨	III a	床面	96	65mm×32mm×8mm, 21.0g 頁岩、アスファルト状の付着物若干残存	

10cm程度のものが検出された。尚、攪乱部分が多く、ほとんどの壁の立ち上がりも確認できなかったため、遺構検出図を掲載していないが、遺物総数は775点を数え、うち土器が681点、ブレイク77点、石器が9点他である。図142-17~20が床面出土の遺物である。したがって、これらの内、最も後出のものが、本竈穴の年代ということになる。

本竪穴の焼土から、アワ・ヒエ・キビ等、若干の遺体が検出（第5章第3節）されている。

SH-16 J39・40Gridに跨がって検出された。上面は、ほとんど削平されており、床面のみの検出であり、遺構検出図を掲載していないので、位置関係等とともに図3を参照願いたい。径は、5m×4m前後で、隅丸長方形様のプランを有する竪穴と考えられる。床面北側に2個、西側と南東側に各1個、径20cm前後、深さ18~25cmの柱穴様の小ピットを検出したが、地床炉等は確認されなかった。

SH-16の出土遺物総数は、734点であった。うち、土器が630点、フレイクが87点、石器が7点他である。床面からは、各時期の土器が出土しているが、古手の坏の破片が数点出土してお

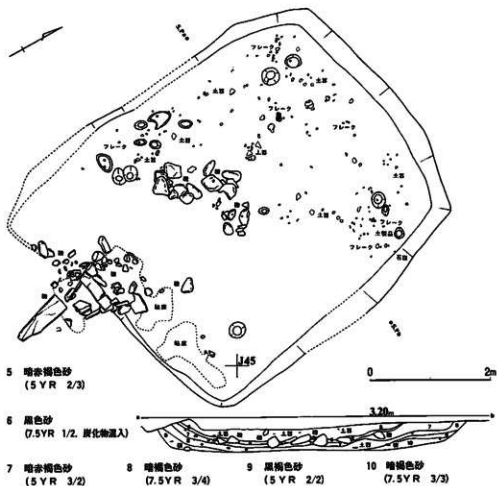


図144 大川遺跡SH-17検出状況

り、図142-25の土器の時期の竪穴とみられる。

SH-16床面の小ピットのソイルサンプルをフローテーションしたところ、コメ・アワ・ヒエ・キビ・ソバ他の遺体が若干検出された。第5章第3節を参照願いたい。

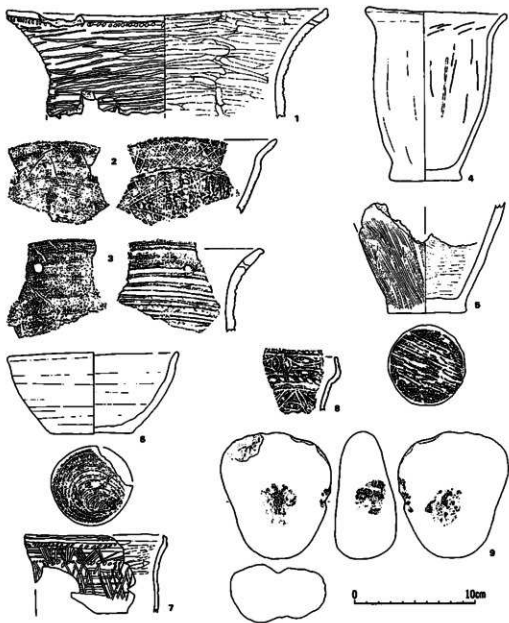


図145 大川遺跡SH-17床面及び掘土出土の土器と石器

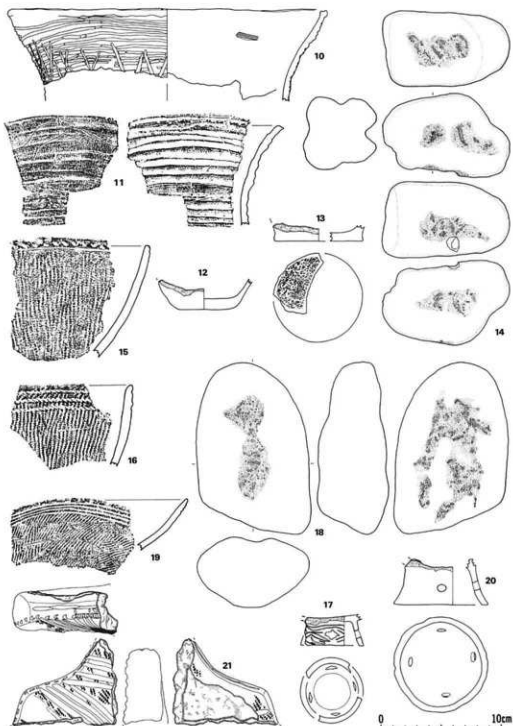


図146 大川遺跡SH-17層土出土の土器・土製品と石器

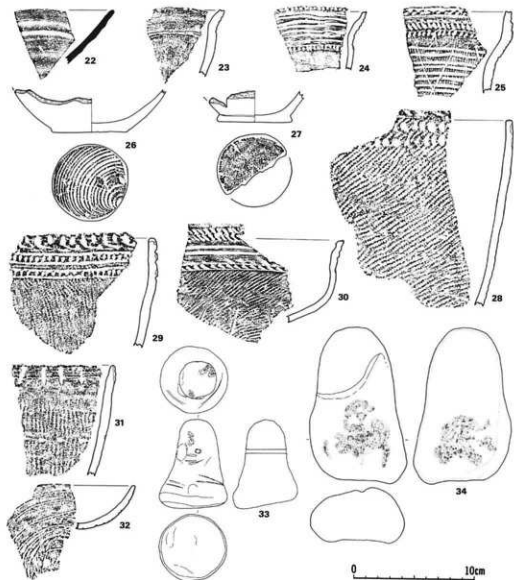


図147 大川遺跡SH-17覆土出土の土器・土製品と礎石

**SH-17** I 45・46, J 45・46, K 45・46 Grid に跨って検出された。東西壁は後世の擾乱、南壁は矢板によって切られている。南北5.90m、東西5.06m程の隅丸長方形プランを呈する。確認面からの壁高は50cm前後であるが、覆土上面より床面までの最も深い部分で92cm程を測る。床面北東隅に径30cm、深さ32cm、南東隅に径28cm、深さ47cm程の柱穴様のビットが確認された。その他に、西壁ほぼ中央部周辺に径20～25cm程の小ビット9個を含め、合計13個の小ビットが検出された。

出土遺物の合計は、7,047点でSH中最多である。図145-1・3・4・5・6等が本竪穴の時期とみられる。特に、カマドのソイルサンプルをフローテーションしたところ、コメ・アワ・ヒエ・キビ他の植物遺体が比較的多く検出（第5章第3節参照）された。



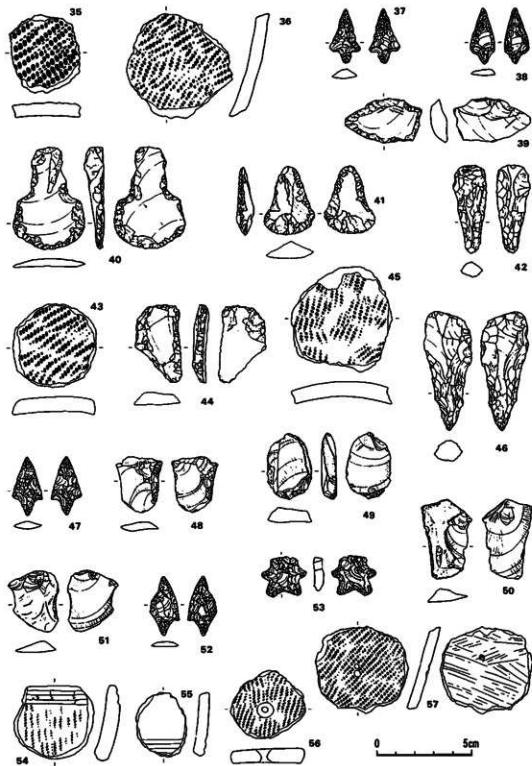


図148 大川遺跡SM-17床面及び掘土出土の土製品と石器

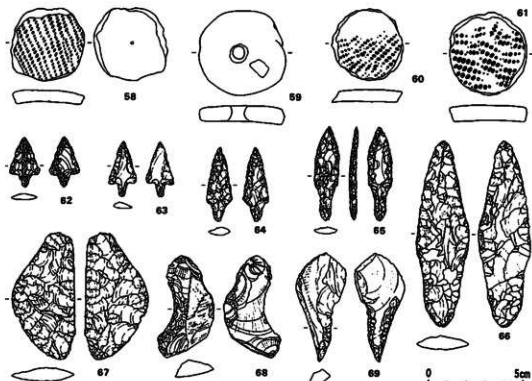


図149 大川遺跡SH-17出土の土製品と石器

表20 大川遺跡SH-17出土遺物一覽

図番号	種別	分類	刷位	遺物番号	各部の大きさ (mm) と重さ (g)	備考
図16-1	土器	Ⅸa 2	床面他	244他	底径65mm 口径143mm, 底径69mm, 高さ67mm	平埴, キヤミ, 横走沈線(粗線)
図16-2	土器	Ⅸa 1	床面	260		平埴, 網目状沈線, 連続刺突, 裏面刷毛目
図16-3	土器	Ⅸa 2	床面	250		平埴, 網目孔, 西脇文, 器表に赤色顔料・部残存
図16-4	土器	Ⅸa	床面他	96他		平埴, 深鉢
図16-5	土器	Ⅸa 2	床面	200		表裏とも刷毛目, 底面凹凹痕
図16-6	土器	Ⅸb 3	床面他	69他		内黒土師器環, 底部糸切
図16-7	土器	Ⅸa 4	10他	—	平埴, 連続刺突, 斜位の沈線	
図16-8	土器	Ⅸb 2	7解	—	平埴, 曲線, 連続刺突, 袖珍土器	
図16-9	閉石	Ⅸb 3	8解	—	104 mm × 92 mm × 48 mm, 370 g 安山岩	
図16-10	土器	Ⅸa 3	8解	—	口径265mm,	平埴, 横走沈線(粗線), 網目状沈線, 口部改線
図16-11	土器	Ⅸa 2	7解他	—	底径47mm,	平埴, 段状沈線, 裏面刷毛目
図16-12	土器	Ⅸb 2	7解	—		内黒土師器環
図16-13	土器	Ⅸb 5	7解	—	107 mm × 69 mm × 60 mm, 720 g	内黒土師, 底面刻線, 砂底?
図16-14	閉石	Ⅸb 4	7解	—		安山岩
図16-15	土器	Ⅸa 3	6解	—	高台部径43mm	キヤミ, 横走沈線, L.R縦行縄文
図16-16	土器	Ⅸa 3	6解	—		縄文, L.R縦行縄文
図16-17	土器	Ⅸa	6解	—	150 mm × 93 mm × 61 mm, 720 g	台付土器, 4窓有, 屈曲状沈線
図16-18	閉石	Ⅸb 3	6解	—		安山岩
図16-19	土器	Ⅸa 3	5解	—	高台部径55mm	横走沈線, L.R斜行縄文, 浅鉢
図16-20	土器	Ⅸa	5解	—		台付土器, 4円孔有, 無文

図番号	種別	分類	層位	遺物番号	各部の大きさ (mm) と重さ (g)	備 考
図14-21	土製品	I a 3	4 層	—	—	平盤竹管、沈蝕、破片
図14-22	須 恵 器	Ⅴ b	覆土	—	—	瓠口縁部破片
図14-23	土 器	Ⅵ a 1	覆土	—	—	剣歯状沈蝕文のある土師器、深鉢
図14-24	土 器	Ⅵ a 2	覆土	—	—	キズミ、横走沈蝕、連続刺突、表面ヘラミダシ、深鉢
図14-25	土 器	Ⅵ a 4	覆土	—	—	キズミ、凹線文、斜位の沈蝕
図14-26	土 器	Ⅵ b 4	覆土	—	底径62mm	内風環、底部未切後「十」の刻線
図14-27	土 器	Ⅵ b 5	覆土	—	底径62mm	内風環、底面刃光線の刻線
図14-28	土 器	Ⅵ b 2	覆土	—	—	平縁、爪形、L R 斜行縄文
図14-29	土 器	Ⅵ a 2	覆土	—	—	キズミ、連続刺突、横走沈蝕、R L 縦行縄文
図14-30	土 器	Ⅵ a 2	覆土	—	—	キズミ、横走沈蝕、連続刺突、L R 斜行縄文
図14-31	土 器	Ⅵ c 2	覆土	—	—	平縁、縄線文、沈蝕文、R L 縦行縄文
図14-32	土 器	Ⅵ b 2	覆土	—	—	平縁、平行ないし渦巻状沈蝕、浅鉢
図14-33	土製品	I e 1	覆土	—	76 mm × 56 mm × 55 mm, 160 g	貫通孔あり、断面無文
図14-34	陶 石	Ⅵ b 2	覆土	—	132 mm × 78 mm × 48 mm, 410 g	安山岩
図14-35	内彩土器片	I g 1	床	133	41 mm × 36 mm × 7 mm, 13.0g	縄文晩期土器割部破片利用、L R 斜行縄文
図14-36	内彩土器片	I g 1	8 層	—	56 mm × 56 mm × 7 mm, 22.0g	縄文晩期土器割部破片利用、L R 斜行縄文
図14-37	石 鏝	I b 3	8 層	—	29 mm × 16 mm × 5 mm, 1.3g	黒曜石、球痕多く混入
図14-38	石 鏝	I b 3	8 層	—	30 mm × 13 mm × 3 mm, 1.1g	黒曜石、球痕若干混入
図14-39	削 器	II c 2	8 層	—	41 mm × (24) mm × 8 mm, (7.0)g	硬質頁岩、柄長削片
図14-40	搔 器	III a	8 層	—	54 mm × 37 mm × 4 mm, (12.8)g	頁岩、側縁部一部割部
図14-41	搔 器	III a	8 層	—	36 mm × 26 mm × 9 mm, 5.8g	黒曜石、球痕多く混入、角磨の自然面大きく残存
図14-42	石 鏝	IV a 1	8 層	—	47 mm × 18 mm × 8 mm, 6.9g	硬質砂岩
図14-43	内彩土器片	I g 1	7 層	—	44 mm × 44 mm × 8 mm, 21.2g	縄文晩期土器割部破片利用、L R 斜行縄文
図14-44	ナイフ	II b	7 層	—	42 mm × 24 mm × 7 mm, 8.4g	硬質頁岩、バルブ除去
図14-45	内彩土器片	I g 1	6 層	—	56 mm × 53 mm × 8 mm, 25.0g	縄文晩期土器割部破片利用、L R 斜行縄文
図14-46	石 鏝	IV a 3	6 層	—	63 mm × 26 mm × 11 mm, 18.6g	硬質砂岩
図14-47	石 鏝	I b 3	5 層	—	31 mm × 16 mm × 4 mm, 1.4g	黒曜石、球痕多く混入、角磨とみられる自然面若干残存
図14-48	削 器	II c 1	5 層	—	30 mm × 24 mm × 4 mm, 3.2g	黒曜石
図14-49	搔 器	III a	5 層	—	30 mm × 23 mm × 8 mm, 7.9g	黒曜石、円磨による自然面残存
図14-50	U . F	I b 3	5 層	—	42 mm × 27 mm × 7 mm, 7.6g	黒曜石、球痕若干混入、角磨の自然面大きく残存、凹部割部
図14-51	R . F	I b 2	4 層	—	32 mm × 27 mm × 6 mm, 5.0g	黒曜石、使用後のフレーを割削、割部に角磨の自然面残存
図14-52	石 鏝	I b 3	3 層	—	31 mm × 16 mm × 3 mm, 1.0g	黒曜石、歪み形状
図14-53	有孔石製品	I a 10	1 層	—	21 mm × 23 mm × 8 mm, 2.3g	黒曜石、角磨の自然の孔を利用、器部と孔に自然面残存
図14-54	内彩土器片	I g 1	覆土	—	39 mm × 43 mm × 8 mm, 13.8g	大洞C <sub>2</sub> 式土器口縁部破片利用、横走沈蝕、連続刺突
図14-55	内彩土器片	I g 1	覆土	—	34 mm × 26 mm × 6 mm, 6.4g	大洞C <sub>2</sub> 式土器口縁部破片利用、横走沈蝕
図14-56	内彩土器片	I g 2	覆土	—	36 mm × 39 mm × 8 mm, 10.0g	縄文晩期土器割部破片利用、両快、L R 斜行縄文
図14-57	内彩土器片	I g 1	覆土	—	46 mm × 49 mm × 5 mm, 14.8g	縄文晩期土器割部破片利用、表面に貫孔あり
図14-58	内彩土器片	I g 1	覆土	—	40 mm × 40 mm × 6 mm, 12.2g	縄文晩期土器割部破片利用、L R 斜行縄文、表面に貫孔あり
図14-59	内彩土器片	I g 2	覆土	—	45 mm × 46 mm × 9 mm, 21.2g	縄文晩期無文土器割部破片利用、両快
図14-60	内彩土器片	I g 1	覆土	—	38 mm × 38 mm × 6 mm, 10.0g	縄文晩期土器割部破片利用、L R 斜行縄文
図14-61	内彩土器片	I g 1	覆土	—	44 mm × 42 mm × 8 mm, 18.2g	縄文晩期土器割部破片利用、両快、L R 斜行縄文
図14-62	石 鏝	I b 3	覆土	—	27 mm × 16 mm × 3 mm, 0.9g	黒曜石、裏面に1次割断面大きく残存
図14-63	石 鏝	I b 3	覆土	—	29 mm × 15 mm × 3 mm, 0.9g	頁岩
図14-64	石 鏝	I b 3	覆土	—	39 mm × 14 mm × 4 mm, 1.6g	黒曜石
図14-65	石 鏝	I b 3	覆土	—	50 mm × 13 mm × 4 mm, 2.3g	黒曜石、花十割
図14-66	石 拍	I e 3	覆土	—	96 mm × 28 mm × 7 mm, 21.4g	頁岩
図14-67	ナイフ	II b	覆土	—	67 mm × 33 mm × 7 mm, 16.6g	赤色磁岩
図14-68	快入削器	II d 1	覆土	—	55 mm × 22 mm × 8 mm, 12.2g	黒曜石、角磨の自然面を大きく残存
図14-69	石 鏝	IV a 3	覆土	—	58 mm × 22 mm × 9 mm, 9.0g	赤色磁岩

図150 大川遺跡SH-18検出状況

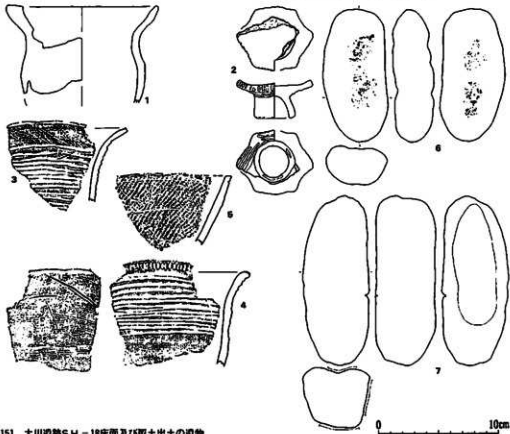
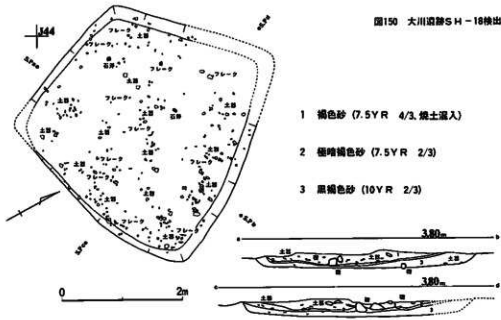


図151 大川遺跡SH-18検出及び覆土出土の遺物

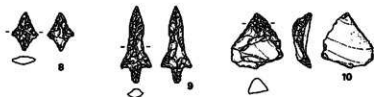


図152 大川遺跡  
SH-18床面及び  
覆土出土の石器

表21 大川遺跡SH-18出土遺物一覧

図番号	種別	分類	層位	遺物番号	各部の大きさ(mm)と重さ(g)	備考
図151-1	土器	Ⅱa 3	床面他	2他	口径35mm, 高さ31mm	平縁, 器表ヘラミガキ, 深縁
図151-2	土器	Ⅱa 3?	床面	46		キザミ, 沈線, 凸付土器?, 横文?
図151-3	土器	Ⅱa 2	覆土	—		粗雑な横志沈線
図151-4	土器	Ⅱa 2	1層	—		キザミ, 凹線文, 表面とも刷毛目
図151-5	土器	Ⅱa 1	床面	71	110mm×52mm×30mm, 200g	平縁, 横志沈線, 弧線文, L R斜行横文
図151-6	陶石	Ⅱb 2	覆土	—		安山岩
図151-7	砥石	Ⅱa	覆土	—	141mm×55mm×51mm, 550g	凝成岩
図151-8	石器	I b 5	床面	—	20mm×14mm×4mm, 0.7g	黒曜石
図151-9	石器	I b 3	床面	—	40mm×16mm×5mm, 1.6g	黒曜石
図151-10	削器	II c 2	1層	—	29mm×27mm×7mm, 4.7g	黒曜石, 角礫の自然面を大きく残存

SH-18 J44, K44・45Gridに跨って検出された。北壁は後世の擾乱によって壊されている。また、上面も削平されているが、径3.60m×3.55m程の不整隅丸方形プランを有するものとみられる。確認面からの壁高は、概ね25~30cmである。

床面の西側には、砂質凝灰岩の広い範囲が認められた。したがって、下部には墓壇が存在する。カマド・地床炉・柱穴ビット等は検出されなかった。本竪穴出土遺物総数は979点であった。そのうち、土器が838点、フレークが128点他である。床面出土の土器等から、Ⅱ群a 3類土器の時期の竪穴と考えられる。図151-2は、非常に稀な器形の土器である。擦文土器のようであるが類例を知らず、容器としての機能は低いので、罌置き等である可能性も否定できない。

SH-19 L44・45・46, M44・45Gridに跨って検出された。1992年度と1994年度の両年度に亘って調査されたこともあり、西側部分は矢板で切られている。南東壁は、MO-16に切られ、GP-854とUP-109, 更にはSX-1の北西部も切って構築されている。

竪穴の大きさは、6.5m×5m程度と類推され、隅丸長方形のプランとみられる。壁高は、20~60cm程度であるが、最深部の床面までの深さは79cmを測る。前述したような理由で、セクションについては、図示していない。

南東壁中央部に45cm×50cm程の焼土範囲と、1.17m×40cm程の煙道を有するカマドが検出された。また、床面中央の北側部分からは、径25cm、深さ26cm程のビットが、東側部分からは、30cm×25cmで深さ31cm程のビットが検出された。双方とも主柱穴とみられる。他に、径5cm~30cm、深さ3cm~25cm程の小ビットが17個検出された。覆土中位からは、ヨシ状の炭化材が広い範囲で確認された。図154-1~3・5と図156-22は、いずれも床面伴出土の土器である。

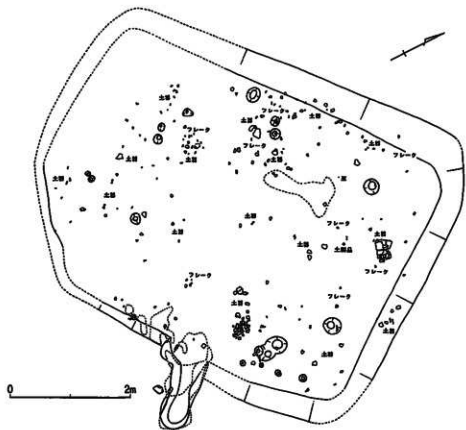


図153 大川遺跡SH-19発出状況



図154 大川遺跡SH-19発出の土器



図155 大川遺跡SH-19覆土出土の土器

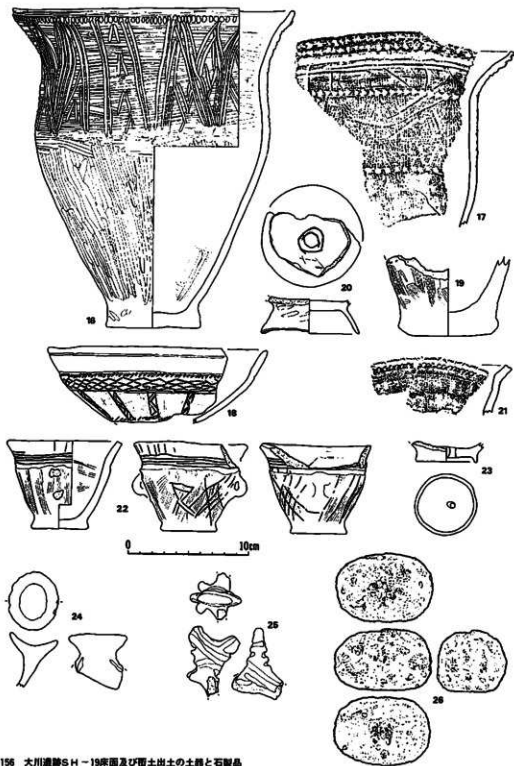


図156 大川遺跡SH-19年調査及び習土出土の土器と石製品



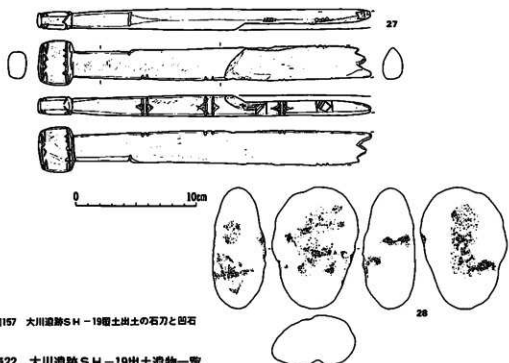


図157 大川遺跡SH-19層出土の石刀と凹石

表22 大川遺跡SH-19出土遺物一覧

図番号	種別	分類	層位	遺物番号	各部の大きさ (mm) と重さ (g)	備 考
図154-1	土	Ⅸ a	床 面	10	口径128mm, 底径56mm, 高さ142mm	キザミ, 深鉢
図154-2	土	Ⅸ a 2	床面地	210他	底径57mm, 高さ121mm	平鉢, 凹縁文, 表面ヘラミガキ
図154-3	土	Ⅸ a 2	床 面	116	口径 51mm,	平鉢, 段状沈線, 表面ヘラミガキ
図154-4	土	Ⅸ a 2	床 面	7		粗雑な横走沈線, 表面刷毛目
図154-5	土	Ⅸ a 2	床 面	6.8		平鉢, 粗雑な横走沈線, 表面ヘラミガキ
図155-6	土	Ⅸ a	8 層	—	口径 51mm, 底径30mm, 高さ 43mm	平鉢, 2孔有, 袖珍土器
図155-7	土	Ⅸ a 3	8層地	—		キザミ, 連続刺突, 横走沈線, 表面毛目, 裏ヘラミガキ
図155-8	土	Ⅸ a	8層地	—		口付部と胴部に横走沈線, 表面毛目, 裏ヘラミガキ
図155-9	土	Ⅸ a	7 層	—	底径55mm	表面刷毛目, 底部4ヶ所の切り込み
図155-10	土	Ⅸ b 2	7 層	—	底径45mm, 底孔 5mm	底部有孔, 無文?
図155-11	土	Ⅸ a 3	5 層	—		平鉢, キザミ, 横走沈線に縦・斜位の刺突, 表面毛目
図155-12	土	Ⅸ a	4 層	—	底径48mm	表面刷毛目, 裏ヘラケズリ
図155-13	土	Ⅸ a 3	4 層	—		平鉢, 横走沈線, R L縦行縄文
図155-14	土	Ⅸ a 3	4 層	—		キザミ, I, R斜行縄文
図155-15	土	Ⅸ a	4 層	—		同心円状沈線, 地文は無文
図156-16	土	Ⅸ a 3	3 層	—	口径235mm, 底径79mm, 高さ265mm	平鉢, キザミ, 横走沈線, 斜位の沈線, 表面ヘラミガキ
図156-17	土	Ⅸ a 4	3 層	—		平鉢, 連続刺突, 縦・横・斜位の沈線, 表面毛目, 裏ヘラミガキ
図156-18	土	Ⅸ b 5	2-3層地	—	口径183mm	高杯, 横走沈線, 連続刺突, 縦横状沈線
図156-19	土	Ⅸ b	3 層	—	底径82mm	胎土に石英粒と小砂多
図156-20	土	Ⅸ a	3 層	—	底径82mm	底部内面二重丸, 無文
図156-21	土	Ⅸ a	4 2 層	—		平鉢, キザミ, 縦位・斜位の沈線, 表面ヘラミガキ
図156-22	土	Ⅸ a 1	床 面	2	口径96mm, 底径46mm, 高さ 72mm	2把手付深鉢, 表面刷毛目, 横走沈線, 刺突
図156-23	土	Ⅸ a	1 層	—	底径51mm, 底孔 7mm	台付土器底部破片, 底部有孔
図156-24	土	Ⅸ c	覆 土	—	突起径48mm×41mm	楕円形突起, 沈線
図156-25	土	Ⅸ b 4?	覆 土	—		浅鉢突起

図番号	種別	分類	層位	遺物番号	各部の大きさ (mm) と重さ (g)	備 考
図56-26	燧石?	I e 2	覆土	—	81 mm×57 mm×58 mm, 180 g	流紋岩。凹部あり。燧石の可能性あるが軽量
図56-27	石 刀	I b 3	覆土他	—	(276)mm×(29)mm×(16)mm.	粘板岩。割線あり。1/3程度の破片?
図56-28	凹 石	Ⅱ b 4	覆土	—	101 mm×69 mm×43 mm.	安山岩
図56-29	石 鏃	Ⅳ a 3	7 層	—	54 mm×19 mm×5 mm, 5.4g	硬質頁岩
図56-30	土製品	I a 1	6 層	—	—	土鍋胴部?。無文
図56-31	円形土器片	I g 1	6 層	—	37 mm×39 mm×6 mm, 9.7g	縄文晩期中葉の上層の底部破片を利用。L・R斜行縄文
図56-32	円形土器片	I g 1	6 層	—	32 mm×35 mm×8 mm, 8.2g	縄文晩期中葉の上層の底部中央部を利用。無文
図56-33	円形土器片	I g 1	5 層	—	32 mm×31 mm×8 mm, 8.9g	縄文晩期中葉の上層の底部破片を利用。R・L斜行縄文
図56-34	播 磨	Ⅲ a	3 層	—	23 mm×29 mm×6 mm, 4.2g	黒曜石。バルブ除去
図56-35	石 鏃	I b 3	1 層	—	27 mm×13 mm×4 mm, 1.0g	黒曜石。球根形下欠損
図56-36	円形土器片	I g 1	覆土	—	29 mm×39 mm×9 mm, 13.2g	大洞 C <sub>2</sub> 式土器口縁部破片を利用
図56-37	円形土器片	I g 1	覆土	—	47 mm×45 mm×6 mm, 19.6g	大洞 C <sub>2</sub> 式土器口縁部破片を利用。L・R・L斜行縄文
図56-38	石 鏃	I b 2	覆土	—	(37)mm×14 mm×2 mm, (1.3)g	黒曜石。先端部若干欠損
図56-39	石 鏃	I b 3	覆土	—	41 mm×13 mm×6 mm, 2.2g	黒曜石
図56-40	播 磨	Ⅲ a	覆土	—	51 mm×29 mm×11 mm, 13.0g	黒曜石。角端の自然縮込(現存)。バルブ残存。球根形下欠損
図56-41	播 磨	Ⅲ b	覆土	—	25 mm×32 mm×4 mm, 3.7g	黒曜石
図56-42	播 磨	Ⅲ b	覆土	—	72 mm×71 mm×17 mm, 101.5g	硬質砂岩。バルブ残存
図56-43	石 鏃	Ⅳ a 3	覆土	—	(58)mm×(20)mm×4 mm, 5.4g	硬質頁岩。基部欠損

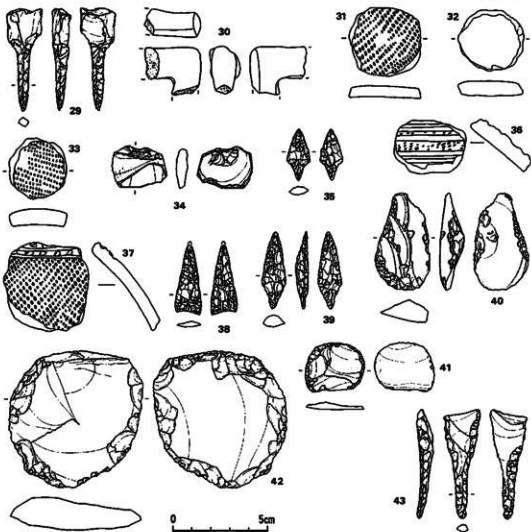


図158 大川遺跡SH-19層土出土の土製品と製片石器

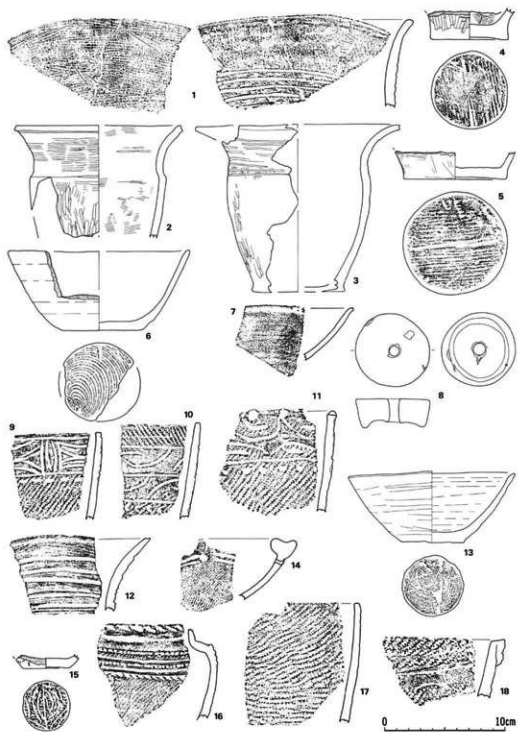


図159 大川遺跡SH-20床面及び覆土出土の土器と土製品

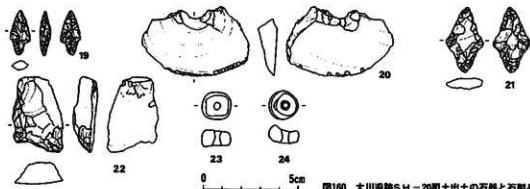


図160 大川遺跡SH-20層出土の石器と石製品

表23 大川遺跡SH-20出土遺物一覧

図番号	種別	分類	層位	遺物番号	各部の大きさ (mm) と重さ (g)	備 考
図19-1	土器	Ⅹa2	床面	179		表裏刷毛目、横走沈線
図19-2	土器	Ⅹa2	床面他	122他		口縁部ココナテ、表裏刷毛目
図19-3	土器	Ⅹa2	床面他	55他	高さ130mm	横走沈線、表面へうし目、裏面刷毛目、底面刷毛目
図19-4	土器	Ⅹa2	床面	245	口径65mm	表裏刷毛目、底面刷毛目
図19-5	土器	Ⅹa2	床面	82	口径85mm	表裏刷毛目、底面刷毛目
図19-6	土器	Ⅹb4	床面	302他	口径60mm、高さ67mm	内環土師器環、底面未切
図19-7	土器	Ⅹb3	床面	58		土師器環口縁部
図19-8	特殊	Ⅱa1	床面	268	上口径61mm、下口径57mm、厚さ24mm	無文、上底面抉入
図19-9	土器	Ⅴa1	床面	39		横走沈線、縦線文、連続刺突、L・R斜行縄文
図19-10	土器	Ⅴa1	床面	84		横走沈線、縦線文、平歯竹管、R・L斜行縄文
図19-11	土器	Ⅴa1	床面	266		キザミ、横走沈線、縦線文、連続刺突、L・R斜行縄文
図19-12	土器	Ⅹa2	覆土	—		口縁部沈線、平縁、横走沈線、表裏刷毛目
図19-13	土器	Ⅹb4	覆土	—	口径130mm、口径51mm、高さ59mm	未切土師器環
図19-14	土器	Ⅴa2	覆土	—		突起、沈線、連続刺突、右孔、L・R斜行縄文
図19-15	土器	Ⅴa1	覆土	—	口径39mm	縦線文、L・R斜行縄文
図19-16	土器	Ⅴa2	覆土	—		キザミ、連続刺突、横走沈線、L・R斜行縄文
図19-17	土器	Ⅴa1	覆土	—		平縁、L・R斜行・横行縄文
図19-18	土器	Ⅴa4	覆土	—		平縁、貼付帯、縄線文、L・R斜行縄文
図20-19	石器	I b 3	層上	—	23 mm × 11 mm × 4 mm、1.0g	黒曜石、先端部周辺被熱
図20-20	R・F	I b 2	層上	—	37 mm × 57 mm × 10 mm、13.0g	硬質灰岩、第3章第10節参照
図20-21	石器	I b 3	層上	—	34 mm × 20 mm × 6 mm、2.9g	黒曜石、縁割多
図20-22	石器	Ⅲa	層上	—	42 mm × 27 mm × 11 mm、11.8g	黒曜石、角端の自然面大きく残存、縁割多、1/4残存
図20-23	瓦	I a 2	層上	—	14 mm × 15 mm × 9 mm、3.5g	緑岩、平玉、両袂
図20-24	瓦	I a 2	層上	—	15 mm × 15 mm × 8 mm、3.0g	緑岩、平玉、両袂

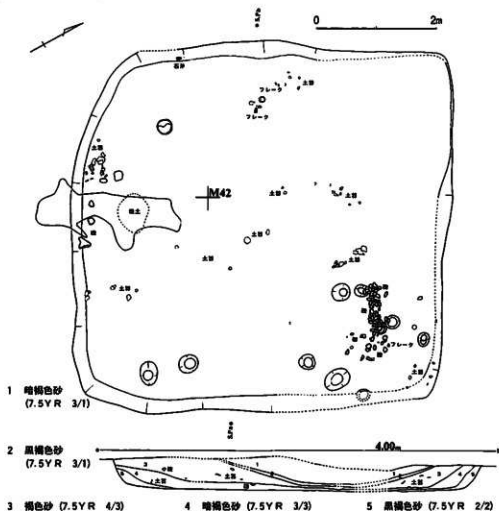
SH-20 I47・48、J46・47・48Gridに跨って検出(図3)された。竪穴中央部はMO-13によって切られている。また、西側は後世の擾乱を受けている。ということもあり、遺構検出状況を図示していない。

竪穴の大きさは、推定5.9m×5.7m前後とみられ、壁高は15~30cmと浅いが、最深部は45cmを測る。床面南西側に1.4m×1.35m程の貼床とみられる粘土範囲が確認された。また、中央部にも1.5m×1.3m程の炭化物が混じる粘土の範囲が確認された。径11~22cm、深さ3~7cm程の浅い小ピットが9個、径11cm、深さ22cmのピットが1個検出された。

カマドのソイルサンプルをフローテーションしたところ、アワ・ヒエ・キビ他の若干の植物遺体が検出（第5章第3節参照）された。図159-1~11が床面出土の遺物であるが、9~11は縄文晩期の土器であり、1~8の遺物が当竪穴の年代を示していると考えられる。

SH-21 M42・43, N42・43Gridに跨がって検出された。竪穴の随所に後世の擾乱を受けているが、6.20m×6.12m程の隅丸方形プランを呈している。確認面からの深さは、概ね51cmを測る。カマドは南西壁中央部分に構築されている。煙道はMO-14によって切られているため、

図161 大川遺跡SH-21検出状況



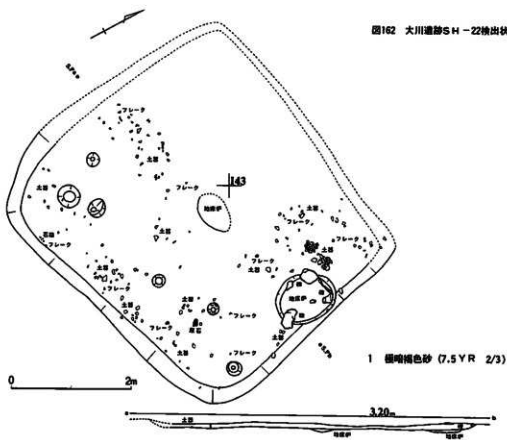
煙穴等は確認できなかった。床面の北西隅に径25cm、深さ39cm、南東隅に径30cm、深さ48cmの2個の柱穴が確認された。他に20～50cmの小ピット9個が検出された。

竪穴東隅には集石(図161)が認められた。礫の径は8cm×5cm前後で57個集まっていた。これらは概ね楕円形の円礫で安山岩であり、石鏝として使用されたものと考えられている。したがって、このスペースがゴザやムシロを纏んだ作業空間とみられる。当該期の竪穴に伴う集石に関しては、「浦祝町郷土博物館報告」第27号 所収の「検文竪穴における集石」を御参照願いたい。

床面出土の土器は、図163-1～3・6・10等であるが、このうち1が本竪穴の時期とみられる。

SH-22 I43・44、J43・44Gridに跨がって検出された。概ね北側の半分が攪乱を受けている(図162)が、現状で東西5.5m、南北4m程の隅丸方形のプランと推察される。確認面からの深さは、最深部で34cmを測る。

床面中央に70cm×40cm程の地床が検出された。また、東壁隅より径20cm、深さ41cmの柱穴を1個確認した。他にも径20～35cm、深さ10～30cm程の小ピットが5個検出された。



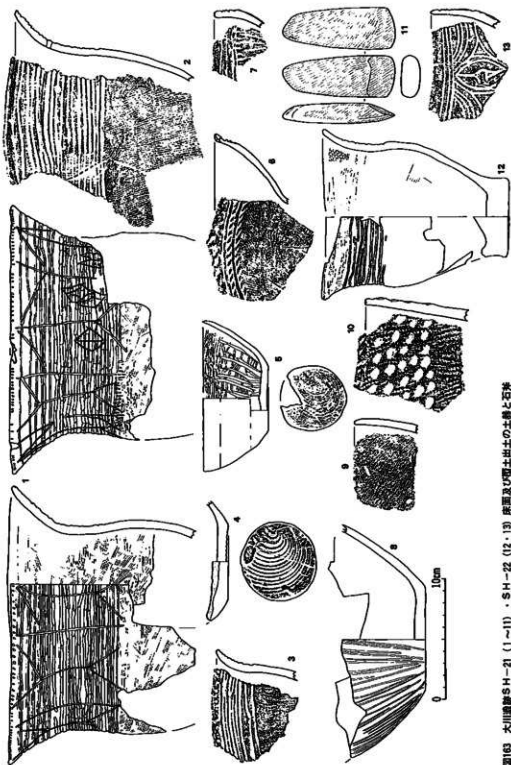


图103 大川産物S H-21 (1~11)・S H-22 (12・13) 床面及び閉土出土の土層と石炭

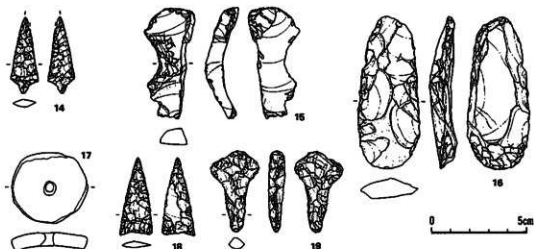


図164 大川遺跡SH-21 (14~16)・SH-22 (17~19) 床面及び掘土出土の遺物

表24 大川遺跡SH-21 (1~11・14~16)・SH-22 (12・13・17~19) 出土遺物一覧

図番号	種別	分類	層位	遺物番号	各部の大きさ (mm) と重さ (g)	備 考
図14-1	土器	Ⅸ a 3	床面	1他	口径 231mm	キズミ、横走沈線、縦位・斜位の沈線、去蓋刷毛目
図14-2	土器	Ⅸ a 2	床面	4他		横走沈線、細條孔、表裏刷毛目
図14-3	土器	Ⅸ a 2	床面	11		キズミ、横走沈線
図14-4	土器	Ⅸ b 3	1 層	—	底径62mm	内黒土師器片、糸切底
図14-5	土器	Ⅸ b 3	4 層位	—	口径 125mm、底径53mm、高さ54mm	内黒土師器片、赤褐色、並行ハシゴキ、SH-21と24の接合
図14-6	土器	Ⅸ a 2	床面	41		小突起、キズミ、横走沈線、L R斜行縄文、浅鉢
図14-7	土器	Ⅸ b 3	3 層	—		横走沈線、条痕というよりは縦の沈線
図14-8	土器	Ⅸ b 3	3 層	—	底径86mm	条痕文
図14-9	土器	Ⅸ a 3	1 層	—		平縁、無節、r縄文
図14-10	土器	Ⅸ b 2	床面	128		連続刺突、R L縦行縄文
図14-11	石斧	V a 2	3 層	—	94 mm× 34 mm× 16 mm、100.0 g	シルト岩、緑色、片刃
図14-12	土器	Ⅸ a 2	床面	12	底径66mm、高さ155mm	平縁、横走沈線
図14-13	土器	Ⅸ a 1	掘土	—		平縁、横走沈線、弧線文、深鉢
図14-14	石器	I b 3	4 層	—	(40)mm× 15 mm× 4 mm、(1.8)g	黒曜石、先端部及び柄部欠損
図14-15	挟入削器	II d 1	3 層	—	58 mm× 28 mm× 9 mm、12.0g	黒曜石、パルプ除去、内側の自然面側部若干残存
図14-16	石器	III c	3 層	—	80 mm× 32 mm× 10 mm、35.4g	硬質砂岩
図14-17	円形土器片	I g 2	2 層	—	38 mm× 40 mm× 7 mm、12.8g	黒文、両缺
図14-18	石器	I b 2	床面	180	42 mm× 17 mm× 3 mm、1.8g	黒曜石、花十膠
図14-19	石器	IV a 3	2 層	—	(43)mm× 26 mm× 6 mm、(6.5)g	黒曜石、つまみ部欠損

本竪穴出土遺物の総数は182点である。図163-12が床面伴出遺物であり、当該期の竪穴とみられる。

地床伊及び床面の小ピットから、アワ・ヒエ・キビ等、若干の植物遺体が検出（第5章第3節参照）された。



図165 大川遺跡SH-23検出状況

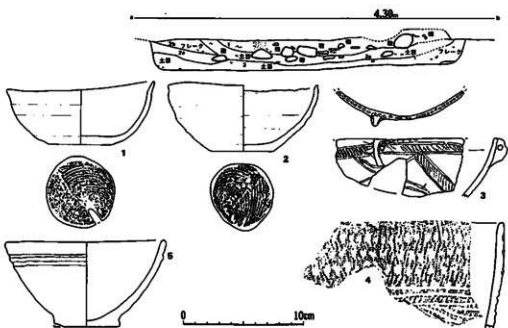
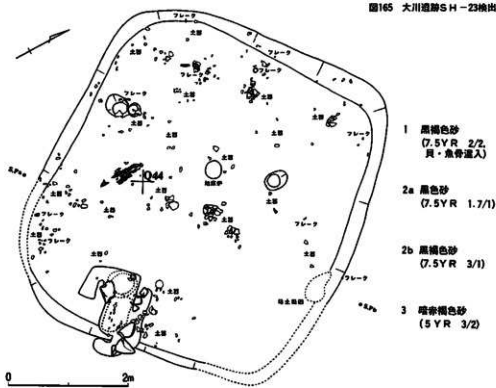


図166 大川遺跡SH-23検出状況及び出土の土器

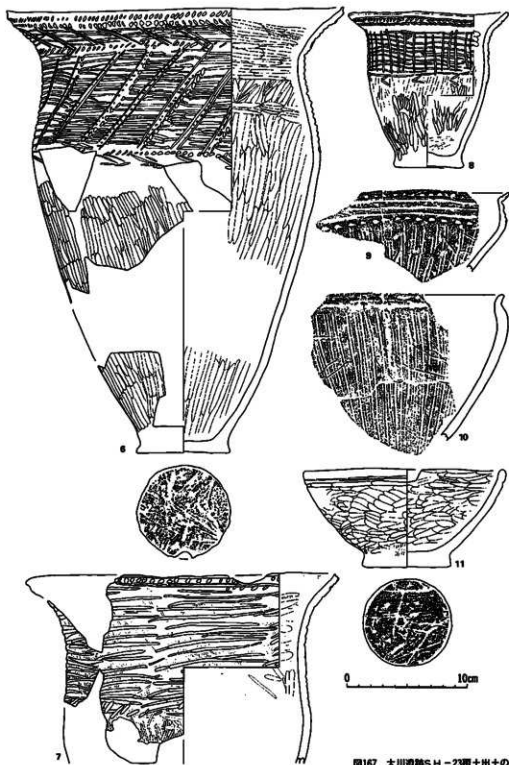
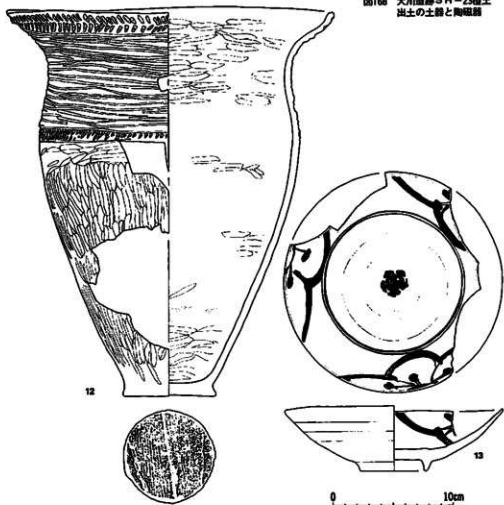


図167 大川遺跡SH-23種土出土の土器

図168 大川遺跡SH-23層土  
出土の土器と陶磁器

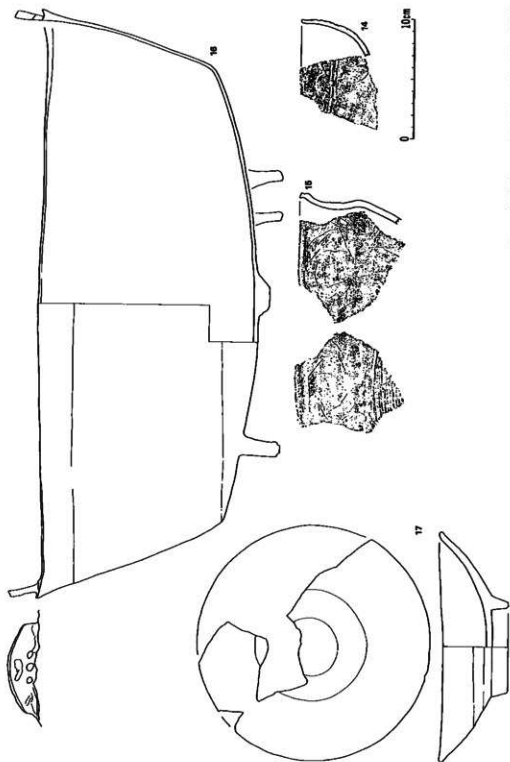


SH-23 Q44・45, R44・45Gridに跨がって検出された。長軸5.6m, 短軸5.2m程の隅丸方形プランを有する。壁高は約44cmを測る。

カマドは南東壁中央に位置し、褐色粘土と2個の袖石により構築されており、煙道も20cm程確認された。床面中央に径30cm×25cm程の地床炉が検出された。また、北側と西側部分に径20cm～30cm程のピット3個が確認された。

本竪穴からは合計2,391点の遺物が出土している。このうち、土器が2,051点、フレークが246点、石器20点、土製品10点、陶磁器15点他である。

床面伴出土器は、図166-1・2であり、当該期の竪穴とみられる。覆土出土の遺物とはいえ、良好な擦文土器が出土している。図167-6・8, 図168-12等である。これらは、器形や表裏のヘラミガキ等の特徴から一括性のある土器と思われる。



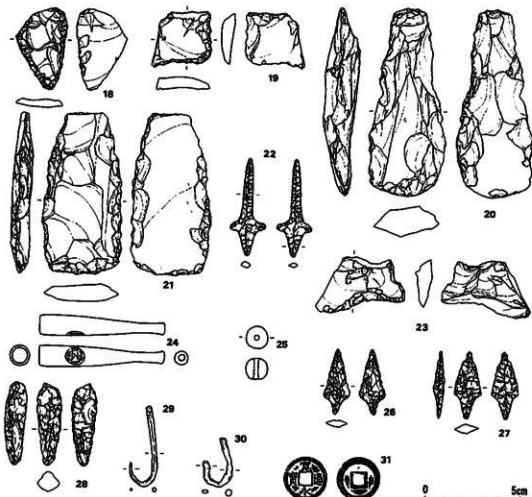


図170 大川遺跡SH-23層土出土の各種遺物

表25 大川遺跡SH-23出土遺物一覧

図番号	種別	分類	層位	遺物番号	各部の大きさ (mm) と重さ (g)	備 考
図16-1	土器	IX b 4	床面	14他	口径 135mm, 底径55mm, 高さ70mm	表面とも磨滅顯著, 土師器環, 未切底
図16-2	土器	IX b 4	床面	13	口径 280mm, 底径78mm	土師器環, 未切底
図16-3	土器	W47?	3層他	38他		L層部刺突, 芝付, 浅鉢, 眉筋, R.L.縦行縄文, 洗滌
図16-4	土器	VI b 2	2・3層	—	L径 134mm, 底径57mm, 高さ130mm	爪形, 平縁, 沈線, R.L.縦行縄文
図16-5	土器	IX b 5	2層	21		内環状, 2本の平行凹線文。
図16-6	土器	IX a 3	2・3層他	61他		キザミ, 横走沈線, 頸内沈線, 着脱刺突, 表面ヘラミガキ
図16-7	土器	IX a 2	2層他	74他	口径 169mm, 底径74mm, 高さ82mm	キザミ, 横走沈線, 表面ヘラミガキ
図16-8	土器	IX a 3	2層	42・47	L径 275mm, 底径77mm, 高さ323mm	平縁, 矢羽根状キザミ, 横走・縦走沈線
図16-9	土器	VI b 3	2層	—	L径 183mm, 底径55mm, 高さ54mm	平縁, 横走沈線, 連続刺突, 条痕
図16-10	土器	VI b 3	1・2層	—		平縁, 条痕
図16-11	土器	IX b 5	2層	65他		口縁部2本の横走沈線, 内環状, 底面磨花痕
図16-12	土器	IX a 2	2層他	62他	口径 490mm, 底径	キザミ, 横走沈線, 表面ともヘラミガキ
図16-13	陶磁器	器c	1層	—	口径490mm, 底径377mm, 高さ225mm	磨面, 身, 笠面, 見込5弁花文コンニャク模様, 縁c磨面
図16-14	土器	VI b 3	壁土	—	口径193mm,	平縁, 刺突, 横走沈線, 条痕, 跡形土師

図番号	種別	分類	層位	遺物番号	各部の大きさ (mm) と重さ (g)	備 考
図169-15	土器	Ⅰa 3	覆土	—	—	平縁、裏面毛目、口縁部ヨコナデ
図169-16	鉄鍋	Ⅱb	覆土	16	口径490mm、底径377mm、高さ225mm	吊耳鉄鍋、三足、丸型湯口
図169-17	陶磁器	Ⅲc	1層他	—	口径193mm、底径76mm、高さ55mm	刷毛目鉢、磨律、蛇ノ目軸壳、18c前半
図170-18	ナイフ	Ⅱb	2層	—	43mm×28mm×4mm、5.6g	黒曜石、赤十勝、バルブ除去
図170-19	削器	Ⅱc 2	2層	—	30mm×33mm×6mm、8.2g	黒曜石、角端の自然面を基部及び側縁部に残存
図170-20	石 瓦	Ⅲc	2層	—	100mm×41mm×19mm、62.5g	硬質砂岩
図170-21	石 瓦	Ⅲc	2層	—	86mm×42mm×9mm、47.2g	硬質砂岩
図170-22	石 錐	Ⅰb 8	1層	—	51mm×18mm×3mm、1.5g	硬質頁岩、基部にアスファルト付着、異部石量、非実用?
図170-23	削器	Ⅱc 2	1層	—	34mm×42mm×9mm、9.1g	黒曜石、基部及び側縁部に角端による自然面残存
図170-24	キセル	Ⅰe 2	1層	—	喉口径大径10mm、喉口径7mm、 径11mm、孔径2mm、3.2g	長さ66mm、銀鍍金?、不明刻印あり
図170-25	ガラス玉	Ⅳa 6	1層	—	—	透明、丸玉、風化顕著
図170-26	石 錐	Ⅰb 3	覆土	—	35mm×14mm×3mm、1.2g	黒曜石
図170-27	石 錐	Ⅰb 3	覆土	—	35mm×14mm×5mm、1.5g	硬質頁岩、先端部欠入
図170-28	石 錐	Ⅳa 1	覆土	—	43mm×11mm×10mm、6.7g	硬質砂岩
図170-29	釣 針	Ⅱa	覆土	—	42mm×14mm×2mm	—
図170-30	釣 針	Ⅱa	覆土	—	26mm×15mm×3mm	—
図170-31	古 鏡	Ⅰb	1層	—	径22mm、孔径17mm	寛永通寶銅鏡

図169-16は、口径48cm程の大きな鉄鍋で、近世の丸型湯口の吊耳鉄鍋であるが、覆土上部(1層)からの出土であり、送ったものである可能性がある。鉄素材としての価値も大きく、リサイクルされていないということは、当時、鉄製品が豊富であったのか、あるいは、比較的貴重であるにもかかわらず、「送る」意義の方が比して重要であったのか、のどちらかであろう。

同様に、図168-13、図169-17、図170-24・25・29-31等が、鉄鍋等と一括して送られた可能性を指摘できる。18c後半前後の年代が陶磁器等から類推される。

図166のセクションの1のように、1層・貝層・覆土からは、動物遺体が、まとまって出土している(第5章第2節参照)。これらの1層・貝層・覆土と標記されているものは、概ね総て1層と考えても大過なきものである。

また、若干の植物遺体(第5章第3節参照)も、床面・貼床・地床炉・カマド・ピット等から検出されている。

SH-24 M44・45, N44・45, O44・45 Gridに跨って検出された。調査区の関係で、1992年度と1994年度の両年度に亘って調査された。本竪穴の遺構検出状況は図示していない。

竪穴中央部分は、MO-10によって切られているため、プラン等については推測になってしまいが隅丸方形で、5.9m×5.7m前後(図3)とみられる。確認面から床面までは、最深度で57cmを測る。南西壁中央に105cm×50cm程のカマドが検出された。SH-24は、SX-1の中央の窪みに構築されている。したがって、SH-24覆土出土の大量の遺物も、SX-1の覆土遺物であったものがあるに違いない。床面出土のⅠ群a 2類土器が本竪穴の時期とみられるが、いずれも破片の為、図示していない。覆土出土ながら、図172-17が当該期のものとみられる。

本竪穴の遺物出土総数は1,842点であり、このうち土器が1,588点を占める。図172-18は、

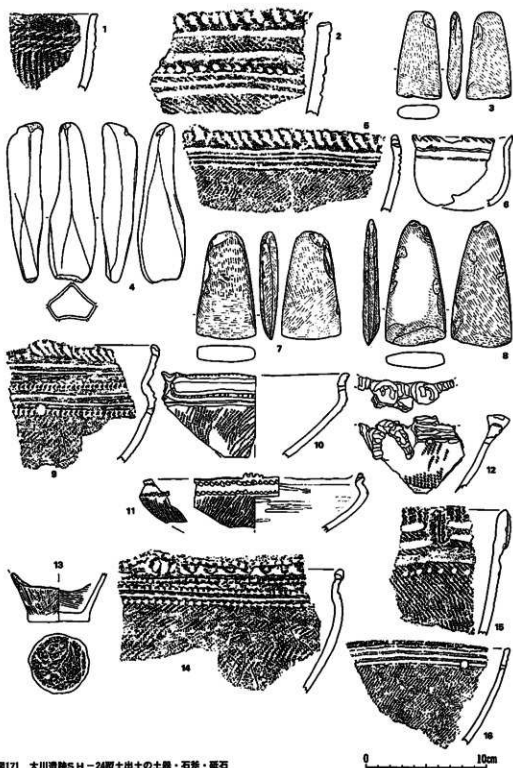


図171 大川遺跡SH-24層土出土の土器・石斧・磁石

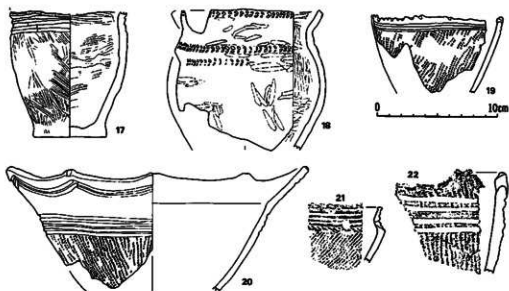


図172 大川遺跡SH-24 (17・18)・SH-25 (19~22) 床面及び甍土出土の土器

本竪穴の甍土出土の土器と遺構外出土土器が接合したものである。図のように特異な土器であるが、縄文文化期相当のものとみられる。胎土・器形・施文他、全く異なる特徴を有している。強いて言えば、オホーツク土器に若干類似する特徴を有している。現在、東京大学大学院生で実見当時ロシア・ハバロフスク地方文化局の考古学者であったジェリュエギン氏が、アムール川流域から出土する土器に酷似するものがあると指摘されている。内外面黒色土器（後述）ともかかわって重要な資料として、注意しなければならないと考えている。

SH-25 N42・43, O42・43Gridに跨がって検出された。南側の約半分をMO-10、西側の一部をSH-31によって切られており、本来は、1辺4.50m前後の隅丸方形プランを有する竪穴であったと類推される。遺構検出図については、前述のような理由から省略した。

壁高は、約20cm、確認面から床面までの最深部は37cmである。柱穴地の小ピットは、6個確認された。いずれも径が10cm~40cm前後のものである。

本竪穴出土の遺物総数は744点であり、そのうち土器が692点を占める。床面出土の土器で本竪穴の時期を示すとみられるものは小破片の為図示していないが、Ⅸ群a3類土器とみられる。

SH-26 J42・43, K42・43Gridに跨がって検出された。竪穴中央部はMO-14によって切られている。また、北西部は近世の攪乱によって削平されているが、竪穴の大きさは5.5m×5m前後の隅丸方形プランで、壁高は25cm、確認面から床面までの最深部は39cmを測る。



表26 大川遺跡 SH-24出土遺物一覧

図番号	種別	分類	層位	遺物番号	各部の大きさ (mm) と重さ (g)	備 考
図17-1	土器	Vc5	6層	—	—	平縁、縄文、R.L.縦行縄文
図17-2	土器	Vc1	6層	—	—	キザミ、横走沈線、連続刺突、R.L.斜行
図17-3	石斧	Va2	6層	—	74 mm × 37 mm × 12 mm, 53.5g	黒色片岩、刃部若干欠損
図17-4	砥石	Dc2	6層	—	133 mm × 38 mm × 28 mm, 110.0g	凝灰質砂岩、8面を使用
図17-5	土器	Va3	4層	—	—	小突起、キザミ、横走沈線、L.R.斜行縄文
図17-6	土器	Va3	4層	—	口径 84mm	キザミ、横走沈線、丸底
図17-7	石斧	Va2	4層	—	89 mm × 49 mm × 13 mm, 100.0g	シルト岩
図17-8	石斧	Va2	4層	—	104 mm × 50 mm × 13 mm, 100.0g	硬質砂岩、基部及び刃部若干欠損
図17-9	土器	Va2	3層	—	—	突起、キザミ、横走沈線、連続刺突、縄孔、L.R.斜行縄文
図17-10	土器	Va2	3層	—	—	小突起、キザミ、横走沈線、L.R.斜行縄文
図17-11	土器	Va2	3・4層	—	—	小突起、連続刺突、L.R.斜行縄文
図17-12	土器	Vc3	3層	—	—	突起、肋付、横走沈線、有孔、L.R.斜行縄文
図17-13	土器	Dc2	3層	—	口径 50mm	底面、葉痕、表裏刷毛目
図17-14	土器	Va2	2層	—	口径 118mm	小突起、キザミ、連続刺突、L.R.斜行縄文
図17-15	土器	Vc1	2層	—	—	縄文、横走沈線、連続刺突、R.L.斜行縄文
図17-16	土器	Va3	2層	—	—	平縁、横走沈線、縄孔、L.R.斜行縄文
図17-17	土器	Dc2	1層	—	口径 61mm	横走沈線、表裏刷毛目
図17-18	土器	Xb	履土	—	口径 118mm	連続刺突、肋付帯、フムール同遺跡に類似? (大塚?)
図17-23	石鏡	Ib3	6層	—	31 mm × 13 mm × 3 mm, 1.0g	黒曜石
図17-24	掘器	IIa	6層	—	38 mm × 33 mm × 10 mm, 10.8g	硬質頁岩、バルブ残存
図17-25	石鏡	IIc	6層	—	87 mm × 35 mm × 9 mm, 50.5g	硬質砂岩
図17-26	削器	IIc2	6層	—	139 mm × 82 mm × 24 mm, 250.0g	硬質頁岩
図17-27	円形石鏡片	Ig1	4層	—	36 mm × 38 mm × 4 mm, 9.8g	縄文中期中葉の土器の削器破片を利用、L.R.斜行縄文
図17-28	挟入削器	II d2	4層	—	36 mm × 23 mm × 4 mm, 3.7g	黒曜石
図17-29	石鏡	Ib2	3層	—	38 mm × 15 mm × 3 mm, 1.6g	黒曜石
図17-30	石鏡	Ib3	3層	—	28 mm × 14 mm × 4 mm, 1.1g	硬質砂岩
図17-31	石鏡	Ib3	3層	—	33 mm × 22 mm × 6 mm, 2.7g	黒曜石
図17-32	彫形石鏡	Ib8	3層	—	25 mm × 12 mm × 4 mm, 1.3g	黒曜石、Ib7に類似するがIb8に縁域を欠く
図17-33	円形石鏡片	Ia1	履土	—	39 mm × 39 mm × 8 mm, 14.8g	縄文中期中葉の土器の削器破片を利用、L.R.斜行縄文
図17-34	削器	IIc1	履土	—	37 mm × 27 mm × 7 mm, 6.6g	黒曜石、バルブ残存、基部に角磨の自然面残存
図17-35	削器	IIc2	履土	—	47 mm × 26 mm × 5 mm, 6.5g	硬質頁岩、横長(異状)削片利用、バルブ除去
図17-36	挟入削器	II d1	2層	—	62 mm × 44 mm × 14 mm, 20.8g	黒曜石、花十瓣
図17-37	指環	Xi9	履土	—	22 mm × 21 mm × 5 mm, 4.9g	青銅製、近世ないしは近代

表27 大川遺跡 SH-25出土遺物一覧

図番号	種別	分類	層位	遺物番号	各部の大きさ (mm) と重さ (g)	備 考
図17-19	土器	Va3	床面地	27他	—	小突起、キザミ、横走沈線、L.R.斜行縄文
図17-20	土器	Vd3	床面地	34他	—	10突起?、横走沈線、R.L.縦行縄文
図17-21	土器	Va3	3層	—	—	横走沈線、縄孔、連続刺突、L.R.斜行縄文
図17-22	土器	Vc3	1層	—	—	突起、横走沈線、R.L.縦行縄文
図17-38	石鏡	Ib3	3層	—	23 mm × 13 mm × 2 mm, 0.6g	黒曜石
図17-39	掘器	IIa	3層	—	49 mm × 40 mm × 14 mm, 25.6g	砂岩、バルブ残存
図17-40	石鏡	Ib3	1層	—	42 mm × 19 mm × 6 mm, 3.3g	黒曜石
図17-41	削器	IIc2	1層	—	78 mm × 35 mm × 8 mm, 18.2g	硬質頁岩
図17-42	掘器	IIa	1層	—	35 mm × 29 mm × 4 mm, 5.2g	黒曜石
図17-43	ガラス玉	Va6	1層	—	径 8 mm, 孔径 3 mm, 3.6g	丸玉、風化銅質

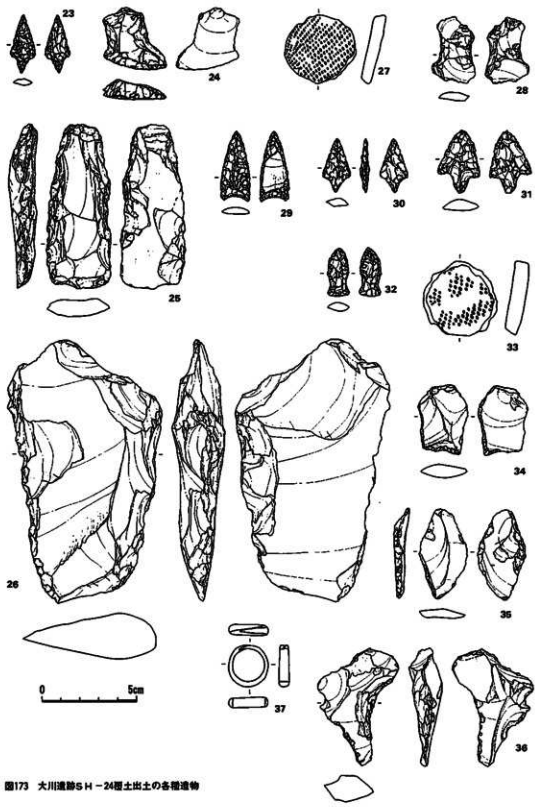


図173 大川遺跡SH-24層土出土の各種遺物

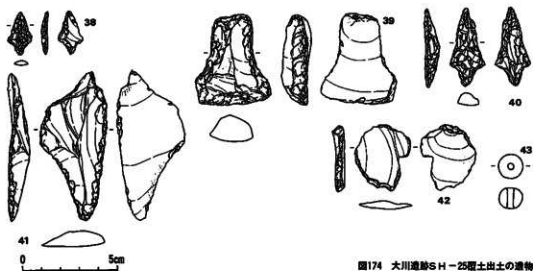


図174 大川遺跡SH-25層出土の遺物

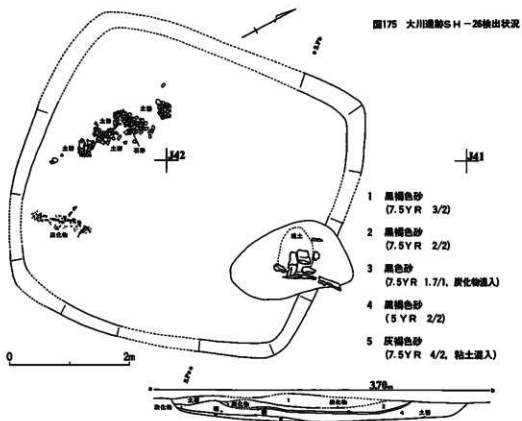


図175 大川遺跡SH-26発出状況

カマドは東側の壁中央部に構築されており、暗赤褐色粘土（火床は75cm×55cm程の範囲）と7個の扁平な礫によって構成されている。カマドの範囲は、概ね2m×1.1mとみられる。

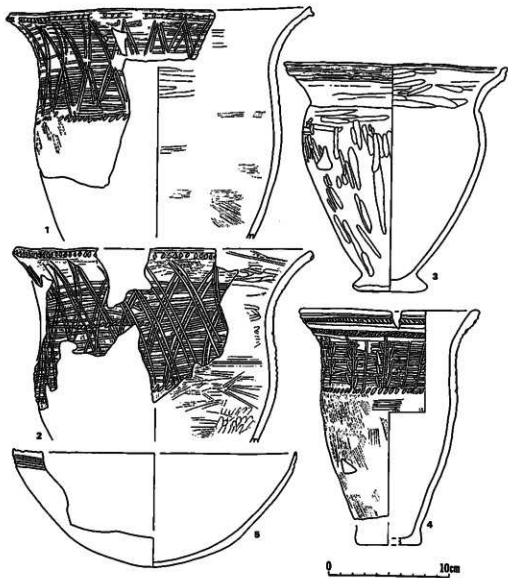


図176 大川遺跡SH-26床面及び覆土出土の土器

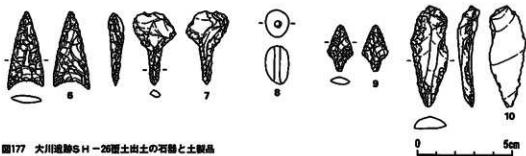


図177 大川遺跡SH-26覆土出土の石器と土製品

表28 大川遺跡SH-26出土遺物一覧

図番号	種別	分類	層位	遺物番号	各部の大きさ(mm)と重さ(g)	備考
図176-1	土器	Ⅸa 3	床面	12他	口径270mm	キザミ、横走沈線、斜位の沈線、連続斜突
図176-2	土器	Ⅸa 3	床面	24他	口径250mm	キザミ、横走沈線、斜位の沈線、表裏刷毛目
図176-3	土器	Ⅸa	床面	13他	口径180mm、底径62mm、高さ190mm	四輪文、表裏ヘラミガキ
図176-4	土器	Ⅸa 3	床面	14	口径150mm、高さ195mm	横走沈線、縦位・斜位の沈線、表裏毛目、表ヘラミガキ
図176-5	土器	Ⅸa 3	4層	—	高さ95mm	キザミ、横走沈線
図177-6	石器	I b 2	4層	—	(43)mm×19mm×4mm、(2.0)g	黒曜石、斜突部若干欠損
図177-7	石器	Ⅳ a 3	4層	—	(30)mm×8mm×4mm、(3.9)g	磁石、つまみ部欠損
図177-8	土器	I i 5	2層	—	12mm×14mm×20mm、4.0g	碧玉
図177-9	石器	I b 3	2層	—	(24)mm×13mm×4mm、(0.9)g	黒曜石、斜突部・柄部若干欠損
図177-10	ナイフ	II b	1層	—	53mm×20mm×6mm、7.7g	硬質頁岩、バルブ残存

煙道の片側(南東部)にも扁平な礫が立てられており、壁より50cm位までは確認できたが、その先の煙穴等は後世の攪乱によって壊されていた為不明である。柱穴様の小ピット等は検出されなかった。

竪穴床面西側からは、一括の糠文土器が出土した。図176-1～4がそれで、当竪穴の年代を示す一括資料として重要である。本竪穴出土の遺物総数は744点であった。その内訳は土器が692点、フレークが42点他である。

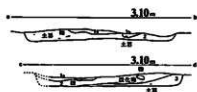
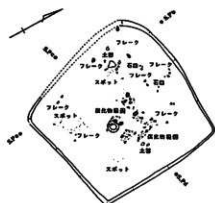
SH-27 L43・44, M43・44 Gridに跨がって検出(図3)された。北側の半分程は攪乱により失われており、床面直上での検出である。遺構検出図については図示していない。現存部分から推察すれば、本竪穴は、一辺が4.4m前後の隅丸方形プランを有するものとみられる。壁高は10～20cmを測る。床面東壁近くには粘床とみられる粘土範囲(概ね1.5m×50cm)が確認された。また、その下部と南東側には径10cm～20cm、深さ8cm～23cm程の小ピット5個が検出された。

本竪穴出土の遺物総数は、220点で土器がそのうち193点、石器が5点、フレークが22点である。図179-1は、床面伴出のⅨ群a 3類土器であり、当該期の竪穴とみられる。

SH-28 I42・43, J42・43 Gridに跨がって検出された。西壁は攪乱(図178)により失われているが、南北2.50m、東西2.43m、壁高20cm程の小型・不整隅丸方形プランを有する竪穴である。

床面中央部には、径60cm程の炭化物の範囲、北西及び南西部には合計4ヶ所のチップの集中するスポット(総量70g、数千点?)がそれぞれ確認された。カマドや地床炉等は確認されなかった。本竪穴出土の遺物総数は288点。内訳は土器207点、石器10点他である。

床面出土の糠文土器は皆無であるが、竪穴の形状等から考えて、糠文期のものとして分類した。特に、糠文期の竪穴形状を量し、スポットが検出されたことに意義があるように考えられる。



- 1a 暗褐色砂 (7.5YR 3/3)
- 1b 暗赤褐色砂 (5YR 3/3)
- 2 暗褐色砂 (7.5YR 3/3)
- 3 黒褐色砂 (7.5YR 2/2)

0 2m

図178 大川遺跡SH-29検出状況

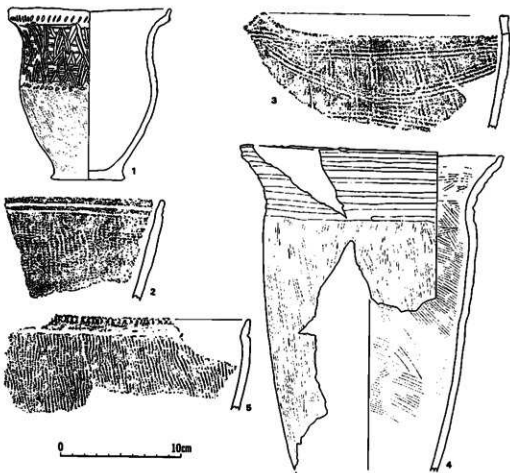


図179 大川遺跡SH-27~30断面及び覆土出土の土器

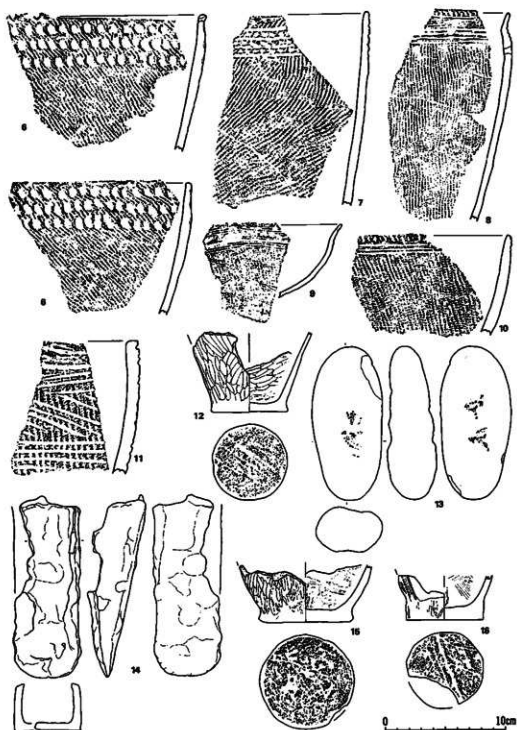


図180 大川遺跡SH-30~32庫園及び壱土出土の土器・凹石・鉄片

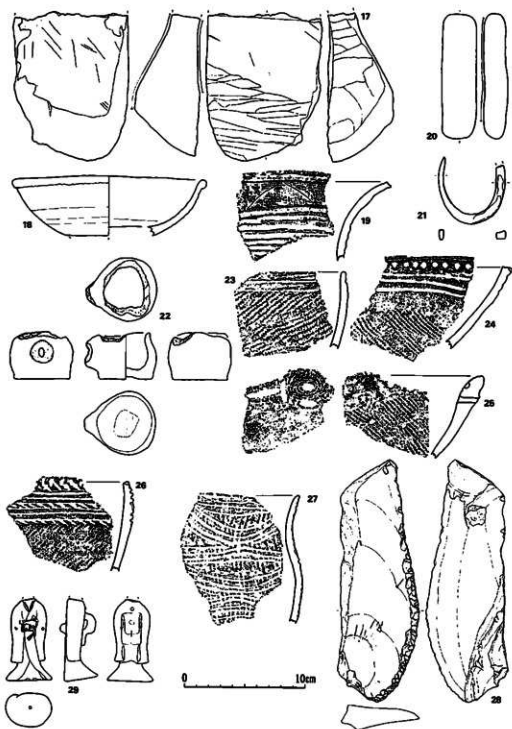


図181 大川遺跡SH-32~34床面及び附土出土の土器・石器・金属製品・陶磁器



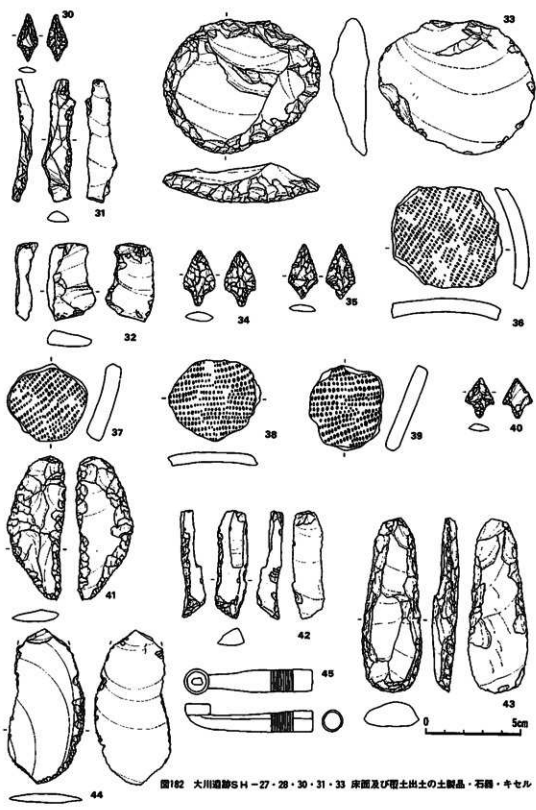


図182 大川遺跡SH-27・28・30・31・33 床面及び掘土出土の土製品・石器・キセル

SH-29 I44Gridで検出された。攪乱が著しく、北西壁際と南東壁際のそれぞれ一部分のみの検出である。しかし、概ね1辺3m程で、壁高10cm~20cm程度の隅丸方形を呈する竪穴と考えられる。

竪穴の一部分のみの検出ということで、カマド・柱穴様のビット等は確認できなかったものの、覆土遺物を中心に、遺物出土総数は654点を数え、うち581点が土器、フレークが63点、石器が4点他であり、覆土出土の図179-3のみ図示した。擦文土器の出土は皆無であったが、遺構の形状や新旧関係から、擦文竪穴であることは、まちがいのないところであると考えられた。

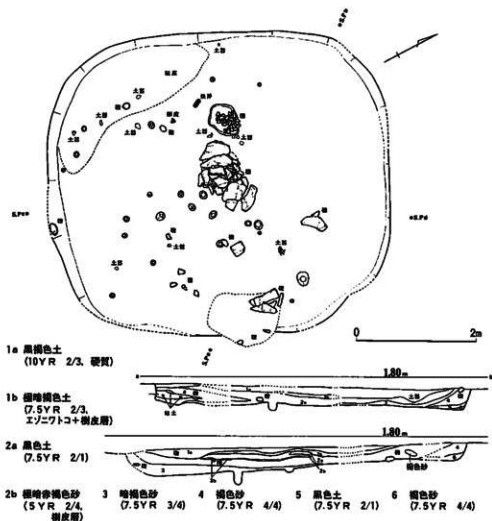


図183 大川遺跡SH-32検出状況

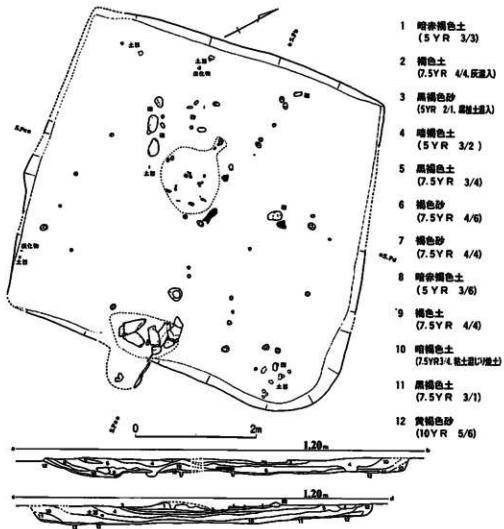


図184 大川遺跡SH-33検出状況

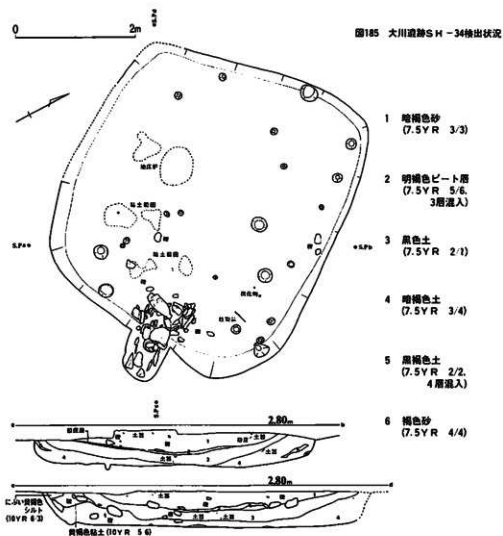
SH-30 P43・44Gridに跨がって所在(図3)したものとみられる。竪穴西側は、JH-10を先に調査した関係で検出できなかったものである。したがって、遺構検出図も図示していないが、現状で4.55m×2.15mあり、概ね1辺が4.5m前後の隅丸方形プランを有する撥文竪穴であったとみられる。

壁高は、38cmで、地床炉や柱穴・カマド等は確認できなかった。とはいうものの遺物出土総数は1,103点、このうち、990点が土器であり、石器4点、フレーク63点他である。図179-4は床面出土の土器である。この土器の時期が本竪穴の年代とみられる。

SH-31 N43, O43・44Gridに跨って検出(図3)された。竪穴中央の大部分は、M O-10によって切られており、南側壁際と北西壁の一部とカマド等の検出のみにとどまった。したがって、この遺構検出図も省略させて頂いた。

竪穴の大きさ等は、1辺4m前後の隅丸方形プランを有するものと類推される。壁高は約10cm、カマドは、70cm×40cm程の範囲で明褐色粘土で構築されており、煙道は壁より90cm程を確認したが、煙穴は確認できなかった。また、柱穴様の小ピット等も検出されなかった。

本竪穴出土の遺物総数は256点、内土器は232点である。床面伴出の擦文土器は認められなかったが、覆土出土の擦文土器や、その他からⅨ群a 2類あるいはⅨ群a 3類土器の時期の竪穴と考えられている。



SH-32 O59・60, P59・60Grid に跨がって検出された。竪穴の大きさは5.72m×5.02m程で、隅丸方形プランを呈する。確認面から床までの最深部は61cmを測る。カマドは南東壁中央部に構築されている。

主柱穴とみられるピットは、カマド近くに、他の小ピットは竪穴中央部から南及び西側に23個確認された。また、竪穴中央部には60cm×60cm程の地床炉が検出され、その直上に多数の板状の礫が出土、その範囲上に炭化物も確認された。西壁隅床面に3m×1m程の貼床を確認、粘土の厚さが概ね20cmであった。中央の地床炉の西側ピット(60cm×40cm、深さ27cm)から華大の礫51個が出土した。

本竪穴出土遺物の総数は269点、うち土器が157点、フレイク17点、礫が84点他である。図180-13・14は床面出土の凹石と袋状鉄斧である。小破片の為、図示していないが、床面からⅩ群A4類土器が出土している。したがって、当該期の竪穴とみられる。

SH-33 N60・61, O60・61Grid に跨がって検出された。竪穴の大きさは、概ね5.90m×5.50m。確認面から床面までの深さは、概ね35cmである。カマドは1.18m×70cm程の大きさで、南壁中央にあり、焚口・煙道部分には袖石が確認された。しかし、煙道は70cm×62cm程で、その先は攪乱のため確認できなかった。小ピットは34個検出された。

覆土上部には近世遺物を含む貝層が認められた。図184の竪穴中央部の破線がその範囲を示している。本竪穴の出土遺物総数は176点で内訳は、土器107点、陶磁器14点、フレイク10点、礫29点他である。前述したように、覆土からはコクマガイや魚骨他の動物遺体(第5章第2節参照)が出土している他、マレク(図181-21)やキセル(図182-45)・陶磁器等が伴っている。図181-19は、床面伴出土器であり、当該期の竪穴とみられる。

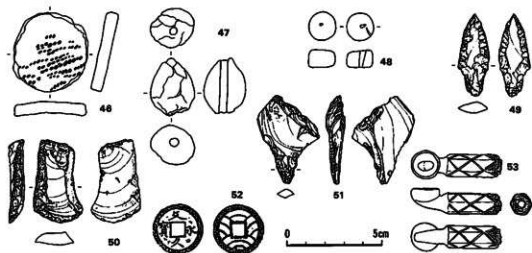


図186 大川遺跡SH-34竪穴出土の土製品・石器・金属製品

表29 大川遺跡SH-27(1-30~33)・SH-28(2-34-35)・SH-29(3)・SH-30(4~11-36~43)

SH-31(12-44)・SH-32(13~18)・SH-33(19~21-45)・SH-34(22~29-46~53)出土遺物一覧

図番号	種別	分類	方位	遺物番号	各部の大きさ(mm)と重さ(g)	備考
図19-1	土器	Ⅱa 3	床面他	1他	L径 136mm, 底径 62mm, 高さ 142mm	キザミ, 横走沈線, 羽状欠損, SH-27と30に共通
図19-2	土器	Ⅱa 4	床面	35		平縁, 横走沈線, L.R斜行縄文
図19-3	土器	Ⅱe 4	覆土	—		突起, 帯状縄文
図19-4	土器	Ⅱa 2	床面	1		平縁, 横走沈線, 表面刷毛目
図19-5	土器	Ⅱa 3	覆上	—		キザミ, 横走沈線, R.L縦行縄文, 深鉢
図19-6	土器	Ⅱb 2	覆上	—		小突起, 爪形文, R.L斜行縄文
図19-7	土器	Ⅱa 2	覆土	—		平縁, 横走沈線, 連続刺突, L.R斜行縄文
図19-8	土器	Ⅱa 3	覆土	—		キザミ, 横走沈線, 補修孔, L.R縦行縄文
図19-9	土器	Ⅱa 3	覆土	—		横走沈線, L.R縦行縄文
図19-10	土器	Ⅱa 3	覆土	—		キザミ, 横走沈線, L.R斜行縄文
図19-11	土器	Ⅱc 3	覆土	—		平縁, 横走・斜位の沈線, R.L縦行縄文
図19-12	土器	Ⅱa	覆上	—	底径 64mm	表面ともヘラミダキ, 底面刷毛目
図19-13	陶石	Ⅱb 2	床面	44	127mm×59mm×37mm, 360g	安山岩
図19-14	鉄斧	Ⅱf 1	床面	11	(151)mm×(58)mm×(39)mm	側縁部及び基部欠損
図19-15	土器	Ⅱa	覆土	—	底径 79mm	表ヘラミダキ, 表面刷毛目, 底面木炭痕
図19-16	土器	Ⅱa	覆上	—	底径 64mm	表面刷毛目, 底面木炭痕
図19-17	磁石	Ⅱc 2	覆上	—		凝灰質砂岩, 平欠
図19-18	陶磁器	Ⅱb	覆上	1		蛇ノ目輪壳
図19-19	土器	Ⅱa 2	床面	29		平縁, 横走沈線, 表面ココナテ
図19-20	磁石	Ⅱc	覆上	—	104mm×28mm×19mm, 86.0g	砂岩
図19-21	鉄製品	Ⅱb	覆土	—		鉄製, マレク, 基部側欠損
図19-22	土器	Ⅱa?	覆土	—	底径 45mm	注11, 擦文?, 口縁部意図的破壊?
図19-23	土器	Ⅱa 3	覆土	—		平縁, 横走沈線, L.R斜行縄文
図19-24	土器	Ⅱc 1	覆上	—		口縁に縄文, キザミ, 横走沈線, R.L斜行縄文
図19-25	土器	Ⅱc 1	覆土	—		高台状縄文, 突起下孔, 円形刺突, R.L斜行縄文
図19-26	土器	Ⅱa 2	覆土	—		キザミ, 横走沈線, 連続刺突, L.R斜行縄文
図19-27	土器	Ⅱd 2	覆土	—		変形工字文, 弧線文, 刺突, R.L縦行縄文
図19-28	石器	Ⅱc 2	覆土	—	(201)mm×(67)mm×(22)mm, (160)g	硬質砂岩, 角礫の自然面大きく残存, 基部側欠損
図19-29	陶磁器	Ⅱa	覆土	—	(38)mm×67mm×28mm, 43.4g	磁器, 人形(動物型), 空欠, 蓋戸・表蓋, 20c蓋下
図19-30	石器	Ⅱb 3	床面	36	25mm×10mm×3mm, 0.5g	黒曜石, 1次側面残存
図19-31	石器	Ⅱc 2	覆土	—	(65)mm×65mm×5mm, (6.0)g	黒曜石, 先端部欠損, 角礫の自然面若干残存
図19-32	石器	Ⅱc 2	覆土	—	42mm×26mm×7mm, 9.0g	黒曜石, 円礫の自然面大きく残存
図19-33	石器	Ⅱb	覆土	—	71mm×84mm×21mm, 94.0g	黒曜石, 花十勝
図19-34	石器	Ⅱb 4	床面	1	29mm×16mm×4mm, 1.0g	黒曜石
図19-35	石器	Ⅱb 3	床面	5	29mm×15mm×3mm, 1.4g	黒曜石, 球型形
図19-36	円形土器片	Ⅱg 1	覆土	—	54mm×60mm×7mm, 31.0g	縄文晩期中葉の土器割部破片を利用
図19-37	円形土器片	Ⅱg 1	覆土	—	41mm×43mm×9mm, 17.4g	縄文晩期中葉の土器割部破片を利用
図19-38	円形土器片	Ⅱg 1	覆土	—	49mm×43mm×5mm, 12.8g	縄文晩期中葉の土器割部破片を利用
図19-39	円形土器片	Ⅱg 1	覆土	—	44mm×38mm×8mm, 16.2g	縄文晩期中葉の土器割部破片を利用
図19-40	石器	Ⅱb 3	覆上	—	21mm×15mm×4mm, 0.7g	黒曜石, ユニフェイス
図19-41	ナイフ	Ⅱb	覆上	—	76mm×30mm×6mm, 14.8g	貫石, パルプ除去
図19-42	石器	Ⅱa	覆土	—	57mm×16mm×9mm, 9.3g	黒曜石, 角礫の自然面大きく残存
図19-43	石塊	Ⅱc	覆土	—	92mm×32mm×13mm, 42.2g	硬質砂岩
図19-44	R.F	Ⅱb 2	覆土	—	(82)mm×39mm×5mm, (14.8)g	黒曜石, 花十勝, 基部欠損
図19-45	キセル	Ⅱe 1	3層	—	大直径13mm, 管径大径11mm, 長さ67mm	銅製, 9条の溝あり
図19-46	円形土器片	Ⅱg 1	覆土	—	42mm×41mm×6mm, 13.4g	縄文晩期中葉の土器割部破片を利用
図19-47	土器	Ⅱi 5	覆土	—	21mm×23mm×31mm, 10.2g	ヒビ割れ顕著, 無文

図番号	種別	分類	層位	遺物番号	各径の大きさ (mm) と重さ (g)	備 考
図186-48	土 玉	I 1 5	覆 土	—	15 mm×14 mm×9 mm, 1.8g	平玉, 無文
図186-49	石 珠	I b 3	覆 土	—	43 mm×17 mm×6 mm, 3.6g	磁岩, 赤褐色～白色
図186-50	削 器	II c 2	覆 土	—	44 mm×26 mm×7 mm, 8.3g	黒曜石, バルブ残存, 角礫の自然面大きく残存
図186-51	石 錘	IV a 4	覆 土	—	47 mm×35 mm×5 mm, 8.0g	黒曜石, 基部に内礫の自然面残存
図186-52	古 銭	IX d	覆 土	—	径 27 mm, 3.4g	文久永寶銅銭, 草文
図186-53	キセキ	X e 1	覆 土	—	大径径 15mm	青銅製, 断面6角形, 顔面伏形鏡, 磁字残存

SH-34 N51・52, O51・52 Gridに跨がって検出された。竪穴の大きさは4.78m×4.52mの隅丸方形(図185)を呈し、確認面からの深さは56cmを測る。西側壁部分はSH-54を切っている。カマドは南東壁中央部に構築されている。98cm×56cm程の大きさで、袖石多数が焚口及び煙道部分より出土した。

竪穴西側には地床が2ヶ所、更にそのカマド寄りには4ヶ所の粘土範囲が確認された。これらの粘土は、カマド廃絶に伴うカマド祭祀にかかわって、破壊されたへつついか、あるいは、貼床部分の粘土かのどちらかであろうと考えている。

竪穴内で検出されたビッドは、合計23個であった。床面東隅近くより、発掘時は錫子とみられた鉄製品が出土した。ところが、保存処理後の様子では残念ながら用途不明の鉄製品といわざるをえないものとなってしまった。

本竪穴の遺物総数は1,298点、そのうち1,112点が土器、40点が石器、フレークが124点他である。図181-22~29, 図186-46~53がSH-34の覆土出土の遺物である。特に22は類例の少ない據文の注口土器とみられる。床面伴出の據文土器はほとんどないが、覆土出土の據文土器が区群a 2類及びa 3類に限られることから、概ね当該期頃の竪穴と考えても、まちがいでないと思われる。

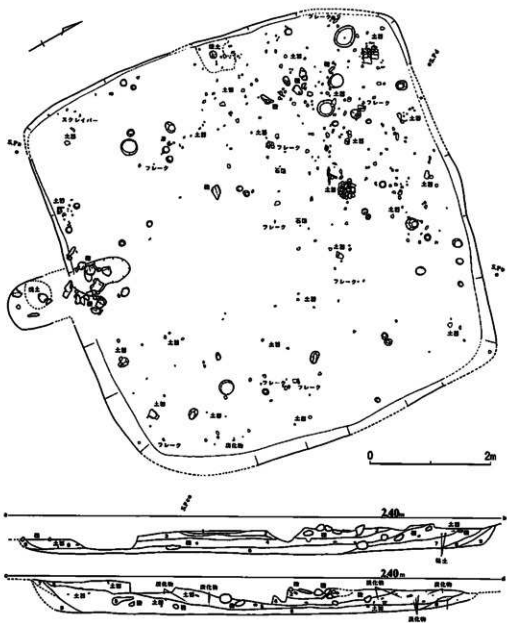
SH-35 N54, O53・54・55, P53・54・55の7 Gridに跨がって検出された。竪穴の大きさは、6.99m×6.86mと比較的大きい隅丸方形のプランを有している。本竪穴覆土には近世アイヌ墓(GP-592)が作られていた。

カマドは南壁中央(図187)から検出され、1.04m×52cm程の大きさである。焚口には、支脚として使用したとみられる土器が1点出土したが、残念ながら遺物取上げ前に盗難にあってしまつた。煙道は1.12m×80cm程の大きさであった。床面の小ビッドは41個あり、そのうち主柱穴は3個とみられる。いずれも径が25cm、深さが50cm程のビッドである。

竪穴西壁中央部には50cm×50cm程の焼土範囲が確認された。本竪穴出土遺物の総数は2,387点であった。そのうち、土器が2,204点と圧倒的に多く、石器38点、フレーク127点他である。

カマドや焼土から、魚骨他若干の動物遺体(第5章第2節参照)が、貼床・焼土・カマド・煙道等からは、多種類の植物遺体(第5章第3節参照)が検出されている。

図188-1~7及び図189-8・9が床面出土の土師器である。伴出遺物としては若干の時期差



- |                        |                   |                    |
|------------------------|-------------------|--------------------|
| 1 黒褐色砂 (7.5YR 3/2)     | 2 褐色砂 (7.5YR 4/3) | 3 暗褐色砂 (7.5YR 3/3) |
| 4 黒色土 (7.5YR 2/1, 黒ボク) | 5 褐色砂 (7.5YR 4/3) | 6 黒褐色砂 (10YR 2/3)  |
| 7 褐色砂 (7.5YR 4/3)      | 8 黒褐色砂 (10YR 2/3) | 9 暗褐色砂 (7.5YR 3/3) |

図187 大川遺跡SH-35検出状況



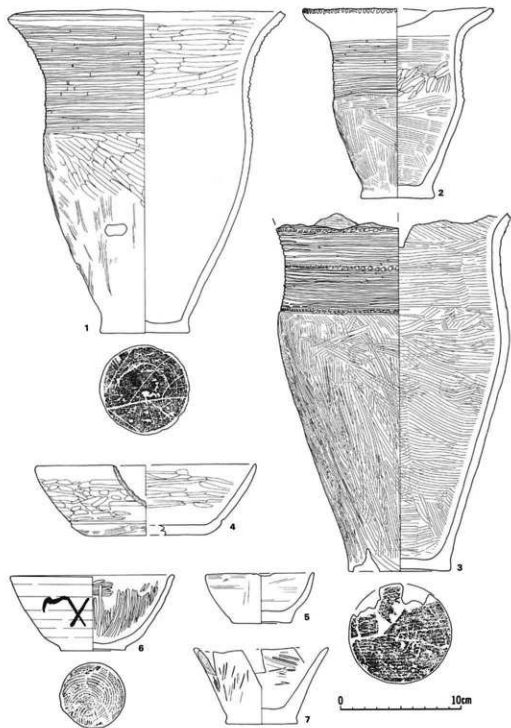


図188 大川遺跡SH-35床面出土の土器

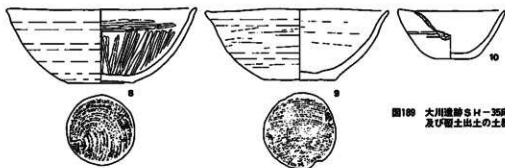


図189 大川遺跡SH-35床面及び習土出土の土器

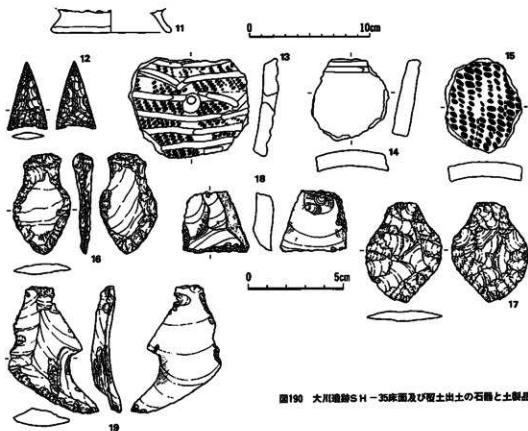


図190 大川遺跡SH-35床面及び習土出土の石器と土製品

を考慮しなければならないが、特筆すべき2・3の遺物について、述べておきたい。

図188-6は、「七」とみられる墨書土師器である。当該土師器の詳細については、拙稿 1996「余市大川遺跡出土古代の文字資料をめぐる」『北奥古代文化』第25号 北奥古代文化研究会刊をご参照願いたい。ともかく、擦文竪穴床面伴出の墨書土師器資料として貴重である。また、図188-7は、器形の特定が難しいが、稀な器形であることには違いない。磨滅が顕著であるが、表裏ともていねいに作られているようである。図189-11は、土師器の台付土器の台部分である。表裏とも非常にていねいにヘラミガキが施されている。これも稀な器形である。

表30 大川遺跡SH-35出土遺物一覧

図番号	種別	分類	層位	遺物番号	各部の大きさ(mm)と重さ(g)	備考
図191-1	土器	Ⅰa 2	床面	223他	口径231mm, 底径74mm, 高さ269mm	横走沈輪, 表裏ヘラミガキ, 底面木葉痕
図191-2	土器	Ⅰa 2	床面他	203他	口径159mm, 底径62mm, 高さ158mm	キザミ, 横走沈輪, 表裏刷毛目
図191-3	土器	Ⅰa 2	床面他	75他	底径85mm	横走沈輪, 刺突, 表裏刷毛目, 底面葉痕
図191-4	土器	Ⅰb 2	床面他	129他	高さ59mm	内風土師器環, 有段, 底面刷毛目, 胎土に石英多
図191-5	土器	Ⅰb 2	床面	1又0	底径49mm, 高さ41mm	内風土師器環, 小型
図191-6	土器	Ⅰb 3	床面他	147他	口径136mm, 底径54mm, 高さ62mm	内風土師器環, 胎土「七」?, 糸切底
図191-7	土器	Ⅰb 3	床面	170他	底径59mm, 高さ61mm	鉢型土器
図191-8	土器	Ⅰb 3	床面	143他	口径159mm, 底径55mm, 高さ61mm	内風土師器環, 胎土砂多, 糸切底
図191-9	土器	Ⅰb 3	床面	313	口径152mm, 底径58mm, 高さ59mm	環, 赤焼土器, 糸切底
図191-10	土器	Ⅰb 2	覆土	—	底径30mm, 高さ40mm	土師器環, 若干有段
図191-11	土器	Ⅰc	覆土	—	台部径89mm	台付土器の台部のみ
図191-12	石器	Ⅰb 2	床面	172	37mm×21mm×3mm, 2.1g	扇形石, 球根混入
図191-13	円形土器片	Ⅰg 2	覆土	—	(53)mm×64mm×7mm(33.0g)	大洞A式土器口縁部破片を利用, 有孔, 両缺
図191-14	円形土器片	Ⅰg 1	覆土	—	43mm×42mm×8mm 17.0g	縄文期ないし前期土器口縁部破片を利用
図191-15	円形土器片	Ⅰg 1	覆土	—	49mm×40mm×8mm 19.0g	縄文期土器口縁部破片を利用, R.L. 斜行縄文
図191-16	ナイフ	Ⅰb	覆土	—	53mm×31mm×5mm 10.6g	硬質頁岩
図191-17	ナイフ	Ⅰb	覆土	—	52mm×41mm×5mm 12.4g	頁岩
図191-18	挿	Ⅰa	覆土	—	38mm×35mm×9mm 12.4g	扇形石, バルブ残存, 角磨の自然面火く残存
図191-19	石	Ⅰa 2	覆土	—	69mm×40mm×9mm 21.4g	硬質頁岩, バルブ残存

表31 大川遺跡SH-36出土遺物一覧

図番号	種別	分類	層位	遺物番号	各部の大きさ(mm)と重さ(g)	備考
図192-1	土器	Ⅰa 3	床面	35	胴部径150mm, 底径87mm	内腹壁, 口縁部欠損(遺理?), 横走・底面沈輪
図192-2	土器	Ⅰa 2	床面	92	口径143mm, 底径60mm, 高さ127mm	横走沈輪, 連続刺突
図192-3	土器	Ⅰa 2	床面	108	底径66mm	横走沈輪, 表裏刷毛目, 支脚として利用(カマド土)
図192-4	土器	Ⅰa 2	床面	111	口径131mm, 底径80mm, 高さ126mm	横走沈輪, 表裏刷毛目, 口縁部裏面ヘラミガキ
図192-5	土器	Ⅰa 2	床面	3		横走沈輪, キザミ, 裏面ヘラミガキ
図192-6	土器	Ⅰa 2	床面	45	底径71mm	胎付, キザミ, 横走沈輪, 表裏刷毛目, 底面木葉痕
図192-7	土器	Ⅰa 3	床面他	31他		欠形環状刺突, 横走・斜位の沈輪, 表裏ヘラミガキ
図192-8	土器	Ⅰb 3	床面	10	口径157mm, 底径72mm, 高さ71mm	内風土師器環, 糸切底
図192-9	土器	Ⅰb 3	床面他	48他	底径67mm, 高さ66mm	内風土師器環, 内面ヘラミガキ顯著, 糸切底
図192-10	土器	Ⅰa 2	床面他	40他		突起, 連続刺突, 横走沈輪, L.R. 斜行縄文
図192-11	土器	Ⅰc 1	覆土	—		突起, 有孔, 刺突, 磨消
図192-12	土器	Ⅰa 4	覆土	—		突起部湾曲状縄文, 工字文, R.L. 斜行縄文

SH-36 L50・51, M50・51Gridに跨がって検出された。竪穴の大きさは4.58m×4.50m程の隅丸方形プランを呈し、確認面からの深さは46cmを測る。カマドは南壁に構築(図191)されており、1.04m×82cm程の大きさである。

竪穴内にピットが27個確認されたが、主柱穴と考えられるものはないようである。西壁には溝も検出されたが、地床炉は検出されなかった。

本竪穴出土遺物の総数は908点である。そのうち土器が862点, 石器13点, フレーク28点他である。床面及びカマドのソイルサンプルから, 各種の植物遺体が検出(第5章第3節参照)されている。図192-1~3と図193-4~10は床面出土の土器である。したがってⅠ群a 3類土器期のものと考えられる。

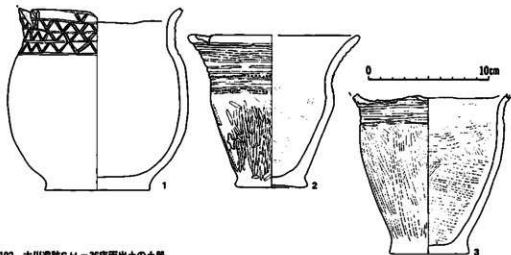
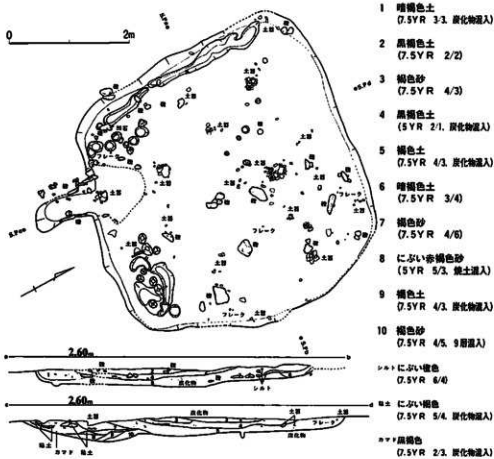


図192 大川遺跡SH-36床面出土の土器

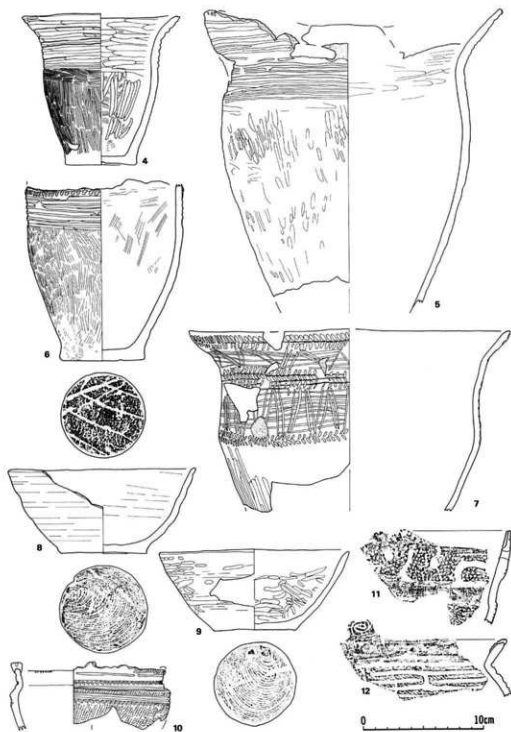


図193 大川遺跡SH-36床面及び覆土出土の土器

図192-3は、カマドの支脚として逆転した状態で出土した。口縁部を破壊し、ほどよい高さに調整して、支脚として利用したようである。

SH-37 N49・50・51, O49・50・51Gridに跨って検出された。竪穴の大きさは6.20m×6.10m程の大ききで、隅丸方形プランを呈し、確認面から床面までの深さは64cmを測る。

カマドは南壁中央部に構築され、床は二段構造（写真19-81・91）を有する、いわゆるベンチ状構造（幅20cm～80cm、高さ10cm～20cm）を呈している。

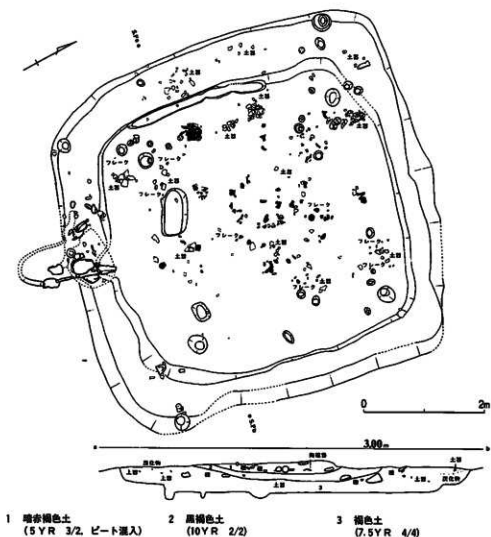


図194 大川遺跡SH-37検出状況

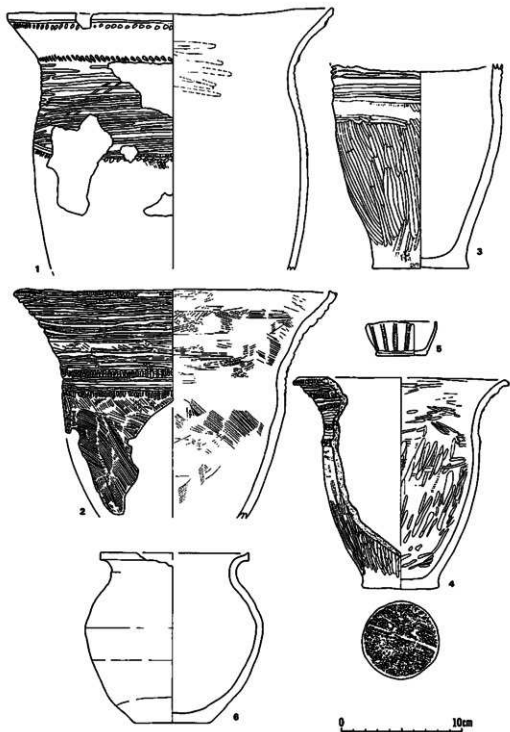


図195 大川遺跡S M - 37出土の土器

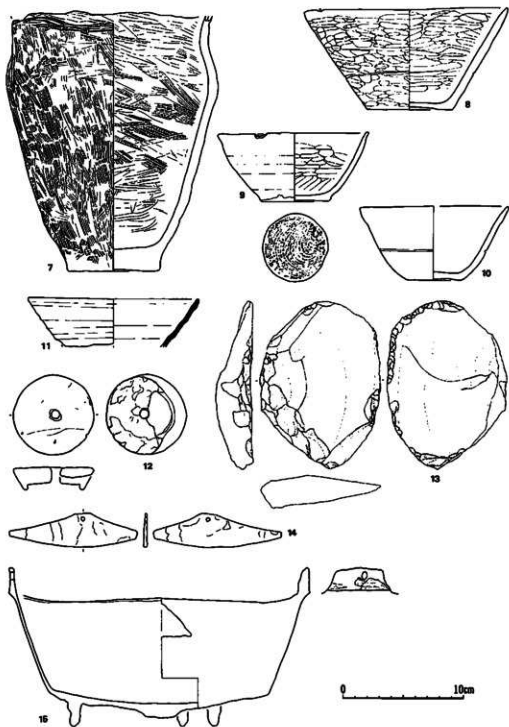


図196 大川遺跡G H - 37断面及び埋土出土の遺物



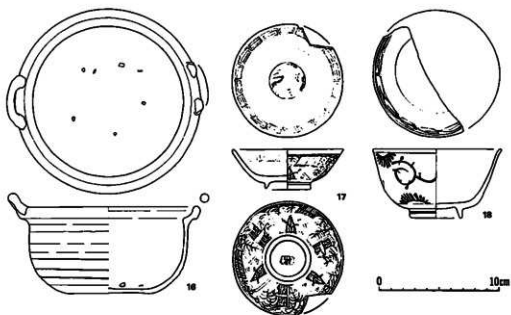


図197 大川遺跡S.H-37層土出土の陶磁器

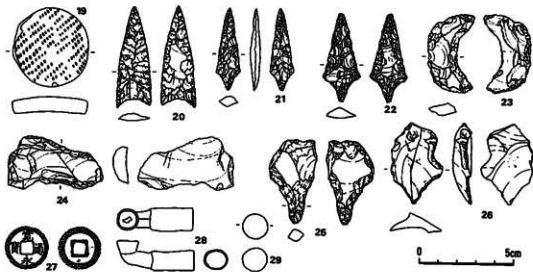


図198 大川遺跡S.H-37床面及び層土出土の遺物

西壁のベンチ直下に2.40m×16cm、深さ28cm前後の溝が確認された。また、カマドから1m程北側の床面からは、80cm×40cm、深さ15cm程の貯蔵穴様ピットも検出された。さらに、GP-596によって床面を掘り込まれている。GP-596については、本書第3分冊で紹介する。

カマドは80cm×60cm程の範囲であり、焚口からは支脚（写真 19-n）として利用した倒立土器が出土（図195-3・図196-8）した。

本竈穴出土の遺物総数は2,849点と非常に多い。内訳は、土器2,263点、フレーク207点、石器

表32 大川遺跡SH-37出土遺物一覧

図番号	種別	分類	層位	遺物番号	各部の大きさ (mm) と重さ (g)	備 考
図195-1	土器	Ⅰa 2	床面他	57他	口径 271mm	キザミ、横走沈線、斜位の沈線、表裏ヘラミガキ
図195-2	土器	Ⅰa 2	床面他	214他	口径 269mm	キザミ、横走沈線、割突、表裏刷毛目
図195-3	土器	Ⅰa 2	床面	256	底径80mm	横走沈線、表ヘラミガキ、支脚として機能(袋口土)
図195-4	土器	Ⅰa 2	床面	56他	底径64mm	キザミ、横走沈線、表裏ヘラミガキ、底面磨版
図195-5	土器	?	床面	95	底径41mm、高さ28mm	横走・縦行沈線、割突、平縁、小杯
図195-6	土器	Ⅰa 2	床面他	59他	胴部径148mm、底径62mm、高さ141mm	内周壁、胎土に砂多し
図195-7	土器	Ⅰa 2	床面	100	底径76mm	表裏刷毛目、横走沈線
図195-8	土器	Ⅰb 2	床面	254	口径 170mm、底径71mm、高さ84mm	横走沈線、表裏ヘラミガキ、耳、支脚として機能(袋口土)
図195-9	土器	Ⅰb 3	床面	159	底径57mm、高さ57mm	内周土師器環、糸切底
図195-10	土器	Ⅰb 2	床面	64	底径45mm、高さ61mm	横走沈線、表裏ヘラミガキ、耳
図195-11	須恵器	Ⅱb	床面他	258他	口径 142mm	耳
図195-12	埴輪	Ⅱa 1	床面	194	上底径67mm、孔径11mm、厚さ18mm	無文、平欠
図195-13	播磨	Ⅲa	覆土	—	(139)mm×101mm×24mm、(370.0)g	硬質砂岩、内側の自然面大きく残存、側縁部欠損
図195-14	大打金	Ⅳc	覆土	48	107mm×28mm×3mm	有孔、鉄製
図195-15	鉄鍋	Ⅳb	覆土	7	底径183mm、高さ132mm	吊耳鉄鍋、3足、丸型湯口
図195-16	陶磁器	Ⅴg	覆土他	2他	口径 162mm、底径73mm、高さ83mm	耳付鍋、鉄輪、東北諸窯、19c(幕末?)
図195-17	陶磁器	Ⅴa	覆土	—	蓋径99mm、つまみ部径38mm、高さ34mm	横走沈線、表裏ヘラミガキ、足低竹筒、肥土、19c(幕末?)
図195-18	陶磁器	Ⅴa	覆土	—	高さ58mm	磁器地反碗、花と唐草、瀬戸・美濃、19c(幕末?)
図195-19	円形土製品	Ⅰg 1	床面	146	42mm×40mm×8mm、14.6g	縄文時代中期の土師器の形をとり、胎土に石質多し、18割焼文
図195-20	石鏡	Ⅰb 2	覆土	—	54mm×18mm×3mm、3.7g	硬質頁岩、裏面に1次割離面大きく残存
図195-21	石鏡	Ⅰb 3	覆土	—	43mm×13mm×5mm、1.7g	黒曜石
図195-22	石鏡	Ⅰb 3	覆土	—	(47)mm×20mm×6mm、(3.1)g	黒曜石、先端部欠損、裏面に1次割離面残存
図195-23	扶人削器	Ⅱd 1	覆土	—	41mm×26mm×7mm、6.1g	黒曜石、円縁の自然面残存
図195-24	削器	Ⅱe 2	覆土	—	51mm×(28)mm×7mm、12.0g	黒曜石、側縁部欠損
図195-25	石鏡	Ⅰa 3	覆土	—	45mm×(25)mm×6mm、(11.4)g	硬質頁岩、つまみ部側縁欠損
図195-26	R	F Ⅰb 2	覆土	—	(43)mm×27mm×7mm、(7.3)g	硬質頁岩
図195-27	古銭	Ⅰb	覆土	—	径 23mm、	2.5g 寛永通寶銅錢
図195-28	キセル	Ⅰe	覆土	26	火皿径11mm、管最大径12mm	銀付、銀鍍金?
図195-29	鉄砲の弾	Ⅰi 7	覆土	—	径 13mm、	11.6g 鉛?

79点、陶磁器134点他である。床面出土の土器は、図195-1～6及び図196-7～11である。したがって、本整穴は、Ⅰ群a 2類土器期のものとみられる。

図195-3は、笑口出土の支脚である。非常に硬質で赤色化している。笑口で長期間高温にさらされた為であろうとみられる。図195-5は、小杯型の土器である。攪文土器である可能性もあるが、該当する時代が不明である。

「夫」の字鹿土土器は、SH-37とSH-63出土の土器が接合したものであり、SH-63で紹介する。覆土出土遺物にも非常に興味深いものが多い。大打金(図196-14)・鉄鍋(図196-15)・古銭(図198-27)・キセル(図198-28)・鉄砲の弾(図198-29)等、これらの遺物は、本整穴が完全に埋まり切っていない窪みを利用して、送られたものである可能性がある。つまり送り場遺構である。

本整穴の床面及びカマドからは若干の魚骨が、覆土からはイス・シカ等の骨やイガイ・マガキ・コタマガイ・ウバガイ等の貝が出土(第5章第2節参照)している。植物遺体についても、床

図199 大川遺跡SH-39検出状況

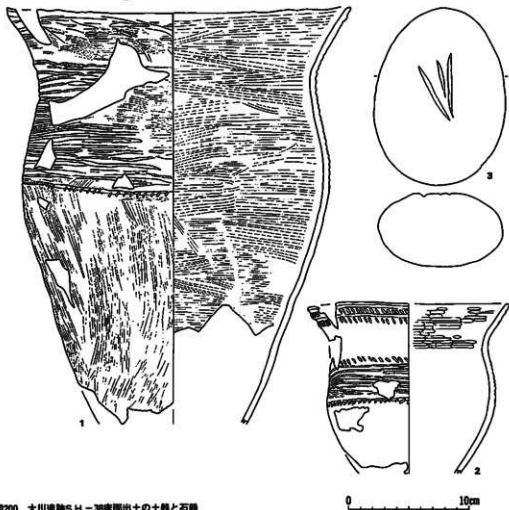
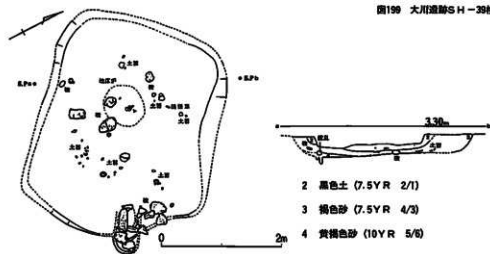


図200 大川遺跡SH-38検出出土の土器と石器

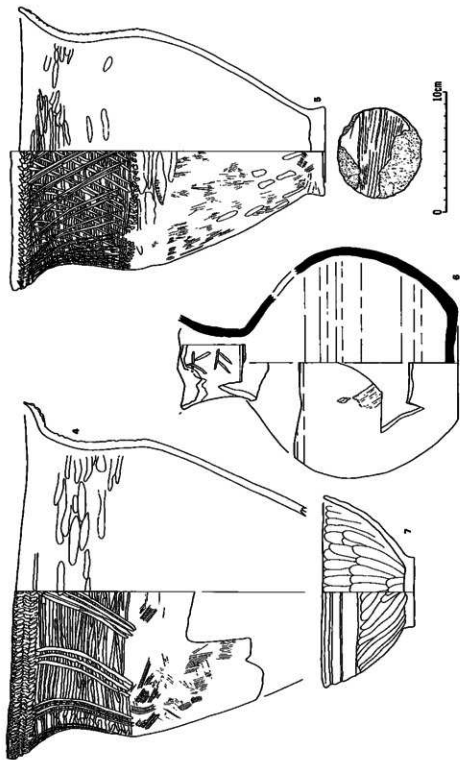


図201 大川遺跡S・H・I 弥生前期出土の土器類・土器類

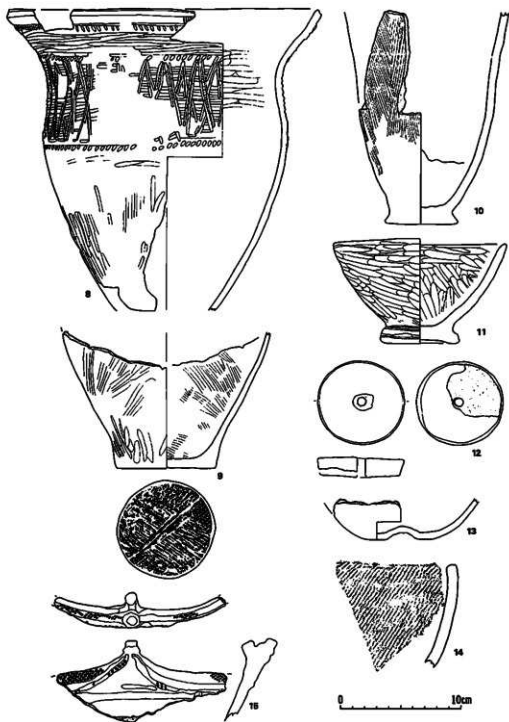


図202 大川遺跡S H-38・39発掘及び習土出土の土器と土製品

表33 大川遺跡SH-38 (1~9)・SH-39 (10~15) 出土遺物一覧

図番号	種別	分類	層位	遺物番号	各部の大きさ (mm) と重さ (g)	備 考
図200-1	土器	Ⅹa 2	床面	10	口径286mm	口縁部一部分横走沈線、連続刺突、表面刷毛目
図200-2	土器	Ⅹa 2	床面	10	口径163mm	キズミ、横走沈線、連続刺突、表面ヘラミガキ
図200-3	矢筈研習器	Ⅹa	床面	11		凝灰岩、研削痕3条
図201-4	土器	Ⅹa 3	床面	10	口径297mm	矢筈状のキズミ、横走沈線、斜段の沈線、表面ヘラミガキ
図201-5	土器	Ⅹa 3	床面	10	口径236mm、底径75mm、高さ261mm	矢筈状のキズミ、横走・斜段沈線、表面ヘラミガキ
図201-6	須恵器	Ⅹc	床面他	7・10他	147mm×106mm×60mm、1290g	頸部に「大刀」の寛書、「大刀自」の略?
図201-7	土器	Ⅹb 2	床面	9	口径159mm、底径58mm、高さ78mm	内皿土師器杯凹縁文、表面ヘラミガキ
図202-8	土器	Ⅹa 3	床面	10	口径261mm	横走沈線、連続刺突、二重筋彫刻沈線、表面ヘラミガキ
図202-9	土器	Ⅹa	床面	10	底径82mm	表面刷毛目、底面管状?、図200-1の底部?
図202-10	土器	Ⅹa	床面	48他	底径61mm	表面刷毛目
図202-11	土器	Ⅹb	床面	10	口径144mm、底径66mm、高さ87mm	表面ヘラミガキ
図202-12	結晶半	I b 1	床面	3	69mm×72mm×16mm、177.5g	無文平板状、薄手、20%前後剥落
図202-13	土器	Ⅹb 2	床面	15	底面凹部径 25mm	無文
図202-14	土器	V d 2	覆土	—		L R斜行縄文
図202-15	土器	Ⅹa 5	覆土	—		突起、口縁部沈線、R L斜行縄文

面・カマド・ピット等から各種の遺体が検出 (第5章第3節参照) されている。

SH-38 L59, M58・59Gridに跨がって検出された。床面近くでの検出の為、全形は不明瞭であり遺構検出図は省略した。しかし、竪穴は概ね5m×4.5m程の隅丸方形 (図3) で、カマドは焚口が確認されたことで、西壁中央に付設されていたことが推察された。

床面中央付近からは大量一括土器 (5個体分、図200-1・2、図201-4・5、図202-8) が出土した。これらは、いずれもⅩ群a 2類あるいはⅩ群a 3類に分類される土器である。本竪穴出土遺物の総数は、442点である。そのうち429点が土器によって占められている。

本竪穴出土遺物で特筆すべきものとして 図201-6の須恵器がある。頸部に「大刀」の寛書が認められる。この詳細については、拙稿 1996 「余市大川遺跡出土の古代の文字資料をめぐって」 『北奥古代文化』第25号 北奥古代文化研究会刊 をご参照頂きたい。

SH-39 P49, Q49Gridに跨がって検出された。各壁は後世の擾乱により削平され、プランは不明瞭であるが、概ね図199のような状況であったと考えられる。したがって、竪穴の大きさは、3.7m×3m前後で、小型の隅丸方形プランを呈していたものとみられる。

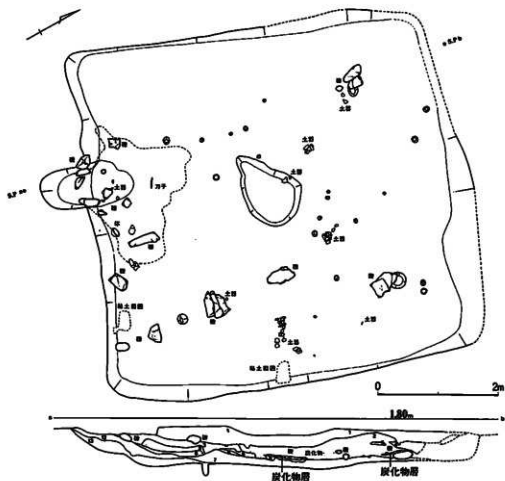
床面から小ピットが5個確認されたが、支柱穴とみられるピットは確認されなかった。カマドは概ね82cm×49cm、煙道は44cm×30cm前後であり、中央部からは地床炉とみられる焼土 (概ね70cm×60cmの範囲) が検出された。

図202-10~13は床面出土の遺物である。このうち10~12が本竪穴の時期に伴う遺物であるとみられる。本竪穴からは、合計308点の遺物が出土した。そのうち、282点が土器で、19点がフレーク、その他、竪穴覆土からも陶磁器が4点出土している。図202-13は、縄文晩期前葉の土器とみられる。図のように底部には、指で押圧したとみられる凹部が認められた。非常に稀な底部形

状を呈する土器である。

SH-40 L48, M47・48Gridに跨って検出(図3)された。北隅周辺をSH-70に切られている。竪穴の大きさは、3.93m×3.82mを測り、隅丸方形プランを呈する竪穴である。壁高は、30cm～50cmで、最深部は確認面より59cmを測る。

1993年度と1994年度の両年度に跨がる調査の為、矢板によって分断された。また、攪乱によって壊されている等のこともあり、遺構検出図については省略した。



- |                                 |                              |                                    |
|---------------------------------|------------------------------|------------------------------------|
| 1 暗褐色土 (7.5YR 3/4,<br>炭土・炭化物混入) | 4 明褐色土 (7.5YR 5/6)           | 7 にぶい橙土 (7.5YR 6/4)                |
| 2 褐色土 (7.5YR 4/4,<br>炭土・炭化物混入)  | 5 褐色土 (10YR 4/4,<br>炭化物混入)   | 12 にぶい褐色砂 (7.5YR 5/4,<br>粘土・炭化物混入) |
| 3 暗褐色土 (7.5YR 3/3,<br>砂混入)      | 6 黒褐色土 (7.5YR 3/2,<br>炭化物混入) | 13 極暗褐色砂 (7.5YR 2/3,<br>炭土混入)      |

図203 大川遺跡SH-41検出状況

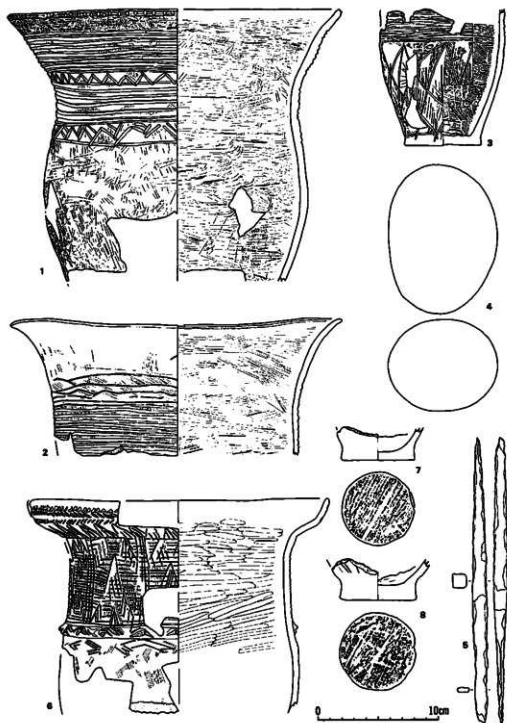
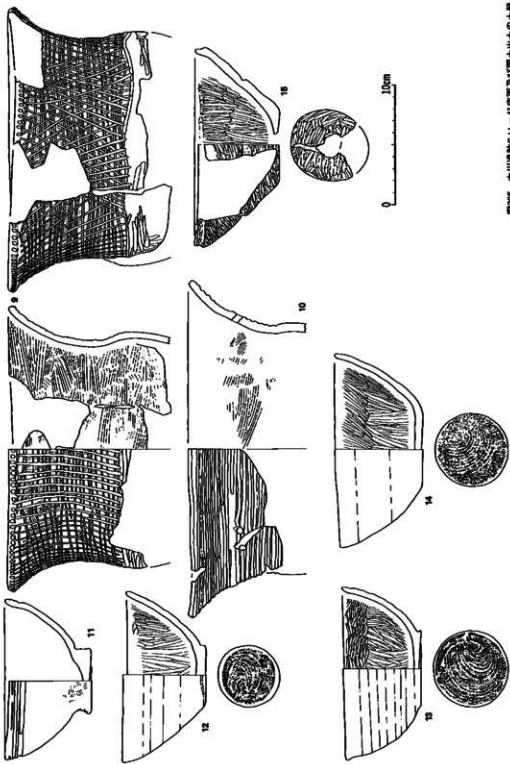


图204 大川遺跡SH-40・41断面及び習土出土の遺物





南東部床面直下から、GP-617と622が検出された。また、残存状態は悪いが、径50cm程の焼土範囲が確認された。煙道は概ね96cm×64cmであった。床面で確認した小ピットは合計11個、いずれも径10cm前後、深さ4～29cm程のピットである。

本竪穴の出土遺物の総数は1,362点、そのうち土器が1,233点、石器28点、フレーク81点、覆土出土の陶磁器や鉄製品等10点である。床面出土の土器は、図204-1～3であり、Ⅹ群a 2類あるいはⅩ群a 3類の時期に該当するものと考えられる。

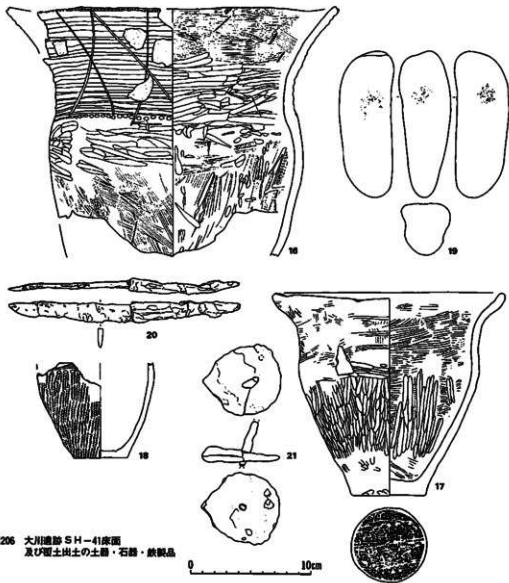


図206 大川遺跡 5H-41床面  
及び覆土出土の土器・石器・鉄製品

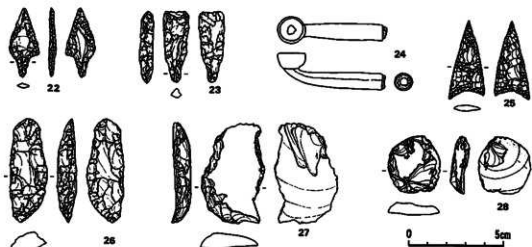


図207 大川遺跡SH-40・41床面及び覆土出土の遺物

表34 大川遺跡SH-40 (1~5・22~24)・SH-41 (6~21・25~28) 出土遺物一覧

図番号	種別	分類	層位	遺物番号	各部の大きさ (mm) と重さ (g)	備 考
09204-1	土器	Ⅸa 3	床面他	27他		キズミ、横走沈線、曲線状沈線、表裏刷毛目
09204-2	土器	Ⅸa 2	床面他	10他		ラフな沈線、横走沈線、表裏刷毛目
09204-3	土器	Ⅸa	床面	4	底径 63 mm	横走沈線、網目状沈線、表裏刷毛目
09204-4	酸石	Ⅴa 2	覆土	—	123 mm × 90 mm × 76 mm	安山岩
09204-5	鉄製品	I a	覆土	—	236 mm × 12 mm × 11 mm	箔
09204-6	土器	Ⅸa 5	床面他	10他		内周縁、キズミ、刷毛目、横走沈線、網目状沈線、表裏刷毛目
09204-7	土器	Ⅸa	覆土	—	底径 61 mm	表刷毛目、底面窪痕
09204-8	土器	Ⅸa	床面	16	底径 64 mm	表裏刷毛目、底面窪痕
09205-9	土器	Ⅸa 4	床面他	5・7他	口径237mm	表刷毛目、キズミ、横走沈線、網目状沈線、網目状沈線、刷毛目
09205-10	土器	Ⅸa 2	覆土他	—		横走沈線、網目状沈線、表裏刷毛目
09205-11	土器	Ⅸb 5	床面	13	口径133mm、底径55mm、高さ73mm	2条の凹線文、坏
09205-12	土器	Ⅸb 4	床面	8	口径142mm、底径50mm、高さ69mm	内黒土師器坏、内面ヘラミガキ、糸切底
09205-13	土器	Ⅸb 4	床面	4	口径144mm、底径63mm、高さ65mm	内黒土師器坏、内面ヘラミガキ、糸切底
09205-14	土器	Ⅸb 4	床面	3	口径161mm、底径60mm、高さ73mm	内黒土師器坏、内面ヘラミガキ、糸切底
09205-15	土器	Ⅸb 2	覆土他	—	高さ70mm	内黒土師器坏、内面ヘラミガキ、有段、底部穿孔?
09205-16	土器	Ⅸa 3	覆土	—		キズミ、横走沈線、網目状沈線、網目状沈線、刷毛目
09205-17	土器	Ⅸa	覆土	—	底径62mm、高さ168mm	表裏刷毛目、底面窪痕
09205-18	土器	Ⅸa 4	覆土	—	底径44mm	横走沈線、網目状沈線、L R 縦行縄文
09205-19	凹石	Ⅴb 3	覆土	—	121 mm × 44 mm × 43 mm、290g	凝灰岩
09205-20	刀子	Ⅲa 3	床面	1	193 mm × 17 mm × 4 mm	柄部の木質残存
09205-21	鉄製品	Ⅴf	覆土	—	径65mm、厚7mm	鉋線車、軸一部残存
09207-22	石	Ⅰb 3	床面	30	36 mm × 16 mm × 2mm、1.4g	黒曜石、表裏に1次刷毛目大きく残存
09207-23	石	Ⅱa 3	覆土	—	38 mm × 13 mm × 5mm、4.3g	硬質頁岩
09207-24	キセル	X e 1	覆土	—	大皿径15mm、管最大径9mm	青銅製、壺宇残存
09207-25	石	Ⅰb 2	床面	17	43 mm × 19 mm × 3mm、1.8g	黒曜石、
09207-26	ナイフ	Ⅱb	覆土	—	55 mm × 20 mm × 9mm、11.0g	赤色凝灰岩
09207-27	播磨	Ⅲa	覆土	—	53 mm × 35 mm × 8mm、16.0g	黒曜石、パルプ輪車、円筒の自然面大きく残存
09207-28	播磨	Ⅲa	覆土	—	32 mm × 28 mm × 6 mm、7.2g	黒曜石、壺蓋子蓋入、パルプ輪車、自然面大きく残存

SH-41 M55・56・57, N55・56・57 Gridに跨がって検出された。竪穴の大きさは6.32 m×5.94m程で、確認面から床までの深さは最大81cmを測る。カマドは南カマド、74cm×70cm程の範囲で袖石が周辺から出土した。煙道は84cm×70cmの大きさである。地床炉が竪穴中央部にあり、1.35m×90cmの大きさの掘り込みであった。

本竪穴出土遺物の総数831点、そのうち763点が土器、51点がフレーク等であるが、刀子1点がカマド近くから出土している。調理に使用した刀子ということになろうか。

本竪穴出土の土器は、図204-6・8及び図205-9・11-14であり、8を除く土器が竪穴の時期を示しているようである。つまり、区群a 4類土器期ということになる。

SH-42 N58, O57・58 Gridに跨がって検出された。第43号石組炉に北壁、第45号石組炉に東壁を切られている。竪穴の大きさは、概ね5 m×4.52mで、確認面からの深さは最深部で46cmを測る。

床面で検出された小ピットは7個あり、いずれも西側部分での検出(図208)である。カマドは概ね60cm×50cmで、袖石10個程が出土している。煙道は1.1 m×61cm程の大きさで、煙道の先端部近くから小ピット1個が検出されている。

本竪穴から出土した遺物の総数は、45点と少ない。そのうち土器が41点、石器1点、フレーク1点、覆土出土の陶磁器5点等である。カマドのソイルサンプルをフローテーションしたところ、コメ・アサ他若干の植物遺体(第5章第3節参照)が検出された。図210-1が本竪穴出土の土

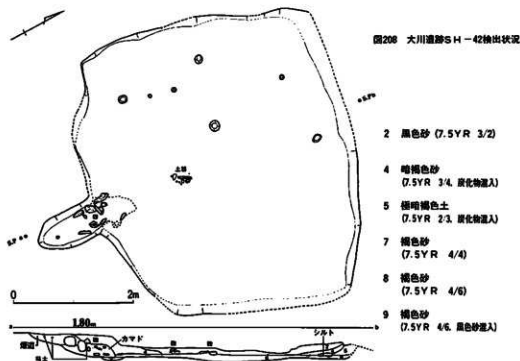


図209 大川遺跡SH-43検出状況

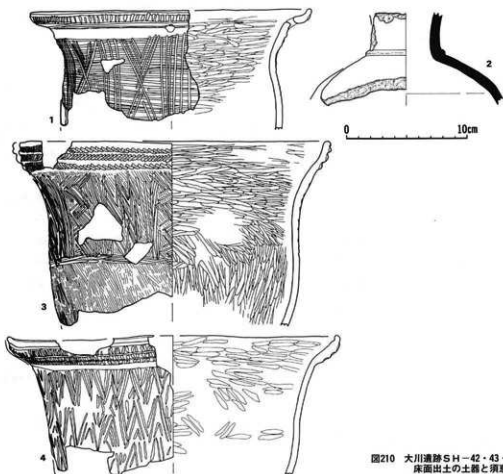
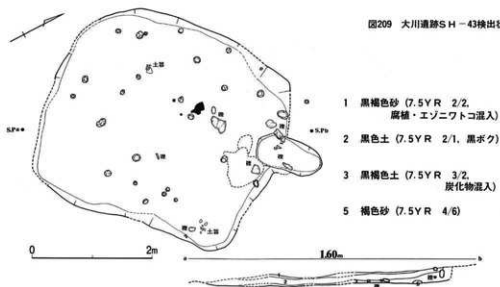


図210 大川遺跡SH-42・43・48 床面出土の土器と須恵器

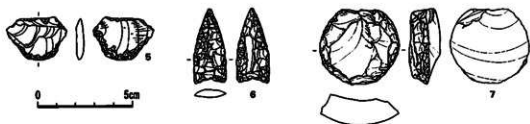


図211 大川遺跡SH-42・45床面及び覆土出土の石器

表35 大川遺跡SH-42 (1・5)・SH-43 (2)・SH-45 (6・7)・SH-48 (3・4) 出土遺物一覧

図番号	種別	分類	層位	遺物番号	各部の大きさ (mm) と重さ (g)	備 考
図219-1	土器	Ⅸa 3	床面	1		キズミ、横立波線、縦立・斜位の波線、裏へラミガキ
図220-2	須恵器	Ⅸc	床面	2		頸部破片、各部剥落、風化顯著
図220-3	土器	Ⅸa 4	床面	2		矢羽状のキズミ、波線、表刷毛目、裏へラミガキ
図220-4	土器	Ⅸa 4	床面	4		キズミ、矢羽状波線、裏へラミガキ
図221-5	板石	Ⅸa 2	覆土	—	32 mm × 26 mm × 4 mm, 3.2g	黒輝石、角礫の自然面露部に若干残存、1は剥離面裏面残存
図221-6	石	Ⅸb 2	床面	1	40 mm × 17 mm × 4 mm, 2.6g	黒輝石、先端部若干欠損
図221-7	板石	Ⅸb	覆土	—	40 mm × 42 mm × 13 mm, 33.4g	硬質頁岩、ラウンド・スクレイパー、厚手

器であり、Ⅸ群 a 3 類期のものとみられる。

SH-43 N59・O59 Gridに跨がって検出された。竪穴の大きさは、3.7 m × 3.4 m 程の隅丸方形 (図209) で、確認面からの深さは、最深部で39 cm を測る。カマドは北東カマドで90 cm × 70 cm 程の大きさで、袖石が5個程出土している。煙道は1.1 m × 50 cm 程の大きさである。床面の小ピットは合計27個検出され、分散していた。主柱穴とみられるピットや地床炉等は検出されなかった。

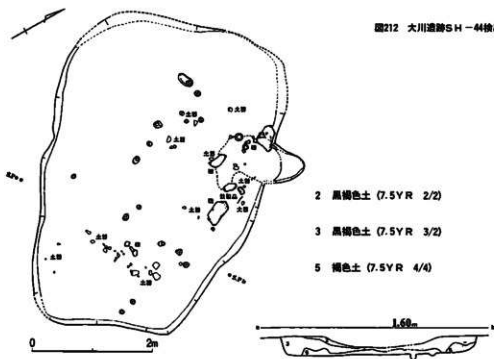
本竪穴出土の遺物は合計37点と非常に少ないが、内訳は土器34点の他、覆土出土の鉄鍋や陶磁器である。

図示したのは、図210-2、1点のみである。この須恵器は、五所川原産のものともみられるが、風化が顕著であり、各部が剥落している。胎土は一見、赤色化しており、当該席の特徴をよく示している。SH-38出土土器須恵器壺 (「大刀」、図201-6) と同様の器種・器形を示すものとみられる。当該須恵器は、10c 後半頃に比定されるものと考えられる。

SH-44 M58・N58 Gridに跨がって検出された。竪穴の大きさは5.1 m × 3.6 m 程の隅丸長方形を呈する。確認面からの深さは、最深部で40 cm を測る。床面には18個の小ピットが検出されたが、主柱穴様のピットは認められなかった。

カマドは北東カマドで、地床炉等は検出 (図212) されなかった。竪穴の北側と南東側は、後世の攪乱によって壊されている他、削平等の影響もあり、床面近くでの検出であった。カマドは概ね1.1 m × 92 cm、煙道は50 cm × 40 cm 程の大きさである。

図212 大川遺跡SH-44検出状況



本竪穴出土の遺物総数は95点と少ない。そのうち、土器が89点、石器2点、フレーク3点他であった。カマドのソイルサンプルをフローテーションしたところ、若干の植物遺体（第5章第3節参照）が検出された。図示した遺物は皆無であるが、床面から、Ⅹ群a3類土器の破片が出土しており、当該期の竪穴とみられる。

SH-45 M57・N57Gridに跨がって検出（図3）された。竪穴の北西側と東側は後世の攪乱によって、また、竪穴中央部は第44号石組炉によって、それぞれ壊されているため遺構検出図は省略した。竪穴西側部分から合計9個の小ピットが検出された。主柱穴や地床炉あるいはカマド等は検出されなかった。

本竪穴出土遺物の総数は61点と少ないが、内訳は土器39点、石器2点、フレーク3点、覆土出土の陶磁器14点他である。図示した遺物は、図211-6・7の2点のみであるが、床面出土の擦文土器は皆無である。しかし、覆土出土の擦文土器や周辺の擦文竪穴他から、Ⅹ群a3類ないしⅩ群a4類土器期の竪穴ではないかと推察しているところである。

SH-46 J57・58Gridに跨がって検出（図3）された。西側部分が矢板、南側部分は後世の攪乱によって概ね半分以上が失われている。したがって、遺構検出図は省略した。検出された北壁及び東壁等から類推すれば、竪穴の大きさは概ね4m×3m前後とみられ、残存部分からみ

た壁高は、最深部で39cmを測る。竪穴内の小ピット・地床炉・カマド等も一切確認できなかった。また、本竪穴に明確に帰属するとみられる遺物も皆無であった。

SH-47 L60, M59・60・61, N60の5 Gridに跨がって検出(図3)された比較的大型の竪穴であるが、東壁は後世の攪乱によって、西壁は矢板の影響によって失われている。

したがって、これも遺構検出図を省略した。残存し、確認できた北壁と南壁及び煙道等から、本竪穴の大きさは、概ね6m×5.8m前後の隅丸方形プランを有するものとみられる。確認面からの深さは、最深部で46cmを測る。カマドは西カマドであり、地床炉や床面の小ピット等は検出できなかった。煙道は煙穴部分が失われているが、1.4m×60cm前後とみられる。

本竪穴は、東西両側部分が失われている事もあってか、明確に帰属する遺物が皆無であった。したがって、帰属時期も不明である。

SH-48 P57・58両Gridに跨がって検出(図3)された。竪穴の北隅と西隅以外は、矢板及び後世の攪乱によって、ほとんどが壊されており、わずかに床面が30%弱検出されたにすぎない。したがって、遺構検出図については省略する。

現存した両隅から竪穴の大きさを類推すれば、概ね1辺5m程の隅丸方形の竪穴であったと考えられる。現存した部分での壁高は35cm程である。床面からは、小ピットが3個のみ確認されただけで、地床炉やカマド、その他のピット等については一切検出されなかった。

本竪穴出土遺物総数は62点、そのうち土器が60点、石斧1点他である。図210-3・4が床面出土の土器である。いずれもⅩ群a4類土器であり、当該土器が本竪穴の時期を示すとみられる。

SH-49 D52・53, P52・53Gridに跨がって検出された。竪穴の大きさは、概ね4.2m×4m(図213)、確認面から床面までの最深部は、48cmを測る。北西隅をGP-595に切られている。また、覆土上面からGP-600を検出した。

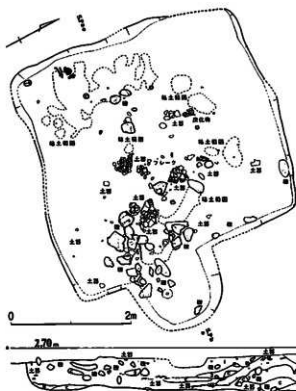
カマドは東カマドで、範囲は概ね1.4m×60cm、煙道は1.4m×1.1m程の大きさである。床面から小ピット4個を検出、他には主柱穴とみられるピットや地床炉等は確認されていない。竪穴床面の北・東・西から貼床とみられる粘土範囲が認められた。

本竪穴出土の遺物総数は2,226点で、そのうち土器が2,052点、石器が30点、フレークが117点他である。カマドのソイルサンプルや貼床部分をフローテーションしたところ、若干の植物遺体が検出(第5章第3節参照)された。

図214-1・2、図215-3~7、図216-8~15が主な床面出土の土器である。したがって、本竪穴の時期に使用された土器は、Ⅹ群a2類土器とみられる。



図213 大川遺跡SH-49検出状況



- 1 黒褐色砂 (7.5YR 3/2, 炭化物混入)
- 2 黒褐色砂 (7.5YR 2/2)
- 3 褐色砂 (7.5YR 4/6)
- 4 極暗褐色砂 (7.5YR 2/3)
- 5 黒色土 (7.5YR 1.7/1)
- 6 暗褐色砂 (7.5YR 3/3)
- 7 褐色砂 (7.5YR 4/3, 炭化物・粘土混入)
- 8 黒褐色砂 (7.5YR 3/1)
- 9 褐色砂 (7.5YR 4/4, 炭土・粘土混入)

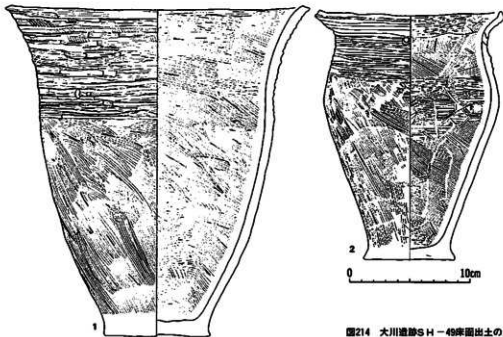


図214 大川遺跡SH-49検出状況

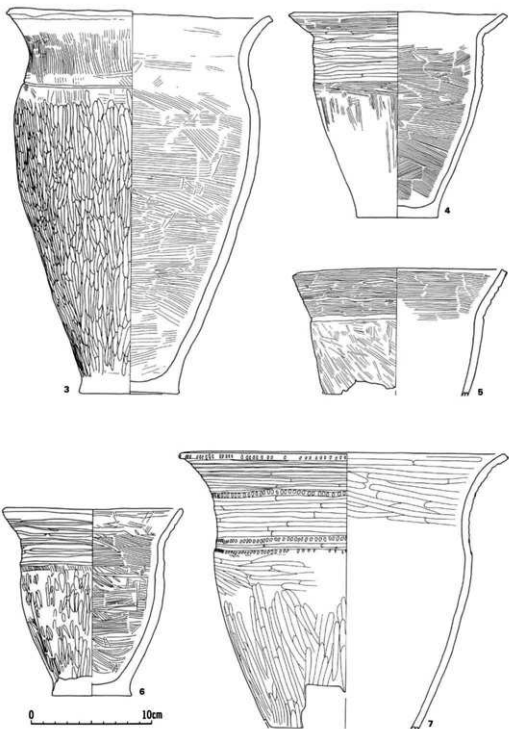


図215 大川遺跡SH-49床面出土の土器

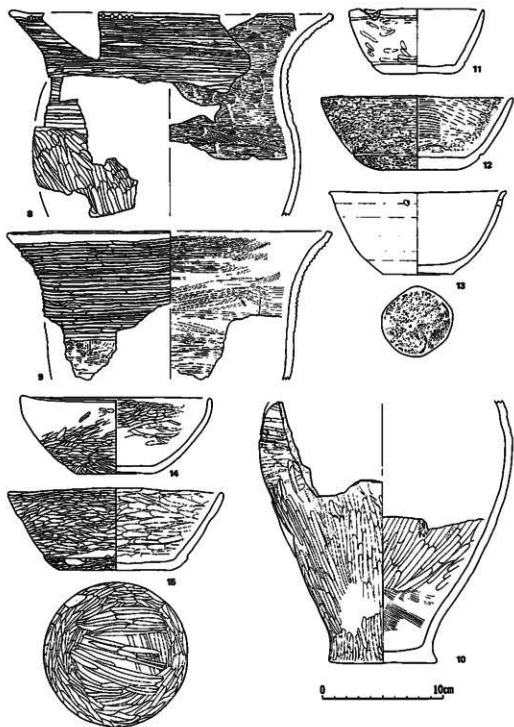


图216 大川遺跡SH-49床面出土の土器

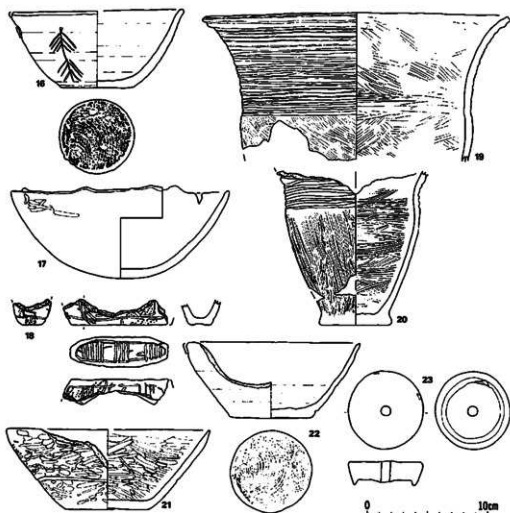


図217 大川遺跡SH-49床面及び習土出土の土器と紡錘車

表36 大川遺跡SH-49出土遺物一覽

図番号	種別	分類	層位	遺物番号	各部の大きさ (mm) と重さ (g)	備 考
19214-1	土 器	Ⅱ a 2	床 面	27	口径 253mm, 底径 89mm, 高さ 272mm	横走凹線文、表裏刷毛目
19214-2	土 器	Ⅱ a 2	床面地	101他	底径 76mm, 高さ 205mm	横走凹線文、袖挿孔、裏裏刷毛目、底面窪痕
19215-3	土 器	Ⅱ a 2	床 面	20	口径 221mm, 底径 84mm, 高さ 317mm	刷毛目、口縁部刷毛目、有段、胴部～底部ヘラミガキ
19215-4	土 器	Ⅱ a 2	床 面	30	口径 182mm, 底径 68mm, 高さ 171mm	横走凹線文、口縁部ヨコナゲ、表裏刷毛目
19215-5	土 器	Ⅱ a 2	床面地	109他	口径 179mm	横走凹線文、表面とも刷毛目及びヘラミガキ
19215-6	土 器	Ⅱ a 2	床面地	21他	口径 150mm, 高さ 156mm	横走凹線文、表面とも刷毛目及びヘラミガキ
19215-7	土 器	Ⅱ a 2	床面地	40他	口径 274mm	キザミ、透粒列突、横走凹線文、有段、裏裏ヘラミガキ
19216-8	土 器	Ⅱ a 2	床面地	25他		キザミ、横走凹線文、裏刷毛目、裏ヘラミガキ
19216-9	土 器	Ⅱ a 2	床面地	9他		横走沈線、裏刷毛目
19216-10	土 器	Ⅱ a 2	床面地	44他	底径 90mm	横走沈線、裏ヘラミガキ、裏刷毛目とヘラミガキ
19216-11	土 器	Ⅱ b 2	床面地	20他	口径 112mm, 底径 60mm, 高さ 55mm	土師器環、横走沈線、平底、ヘラミガキ

図番号	種別	分類	層位	遺物番号	各部の大きさ (mm) と重さ (g)	備 考
図216-12	土器	Ⅸb 2	床面地	7他	口径 160mm, 底径 75mm, 高さ 62mm	内黒土師器環, 横走沈線, 表裏ヘラミダギ器著
図216-13	土器	Ⅸb 3	床面地	18他	口径 148mm, 底径 58mm, 高さ 68mm	土師器環, 横走沈線, 表裏ヘラミダギ器著
図216-14	土器	Ⅸb 2	床面地	42他	口径 160mm, 底径 65mm, 高さ 65mm	内黒土師器環, 表裏ヘラミダギ, 有段
図216-15	土器	Ⅸb 2	床面	5	口径 180mm, 底径 95mm, 高さ 68mm	内黒土師器環, 表裏ヘラミダギ器著, 有段
図217-16	土器	Ⅸb 3	床面	10	口径 143mm, 底径 60mm, 高さ 64mm	土師器環, 赤切底, 矢羽根状の縁割
図217-17	土器	Ⅸb 2	床面	92	口径 182mm, 高さ 76mm	丸底, 無文, 8突起, 浅鉢
図217-18	土器	Ⅸc 1	覆土	—	底径 25mm	舟形土器, 沈線
図217-19	土器	Ⅸa 2	覆土	—	底径 61mm	横走凹線文, 表裏刷毛目
図217-20	土器	Ⅸa 2	覆土	—	底径 70mm, 高さ 62mm	横走凹線文, 表裏刷毛目
図217-21	土器	Ⅸb 2	覆土	—	底径 69mm, 高さ 63mm	内黒土師器環, 横走沈線, 表裏ヘラミダギ器著
図217-22	土器	Ⅸb 3	覆土	—	—	内黒土師器環, 赤切底
図217-23	鉢	Ⅸa 1	覆土	—	上底 62mm, 下底 51mm, 厚さ 19mm	無文, 上底コンケイブ, 完形
図218-24	石	Ⅸb 3	覆土	—	27 mm × 10 mm × 2 mm, 0.6g	黒曜石, 表裏1次刺線面残存
図218-25	石	Ⅸb 3	覆土	—	25 mm × 12 mm × 3 mm, 0.9g	黒曜石
図218-26	石	Ⅸa 1	覆土	—	62 mm × 38 mm × 7 mm, 20.4g	黒曜石, バルブ残存
図218-27	抉人削器	Ⅸd 2	覆土	—	(55) mm × 34 mm × 11 mm, (15.2)g	黒曜石, 先端部欠損
図218-28	削器	Ⅸc 2	覆土	—	35 mm × 26 mm × 8 mm, 5.9g	硬質頁岩
図218-29	石	Ⅸa 4	覆土	—	37 mm × 36 mm × 3 mm, 7.8g	黒曜石, バルブ残存, 内側の自然面基部若干残存
図218-30	石	Ⅸa 3	覆土	—	25 mm × 15 mm × 2 mm, 1.3g	硬質砂岩

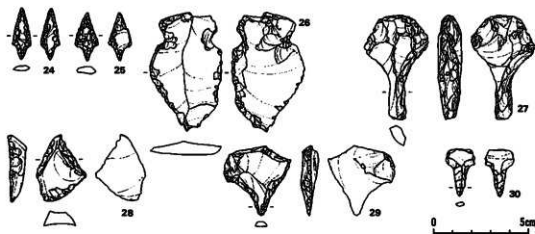


図218 大川遺跡SH-49覆土出土の石器

SH-50 O48・P48両Gridに跨がって検出された。後世の擾乱により南壁と南隅は壊されている。竪穴の大きさは、4.5m×4.4m程の隅丸方形プランを呈し、確認面から床までは、40cm~81cmを測る。カマドは南カマドで、1m×50cm、煙道の煙穴部分は不明であるが、80cm×60cm前後の範囲とみられる。覆土上部には貝層が2枚(第1貝層及び第2貝層、図219)認められたが、第1貝層については、近世とみられる。

床面から13個の小ピットが検出されたが、支柱穴とみられるピットは確認されなかった。地床炉とみられる炭化物の範囲は、54cm×20cm程で、床面中央部で確認された。本竪穴出土物の総数は2,294点と非常に多く、内訳は土器が1,997点、石器25点、フレイク136点、貝層出土の

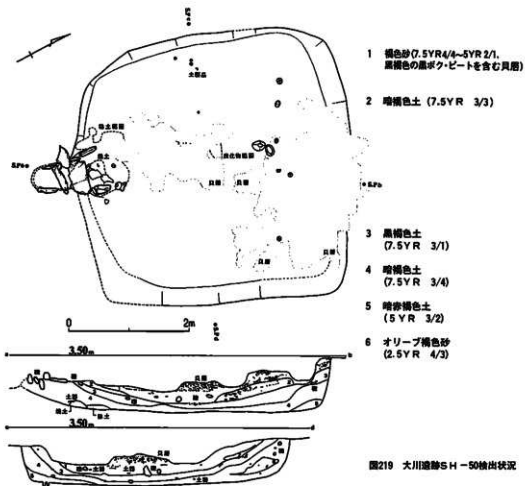


図219 大川遺跡SH-50検出状況

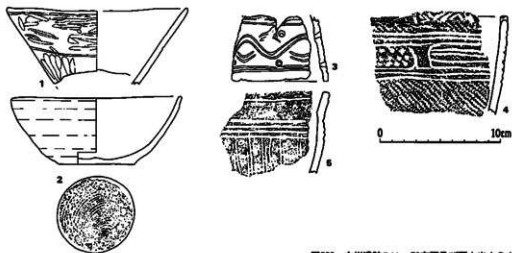


図220 大川遺跡SH-50床面及び厩土出土の土層

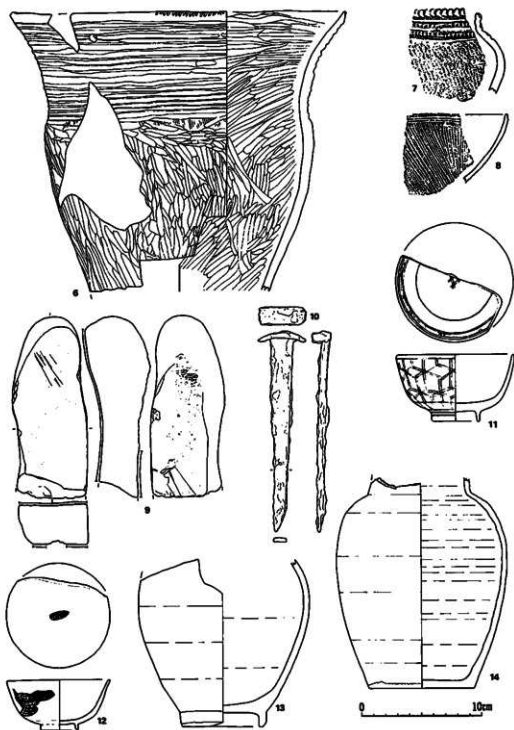


図221 大川遺跡S H-50碎面及び習土出土の各種遺物

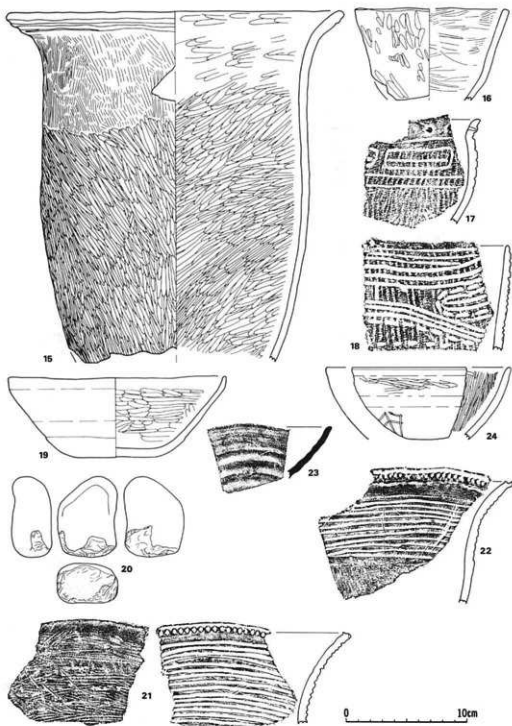


図222 大川遺跡S H-51・52床面及び覆土出土の遺物



図223 大川遺跡SH-51検出状況

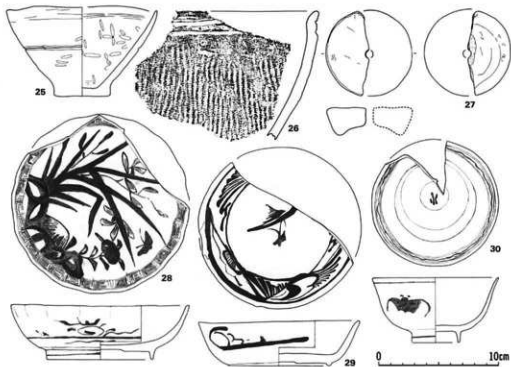
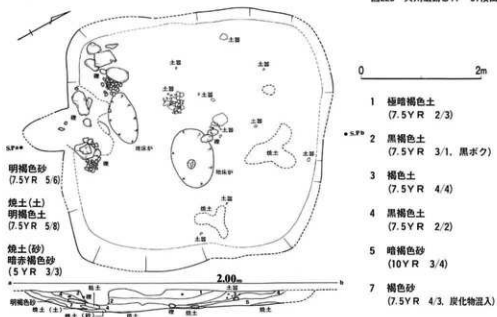
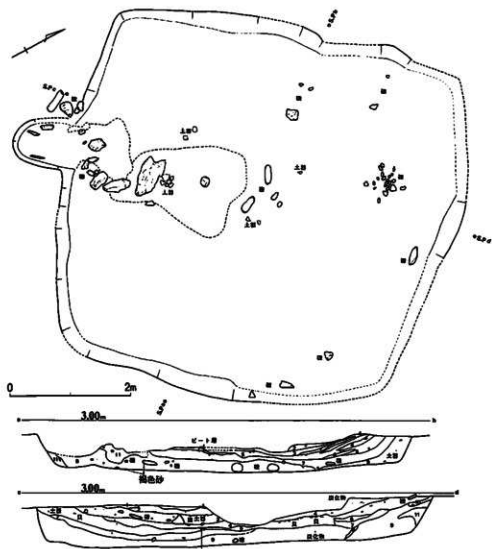


図224 大川遺跡SH-52覆土出土の土器・紡錘車・陶磁器



- |                              |                                    |                              |
|------------------------------|------------------------------------|------------------------------|
| 1 褐色砂 (7.5YR 4/3,<br>黒色砂混入)  | 2 暗褐色土 (7.5YR 3/3)                 | 3 暗褐色土 (7.5YR 2/3,<br>褐色砂混入) |
| 4 黒褐色砂 (7.5YR 3/2,<br>炭化物混入) | 5 黒褐色砂 (7.5YR 2/2,<br>上面に貝層及びピート層) | 6 褐色砂 (7.5YR 4/4)            |
| 7 黒色砂 (7.5YR 2/1,<br>黒ボク)    | 8 黒褐色砂 (7.5YR 3/1)                 | 9 暗褐色砂 (7.5YR 3/3,<br>黒色砂混入) |
| 10 黒褐色砂 (5YR 3/1,<br>炭化物混入)  | 11 褐色砂 (7.5YR 4/6)                 |                              |

図225 大川遺跡SH-52検出状況



図226 大川遺跡SH-50~52床面及び覆土出土の各種遺物

陶磁器53点他である。前述したように、覆土から大量の動物遺体が出土（第5章第2節参照）している。また、地床炉・カマド・第2貝層・第1貝層からも各種の植物遺体が検出（第5章第3節参照）されている。図220-1・2及び図221-6が本竪穴床面出土の土器である。したがって、Ⅹ群 a 2 類土器を使用していた時期が本竪穴の時期とみられる。

SH-51 O55・56両 Grid で検出された。竪穴は4.3m×4.2m程の大きさで、確認面から床までの深さは、最大で55cmを測る。カマドは南カマド（図223）で、1.3m×1.2m程の範囲を有し、煙道は80cm×70cm程の規模とみられる。

竪口の両側からは、礫48個が出土した。この両集石は、東側のものが15個、西側のものが33個によって構成されている。地床炉とみられるものが竪口側と中央部から各1ヶ所検出された。他に竪穴東側部分から2ヶ所の焼土も確認された。

本竪穴の出土遺物総数は575点であり、土器が490点、石器が7点、フレックが24点、前述したような礫が48点他の内訳である。カマド及び焼土のソイルサンプルをフローテーションしたところ、各種の植物遺体が若干検出（第5章第3節参照）された。図222-15が床面出土の土器であ

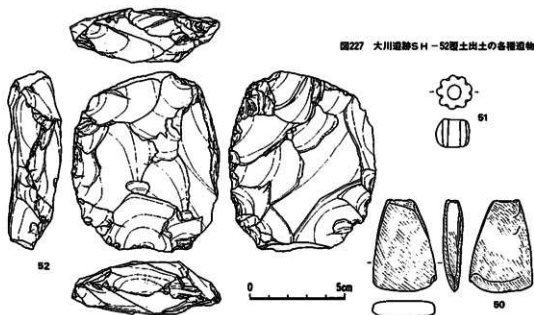


図227 大川遺跡SH-52層出土の各種土器

表37 大川遺跡SH-50(1~14・31~39)・SH-51(15~18・40・41)・SH-52(19~30・42~52)出土遺物一覧

図番号	種別	分類	層位	遺物番号	各部の大きさ (mm) と重さ (g)	備 考
19220-1	土 器	Ⅹ b 2	床 面	17	1.1径142mm, 底径63mm, 高さ56mm 底径80mm	土師器環, 横走沈線, 表裏ヘラミガキ
19220-2	土 器	Ⅹ b 3	床 面	12		土師器環, 糸切底, 風化による割部剥落
19220-3	土 器	Ⅹ a 1	覆 土	—		横走沈線, 有孔, 弧線文, 波状沈線文
19220-4	土 器	Ⅹ b 2	覆 土	—		キザミ, 突起, 横走沈線, 爪印文, 弧線文, 直し斜行線文

図番号	種別	分類	附位	遺物番号	各部の大きさ (mm) と重さ (g)	備 考
P420-5	土 器	Vb 3	覆土	—		横走沈線。条痕文
P421-6	土 器	IX a 2	床面他	13他		キザミ、縞線孔、横走沈線文、表面ヘラミガキ
P421-7	土 器	V a 3	覆土	—		キザミ、連続刺突、横走沈線、R.L.縦行縄文
P421-8	土 器	Vb 3	覆土	—		横走沈線、条痕文
P421-9	硬 石	IX c	覆土	—	(151)mm×62mm×33mm、(590)g	凝灰質砂岩、平折
P421-10	船 釘	I c	覆土	—	166mm×18mm×3mm	通釘
P421-11	陶磁器	II a	覆土	—	底径40mm、高さ56mm	磁器碗、染付、緑青、肥前、19c中葉
P421-12	陶磁器	II a	覆土	—	口径87mm、底径31mm、高さ42mm	磁器、湯碗の湯呑み、釘彫、瀬戸、美濃、19c中葉
P421-13	陶磁器	II d	覆土	—	底径67mm	陶磁器、東北諸窯、幕末
P421-14	陶磁器	II e	覆土	—	底径87mm	陶磁器、信濃、18c後半-19c前半
P422-15	土 器	IX a 2	床面	15	口径280mm、	横走沈線文、口縁部刷毛目、表面ヘラミガキ
P422-16	土 器	IX a 1	覆土	—		ヨコナデ、表ヘラミガキ、裏刷毛目
P422-17	土 器	V c 1	覆土	—		アツキイロ実器文、横走沈線、R.L.縦行縄文
P422-18	土 器	V c 4	覆土	—		沈線、刺突、R.L.縦行縄文
P422-19	土 器	IX b 2	床面	49	口径181mm、底径85mm、高さ66mm	内温土師器鉢、有段
P422-20	硬 石	V a 2	床面	25	63mm×48mm×33mm、150g	硬質頁岩、黄色、いわゆるジャスパー
P422-21	土 器	IX a 2	覆土	—		キザミ、横走沈線、裏刷毛目
P422-22	土 器	IX a 2	覆土	—		キザミ、横走沈線、表面ヘラミガキ
P422-23	硬 石	III b	覆土	—		内温土師器鉢、表ヘラミガキ面、矢羽状の線刻
P422-24	土 器	IX b 3	覆土	—		内温土師器鉢、表ヘラミガキ面、矢羽状の線刻
P424-25	土 器	IX b	覆土	—	底径47mm、高さ75mm	内温土師器鉢、横走沈線、平折、表面ヘラミガキ
P424-26	土 器	V c 3	覆土	—		横走沈線、R.L.縦行縄文
P424-27	紡 績 車	II a 1	覆土	—		無文、平欠
P424-28	陶磁器	III b	覆土	—	口径150mm、底径80mm、高さ45mm	磁器中皿型打豆/日向高台、肥前と美濃、19c後半
P424-29	陶磁器	III b	覆土	—	口径135mm、底径86mm、高さ37mm	磁器中皿型/日向高台、肥前と美濃、19c後半
P424-30	陶磁器	III a	覆土	—	口径106mm、底径40mm、高さ54mm	磁器中皿型/日向高台、肥前と美濃、19c後半
P426-31	土 製 品	I i 7 ?	覆土	—	直径37mm、孔径12mm、高さ28mm	きのこ状土製品?、有孔、有穴、無文
P426-32	土 製 品	I i 4	床面	16	孔径19mm、厚さ10mm	側縁部キザミ、平欠
P426-33	石 鏡	I b 3	覆土	—	39mm×11mm×5mm、1.6g	黒曜石
P426-34	削 器	II c 1	覆土	—	34mm×22mm×7mm、6.1g	黒曜石、裏面に1次剥離面残存
P426-35	ナイフ	II b	覆土	—	(50)mm×22mm×10mm、(8.5)g	黒曜石、基部若干欠損、左手の剥離面残存
P426-36	挿入削器	II d 1	覆土	—	36mm×27mm×5mm、5.4g	黒曜石、角隅の自然面大きく残存
P426-37	U・F	I b 3	覆土	—	63mm×31mm×9mm、18.0g	黒曜石、角隅の自然面大きく残存
P426-38	石 鏡	III c	覆土	—	84mm×37mm×8mm、42.4g	硬質頁岩
P426-39	竹角製品	IV 1	覆土	—	径19mm、孔径4mm、厚さ5mm	ボタン
P426-40	石 鏡	I b 2	覆土	—	34mm×15mm×3mm、1.4g	黒曜石
P426-41	石 鏡	I b 3	覆土	—	32mm×15mm×3mm、1.0g	黒曜石
P426-42	土 製 品	I i 9	覆土	—	径22mm、8.1g	刺突、液状沈線
P426-43	石 鏡	I b 2	覆土	—	46mm×18mm×4mm、2.6g	黒曜石
P426-44	挿入削器	II d 1	覆土	—	50mm×23mm×4mm、4.5g	黒曜石、球型多く混入、バルブ除去
P426-45	挿入削器	II d 1	覆土	—	66mm×27mm×6mm、15.2g	硬質頁岩、バルブ残存
P426-46	削 器	II c 2	覆土	—	53mm×40mm×7mm、12.0g	黒曜石、バルブ除去、角隅の自然面残存
P426-47	削 器	II c 2	覆土	—	54mm×20mm×7mm、10.0g	黒曜石、バルブ除去、角隅の自然面残存
P426-48	削 器	II c 2	覆土	—	62mm×47mm×13mm、41.4g	硬質頁岩、自然面残存
P426-49	石 鏡	IV a 3	覆土	—	60mm×9mm×7mm、6.4g	硬質頁岩
P427-50	石 斧	V a 1	覆土	—	(48)mm×34mm×7mm、(26.0)g	シルト岩、基部若干欠損
P427-51	ガラス玉	II a 2	覆土	—	径18mm、高さ15mm、6.7g	みかん玉
P427-52	石 槌	I b 1	覆土	—	95mm×79mm×31mm、210g	頁岩、自然面残存

る。したがって、当該期の竪穴とみられる。

SH-52 O50・51, P50・51の4Gridに跨がって検出された。竪穴の北隅と東隅及び東壁は、攪乱によって壊されていた。GP-623をカマドの西側で、GP-629と632を北側床面隅で、UP-80を北西壁で切っている。さらに、竪穴中央部ではGP-641も切っている。

竪穴の大きさは、6.6m×6.3m前後とみられる。カマドは南西カマドで、1.1m×90cm、煙道も1.1m×90cm程の規模である。竪穴北側から29個の礫による集石(図225)が確認された。本竪穴の覆土にも近世とみられる貝層が形成されていた。床面からは柱穴様の小ピットや地床炉等は検出されなかった。

本竪穴出土遺物の総数は1,658点であった。そのうち、土器が1,399点、石器28点、フレーク129点、陶磁器については覆土からのみ66点出土した。貝や魚骨をはじめとする動物遺体については、第1貝層及び覆土から出土(第5章第2節参照)している。図示した床面出土の土器は少ないが、図222-19が当該土器であり、坏とはいえ8c前後の年代を示すものと考えられる。

SH-53 M47・48, N47・48Gridに跨がって検出された。竪穴は、4.9m×4.8m程の大ききで隅丸方形(図3)プランを呈する。確認面からの深さは、最深部で50cmを測る。竪穴西側周辺及び東隅と東壁が攪乱により失われている。更に、セクション等も攪乱の影響で取得できない部分も多かった。したがって、遺構検出図は省略した。

カマドは1m×1m、煙道は60cm×50cm程の範囲であった。床面北側には21個の礫(8cm×4cm前後)によって構成されている集石1ヶ所が確認された。覆土上部北側から南側にかけて貝層が検出され、近世遺物が出土した。

本竪穴の出土遺物総数は、1,585点であり、そのうち1,288点が土器、42点が石器、125点がフレーク、前述したような礫が21点、覆土出土の陶磁器が66点他であった。カマドや覆土出土の貝・魚骨他の動物遺体については、第5章第2節を参照して頂きたい。また、植物遺体についても、カマドや第1貝層等から、アサ・ヤマゴボウ他の遺体が検出(第5章第3節参照)された。

図228-1~4が本竪穴伴出遺物とみられる。4については倒立状態で出土、カマドの支脚として使用されたようである。

SH-54 M52・53, N52・53, O52・53の6Gridに跨がって検出(図229)された。竪穴西側周辺は、SH-58に、東壁ほぼ全面はSH-34により切られている。床面下より、UP-76・77・81~87, GP-618・619・625・627・628を検出。多数の遺構との重複関係を示す竪穴である。

竪穴の大きさは、概ね7.4m×6m程とみられる大型で歪な隅丸方形プランを呈する。確認面から床面まで、最も深い部分は41cm程を測る。カマドは、40cm×40cm、煙道は煙穴側が失われているので明確ではないが、1m×70cm前後とみられる。床面の小ピットは18個検出されたが、

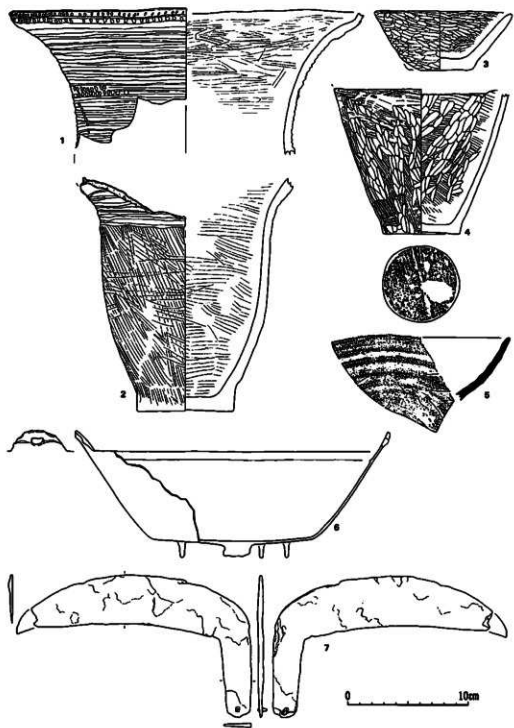


図228 大川遺跡SH-53庫園及び覆土出土の土器と鉄製品





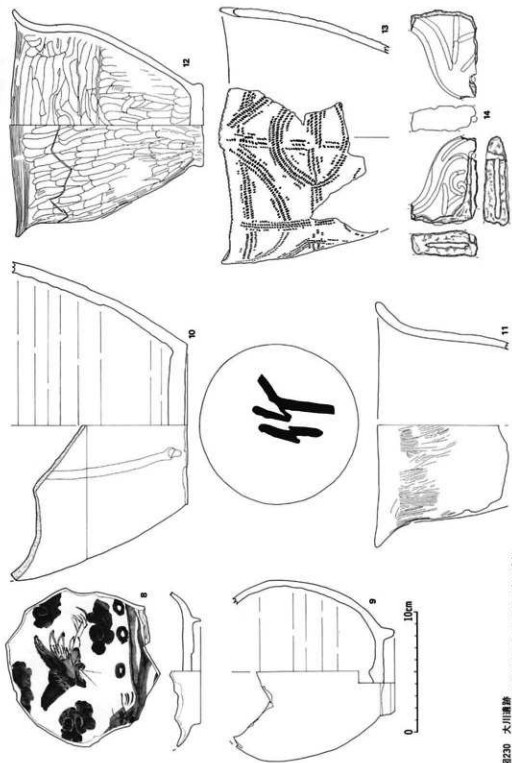
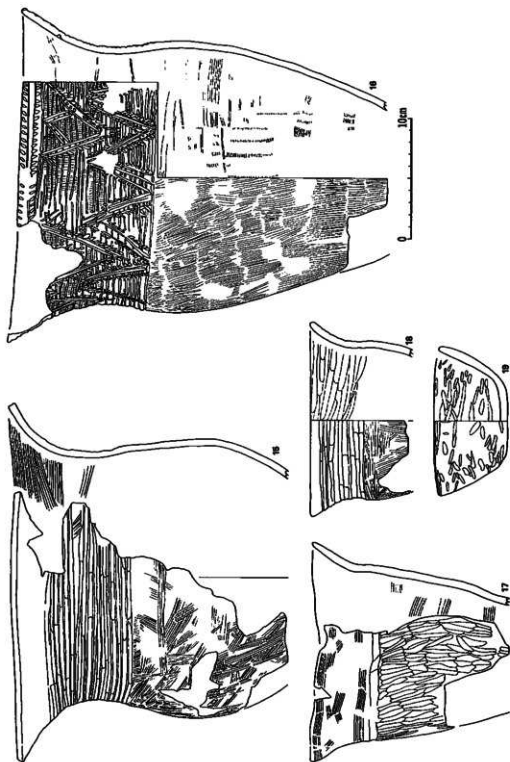


図230 大川遺跡・54床瀬及び厩土出土の各種遺物



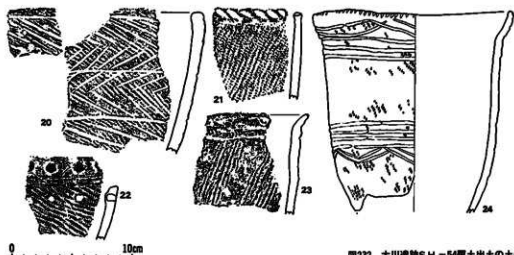


図232 大川遺跡SH-54層出土の土器

表38 大川遺跡SH-53(1~10・25~27)・SH-54(11~24・28~31)出土遺物一覧

図番号	種別	分類	層位	遺物番号	各部の大きさ (mm) と重さ (g)	備考
F0228-1	土器	Ⅸa 2	床面	8	口径 295mm	キザミ、横走沈線、連続刺突、高刷毛目
F0228-2	土器	Ⅸa 2	床面	1	底径 80mm	横走沈線、縦走沈線、高刷毛目
F0228-3	土器	Ⅸb 2	床面	7	口径 115mm、高さ 50mm	底部欠損、表面ヘラミガキ
F0228-4	土器	Ⅸa 2	カマド	48	底径 65mm	高刷毛目、底面縦線、支脚として利用
F0228-5	須恵器	Ⅷb	覆土	—	—	—
F0228-6	鉄鍋	Ⅷb	覆土	—	高さ 105mm	片耳鉄鍋、丸型湯口
F0228-7	鏡	Ⅷe	覆土	—	(118)mm×195mm×5mm	刃先欠損、有孔
F0230-8	陶磁器	Ⅱb	覆土	—	高台径 87mm	磁器中風、雲結文、染付、梅花、肥前、19c 前平
F0230-9	陶磁器	Ⅱd	覆土	—	高台径 68mm	陶器總利、東北清瀬、19c
F0230-10	陶磁器	Ⅱe	覆土	—	底径 134mm	曹、底面温香、異色、黒線、淡し景北、東北清瀬、19c
F0230-11	土器	Ⅸa	床面	58	—	土師器、口縁部刷毛目、胴部・表面ヘラミガキ
F0230-12	土器	Ⅸa 1	床面	67	底径 69mm、高さ 161mm	表面ヘラミガキ、副縁状沈線
F0230-13	土器	Ⅸe 4	床面他	4・4他	—	4突起、キザミ、帯状縄文
F0230-14	土製品	Ⅸa 3	床面	60	—	表面沈線、帯状、有孔、孔部部分で折損、肩部
F0231-15	土器	Ⅸe 2	床面他	19他	—	横走凹輪文、ヨコナゲ、表面刷毛目
F0231-16	土器	Ⅸa 3	床面他	59	口径 278mm	キザミ、横走沈線、縦走沈線、刺突、高刷毛目、裏ヘラミガキ
F0231-17	土器	Ⅸa	覆土	—	—	ヨコナゲ、胴部ヘラミガキ
F0231-18	土器	Ⅸa 2	覆土	—	口径 160mm	横走凹輪文、胴部刷毛目、裏ヘラミガキ
F0231-19	土器	Ⅸb 2	覆土	—	口径 123mm、高さ 61mm	表面ヘラミガキ
F0232-20	土器	Ve	覆土	—	—	横走沈線、矢羽横状沈線、R L斜行縄文
F0232-21	土器	Va 3	覆土	—	—	キザミ、L R斜行縄文
F0232-22	土器	Vc 1	覆土	—	—	平縁、インサイド突瘤文、R L斜行縄文
F0232-23	土器	Ve 4	覆土	—	—	キザミ、貼付、帯状縄文
F0232-24	土器	Vd 4	覆土	—	口径 166mm	キザミ、横走沈線、副縁状沈線、R L斜行縄文
F0233-25	石	I b 1	覆土	—	24mm×14mm×3mm、0.9g	黒曜石
F0233-26	石	I b 1	覆土	—	(31)mm×11mm×2mm、(0.8)g	黒曜石、先端部若干欠損
F0233-27	石	I b 4	第1貝層	—	33mm×11mm×2mm、0.9g	磁石、表面1次刷面残存
F0233-28	U	F I b 3	覆土	—	39mm×18mm×5mm、3.8g	黒曜石、球形器人、角部の自然面残存
F0233-29	削器	Ⅱc 2	覆土	—	65mm×33mm×11mm、30.8g	黒曜石、球形器、角部の自然面3方に大きく残存
F0233-30	播磨	Ⅱa	覆土	—	31mm×25mm×6mm、4.8g	硬質頁岩、バルブ残存
F0233-31	播磨	Ⅱa	覆土	—	34mm×43mm×15mm、13.6g	硬質頁岩、自然面大きく残存

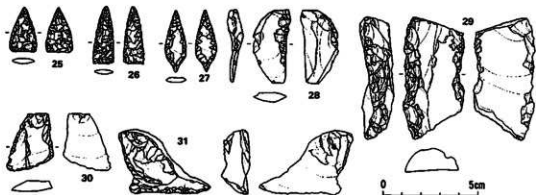


図233 大川遺跡SH-53・54第1貝層及び覆土出土の石器

主柱穴や地床炉とみられる焼土等は検出されなかった。

本竪穴出土遺物の総数は2,306点と非常に多い。内訳は、土器2,123点、石器24点、フレーク142点他である。本竪穴床面出土の土器は、図230-11・12・15・16等である。したがって、最も後出のものともみられる16の土器の時期の竪穴であると考えられる。

SH-55 P54・55、Q54・55の4 Grid跨がって検出(図3)された。竪穴の大きさは、5.3m×4.8m 前後の隅丸方形プランを呈するものとみられる。竪穴東壁から南東隅そして南壁のほとんどが矢板によって、さらに西壁のほとんどが後世の攪乱によって検出できなかった。

したがって遺構検出図も省略した。カマドは焼土範囲等から南カマドとみられる。床面から小ビット6個が検出されたが、主柱穴とみられるビットや地床炉等は確認できなかった。

本竪穴出土遺物の総数は609点。内訳は土器556点、石器4点、フレーク34点他である。床面出土の土器は1～6である。したがって、竪穴の時期は、1の土器、すなわちⅨ群a3類期ということになる。

SH-56 P57・Q57両Gridに跨がって検出された。竪穴の大きさは、3.7m×3.6m 前後とみられ、若干小型の隅丸方形プランを呈すると類堆される。竪穴は床面近くでの検出であることや、東側に矢板があり、その周辺が攪乱していること、更に、竪穴中央に水道管が入っていること等により、壁が確認できた部分は全体の30%程度にとどまる。

したがって、本竪穴の遺構配置図も省略(図3)せざるをえなかった。床面からは、わずかに小ビット2個が検出されたのみであり、主柱穴とみられるビットや地床炉等は確認されなかった。

本竪穴出土遺物の総数は459点であった。内訳は、土器が415点、石器が9点、フレークが19点、覆土出土の金属製品5点他であった。カマドや貝層等から魚骨や貝他の動物遺体が出土(第5章第2節参照)している。また、若干ではあるが、カマドや貝層から植物遺体も検出(第5章第3節参照)されている。

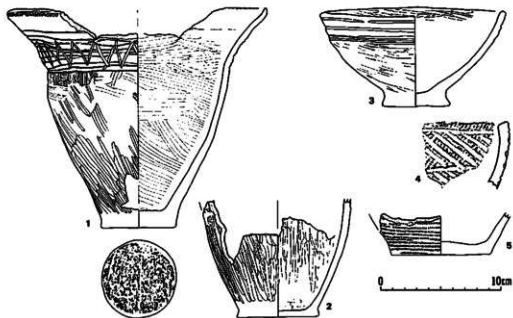
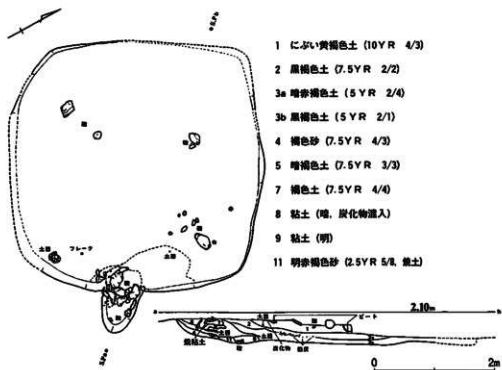


図235 大川遺跡SH-56床面出土の土器

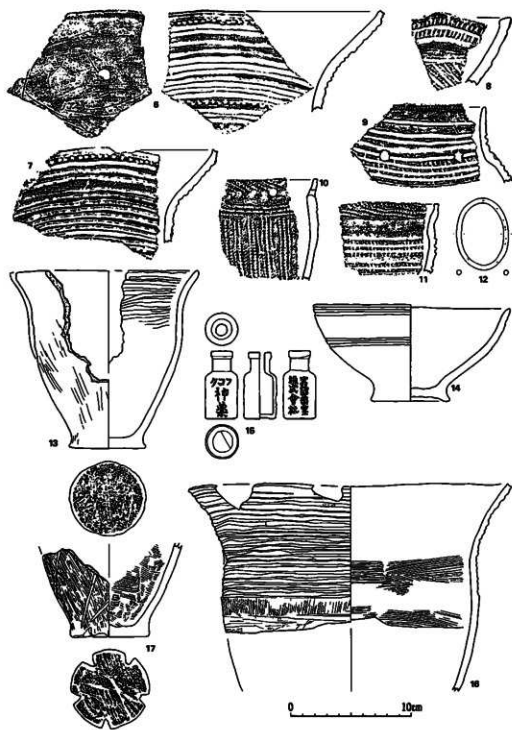


図236 大川遺跡SH-55-58断面及び層土出土の各種遺物

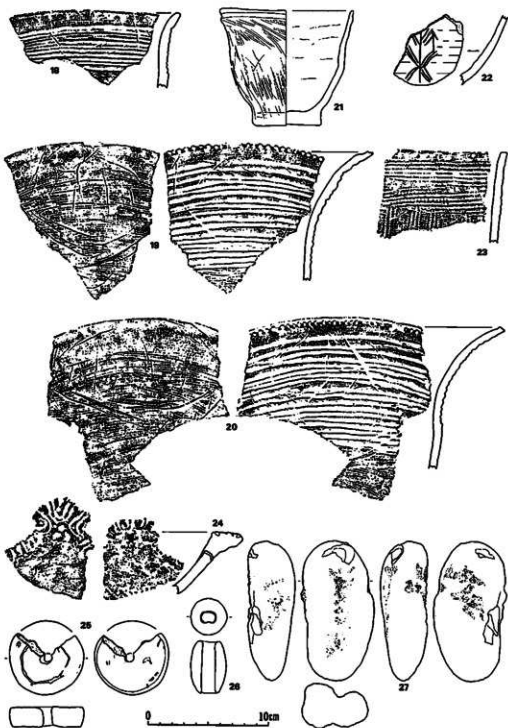


図237 大川遺跡S.H. 58床面及び覆土出土の各種遺物

図236-10-12は、いずれも覆土遺物である。床面出土の土器は小破片の為図示していないが、  
Ⅹ群 a 2 類の土器が数点出土しており、当該期の竪穴と考えられる。

- |                       |                            |                        |                              |
|-----------------------|----------------------------|------------------------|------------------------------|
| 1 黒褐色土<br>(7.5YR 3/2) | 2a 黒色土<br>(7.5YR 2/1, 黒ボク) | 2b 黒褐色土<br>(7.5YR 2/2) | 3 褐色砂<br>(7.5YR 4/3)         |
| 4 暗褐色砂<br>(7.5YR 3/3) | 5 暗赤褐色砂<br>(5 YR 3/3)      | 6 黒褐色砂<br>(7.5YR 2/2)  | 8 暗褐色砂<br>(7.5YR 3/4, 炭化物混入) |

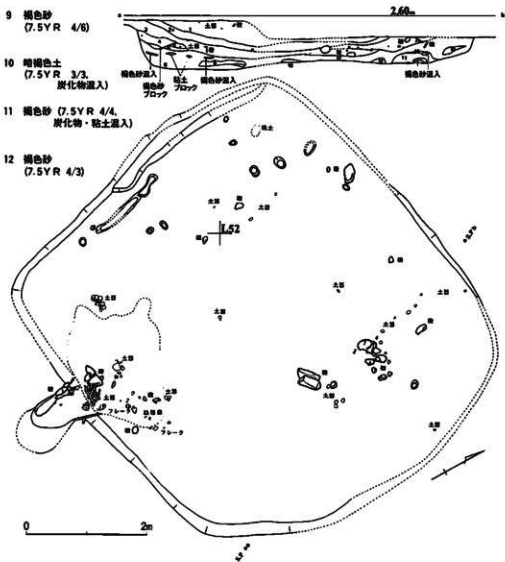


図236 大川遺跡SH-58出土状況



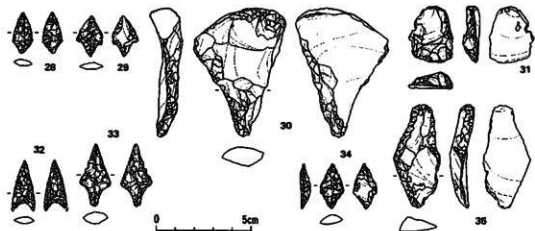


図239 大川遺跡SH-55・56層出土の石器

**SH-57** M55・N55の両Gridに跨って検出された。竪穴の大きさは、4.2m×4.1m前後とみられる隅丸方形プラン(図234)を呈する。確認面からの深さは、最深部で45cmを測る。北隅と南隅は確認面が浅く、不明瞭(図234)であった。

カマドは南東カマドで、60cm×50cm。煙道は70cm×60cm程の大きさであった。覆土上部には近世と考えられる貝層も確認された。床面から小ピット5個が検出されたが、支柱穴とみられるピットや地床が等は検出されなかった。

本竪穴出土遺物の総数は416点で、内訳は土器374点、石器11点、フレイク24点他であった。カマドや覆土の貝層からは各種の魚骨や貝が出土(第5章第2節)している。

本竪穴床面出土の遺物は図234のように少ない。図示した遺物は3点にすぎないが、そのうち、床面出土の土器は13と14である。伴出の小破片もⅠ群a 2類土器であり、当該期の竪穴とみられる。

**SH-58** L52・53、M52・53Gridに跨って検出された。1993年度と1994年度の両年度に亘っての検出である。竪穴南東部はSH-54、南壁西隅はGP-670・716を切っている。竪穴中央部床下よりGP-736・850・851を検出。

竪穴の大きさは、概ね7m×6m程の東西がやや長い隅丸方形を呈する竪穴である。壁高は、10cm～60cmで最深部は確認面から71cmを測る。カマドは南カマドで、火床範囲1.4m×90cm、煙道は先端部が攪乱しているが、現状で1.3m×60cm程である。西壁の床面に1.35m×15cm程の溝を検出(図238)した。その溝の北側部分は2m×32cm程のベンチ状の張り出しが認められた。

更に床面西側部分から11個、東側部分から1個の小ピットが検出された。いずれも径10cm～15cm、深さ4cm～37cm程の小ピットである。

本竪穴出土遺物の総数は2,172点と非常に多い。内訳は土器1,964点、石器48点、フレイク12

表39 大川遺跡SH-55 (1~9・28~31)・SH-56 (10~12)・SH-57 (13~15)・SH-58 (16~27・32~35) 出土遺物一覧

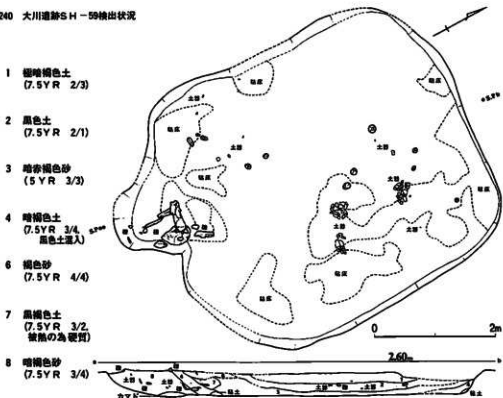
図番号	種別	分類	部位	遺物番号	各部の大きさ (mm) と重さ (g)	備考
図225-1	土器	Ⅹa 3	床面地	11他	底径 62 mm, 高さ 182 mm	キズミ、横走沈線、縦線沈線、表裏ヘラミガキ、底面凹線
図225-2	土器	Ⅹa	床面	32	底径 68 mm	横走沈線?、表裏ヘラミガキ面滑
図225-3	土器	Ⅹb	床面	17	口径 155 mm, 底径 57 mm, 高さ 83 mm	横走凹線文
図225-4	土器	Ⅴe	床面	7		横走・斜線の沈線、R.L.斜行縄文、表ミガキ面滑
図225-5	土器	Ⅴd	床面	14	底径 83 mm	横走縄文、底部破片
図226-6	土器	Ⅹa 2	床面	18		平縁、連続刺突、横走凹線文、裏面毛目、7と同一個体
図226-7	土器	Ⅹa 2	甕土	—		平縁、連続刺突、横走凹線文、6と同一個体
図226-8	土器	Ⅴd 2	甕土	—		短刺、肩滑、沈線、R.L.斜行縄文
図226-9	土器	Ⅴa 4	甕土	—		キズミ、横走沈線、インサイド突線文、R.L.斜行縄文
図226-10	土器	Ⅴc 7	甕土	—		補修孔、R.L.帯状縄文
図226-11	土器	Ⅴc 3	甕土	—		横走沈線、R.L.帯状縄文
図226-12	金属製品	X110	甕土	—	60 mm×43 mm×4 mm, 16.0g	片割製
図226-13	土器	Ⅹa 1	床面	16	底径 64 mm, 高さ 146 mm	表裏ヘラミガキ面滑
図226-14	土器	Ⅹb	床面	13	口径 164 mm, 底径 67 mm, 高さ 81 mm	内黒土師器環、横走沈線
図226-15	ガラス瓶	Ⅳb	甕土	—	口径 18 mm, 底径 27 mm, 高さ 56 mm	コバルト色の瓶、「フコ」標記、「高岡製瓶株式会社」
図226-16	土器	Ⅹa 2	床面	54		横走凹線文、裏面表裏毛目、11縁部表裏ヨコナデ
図226-17	土器	Ⅹa 1	床面	16	底径 66 mm	沈線、表裏毛目、底部切込5ヶ所、底面凹線
図227-18	土器	Ⅹa 2	床面	50		横走凹線文、表裏ヘラミガキ
図227-19	土器	Ⅹa 2	甕土	—		キズミ、横走凹線文、表裏毛目、20と同一個体
図227-20	土器	Ⅹa 2	甕土	—		キズミ、横走凹線文、表裏毛目、19と同一個体
図227-21	土器	Ⅹa	甕土	—	口径 112mm, 底径 57mm, 高さ 97mm	
図227-22	土器	Ⅹb 3	甕土	—		土師器環割部～底部破片、矢羽根状縁割
図227-23	土器	Ⅴc 7	甕土	—		平縁、帯状縄文
図227-24	土器	Ⅴc 1	甕土	—		突起、縄線文、浅鉢
図227-25	漆桶	Ⅳa 2	甕土	—	径 62mm, 厚さ 16mm	沈線、1/4欠失
図227-26	陶鐘	Ⅳm	甕土	—	径 30mm, 高さ 43mm, 28.8g	再被熱?
図227-27	凹石	Ⅳb 4	甕土	—	116 mm×62 mm×37 mm, 220g	安山岩
図228-28	石鏡	Ⅰb 4	甕土	—	21 mm×11 mm×3 mm, 0.5g	黒曜石
図228-29	石鏡	Ⅰb 3	甕土	—	22 mm×14 mm×3 mm, 0.8g	黒曜石、表裏に1次割離面残存
図228-30	石鏡	Ⅳa 3	甕土	—	68 mm×51 mm×11 mm, 30.8g	黒曜石、球顆形、円周の自然面大きく残存
図228-31	漆器	Ⅳa	甕土	—	30 mm×23 mm×9 mm, 5.0g	黒曜石、球顆型人、パキア残存、円周の自然面割離面残存
図228-32	石鏡	Ⅰb 2	甕土	—	28 mm×12 mm×4 mm, 0.7g	黒曜石、基部片方若干欠損
図228-33	石鏡	Ⅰb 3	甕土	—	33 mm×16 mm×6 mm, 1.7g	黒曜石、球顆多
図228-34	石鏡	Ⅰb 4	甕土	—	34 mm×12 mm×5 mm, 1.0g	黒曜石、裏面に1次割離面残存
図228-35	削	Ⅲc 2	甕土	—	54 mm×25 mm×7 mm, 10.4g	硬質頁岩

9点他である。床面出土の土器は、図236-16~18である。したがって、Ⅹ群 a 2 類土器が本竪穴の概当時期の伴出土器とみられる。

SH-59 P53・54, Q53・54の4Gridに跨がって検出された。竪穴の大きさは5.6m×4.9m程の隅丸方形プランを呈し、確認面から床面までは最深部(図240)で50cmを測る。西壁中央部・北西隅・南壁が攪乱により壊されている。東壁は、GP-620を切っている。南西隅及び東側約半分に貼床を確認(厚さ3cm~9cm)した。

カマドは、南カマドで概ね80cm~50cm、煙道は概ね1m×38cmで、袖石が認められた。床面に

図240 大川遺跡SH-59検出状況



は11個の小ピットが確認されたが、主柱穴様のピットや地床炉等は検出されなかった。

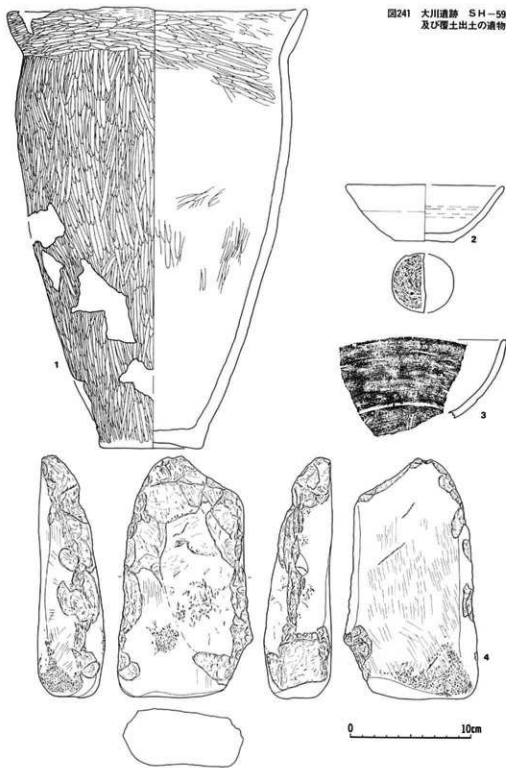
本竪穴出土遺物の総数は1,050点、内訳は土器980点、石器16点、フレーク48点等である。カマド及び床面からニシン・ウグイ・サケ他、若干の魚骨が出土（第5章第2節参照）した。また、貼床・カマド・煙道から各種の植物遺体も検出（第5章第3節参照）されている。

図241-1は、本竪穴床面出土の土師器の甕である。当該土器が本竪穴伴出の土器であると考えられる。図241-4は、剥片石器あるいは石斧の素材となった原石とみられる。周縁部に刺離が認められる。

SH-60 L49・50, M49・50の4Gridに跨って検出（図3）された。矢板によって分断されており、南側は後世の攪乱、東隅はGP-694を切って構築されている。また、東隅からはGP-615、南東壁東寄り床面からGP-757、カマド南東側からUP-74・79、カマド北西側からUP-103をそれぞれ検出した。前述したように攪乱部分が多いため遺構検出図については省略した。

竪穴の大きさは推定で5.1m前後で隅丸方形プランを呈するとみられる。壁高は20cm～40cmで最深部は確認面から65cmを測る。南壁から1.6m×1.35m程のカマドを検出、煙道は推定で1.09m

図241 大川遺跡 SH-59床面  
及び覆土出土の遺物



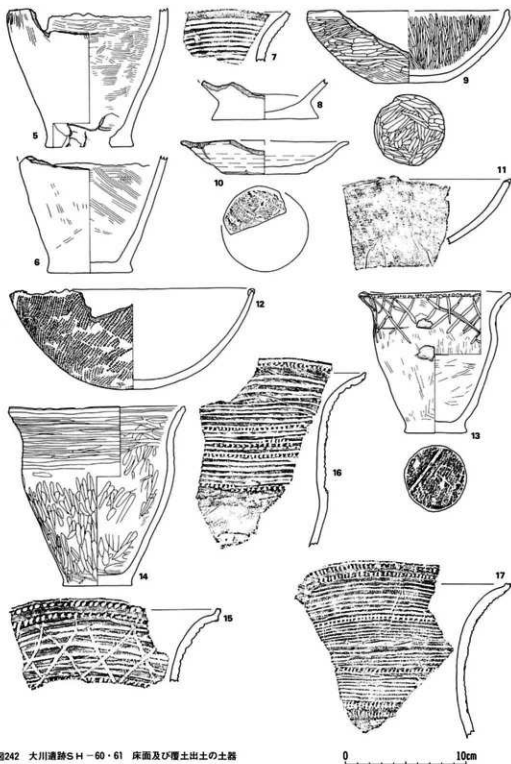
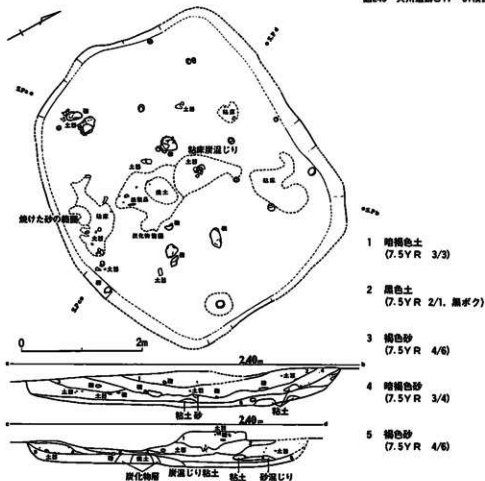


図242 大川遺跡SH-60・61 床面及び層土出土の土器

図243 大川遺跡SH-61検出状況



×50cm程と考えられる。北側隅の床面から径10cm～15cm程の小ピット7個が検出されたが、支柱穴とみられるピットは検出されなかった。竪穴中央部の若干東側の位置に径45cm程の粘土範囲(貼床)が確認された。

竪穴北側部分に長軸1mを超える柱状の大型礫が出土した。おそらく、縄文後期あるいは晩期に当遺跡で使用されていたものであろうと類推される。

本竪穴出土遺物の総数は1,272点、そのうち土器が1,120点、石器が23点、フレイクが122点他である。図242-5～9・11が床面出土の土器である。このうち、5～10が弥文期のものであり、5～7・9が伴出遺物とみられる。

したがって、当該期の竪穴と考えられる。図242-5・6は、カマドから倒立状態で出土した。支脚として使用されていた。図242-10は、いわゆる赤焼土器の皿である。北海道内での類例はきわめて少ない資料である。

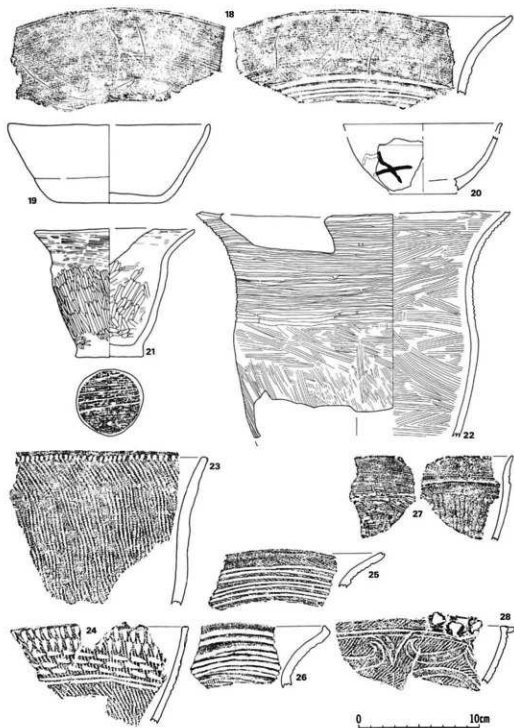


図244 大川遺跡SH-61・62床面及び覆土出土の土器

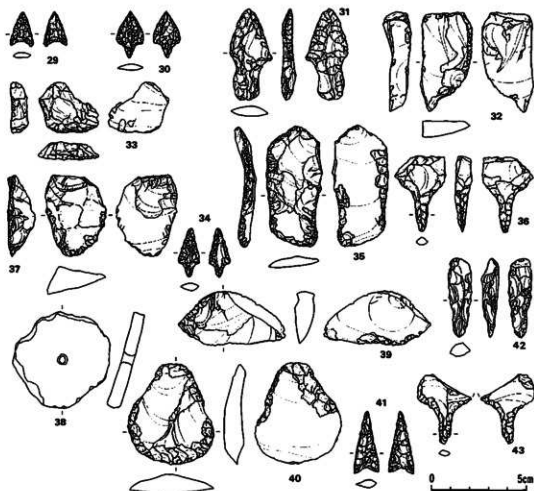


図245 大川遺跡SH-59-62床面及び覆土出土の各種遺物

SH-61 M53・54, N53・54の4 Gridに跨って検出された。竪穴は5.2m×4.42m程の大きさの隅丸方形プランを呈する。確認面から床面までの深さは、最深部で56cmを測る。北西隅及び北壁、北東隅及び西壁、そして南壁及び中央部も攪乱を受けている。

カマドは検出されなかったが、地床炉と考えられる炭化物混じりの焼土が56cm×37cm程の範囲で床面中央部より検出された。床面南側・中央部及び北側に貼床とみられる粘土範網(図243)が確認された。床面から確認された小ピットは13個あり、支柱穴かとみられるピットも南東側に1個検出された。

本竪穴出土遺物の総数は698点、そのうち土器が632点、石器が16点、フレークが36点、覆土からのみ出土した陶磁器7点他である。本竪穴床面出土の土器は、図242-13-15・17、図244-18である。このうち検出の土器とみられるのが15であり、当該期の竪穴ということになろう。



表40 大川遺跡SH-59(1~4・29~33)・SH-60(5~12・34~37)・SH-61(13~20・38~40)・

SH-62(21~28・41~43)出土遺物一覧

図番号	種別	分類	層位	遺物番号	各部の大きさ(mm)と重さ(g)	備考
FIG1-1	土器	IX a	床面	4・6他	L径250mm, 底径86mm, 高さ365mm	土師器, 表裏ヘラミガキ
FIG1-2	土器	IX b 3	覆土	—	底径49mm, 高さ47mm	土師器, 赤焼土器, 赤切底
FIG1-3	土器	IX b 2	覆土	—	—	土師器, 横走凹輪文
FIG1-4	原石	I a 4	覆土	—	200mm×112mm×47mm, 2020g	硬質砂岩, 石室あかい石等石, 全表面, 第3第10層参照
FIG2-5	土器	IX a 2	カマド	33	底径73mm	表裏刷毛目
FIG2-6	土器	IX a 2	カマド	47	底径71mm	裏刷毛目
FIG2-7	土器	IX a	カマド	34	—	横走凹輪文
FIG2-8	土器	IX b	床面	32	底径89mm	内面黒色地埋
FIG2-9	土器	IX b 2	床面他	18他	底径60mm, 高さ62mm	内面土師器, 裏と沈線, 裏・L径・底面ヘラミガキ, 裏面刷毛目
FIG2-10	土器	IX c	覆土	—	高さ29mm	土師器, 赤焼土器, 赤切底
FIG2-11	土器	VI a 2	床面	5	—	朱染土器, 小突起, 細修孔, 無文
FIG2-12	土器	VI a	覆土	—	高さ83mm	小突起, L R斜行縄文, 浅鉢
FIG2-13	土器	IX a	床面	41	底径52mm, 高さ117mm	キザミ, 沈線, 底面凹痕
FIG2-14	土器	IX a 2	床面	7	L径147mm, 底径58mm, 高さ147mm	横走凹輪文, 表ヘラミガキ, 裏刷毛目
FIG2-15	土器	IX a 3	床面	44	—	キザミ, 横走沈線, 連続刺突, 裏ヘラミガキ
FIG2-16	土器	IX a 2	覆土	—	—	キザミ, 横走凹輪文, 連続刺突
FIG2-17	土器	IX a 2	床面	11	—	キザミ, 横走沈線, 連続刺突, 裏ヘラミガキ
FIG4-18	土器	IX a 2	床面	17	—	横走沈線, ヨコナデ, 裏刷毛目
FIG4-19	土器	IX b 2	覆土	—	高さ65mm	内面土師器, 有段
FIG4-20	土器	IX b 3	覆土	—	—	扇背土師器, 「七」?
FIG4-21	土器	IX a 1	床面	9	底径57mm, 高さ106mm	口縁部ヨコナデ, 表裏ヘラミガキ, 底面凹痕
FIG4-22	土器	IX a 2	覆土	—	口径261mm	横走沈線, 表裏刷毛目
FIG4-23	土器	VI e 1	床面	1	—	キザミ, R L斜行・縦行縄文
FIG4-24	土器	VI b 2	床面他	27他	—	小突起, 連続刺突, 横走沈線, R L斜行縄文
FIG4-25	土器	IX a 2	覆土	25	—	L径部沈線, 横走沈線, 刷毛目
FIG4-26	土器	IX a 2	覆土	26	—	横走凹輪文・刷毛刷毛目
FIG4-27	土器	IX a 1	覆土	—	—	有段, 裏刷毛目, 扇背ヘラミガキ
FIG4-28	土器	VI a 2	覆土	—	—	小突起, L径部・L径部L R斜行縄文, 亀裂文, 磨面
FIG5-29	石	II b 2	覆土	—	19 mm×12 mm×2 mm, 0.5 g	黒曜石
FIG5-30	石	II b 3	覆土	—	25 mm×14 mm×3 mm, 0.8 g	黒曜石
FIG5-31	石	I c 3	覆土	—	48 mm×22 mm×5 mm, 5.6 g	黒曜石
FIG5-32	削器	II c 2	覆土	—	53 mm×26 mm×9 mm, 18.8 g	珪岩, パルプ除去, 自然面残存
FIG5-33	掘器	II b	覆土	—	27 mm×32 mm×10 mm, 8.1 g	赤色珪岩
FIG5-34	石	II b 3	床面	87	26 mm×11 mm×4 mm, 0.7 g	黒曜石, 珪岩混入
FIG5-35	削器	II c 2	覆土	—	64 mm×29 mm×5 mm, 12.6 g	黒曜石, 角礫の自然面残存
FIG5-36	石	IV a 3	覆土	—	(40) mm×(27) mm×4 mm, (7.3) g	赤色珪岩, つまみ部欠損
FIG5-37	削器	II c 2	覆土	—	44 mm×32 mm×15 mm, 14.8 g	珪岩, 角礫の自然面大きく残存, 珪岩混入, パルプ除去
FIG5-38	円形土器片	I g 2	覆土	—	51 mm×52 mm×7 mm, 18.6 g	無文, 有孔, 縄文晩期土器製部破片を利用
FIG5-39	R, F	I b 2	覆土	—	57 mm×29 mm×10 mm, 15.6 g	珪岩, 円礫の自然面残存, 第3第10層参照
FIG5-40	掘器	II a	覆土	—	25 mm×46 mm×10 mm, 26.2 g	赤色珪岩
FIG5-41	石	II b 2	覆土	—	34 mm×13 mm×4 mm, 1.1 g	黒曜石
FIG5-42	石	IV a 1	覆土	—	41 mm×13 mm×7 mm, 3.6 g	黒曜石, 珪岩混入, 角礫の自然面残存
FIG5-43	石	IV a 3	覆土	—	(37) mm×(28) mm×3 mm, (3.8) g	つまみ部欠損

図244-20は、「七」?かと考えられる墨書土師器坏破片である。詳細については、拙稿 1996「余市大川遺跡出土古代の文字資料をめぐって」『北奥古代文化』第25号 北奥古代文化研究会刊 をご参照願いたい。

**SH-62** Q52・53の両Gridに跨って検出された。竪穴は矢板で切られ、全体の25%程度の検出にとどまり、矢板の外側は調査区外(図3)である。竪穴の大きさは、推定で1辺5m前後、隅丸方形プランを呈すると推察される。コーナーが確認されたのは北西隅のみであり、遺構検出図については省略した。床面からは、2個の小ピットが検出された他、地床炉とみられる粘土範囲や炭化物の範囲等も確認された。

本竪穴出土遺物の総数は711点、そのうち土器が631点、石器が17点、フレークが58点他であった。本竪穴床面出土の土器は図244-21・23・24等である。そのうち、21が本竪穴の時期を示す土器と考えられる。

**SH-63** M51とN51両Gridに跨って検出された。南壁は擾乱、北・西壁は床近くでの検出の為、プランは不明確であるが4.24m×3.9m前後の隅丸方形プランを呈するとみられる。破綻部分が多い為、遺構検出図は省略(図3)した。

カマドは、南東カマドで1.34m×1.4m程の範囲とみられ、焚口付近に支脚用の倒立土器(写真21-8)が出土した。床面中央部には地床炉とみられる焼土が検出。煙道は84cm×70cm程の大きさであった。床面から柱穴様の小ピット等は検出されなかったが、全面とところどころに貼床が確認された。

本竪穴出土遺物の総数は617点、そのうち土器が566点、石器13点、フレーク37点他であった。図246-1~5と図247-8が床面出土の土器である。そのうち、本竪穴の時期を示すとみられるのは1~5の擦文土器である。

特に4は「夫」の字の寛吉土師器坏で、すでに非常に有名である。この坏の破片の1/3程が本竪穴床面から、2/3程がSH-37の床面から、それぞれ伴出し接合した。SH-37は東隣りの竪穴(図3)であり、本竪穴との関連が注目されるところである。

**SH-64** P51・52、Q52の3Gridに跨って検出された。竪穴の大きさは4.1m×3.9m前後、隅丸方形プランを有する竪穴とみられる。西隅をSH-49に南壁の大部分は擾乱によって失われている。したがって、遺構検出図は省略(図3)した。床面から小ピット9個が検出されたが、支柱穴や地床炉等は確認されていない。

本竪穴出土遺物の総数は620点、そのうち土器が568点、フレークが44点他である。図247-12と13が本竪穴出土遺物である。そのうち12が床面出土のⅩ群b2類土器であり、当該期の竪穴と考えられる。

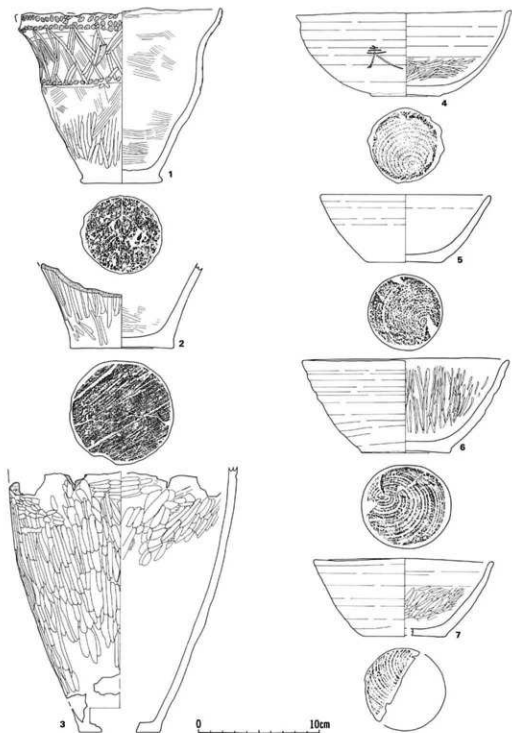


図246 大川遺跡SH-63床面及び覆土出土の土器

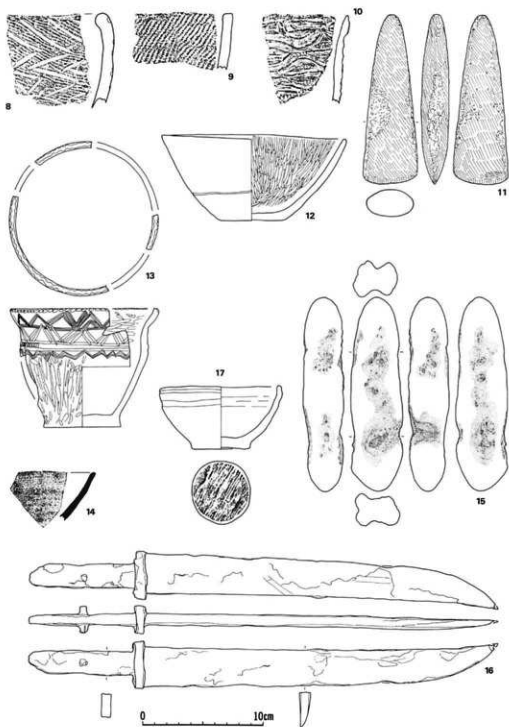


図247 大川遺跡SH-63~66床面及び覆土出土の各種遺物

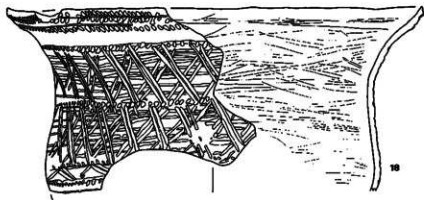


図248 大川遺跡SH-66床面出土の土器

0 10cm

表41 大川遺跡SH-63(1~11-19~23)・SH-64(12-13)・SH-65(14~16-24~27)・SH-66(17-18) SH-68(28-29)出土遺物一覧

図番	種別	分類	層位	遺物番号	各部の大きさ(mm)と重さ(g)	備考
SH63-1	土器	Ⅸa 4	床面他	2他	口径167mm, 底径68mm, 高さ142mm	透眼刺突, 波線, 斜線ヘラミガキ, 裏脚毛目, 底面本遺痕
SH63-2	土器	Ⅸa	床面	18	底径86mm	刷毛目調整痕ヘラミガキ, 底面管痕
SH63-3	土器	Ⅸa 2	床面	17	底径66mm	波線ヘラミガキ, 横走凹線文
SH63-4	土器	Ⅸb 3	床面	16他	口径179mm, 底径56mm, 高さ69mm	内黒土師器, 裏丹土師, SH-67・63出土結合
SH63-5	土器	Ⅸb 3	床面	2・12	口径142mm, 底径61mm, 高さ56mm	土師器, 赤褐色土器, 未切底
SH63-6	土器	Ⅸb 3	覆土	—	口径172mm, 底径73mm, 高さ78mm	内黒土師器, 未切底
SH63-7	土器	Ⅸb 3	覆土	—	口径150mm, 底径69mm, 高さ65mm	土師器, 未切底
SH67-8	土器	Ve	床面	13		鋸歯状沈線, R.L斜行縄文
SH67-9	土器	Vd 2	覆土	—		L.R斜行縄文
SH67-10	土器	Ve 3	覆土	—		微隆起輪, 刺突
SH67-11	石斧	Va 1	覆土	—	141mm×45mm×22mm, 200g	硬質砂岩, 両刃
SH67-12	土器	Ⅸb 2	床面	14	口径154mm, 底径53mm, 高さ71mm	土師器, 横走沈線
SH67-13	土器	Ⅸa 1	覆土	—	口径124mm, 底径64mm, 高さ99mm	キズミ, 鋸歯状沈線, 横走沈線, 波線ヘラミガキ
SH67-14	須恵器	Ⅸb	覆土	—		
SH67-15	凹石	Vb 4	覆土	—	161mm×43mm×27mm, 270g	安山岩
SH67-16	太刀	Ⅲa 2	覆土	—	389mm×40mm×10mm	中刀, 切先部若干欠損
SH67-17	土器	Ⅸb	床面	2	口径101mm, 底径48mm, 高さ52mm	土師器, 横走凹線文, 底面管痕
SH68-18	土器	Ⅸa 3	床面	1		キズミ, 透眼刺突, 横走斜行沈線, 波ヘラミガキ
SH69-19	石	Ⅰb 3	覆土	—	22mm×11mm×4mm, 0.7g	黒曜石, 球顆混入, 歪
SH69-20	石	Ⅰb 3	覆土	—	29mm×15mm×7mm, 2.1g	黒曜石, 角礫の自然面表面残存
SH69-21	石	Ⅰc 3	覆土	—	53mm×25mm×9mm, 9.1g	黒曜石, 球顆多く混入
SH69-22	U, F	Ⅰb 3	覆土	—	72mm×26mm×7mm, 17.6g	黒曜石, パルプ混入, 角礫の自然面大く残存, 裏面凹線
SH69-23	削	Ⅱe 1	覆土	—	197mm×85mm×16mm, 280g	硬質砂岩, 角礫の自然面大く残存
SH69-24	石	Ⅰb 2	覆土	—	38mm×18mm×4mm, 2.2g	黒曜石, 球顆混入
SH69-25	石	Ⅰb 2	床面	4	45mm×19mm×4mm, 2.9g	黒曜石, 球顆混入
SH69-26	R, F	Ⅰb 2	覆土	—	48mm×30mm×7mm, 12.0g	黒曜石, 角礫の自然面大く残存
SH69-27	竹角器	Ⅳa	覆土	5	(143)mm×10mm×8mm	筍
SH69-28	泥メンコ	Ⅳb	覆土	—	径15mm, 厚さ6mm, 1.2g	お堂?
SH69-29	掘	Ⅲa	覆土	—	36mm×21mm×5mm, 4.2g	黒曜石, パルプ残存, 球顆若干混入

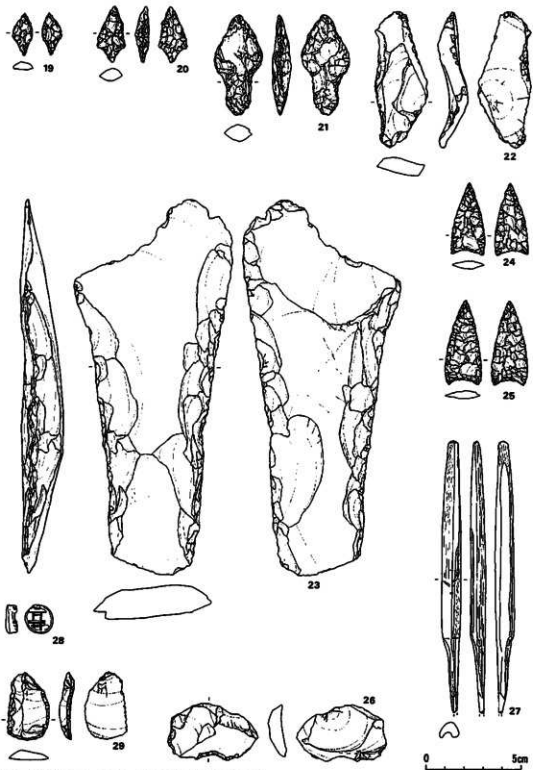


図249 大川遺跡SH-63・65・68床面及び習土出土の各種遺物

SH-65 Q50・51の両Gridに跨がって検出(図3)された。竪穴の一部分の検出の為、全形や規模等不明ではあるが、1辺5m前後の竪穴ではないかと推察される。南東側の30程度は調査区外であり、矢板によって分断されている。また、北側部分も大きく攪乱を受けており、不明な点が多い。

カマドは矢板ギリギリの南側に焼土と袖石の一部が確認された。また、本竪穴はベンチ状構造を有しているが、小ピットや地床炉等は確認されなかった。覆土上部には2枚の貝屑があり、魚骨や貝、イヌ他の動物遺体が出土(第5章第2節参照)している。

本竪穴出土遺物の総数は323点であった。そのうち土器が249点、石器7点、フレーク28点、覆土出土の骨角器1点、陶磁器17点他であった。床面出土の擦文土器は皆無の為、所属時期等は不明であるが覆土からはⅨ群a 2類土器が出土している。図247-16は貝屑出土の中刀(写真21-9)である。送られた可能性がある。

SH-66 K56・57、L56・57の4Gridに跨がって存在したと考えられる。竪穴の東壁の一部分以外は、ほとんどが攪乱によって失われている為、規模・形状等は不明である。したがって遺構検出図は省略(図3)した。床面部分は、おそらく30%程度は残存しているものとみられ、小ピット7個と地床炉とみられる焼土範囲(1.38m×1.14m)が検出された。

前述のような理由から本竪穴出土遺物の総数は11点と非常に少ない。この11点が全て土器である。図247-17及び図248-18が本竪穴床面出土遺物であり、Ⅸ群a 3類土器とみられる。したがって当該期の竪穴と考えられる。

SH-67 L55・56の2Gridに跨がって検出されたが、床面近くでの確認であった。大部分が後世の攪乱により失われていたため、規模・プラン等は不明であるが、1辺が5m前後の隅丸方形を呈する竪穴ではなかったかと推察(図3)するところである。カマドは南カマドであった。南壁の一部と西壁の一部等の検出のみに留まった。したがって、柱穴様の小ピットや地床炉等も確認できなかった。

本竪穴に帰属するとみられる遺物も、カマドから出土したトリ類の焼骨断片1点(第5章第2節参照)を除き皆無であった。したがって、所属時期等も不明とせざるをえない。

SH-68 L56・57、M56・57の4Gridに跨がって検出された。全面が攪乱の影響を受けている。したがって遺構検出図も省略(図3)せざるをえなかった。プランや規模は、床面近くでの検出の為、不明確であるが、概ね4.2m×3.6m程の隅丸方形プランを呈すると推察される。各壁に若干、壁が確認された部分があり、それから壁高が24cm前後と確認できる。

床面中央部から東寄りに20cm×12cm(一部攪乱)程の小さな地床炉とみられる焼土範囲が確認された。他に、径4~16cmの小ピット5個を検出。そのうち、北西隅のP3は、13cm×13cm×16

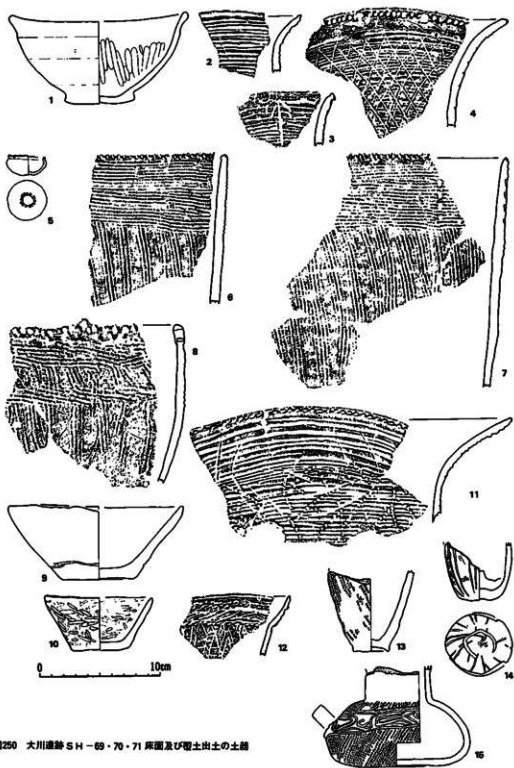


図250 大川遺跡SH-69・70・71 麻面及び型土出土の土器



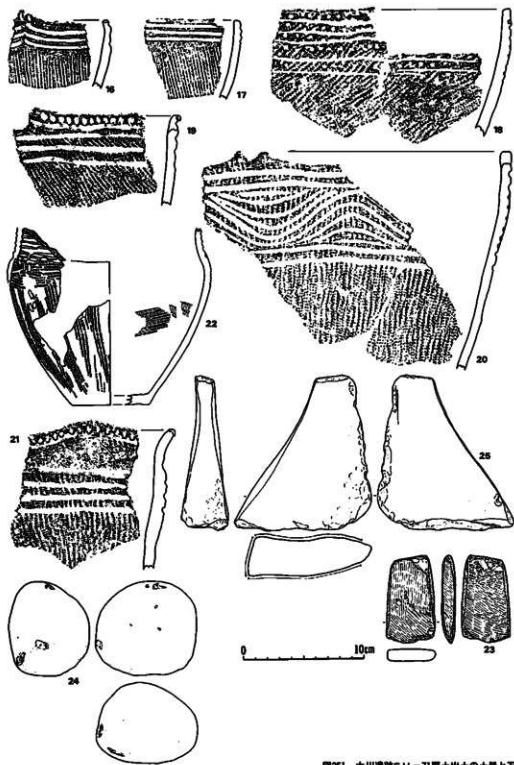


図251 大川遺跡S-H-71番土出土の土器と石器

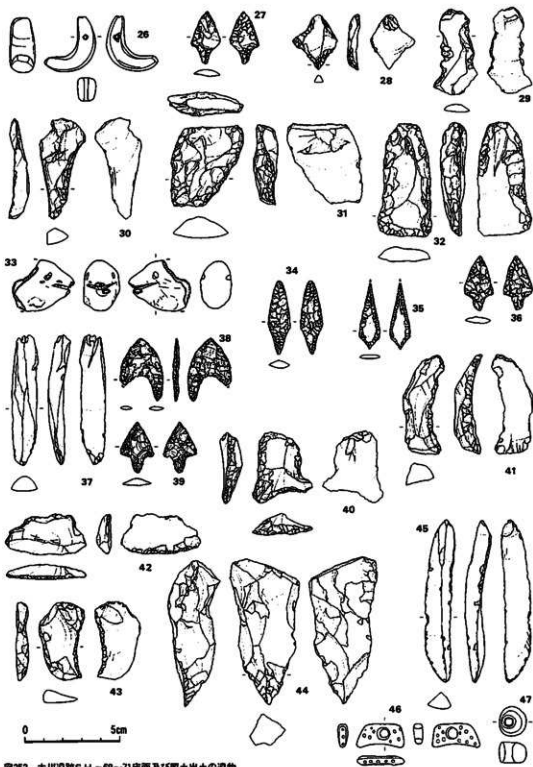


図252 大川遺跡SH-69~71床面及び覆土出土の遺物

表42 大川遺跡SH-69 (1~4・26~32)・SH-70 (5~8・33~37)・SH-71 (9~25・38~47) 出土遺物一覧

図番号	種別	分類	部位	遺物番号	各部の大きさ (mm) と重さ (g)	備考
I4251-1	土器	IX b	床面	113	L径149 mm, 底径 58 mm, 高さ 73 mm	内黒土師器環, 右段, 内面ヘラミガキ
I4251-2	土器	IX a 2	覆土	—	—	横走凹線文, 直刷毛目
I4251-3	土器	IX a 3	覆土	—	—	横走沈線, 縦位・斜位の沈線, 裏ヘラミガキ
I4251-4	土器	IX a 4	覆土	—	—	キザミ, 横走沈線, 縦目状沈線, 裏ヘラミガキ
I4251-5	土器	VI b 2	覆土	—	L径 30 mm, 底径 9 mm, 高さ 16 mm	袖珍土師器鉢, 凹状底部, 底面刺突, 彫文
I4251-6	土器	VI d 6	覆土	—	—	キザミ, 横走縄文, 帯状縄文, 7と同一個体
I4251-7	土器	VI d 6	覆土	—	—	キザミ, 刺突, 横走縄文, 帯状縄文, 6と同一個体
I4251-8	土器	VI c 7	覆土	—	—	突起, キザミ, R L 帯状縄文
I4251-9	土器	IX b 2	床面	1	L径145 mm, 底径 59 mm, 高さ 61 mm	内黒土師器環, 横走沈線, 裏裏ヘラミガキ
I4251-10	土器	IX b 2	床面	40	底径 47 mm, 高さ 46 mm	上師器環, 裏裏ヘラミガキ
I4251-11	土器	IX a 3	覆土	—	—	キザミ, 横走凹線文, 連続刺突, 裏ヘラミガキ
I4251-12	土器	IX a 4	覆土	—	—	キザミ, 横走・斜位の沈線, 裏ヘラミガキ
I4251-13	土器	VI b	床面	39	底径 30 mm	R L 斜行縄文, 上げ底
I4251-14	土器	VI b 3	床面	9	底径 35 mm	縦位沈線, R L 斜行縄文, 底面凹状
I4251-15	土器	VI a 1	覆土	—	胴部径121 mm, 底径 53 mm	注門土器, 三叉文, 弧線文, L R 斜行縄文
I4251-16	土器	VI b 3	覆土	—	—	突起, 横走沈線, 糸痕文, 17と同一個体
I4251-17	土器	VI b 3	覆土	—	—	横走沈線, 糸痕文, 16と同一個体
I4251-18	土器	VI c 4	覆土	—	—	横走沈線, 連続刺突, L R 斜行縄文
I4251-19	土器	VI a 4	覆土	—	—	小突起, キザミ, 横走沈線文, R L 斜行縄文
I4251-20	土器	VI c 2	覆土	—	—	小突起, 横走沈線, 弧線文
I4251-21	土器	VI c 3	覆土	—	—	造状口縁, キザミ, 横走沈線, R L 斜行縄文
I4251-22	土器	VI d 3	覆土	—	—	横走沈線, 断続沈線, 帯状縄文
I4251-23	石器	V a 2	覆土	—	73 mm × 40 mm × 10 mm, (62)g	粘板石, 各部剥落
I4251-24	石器	VI a 2	覆土	—	79 mm × 85 mm × 67 mm, 565 g	石英安山岩
I4251-25	磁石	IX c 2	覆土	—	(154)mm × 115 mm × 33 mm	砂岩
I4252-26	瓦	瓦	覆土	—	29 mm × 26 mm × 13 mm, 6.0 g	ミガキ固着
I4252-27	石器	I b 3	覆土	—	28 mm × 15 mm × 3 mm, 0.9 g	黒曜石, 球磨若干混入
I4252-28	挟人削器	II d 3	覆土	—	29 mm × 24 mm × 4 mm, 2.4 g	黒曜石, 角礫の自然面若干残存
I4252-29	挟人削器	II d 2	覆土	—	46 mm × 24 mm × 4 mm, 4.4 g	黒曜石, 球磨多く混入, 角礫の自然面大きく残存
I4252-30	削器	II c 2	覆土	—	53 mm × 25 mm × 8 mm, 6.0 g	黒曜石
I4252-31	削器	II c 2	覆土	—	43 mm × 40 mm × 11 mm, 19.4 g	黒曜石, バルブ残存, 角礫の自然面残存
I4252-32	掃器	III a	覆土	—	60 mm × 29 mm × 7 mm, 21.8 g	頁岩
I4252-33	衣製品	I b	覆土	—	—	クマ?, 顔部のみの破片
I4252-34	石器	I b 3	覆土	—	38 mm × 12 mm × 4 mm, 1.3 g	黒曜石
I4252-35	石器	I b 4	覆土	—	(34)mm × 11 mm × 2 mm, (0.7)g	硬質頁岩, 先端部若干欠損
I4252-36	石器	I b 3	覆土	—	29 mm × 15 mm × 3 mm, 1.0 g	黒曜石, 球磨多く混入
I4252-37	挿状眉石	I a 2	覆土	—	68 mm × 13 mm × 8 mm, 7.9 g	黒曜石, 角礫
I4252-38	石器	I b 2	床面	41	34 mm × 23 mm × 2 mm, 1.5 g	黒曜石, 非常に珍しい, 本州に類例あり
I4252-39	石器	I b 3	覆土	—	26 mm × 18 mm × 4 mm, 1.0 g	黒曜石
I4252-40	挟人削器	II d 3	覆土	—	37 mm × 32 mm × 10 mm, 8.3 g	黒曜石, バルブ除去, 角礫の自然面大きく残存
I4252-41	削器	II a 2	覆土	—	52 mm × 16 mm × 10 mm, 10.0 g	黒曜石, 角礫の自然面大きく残存
I4252-42	挟人削器	II d 1	覆土	—	43 mm × 22 mm × 8 mm, 6.4 g	黒曜石, 凹面の自然面一部残存
I4252-43	削器	II c 2	覆土	—	41 mm × 26 mm × 7 mm, 6.4 g	黒曜石, 片面被熱?
I4252-44	石器	IV a 2	覆土	—	77 mm × 37 mm × 17 mm, 57.0 g	硬質頁岩
I4252-45	U・F	I b 3	覆土	—	85 mm × 14 mm × 8 mm, 12.6 g	黒曜石, 角礫の自然面2面に大きく残存, 球磨混入
I4252-46	有孔石製品	I a 10	覆土	—	25 mm × 12 mm × 5 mm, 4.9 g	凹面に蓋状穴あり
I4252-47	瓦	瓦	覆土	—	径 15 mm, 高さ 11 mm, 6.4 g	粘岩, 歪

cm程のビットであり、支柱穴であった可能性がある。

本竪穴出土遺物の総数は111点であり、そのうち土器が91点、石器2点、フレーク11点他である。床面出土の土器は、いずれも小破片の為、図示していないが、Ⅸ群a2類土器が出土しており、当該期の竪穴とみられる。

SH-69 K46・47, L46・47の4 Gridに跨って検出された。JH-17の北側部分とGP-912・916の西側部分を切っている。全体に削平を受けていることもあり、遺構検出図は省略(図3)した。床近くでの検出ということで、規模やプラン等については、壁が残存している3ヶ所程の部分からの類推であるが4.8m×3.6m前後かと考えられる。残存部分での壁高は、15cm～35cm程で最深部は確認面から42cmを測る。

小ビットは北側隅にまとまって計12個検出。ほぼ中央部には、地床伊とみられる焼土範囲を確認した。床面北側隅には礫70個が一括出土した集石が認められた。その集石の下にも36cm×22cm程の地床伊とみられる焼土が検出された。

本竪穴出土遺物の総数は2,468点であるが、前述したように石錘とみられる礫が70点(写真21-10)を占める。他の多くが土器(2,108点)と石器(91点)及びフレーク(197点)である。そのうち、図250-1が床面出土の土器である。他に図示していないが、床面からはⅨ群a1類ないしⅨ群a2類の土器が出土している。いずれにしても、この頃の竪穴とみられる。

SH-70 L47・48, M47・48の4 Gridに跨って構築したものとされる。SH-71・MO-10に切られ、SH-40を切っている。更にGP-861・944・945の上面を削平して構築している。

壁は全く確認されていないため、遺構検出図については省略(図3)した。推定で3.2m×2.9m前後の隅丸方形プランを呈するものと思われる。セクションから判断すれば、確認面から床面までの最深部は48cmを測る。カマドの一部である可能性のある粘土をGP-861上に確認した。

本竪穴出土遺物の総数は944点、そのうち土器が851点、石器7点、フレーク85点他である。図示した遺物は、いずれも縄文期のものではない。床面出土の当該期の小破片は、胴部破片のみであり、したがって所属時期等は不明であるといわざるをえない。

SH-71 L46・47, M46・47の4 Gridに跨って検出された。西側隅～東壁にかけてMO-10に切られている。北西側がJH-17を、北東壁がGP-915・916・922・933等の縄文晩期・続縄文期の墓塚を切っている。攪乱部分が多く遺構検出図については省略(図3)している。

竪穴の大きさは概ね6.66m×6.5m程の比較的大型の竪穴で、隅丸方形プランを呈するものと

みられる。壁高は10cm～50cmで、確認面から最深部までは65cmを測る。

小ピットは西壁際に3個、南側隅近くに4個、計7個検出された。南側隅は、2m×25cm、高さ16cm程のベンチ状構造を呈している。さらに、この近くには1.7m×60cm程の粘土範囲も確認された。カマドの残存状態は良くないが、凝灰岩製のへっついが出土している他、袖石も確認された。

本竪穴出土遺物の総数は6,568点と非常に多い。このうち土器が5,944点、土製品9点、石器298点、フレーク223点他である。カマド及び覆土からは、クマ・ネコ・ネズミ及び魚骨や貝等の動物遺体が出土（第5章第2節参照）している。また、カマド及び貼床からも各種の植物遺体が出土（第5章第3節参照）されている。

SH-71床面出土の土器は、図250-9及び10である。したがって、Ⅸ群b2類の坏が使用されていた時期に帰属する竪穴と考えられる。

（熊崎・小川・宮）

### 第3節 後出の竪穴状建物跡

HP-1 G46・47, H46・47の4 Gridに跨がって検出された。竪穴の大きさは8.3m×5m程の大型の隅丸長方形プラン（写真21-iii）を呈する。後出の竪穴の為、遺構検出図については省略（図3）した。

北西側は削平されてはいるものの、壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁際の周囲に幅80cm～1m、深さ70cm前後の周溝が巡っている。合計6個の柱穴が、この溝の中央から確認された。南側の床面中央部には地床炉とみられる焼土範囲（35cm×20cm）も確認された。

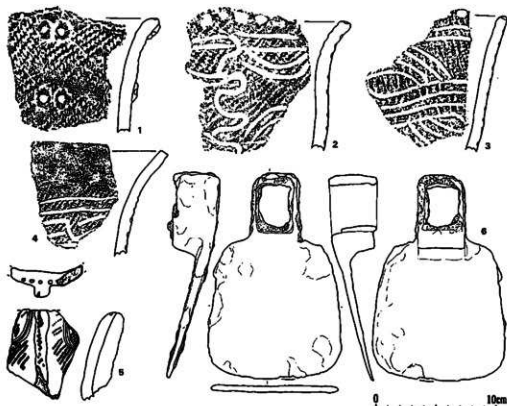


図253 大川遺跡HP-1 掘土土の遺物

表43 大川遺跡HP-1 出土遺物一覧

図番号	種別	分類	層位	遺物番号	各部の大きさ (mm) と重さ (g)	備考
PA25-1	土器	Vb6.7	覆土	—		
PA25-2	土器	Vb9	覆土	—		
PA25-3	土器	Vb9	覆土	—		
PA25-4	土器	Vc1	覆土	—		
PA25-5	土器	Vb4	覆土	—		
PA25-6	鍛	Ⅲ1	覆土	—	170 mm× 110 mm× 5 mm	

覆土からは、縄文時代～19世紀に至るさまざまな遺物が出土した。合計460点の遺物のうち、土器が422点、石器7点、骨角器2点、金属製品1点、陶磁器1点、フレーク26点、動物遺体1点であった。

図示した墩(図253-6)や陶磁器の年代等から19世紀に構築された竪穴と判断できる。やはり、漁業関連の竪穴状建物跡と考えられる。(宮)

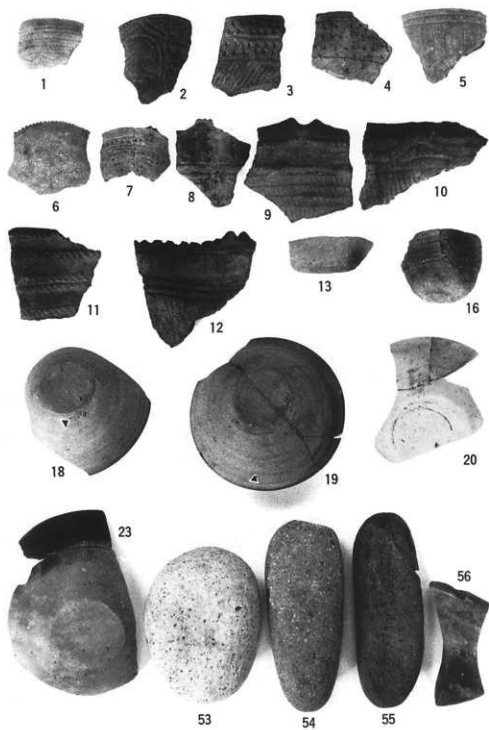
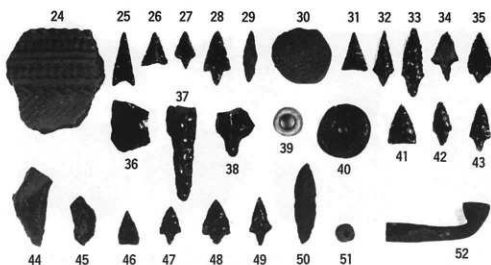
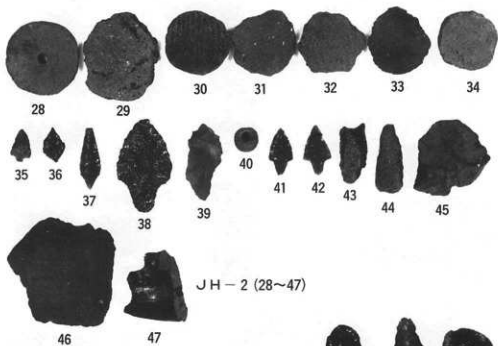


写真22 大川遺跡JH-1出土の土器と石器





JH-1 (24~52)



JH-2 (28~47)

JH-3 (8~10)



写真23 大川遺跡JH-1~3出土の遺物

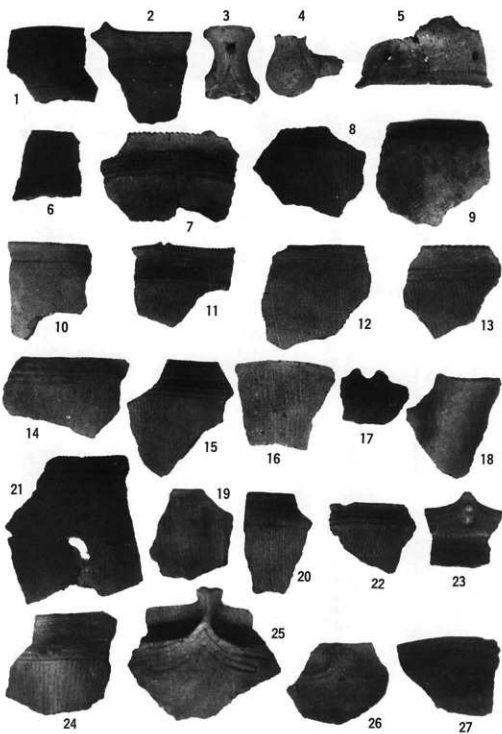


写真24 大川遺跡JH-2出土の土器



JH-2 (48~53)

JH-4 (62~64)



写真25 大川遺跡JH-2・4出土の礫石器

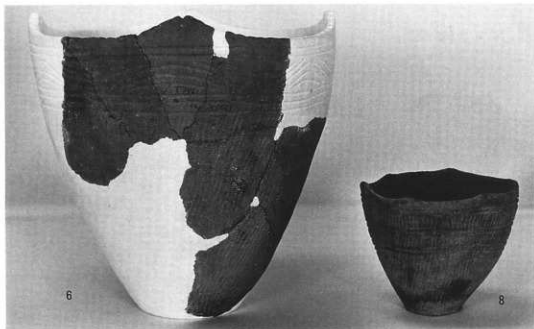
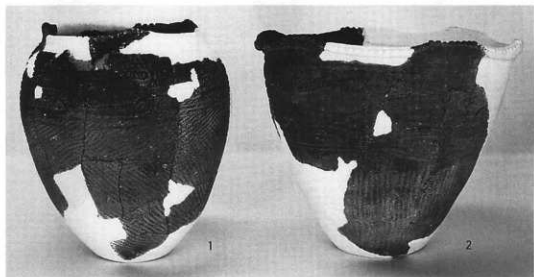
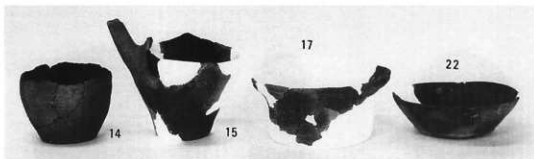


写真26 大川遺跡JH-1 (14・15・17・22)・JH-4 (1・2・6・8) 出土の土器

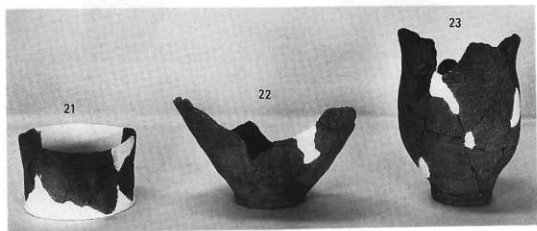


写真27 大川遺跡JH-4出土の統縄文期の土器



写真28 大川遺跡JH-4出土の統饗文期・繪文期の土器

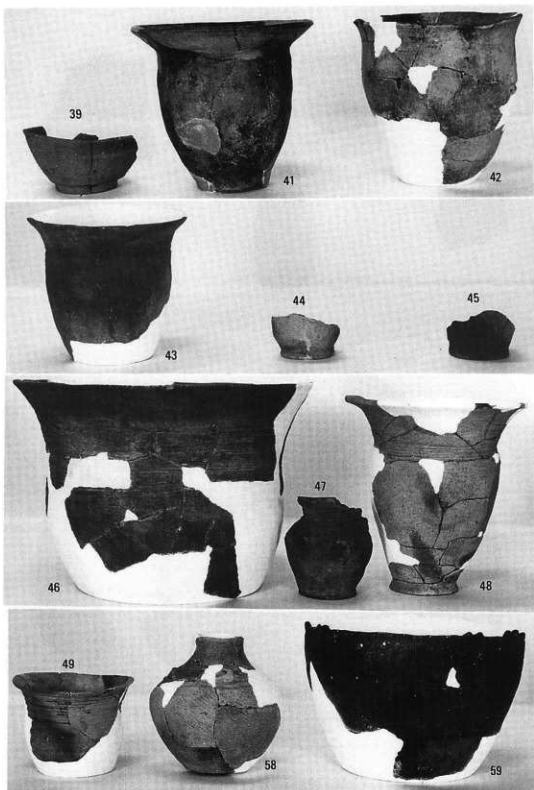
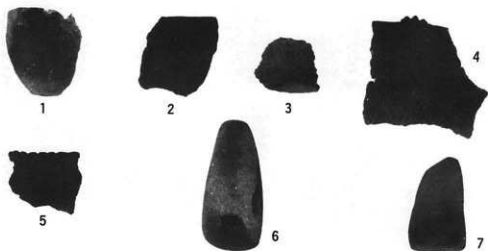


写真29 大川遺跡JH-4出土の縄文晩期～弥文期の土器



JH-3 (1~7)

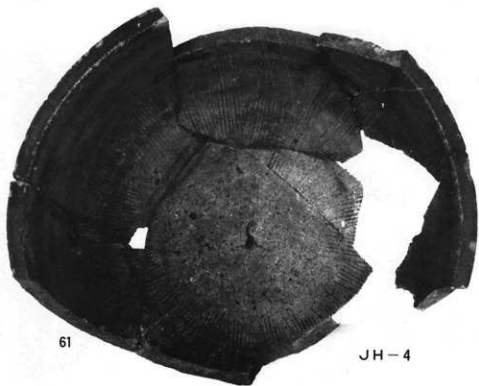


写真30 大川遺跡JH-3・4出土の遺物



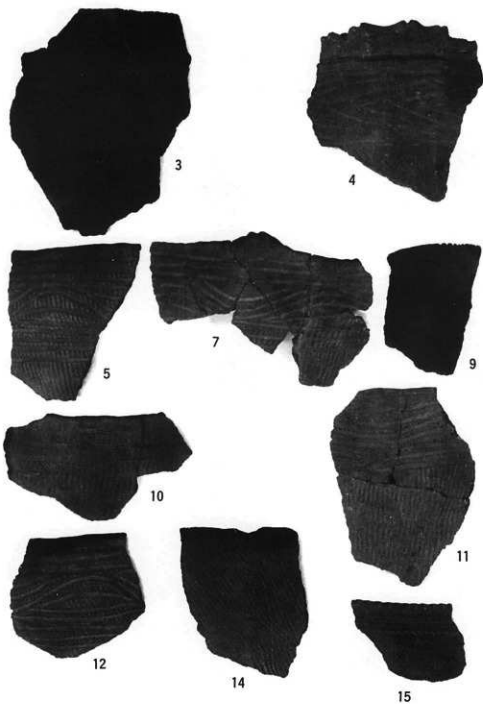


写真31 大川遺跡JH-4出土の土器

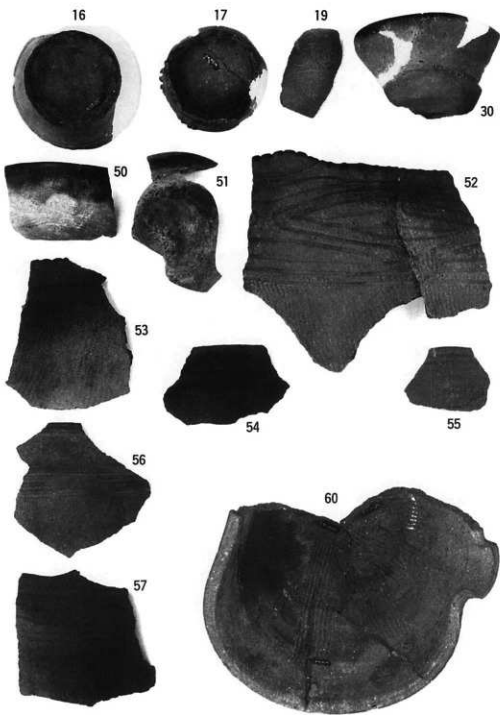


写真32 大川遺跡JH-4出土の土器と珠洲片口鉢

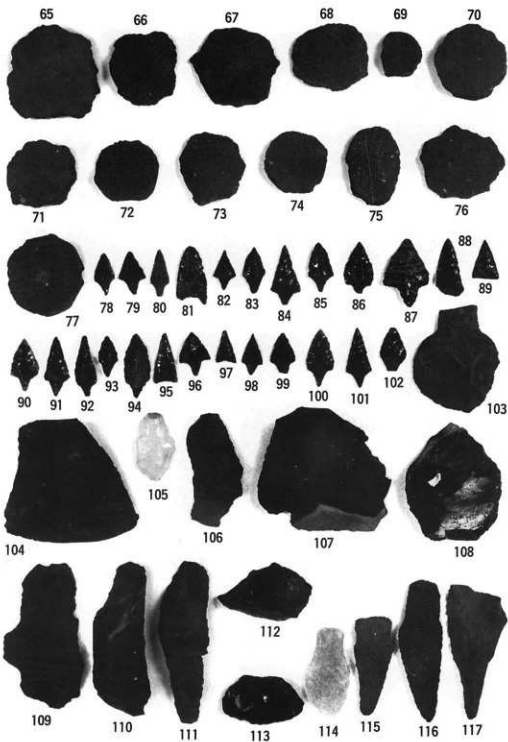


写真33 大川遺跡JH-4出土の土製品と石器

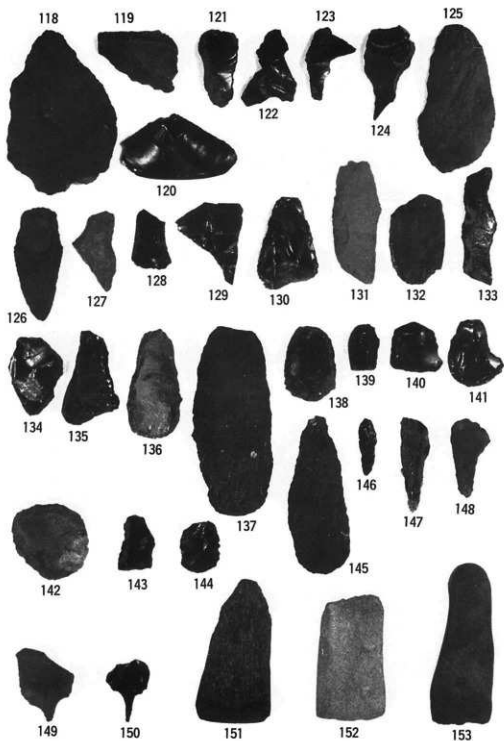


写真34 大川遺跡JH-4出土の石器

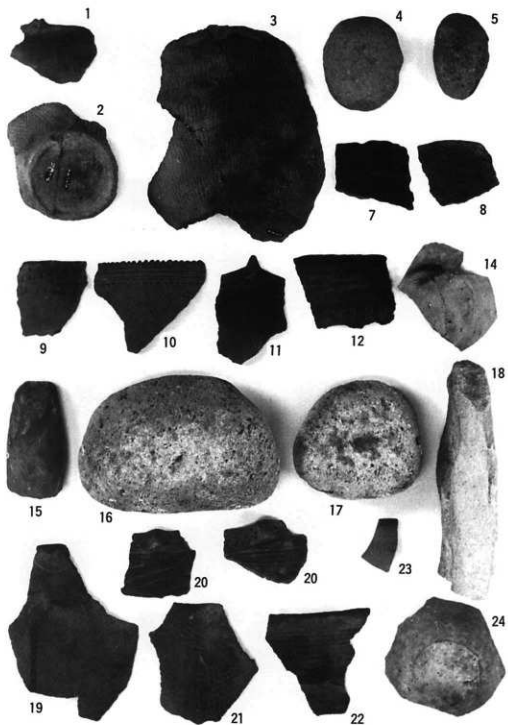


写真35 大川遺跡JH-5床面及び覆土出土の遺物

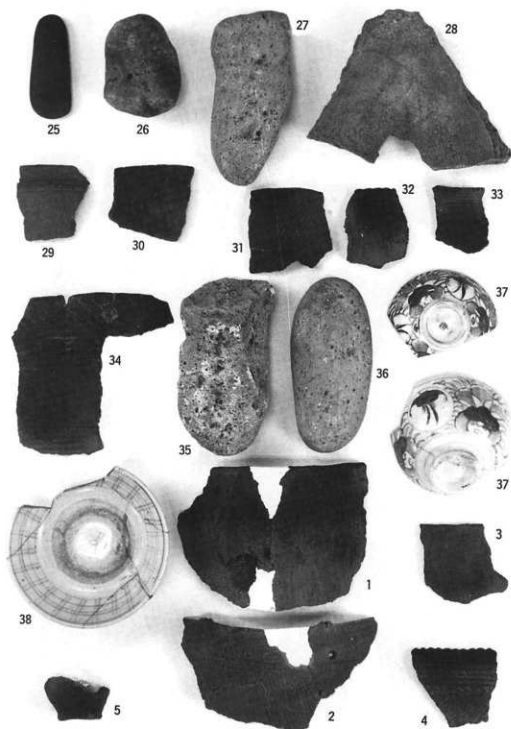


写真36 大川遺跡JH-5(25~37)・JH-6(1~5)床面及び覆土出土の遺物

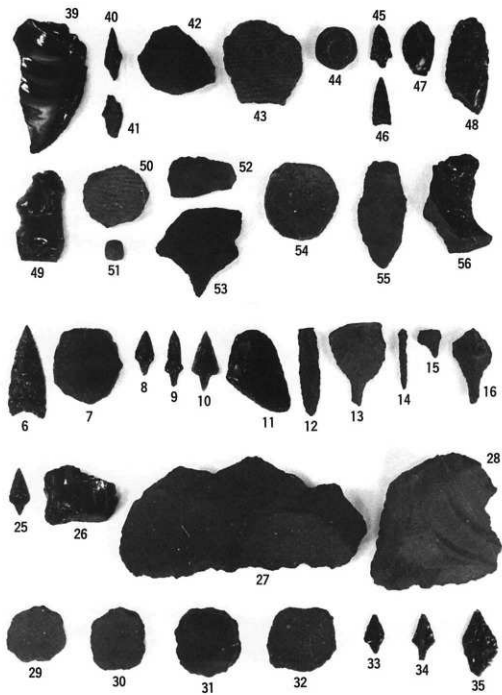


写真37 大川遺跡 JH-5 (39~56)・JH-6 (6~16)・JH-7 (25~35) 床面及び覆土出土の遺物

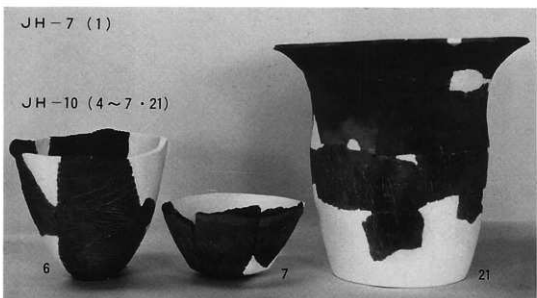
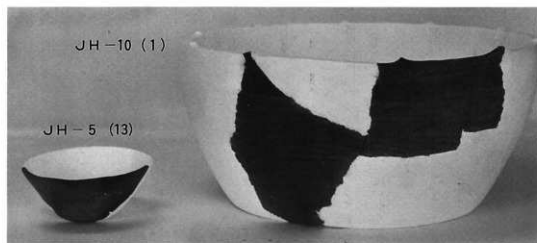


写真38 大川遺跡JH-5・7・10床面及び覆土出土の土器



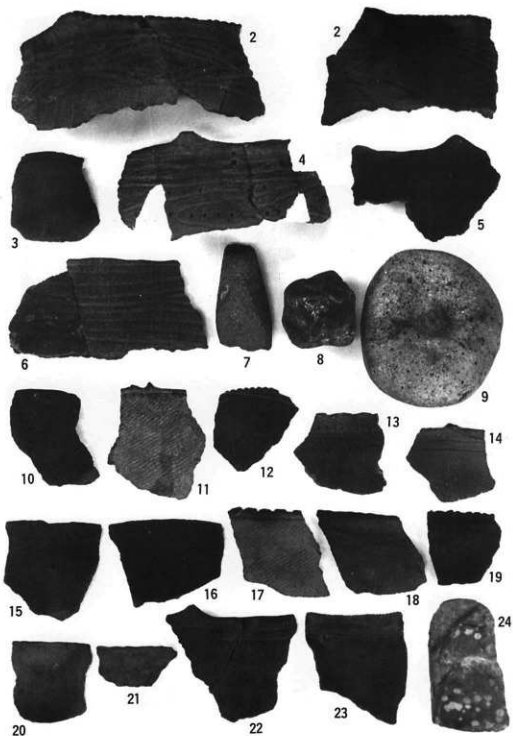
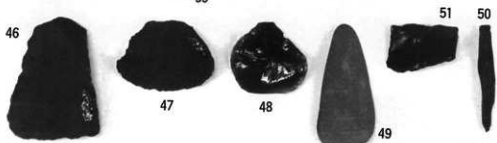
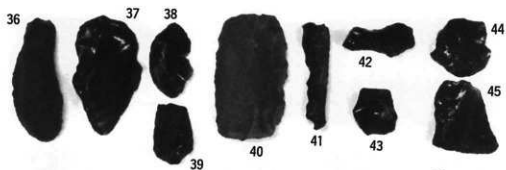
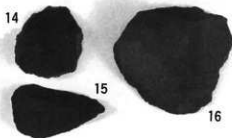
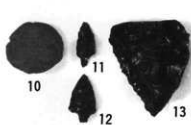


写真39 大川遺跡JH-7床面及び覆土出土の遺物



JH-7 (36~51)

JH-9 (14~16)



JH-8 (10~13)

JH-10 (39~48)

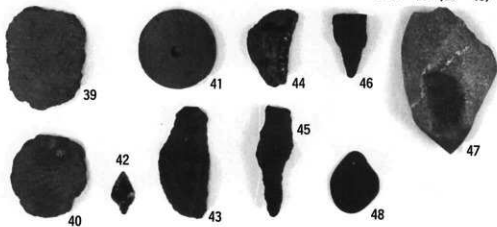
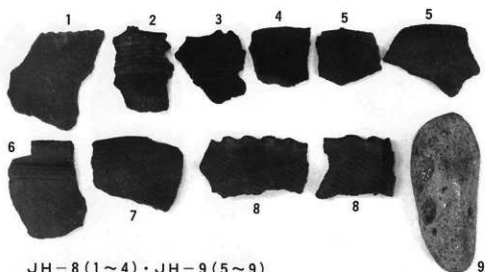


写真40 大川遺跡JH-7~10床面及び覆土出土の遺物



JH-8 (1~4)・JH-9 (5~9)

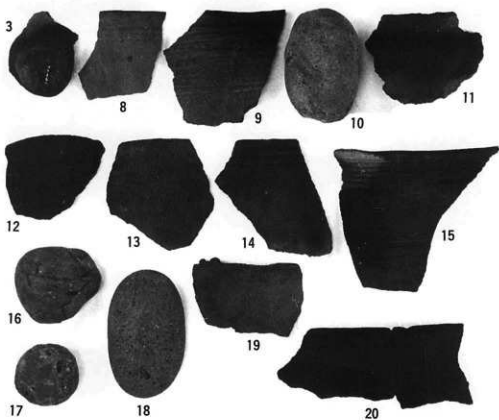


写真41 大川遺跡JH-8・9, JH-10 (下, 3・8~20) 床面及び覆土出土の遺物

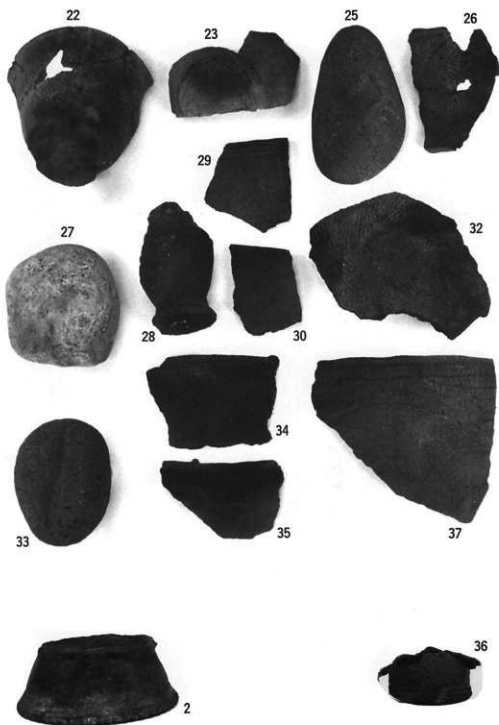


写真42 大川遺跡JH-10床面及び覆土出土の遺物

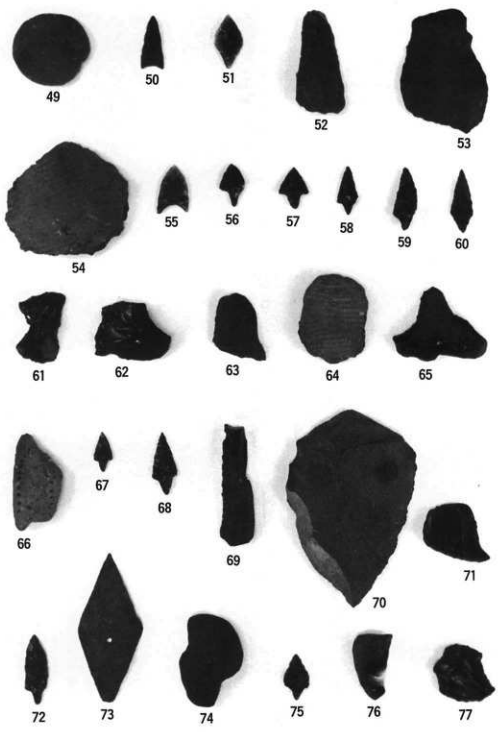


写真43 大川遺跡JH-10層土出土の遺物

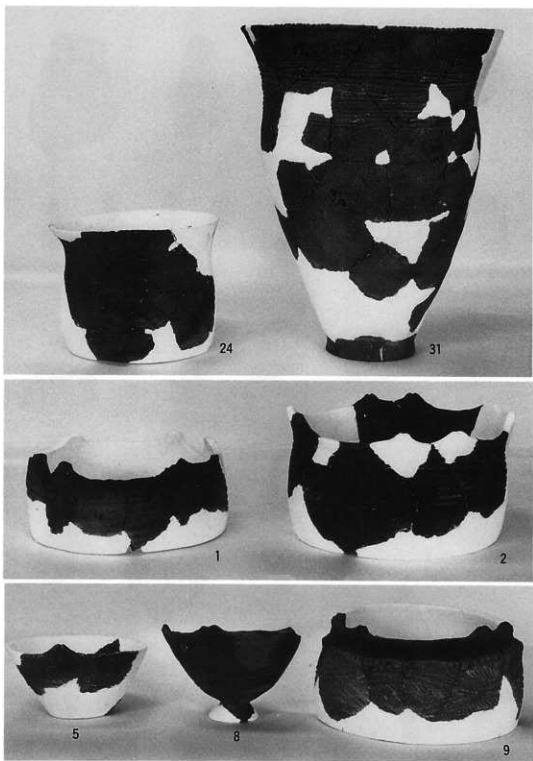


写真44 大川遺跡JH-10 (24・31)・JH-11 (1・2・5・8・9) 床面及び覆土出土の土器

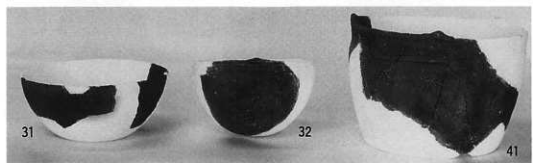
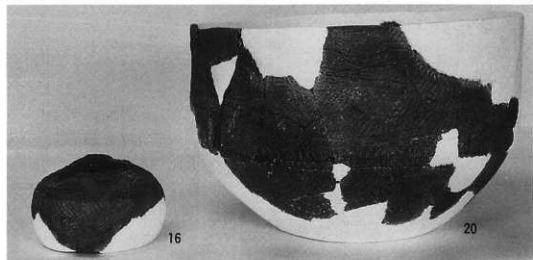
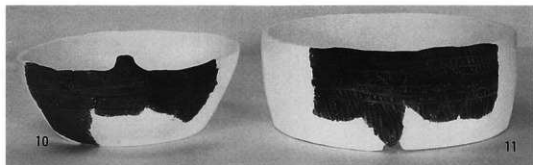


写真45 大川遺跡JH-11出土の土器

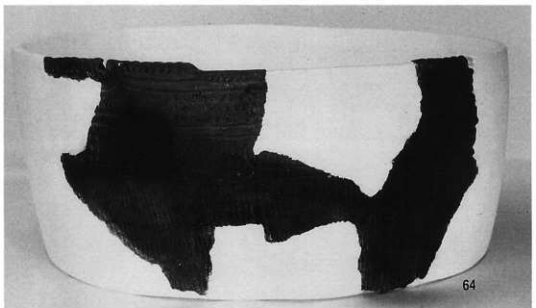
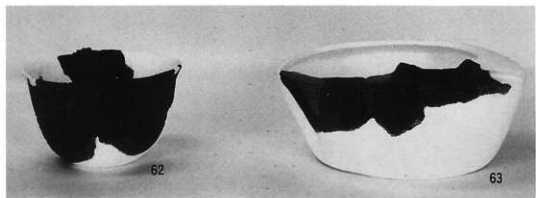
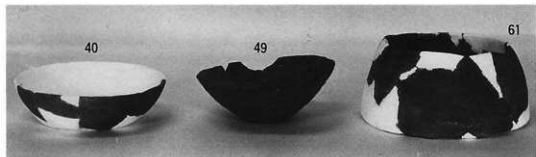


写真46 大川遺跡JH-11覆土出土の土器



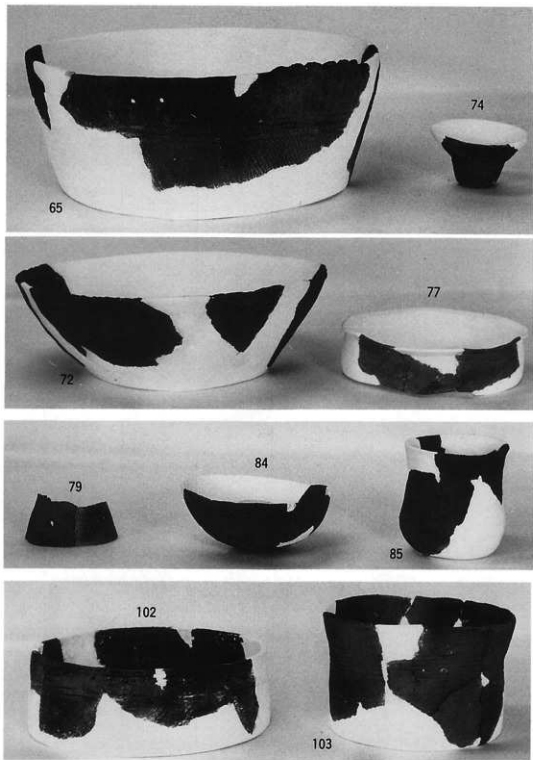


写真47 大川遺跡JH-11出土の土器

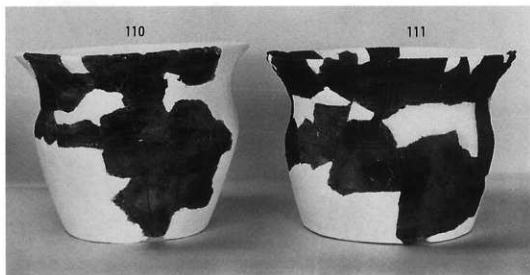
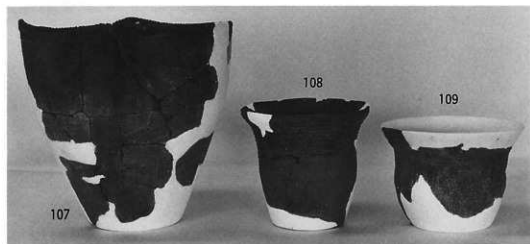
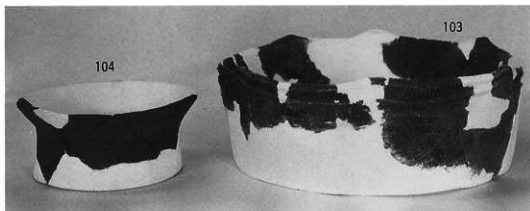


写真48 大川遺跡JH-11出土の土器

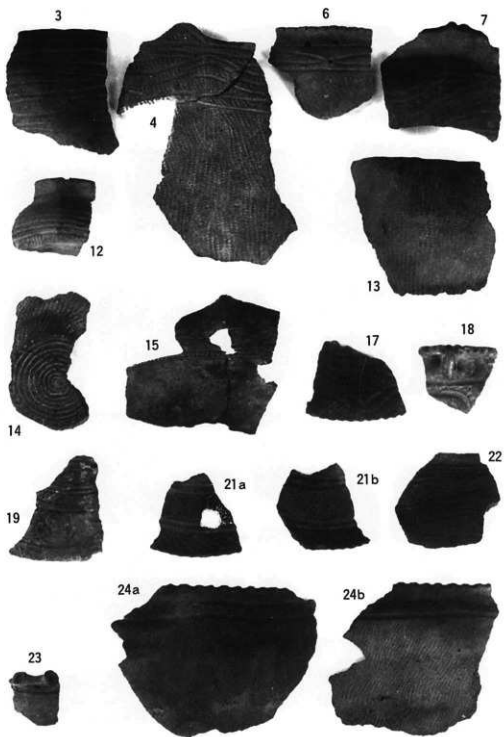


写真49 大川遺跡JH-11出土の土器

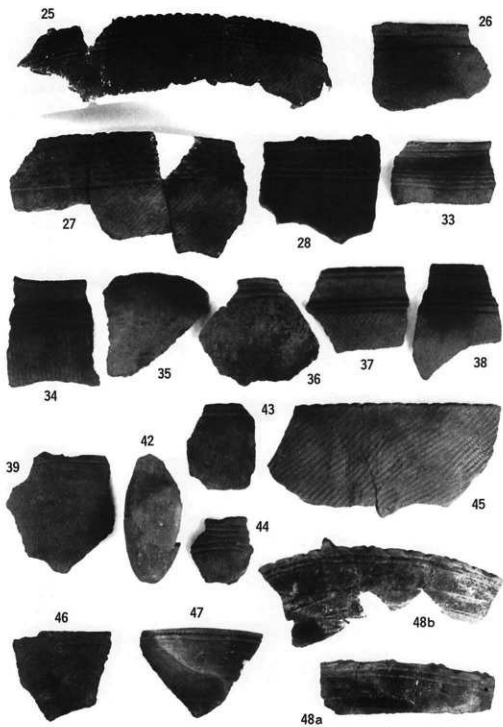


写真50 大川遺跡JH-11出土の土器

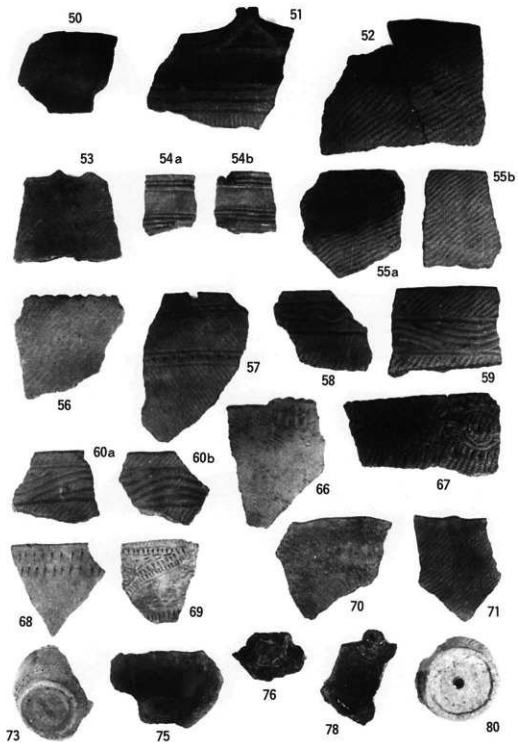


写真51 大川遺跡JH-11出土の土器

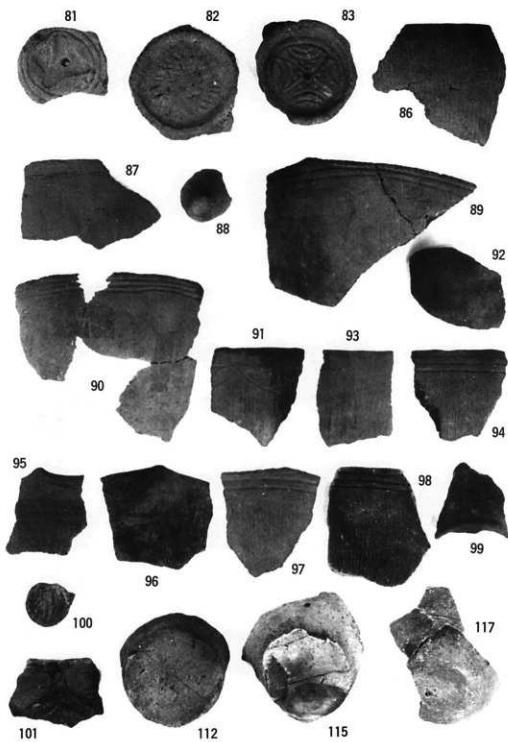


写真52 大川遺跡JH-11出土の土器

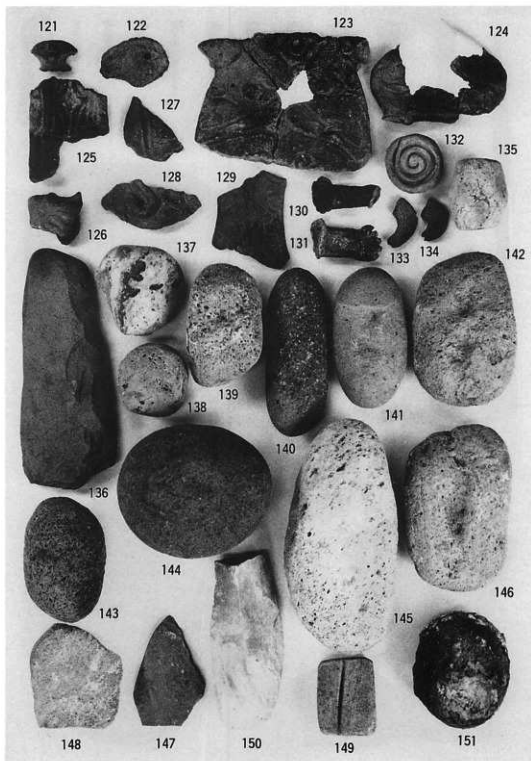


写真53 大川遺跡JH-11出土の遺物

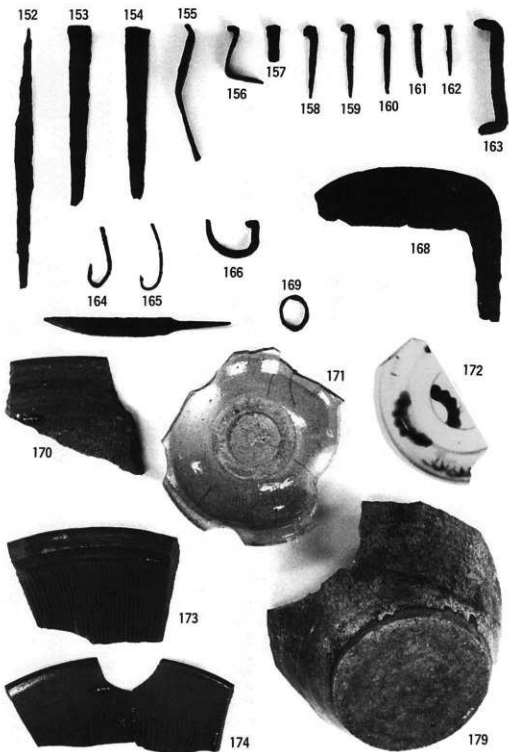


写真54 大川遺跡JH-11出土の遺物



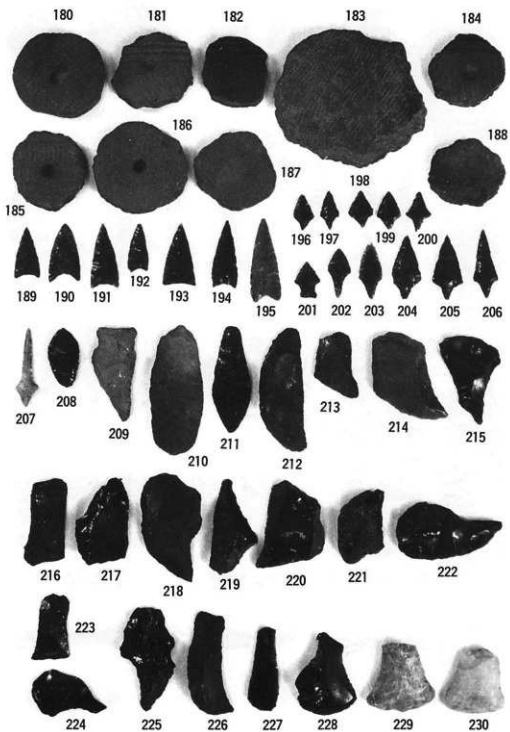


写真55 大川遺跡JH-11出土の遺物

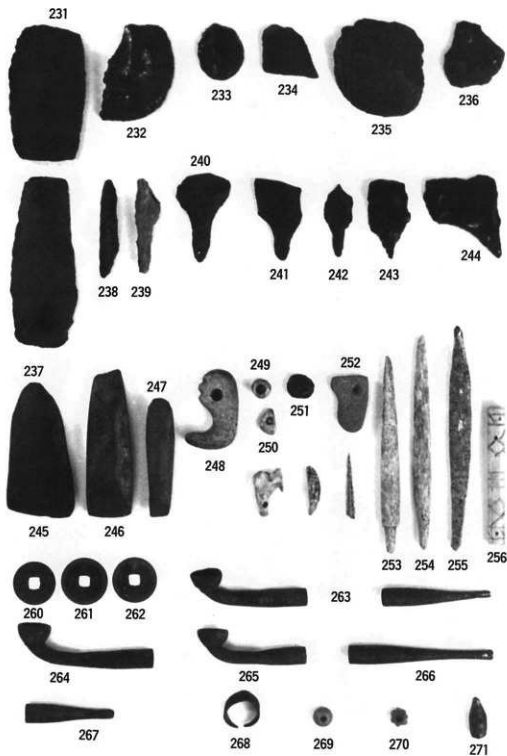


写真56 大川遺跡JH-11出土の遺物

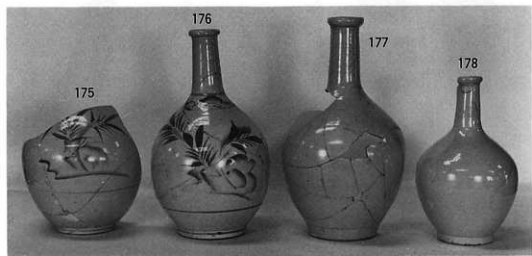
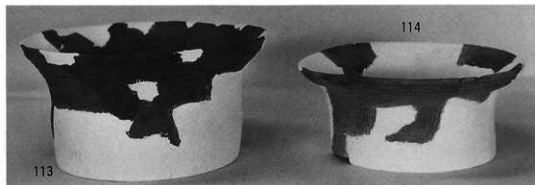


写真57 大川遺跡JH-11出土の土器と徳利

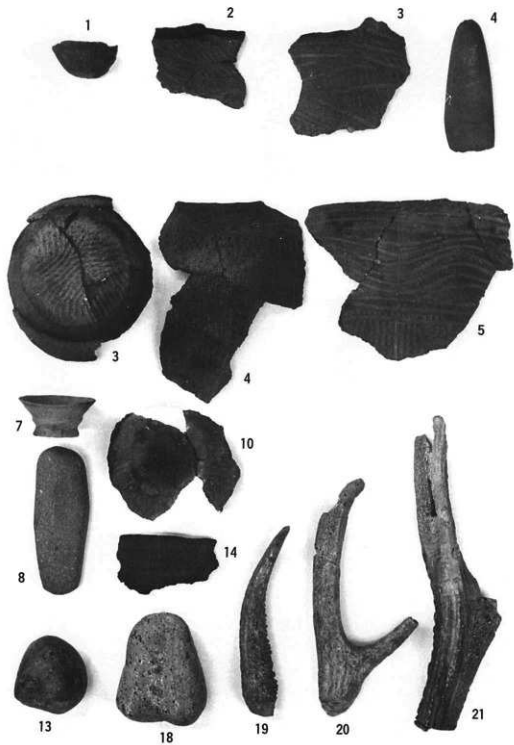


写真58 大川遺跡JH-12(上1~3)・JH-13(上4)・JH-14(下3~21)出土の遺物

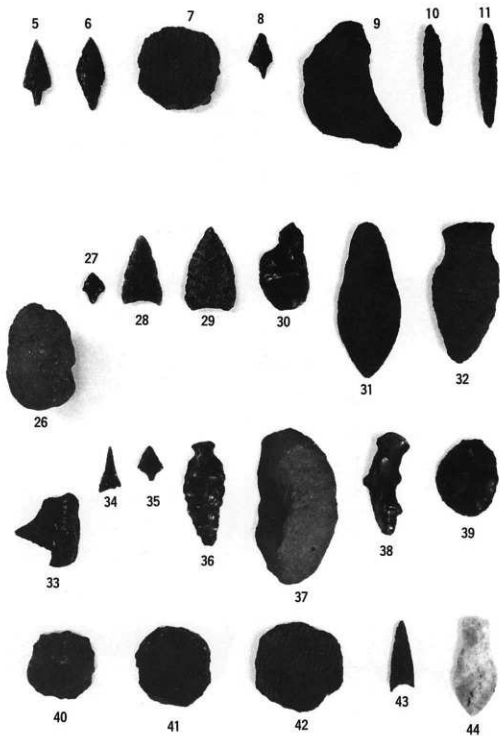


写真59 大川遺跡JH-12 (5~11)・JH-14 (26~44) 出土の遺物

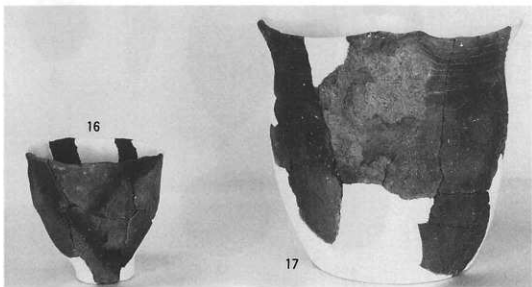
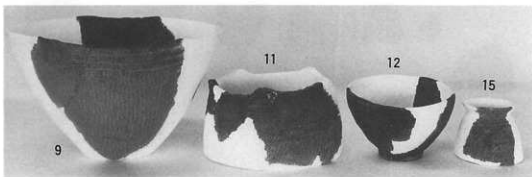
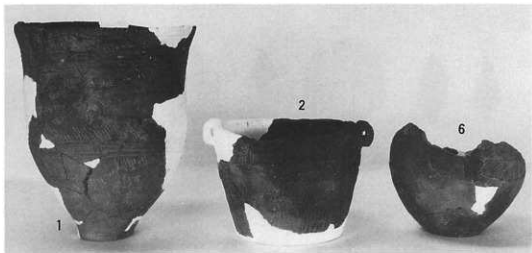


写真60 大川遺跡JH-14出土の土器

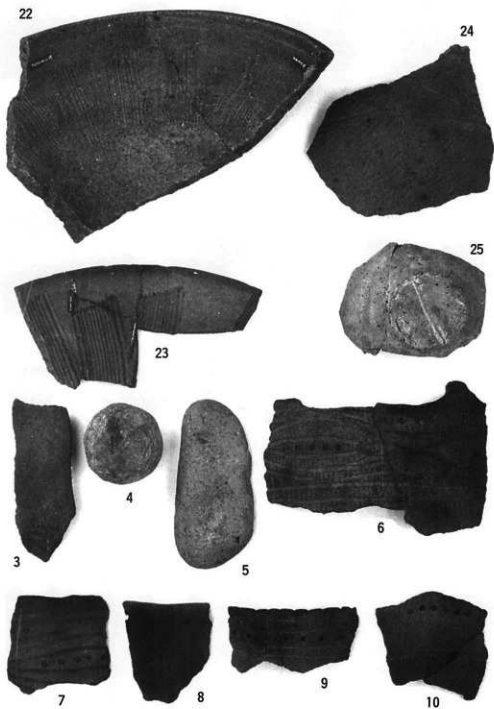


写真61 大川遺跡JH-14 (22~25)・JH-15 (3~10) 出土の遺物

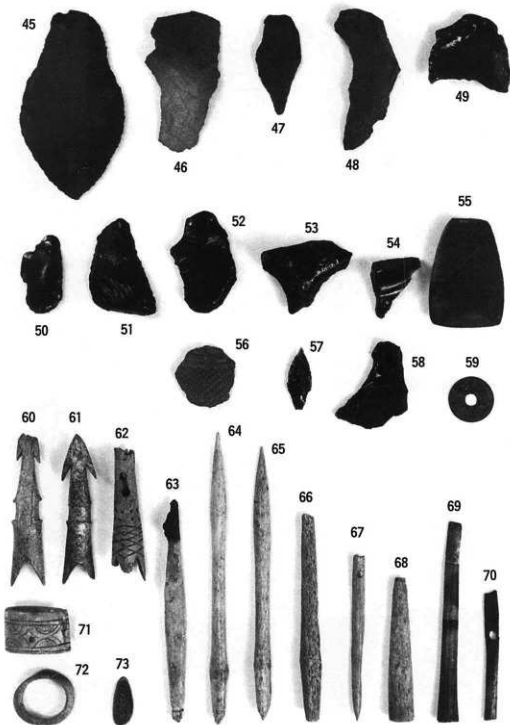


写真62 大川遺跡JH-14出土の遺物



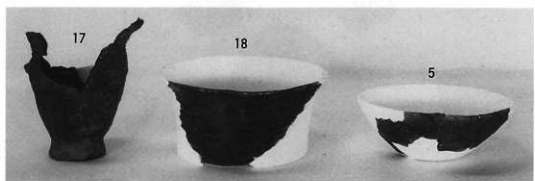
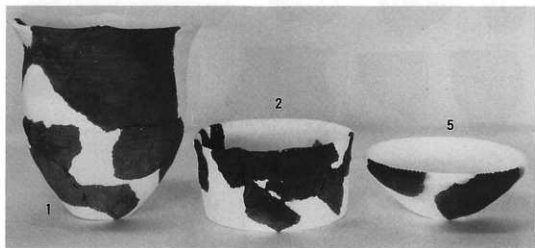
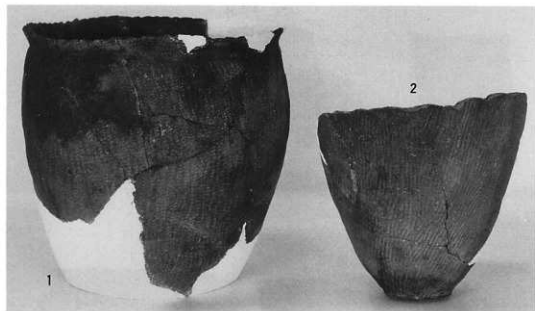


写真63 大川遺跡JH-15 (上1・2)・JH-16 (中1・2・5, 17・18)・JH-17 (下5) 出土の遺物

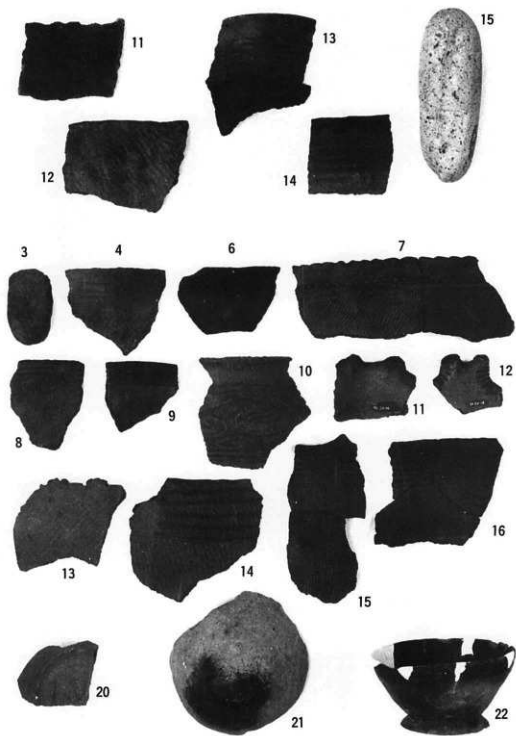


写真64 大川遺跡JH-15(上11~15)・JH-16(下3~22)出土の遺物

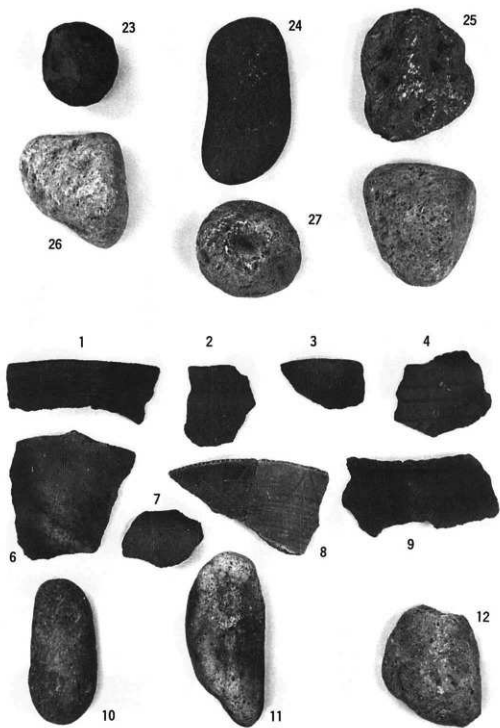


写真65 大川遺跡JH-16 (23~27)・JH-17 (1~12) 出土の遺物

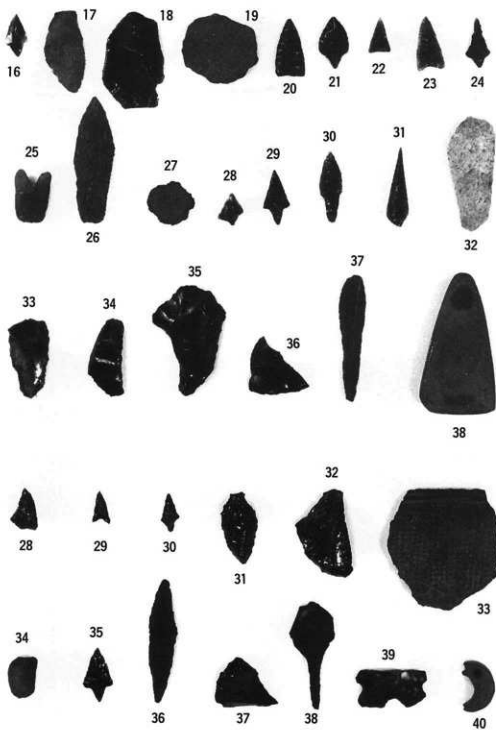


写真66 大川遺跡 JH-15 (上16~38)・JH-16 (下28~39)・JH-17 (40) 出土の遺物

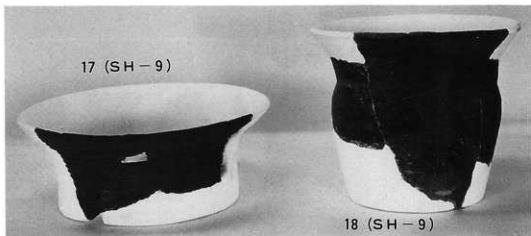
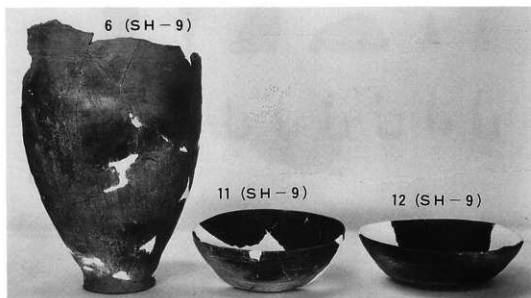


写真67 大川遺跡SH-2・6・9出土の土器

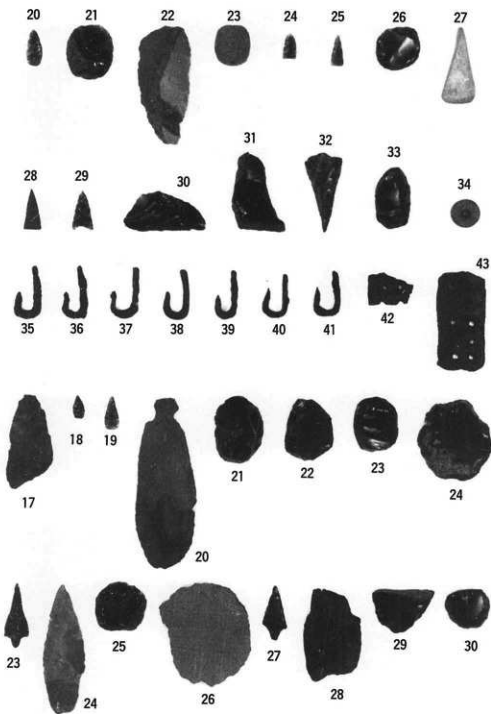
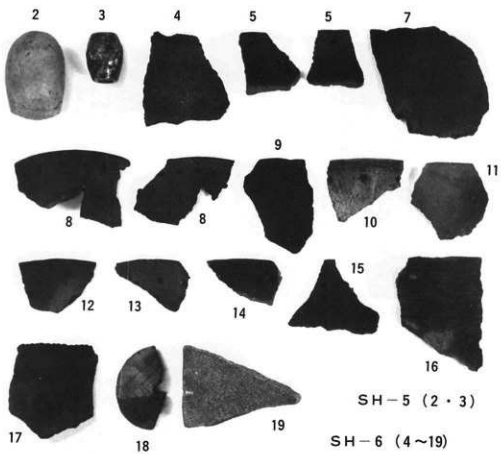


写真68 大川遺跡SH-2(上20・21)・SH-3(上22)・SH-6(上23~43)・SH-7(17)・SH-8(中18~24)・SH-9(下23~30) 出土の遺物



SH-7 (1・2)

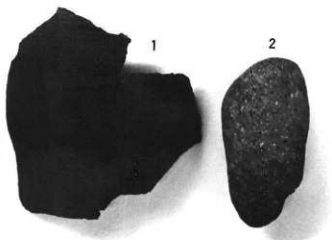


写真69 大川遺跡SH-5~7出土の遺物

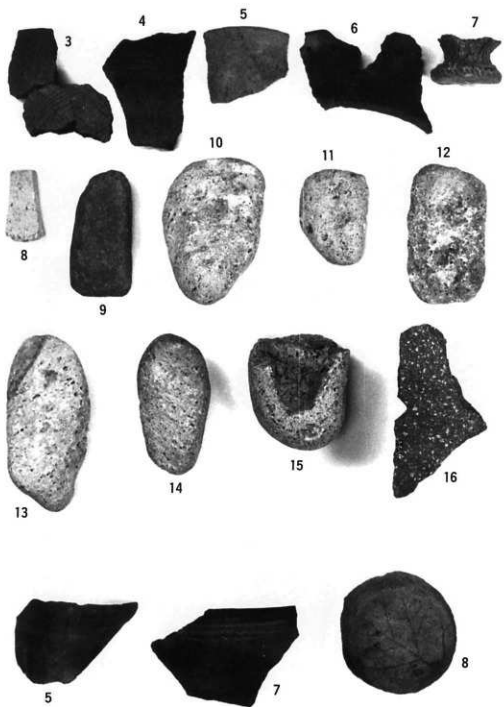


写真70 大川遺跡SH-8(上3~16)・SH-9(下5・7・8)出土の遺物



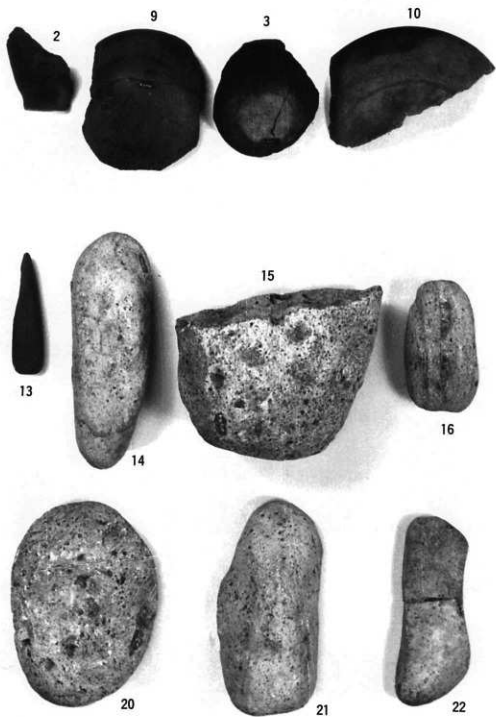


写真71 大川遺跡SH-9出土の土器・石斧・礫石器

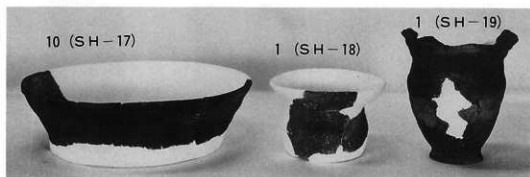
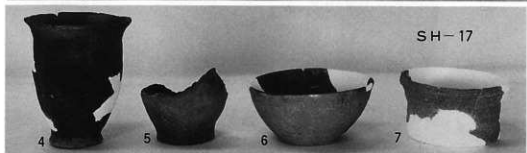
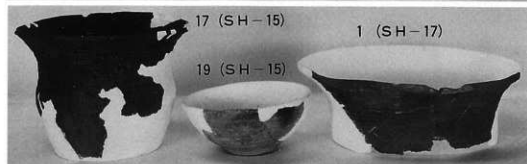
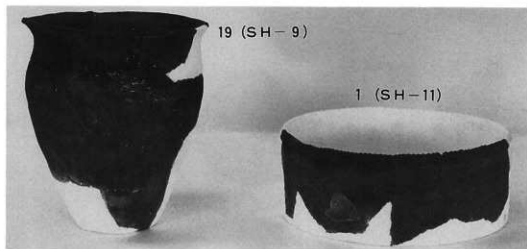


写真72 大川遺跡SH-9・11・15・17~19出土の土器

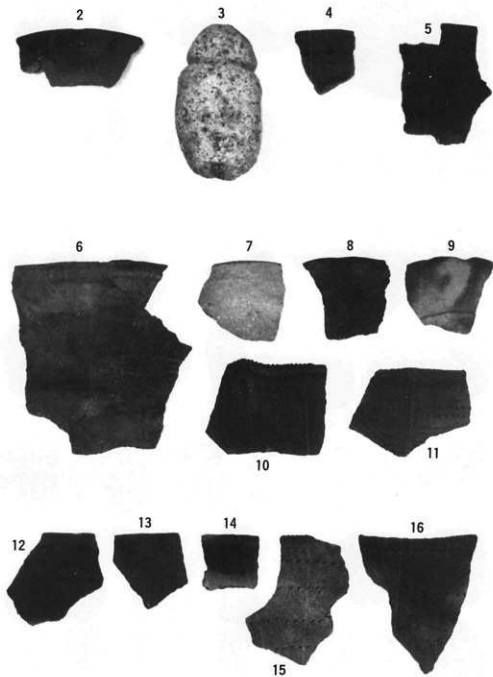


写真73 大川遺跡SH-11 (2~5)・SH-12 (6~16) 出土の遺物

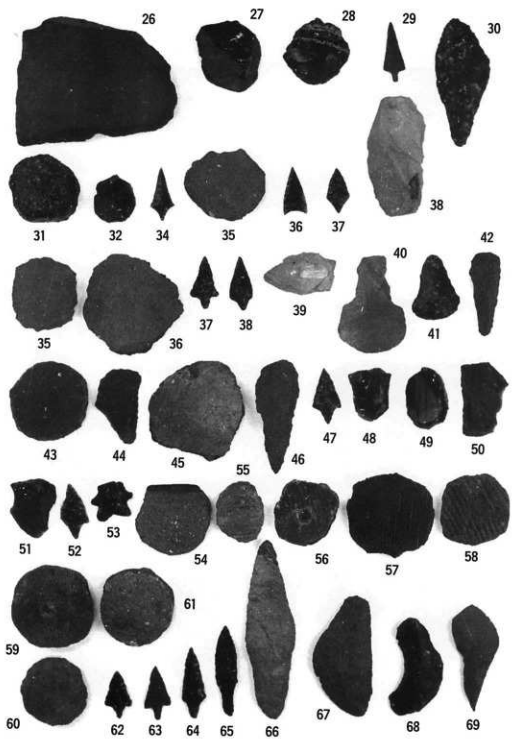


写真74 大川遺跡SH-11 (上26~28)・SH-13 (上29~32)・SH-15 (上34~36)・SH-16 (上37・38)・SH-17 (中・下35~69) 出土の遺物

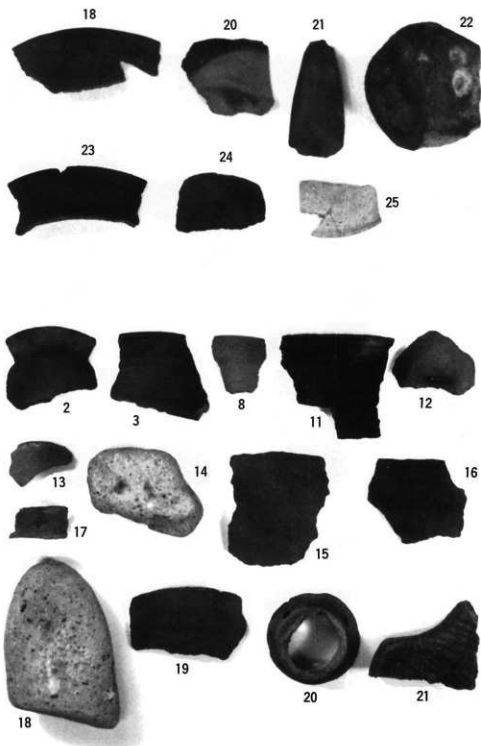


写真75 大川遺跡SH-15 (上18~23)・SH-16 (上24・25)・SH-17 (下2~21) 出土の遺物

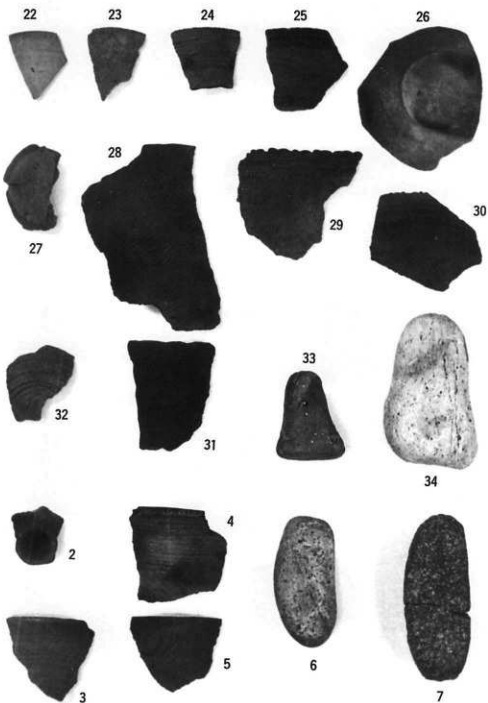


写真76 大川遺跡SH-17 (上22~34)・SH-18 (下2~7) 出土の遺物

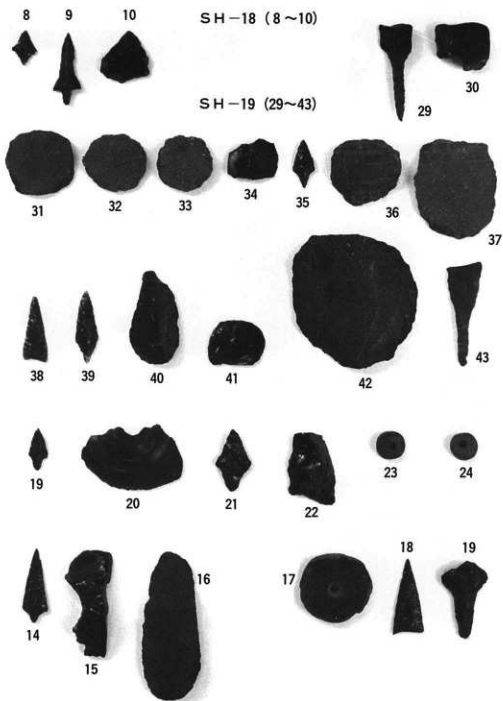


写真77 大川遺跡SH-18・19・20 (下19~24)・21 (下14~16)・22 (下17~19) 出土の遺物



写真78 大川遺跡SH-19出土の土器



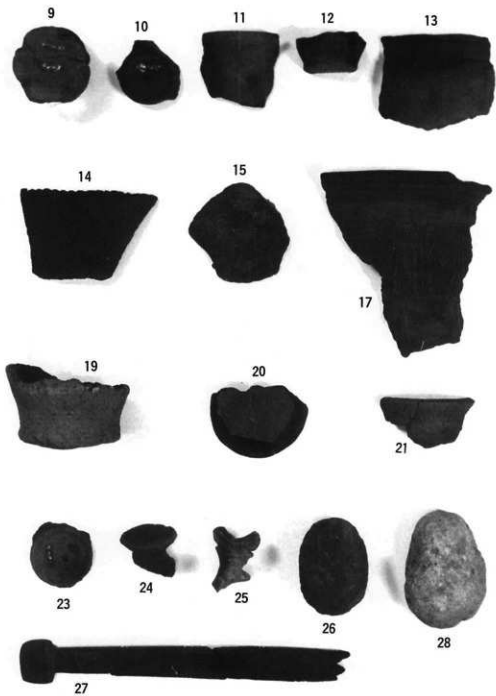


写真79 大川遺跡SH-19出土の遺物

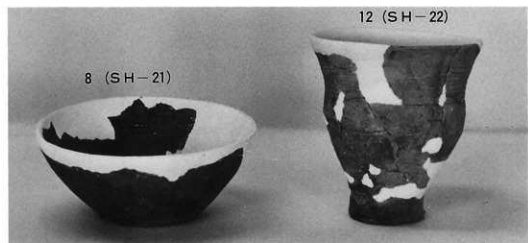
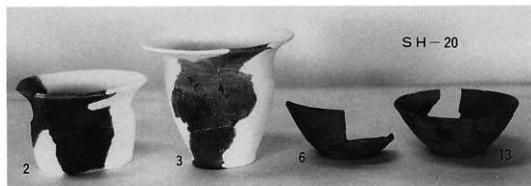


写真90 大川遺跡SH-20~22出土の土器

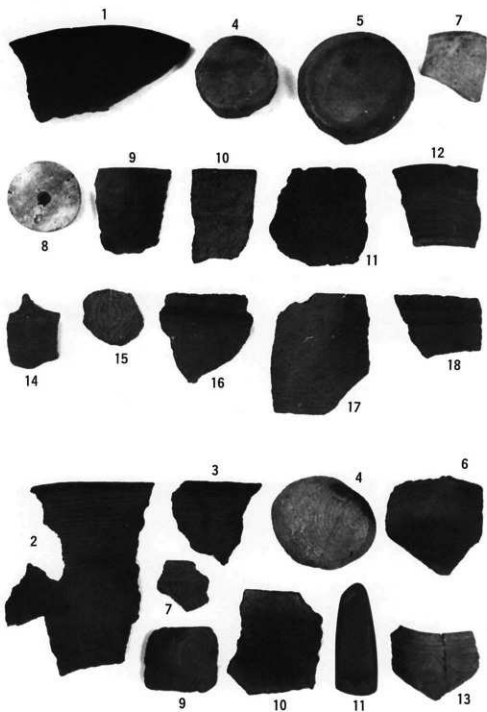


写真81 大川遺跡SH-20 (上1~18)・SH-21 (下2~11)・SH-22 (下13) 出土の遺物

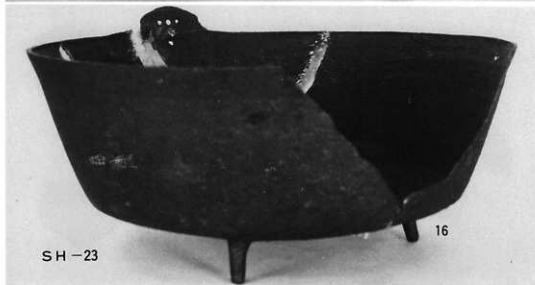


写真82 大川遺跡SH-23出土の遺物

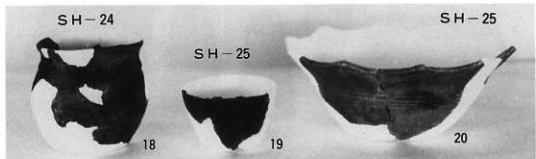
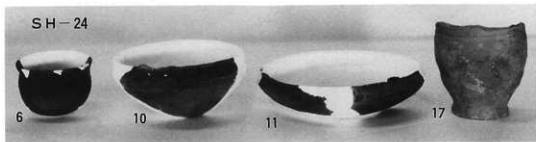


写真83 大川遺跡SH-23~25出土の土器

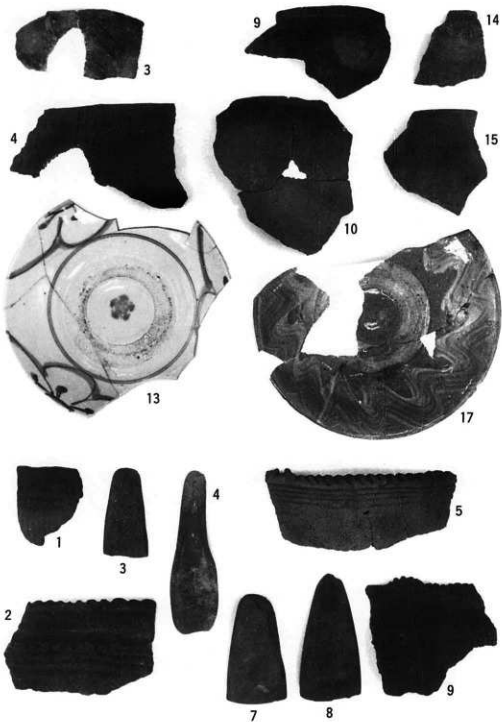


写真84 大川遺跡SH-23(上3~17)・SH-24(下1~9)出土の土器

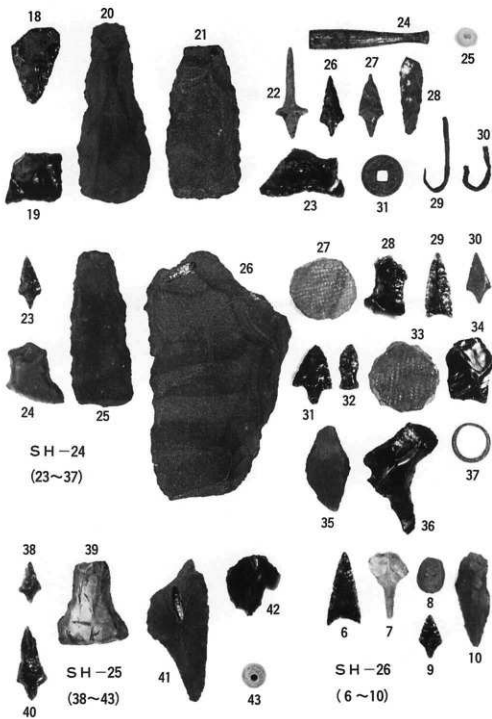


写真85 大川遺跡SH-23 (上18~31)・SH-24~26出土の各種遺物

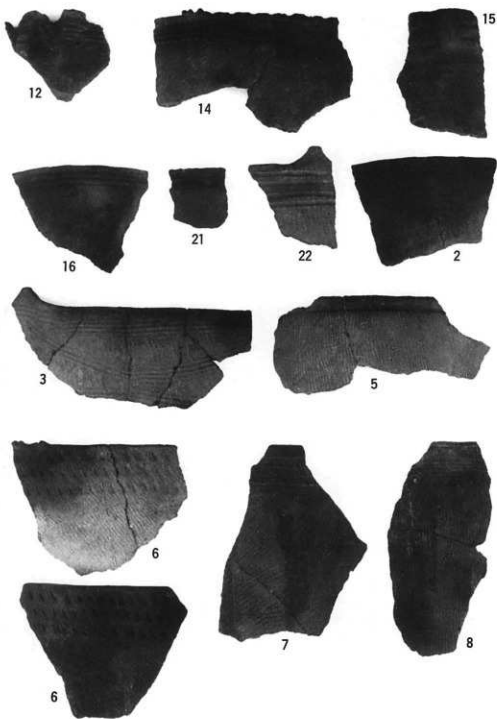


写真86 大川遺跡SH-24 (12・14~16)・SH-25 (21・22)・SH-28 (2)・SH-29 (3)・SH-30 (5~8) 出土の土器



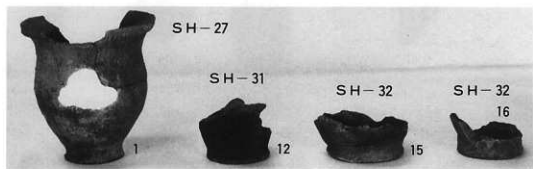
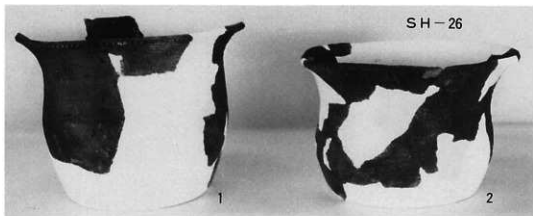


写真87 大川遺跡SH-26・27・31・32・35出土の土器

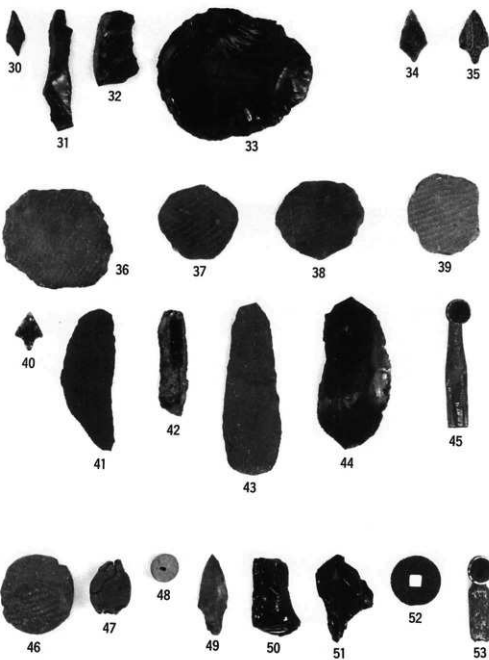


写真88 大川遺跡SH-27 (30~33)・28 (34・35)・30 (36~43)・31・33 (45)・34 (46~53) 出土の各種遺物

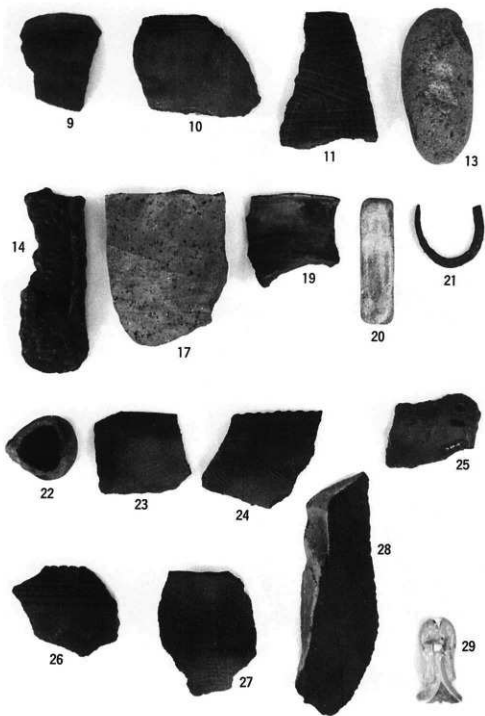


写真89 大川遺跡SH-30 (9~11)・SH-32 (13・14・17)・SH-33 (19~21)・SH-34 (22~29) 出土の各種遺物



写真90 大川遺跡SH-35・36出土の土器

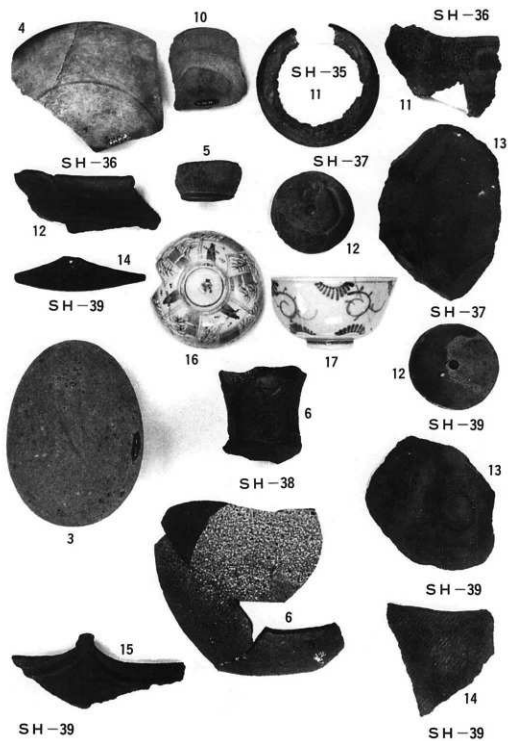


写真91 大川遺跡SH-35~39出土の遺物



写真92 大川遺跡SH-37出土の土器

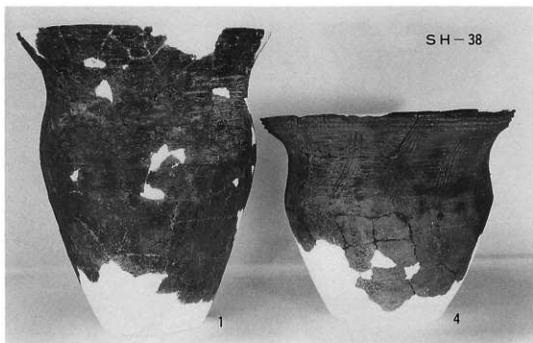


写真93 大川遺跡SH-38・41出土の土器

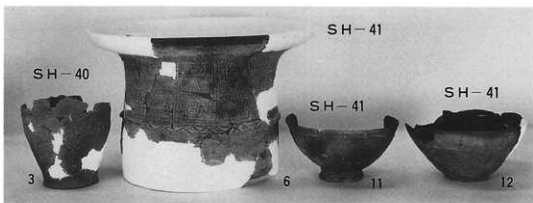
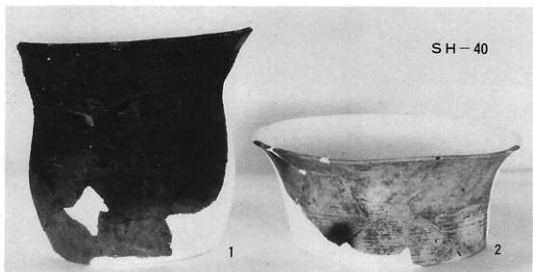
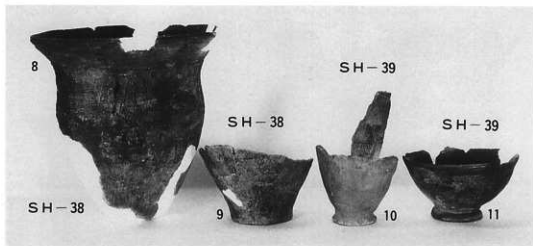
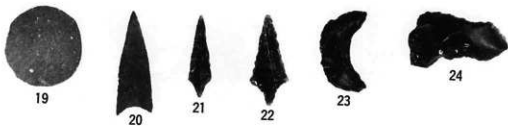


写真94 大川遺跡SH-38~41出土の土器

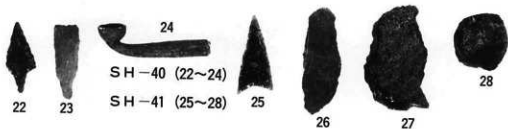




SH-35 (12~19)



SH-37 (19~29)



SH-40 (22~24)

SH-41 (25~28)

写真95 大川遺跡SH-35・37・40・41出土の各種遺物

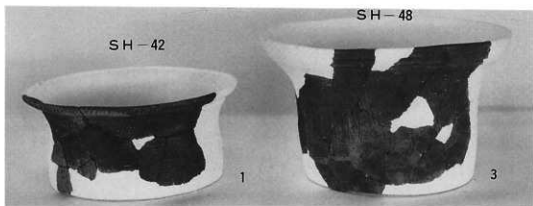
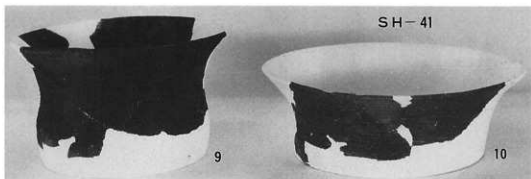


写真96 大川遺跡SH-41・42・48出土の土器

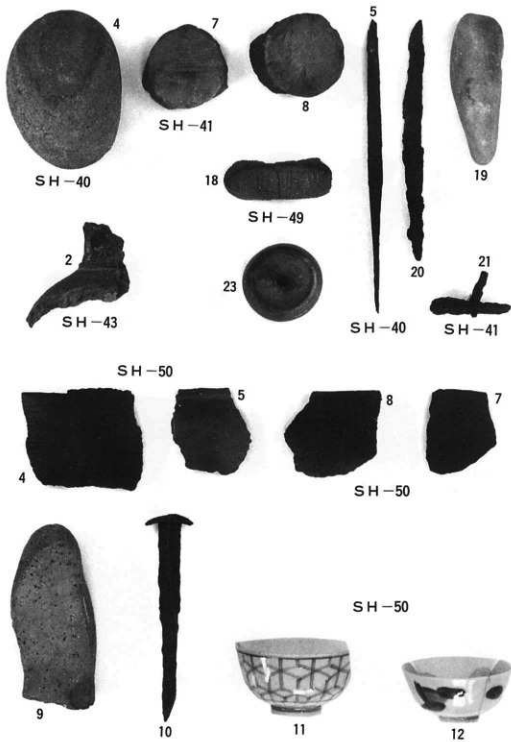


写真97 大川遺跡SH-40・41・43・49・50出土の各種遺物



写真98 大川遺跡SH-42・45, SH-49 (24~30)・SH-50 (31~39)・SH-51 (40・41)・SH-52出土の各種遺物

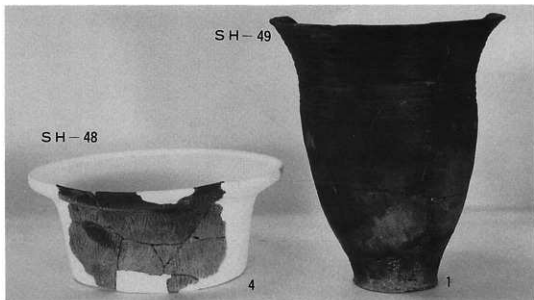


写真99 大川遺跡SH-48・49出土の土器

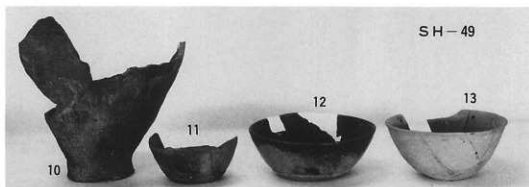
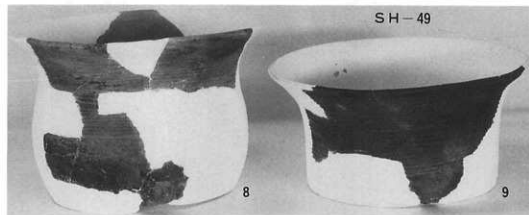


写真100 大川遺跡SH-49 (5~13)・SH-51 (16)・SH-52 (19・25) 出土の土器

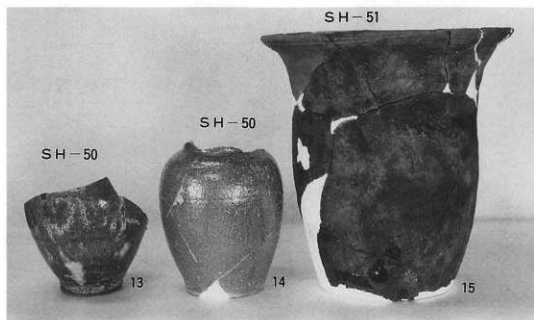
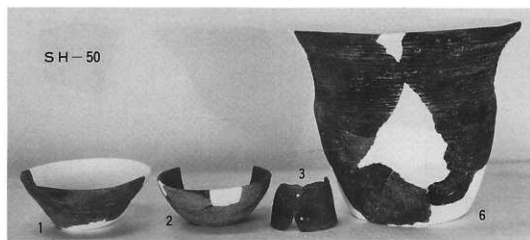
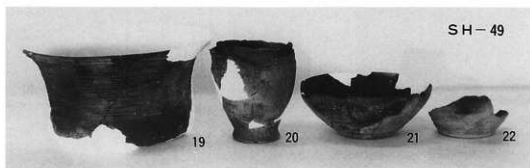


写真101 大川遺跡SH-49~51出土の土器



17



18



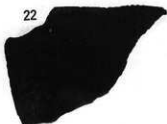
20

SH-51

SH-52



21



22



23

SH-52



26



24

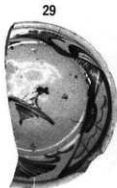


27

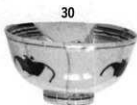
SH-52



28



29



30

写真102 大川遺跡SH-51・52出土の各種遺物



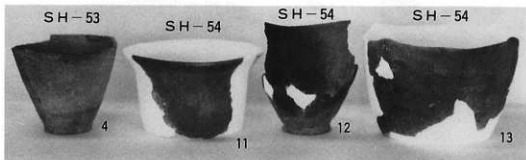


写真103 大川遺跡SH-53・54出土の土器

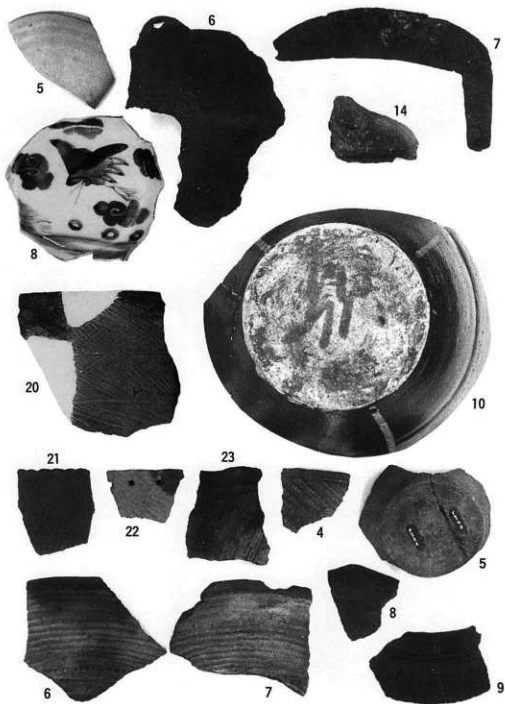


写真104 大川遺跡SH-53 (上5~8・10)・SH-54 (14・20~23)・SH-55 (下4~9) 出土の土器

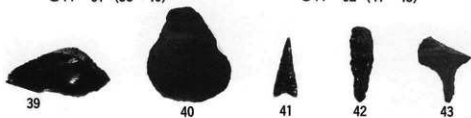
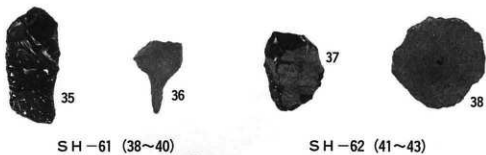
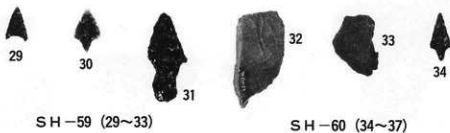
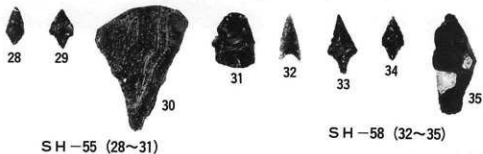
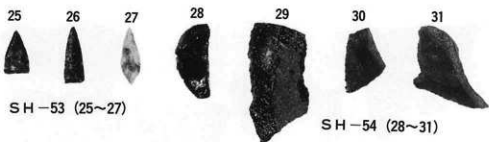


写真105 大川遺跡SH-53~54・58~62出土の遺物

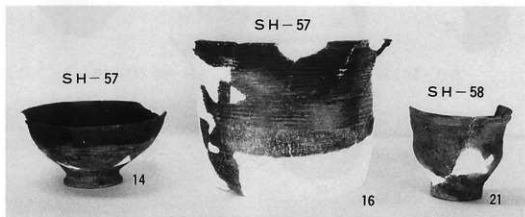
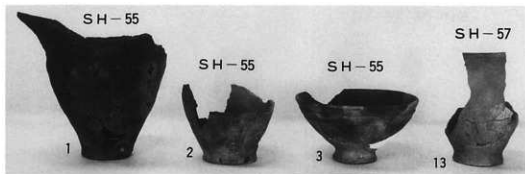


写真106 大川遺跡SH-54・55・57・58出土の土器

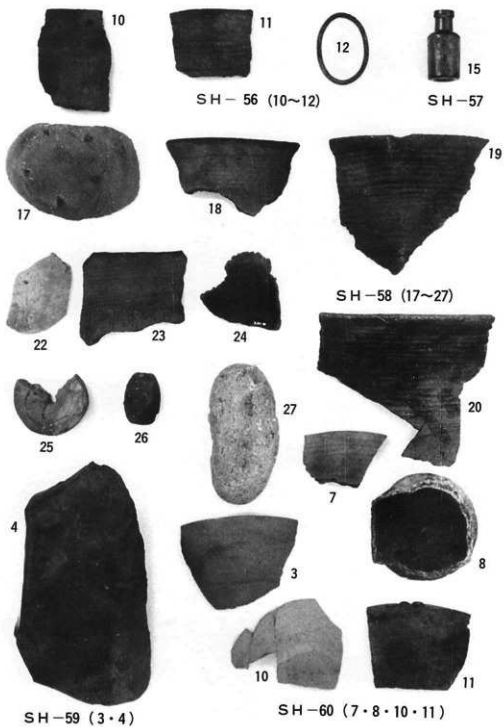


写真107 大川遺跡SH-56~60出土の各種遺物

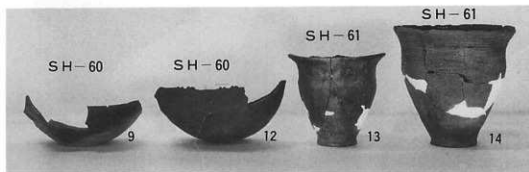
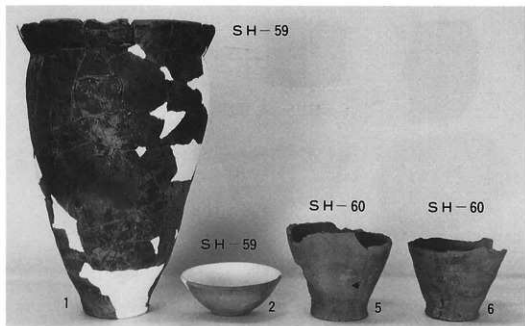


写真108 大川遺跡SH-59~63出土の土器

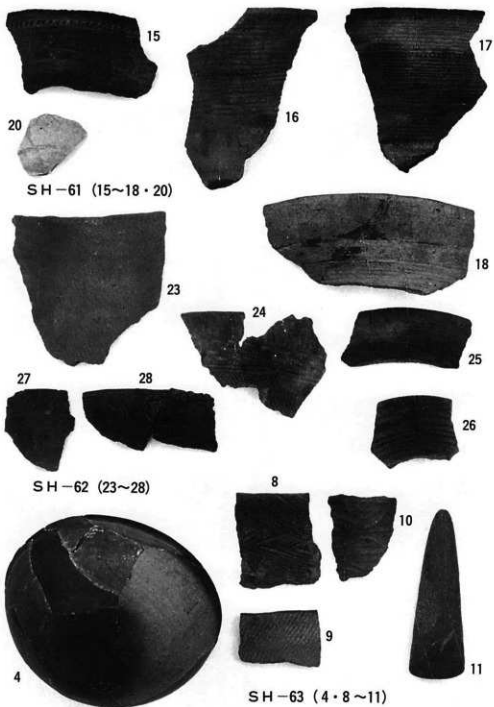


写真109 大川遺跡SH-61~63出土の各種遺物

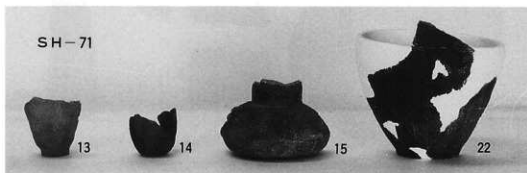
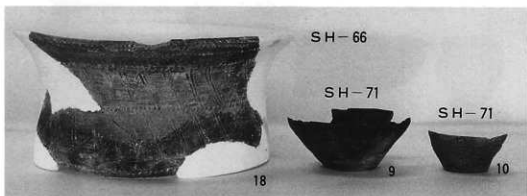
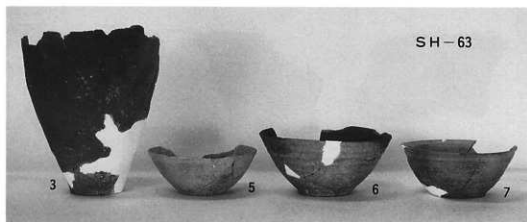


写真110 大川遺跡SH-63・64・66・69・71出土の土器



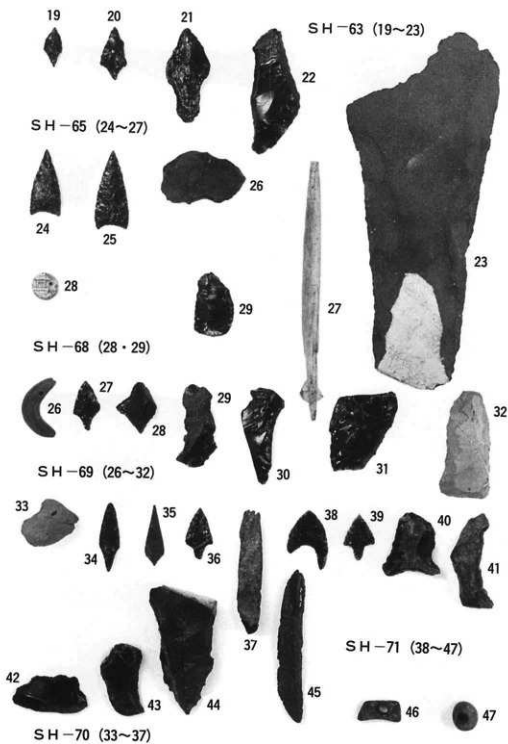


写真111 大川遺跡SH-63・65・68~71出土の各種遺物



16

SH-65 (14~16)



14



15



2



5



3

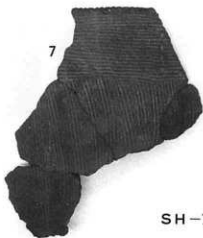


6

SH-69 (2~4)



4



7

SH-70 (5~8)



8

写真112 大川遺跡SH-65・69・70出土の各種遺物

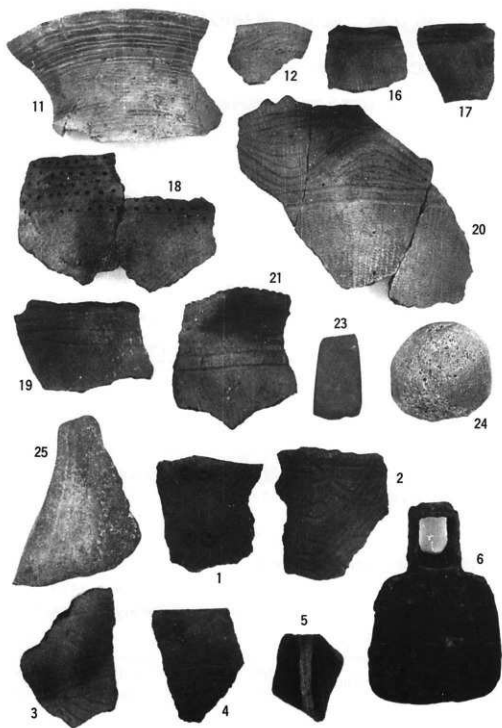


写真113 大川遺跡SH-71 (11~25)・HP-1 (1~6) 出土の各種遺物

## 第5章 遺構・遺物の理化学的分析

### 第1節 $^{14}\text{C}$ 年代測定結果報告

#### a. 大川遺跡放射性炭素年代測定結果報告

名古屋大学年代測定資料研究センター

測定番号	試料	出土遺構	$^{14}\text{C}$ 年代 ( $\pm 1\sigma$ )yBP	樹輪校正した暦年代 (年代範囲: 相対確率)	$\sigma$ $^{13}\text{C}$ (0/00)
NUTA-4861	炭化ソバ	SH-3	550 $\pm$ 60	1313cal AD~1349cal AD/ (37.0%)	-27.3
				1389cal AD~1437cal AD/ (63.0%)	
NUTA-4862	炭化キビ	SH-3	990 $\pm$ 70	993cal AD~1063cal AD/ (50.8%)	-9.3
				1076cal AD~1126cal AD/ (32.7%)	
				1134cal AD~1159cal AD/ (16.5%)	

$^{14}\text{C}$ 年代値は、yBPの単位で、西暦1950年から過去へ遡った年代値で示されます。

$^{14}\text{C}$ の半減期として5568年を用いて年代値を計算しています。

年代値の誤差は、one sigma (1標準偏差)を示しました。これは同じ条件で測定を100回繰り返した時、測定結果が誤差範囲に入る割合が68回であることを意味します。誤差を表示の2倍にとると、誤差範囲に入る割合は、95回となります。

#### b. ISOTRACE (UNIVERSITY OF TORONTO) $^{14}\text{C}$ DATE FROM HOKKAIDO, JAPAN

Gary W. Crawford (University of TORONTO)

Isotrace Number	Site	Sample	Weight (mg)	Uncalibrated (BP)	Calibrated Age (AD)	68.3% Ci (AD)
TO-1998	Okawa	Kibi seeds	13	1160 $\pm$ 80	886	776~975
TO-1999	Okawa	Kome seeds	7	780 $\pm$ 200	1260	1024~1325

### C 大川遺跡出土炭化種子・炭化材等の放射性炭素年代測定結果報告

木越邦彦 (学習院大学理学部名誉教授)

年代測定の結果を下記のとおり御報告致します。年代値の算出には  $^{14}\text{C}$  の半減期として LIBBY の半減期 5570 年を使用しています。また、付記した誤差は  $\beta$  線の計算値の標準偏差  $\sigma$  にもとづいて算出した年数で、標準偏差 (ONE SIGMA) に相当する年代です。また、試料の  $\beta$  線計数率と自然計算率の差が  $2\sigma$  以下のときは、 $3\sigma$  に相当する年代を下限の年代値 (B.P.) として表示してあります。また、試料の  $\beta$  線計数率と現在の標準炭素 (MODERN STANDARD CARBON) についての計算率との差が  $2\sigma$  以下の時には、Modern と表示し、 $\delta^{14}\text{C}\%$  を付記してあります。

Code No.	試料	遺構名	遺物番号	年代	西暦	備考
Gak-16007	炭化物	JH-1	432	3120 $\pm$ 120	B.C.1170	
Gak-16406	炭化材	JH-1	443	4720 $\pm$ 240	B.C.2770	地床炉出土
Gak-16407	炭化クルミ	JH-4	-	2880 $\pm$ 100	B.C.930	地床炉出土
Gak-16408	炭化材	JH-4	14	2050 $\pm$ 100	B.C.100	地床炉出土
Gak-17137	炭化材	JH-10	10	2990 $\pm$ 100	B.C.1040	
Gak-17138	炭化材	JH-10	28	2800 $\pm$ 90	B.C.850	
Gak-15020	炭化米	SH-1	-	1000 $\pm$ 210	A.D.950	
Gak-16465	炭化アワ	SH-1	-	1710 $\pm$ 130	A.D.240	
Gak-16466	炭化ヒエ	SH-1	-	3550 $\pm$ 110	B.C.1600	
Gak-16467	炭化ソバ	SH-3	-	1260 $\pm$ 140	A.D.690	
Gak-15019	炭化米	SH-3	-	830 $\pm$ 170	A.D.1120	
Gak-15725	炭化米	SH-6	-	810 $\pm$ 130	A.D.1140	
Gak-15250	炭化物	SH-6	6	860 $\pm$ 90	A.D.1090	
Gak-15251	炭化物	SH-7	44	580 $\pm$ 80	A.D.1370	
Gak-15726	炭化米	SH-8	-	570 $\pm$ 200	A.D.1380	
Gak-15727	炭化米	SH-13	-	1300 $\pm$ 160	A.D.650	
Gak-15728	炭化ソバ	SH-13	22	1370 $\pm$ 130	A.D.580	
Gak-16582	炭化材	SH-13	7	1110 $\pm$ 100	A.D.840	
Gak-16583	炭化材	SH-19	19	1400 $\pm$ 80	A.D.550	
Gak-19005	炭化材	SH-71	37	590 $\pm$ 80	A.D.1360	
Gak-17136	wood	HP-1	2	750 $\pm$ 80	A.D.1200	











品名	部位等	鋼	骨
SH-51	カマド	ニシン(骨付12組)	
	カマド	トリ類(fr7組)	
SH-52	第1目録	エゾマキギ(2), イガイ類(3・fr2), コチマギ(1), ウバギ(2・fr4)	
	覆土	ニシン(骨付9, 写付3), カレイ類(骨付L1, 骨付13), マダラ(骨付2), イヌ(上胴付L1)( $P \times M \times M \times M \times M \times M$ ), 大腸骨R-遠位端1(骨), 家畜(fr1)	
SH-53	カマド	ニシン(骨付1組), ホッケ(骨付4組), イヌ(骨付L1 7組, fr65組), トリ類(fr27組)	
	第1目録	アザラシ(前上胴付R1), ホズミ類(骨付1), SM類(骨付fr1), アワビ(6), ナヅ1ボウ(2), フメタギ(1), イガイ類(40・fr1), コチマギ(1)(257・fr20), ウバギ(7・fr1)	
SH-54	カマド	ニシン(上胴付R2・L3, 骨付R1, 写付7), 骨付126), ホッケ(骨付97), カレイ類(岩後組骨5, 骨付R2, 間胴付L1, 第1血管周囲2, 骨付73), ウグイ(骨付42), サケ(骨付2, 曲88), マダラ(骨付6, 骨付1, 骨付1, 骨付2), サメ類(骨付3), イトウ(骨付1), イヌ(頭蓋骨1, 上胴付R1( $P \times M \times M \times M \times M \times M$ )), 海胆2, 海胆1, 動物1, 骨付R遠位端1), シカ(動物R1), 陸獣類(fr1), アホウドリ(骨付L遠位端1), マダギ(1)	
	覆土	イヌ(中手骨中足骨4大型)	
SH-55	カマド	ニシン(骨付1組), トリ類(fr12組)	
	覆土	海獣類(骨付1大型)	
SH-56	カマド	ニシン(骨付1組), トリ類(fr3組)	
	第1目録	ニシン(骨付3), ヒラメ(曲3), サケ(曲1組), カサゴ類(骨付R1), マダラ(前上胴付R1), イヌ(後骨R遠位端~1, 尺骨R遠位端1, 腕骨R1, 海胆骨1, 中骨付1), シカ(内中骨1), ホズミ類(上胴付2, C3, 大腸骨R2・L1, 骨付R遠位端~1・L1, 尾骨1, 陸獣類(fr4), トリ類(fr2), ナヅ1ボウ(1), ヒメエゾボウ(2), エゾマキギ(1), イガイ類(24・fr2), コチマギ(7)(28・fr160), ウバギ(fr1), サラギ(1), シジミ類(1)	
SH-57	カマド	ウグイ(骨付1組), サケ(骨付1組), トリ類(fr15組)	
	焼土	トリ類(fr1組)	
SH-58	カマド	ウグイ(骨付1組), サケ(骨付1組), トリ類(fr15組)	
	焼土	トリ類(fr1組)	
SH-59	床	ニシン(骨付1組, 骨付1組), サケ(曲2組)	
	カマド	ニシン(骨付2組, 骨付14組), カレイ類(骨付2組), ウグイ(骨付5組), サケ(曲3組, 骨付1組), トリ類(fr12組)	
SH-60	地床が	トリ類(fr組)	
	カマド	トリ類(fr6組)	
SH-61	床	ニシン(骨付1組), ホッケ(骨付1組), サケ(曲2組), トリ類(fr4組)	
	カマド	ニシン(骨付1組), サケ(曲2組), トリ類(fr7組)	
SH-65	第2目録	イヌ(頭蓋骨1, 上胴付R1(1123C×P234M12)-L1(1123CP1234M12), 下胴付R1(1123C×P234M12)), 海胆1, 海胆1, 海胆2, 海胆2, 骨付(fr10), トリ類(fr1)	
	第1目録	ニシン(上胴付R2, 骨付R2・L2, 写付13, 骨付20), カレイ類(骨付9), ウグイ(骨付5), サケ(曲1), カサゴ類(骨付L1), マダラ(岩後組骨2), イヌ(下胴付R1( $M \times M \times M \times P234M1 \times M \times M$ )), 12R1), 陸獣類(fr1), ナヅ1ボウ(1), エゾマキギ(2), フメタギ(1), イガイ類(1), エゾキンチャクガイ(fr1), コチマギ(30・fr53), ウバギ(fr6)	
	工 種	ニシン(骨付R1・L1, 写付25), カレイ類(骨付4), ヒラメ(骨付1)	
	覆土	カサゴ類(骨付1), マダラ(骨付2), イヌ(寛骨R1, 仙骨1中型), 陸獣類(fr1), 海獣類(fr2), マダギ(4), コチマギ(fr3), ウバギ(fr1), ホウシジメガイ(1)	
SH-67	カマド	トリ類(fr1組)	
SH-68	覆土	イヌ(下胴付1, 1)	
SH-69	覆土	ヒゲマ(中胴付1組)	
SH-71	カマド	ニシン(骨付3組), ホッケ(骨付2組), サケ(曲2組)	
	覆土	ニシン(上胴付R1, 写付2, 骨付7), ホッケ(骨付1), カレイ類(骨付6), ウグイ(骨付1), ヒゲマ(中手骨中足骨1組), ホズミ類(大腸骨R遠位端~2, fr1), クロチマキギ(1), イガイ類(1), ホウシジメガイ(1), コチマギ(1)	

### 第3節 大川遺跡検出の植物遺体について

本節では、各壜穴状建物跡（住居跡・工房跡・倉庫跡等）検出の植物遺体について報告する。検出植物遺体の処理方法の詳細については、米谷登志子・小川康和 1996 「入舟遺跡出土の植物遺体について」 『1995年度余市入舟遺跡発掘調査概報』 余市町教育委員会刊 あるいは、『入舟遺跡における考古学的調査』（分析篇）余市町教育委員会刊 1999 の第8節を参照頂きたい。また、現場での採取、土壌水洗やフローテーション、更には同定に至るまで当スタッフの米谷登志子が主としてその任にあたった。これは、吉崎昌一・椿坂恭代両先生（1989～1992年度）、松谷暎子先生（1994年度）、矢野牧夫先生（1995年度）の御指導の結果、今回報告可能となったものである。特に、攪乱等の影響が少ないとみられた良好な壜穴においてメッシュを切ってフローテーション用のソイル・サンプリングを実施した。JH-1・2・4・14については、1m×1mの小GridをSH-6～9・11・13・18・19・23・36・37については、各辺と対応させ、概ね1m前後を1単位として詳細な検出位置の粗密他について検討した。しかし、その総てのデータを公表するには相当な紙数を費やす為、残念ながら今回は本節のような報告となってしまった。この詳細について知りたい方は、是非、余市へ足をお運び頂きたい。本節における一覧表は、吉崎昌一・1990 「大川遺跡出土の炭化種子予備分析結果」 『1989年度大川遺跡発掘調査概報』、吉崎昌一・椿坂恭代 1991 「植物遺体」 『1990年度大川遺跡発掘調査概報』 及び吉崎昌一・1993 「大川遺跡のコメ」 『1992年度大川遺跡発掘調査概報』 にそれぞれ示された一覧表に追加する形で再編し、米谷登志子が完成させたものである。また、本節の写真114～122については、吉崎昌一・椿坂恭代両先生の撮影によるものであり、掲載について御許可頂いた両先生には、心より感謝申し上げる次第である。

（米谷・宮）

表46 大川遺跡（1989～1994）JH検出植物遺体一覧

遺跡名	検出位置	処理方法	検出植物遺体名
JH-1	床 面	フローテーション	キハダ属11、ウルシ属4、タナ根1、アサ1、ブドウ属、ニワトコ属1、タラノキ属1、不明種子4、クルミ属片11.80g
	地床 伊	フローテーション	ウルシ属2、キハダ属1、クルミ属片1.80g
	覆 土	ふるい	ブドウ属5、キハダ属1、ウルシ属1
JH-2	床 面	フローテーション	ウルシ属6、キハダ属3、ブドウ属1
	覆 土	フローテーション	キハダ属1、ウルシ属1
JH-4	床 面	フローテーション	ウルシ属10、ニワトコ属4、ブドウ属4、キハダ属2、タナ根1、アサ1、キヤブツギヤ根1、不明種子1
	地床 伊	フローテーション	ブドウ属3、ミツバウツギ属2、タナ根2、不明種子2、クルミ属片134.20g
	地床 伊	ふるい	ミツバウツギ属1
	魚 骨 層	ふるい	キハダ属11、クルミ属片0.90g
JH-8	Spot	ふるい	不明種子1
JH-9	Pit 5	フローテーション	クルミ属片1.00g
JH-11	覆 土 1	フローテーション	クルミ属片2.40g
	覆 土 2	フローテーション	クルミ属片13.00g
	Spot	ふるい	クルミ属片1.40g
	目+魚骨層	土 壌 水 洗	ヤマゴボウ科2250、ブドウ属746、キハダ属18、コブシ5、アサ1、ウルシ属1、ミツバウツギ科1、クルミ属片9.70g
	覆 土	土 壌 水 洗	コブシ1、ヤマゴボウ科1、クルミ属片111.0g、クリ属片0.90g

遺構名	検出位置	処理方法	種子名等
JH-12	境土1	フローテーション	ウルシ属1, タデ科1
	境土2	フローテーション	キビ1, タデ科1, ウルシ属1
	境土(覆入)	フローテーション	ウルシ属1
	Pit5	フローテーション	タデ科1
JH-14	床面	フローテーション	アカギ属9, ナス科4, ブドウ属2, タデ科2, マタタビ属1, ヤマゴボウ科1, ニワトコ属1, ケシ科1
	魚骨層(S部)	フローテーション	クルミ属片0.80g
	覆土	土壌水洗	不明種子1
JH-15	床面	フローテーション	キハダ属9, ウルシ属1, ブドウ属1, 不明種子1, クルミ属片5.40g

表47 大川遺跡(1989~1994)SH検出植物遺体一覧

遺構名	検出位置	処理方法	種子名等
SH-1	床面	フローテーション	コムギ30, アワ12207, ヒエ4711, キビ319, 不明ミレット600, アヤ2, イネ科4, オヤワリヤ科41, タデ科10, ナス属1, ヨモギ属3, マメ科15, 不明種子2, クルミ属片0.23g
	覆土	フローテーション	コムギ700, アワ1253, ヒエ189, キビ8, 不明ミレット11, シソ属2, オヤワリヤ科1, キハダ属1, ウルシ属1, ブドウ属1, オオノキ属片2, クルミ属片0.10g
SH-2	床面	フローテーション	コムギ19, ソバ7, アワ15, ヒエ77, キビ22, アヤ1, イネ科1, タデ科24, ヨモギ属2, マメ科10, タラノキ属1, キイチブ属3, マタタビ属11, ニワトコ属4, キハダ属1, ウルシ属3, ブドウ属3, 不明種子2, クルミ属片3.73g
	境土	フローテーション	マメ科21, ニワトコ属1, ウルシ属7, オオノキ属1, クルミ属片0.01g
SH-3	覆土	フローテーション	コムギ645, ソバ3305, アワ351, ヒエ5470, キビ17807, モロコシ?1, 不明ミレット3429, オオムギ5, シソ属1, アブラナ科8, マメ科27, イネ科66, オヤワリヤ科10, アカギ科194, ナス属14, ヨモギ属13, マメ科8, バラ科399, ナデシコ科3, タラノキ属63, キイチブ属15, マタタビ属63, ニワトコ属23, キハダ属4, ウルシ属121, ミズキ属28, ブドウ属44, オオノキ属3, クルミ属片1.17g
	SH-4	覆土	フローテーション
SH-5	覆土	フローテーション	コムギ2, オオムギ11, タデ科2, マメ科9, マタタビ属1, ニワトコ属1, キハダ属2, ウルシ属5, ブドウ属2, クルミ属片10.79g
SH-6	床面	フローテーション	コムギ13880・片2907, コムギ19, ソバ19, アワ30, ヒエ2786, キビ600, アヤ6・片7, シソ属5, アズキ片2, 不明ミレット8, オヤワリヤ科5, タデ科5, マメ科3, バラ属1, ヒルガオ属4, タラノキ属1, マタタビ属1, キハダ属2, ウルシ属14, ブドウ属7・片45, 不明種子9, クルミ属片0.01g
	地床伊	フローテーション	コムギ19・片9, ヒエ11
	Pit	フローテーション	コムギ1102・片246, コムギ4, ソバ6, アワ4, ヒエ426, キビ116, シソ属2, アブラナ科1, 不明ミレット26, オヤワリヤ科1, マメ科1, マタタビ属2, ウルシ属片1, ブドウ属1・片8, 不明種子2, クルミ属片0.78g
	覆土	フローテーション	コムギ162776・片9230, オオムギ10, コムギ362, ソバ295, アワ2085, ヒエ5894, キビ71575, アヤ168・片22, シソ属168, アズキ87, オヤワリヤ科963, タデ科141, ナス属3, マメ科69, バラ属2, キイチブ属1, ヒルガオ属72, マタタビ属41, ニワトコ属6, キハダ属30, ウルシ属81, ミズキ属28・片2, オオノキ属2・片2, ブドウ属189・片8, ヤマゴボウ科1, イネ科8, キタ科7, アカギ科53, 不明種子14, クリ属片42.50g, クルミ属6・片170.30g
SH-7	床面	フローテーション	コムギ2・片1, アワ3, ヒエ9, キビ11, 不明ミレット1, マメ科1, ウルシ属片1, ブドウ属1・片2, クルミ属片0.80g
	地床伊	フローテーション	コムギ28・片27, ヒエ1, キビ4
	Pit	フローテーション	コムギ2, ソバ2, アワ1, ヒエ62, キビ7, クルミ属片0.34g
SH-8	覆土	フローテーション	コムギ4・片1, アワ1, ヒエ15, キビ16, ブドウ属片2
	床面	フローテーション	コムギ184・片43, ソバ427, アワ30, ヒエ205, キビ2794, アズキ2, 不明ミレット60, エノコログサ属1, タデ科2, マメ科2, バラ属2, ヒルガオ属1, マタタビ属2, ウルシ属6, ブドウ属7・片10, 不明種子3, クルミ属片3.15g
SH-8	Pit	フローテーション	コムギ7, オオムギ1, ヒエ6, キビ6, 不明ミレット1, 不明種子1, ブドウ属片1, クルミ属片0.37g

遺構名	検出位置	処理方法	検出物	備考
SH-8	溝	フローテーション	ヒエ4、キビ2、ウツシ属1、ブドウ属片8、カラムシ属片0.07g	
	層土	フローテーション	コメ2865・片76、オオムギ2、コムギ26、ソバ113、アワ116、ヒエ4581、キビ1865、アサギ、シソ属12、アズキ5・片8、アブラナ科4、カヤフリダ科5、タデ属41、ナス属3、マメ科156・片18、キイチブ属1、ヒルゴキ属6、タラノキ属1、マタタビ属5、ニワトコ属4、キハダ属21、ウツシ属154、ミズキ属17・片7、ホオノキ属1・片3、ブドウ属242・片74、不明種子1、クリ属片0.23g、ブナ科片3.50g、カラムシ属片63.20g	
SH-9	床面	フローテーション	コメ1、キビ1、タデ属4、キハダ属1、ウツシ属1・片3、ブドウ属1・片21、不明種子1、カラムシ属片1.71g	
	カマド(礎土)	フローテーション	キビ1、ウツシ属1、ブドウ属1・片2	
	周溝	フローテーション	マメ科1、ブドウ属4・片1、不明種子3、カラムシ属片0.80g	
	地床炉	フローテーション	カラムシ属片0.04g	
	溝	フローテーション	コメ321・片138、ソバ161、アワ6、ヒエ211、キビ4、マメ科1、クリ属片0.62g カラムシ属片0.64g	
Pit	フローテーション	コメ1、キビ2、ミズキ属1、ブドウ属片1、不明種子3		
SH-11	床面	フローテーション	コメ281・片107、ソバ408、アワ60、ヒエ371、キビ1865、アサギ1、アズキ1・片1、不明ミレット12、タデ属2、マタタビ属2、ウツシ属7、ブドウ属2・片24、不明種子1、カラムシ属片1.96g	
	地床炉	フローテーション	コメ100・片22、ソバ146、アワ12、ヒエ43、キビ348、不明ミレット26、カラムシ属片0.15g	
	Pit	フローテーション	コメ6・片1、ソバ23、アワ2、ヒエ15、キビ102、不明ミレット4、ウツシ属1、ブドウ属片7、カラムシ属片0.90g	
層土	フローテーション	キビ1		
SH-13	床面	フローテーション	コメ4595・片144、オオムギ1、ソバ223、アワ213、ヒエ1324、キビ219、シソ属1、不明ミレット6、マメ科片2、ホオノキ属片2、ブドウ属片8、カラムシ属片1.68g	
	地床炉	フローテーション	コメ492・片167、ソバ9、アワ33、ヒエ198、キビ364、不明ミレット28、ミズキ属1、ブドウ属1	
	Pit	フローテーション	コメ69・片7、ソバ49、アワ8、ヒエ369、キビ51、ブドウ属1、カラムシ属片0.17g	
層土	フローテーション	コメ5855・片2973、ソバ2690・片3189、アワ253、ヒエ8437、キビ1506、アサギ2・片1、シソ属1、アズキ1、エノコログサ属4、カヤフリダ科2、タデ属10、マメ科2、マタタビ属2、キハダ属2、ウツシ属8・片1、ブドウ属3・片14、不明種子1、カラムシ属片8.50g		
SH-14	周溝	フローテーション	コメ3、ヒエ3、キビ1、タデ属9、キハダ属4、ウツシ属2・片1、ミズキ属3、ブドウ属16・片18、カラムシ属片40.90g	
SH-15	床面	土壌水洗	ブドウ属4、ウツシ属1、不明種子2	
	礎土=1	フローテーション	アワ5、ヒエ1、キビ15、マタタビ属1、キハダ属1	
SH-16	床面	フローテーション	マタタビ属1	
	Pit	フローテーション	コメ4、ソバ5、アワ4、ヒエ20、キビ3、マメ科2、マタタビ属1、キハダ属1、ブドウ属6、不明種子2	
SH-17	貼床	フローテーション	アカヤ属1、ブドウ属1、クリ属片0.40g、カラムシ属片61.80g	
	カマド	フローテーション	コメ3、アワ387、ヒエ6、キビ1298、イネ科8、タデ属15、アカヤ属2、ナス属2、タラノキ属1、マタタビ属8、ニワトコ属1、キハダ属10、ウツシ属12、ミズキ属13、ブドウ属24、不明種子14、クリ属片0.1g、カラムシ属片37.80g	
	周溝	フローテーション	コメ1、ヒエ7、キビ2、ウツシ属1、ミズキ属1、カラムシ属片3.50g	
	Pit	フローテーション	イネ科2、アカヤ属1、ウツシ属1	
SH-18	床面	フローテーション	イネ科2、タデ属5、アカヤ属2、マタタビ属1、ヤマゴボウ科9、ブドウ属1	
SH-19	床面	フローテーション	不明種子1、クリ属片0.10g、カラムシ属片33.00g	
	地床炉	フローテーション	クリ属片0.70g、カラムシ属片0.20g	
	Pit	フローテーション	カラムシ属片2.00g	
	カマド	フローテーション	タデ属3、アカヤ属5、マタタビ属8、ウツシ属1、ブドウ属1、カラムシ属片1.70g	
	カマド(礎土)	フローテーション	タデ属1、アカヤ属3、カラムシ属片0.60g	
	周溝	フローテーション	タデ属1、アカヤ属3、ヤマゴボウ科5、マタタビ属6、ウツシ属1、ブドウ属10、カラムシ属片18.60g	
灰化土(礎土)	フローテーション	イネ科1、タデ属9、アカヤ属2、シバコウ科5、マタタビ属2、ケシ科1、ヤマゴボウ科1、ブドウ属5、カラムシ属片6.10g		

通 関 名	積出位置	処理方法	積 子 名 等
SH-20	床 面	フローテーション	イネ屑1, タケ屑1, ミズキ屑1, 不明種子1, タルと紙片29.40g
	カ マ ド	フローテーション	アワ6, ヒス3, キビ7, タケ屑1, アカギ6688, キハダ屑3, ウルシ屑1, ヤマゴボウ屑22, ブドウ屑2, タルと紙片5.60g
SH-21	カ マ ド	フローテーション	イネ屑1, タケ屑5
SH-22	地 床 材	フローテーション	イネ屑1, タケ屑1, ウルシ屑1, 不明種子5
	P i i	フローテーション	アワ1, ヒス79, キビ23, イネ屑6・片2, カヤフリダギ屑3, タケ屑7, アカギ屑4, ウルシ屑2, ケン屑1, ヤマゴボウ屑1
SH-23	床 面	フローテーション	カヤフリダギ屑1, タケ屑10, アカギ屑7, テラノキ屑1, マタタビ屑7, ニワトコ屑4, キハダ屑2, ヤマゴボウ屑1・片1
	地 床 材	フローテーション	タケ屑1, ウルシ屑1
	地 床 材	フローテーション	キハダ屑1, ブドウ屑1
	カ マ ド	フローテーション	アカギ屑3, ニワトコ屑2, ウルシ屑8, キハダ屑1, ミズキ屑1, ブドウ屑1, タルと紙片0.80g
	P i i	フローテーション	ヤマゴボウ屑1
SH-24	カ マ ド	フローテーション	アカギ屑5, ヒメギ屑8, マタタビ屑1, タルと紙片5.90g
SH-25	P i i	フローテーション	ブドウ屑5
SH-26	床面積化物	ふるい	ブナ屑1
SH-27	カ マ ド	フローテーション	アヤ1, アカギ屑7, マメ屑1, キハダ屑1, ケン屑1, ヤマゴボウ屑1
SH-27	地 床 材	フローテーション	ウルシ屑6
SH-31	カ マ ド	フローテーション	アカギ屑2, キハダ屑2, ケン屑6
SH-32	地 床 材	フローテーション	タルと紙片0.50g
	カ マ ド	フローテーション	アカギ屑1, ニワトコ屑1, ヤマゴボウ屑3
SH-33	P i i	フローテーション	ニワトコ屑1, タルと紙片0.10g
	カ マ ド	フローテーション	タルと紙片2.70g
	覆 土	フローテーション	アヤ1, ホオノキ屑2, ヤマゴボウ屑2, タルと紙片0.20g
SH-34	地 床 材	フローテーション	タルと紙片0.30g
	地 床 材	フローテーション	タケ屑3, アカギ屑1, ニワトコ屑1, ヤマゴボウ屑1
	カ マ ド	フローテーション	イネ屑2, タケ屑4, アカギ屑788, ニワトコ屑2, ヤマゴボウ屑2, 不明種子2, ブナ屑1, タルと紙片3.40g
SH-35	地 床 材	フローテーション	アカギ屑8, タルと紙片2.30g
	洗 土	フローテーション	タケ屑9, アカギ屑56, バク屑1, ニワトコ屑25, キハダ屑5, ヤマゴボウ屑2, ブドウ屑1, ケン屑0.10g, タルと紙片0.20g
	床面積化物	フローテーション	カヤフリダギ屑1, タケ屑11, アカギ屑31, ニワトコ屑23, ミズキ屑1, ヤマゴボウ屑2, ブドウ屑1, タルと紙片0.30g
	カ マ ド	フローテーション	アヤ屑8, カヤフリダギ屑1, タケ屑23, アカギ屑614, ニワトコ屑44, ウルシ屑1, フェウチ屑1, ブドウ屑1, ヤマゴボウ屑168, 不明種子1, タルと紙片0.90g
	覆 土	フローテーション	アカギ屑1, ニワトコ屑3, タルと紙片0.10g
SH-36	床 面	フローテーション	イネ屑1, マタタビ屑1, キハダ屑1・片1, ヤマゴボウ屑3, ホオノキ屑1, ブドウ屑3, タルと紙片27.80g
	カ マ ド	フローテーション	キビ1, アカギ屑10, ブドウ屑2, タルと紙片2.90g
SH-37	床 面	フローテーション	コムギ屑1, ヒス1, キビ, アヤ2, イネ屑1, タケ屑13, アカギ屑14, ミバウチ屑5, テラノキ屑3, ウルシ屑9, キハダ屑15, ミズキ屑1・片1, ヤマゴボウ屑3, ブドウ屑7, 不明種子1, ケン屑0.40g, タルと紙片138.60g
	カ マ ド	フローテーション	タルと紙片4.00g
	P i i	フローテーション	ヤマゴボウ屑1, タルと紙片0.10g
	覆 土	ふるい	アカギ屑1, キハダ屑3, ヤマゴボウ屑19, ブドウ屑3
SH-38	カ マ ド	フローテーション	アカギ屑43, ニワトコ屑7, ヤマゴボウ屑5, タルと紙片0.20g
SH-41	地 床 材	フローテーション	アカギ屑, タルと紙片0.20g
	カ マ ド	フローテーション	アヤ屑8, ヤマゴボウ屑1, タルと紙片1.30g
SH-42	土留(4)の砂	フローテーション	アヤ屑1
	カ マ ド	フローテーション	コムギ, アヤ1, タケ屑5, アカギ屑105, ミズキ屑1・片2, ホオノキ屑1, ヤマゴボウ屑1, ブドウ屑17, タルと紙片0.80g

通称名	抽出位置	処理方法	種子名等
SH-43	焼土	フローテーション	アカギ属15, ニワトコ属44
SH-44	カマド	フローテーション	アカギ属2, マタタビ属1, ニワトコ属219, キハダ属1, ヤマゴボウ科8, ブドウ属1, クルミ属内0.20g
SH-49	船塚	フローテーション	アカギ属28, ナデ属2, ミツバウツギ属2, クルミ属片1.50g
	カマド	フローテーション	コメ1, アカギ属319, ブドウ属1, クルミ属片10.30g
SH-50	船塚 (原化地の埋砂)	フローテーション	タケ属1, アカギ属1, マタタビ3, ニワトコ属53, キハダ属1, クルミ属片0.30g
	焼土 (原化地の埋砂)	フローテーション	イネ科7, ナデ属24, キイチゴ属1, タラノキ属2, ニワトコ属1, キハダ属7, ウルシ属1, ブドウ属1, クリ属1
	カマド	フローテーション	クルミ属片2.10g
	第2貝層	フローテーション	ニワトコ属10, キハダ属1, ミズキ属片1, ホモノキ属1, ヤマゴボウ科11, ブドウ属1・片1, クルミ属1・片0.20g
	第1貝層	フローテーション	アヤギ46・片5, アカギ属208, ニワトコ属76, キハダ属138・片24, ホモノキ属14・片70, ヤマゴボウ科2141・片25, ブドウ属375・片432, クルミ属片0.20g
	埋土	ふるい	アヤギ7, ニワトコ属78, キハダ属153, ミズキ属1, ホモノキ属片67, ヤマゴボウ科1335, ブドウ属543, クルミ属片0.10g
SH-51	カマド	フローテーション	アヤギ1, カヤツリグサ科1, タケ属1, マタタビ属4, ブドウ属13・片3, 不明種子1, クルミ属片0.80g
	焼土	フローテーション	クルミ属片0.80g
SH-52	カマド	フローテーション	ブドウ属2, クルミ属1点・片5.00g
	第1貝層	ふるい	アヤギ3, キハダ属1, ブドウ属5・片8, ヤマゴボウ科27
SH-53	船塚	フローテーション	クルミ属片5.50g
	カマド	フローテーション	アヤギ2, ウリ属2, アカギ属1, ヤマゴボウ科2, クルミ属片4.80g
SH-54	第1貝層	ふるい	アヤギ3, ニワトコ属2, ヤマゴボウ科47, ブドウ属片3, クルミ属内0.50g
	カマド	フローテーション	ブドウ属1, プナ科1点, クルミ属片1.20g
SH-55	カマド	フローテーション	クルミ属片0.40g
SH-56	カマド	フローテーション	ミツバウツギ属1, ブドウ属2, クルミ属0.30g
	第1貝層	ふるい	ブドウ属1・片1, クルミ属片1.50g
SH-57	カマド	フローテーション	アヤギ1, ブドウ属1, クルミ属片2.50g
	埋遣	フローテーション	クルミ属片0.10g
	貝層	フローテーション	ヤマゴボウ科1, クルミ属片0.50g
SH-58	地塚跡	フローテーション	クルミ属片1.40g
	カマド	フローテーション	タラノキ属1, キハダ属1, ブドウ属1, クルミ属1・片3.40g
SH-59	船塚	フローテーション	ブドウ属2, クルミ属片3.00g
SH-59	カマド	フローテーション	マタタビ属1, ブドウ属40, クルミ属片1.80g
	埋遣	フローテーション	アカギ属94, タラノキ属1, ニワトコ属19, ウルシ属1, ヤマゴボウ科1, ブドウ属4, クルミ属片3.30g
SH-60	地塚跡	フローテーション	クルミ属片0.50g
	カマド	フローテーション	ミツバウツギ属1, ニワトコ属1, クルミ属片7.70g
SH-61	船塚	フローテーション	クルミ属片1.60g
	原化地の埋砂	フローテーション	クルミ属片0.40g
SH-62	地塚跡 原化地の埋砂	フローテーション	クルミ属片0.20g
SH-63	船塚	フローテーション	アカギ属240, ブドウ属1
	船塚	フローテーション	ミツバウツギ属1, クルミ属片5.00g
SH-64	カマド	フローテーション	バウ属2, ヤマゴボウ科1, ブドウ属1, クルミ属2.50g
SH-64	船塚	フローテーション	クルミ属片0.20g
SH-65	第1貝層	フローテーション	アヤギ1, ヤマゴボウ科16, クルミ属片0.30g
SH-65	埋土	ふるい	アヤギ1, ヤマゴボウ科35, クルミ属片0.50g
	カマド	フローテーション	不明種子4, クルミ属片1.40g
SH-69	焼土	フローテーション	アカギ属2, クリ属片0.20g, クルミ属片0.40g
SH-71	船塚	フローテーション	アワ1, カヤツリグサ科1, アカギ属3, クルミ属片3.80g
	カマド	フローテーション	アワ1, ホモギ属4, アカギ属2, クルミ属片0.40g



1 程付コメ



2 コメ



3 アサ



4a オオムギ背面



4b 側面



4c 腹面



5a コムギ背面



5b 側面



5c 腹面





6 アワ



7 ヒエ



8 キビ



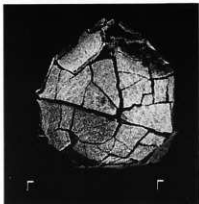
9 果皮 ソバ



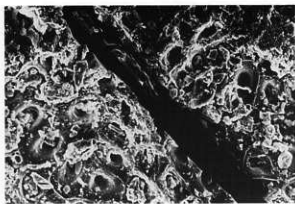
10 ソバ



11 ソバ



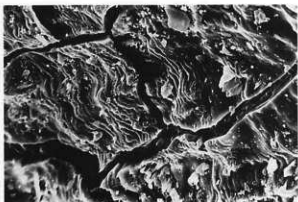
12a アブラナ科



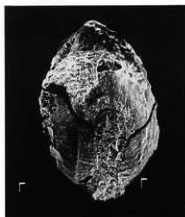
12b 12aの拡大



13a シソ属



13b 13aの拡大



14 エノログサ属



15 カヤツリグサ科



16a アズキ

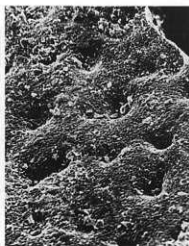
16b 側面



16c 16a子葉の初生葉



17a ダイズ



17b 17aの拡大



18 マメ科



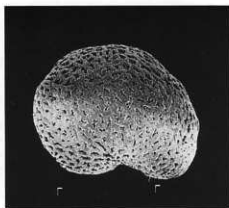
19a マメ科



19b 19aの拡大



20 タデ属



21 ナス科



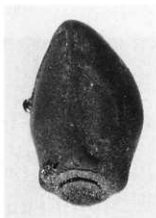
22 バラ属



23 ガンコウラン属



24 キイチゴ属



ヒルガオ属



26 タラノキ属



27 マタタビ属



28 ニワトコ属



29 ウルシ属



30 冬芽



31 果肉付ブドウ属



32a ブドウ科腹面



32b 背面



33a ブドウ科腹面



33b 背面



34 果肉付キハダ属



35 キハダ属種子



36 不明

写真121 大川遺跡検出の植物遺体



37a クリ子葉 表面



37b 裏面



38a ブナ科子葉表面



38b 裏面



39a クルミ属核片 表面



39b 裏面



40 不明

写真122 大川遺跡検出の植物遺体



41a ミズキ属



41b



41c



42a コブシ表面



42b 裏面



43a ホオノキ表面



43b 裏面



## 第4節 大川遺跡遺構伴出炭化木材の樹種同定

### a 大川遺跡JH-10伴出炭化木材樹種識別に関する研究

北海道大学農学部（斉藤智子・大谷 諒）

大川遺跡の縄文期の焼失家屋跡JH-10から出土した炭化材30点の樹種識別を行なった。これら炭化材の樹種識別を行なうことによって、当時の人々が木材を利用する際に各部位にどのような樹種を選択していたのか、また遺跡周辺が当時どのような樹種によって構成されていたのかについての推測が可能となる。北海道において、今後このような調査が盛んに行なわれ、過去の植生がより明らかにされることを期待する。

#### 1. 試料

大川遺跡JH-10からの出土炭化材30点である。

#### 2. 顕微鏡用試料作製および識別方法

##### 1) 走査電子顕微鏡用試料作製方法

提供された炭化材から損傷を与えないように1~2cm角のブロックを切り取り、実験室内に放置し乾燥させた。それらを安全カミソリで割断し、基本3断面（木口面・柾目面・板目面）の観察面を得た。これらの試料を顕微鏡用試料台に導電性塗料を用いて接着、固定後、再び実験室内で乾燥させた。高真空蒸着装置により観察面に炭素一金の二重蒸着を行ない検鏡用試料とした。

##### 2) 識別方法

走査電子顕微鏡（JSM-35CFⅡ）を用いて試料の基本3断面の観察・写真撮影を行なった。その解剖学的性質から属名を決定した。

今回識別した試料はすべて広葉樹であったため、広葉樹に関する主な観察項目を以下に記す。

観察項目：道管（木口面における配列、らせん肥厚の有無、せん孔の形状、道管相互壁孔の形状と配列、チロースやゴム様物質の有無と形状）、仮道管（有無）、軸方向柔細胞（配列の型）、放射組織（構成細胞（同性、異性）、細胞幅と細胞高、分布、道管放射組織間壁孔の形状）、木部繊維（隔壁の有無、らせん肥厚の有無、壁厚、壁孔の分布）

#### 3. 識別結果および考察

各試料の識別結果とその根拠となる解剖学的特徴を以下に記す。さらに走査電子顕微鏡写真を

一括後掲する。

1) トネリコ属 *Fraxinus* (モクセイ科 OLEACEAE)

試料番号: 1 (写真1~3)	試料番号: 2 (写真4~6)
試料番号: 4 (写真10~12)	試料番号: 5 (写真13~15)
試料番号: 6 (写真16~18)	試料番号: 10 (写真19~21)
試料番号: 11 (写真22~24)	試料番号: 17 (写真25~28)
試料番号: 22 (写真33~36)	試料番号: 23 (写真37~39)
試料番号: 26 (写真40~42)	試料番号: 28 (写真43~45)
試料番号: 39 (写真46~48)	試料番号: 54 (写真49~51)
試料番号: 56 (写真52~54)	試料番号: 57 (写真55~57)
試料番号: 59 (写真58~60)	試料番号: 60 (写真61~63)
試料番号: 64 (写真64~67)	試料番号: 68 (写真68~70)
試料番号: 92 (写真74~76)	試料番号: 122 (写真83~85)
試料番号: 125 (写真89~91)	試料番号: 130 (写真92~95)

構成要素は道管要素、木部繊維、軸方向柔細胞、放射柔細胞の4種類である。環孔材であり、孔圏道管は2~4列に並ぶ。孔圏外における道管の径は小さく、年輪境界に向かうにつれてさらに小さくなる。孔圏外道管は単独のもの2・3個半径方向に複合したものがあり、それらは散在状に分布する。軸方向柔細胞は散在・随伴散在・周囲・ターミナル状に分布する。放射組織は同性で1~3細胞幅であるが、2~3細胞幅で10細胞高前後のものが多い。晩材の板目面では、放射組織はほぼ均等に分布する。道管せん孔は単せん孔である。道管相互壁孔は交互壁孔であり、結合孔口が多い。道管内こうにはチロースが存在する。道管壁にはらせん肥厚は存在しない。孔圏外道管の壁は厚い。

ヤチダモカアオダモであると推定される。

なお、試料番号125についてはトネリコ属であると同定することはできなかったが、観察結果から推定すると、おそらくトネリコ属であろうと思われる。

2) サクラ属 *Prunus* (バラ科 ROSACEAE)

試料番号: 3 (写真7~9)

構成要素は道管要素、木部繊維、軸方向柔細胞、放射柔細胞の4種類である。散孔材であり、道管はほぼ均等に分布する。個々の道管は単独あるいは放射方向ないし斜方向に連なる。道管の径はほぼ一定であるが、年輪外側の境界付近ではやや小さくなる傾向がある。軸方向柔細胞は散在・周囲状に分布する。放射組織は同性ないし異性で、平伏細胞と方形細胞で構成されている。

1～5細胞幅であるが、通常1～3細胞幅で40細胞高にもなる。道管せん孔は単せん孔である。道管壁にはらせん肥厚が存在する。

北海道に自生するサクラ属の樹種として、エゾヤマザクラ、ミヤマザクラ、シウリザクラなど数樹種の可能性があるが、樹種を特定できない。

### 3) キハダ属 *Pnellodendron* (ミカン科 RUTACEAE)

試料番号: 20 (写真29～32)

構成要素は道管要素、道管状仮道管、木部繊維、軸方向柔細胞、放射柔細胞である。環孔材で孔圏外の道管は波状に分布する。小径の道管と道管状仮道管の細胞壁の内側にらせん肥厚がある。また、道管内こうにはゴム様物質が観察される。軸方向柔細胞は周囲・帯状に分布する。放射組織は平伏細胞からなる1～5細胞幅の同性放射組織である。道管せん孔は単せん孔である。

キハダかヒロハノキハダであると推定される。

### 4) ハノノキ属 *Alnus* (カバノキ科 BETULACEAE)

試料番号: 79 (写真71～73)

構成要素は道管要素、木部繊維、軸方向柔細胞、放射柔細胞の4種類である。散孔材で道管はほぼ平等に分布するが、2～数個が半径方向に連なって放射複合管孔をなしている場合が多い。散孔材のため、肉眼的に年輪の境界はやや不明確である。軸方向柔細胞は短接線状に配列する。放射組織は平伏細胞からなる同性放射組織であるが、ときに上下の端の列に方形細胞が現れることもある。また、単列で1～30細胞高の放射組織が多数見られるが、集合放射組織も観察される。道管せん孔は階段せん孔であり、barの数は10～30で、せん孔板の傾斜は急である。

ミヤマハノノキ、ケヤマハノノキ、ヤマハノノキ、ハノノキなどと推定されるが、樹種を特定できない。

### 5) オニグルミ *Juglans ailanthifolia* carr. (クルミ科 JUGLANDACEAE)

試料番号: 99 (写真77～79) 試料番号: 100 (写真80～82)

試料番号: 124 (写真86～88)

構成要素は道管要素、木部繊維、軸方向柔細胞、放射柔細胞である。散孔材で径の大きな道管が単独、あるいは2～4個放射方向に複合して分布する。軸方向柔細胞は短接線・周囲・散在状に配列する。放射組織は上下縁辺に方形細胞が並ぶこともあるが、ほとんどすべて平伏細胞からなる同性放射組織である。放射組織の幅は1～4細胞列であるが、通常は1～2細胞列で、高さは2～20細胞高に達する。道管せん孔は単せん孔で、道管内こうにはチロースが存在する。

北海道に自生し、クルミ属 (*Juglans*) に属する樹種はオニグルミのみであるため、樹種名を記載した。

今回樹種同定を行なった30点の試料の内訳は、トネリコ属が24点、サクラ属、キハダ属、ハンノキ属が各1点、オニグルミが3点であった。北海道に分布する樹木の中には、これらの属に分類される樹種があり、またそれらの樹種の分布頻度は高い。このことから、当時の人々は家屋などの建物を建てる際に周辺の樹木を伐採して用いていた可能性が高い。また、試料は火災によって生じた建物部材の炭化材である。トネリコ属などの今回識別した属はすべて高木類に属するものであり、時代は縄縄文期であるが、人間が生活するための建物の部材として用いるには樹高、樹幹径がある程度の大きさを持っている必要があったのではないかと推測される。また、トネリコ属（北海道では主にヤチダモ、アオダモ）を多く用いていることは興味深い結果である。特にヤチダモは樹幹が通直で枝下が長く、木理も通直であること、材がやや重硬であることなどから、建物の部材に適しているものと推測される。当時からこのような材を選択し、強度を必要とする部分に用いたのではないかと推測される。また、ヤチダモは湿潤な土地を好むことで知られるが、遺跡の立地条件との関連についての調査が望まれる。今回観察されたトネリコ属以外の属あるいは樹種のうち、サクラ属の樹種は比重が高く、やや強い材で、材の保存性も高い方に含まれることなどから、支持的な役割を持つ部分に用いられていたことも考えられるが、他のキハダ属、ハンノキ属、オニグルミの材は耐久性が低いために、トネリコ属と比べて、あまり強度を必要としない部分に用いていたものと推測される。

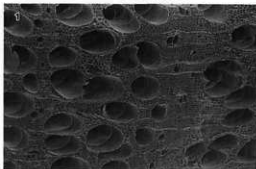
一方、今回識別に供した炭化材は、一般的な炭化材の特徴を有していた。その特徴とは材の体積の減少、材を構成している細胞の収縮・変形、細胞壁の薄壁化などである（Prior & Alvin 1983, 菅谷 1991）。しかし、今回の観察に用いた試料については、樹種固有の解剖学的特徴は保持されており、ほとんどの試料で樹種識別を支援なく行なうことが可能であった。また、材の微細構造上の特徴については、変形などにより識別が困難である場合もあった。

今回得られた結果と他方面の調査から得られた結果とを合わせることにより、さらに考察を深めることができるものと思われる。

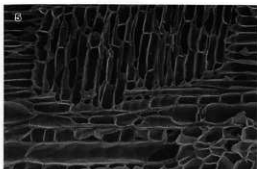
## 文 献

- Prior, J. & K. L. Alvin (1983) : Structural changes and charring woods of *Dichrostachys* and *Salix* from southern Africa. IAWA Bull. n. s. 4 (4), 197-206
- 菅谷恵美子 (1991) : 炭化材のSEM観察 北大農林産学科学卒業論文

写真123 大川遺跡JH-10伴出炭化材の樹種1



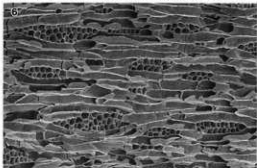
試料番号1 (トネリコ属, 木口面, 29倍, 1年輪を含む。環孔材)



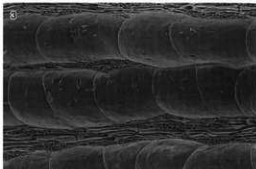
試料番号2 (トネリコ属, 径目面, 185倍, 同放射組織, 孔圏外道管)



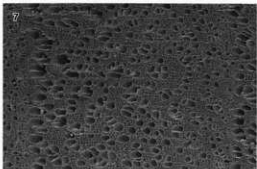
試料番号1 (トネリコ属, 径目面, 58倍, 年輪境界を含む。同放射組織)



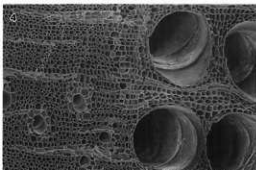
試料番号2 (トネリコ属, 径目面, 115倍, 放射組織)



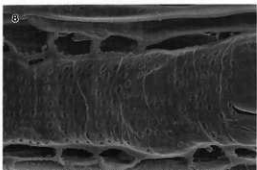
試料番号1 (トネリコ属, 径目面, 75倍, 孔圏部)



試料番号3 (サクラ属, 木口面, 35倍, 散孔材, 1年輪を含む)

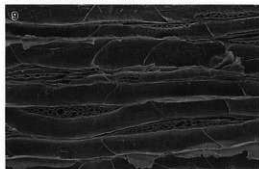


試料番号2 (トネリコ属, 木口面, 78倍, 年輪境界を含む。環孔材)

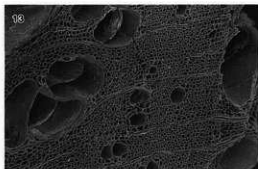


試料番号3 (サクラ属, 径目面, 750倍, 道管放射組織間吸孔)

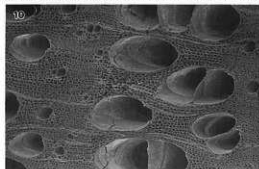
写真124 大川遺跡JH-10伴出炭化材の樹種Ⅱ



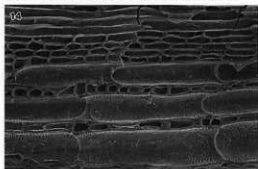
試料番号3 (サクラ属, 板目面, 115倍, らせん肥厚, 単せん孔)



試料番号5 (トネリコ属, 木口面, 75倍, 年輪境界を含む, 環孔材)



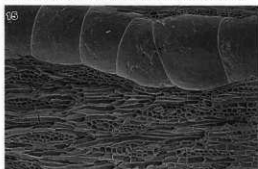
試料番号4 (トネリコ属, 木口面, 48倍, 年輪境界を含む, 環孔材)



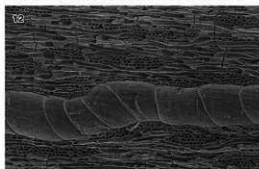
試料番号5 (トネリコ属, 径目面, 185倍, 厚壁の孔圍外道管)



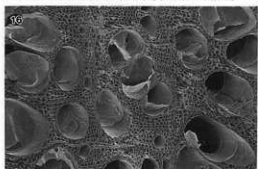
試料番号4 (トネリコ属, 径目面, 73倍, 同性放射組織)



試料番号5 (トネリコ属, 板目面, 83倍, 均等に分布した放射組織)

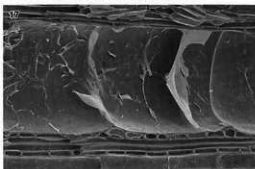


試料番号4 (トネリコ属, 板目面, 73倍, 単せん孔)

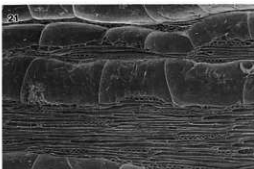


試料番号6 (トネリコ属, 木口面, 50倍, 1年輪を含む, 環孔材)

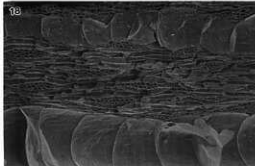
写真125 大川遺跡JH-10伴出炭化材の樹種Ⅲ



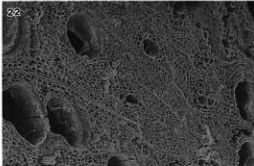
試料番号6 (トネリコ属, 柾目面, 150倍, 厚壁チロース)



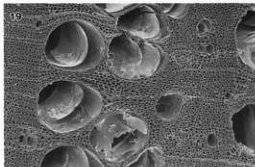
試料番号10 (トネリコ属, 柾目面, 83倍, 単せん孔を持つ道管)



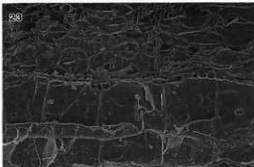
試料番号6 (トネリコ属, 柾目面, 70倍, 孔部)



試料番号11 (トネリコ属, 水口面, 70倍, 年輪境界を含む, 環孔材)



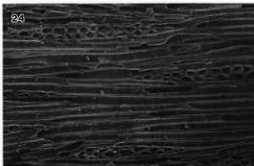
試料番号10 (トネリコ属, 水口面, 55倍, 1年輪を含む, 環孔材)



試料番号11 (トネリコ属, 柾目面, 80倍, チロースが認められる)

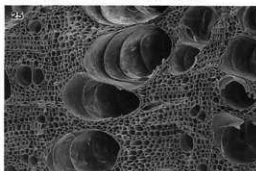


試料番号10 (トネリコ属, 柾目面, 110倍, 同性放射組織)



試料番号11 (トネリコ属, 柾目面, 223倍, 放射組織)

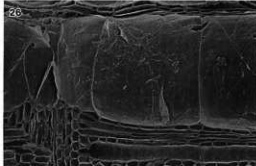
写真126 大川遺跡JH-10伴出炭化材の樹種Ⅳ



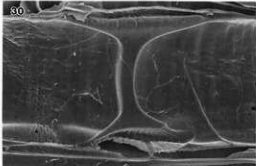
試料番号17 (トネリコ属, 木口面, 55倍, 1年輪を含む, 環孔材)



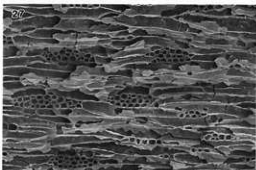
試料番号20 (キハダ属, 木口面, 35倍, 年輪境界を含む, 環孔材)



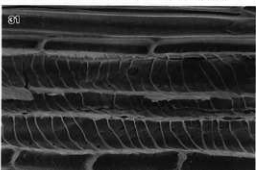
試料番号17 (トネリコ属, 柎目面, 110倍, 同姓放射組織, チロース)



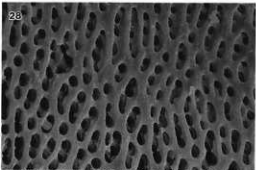
試料番号20 (キハダ属, 柎目面, 325倍, ゴム様物質)



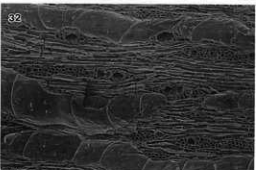
試料番号17 (トネリコ属, 柎目面, 103倍, 1-3・4列の放射組織)



試料番号20 (キハダ属, 柎目面, 550倍, 孔圏外道管, らせん肥厚)



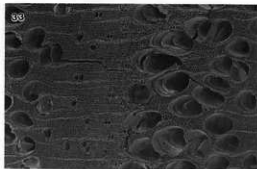
試料番号17 (トネリコ属, 柎目面, 750倍, 道管相互壁孔 (結合孔口))



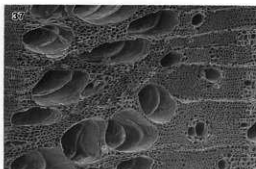
試料番号20 (キハダ属, 柎目面, 68倍, 単せん孔)



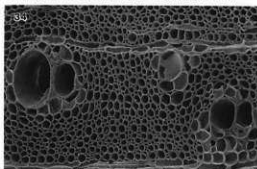
写真127 大川遺跡JH-10伴出炭化材の樹種V



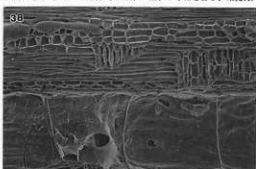
試料番号22 (トネリコ属, 木口面, 27倍, 年輪境界を含む, 環孔材)



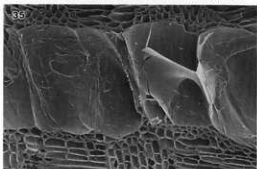
試料番号23 (トネリコ属, 木口面, 55倍, 1年輪を含む, 環孔材)



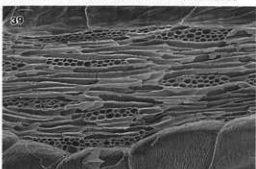
試料番号22 (トネリコ属, 木口面, 145倍, 孔圏外道管, 周圍柔組織)



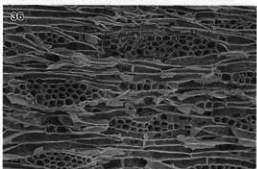
試料番号23 (トネリコ属, 板目面, 100倍, チロース, 同放射組織)



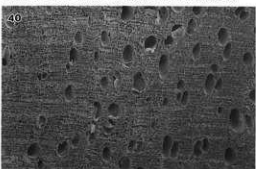
試料番号22 (トネリコ属, 板目面, 125倍, チロース, 同放射組織)



試料番号23 (トネリコ属, 板目面, 123倍, 1~3・4列の放射組織)

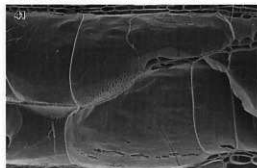


試料番号22 (トネリコ属, 板目面, 120倍, 放射組織)

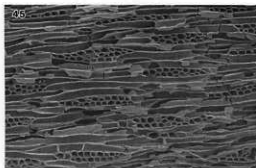


試料番号26 (トネリコ属, 木口面, 24倍, 環孔材)

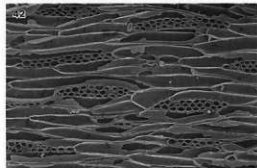
写真128 大川遺跡JH-10伴出炭化材の樹種Ⅵ



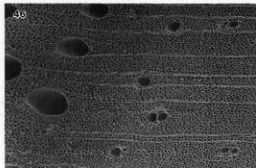
試料番号26 (トネリコ属, 柎目面, 160倍, 単せん孔, チロース)



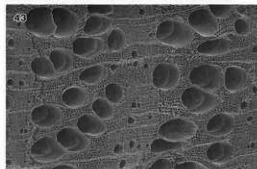
試料番号28 (トネリコ属, 柎目面, 118倍, 均等に分布する放射組織)



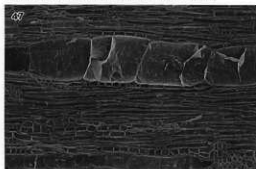
試料番号26 (トネリコ属, 板目面, 123倍, 放射組織)



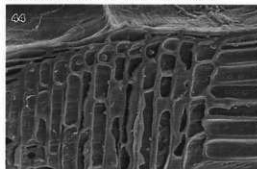
試料番号39 (トネリコ属, 木口面, 43倍, 環孔材)



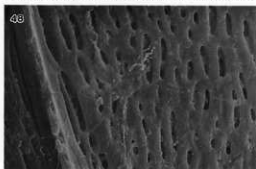
試料番号28 (トネリコ属, 木口面, 38倍, 環孔材)



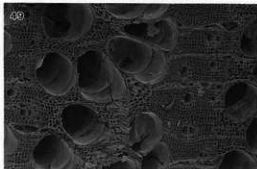
試料番号39 (トネリコ属, 柎目面, 78倍, チロースを有する道管)



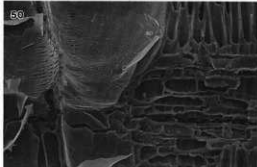
試料番号28 (トネリコ属, 柎目面, 275倍, 同性放射組織)



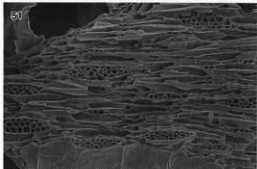
試料番号39 (トネリコ属, 板目面, 875倍, 道管相互壁孔 (結合孔口))



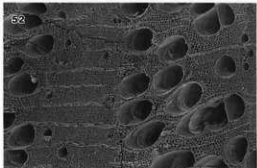
試料番号54 (トネリコ属, 水口面, 40倍, 1年輪を含む, 環孔材)



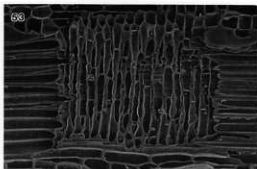
試料番号54 (トネリコ属, 柎目面, 230倍, 同姓放射組織, チロース)



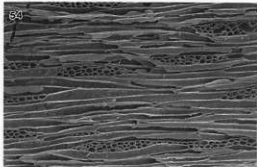
試料番号54 (トネリコ属, 板目面, 925倍, 1-3-4列の放射組織)



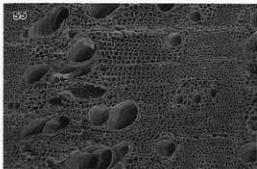
試料番号56 (トネリコ属, 水口面, 33倍, 年輪境界を含む, 環孔材)



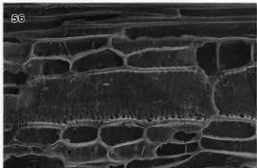
試料番号56 (トネリコ属, 柎目面, 185倍, 同姓放射組織)



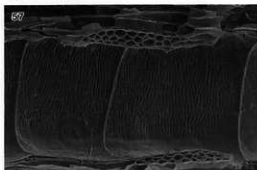
試料番号56 (トネリコ属, 板目面, 110倍, 放射組織)



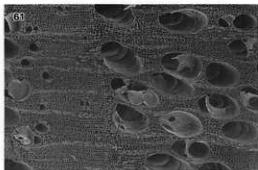
試料番号57 (トネリコ属, 水口面, 55倍, 1年輪を含む, 環孔材)



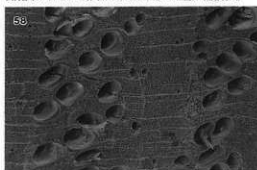
試料番号57 (トネリコ属, 水口面, 55倍, 1年輪を含む, 環孔材)



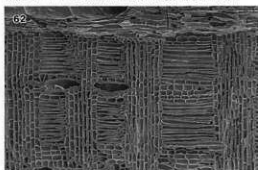
試料番号57 (トネリコ属, 板目面, 183倍, 道管相互壁孔 (結合孔口))



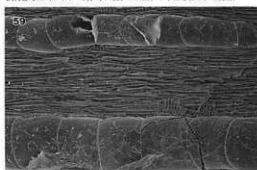
試料番号60 (トネリコ属, 木口面, 33倍, 年輪境界を含む, 環孔材)



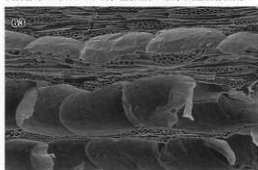
試料番号59 (トネリコ属, 木口面, 27.5倍, 1年輪を含む, 環孔材)



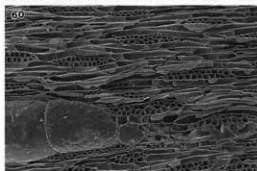
試料番号60 (トネリコ属, 板目面, 65倍, 同性放射組織)



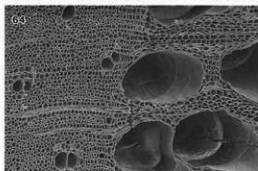
試料番号59 (トネリコ属, 板目面, 55倍, チロースを有する道管)



試料番号60 (トネリコ属, 板目面, 80倍, チロース, 単せん孔)

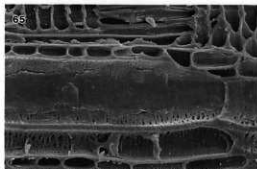


試料番号59 (トネリコ属, 板目面, 105倍, 1-3列の放射組織)

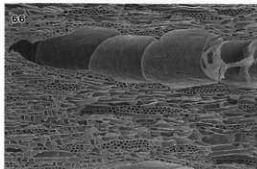


試料番号64 (トネリコ属, 木口面, 78倍, 年輪境界を含む, 環孔材)

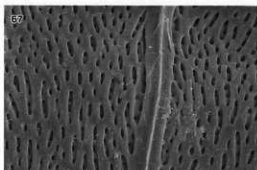
写真131 大川通跡JH-10伴出炭化材の樹種区



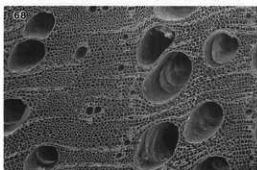
試料番号64 (トネリコ属, 径目面, 300倍, 孔圏外道管, 軸方向木細胞)



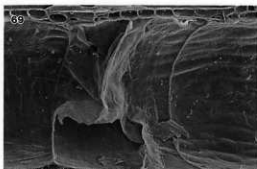
試料番号64 (トネリコ属, 径目面, 70倍, 1~3列の放射組織)



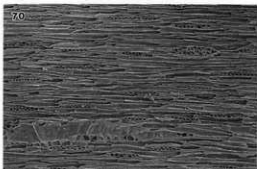
試料番号64 (トネリコ属, 径目面, 500倍, 道管相互壁孔 (結合孔口))



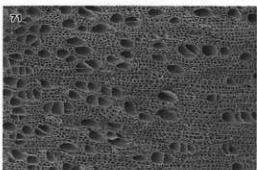
試料番号68 (トネリコ属, 木口面, 45倍, 年輪境界を含む, 環孔材)



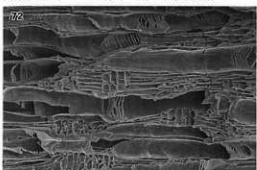
試料番号68 (トネリコ属, 径目面, 163倍, チロース, 単せん孔)



試料番号68 (トネリコ属, 径目面, 73倍, 1~3列の放射組織)

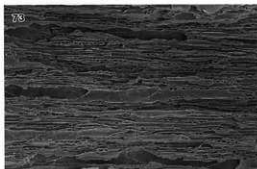


試料番号79 (ハンノキ属, 木口面, 53倍, 散孔材)

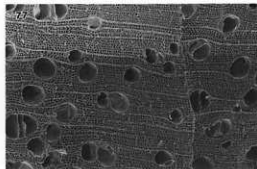


試料番号79 (ハンノキ属, 径目面, 105倍, 階段せん孔板)

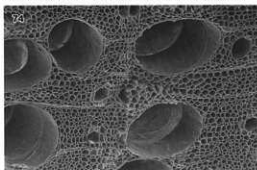
写真132 大川遺跡JH-10伴出炭化材の樹種X



試料番号79 (ハンノキ属, 板目面, 70倍, 単列放射組織)



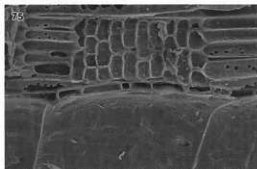
試料番号99 (クルミ属, 木口面, 38倍, 散孔材, 管孔が大きい)



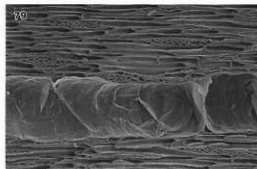
試料番号92 (トネリコ属, 木口面, 70倍, 年輪境界を含む, 環孔材)



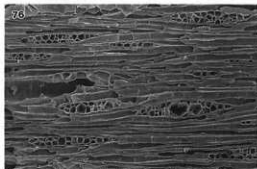
試料番号99 (クルミ属, 板目面, 150倍, チロース, 単せん孔)



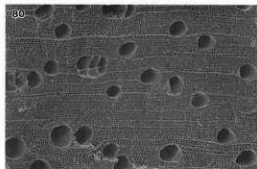
試料番号92 (トネリコ属, 板目面, 308倍, 年輪境界部, 同放射組織)



試料番号99 (クルミ属, 板目面, 123倍, 1~3列の放射組織, チロース)

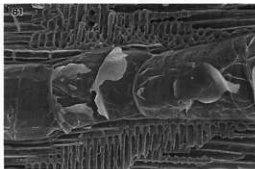


試料番号92 (トネリコ属, 板目面, 105倍, 放射組織)

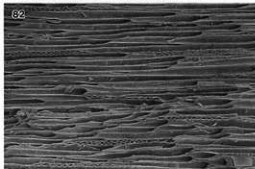


試料番号100 (クルミ属, 木口面, 30倍, 散孔材)

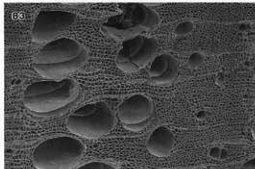
写真133 大川遺跡JH-10伴出炭化材の樹種XI



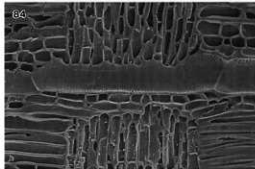
試料番号100 (ケルミ属, 柃目面, 163倍, 同性放射組織, チロース)



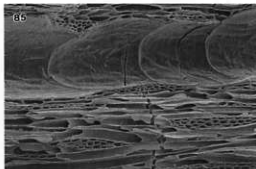
試料番号100 (ケルミ属, 板目面, 123倍, 1~3列の放射組織)



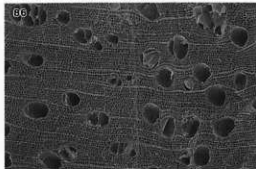
試料番号122 (トネリコ属, 木口面, 53倍, 環孔材, 1年輪を含む)



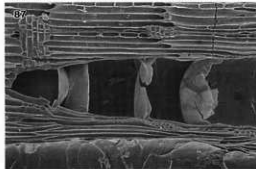
試料番号122 (トネリコ属, 柃目面, 165倍, 同性放射組織, 孔圏外道管)



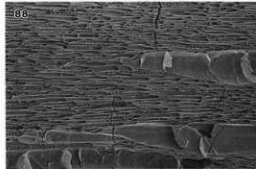
試料番号122 (トネリコ属, 柃目面, 136倍, 1~3列の放射組織)



試料番号124 (ケルミ属, 木口面, 30倍, 散孔材, 年輪境界部)

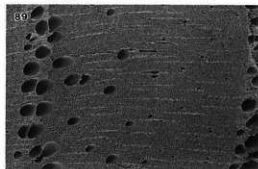


試料番号124 (ケルミ属, 柃目面, 100倍, チロースを有する道管)

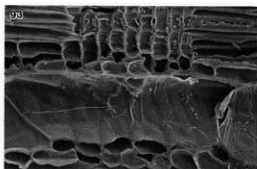


試料番号124 (トネリコ属, 板目面, 73倍, 1~3列の放射組織)

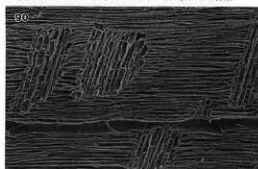
写真134 大川遺跡JH-10伴出炭化材の樹種XII



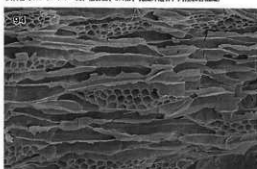
試料番号125 (トネリコ属, 水口面, 30倍, 1年輪を含む, 環孔材)



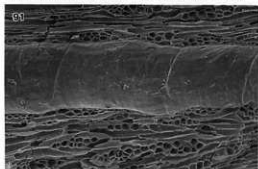
試料番号130 (トネリコ属, 板目面, 270倍, 孔隙外道管, 同放射組織)



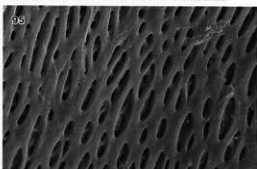
試料番号125 (トネリコ属, 板目面, 113倍, 同放射組織, 単せん孔)



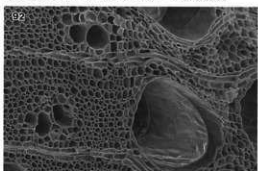
試料番号130 (トネリコ属, 板目面, 165倍, 3~4列の放射組織)



試料番号125 (トネリコ属, 板目面, 140倍, 1~3列の放射組織)



試料番号130 (トネリコ属, 板目面, 825倍, 道管相互壁孔 (結合孔口))



試料番号130 (トネリコ属, 水口面, 120倍, 年輪境界を含む, 環孔材)



## b 大川遺跡SH-6伴出の炭化木材樹種同定に関する研究

北海道大学農学部 (大谷 諱)

大川遺跡の縄文文化期の建物跡SH-6から出土した炭化材35点の樹種識別を行った。これらの材の樹種を同定することによって、当時の人々の木材利用に対する樹種選択の基準や遺跡周辺の植生の一部を推察することが可能であり、興味深い。

本州各地では遺跡の発掘に伴って多種多様な木材が出土され、それらの樹種同定結果の資料の蓄積は膨大なものである。しかし、北海道地区でのそれらの資料は非常に少ない。今後、この種の調査・研究が盛んに行われることを期待する。

以下に、識別結果について報告する。

### 1. 試料および識別方法

#### 1) 試料

大川遺跡SH-6からの出土炭化材35点である。

#### 2) 走査電子顕微鏡試料

提供された炭化材より損傷を与えないように約2cm角のブロックを切りとり、室内に放置し乾燥させた。それらを安全カミソリで割断し、観察面(6mm×6mm)を得た。観察面は基本3断面(木口面・柎目面・板目面)である。これらの試料を検鏡用試料台に導電性接着剤で固定した。高真空蒸着装置により観察面に金蒸着を行い、検鏡に供した。

#### 3) 識別方法

走査電子顕微鏡(JSM-35CFⅡ)を用いて試料の基本3断面の観察を行い、解剖学的性質から属名または種名を決定した。

主な観察項目は次の通りである。

針葉樹材・・・年輪構造(早・晩材の移行、晩材幅)、樹脂道(垂直・水平樹脂道の有無、エビセリウム細胞の壁厚)、仮道管(有縁壁孔の配列、らせん肥厚の有無)、樹脂細胞(有無・分布)、分野壁孔(型と数)、放射組織(放射仮道管の有無、放射柔細胞の末端壁の状態、細胞幅と細胞高)、仮道管壁のいぼ状突起の有無

広葉樹材・・・道管(木口面における配列形式、らせん肥厚の有無、せん孔の形状、道管相互壁孔の形状と配列、チロースの有無と形状)、仮道管(有無)、軸方向柔細胞(配列の型)、放射組織(構成細胞の構成(同性・異性)、細胞幅と細胞高、分布、道管放射組織間壁孔の形状)、

木部繊維（隔壁の有無，らせん肥厚の有無，壁厚，壁孔の分布）

## 2. 識別結果と考察

各試料の識別結果とその根拠となる解剖学的特徴を以下に記す。さらに，走査電子顕微鏡写真を一括後掲する。

### 1) モミ属 *Abies* (マツ科 PINACEAE)

試料番号： 4 (写真1～4)	試料番号： 5 (写真5～8)
試料番号： 9 (写真9～12)	試料番号： 123 (写真13～16)
試料番号： 124 (写真17～20)	試料番号： 125 (写真21～24)
試料番号： 126 (写真25～28)	試料番号： 127 (写真29～32)
試料番号： 129 (写真33～36)	試料番号： 130 (写真37～40)
試料番号： 133 (写真41～44)	試料番号： 136 (写真45～48)
試料番号： 137 (写真49～52)	試料番号： 157 (写真53～56)
試料番号： 158 (写真57～60)	試料番号： 160 (写真61～64)
試料番号： 162 (写真65～68)	試料番号： 165 (写真69～72)
試料番号： 166 (写真73～76)	試料番号： 167 (写真77～80)
試料番号： 168 (写真81～84)	試料番号： 207 (写真85～88)
試料番号： 252 (写真89～92)	試料番号： 255 (写真93～96)
試料番号： Pit12(写真97～100)	

年輪界は明瞭である。早材から晩材への移行はやや急である。晩材幅は狭い。構成要素は仮道管と放射柔細胞の2種類である。樹脂道，樹脂細胞，放射仮道管は存在しない。仮道管にはらせん肥厚が認められない。放射組織は単列である。分野壁孔はスギ型である。放射柔細胞の壁は厚く，単壁孔対が明瞭に認められ，じょうず状末端壁が顕著である。仮道管の壁内表面にいぼ状突起がある。

トドマツと推定される。

### 2) スギ *Cryptomeria japonica* D. Don

(スギ科 TAXODIACEAE)

試料番号： 7 (写真101～106)      試料番号： 170 (写真107～110)

年輪界は明瞭である。早材から晩材への移行は急である。構成要素は仮道管，樹脂細胞，放射柔細胞の3種類である。樹脂道，放射仮道管は存在しない。仮道管にはらせん肥厚が存在しない。

樹脂細胞は年輪の後半部、すなわち早・晩材の移行部から晩材にかけて存在する。単列放射組織の細胞高は、多くは10細胞高以下である。放射柔細胞の末端壁は薄く、じゅう状を呈さない。分野壁孔はスギ型である。仮道管の壁内表面にはいぼ状突起が存在する。

### 3) ハコヤナギ属 *Populus* (ヤナギ科 SALICACEAE)

試料番号: 131 (写真111~114)      試料番号: 159 (写真115~118)

構成要素は道管、木部繊維、軸方向柔細胞、放射柔細胞の4種類である。散孔材である。管孔は斜めに配列する傾向がある。軸方向柔細胞はターミナル状の配列が顕著である。放射組織は同性で、単列である。道管せん孔は単せん孔である。道管壁にはらせん肥厚は存在しない。道管相互壁孔は交互壁孔である。道管放射組織壁孔は道管相互壁孔より大きく、ふるい状を呈し、それらの孔口は円形ないし楕円形である。

ドロノキかヤマナラシであると推定される。

### 4) ハリギリ *Kalopanax Pictus* (Thunb) Nakai

(ウコギ科 (ARALIACEAE))

試料番号: 128 (写真119~122)      試料番号: 134 (写真123~126)

試料番号: 164 (写真127~130)      試料番号: 169 (写真131~134)

構成要素は道管要素、道管状仮道管、木部繊維、軸方向柔細胞、放射柔細胞の5種類である。環孔材である。孔圏道管は常に1列に並ぶ。孔圏外道管は多数接合し複合管孔をなし、斜線、波状を呈する。軸方向柔細胞は随伴散在状に配列する。放射組織は異性で、1~5細胞幅である。道管せん孔は単せん孔である。チロースが存在する。道管壁にはらせん肥厚は存在しない。隔壁木繊維が存在する。

### 5) トネリコ属 *Fraxinus* (モクセイ科 OLEACEAE)

試料番号: 3 (写真135~138)      試料番号: 135 (写真139~142)

構成要素は道管要素、木部繊維、軸方向柔細胞、放射柔細胞の4種類である。環孔材である。孔圏道管は大きく、2~4列に並ぶ。孔圏外では道管の径は小さく年輪境界にむかうにつれてさらに小さくなる。孔圏外道管は単独のものと2~3個半径方向に複合したのものがあ、それらは散在状に分布する。軸方向柔細胞は散在・随伴散在・周囲・ターミナル状に分布する。放射組織は同性で、1~3細胞幅であるが、2~3細胞幅で10細胞高前後のものが多く、晩材の板目面では、放射組織はほぼ均等に分布する。道管せん孔は単せん孔である。道管相互壁孔は交互壁孔で

あり、結合壁が多い。道管内孔にはチロースが存在する。道管壁にはらせん肥厚は存在しない。孔圏外道管の壁は厚い。

ヤチダモカアオダモであると推定される。

樹種同定を行なった材は、すべて火災によって生じた建物部材の炭化材である。試料により炭化の程度が異なることもあったが、これらの材は、炭化材の一般的な構造上の特徴を有していた。すなわち、材の体積の減少、材を構成している細胞の収縮・変形、細胞壁の薄壁化などが認められた (Prior & Alvin 1983, 菅谷 1991)。材固有のマクロな特徴はかなり保持されており、大部分の試料については樹種識別には支障がなかった。しかし、炭化材ではミクロな構造が変化したり、消滅したりすることもあるとされており、必ずしもすべての識別拠点を明確に見いだすことができない試料もあった。

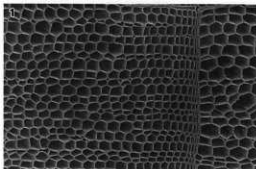
炭化材35点の樹種の内訳は、モミ属25点、スギ2点、ハコヤナギ属2点、ハリギリ4点、トネリコ属2点であった。樹種の種類は予想外に少なかった。モミ属が25点もあり、極めて多い。広葉樹は3種類8点しかなく少ない。スギを除き、これらの樹種は遺跡周辺に当時自生していたものであり、入平しやすい樹木を使用したのであろう。注目すべきは出土炭化材中にスギ材が認められたことである。島地・伊東 (1988) による出土材データベースによれば、スギの炭化材としては本州北端の青森からは多く検出されているが、北海道からの例は見当たらない。当時 (擦文文化期) の遺跡周辺の樹木の分布から判断すれば、スギ材は本州から持ち込まれたものであると考えられる。スギ材がなぜ使用され、どのような形状のものをどこからどのような経路で運ばれたかは興味あるところである。

樹種同定を行なった材は、柱類と板類に大別される。柱材16点の内訳は、モミ属13点、ハコヤナギ属1点、ハリギリ1点、トネリコ属1点であった。板材13点の内訳は、モミ属10点、ハコヤナギ属1点、ハリギリ1点、トネリコ属1点であった。柱材あるいは板材6点の内訳は、モミ属2点、スギ2点、ハリギリ2点であった。スギ材1点は梁材であった。これらの結果からは、建物の部材の形状や用途による樹種のちがいはとくに認められない。しかし、出土材の建物内の部位や形状などについてのより詳細なデータが得られれば、さらに考察を進めることが可能になる。

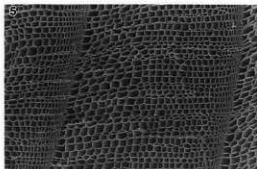
#### 文献

- Prior, J. & K. L. Alvin (1983): Structural changes and charring woods of *Dichrostachys* and *Salix* from southern Africa. IAWA Bull. n. s., 4 (4), 197-206  
菅原恵美子 (1991): 炭化材のSEM観察 北大農林産学科卒業論文  
島地 謙・伊東隆夫 (1988): 日本の遺跡出土木製品総覧 雄山閣

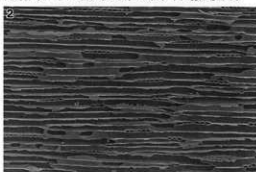
写真135 大川遺跡SH-6 伴出炭化材の樹種 I



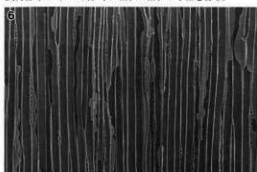
試料番号4 (モミ属, 木口面, 105倍, 年輪境界を含む)



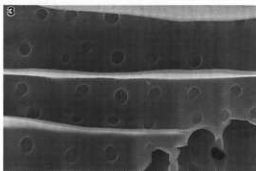
試料番号5 (モミ属, 木口面, 65倍, 1年輪を含む)



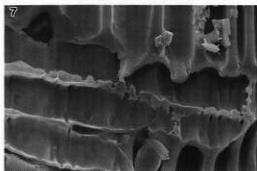
試料番号4 (モミ属, 板目面, 85倍, 単列放射組織)



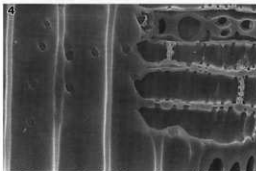
試料番号5 (モミ属, 板目面, 180倍, 単列放射組織)



試料番号4 (モミ属, 径目面, 700倍, スキ型分野壁孔)



試料番号5 (モミ属, 800倍, じょうず状末端壁)

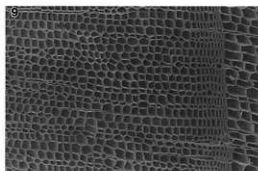


試料番号4 (モミ属, 径目面, 600倍, じょうず状末端壁)

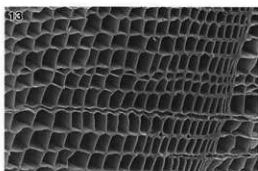


試料番号5 (モミ属, 径目面, 2600倍, いぼ状突起と壁孔)

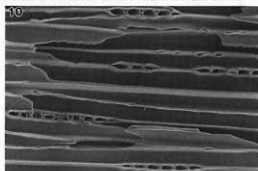
写真136 大川遺跡SH-6伴出炭化材の樹種Ⅱ



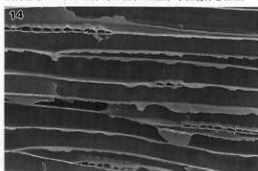
試料番号9 (モミ属, 木口面, 100倍, 年輪境界を含む)



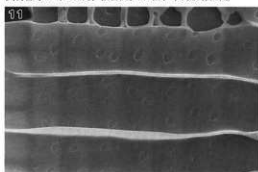
試料番号123 (モミ属, 木口面, 155倍, 年輪境界を含む)



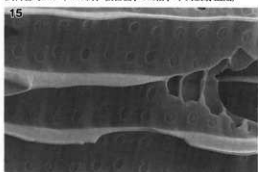
試料番号9 (モミ属, 板目面, 235倍, 単列放射組織)



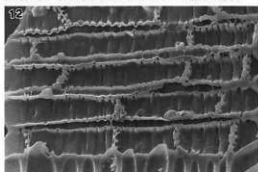
試料番号123 (モミ属, 板目面, 175倍, 単列放射組織)



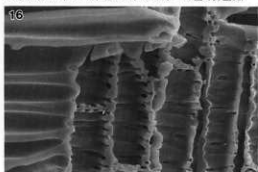
試料番号9 (モミ属, 柎目面, 500倍, スギ型分野壁孔)



試料番号123 (モミ属, 柎目面, 430倍, スギ型分野壁孔)

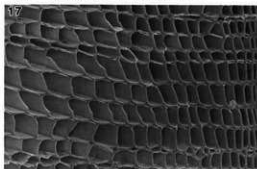


試料番号9 (モミ属, 柎目面, 500倍, ジョウ状末端壁)

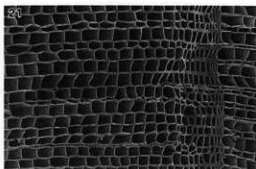


試料番号123 (モミ属, 柎目面, 700倍, ジョウ状末端壁)

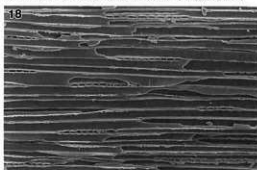
写真137 大川遺跡SH-6伴出炭化材の組織Ⅲ



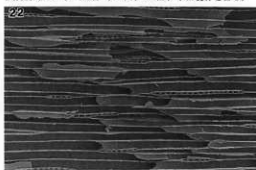
試料番号124 (モミ属, 木口面, 195倍, 年輪境界を含む)



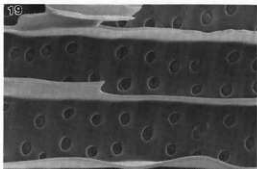
試料番号125 (モミ属, 木口面, 130倍, 年輪境界を含む)



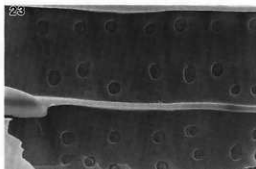
試料番号124 (モミ属, 板目面, 130倍, 単列放射組織)



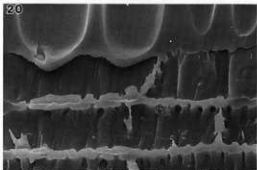
試料番号125 (モミ属, 板目面, 100倍, 単列放射組織)



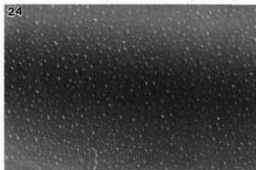
試料番号124 (モミ属, 柎目面, 550倍, スギ型分野壁孔)



試料番号125 (モミ属, 柎目面, 610倍, スギ型分野壁孔)

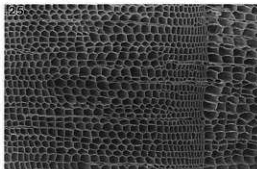


試料番号124 (モミ属, 柎目面, 950倍, ヒョウ状末端壁)

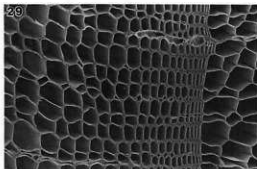


試料番号125 (モミ属, 柎目面, 5,000倍, いぼ状突起)

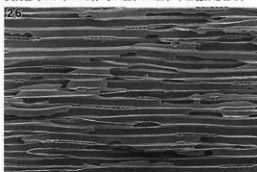
写真138 大川遺跡SH-6 伴出炭化材の樹種IV



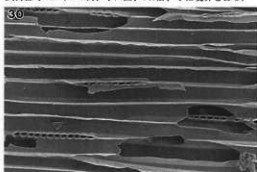
試料番号126 (モミ属, 木口面, 195倍, 年輪境界を含む)



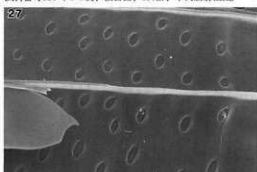
試料番号127 (モミ属, 木口面, 145倍, 年輪境界を含む)



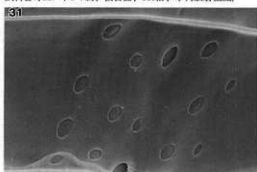
試料番号126 (モミ属, 板目面, 195倍, 単列放射組織)



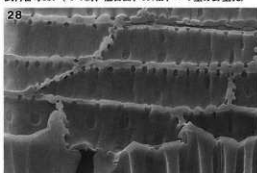
試料番号127 (モミ属, 板目面, 130倍, 単列放射組織)



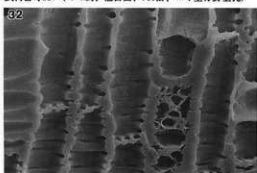
試料番号126 (モミ属, 柎目面, 550倍, スギ型分野壁孔)



試料番号127 (モミ属, 柎目面, 700倍, スギ型分野壁孔)



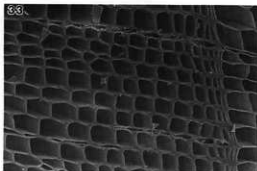
試料番号126 (モミ属, 柎目面, 850倍, ジョウ状末増壁)



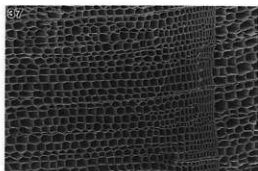
試料番号127 (モミ属, 柎目面, 800倍, ジョウ状末増壁)



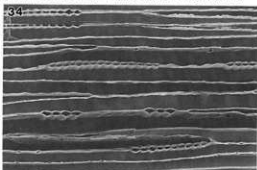
写真139 大川遺跡SH-6伴出炭化材の樹種V



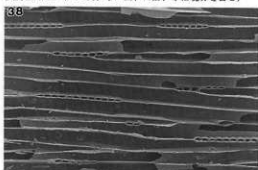
試料番号129 (モミ属, 木口面, 155倍, 年輪境界を含む)



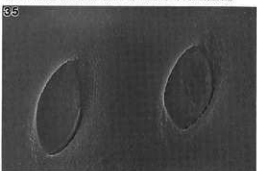
試料番号130 (モミ属, 木口面, 70倍, 年輪境界を含む)



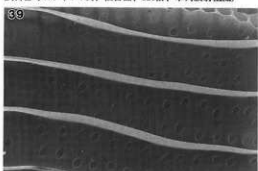
試料番号129 (モミ属, 板目面, 130倍, 単列放射組織)



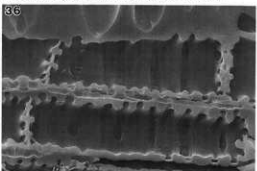
試料番号130 (モミ属, 板目面, 120倍, 単列放射組織)



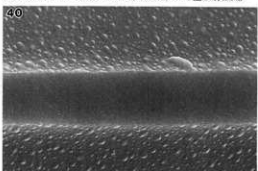
試料番号129 (モミ属, 柎目面, 2850倍, 分野壁孔, いぼ状突起)



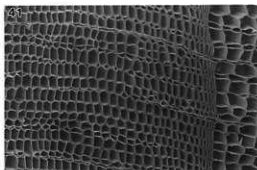
試料番号130 (モミ属, 柎目面, 350倍, スギ型放射組織)



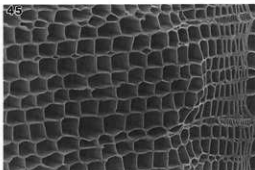
試料番号129 (モミ属, 柎目面, 1000倍, じょう状末増壁)



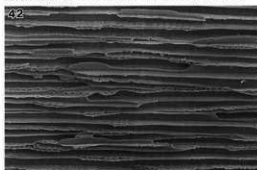
試料番号130 (モミ属, 柎目面, 5000倍, いぼ状突起)



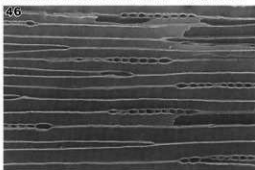
試料番号133 (モミ属, 木口面, 100倍, 年輪境界を含む)



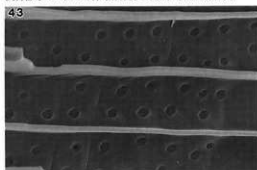
試料番号136 (モミ属, 木口面, 155倍, 年輪境界を含む)



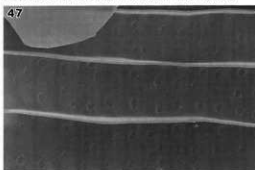
試料番号133 (モミ属, 板目面, 115倍, 単列放射組織)



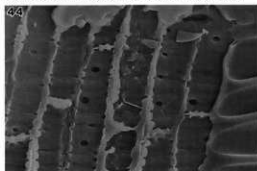
試料番号136 (モミ属, 板目面, 130倍, 単列放射組織)



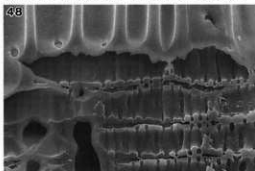
試料番号133 (モミ属, 板目面, 550倍, スギ型分野壁孔)



試料番号136 (モミ属, 板目面, 350倍, スギ型分野壁孔)

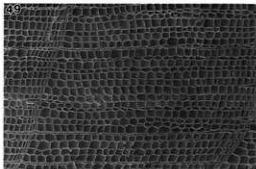


試料番号133 (モミ属, 板目面, 650倍, ジョウザ状末端壁)

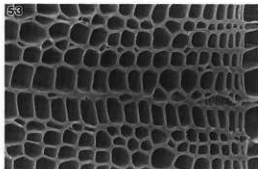


試料番号136 (モミ属, 板目面, 650倍, ジョウザ状末端壁)

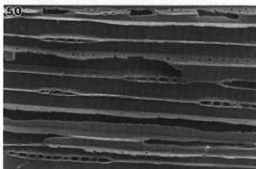
写真141 大川遺跡SH-6伴出炭化材の樹種Ⅵ



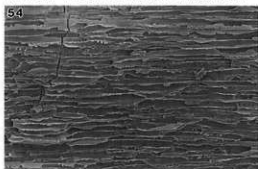
試料番号137 (モミ属, 木口面, 65倍, 1年輪を含む)



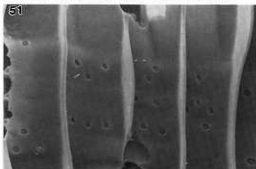
試料番号157 (モミ属, 木口面, 280倍, 年輪境界を含む)



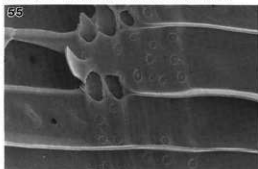
試料番号137 (モミ属, 板目面, 170倍, 単列放射組織)



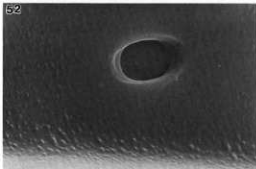
試料番号157 (モミ属, 板目面, 65倍, 単列放射組織)



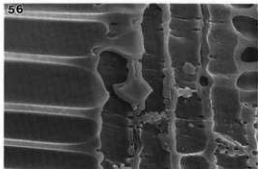
試料番号137 (モミ属, 板目面, 430倍, スギ型分野壁孔)



試料番号157 (モミ属, 板目面, 350倍, スギ型分野壁孔)

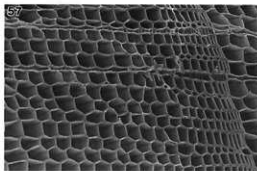


試料番号137 (モミ属, 板目面, 4300倍, いぼ状突起)

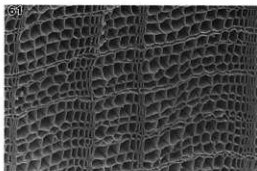


試料番号157 (モミ属, 板目面, 650倍, ヒョウ状木増壁)

写真142 大川遺跡SH-6伴出炭化材の樹種鑑



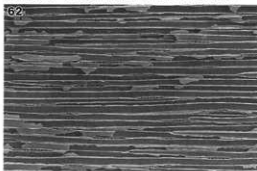
試料番号158 (モミ属, 木口面, 175倍, 年輪境界を含む)



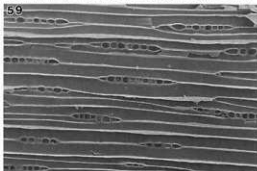
試料番号160 (モミ属, 木口面, 115倍, 3年輪を含む)



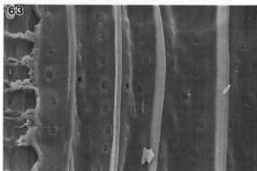
試料番号158 (モミ属, 板目面, 1000倍, スギ型分野壁孔)



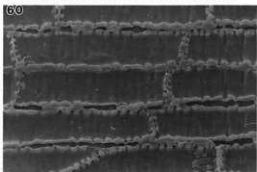
試料番号160 (モミ属, 板目面, 65倍, 単列放射組織)



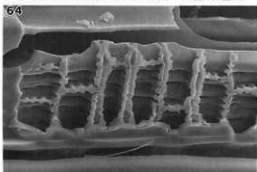
試料番号158 (モミ属, 板目面, 130倍, 単列放射組織)



試料番号160 (モミ属, 板目面, 500倍, スギ型分野壁孔)

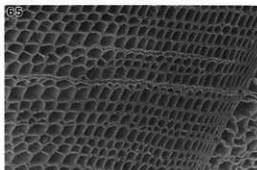


試料番号158 (モミ属, 板目面, 600倍, ジョウ状末端壁)

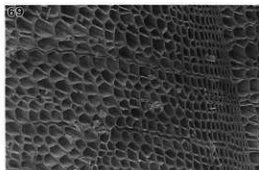


試料番号160 (モミ属, 板目面, 600倍, ジョウ状末端壁)

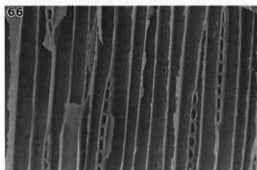
写真143 大川遺跡SH-6伴出炭化材の樹種区



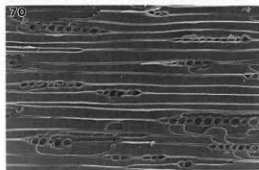
試料番号162 (モミ属, 木口面, 175倍, 年輪境界を含む)



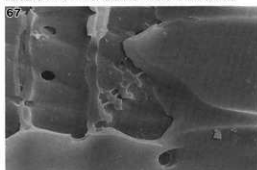
試料番号165 (モミ属, 木口面, 155倍, 年輪境界を含む)



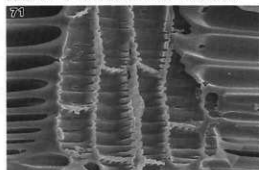
試料番号162 (モミ属, 板目面, 215倍, 単列放射組織)



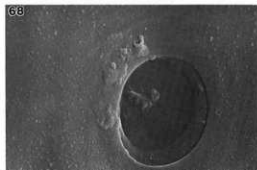
試料番号165 (モミ属, 板目面, 130倍, 単列放射組織)



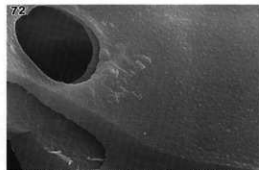
試料番号162 (モミ属, 柾目面, 1150倍, ジョーズ状末端壁)



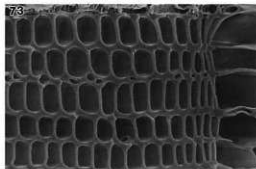
試料番号165 (モミ属, 柾目面, 400倍, ジョーズ状末端壁)



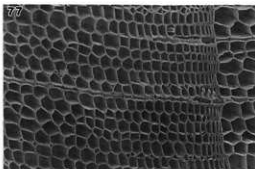
試料番号162 (モミ属, 柾目面, 4700倍, 壁孔, いぼ状突起)



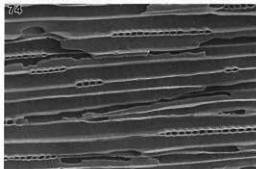
試料番号165 (モミ属, 柾目面, 4300倍, いぼ状突起)



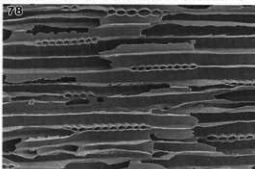
試料番号166 (モミ属, 木口面, 305倍, 年輪境界を含む)



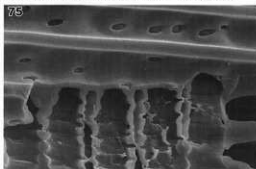
試料番号407 (モミ属, 木口面, 130倍, 年輪境界を含む)



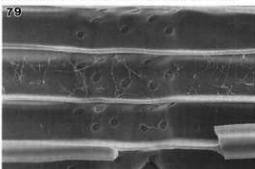
試料番号166 (モミ属, 板目面, 130倍, 単列放射組織)



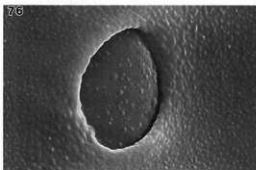
試料番号407 (モミ属, 板目面, 130倍, 単列放射組織)



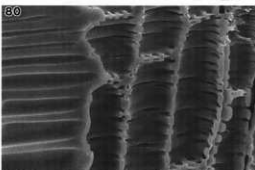
試料番号166 (モミ属, 柎目面, 800倍, じょうず状末端壁)



試料番号407 (モミ属, 柎目面, 470倍, スギ型分野壁孔)

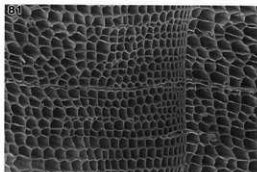


試料番号166 (モミ属, 柎目面, 6000倍, 分野壁孔, いぼ状突起)

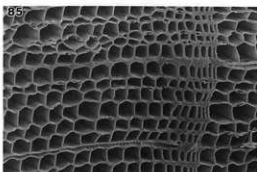


試料番号407 (モミ属, 柎目面, 700倍, じょうず状末端壁)

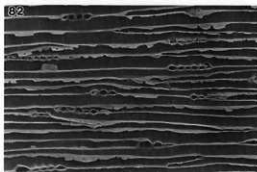
写真145 大川遺跡SH-6伴出炭化材の樹種XJ



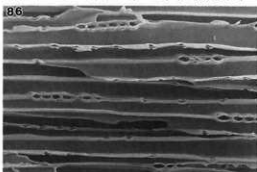
試料番号167 (モミ属, 木口面, 120倍, 年輪境界を含む)



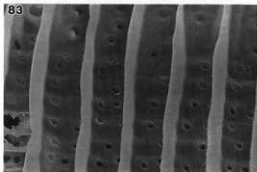
試料番号168 (モミ属, 木口面, 175倍, 年輪境界を含む)



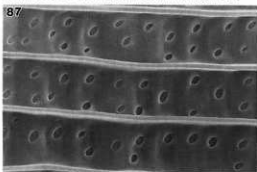
試料番号167 (モミ属, 板目面, 130倍, 単列放射組織)



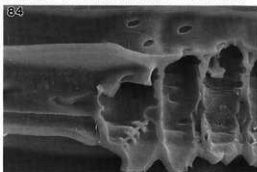
試料番号168 (モミ属, 板目面, 210倍, 単列放射組織)



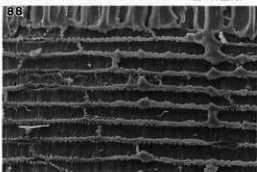
試料番号167 (モミ属, 板目面, 350倍, スギ型分野壁孔)



試料番号168 (モミ属, 板目面, 470倍, スギ型分野壁孔)

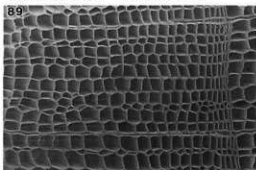


試料番号167 (モミ属, 板目面, 850倍, ジョウ状末端壁)

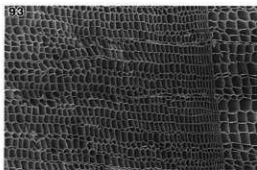


試料番号168 (モミ属, 板目面, 310倍, ジョウ状末端壁)

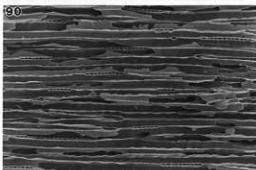
写真146 大川遺跡SH-6 伴出炭化材の樹種XII



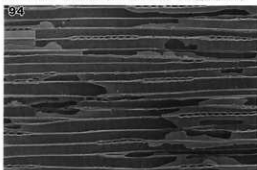
試料番号252 (モミ属, 木口面, 130倍, 年輪境界を含む)



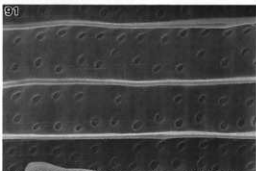
試料番号255 (モミ属, 木口面, 105倍, 年輪境界を含む)



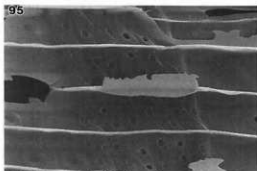
試料番号252 (モミ属, 板目面, 80倍, 単列放射組織)



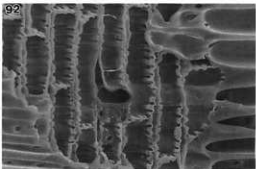
試料番号255 (モミ属, 板目面, 130倍, 単列放射組織)



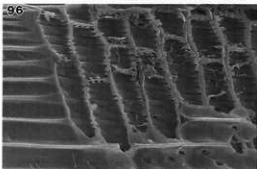
試料番号252 (モミ属, 板目面, 390倍, スギ型分界壁孔)



試料番号255 (モミ属, 板目面, 390倍, スギ型分界壁孔)



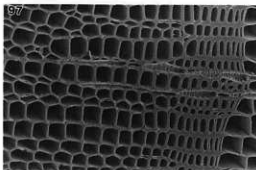
試料番号252 (モミ属, 板目面, 500倍, ジョウ状末増壁)



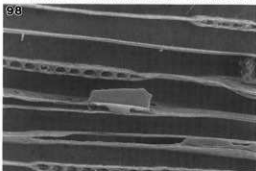
試料番号255 (モミ属, 板目面, 500倍, ジョウ状末増壁)



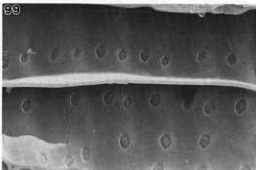
写真147 大川遺跡SH-6伴出炭化材の樹種XⅡ



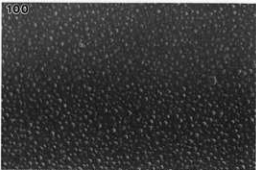
試料番号pit12 (モミ属, 木口面, 195倍, 年輪境界を含む)



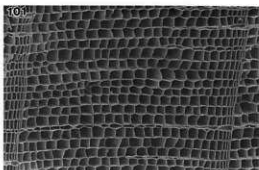
試料番号pit12 (モミ属, 板目面, 260倍, 単列放射組織)



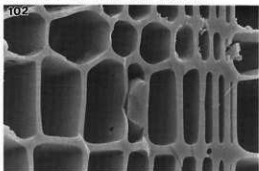
試料番号pit12 (モミ属, 木口面, 700倍, スギ型分野壁孔)



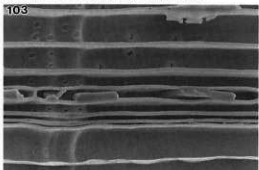
試料番号pit12 (モミ属, 柎目面, 6000倍, いぼ状突起)



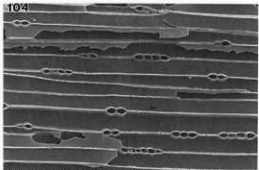
試料番号7 (スギ, 木口面, 85倍, 1年輪含む)



試料番号7 (スギ, 木口面, 650倍, 樹脂細胞)

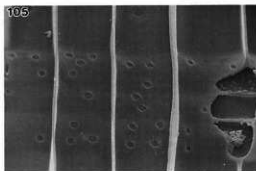


試料番号7 (スギ, 柎目面, 390倍, 樹脂細胞)

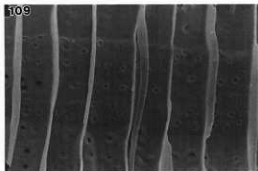


試料番号7 (スギ, 板目面, 130倍, 単列放射組織)

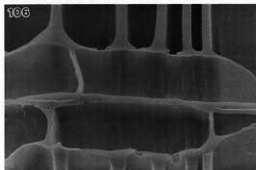
写真148 大川濃跡S H - 6 伴出炭化材の樹種 XZ/



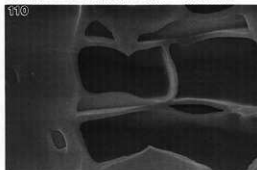
試料番号7 (スギ, 柾目面, 470倍, スギ型分野壁孔)



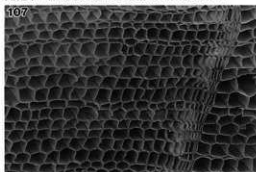
試料番号170 (スギ, 柾目面, 315倍, スギ型分野壁孔)



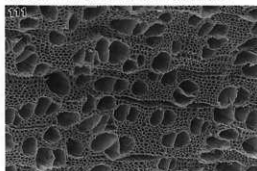
試料番号7 (スギ, 柾目面, 1000倍, 放射索細胞の末端壁は薄い)



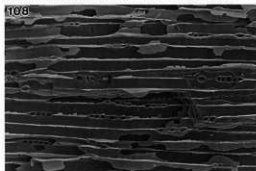
試料番号170 (スギ, 柾目面, 1550倍, 放射索細胞の末端壁は薄い)



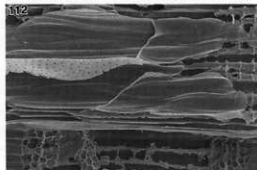
試料番号170 (スギ, 木口面, 100倍, 年輪境界を含む)



試料番号131 (ハコヤナギ属, 木口面, 65倍, 年輪境界を含む, 散孔材)

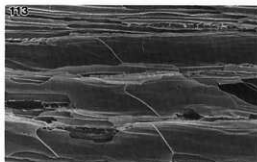


試料番号170 (スギ, 板目面, 100倍, 単列放射組織)

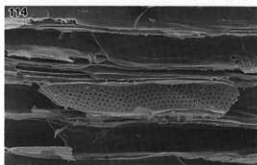


試料番号131 (ハコヤナギ属, 柾目面, 235倍, 道管せん孔は単せん孔)

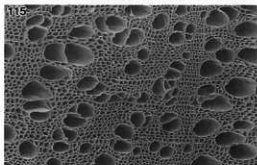
写真149 大川遺跡SH-6伴出炭化材の樹種XV



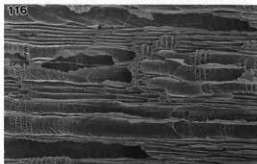
試料番号131 (ハコヤナギ属, 板目面, 145倍, 単せん孔, 単列放射組織)



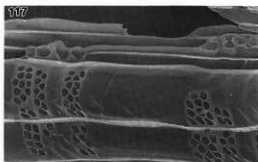
試料番号131 (ハコヤナギ属, 板目面, 130倍, 道管相互壁孔は交互壁孔)



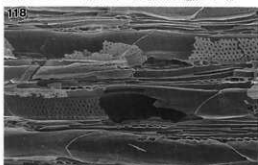
試料番号159 (ハコヤナギ属, 木口面, 65倍, 年輪境界を含む, 散孔材)



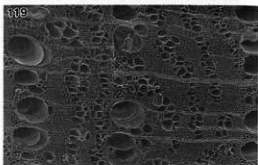
試料番号159 (ハコヤナギ属, 板目面, 80倍, 道管相互壁孔, 単せん孔)



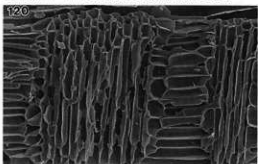
試料番号159 (ハコヤナギ属, 板目面, 200倍, 道管放射組織壁孔はよるい状)



試料番号159 (ハコヤナギ属, 板目面, 120倍, 単列放射組織)

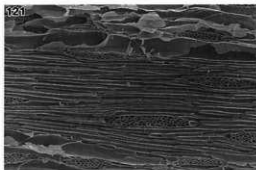


試料番号128 (ハリギリ, 木口面, 30倍, 環孔材, 孔間道管は1列)

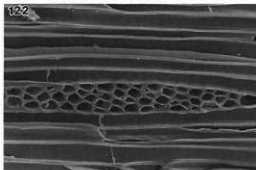


試料番号128 (ハリギリ, 板目面, 130倍, 異性放射組織)

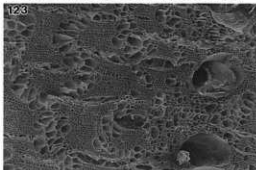
写真150 大川遺跡SH-6 伴出炭化材の樹種X光



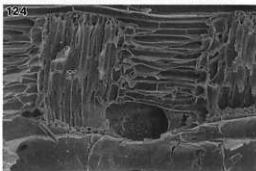
試料番号128 (ハリギリ, 板目面, 65倍, 放射組織は2~4細胞列)



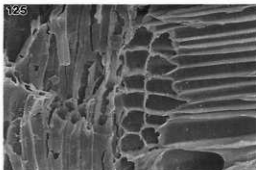
試料番号128 (ハリギリ, 板目面, 250倍, 隔壁木繊維, 異性放射組織)



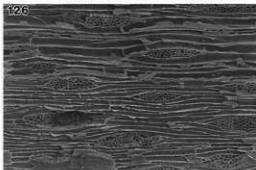
試料番号134 (ハリギリ, 木口面, 40倍, 年輪境界を含む, 環孔材)



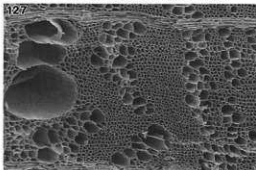
試料番号134 (ハリギリ, 板目面, 115倍, 単せん孔)



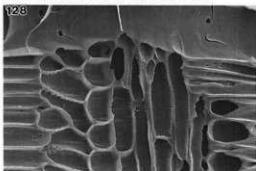
試料番号134 (ハリギリ, 板目面, 300倍, 異性放射組織)



試料番号134 (ハリギリ, 板目面, 65倍, 放射組織は1~5細胞列)

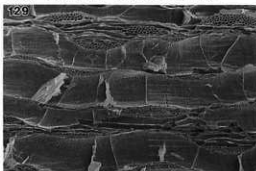


試料番号164 (ハリギリ, 木口面, 65倍, 環孔材)

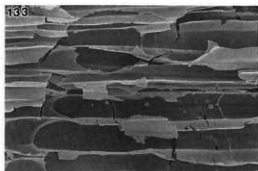


試料番号164 (ハリギリ, 板目面, 285倍, 異性放射組織)

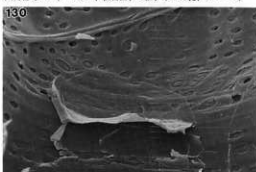
写真151 大川遺跡SH-6 伴出炭化材の樹種X線



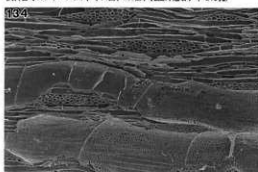
試料番号164 (ハリギリ, 板目面, 55倍, 単せん孔, チロース)



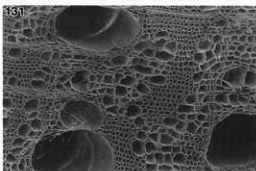
試料番号169 (ハリギリ, 木口面, 195倍, 孔間外道管, 単せん孔)



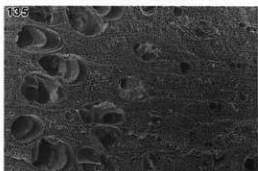
試料番号164 (ハリギリ, 板目面, 390倍, 道管内のチロース)



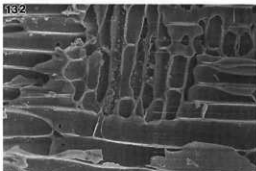
試料番号169 (ハリギリ, 板目面, 65倍, 異性放射組織, チロース)



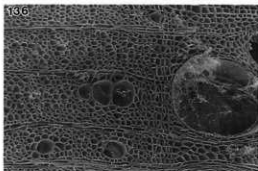
試料番号169 (ハリギリ, 木口面, 65倍, 環孔材)



試料番号3 (トネリコ属, 木口面, 35倍, 環孔材)

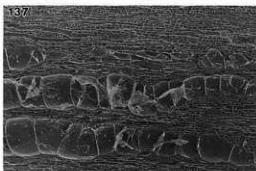


試料番号169 (ハリギリ, 板目面, 235倍, 異性放射組織)

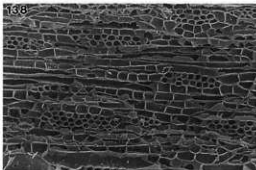


試料番号3 (トネリコ属, 木口面, 105倍, 年輪境界, ターミナル組織)

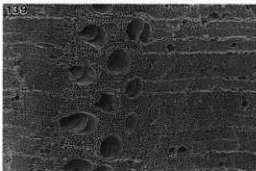
写真152 大川遺跡SH-6伴出炭化材の樹種次亜



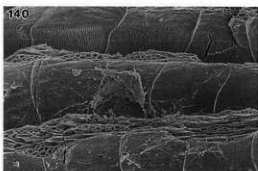
試料番号3 (トネリコ属, 板目面, 40倍, 単せん孔, チロース)



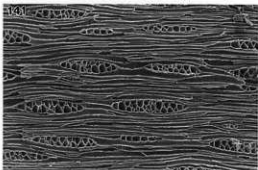
試料番号3 (トネリコ属, 板目面, 115倍, 同姓放射組織, 1~3細胞列)



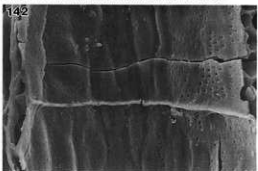
試料番号135 (トネリコ属, 木口面, 35倍, 環孔材)



試料番号135 (トネリコ属, 板目面, 100倍, 単せん孔, チロース)



試料番号135 (トネリコ属, 板目面, 115倍, 同姓放射組織, 1~3細胞列)



試料番号135 (トネリコ属, 板目面, 500倍, 道管壁, 単せん孔)

## C 大川遺跡SH-8・13, SP-122伴出炭化木材樹種同定に関する研究

大谷 壽 (北海道大学農学部)

大川遺跡の建物跡から出土した炭化材25点の樹種識別を行なった。SH-8 (縄文文化期) の21点、SH-13 (縄文文化期) の3点、SP-122 (15世紀前後) の1点について、それらの炭化材の解剖学的性質の特徴を走査電子顕微鏡により調べ、得られた知見をもとにして樹種同定を行なった。以下に、識別結果について報告する。

### 1. 試料および識別方法

#### 1) 試料

大川遺跡SH-8・13, SP-122から出土した炭化材25点である。

#### 2) 走査電子顕微鏡試料

上記炭化材よりできるだけ損傷を与えないように小ブロック (約2cm角) を切りとり、室内に放置し乾燥させた。それらを安全カミソリで割断し、観察面 (6mm×6mm) を得た。観察面は基本3断面 (木口面・柁目面・板目面) である。これらの試料を検鏡用試料台に導電性接着剤で固定した。高真空蒸着装置により観察面に金蒸着 (または、炭素・金の二重蒸着) を行ない、検鏡に供した。

#### 3) 識別方法

走査電子顕微鏡 (JSM-35CF II) を用いて試料の基本3断面の観察および写真撮影を行ない、材の解剖学的性質から属名または種名を決定した。

主な観察項目は次の通りである。

針葉樹材……年輪構造 (早・晩材の移行、晩材幅)、樹脂道 (垂直・水平樹脂道の有無、エビセリウム細胞の壁厚)、仮道管 (有縁壁孔の配列、らせん肥厚の有無)、樹脂細胞 (有無、分布)、分野壁孔 (型と数)、放射組織 (放射仮道管の有無、放射柔細胞の末端壁、細胞幅と細胞高)、仮道管壁のいぼ状突起の有無

広葉樹材……道管 (木口面における配列形式、らせん肥厚の有無、せん孔の形状、道管相互壁孔の形状と配列、チロースの有無と形状)、仮道管 (道管状仮道管と周囲仮道管の有無)、軸方向柔組織 (配列の型)、放射組織 (構成細胞の構成 (同性、異性)、細胞幅と細胞高、分布 (散在、集合、複合)・道管放射組織間壁孔の形態)、木部繊維 (隔壁の有無、らせん肥厚の有無、壁厚、壁孔の分布)

## 2. 識別結果

試料の識別結果とそれらの根拠となる材の解剖学的特徴を以下に記す。識別に用いた走査電子顕微鏡写真の一部を一括後掲する。

### 1) モミ属 *Abies* (マツ科 PINACEAE)

試料番号: SH-8.1 (写真1~4)	試料番号: SH-8.2 (写真5~8)
試料番号: SH-8.3 (写真9~11)	試料番号: SH-8.5 (写真12~15)
試料番号: SH-8.6 (写真16~19)	試料番号: SH-8.7 (写真20~23)
試料番号: SH-8.9 (写真24~26)	試料番号: SH-8.10 (写真27~30)
試料番号: SH-8.11 (写真31~34)	試料番号: SH-8.12 (写真35~38)
試料番号: SH-8.13 (写真39~42)	試料番号: SH-8.15 (写真43~46)
試料番号: SH-8.16 (写真47~50)	試料番号: SH-8.17 (写真51~54)
試料番号: SH-8.18 (写真55~57)	試料番号: SH-8.19 (写真58~60)
試料番号: SH-8.20 (写真61~64)	試料番号: SH-8.21 (写真65~68)
試料番号: SH-13.6 (写真69~72)	試料番号: SH-13.7 (写真73~76)
試料番号: SP-122 (写真77~80)	

年輪界は明瞭である。早材から晩材への移行はやや急である。晩材幅は狭い。構成要素は仮道管と放射柔細胞の2種類である。樹脂道、樹脂細胞、放射仮道管は存在しない。仮道管にはらせん肥厚が認められない。放射組織は単列である。分野壁孔はスギ型である。放射柔細胞の壁は厚く、単壁孔対が明瞭に認められ、じゅず状末端壁が顕著である。仮道管の壁内表面にはいぼ状突起がある。トドマツと推定される。

### 2) スギ *Cryptomeria japonica* D. Don (スギ科 TAXODIACEAE)

試料番号: SH-8.4 (写真81~84)      試料番号: SH-8.14 (写真85~89)

年輪界は明瞭である。早材から晩材への移行は急である。構成要素は仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞の3種類である。樹脂道と放射仮道管は存在しない。仮道管にはらせん肥厚が存在しない。樹脂細胞は年輪の後半部、すなわち早・晩材の移行部から晩材にかけて存在する。単列放射組織の細胞高は、多くは10細胞高以下である。放射柔細胞の末端壁は薄く、じゅず状を呈さない。分野壁孔はスギ型である。仮道管の壁内表面にはいぼ状突起が存在する。

### 3) ハンノキ属 *Alnus* (カバノキ科 BETULACEAE)

試料番号: SH-8.8 (写真90~94)

構成要素は道管要素、木部繊維、軸方向柔細胞、放射柔細胞の4種類である。散孔材である。



軸方向柔組織は散在状、接線状に配列する。放射組織は同性で単列であるが、集合放射組織が存在する。道管せん孔は階段せん孔であり、バーの数は10~30である。道管壁にはらせん肥厚は存在しない。道管相互壁孔は交互壁孔である。

ケヤマハンノキなどがあり、樹種名を特定できない。

#### 4) ハリギリ *Kalopanax pictum* (Thunb.) Nakai (ウコギ科 ARALIACEAE)

試料番号: SH-8.8 (写真95~101) 試料番号: SH-13.5 (写真102~106)

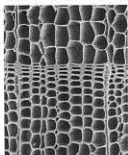
構成要素は道管要素、道管状仮道管、木部繊維、軸方向柔細胞、放射柔細胞の5種類である。環孔材である。孔圏道管は普通1列に並ぶ。孔圏外道管は多数接合し複合管孔をなし、斜線状、液状を呈し、それらのなかに道管状仮道管も存在する。軸方向柔組織は随伴散在状である。放射組織は異性で、1~5細胞幅である。道管せん孔は単せん孔である。チロースが存在する。道管壁にはらせん肥厚は存在しない。隔壁木繊維が存在する。

樹種識別を行なった材は、すべて火災によって生じた建物部材の柱状および板状の炭化材から得られたものである。検鏡用試料の作製が困難なものもあり、試料の炭化の程度や炭化材としての保存状態が異なることが推定された。しかし、調査したすべての材には、炭化材の一般的な構造上の特徴が認められた。とくに、材を構成している細胞の収縮・変形、細胞壁の薄壁化などである (Prior & Gasson 1990, Prior & Alvin 1983, 菅谷 1991)。材固有の解剖学的性質の特徴は、かなりよく保持されており、大部分の試料については樹種識別上支障がなかった。

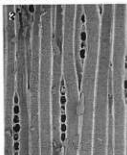
試料番号SH-8.8の試料からはハンノキ属とハリギリの2種類が含まれていた。したがって、炭化材25点の樹種の内訳は、モミ属21点、スギ2点、ハンノキ属1点、ハリギリ2点であった。樹種の種類は少なく、針葉樹材23点、広葉樹材3点であった。この比率は、SH-6から出土した炭化材36点についての調査結果 (大谷 1999) と大差がない。スギを除き、これらの樹種は遺跡周辺に当時自生していた可能性があり、入手しやすい樹木を使用したのであろう。

樹種同定を行なった材は柱状と板状のもの2種類に大別される。柱状のもの24点の内訳は、モミ属21点、スギ2点、ハンノキ属1点、ハリギリ1点であった。板状のもの(1点)は、ハリギリであった。広葉樹材は柱状(試料番号SH-8.8)と板状のもの2点だけであった。したがって、広葉樹材は建物内での特定の部位のみに使用されていたのかもしれない。当時の建物部材にどのような樹種が代用されていたのかを知ることはいろいろな観点から重要であり、多方面からの検討が必要であろう。

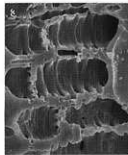
写真153 大川遺跡SH-8伴出炭化材の樹種 I



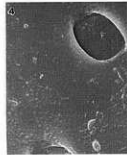
試料番号SH-8.1 (モミ属、  
木口面, 135倍, 年輪境界を含む)



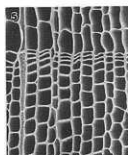
試料番号SH-8.1 (モミ属、  
板目面, 140倍, 単列放射組織)



試料番号SH-8.1 (モミ属、  
板目面, 600倍, じょうず状末端壁)



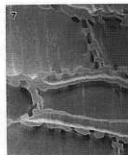
試料番号SH-8.1 (モミ属、  
板目面, 3150倍, スギ型分野壁孔)



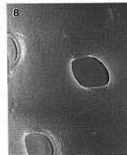
試料番号SH-8.2 (モミ属、  
木口面, 205倍, 年輪境界を含む)



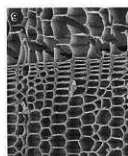
試料番号SH-8.2 (モミ属、  
30倍, 単列放射組織)



試料番号SH-8.2 (モミ属、  
板目面, 1200倍, じょうず状末端壁)



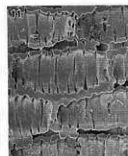
試料番号SH-8.2 (モミ属、  
2100倍, いぼ状突起と分野壁孔)



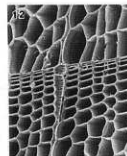
試料番号SH-8.3 (モミ属、  
木口面, 175倍, 年輪境界を含む)



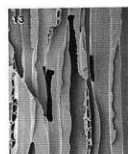
試料番号SH-8.3 (モミ属、  
板目面, 110倍, 単列放射組織)



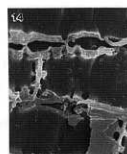
試料番号SH-8.3 (モミ属、  
板目面, 850倍, じょうず状末端壁)



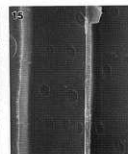
試料番号SH-8.5 (モミ属、  
木口面, 205倍, 年輪境界を含む)



試料番号SH-8.5 (モミ属、  
板目面, 180倍, 単列放射組織)



試料番号SH-8.5 (モミ属、  
板目面, 1250倍, じょうず状末端壁)

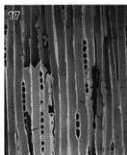


試料番号SH-8.5 (モミ属、  
板目面, 650倍, スギ型分野壁孔)

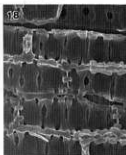


試料番号SH-8.6 (モミ属、  
木口面, 205倍, 年輪境界を含む)

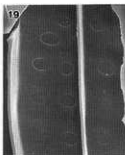
写真154 大川遺跡SH-8 伴出炭化材の樹種Ⅱ



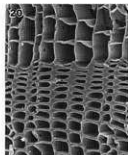
試料番号SH-8.6 (モミ属,  
板目面, 110倍, 単列放射組織)



試料番号SH-8.6 (モミ属,  
柎目面, 650倍, じょう状末端壁)



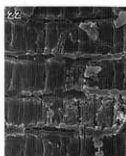
試料番号SH-8.6 (モミ属,  
柎目面, 650倍, スギ型分野壁孔)



試料番号SH-8.7 (モミ属,  
木口面, 205倍, 年輪境界を含む)



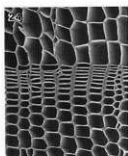
試料番号SH-8.7 (モミ属,  
板目面, 110倍, 単列放射組織)



試料番号SH-8.7 (モミ属,  
柎目面, 650倍, じょう状末端壁)



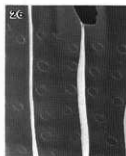
試料番号SH-8.7 (モミ属,  
柎目面, 2100倍, スギ型分野壁孔)



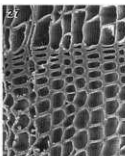
試料番号SH-8.9 (モミ属,  
木口面, 175倍, 年輪境界を含む)



試料番号SH-8.9 (モミ属,  
板目面, 85倍, 単列放射組織)



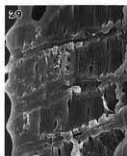
試料番号SH-8.9 (モミ属,  
柎目面, 410倍, スギ型分野壁孔)



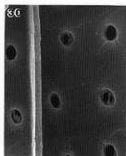
試料番号SH-8.10 (モミ属,  
木口面, 205倍, 年輪境界を含む)



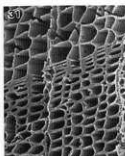
試料番号SH-8.10 (モミ属,  
板目面, 85倍, 単列放射組織)



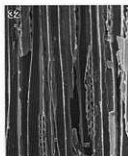
試料番号SH-8.10 (モミ属,  
柎目面, 650倍, じょう状末端壁)



試料番号SH-8.10 (モミ属,  
柎目面, 850倍, スギ型分野壁孔)

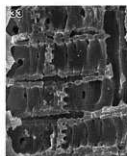


試料番号SH-8.11 (モミ属,  
木口面, 205倍, 年輪境界を含む)



試料番号SH-8.11 (モミ属,  
板目面, 120倍, 単列放射組織)

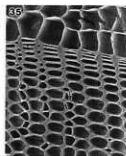
写真155 大川遺跡SH-8 伴出炭化材の樹種Ⅲ



試料番号SH-8.11 (モミ属,  
柎目面, 650倍, じょう状末端壁)



試料番号SH-8.11 (モミ属,  
柎目面, 300倍, 分野壁孔いぼ状突起)



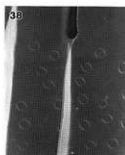
試料番号SH-8.12 (モミ属,  
木口面, 305倍, 年輪境界を含む)



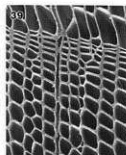
試料番号SH-8.12 (モミ属,  
板目面, 85倍, 単列放射組織)



試料番号SH-8.12 (モミ属,  
柎目面, 650倍, じょう状末端壁)



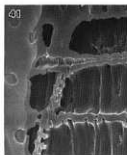
試料番号SH-8.12 (モミ属,  
柎目面, 410倍, スギ型分野壁孔)



試料番号SH-8.13 (モミ属,  
木口面, 305倍, 年輪境界を含む)



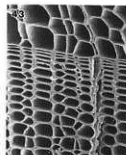
試料番号SH-8.13 (モミ属,  
板目面, 85倍, 単列放射組織)



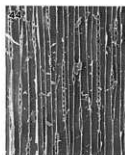
試料番号SH-8.13 (モミ属,  
柎目面, 850倍, じょう状末端壁)



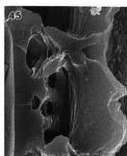
試料番号SH-8.13 (モミ属,  
柎目面, 650倍, スギ型分野壁孔)



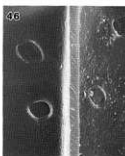
試料番号SH-8.15 (モミ属,  
木口面, 175倍, 年輪境界を含む)



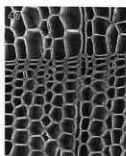
試料番号SH-8.15 (モミ属,  
板目面, 85倍, 単列放射組織)



試料番号SH-8.15 (モミ属,  
柎目面, 2150倍, じょう状末端壁)



試料番号SH-8.15 (モミ属,  
柎目面, 1200倍, スギ型分野壁孔)

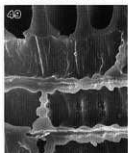


試料番号SH-8.16 (モミ属,  
木口面, 205倍, 年輪境界を含む)

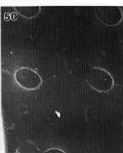


試料番号SH-8.16 (モミ属,  
板目面, 85倍, 単列放射組織)

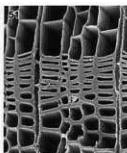
写真156 大川遺跡SH-8 伴出炭化材の樹種Ⅳ



試料番号SH-8.16 (モミ属,  
径目面, 850倍, じょうず状末端壁)



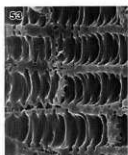
試料番号SH-8.16 (モミ属,  
径目面, 2000倍, スギ型分野壁孔)



試料番号SH-8.17 (モミ属,  
木口面, 175倍, 年輪境界を含む)



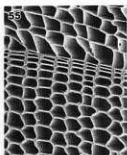
試料番号SH-8.17 (モミ属,  
径目面, 85倍, 単列放射組織)



試料番号SH-8.17 (モミ属,  
径目面, 850倍, じょうず状末端壁)



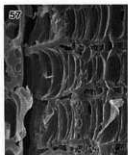
試料番号SH-8.17 (モミ属,  
径目面, 2150倍, スギ型分野壁孔)



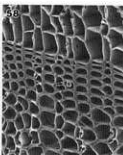
試料番号SH-8.18 (モミ属,  
木口面, 175倍, 年輪境界を含む)



試料番号SH-8.18 (モミ属,  
径目面, 85倍, 単列放射組織)



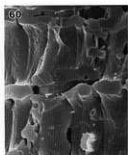
試料番号SH-8.18 (モミ属,  
径目面, 850倍, じょうず状末端壁)



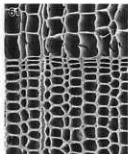
試料番号SH-8.19 (モミ属,  
木口面, 205倍, 年輪境界を含む)



試料番号SH-8.19 (モミ属,  
径目面, 85倍, 単列放射組織)



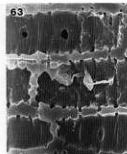
試料番号SH-8.19 (モミ属,  
径目面, 1500倍, じょうず状末端壁)



試料番号SH-8.20 (モミ属,  
木口面, 175倍, 年輪境界を含む)



試料番号SH-8.20 (モミ属,  
径目面, 85倍, 単列放射組織)

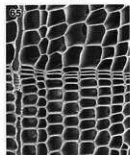


試料番号SH-8.20 (モミ属,  
径目面, 850倍, じょうず状末端壁)



試料番号SH-8.20 (モミ属,  
径目面, 650倍, スギ型分野壁孔)

写真157 大川遺跡SH-8・13、SP-122伴出炭化材の組織



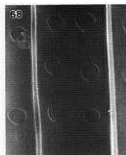
試料番号SH-8.21 (モミ属, 木口面, 175倍, 年輪境界を含む)



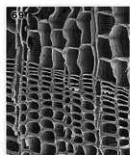
試料番号SH-8.21 (モミ属, 板目面, 85倍, 単列放射組織)



試料番号SH-8.21 (モミ属, 柎目面, 650倍, J型状末端壁)



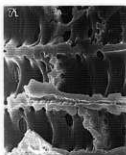
試料番号SH-8.21 (モミ属, 柎目面, 850倍, スギ型分野壁孔)



試料番号SH-13.6 (モミ属, 木口面, 160倍, 年輪境界を含む)



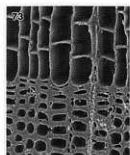
試料番号SH-13.6 (モミ属, 板目面, 85倍, 単列放射組織)



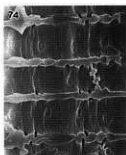
試料番号SH-13.6 (モミ属, 柎目面, 850倍, J型状末端壁)



試料番号SH-13.6 (モミ属, 柎目面, 650倍, スギ型分野壁孔)



試料番号SH-13.7 (モミ属, 木口面, 205倍, 年輪境界を含む)



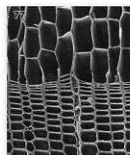
試料番号SH-13.7 (モミ属, 板目面, 650倍, J型状末端壁)



試料番号SH-13.7 (モミ属, 柎目面, 400倍, スギ型分野壁孔)



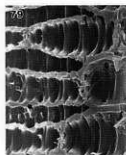
試料番号SH-13.7 (モミ属, 柎目面, 1500倍, 分野壁孔, I型状末端壁)



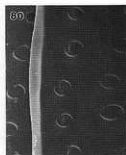
試料番号SP-122 (モミ属, 木口面, 135倍, 年輪境界を含む)



試料番号SP-122 (モミ属, 板目面, 85倍, 単列放射組織)

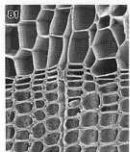


試料番号SP-122 (モミ属, 柎目面, 850倍, J型状末端壁)

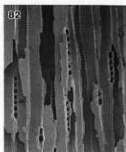


試料番号SP-122 (モミ属, 柎目面, 650倍, スギ型分野壁孔)

写真158 大川遺跡SH-8 伴出炭化材の樹種V



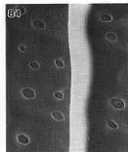
試料番号SH-8.4 (スギ,  
木口面, 205倍, 年輪境界を含む)



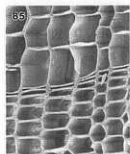
試料番号SH-8.4 (スギ,  
板目面, 110倍, 単列放射組織)



試料番号SH-8.4 (スギ,  
板目面, 650倍, 放射本細胞の壁は薄)



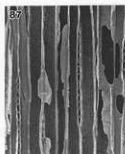
試料番号SH-8.4 (スギ,  
板目面, 650倍, スギ型分野壁孔)



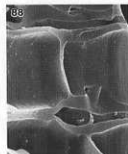
試料番号SH-8.14 (スギ,  
木口面, 175倍, 年輪境界を含む)



試料番号SH-8.14 (スギ,  
木口面, 425倍, 樹脂細胞)



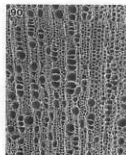
試料番号SH-8.14 (スギ,  
板目面, 120倍, 単列放射組織)



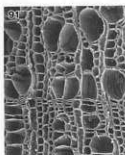
試料番号SH-8.14 (スギ,  
板目面, 1200倍, 放射本細胞の壁は薄)



試料番号SH-8.14 (スギ,  
板目面, 1500倍, スギ型分野壁孔)



試料番号SH-8.8 (ハンノキ属,  
木口面, 435倍, 散孔材)



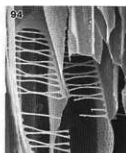
試料番号SH-8.8 (ハンノキ属,  
木口面, 135倍, 年輪境界を含む)



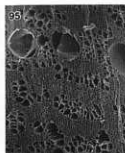
試料番号SH-8.8 (ハンノキ属,  
板目面, 110倍, 単列放射組織)



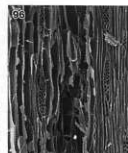
試料番号SH-8.8 (ハンノキ属,  
板目面, 90倍, 集合放射組織)



試料番号SH-8.8 (ハンノキ属,  
板目面, 300倍, 階段せん孔板)

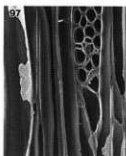


試料番号SH-8.8 (ハリギリ,  
木口面, 30倍, 環状材)

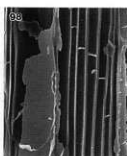


試料番号SH-8.8 (ハリギリ,  
板目面, 65倍, 放射組織は2-5細胞幅)

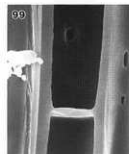
写真199 大川遺跡  
SH-8・13  
伴出炭化材の樹種



試料番号SH-8.8 (ハリギリ,  
板目面, 300倍, 直立細胞)



試料番号SH-8.8 (ハリギリ,  
板目面, 215倍, 隔壁木繊維)



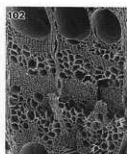
試料番号SH-8.8 (ハリギリ,  
板目面, 150倍, 隔壁木繊維)



試料番号SH-8.8 (ハリギリ,  
板目面, 215倍, 平伏細胞と直立細胞)



試料番号SH-8.8 (ハリギリ,  
板目面, 85倍, ナローズ, 単せん孔)



試料番号SH-13.5 (ハリギリ,  
木目面, 35倍, 環孔材)



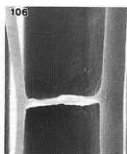
試料番号SH-13.5 (ハリギリ,  
板目面, 85倍, 放射組織と木繊維)



試料番号SH-13.5 (ハリギリ,  
板目面, 45倍, 男性放射組織, 直立細胞)



試料番号SH-13.5 (ハリギリ,  
板目面, 450倍, 単せん孔)



試料番号SH-13.5 (ハリギリ,  
板目面, 2100倍, 隔壁木繊維)

## 文 献

- 大谷 諄 (1999) : 大川遺跡SH-6 伴出炭化木材樹種同定に関する研究 本書所収
- Prior, J. A. B & P. E. Gasson (1990) : Comparative wood anatomy of  
Afromontane and Bushveld species from Swaziland, southern Africa. IAWA  
Bull. n. s. 11 (4), 319-336.
- Prior, J. & K. L. Alvin (1983) : Structural changes and charring woods of  
D-ichrostachys and Salix from southern Africa. IAWA Bull. n. s., 4 (4),  
197-206
- 菅谷恵美子 (1991) : 炭化材のSEM観察 北大農林産学科卒業論文



## 第5節 大川遺跡出土鉄関連遺物の自然科学的調査結果

赤沼英男（岩手県立博物館）

### 1 はじめに

余市川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査によって、北海道余市町大川遺跡では擦文時代に比定される住居跡が見出され、その床面から鉄滓が検出された。この資料の発見によって、擦文時代には住居跡内またはその周辺で鉄に関する生産活動が行われていたことは確実であるが、鉄関連遺物が未確認なため、鉄滓の外観形状だけでその内容を明らかにすることは困難とされた<sup>1)</sup>。

一方、住居跡に隣接する土壌からも相当量の鉄滓が出土し、羽口およびその破片も確認されている。共存遺物の中に住居跡出土の擦文土器があり、陶磁器をはじめとする中・近世の遺物がみられなかったことから、擦文時代に実施された鉄関連操作に伴う廃棄物であった可能性が高いと考えられた<sup>2)</sup>。しかしながら、それらの成因についてはもちろん、住居跡出土遺物との関連を明確にすることはできなかった。

遺跡内での生産活動の実態に迫る有力な手段の一つに、遺物の自然科学的調査がある。現在、多くの文化財関係機関においてこの方法が用いられ、前近代の失われた技術を復元する上での重要な情報が導き出されている。出土鉄関連遺物の自然科学的調査の結果、住居跡内出土遺物の中に鉄滓に加え鉄鉄と過共析鋼の存在が確認され、それらの形状と組成を考慮すれば、鉄鉄を脱炭し鋼を製造するという精錬が行われていた可能性の高いことがわかった。

住居跡に隣接する土壌出土遺物からもほぼ同形状で同じ組成の鉄滓や碗形滓の中に住居跡内出土鉄鉄とほぼ同様の組成の鉄鉄が見出されたことにより、住居跡内またはその周辺で行われていたと推定される精錬操作に伴う廃棄物とみることができた。

遺跡の立地と遺構の状況、ならびに北海道における考古学の発掘調査結果に基づけば、大川遺跡はもとより北海道内での製錬の実施は考えにくく、精錬の素材となった鉄鉄は他地域から供給されたと推定される。住居跡内出土のものと同様の異なる亜共析鋼を素材とする製品または半製品の一部が、土壌内から確認されたことにより、鉄鉄の供給地域が複数あったか、あるいは時代経過とともに供給地域が変わった可能性についても検討する必要があることが示された。以下では、出土資料の自然科学的調査によって得られた知見について述べる。

### 2 調査資料

分析を行った資料は7世紀代に比定可能な住居跡出土碗形滓1点、9～10世紀代に比定可能な住居跡出土鉄塊2点、鉄滓3点、住居跡に隣接する土壌出土鉄滓8点、鉄塊2点、羽口1点の合計17点の資料である。個々の資料の番号、検出層位、推定年代、および外観上の特徴を表48に示す。なお、9～10世紀代の住居跡出土資料については床面直上で見つかったものではなく、覆土

からの検出であるという。厳密には、それらの遺物の時期については9～10世紀以降とすべきところであるが、住居跡覆土からも、中・近世の遺物が未確認であり、擦文時代の土器が混在するという発掘調査結果を加味すれば、住居跡床面直上と同時代に扱うことが可能であるとされた<sup>1)</sup>。

住居跡ならびに土壌出土鉄滓の多くは碗形滓で、凸部表面のところどころに粘土状物質が部分溶融したと思われる異物が付着しており、顕著な木炭の噛み込みがみられないという点で特徴的である。土壌から検出された鉄塊には鉄滓の固着はなく、断面は長方形を呈していた。人為的な加工、すなわち加熱・鍛打による整形が施された資料であることは確実であり、製品か半製品のいずれかと考えられる。一方、土壌出土羽口の先端部分は黒褐色から青灰色を呈しており、部分溶融もしくはほぼ溶融状態にあったものが固化した可能性が高い。残存する資料からもとの健全な羽口の外径は4～5cm、内径は2cmと推定され、部分溶融した先端部の外径、内径はさらに細くなる。木炭を燃焼させるために使用された羽口とするには特異な形状といえる。

これらの外観形状の特徴を考慮に入れ、それに後述する自然科学的調査結果を加味しながら、まず、住居跡内出土資料がどのような操作に伴って生成したのか、その成因を検討した。既述のとおり、住居跡に隣接する土壌からも鉄関連遺物と混在し擦文土器が見出されているが、陶磁器をはじめとする中・近世の遺物は未検出であったという<sup>1)</sup>。住居跡内もしくはその周辺で実施された操作の過程で生成した鉄滓が、使用不能となった道具・製品あるいは半製品と共に廃棄された可能性があることを示している。そこで、土壌内出土遺物の形状と組成を基に、それらの成因について考察し、その結果と住居跡内出土資料に関する調査結果を比較しながら、その問題の解明を計ることとした。この場合の重要な比較項目は、鉄関連遺物の成因と出発・生成物質の組成にある。以下では、その点を特に注視し、考察を進めることとする。なお、後述するとおり、総合的な考察に当たっては、時代特定が困難なU22Grid II層、S22Grid I層、ならびにP22Grid II層出土鉄滓の組成についても比較・検討したが、これらの遺物に関する調査結果の説明は割愛した。

### 3 分析用試料の調整

鉄滓ならびに鉄塊については、図254～259の外観写真に示す位置に切り込みを入れ、2つの小試料片を摘出した。ふいご羽口については部分溶融をしているとみなすことのできる部分から、資料の外観形状を損ねることのないよう細心の注意を払いながら、ダイヤモンドカッターを使って試料片を摘出した。

### 4 分析方法

羽口を除く資料から摘出した試料片のうち、大きい方のものをエポキシ樹脂で固定し、エメリー紙、ダイヤモンドペストを使って研磨した。このようにして作成した研磨面を金属顕微鏡で観察し、成因を推定するうえで重要と判断された鉄塊中の非金属介在物（鋼を製造する過程で分離

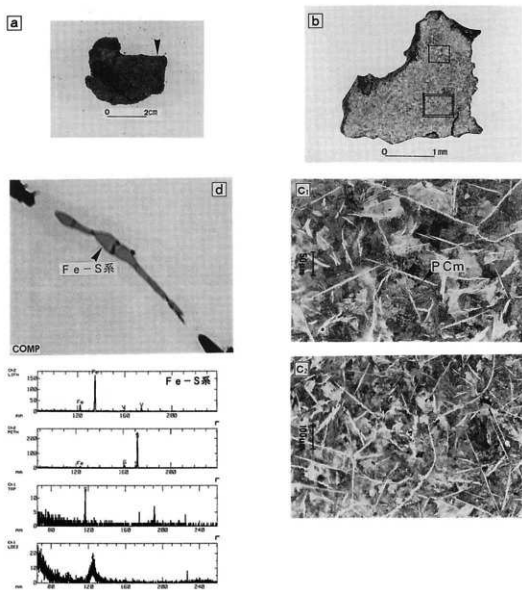


図254 No 3鉄塊の外観と組織観察結果

- a : 外観、矢印は試料片抽出位置。      b : 抽出した試料片のマクロエッチング組織  
 c1・c2 : それぞれbの枠、二重枠で囲んだ内部のマイクロエッチング組織  
 d : 残存する非金属 inclusion のE P M Aによる組成像と定性分析結果

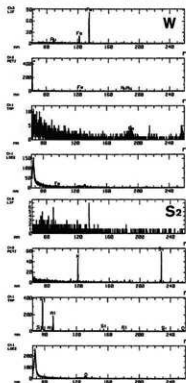
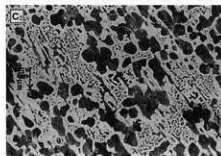
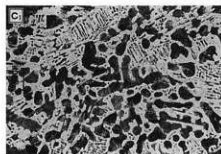
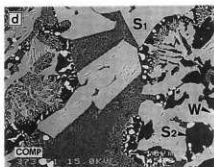
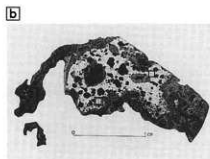
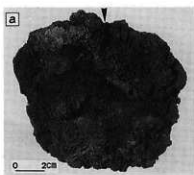


図255 No.8 鉄塊の外観と組織観察結果

- a : 外観 (No.8 鉄塊は a の楕形枠の中に残存)。矢印は試料片抽出位置。
- b : 抽出した試料片のマクロエッチング組織
- c1・c2 : それぞれ b の枠、二重枠で囲んだ内部のマクロエッチング組織
- d : 鉄塊に付着する鉄滓の EPMa による組成像と定性分析結果  
W はウスタイト (化学理論組成  $\text{FeO}$ )、  
S1・S2 はガラス質けい酸塩








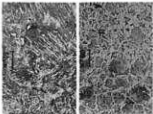
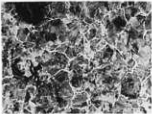
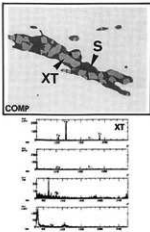
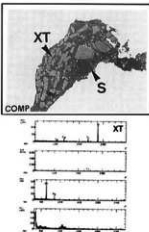
	№4 鉄塊	№9-1 鉄塊	№9-2 鉄塊
外観			
マクロ組織			
ミクロ組織			
組成像と定性分析			

図256 鉄塊の外観と組織観察結果

矢印は試料片抽出位置。マイクロエッチング組織はマクロエッチング組織またはマクロ組織の枠で囲んだ内部。ただし、9-1鉄塊についてはマイクロエッチング組織右は枠内部、左は二重枠内部に対応。

XTはFe-Ti-Al-Mg-O系化合物、Sはガラス質けい酸塩。

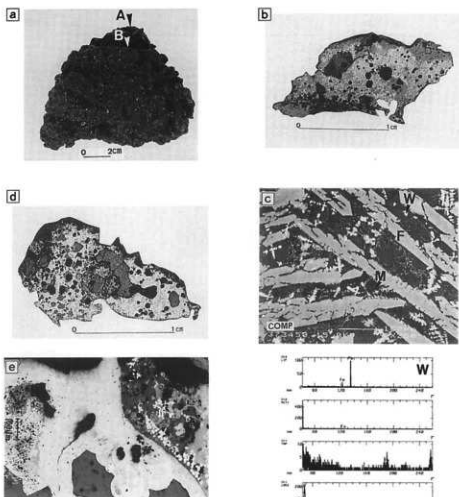


図257 No. 5鉄洋の外観と組織観察結果

- a : 外観  
 b : aのA部から抽出した試料片のマクロ組織  
 c : bの枠で囲んだ内部のEPMAによる組成像と定性分析結果  
 Wはウスタイト (化学理論組成 $\text{FeO}$ )、  
 Fは $\text{FeO}-\text{MgO}-\text{SiO}_2$ 系化合物。  
 d : aのB部から抽出した試料片のマクロ組織  
 e : dの枠で囲んだ内部のミクロ組織

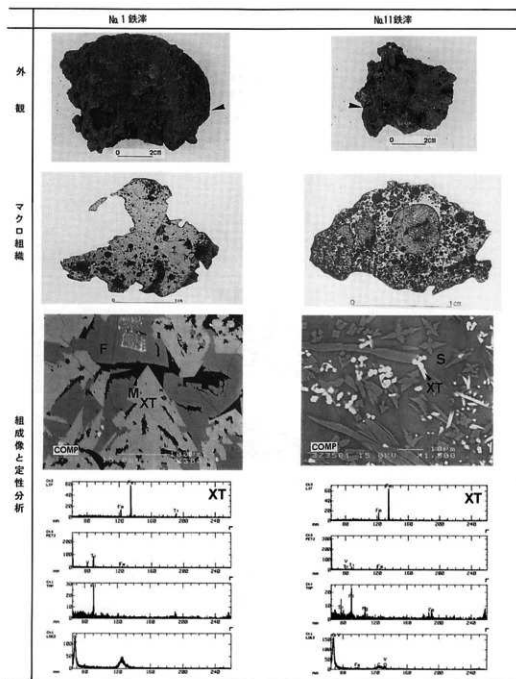


図258 No.1・No.11鉄滓の外観と組織観察結果

外観の矢印は試料片抽出位置。マクロ組織の枠で囲んだ内部をEPMAで分析。  
 COMPはEPMAによる組成像、XTはFe-Ti-Al-V-O系化合物、FはFeO-MgO-SiO<sub>2</sub>系化合物、  
 Mはマトリックス、Sはガラス質けい酸塩。


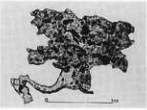
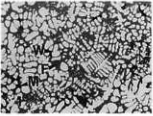





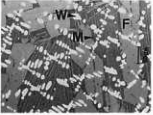




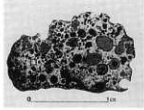
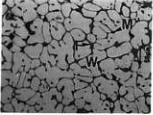



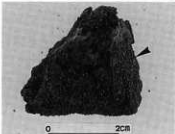
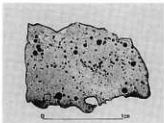


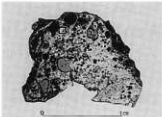
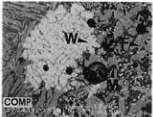
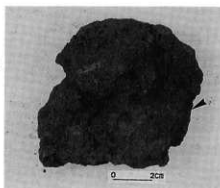
№	外 観	マクロ組織	ミクロ組織
№2 鉄滓			
№6 鉄滓			
№7 鉄滓			
№10-1 鉄滓			
№10-2 鉄滓			

図259 鉄滓の外観と組織観察結果 (その1)



№	外 観	マクロ組織	ミクロ組織
№.12鉄滓			
№.13鉄滓			
№.14鉄滓			

NO.2  
外観



NO.7  
外観

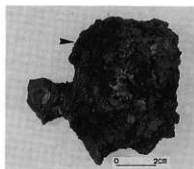


図259 鉄滓の外観と組織観察結果(その2)

外観の矢印は試料片挿入位置、ミクロ組織観察位置は、マクロ組織の枠で囲んだ内部。  
 Wはウスタイト(化学理論組成 $\text{FeO}$ )、Fは $\text{FeO-MgO-SiO}_2$ 系化合物、Hは $\text{FeO-Al}_2\text{O}_3$ 系化合物。  
 W'は主として酸化鉄からなる相と $\text{Fe-Al-Ti-O}$ 系の相が混在する粒子。

・除去することができずに残った異物)、および鉄滓中の鉱物相については、エレクトロン・プローブ・マイクロアナライザー (EPMA) によりその組成を分析した。また、相当量の健全なメタルが残存していた試料片については、ナイトール(硝酸2.5mlとエチルアルコール97.5mlの混合溶液)で腐食し、その組織を調べた。

摘出したもう一方の試料片については、その表面に付着する錆や土砂を除去した後、エチルアルコール、アセトンで洗浄し定温乾燥機の中で十分に乾かした。そして、鉄塊から摘出した試料片については直接に、羽口および鉄滓については粉砕の後、テフロン分解容器に秤量し、酸を使って溶解した。

このようにして調整した溶液中の、T, Fe, Cu, Mn, P, Ni, Co, Ti, Si, Ca, Al, Mg, V の12成分を誘導結合プラズマ発光分光分析法 (ICP-AES 法) で分析した。また、鉄塊中のC・Sについては燃焼赤外線吸収法、鉄滓中のFeOは酸可溶性鉄(Ⅱ)定量法によった。

## 5 分析結果

### 5-1 鉄塊から摘出した試料片の組織観察結果

住居跡出土No.3(図254a)から摘出した試料片のナイトールによるマクロエッチング組織は、その全域がほぼ一様に黒く腐食されている(図254b)。図254bの枠および二重枠で囲んだ内部には針状に析出した初析セメントタイト(PCm)がみられ、基質はパーライト〔フェライト( $\alpha$  Fe)とセメントタイト( $\text{Fe}_3\text{C}$ )の共析組織]からなる(図254C1・C2)。摘出した試料片のほぼ全域が同様の組織によって構成されており、過共析鋼(炭素含有量が0.8%を超える鋼)と判定される<sup>2)</sup>。摘出した試料片にはところどころにやや暗灰色をした微小な非金属介在物が残存していた。図254dには代表的な非金属介在物のEPMAによる組成像(COMP)と定性分析結果を示したが、それに従えばFe-S系であり、鋼製造に使用された原料鉱石に起因すると推定される。

土壌内出土 No. 9-2から摘出した試料片はその全域が網目状に析出したフェライトとそれらを埋めるパーライトからなる。フェライトは針状に析出していたため、パーライト変態点以上の高温領域から空冷されたものと推定された(図256右欄)。

このような場合、焼戻し操作により標準組織に変えたうえで炭素量を評価する必要があるが、標準試料の組織観察結果<sup>2)</sup>と当該試料のパーライトの分布状況の対比によって、0.4%もしくはそれ以上の炭素量とみることができると推定される。図3中央の組織観察結果が示すように、No. 9-1はフェライトとパーライトからなる組織によって構成されている。パーライトの占める面積割合が5割を超える領域(図256右欄マイクロ組織左)と5割未満の領域(図256右欄マイクロ組織右)が観察され、炭素濃度分布が不均一な亜共析鋼(炭素含有量約0.8%未満の鋼)であることがわかった。2つの試料片にはともに灰色の結晶XTと黒色のガラス質けい酸塩(S)からなる非金属介在物がみられ、EPMAによる分析によって結晶XTはFe-Ti-Al-O系化合物、ガラス質けい酸

塩は $\text{FeO}-\text{CaO}-\text{K}_2\text{O}-\text{Al}_2\text{O}_3-\text{MgO}-\text{SiO}_2-\text{P}_2\text{O}_5$ 系であることを確かめられた。特にNo 9-2については化合物XT, ガラス質けい酸塩ともに酸化鉄はほとんど含まれておらず(図256右側EPMA定性チャート), 相当の高還元状態で(炭材もしくは相当量のCを含む鉄と接触することによって生成したスラグが鋼中に取り込まれたものと推定される)で生成した鉄滓が鋼中に取り込まれたものと判断された。

表48に示すとおり, No 8は土壌出土No 8 碗形滓底部に混在していたものであり, No 8 碗形滓から鉄滓の試料片を抽出する過程でその混在が確認された。健全なメタルには相当数の気孔がみられ, その周縁部には灰色粒状をしたウスタイト(化学理論組成 $\text{FeO}$ )と $\text{FeO}-\text{MgO}-\text{SiO}_2$ 系(S1)  $\text{K}_2\text{O}-\text{Al}_2\text{O}_3-\text{SiO}_2$ 系(S2)のガラス質けい酸塩, それに微小結晶が析出したマトリックス(M)からなる鉄滓が付着している(図255b~d)。健全なメタルをナイターで腐食したもののマクロエッチングはほぼ全域が黒く腐食され, レーデブライトと呼ばれる鉄特有の組織(溶融した鉄鉄が急速に冷却されたときに生成する組織であり, 破面が白色を呈する<sup>1)</sup>)であることが確かめられた。図256左側に示す住居跡出土No 4から抽出した試料片にもレーデブライト組織がみられ, ところどころに片状黒鉛(G)も観察された。上述の組織観察結果は表49右側にまとめられる。

### 5-2 鉄塊から抽出した試料片の化学組成

5点の鉄塊のT, Feは90~98%にある。ほぼ健全なメタル試料が分析されたとみることができ, 分析結果に対する埋蔵環境からの富化の影響はほとんどないものと判断される。No 3・8からはそれぞれ1.81%, 3.64%, No 9-1・2からはそれぞれ0.23, 0.46%のCが検出された。

これらの結果はNo 8は鉄鉄, No 3は過共析鋼, No 9-1・2は亜共析鋼とした前述の組織観察結果と良く整合する。No 3には他の4点の鉄塊の3倍を超える0.066%のSが, No 9-1・2には他の3倍を超える0.03~0.05%のTiが含有されているが, これらのほとんどは鋼中の非金属介在物組成に起因するものと推定される。また, No 4・8, No 9-1・2からは, 0.1%を超えるPが分析され, No 9-2には0.062%のCも検出された。

### 5-3 鉄滓から抽出した試料片の組織観察結果

住居跡出土No 5は2つの碗形滓が付着した資料である。上の碗形滓から抽出した試料片にはいたるところに空隙がみられ, ところどころに錆が混在していた。鉄滓はそのほとんどが灰色の粒状結晶W, 暗灰色の柱状結晶F, および微細な結晶が析出したマトリックス(M)からなり, EPMAによる分析によって, 結晶Wはウスタイト, 結晶Fは $\text{FeO}-\text{MgO}-\text{SiO}_2$ 系化合物(マグネシウムを固溶した鉄かんらん石; 2( $\text{Fe}, \text{Mg}$ ) $\text{O} \cdot \text{SiO}_2$ と推定される)であることがわかった(図257b・c) 図257d・eおよび図259から明らかなように, No 5下の碗形滓, 住居跡出土No 2 碗形滓, および土壌出土No 6塊状滓, No 7・No 10-1 碗形滓, No 10-2 流状滓もほぼ同様の

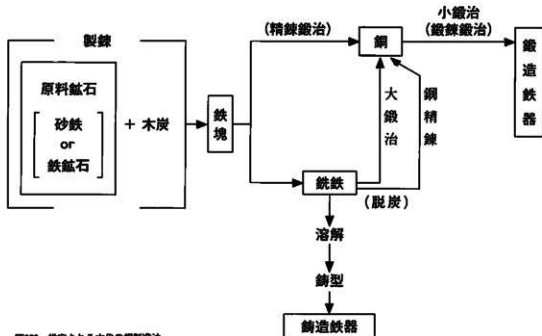


図260 推定される古代の鋼製造法

表48 資料の概要

No.	検出遺跡 (遺跡番号)	推定年代	外 観 の 特 徴	
1	SH-3	5	9~10c以降	塊形滓の一部。破断面は黒褐色を呈し、著しい気孔がみられる。表面内部には青灰色の異物が付着している。
2	SH-3	3	9~10c以降	塊形滓の一部。ところどころに赤錆が析出している。破断面は黒褐色を呈し、著しい気孔がみられる。
3	SH-3	3	9~10c以降	表面に赤錆が析出し、亀裂がみられる。副気量の鉄分が残存しており、鉄塊と推定される。
4	SH-3	2	9~10c以降	表面に赤錆が析出し、亀裂がみられる。相当量の鉄分が残存しており、鉄塊と推定される。
5	SH-1)	床面	7c	2つの塊形の鉄滓が溶着したものと推定される。木炭のかみ込みがみられない。黒褐色を呈し、内部には木の棒でつづいたと思われる跡がみられる。
6	UP-19	(22)	9~10c	塊状滓。わずかに木炭のかみ込みがみられ、表面に青灰色の異物が付着している。破断面は黒褐色を呈し、ところどころに赤錆が析出している。
7	UP-19	(21)	9~10c	塊形滓。破断面は黒褐色を呈し、ところどころに赤錆も析出している。気孔がみられる。
8	UP-19	9	9~10c	塊形滓。表面内部には青灰色を呈する異物（粘土状物質が部分溶融したものとと思われる）が付着している。内部に鉄塊が残存していたため、それを抽出し鉄滓とは別に調査した。
9-1	UP-19	-	9~10c	表面に赤錆が析出し、亀裂がみられる。副気量の鉄分が残存し、鉄塊と推定される。
9-2	UP-19	-	9~10c	表面に赤錆が析出し、亀裂がみられる。副気量の鉄分が残存し、鉄塊と推定される。
10-1	UP-19	覆土	9~10c	塊形滓の一片。破断面には気孔のかみ込みがみられる。内部には部分溶融した粘土状物質が付着している。
10-2	UP-19	覆土	9~10c	塊状滓。黒褐色を呈する。
11	UP-19	-	9~10c	塊形滓の一部。他の資料に比べ軽く、多孔質な資料である。青灰色を呈する。
12	UP-19	-	9~10c	塊形滓の一部。表面に白色~灰色を呈し部分溶融したと思われる粘土状物質が付着している。
13	SH-3	6	9~10c	塊状滓。破断面は黒褐色を呈し、ところどころに赤錆も析出している。気孔がみられる。
14	UP-19	-	9~10c	塊状滓。破断面は黒褐色を呈し、ところどころに赤錆も析出している。気孔がみられる。
15	UP-19	-	9~10c	窪み先地部破片。外径4~5cm、内径約2cmと推定される。先端部は黒色~青灰色を呈し、部分溶融している。

注1) 検出遺跡・出土層位・推定年代は 宮 文明氏による。

注2) №は筆者による分析資料番号。№13・14は組織観察のみ実施。№14は№9-1・2と合併している。

表49 鉄塊の分析結果

No.	化 学 成 分 (%)													ミクロ組織	n.m.i	
	T.Fe	C	S	Cu	Mn	P	Ni	Co	Ti	Si	Ca	Al	Mg			V
3	96.05	1.81	0.066	0.004	0.021	0.033	0.014	0.013	0.001	0.007	0.001	0.008	0.001	0.029	PCm(0.8<)	FeS
4	M 90.03	-	-	0.030	0.004	0.201	0.026	0.018	0.010	0.195	0.077	0.063	0.018	0.003	L, G	-
8	91.19	3.64	0.018	0.021	0.003	0.120	0.025	0.022	0.008	2.50	0.090	0.100	0.029	0.001	L	-
9	① 95.30	0.23	0.008	0.007	0.011	0.127	0.026	0.032	0.043	7.53	0.130	0.112	0.054	0.001	Cm(0.2~0.3)(0.5<)	XT, S
	② 97.68	0.46	0.004	0.013	0.022	0.137	0.030	0.062	0.039	2.19	0.403	0.403	0.171	0.003	Pa	XT, S

注1) C・Sは燃焼赤外線吸収法、他はICP-AES法による。

注2) Lはレーアブライト、Gは片状黒鉛、Paはパーライト、PCmは初析セメント石、カッコ内の数字はミクロ組織から推定される数量値。

注3) XTはFe-Ti-Al-O系化合物、Sはガラス質けい酸塩、Mはマトリックス、-は分析せず。

表50 鉄滓の化学組成

No.	化 学 成 分 (%)													鉱物組成	
	T.Fe	FeO	Cu	Mn	P	Ni	Co	Ti	Si	Ca	Al	Mg	V		
1	38.71	36.6	0.005	0.096	0.276	0.008	0.010	0.265	12.8	2.40	3.14	0.582	0.009	(W, XT, F, M)(XT, F, M)	
2	59.53	20.9	0.028	0.021	0.222	0.022	0.025	0.051	2.79	0.236	0.634	0.169	0.001	W, F, M	
5	上	49.99	46.4	0.009	0.056	0.116	0.006	0.010	0.361	12.1	1.97	3.10	1.02	0.013	W, F, M(R)
	F	55.73	59.8	0.002	0.047	0.112	0.005	0.005	0.206	9.96	1.05	1.81	0.628	0.009	W, F, M(R)
6		66.28	75.2	0.006	0.037	0.079	0.011	0.009	0.058	3.50	0.557	0.602	0.211	0.004	W, F, M
	(7)	27.14	24.4	0.009	0.137	1.02	0.006	0.007	0.284	16.3	2.25	2.97	1.30	0.012	W, F, M
7		56.57	66.7	0.003	0.081	0.100	0.013	0.007	0.210	9.13	0.739	1.72	0.373	0.019	W, F, M
8		40.73	38.8	0.003	0.083	0.403	0.004	0.005	0.280	13.6	1.53	2.31	0.603	0.008	W, S, M
	(7)	32.89	8.66	0.002	0.072	1.78	0.005	0.004	0.195	11.3	0.926	2.14	0.531	0.007	-
10	①	55.00	62.5	0.002	0.059	0.139	0.006	0.004	0.110	0.19	0.570	1.27	0.340	0.008	W, F, M
	②	67.30	72.7	0.004	0.035	0.110	0.012	0.015	0.074	2.90	0.263	0.403	0.209	0.004	W, F, M
11		10.47	3.43	0.001	0.157	0.491	0.002	0.005	0.654	24.6	1.51	4.00	0.697	0.026	XT, S
12		47.73	54.8	0.001	0.247	0.222	0.005	0.013	5.02	8.97	0.959	2.19	0.842	0.041	XT, S, M
13		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	W, H, F, M	
14		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	W, F, M	

注1) FeOは酸可溶性鉄(II)定量法、他はICP-AES法による。(7)は焼酎滓内部表面の青灰色の異物を示す。

注2) Wはウスタイト(化学用語組成FeO)、XTはFe-Ti-Al-O系化合物、FはFeO-MgO-SiO<sub>2</sub>系化合物、Sはガラス質けい酸塩、MはFeOとFe-Al-Ti-O系の珪酸塩相が混在した粒子、Mはマトリックス。

表51 No15羽口の化学組成

T.Fe	FeO	Cu	Mn	P	Ni	Co	Ti	Si	Ca	Al	Mg	V
19.52	4.74	0.003	0.066	0.126	0.003	0.006	0.362	22.9	1.07	4.96	0.763	0.015

表52 9~13世紀出土鉄塊の組成

出土遺跡	推定年代	化 学 成 分 (%)										ミクロ組織
		T.Fe	C	S	Cu	Mn	P	Ni	Co	Ti	Si	
若子塚志波城跡	9世紀	75.15	-	-	0.007	0.008	0.104	-	-	<0.001	0.36	レーアブライト
東京都羽所遺跡	10世紀	91.3	4.16	0.055	0.031	0.009	0.195	0.022	0.045	tr	0.064	レーアブライト・片状黒鉛
若子塚志波城跡	12世紀	90.9	3.55	0.032	0.008	<0.001	0.113	0.019	0.034	0.007	0.178	片状黒鉛
新野原北沢遺跡	13世紀	91.6	2.82	0.072	0.006	<0.001	0.226	0.016	0.021	0.006	0.089	片状黒鉛

注) C・Sは燃焼赤外線吸収法、他はICP-AES法による。-は分析せず、trは痕跡。

鉱物組成をとる。

住居跡出土Na1 楕形滓から抽出した試料片には、一辺が  $100\mu\text{m}$  を越える灰色の角状をした  $\text{Fe-Ti-V-Al-O}$  系結晶XT, 暗灰色の  $\text{FeO-MgO-SiO}_2$  系結晶Fがみられ、それらの回りは微細な結晶が析出したマトリックスによって埋められた組織(図258右欄)、およびそれにウスタイトが残存する組織が認められた。住居跡出土Na13塊状滓, 土壌出土Na12楕形滓, Na14塊状滓には灰色相とやや暗灰色相が混在した粒子の集合体が見られる。EPMAによる分析によって、灰色相はウスタイト, 暗灰色相は  $\text{Fe}\cdot\text{Al}\cdot\text{Ti}\cdot\text{O}$  を主成分とすることがわかった。

また、Na13にはやや暗灰色の  $\text{FeO-MgO-SiO}_2$  系化合物Fと暗灰色の  $\text{FeO-Al}_2\text{O}_3$  系化合物H [ハースナイト ( $\text{FeO}\cdot\text{Al}_2\text{O}_3$ ) もしくはそれに近い組成の化合物と推定される] が、Na14には  $\text{FeO-MgO-SiO}_2$  系化合物が残存しており、Na12では  $\text{CaO, Al}_2\text{O}_3\text{SiO}_2$  を主成分とするガラス質の酸塩が粒子の回りを取り囲んでいた(図259)。土壌出土Na11楕形滓は青灰色を呈する多孔質な試料である。抽出した試料片は  $\text{Fe-Ti-Al-Si-Mg-O}$  系化合物XTと  $\text{Fe-Al-Ca-Mg-Si-O}$  系化合物、および  $\text{CaO-Al}_2\text{O}_3\text{-MgO-SiO}_2$  系のガラス質の酸塩(S)によって構成されていた(図258右欄)。

#### 5-4 鉄滓ならびに羽口先端部分溶融物質の化学組成

鉄滓ならびに羽口先端部分溶融物質の化学組成を表50・51に示す。Na6および8はともに楕形滓であり、表面凸部分には青灰色の異物が付着していたので、その部分も分別し分析した。青灰色の異物、Na11を除く10点のT, Fe, FeOはそれぞれ38~68%, 20~76%にある。抽出した試料片はそのほとんどが、錆にウスタイト,  $\text{FeO-MgO-SiO}_2$  系化合物, ガラス質の酸塩またはマトリックスからなる鉄滓が混在した組織をとることが判明しているが、前述の分析結果もそれとよく整合する。T, Fe, FeOにかなりのばらつきがみられ、反応が不均一に進んだことに起因すると思われる。Si, Alはそれぞれ2~17%, 0.4~3.2%にある。一方、表50から  $(\text{CaO}+\text{MgO})/\text{SiO}_2$ ,  $(\text{CaO}+\text{MgO})/\text{Al}_2\text{O}_3$  を求めると、前者は0.11~0.15, 後者は0.7~1となる。

Na6およびNa8楕形滓表面の青灰色異物のT, Fe, FeOは、いずれもその内側に残存する鉄滓よりも低レベルにある。異物の内部で酸化鉄に富んだスラグが形成され、そのスラグと粘土状物質とが反応した可能性があることを示しているともいえる。他に比べ軽く青灰色をした多孔質資料であるNa11から抽出した試料片のT, Fe, FeOはそれぞれ、10.47%, 3.43%と分析試料片の中で最も低く、Si, Alを主成分としている。粘土状物質が部分溶融し酸化鉄にわずかに反応したものが発泡したものである。Na6・8楕形滓表面の青灰色異物、ならびにNa11の  $(\text{CaO}+\text{MgO})/\text{SiO}_2$   $(\text{CaO}+\text{MgO})/\text{Al}_2\text{O}_3$  はそれぞれ0.15~0.06, 0.43~0.95にある。前述の鉄滓の化学組成から求めた値とほぼ同程度にある。鉄滓は酸化鉄と青灰色の異物の他に、Ca・Mg 鉱物を含むなんらかの造滓材が反応し生成したと推定される。

№15羽口の先端は黒褐色から青灰色を呈し、部分溶融したものが固化したものと推定された。青灰色の部分の化学成分分析結果は表4に示すとおりである。Siは22.9%、Alは4.96%、T、Feは19.52%、FeOは4.74%検出されている。この分析結果から、操作の過程で羽口先端部分が、ほぼ溶融もしくは部分溶融した鉄滓に接触する状況が存在したものと解釈される。

## 6 古代ならびに中世における鋼の製造

遺物の形状とその組成を基に大川遺跡出土鉄関連遺物の成因について考察する前に、現在提案されている古代末ならびに中世における鋼製造法について検討する。まず、原料鉱石〔砂鉄<sup>3)</sup>もしくは鉄鉱石〕を製錬して鉄が生産される。それによって得られる主生成物の組成に対する見解によって、以後の作業手順に対する考え方に差異が生じることになる。

製錬産物である鉄は炭素含有量に応じ、鋼と銑鉄の2つに分類される。製錬炉で得られた鉄から極力前者の鋼部分を抽出して、含有される不純物を除去するとともに、炭素量の増減を行って目的とする鋼を製造する。そして、その鋼を使って製品鉄器が制作されたとする見方がある<sup>3)</sup>。製錬炉で直接に鋼が造り出されるという意味で、この方法は直接製鋼法に位置づけることができる。そして、この方法によって得られた鉄（炭素量が不均一で相当量の鉄滓が混在した鉄、主に鋼からなるが銑鉄も混在すると考えられている）を精製し目的とする鋼に変えるという上述の操作は、精錬鍛冶<sup>4)</sup>と呼ばれている。

ところで、製錬では銑鉄も生産される。銑鉄は再び溶解し、鋳型に注ぎ込むことによって鋳造鉄器となる。また、銑鉄中の炭素を低減させる、すなわち脱炭することによって鋼も製造できる。古代・中世における脱炭の具体的方法として、銑鉄浴を造り、それを砂鉄または鉱石粉といった少量の鉄酸化物を含む物質を用いて造られたスラグと接触させ脱炭を計るという操作が実施されていた可能性が高いとする見解が、遺物の自然科学的解析結果に基づき示されている<sup>4)・7)</sup>。しかしながら、設備の概要も含め、操作方法の詳細は未解明にある。一方、続く近世においては、たたら吹き製鉄における大鍛冶がよく知られている。

近世たたら吹き製鉄には鉄押法と錫押法の2つの方法があるが、前者による鋼の製造法については、中沢潤人氏が山田賢一氏の論文を基に詳しく説明されている（厳密には包丁鉄、現代製鋼でいえば $\alpha$  Feに近い組成の鋼と推定される）<sup>8)</sup>。

それによると、製錬炉でまず銑鉄が生産される。生産の主目的物はあくまで炉外に排出される鉄鉄であるが、副生成物として炉内に鋼鉄もできる。これは操業の妨げになるので、鉄棒をたえず炉内に入れ炉外に取り出すようつとめる。このようにして生産された銑鉄を鍛冶場に運ぶ。ここではまず、火床炉の炉底に木炭を積み、その上に銑鉄を羽口前にアーチ形に積み重ね、さらに小炭で覆い、底部に点火する。積み重ねられた銑鉄は内部にあるものから溶融し、滴下する。

この時、羽口付近の酸化性火焰によれ、酸化されて鋼(左下鉄)となる。ここまでの操作を「左下」という。左下鉄は製錬時の副生成物である錫とともに再度同じ火床炉にアーチ状に積み重ね、

上述と同様にしてさらに脱炭が計られる。脱炭が十分に進んだところで、金敷の上のせ、加熱・鍛打によって鉄滓の除去と整形がなされる。後者は「本場」と呼ばれる。このように「左下」と「本場」、2つの操作を経て包丁鉄を造る方法是一般に大鍛冶といわれている。

上述から明らかなように、鋼の製造方法としては、直接製鋼法による精練鍛冶、間接製鋼法、すなわち銑鉄を脱炭し鋼を製造するという方法（以下では精練と呼ぶ）の基本的に2つの異なる方法があり、さらに、後者の場合、大鍛冶とは別の脱炭方法が提案されていることがわかる。それらは図260に整理される。古代・中世においても、遺構と遺物の形状およびその組成から判断して、近世のたたら吹き製鉄における大鍛冶と同じ方法がとられたと判断できる場合には、特に大鍛冶と呼ぶこととする。

なお、大鍛冶における「本場」の操作は、出発物質こそ異なるものの、先に述べた精練鍛冶と操作方法自体は基本的に同じといえる。このように、古代・中世においても複数の鋼製造法が提案されているわけであるが、文献資料が乏しい関係上、操作設備も含めその実態については未解明にある。

特に、上述の精練鍛冶の実施にあたっては、出発物質となる炭素量が不均一で鉄滓の混在した鉄の入手方法が問題となる。すなわち、当時そのような鉄が流通しており、その供給を受けて精練鍛冶が行われていたか、あるいはそのような鉄の流通がなかったとすれば、精練鍛冶が実施されていたと考えられる遺跡の近傍で、そのような組成の鉄を造り出すための製錬がなされていたとみなければならないことになる。

このように、精練鍛冶を想定した場合には出発物質の入手方法に関する検討も併せて必要となる。なお、精練鍛冶の出発物質は「兎鉄」と呼ばれている<sup>3)</sup>が、福田豊彦氏による文献資料の研究によってそれは「銑鉄」であり、その流通は平安末まで溯る可能性があることが指摘されている<sup>4)</sup>。

また、東大に収蔵されている「鐵山必要記事」を研究された館充氏も、近世においては銑鉄を製錬し鋼を製造する方法が主流であり、中国地方による鋼作りは主としてこの方法に依拠していた可能性が高いことを報告されている<sup>5)</sup>。それでは銑鉄浴を造り、少量の鉄酸化物を用いてそれを脱炭するという方法を想定した場合の技術的課題は何であろうか。この操作では、吸熱反応である少量の鉄酸化物を含む物質を熔融する際の温度変化を抑制し、精練温度を維持するための設備あるいは操作方法が確立されていて、はじめてその実施が可能となる。以下ではこれらの点をも考慮に入れて、大川遺跡住居跡ならびに土壌出土銑鉄・鋼、および鉄滓の成因について検討する。

## 7 縄文期の大川遺跡における鉄関連生産活動

### 7-1 出土鉄関連遺物の成因

7世紀代に比定される住居跡からは2つの楕形滓が付着した資料が検出された。抽出した試料片のマイクロ組織は、ウスタイト、鉄かんらん石と思われる化合物、およびマトリックス(M)からなる鉄滓と錆とが混在するものであった。9～10世紀代と推定される住居跡覆土、土壌の中か



らもほぼ同様の組成の資料が出土し、さらに酸化鉄、酸化チタン、および酸化アルミニウムからなる化合物や、酸化鉄を主成分とし微量に酸化アルミニウムと酸化チタンを含む暗灰色相と酸化鉄からなる灰色相によって構成される粒子が残存した鉄滓とともに、銑鉄塊や過共析鋼も確認されている。

銑鉄塊には0.2%を超えるPが含有されており、過共析鋼からは0.066%のSとFe-S系非金属介在物が検出された。なお、椀形滓の表面凸部には粘土状物質が部分溶融したと考えられる異物が付着しており、木炭の噛み込みがみられないという点で特徴的である。

検出された鉄滓には錆が混在しており、操作の過程でほぼ溶融もしくは部分溶融した鉄滓に鉄が接触した状態が存在していたことは確実である。6に基づけば製錬・精錬鍛冶、または銑鉄を脱炭し鋼を製造するという精錬のいずれかが考えられる。

製錬の実施には、まとまった鉄資源と木炭はもとより、気密性を確保できる炉が不可欠である。出土銑鉄ならびに鋼の組成からは、製鉄原料としては相当量のPまたはS鉱物を含む鉄鉱石が使用された可能性があることが伺えるが、遺跡内およびその周辺で製鉄原料となる鉄資源は賦存せず、まとまった量の木炭の入手も困難であるという<sup>1)</sup>。遺跡の立地と製錬につなげることができる炉跡が未検出である<sup>1)</sup>ことをふまえれば、製錬の想定には無理がある。

それでは精錬鍛冶についてはどうであろうか。この操作では、銑鉄や鋼からなる炭素量の不均一な鉄に相当量の鉄滓が混在したものが出発物質として使用される。従って、精錬鍛冶の目的は鉄塊からの鉄滓の除去と炭素量の低減・均一化にある。ふいご羽口からの送風による木炭の燃焼を熱源にした場合の操業時における到達可能な温度を考慮すれば、鋼が混在した鉄塊を溶融することは難しい。基本操作は火焔炉による加熱とその後鍛打にあったと推定される。鍛打の際には付着する鉄滓が破砕・除去されるので、廃棄されるものの中にはかなりの割合で破断面を有する微小鉄滓が存在するはずである。

一方、加熱の過程で付着鉄滓の一部が部分溶融し、火焔炉底部に残る場合もある。その場合には熱源である相当量の木炭が噛み込まれることになるが、そのような資料は未確認にある。また、精錬鍛冶の実施にあたってはその出発物質となる銑鉄や鋼が混在した炭素量が不均一で、相当量の鉄滓を含む鉄の入手が必要である。近傍で製錬が実施されている場合にはその獲得が容易であるが、大川遺跡ではもちろん、北海道内において製錬の実施を主張することは難しい。従って、精錬鍛冶に不可欠な鉄の広域的な流通があってはじめてその実施が可能となるわけであるが、価値換算という問題や前述した文献資料の研究結果に基づけば、それは考えにくい。

既述のとおり、検出された鉄滓、とりわけ椀形滓には木炭の噛み込みがほとんどみられず、凸部への付着もない。凸部表面に青灰色を呈し、粘土状物質が部分溶融したとみることのできる異物が一面に付着しているという事実、あるいは椀形滓の中に銑鉄が残存した資料の検出を考慮すれば、なんらかの容器もしくはそれに類似した設備の中に溶銑を造り、その脱炭を計るという操作を考えることができる。この立場に立てば9～10世紀代に比定される住居跡内出土の銑鉄は出

発物質であり、過共析鋼は製造された鋼に位置づけることができる。酸化鉄に富み、鉄チタン酸化物やTi・Alを含む粒子が残存した鉄滓の検出は、操作時に少量の鉄酸化物を含む造滓材を用いスラグが造られ、それを溶鉄と接触させていた可能性があることを示している。

土壌内からは、亜共析鋼とともに、外径4～5cm、内径約2cmの羽口先が見出された。先端部はほぼ溶融、もしくは部分溶融し、鉄滓と接触する状況があったものと推定される。加えて、部分溶融した先端部の内径がさらに細くなるという形状は、炉内、とりわけ鉄滓中に強風（空気）が送り込まれたことを示唆している。粘土状物質に少量の鉄酸化物を用いて造られたほぼ溶融状態にある液体の下に溶鉄を造り、それに空気を吹き付けることによって溶鉄の脱炭を進行させ鋼を製造するという操作がなされていたことを想定することができる。

大川遺跡では7世紀代、および9～10世紀代のいずれにおいても鉄鉄を素材とする精練が行われていた可能性が高いと筆者は考える。

## 7-2 原料鉄の流通とその使用

近年の出土遺物の自然科学的調査によって、東日本のいくつかの遺跡から鉄鉄塊が検出されている。表5には岩手県盛岡市志波城跡、東京都多摩市別所遺跡、および岩手県平泉町柳之御所遺跡出土の鉄鉄塊の自然科学的調査結果を示したが、検出遺構の立地、遺構の状況および鉄滓等の組成の対比によって他地域からもたらされた可能性の高いとする研究結果が提示されている。<sup>7)</sup> <sup>10)</sup> <sup>11)</sup>。鉄鉄の流通が平安末まで遡る可能性のあること<sup>10)</sup>。あるいは鎌倉期には鉄鉄や鋼を携え鉄器の製作に従事した技術集団が存在し、その活動は平安期にも展開されていたと推定されることとした文献史学の結果<sup>11)</sup>もそれを支持している。

既述の通り9～10世紀代に比定される住居跡および隣接する土壌からは、0.1%を超えるPを含有する鉄鉄が検出された。表5によれば、ほぼ同様の組成の鉄鉄は岩手県盛岡市志波城跡、岩手県平泉町柳之御所遺跡でも確認されている。平安期、相当量のPを含む鉄鉄が広範囲に流通していたことを示すものであり、そのような鉄鉄の流通に依拠した鋼製造が大川遺跡においても実施されていたと推定される。7世紀代に比定される住居跡では鉄鉄が未確認であるが、鉄滓からは0.1%を超えるPが検出されている。精練によって鉄鉄のPの相当量が鉄滓に移行すると考えられるので、出発物質である鉄鉄には少なくともやはり相当量のPが含まれていた可能性がある。

9～10世紀代と推定される住居跡からは0.066%のSを含有する過共析鋼が、隣接する土壌内からは0.1%を超えるPまたは0.66%のC<sub>0</sub>を含有する亜共析鋼が出土した。過共析鋼の非金属介在物はFe-Sであり、亜共析鋼には鉄チタン酸化物からなる非金属介在物が見出されている。鉄鉄中での硫黄化合物の偏析を前提とすれば、過共析鋼については一応精練産物とみることができるとは、亜共析鋼については難しい。2点の亜共析鋼の断面が角状を呈し、鉄滓の付着がみられなかったことを考慮すれば、この資料については製品としてもたらされたものが使用不能となったため廃棄されたか、あるいは相当量のP・C<sub>0</sub>を含有する鉄鉄塊が別途供給され、それを少量の

鉄チタン酸化物を含む物質を使って脱炭し、得られた鋼を加熱・鍛打して製品にしたかのいずれかと考えられる。

既述のとおり、9～10世紀代に比定される住居跡と覆土、および土壌からは、鉄チタン酸化物が残存した鉄滓が出土している。また、表52に示すとおり、平安期には前述の亜共析鋼とほぼ同様の組成の鋼製鉄器が確認されており、相当量のP・C<sub>o</sub>を含む鉄鉄も検出されているという事実も上述を支持している。

発掘調査結果に基づけば、7世紀代に比定される住居跡からの鉄生産関連遺物は希薄であり、その多くは9～10世紀代と推定される住居覆土、住居跡に隣接する土壌、および共存遺物が乏しい関係上、時代比定が困難なGridから出土したという<sup>1)</sup>。7世紀代に比定される住居跡と土壌内から外観形状が類似し、ほぼ同じ組成の鉄滓が見いだされているので、その当時の生産活動に伴う生成物が土壌に廃棄された可能性は十分にある。

しかし、7世紀代の住居跡では未確認であった鉄チタン酸化物または微量に酸化チタン、酸化アルミニウムを含む粒子が残存する鉄滓や鉄鉄が9～10世紀の住居覆土と土壌から出土していることを考慮すれば、土壌内出土鉄関連遺物の多くは、9～10世紀の住居跡覆土出土鉄関連遺物と関連づける必要がある。時代比定が困難であったGrid(U22Grid II層、S22Grid I層、P22Grid II層)出土の鉄滓にも微量に酸化チタン、酸化アルミニウムを含む粒子がみられ、組成上は9～10世紀の住居跡覆土出土の物とほぼ同じであった。ただし、鉄滓と共存関係はなかったが、T29Gridからは金属鉛が出土しているので、上述の時代特定困難な資料については後代の生産活動に伴うものという見方も考慮にいれなければならない。

津軽海峡を挟んだ東北地方北部では、9世紀後半以降、鉄関連遺構を伴った大規模な住居跡群が確認されており、遺構の立地と残存状況、ならびに出土遺物の形状とその組成から、それらの中には他地域から供給された鉄鉄を脱炭する精練が行われていた可能性が高いものの存在が指摘されている<sup>1)</sup>。

東北地方北部では平安期にいたり鉄器が普及する様子のみとれるが、前述した大川遺跡の調査もそれとよく整合する。松前町札前遺跡や千歳市末広遺跡、旭川市錦町5遺跡などにみられるように、北海道南・道央では10世紀に入って鉄関連遺構の検出が顕著となること<sup>1)</sup>をふまえれば、農耕や漁労といった日常の生産活動において鉄器の需要が増大した可能性が考えられる。

この点については出土鉄器の形式学的研究とともに、據文期の生活環境、生活様式の変遷を総合的に検討する中で解明を進めるべき課題といえる。最後に問題となるのが鉄鉄の供給依存地域である。有力な手がかりはP・C<sub>o</sub>、すなわち相当量のPまたはC<sub>o</sub>を含む鉄鉄の生産地域であるが、この点について明確にすることは難しい。大川遺跡の立地と共存する他の出土遺物の形状ならびに組成をふまえれば、現日本海交易を前提として列島内はもとより、東北アジアの範囲の中で検討することによって、その供給地域を絞り込むことができると考える。今後の研究の進展に期待したい。

## 註

- 1) 大川遺跡を調査された宮 宏明氏からのご教授による。
- 2) 『鉄鋼の顕微鏡写真と解説』 丸善株式会社 1981年
- 3) 各種の岩石、とりわけ火成岩中の主として磁鉄鉱と含チタン磁鉄鉱を構成鉱物とする粒子が、岩石の風化に伴って分離し、現地残留や風および水などの淘汰集積作用などで濃縮したものを砂鉄鉱床という<sup>3)</sup>。従って砂鉄を構成する主要鉱物は磁鉄鉱であり、鉄鉱石と区別して使用することには岩石鉱物学上誤解を招く恐れがあるが、ここでは上述によって生成した鉱床から採取された磁鉄鉱および含チタン磁鉄鉱を主成分とする粒子を砂鉄、他の成因によって生成した鉄鉱床から採掘されたものを鉄鉱石と呼ぶことにする。
- 4) 『鉄鋼便覧』 日本鉄鋼協会編 1981年
- 5) 大澤正巳 「古墳共鉄鉄滓からみた製鉄の開始」『季刊考古学 8』 1984年 P.36-46
- 6) 赤沼英男 「遺物の解析結果からみた半地下式壜型炉の性格」『季刊考古学 57』 1996年 P.41-45
- 7) 赤沼英男・福田豊彦 「鉄の生産と流通からみた北方世界」『国立歴史民俗博物館研究報告 72』 P.1-40
- 8) 村上英之助 「中沢・村上の往復書簡」『たたら研究 36・37』 1996年 P.78-88
- 9) 福田豊彦 「前近代の百科事典にみる鉄素材と製鉄技法」『平成10年度たたら研究会発表要旨集』 1998年 新潟市。なお、福田豊彦氏より、当該発表内容については『たたら研究会誌』第39号に投稿中であるとの私信を得ている。
- 10) 館 充 「鐵山必要記事について」『ふえらむ Vol.4, No.3』 1999年 P.22-30
- 11) 網野善彦 『日本中世の民衆像』岩波新書 1985年
- 12) 赤沼英男 「“みちのく”の地から中世の鉄をみる」『ふえらむVol.2 No.1』 1997年 P.44-51
- 13) 越田賢一郎 「糠文・アイヌ期における北海道の鉄・鉄器生産」『鉄を通して北の文化を考える』 1990年 P.31-40

## 第6章 小 括

### 第1節 大川遺跡検出竪穴状建物跡調査の成果

「竪穴状建物跡」という名称は、中世遺構を意識してのことではない。比較的大型の竪穴状遺構をほとんどの場合、住居跡あるいは住居址と呼んでいる研究者が圧倒的である。

かく言う筆者も、SH・JH・HP等と略称で使用しており、人のことは言えないわけであるが、特にカマドや炉がない竪穴、あるいは小型や超大型の竪穴、チップやフレークが床面に夥しく散乱している竪穴等々、住居址としては考えにくいものがある。物置・倉庫・作業小屋あるいは産屋等、当時の人々の生活にとって欠くべからざる付属施設が住居に隣接、あるいは離れて建てていたであろうことは想像に難くない。

既刊既報でも述べたところであるが、大川遺跡における当該成果として、さまざまなものがあげられる。しかし紙数等の制約もあり、特筆すべきいくつかの事柄についてののみ述べ、小括としたい。

SH-1・3・6・8・13における、コメ・ヒエ・アワ・キビ・ソバ等大量の炭化植物遺体の出土（写真15-51~81、表47）は、北海道の考古学界を震撼させずにおかなかった。

特に、コメの大量出土については重要な問題であるだけに当該時期をめぐって、吉崎・榎坂・越田氏他の諸先生・諸学兄からさまざまな批判が寄せられたが、明確に中世遺構（MO、第2章第3節参照）によって切られていることや、年代測定結果あるいは後出の遺物が伴出していないこと等により、原文期のものであると確信している。これらの批判も、これまでの北海道考古学界の常識からすれば、宜なるかなの感を強くするところである。

焼失住居（建物跡）というべきか、火災住居（建物跡）というべきかの判断も問題であるが、特にSH-6（図124）・SH-8（図131）・SH-13（図139）は、大量の炭化材とともに床面から覆土にかけて、炭化植物遺体が多量に伴出している。それぞれのセクションを参照して頂ければ一目瞭然であるが、いずれも焼失後、あまり時間がたたずに埋め戻されていることが、セクションから伺われるところである。

したがって、これらの事例は、覆土であろうが、床面であろうが、出土位置にかかわらず、遺物の一括性が確認できる事例であるといえよう。竪穴覆土の自然堆積が示す出土層位の認識とは異なるものであると言わなければならない。

このような事例からすると覆土上部から出土した炭化植物遺体は、家屋の上部構造、すなわち梁や桁の上に置かれていた。あるいは吊るされて保管されていた可能性を指摘できる。これは穀類の保存並びに小動物や虫害等を防止する上からも有効である。

中国の農業書である『さいふんしよふ齊民要術』（6世紀前半に成立）巻1の第2（収種）の項には、吊るして保管することの効用について、以下のように指南している。五穀の種子は、濕ける（濕氣る）

と生えないし、生えてもすぐ枯れる。さらに虫がつく。煮ても、煮え加減にむらがある等々、穀類に関する全般に亘っての指南がなされている。このような事例を引用するまでもないが、当該竪穴の出土状況は、このような可能性があったことを示唆しているものと筆者は考えている。

次にⅨ群 a 1 類土器、いわゆる北大Ⅲ式土器期の竪穴である SH-2・6・8・9・11・13等について若干述べなければならぬ。従来、当該土器を伴う明確な竪穴の検出は、カリンバ3遺跡(木村英明 1985 「いわゆる北大式土器とその文化に関する基礎的な研究(予報)」)以外、全く皆無といってよい状況であった。カリンバ3遺跡に関する評価についても、科研費による小発掘で、正式なレポートが刊行されていないという状況もあって、等閑視されてきた感がある。しかし、大川遺跡の当該事例ともかかわって、再評価しなければならない時期に来ていると筆者は考えている。

ちなみに、大川遺跡の当該竪穴には、カマドのあるものとなないものがあり、7世紀頃とみられる北海道におけるカマド導入期の問題ともかかわって重要である。これは単にカマドのない竪穴が先行し、カマドのある竪穴が後続するというのではない。前述したように、住居とは考えにくい竪穴があり、カマドの有無のみで先後関係を論じることはできない。

更に、SH-6・13(写真13-21・100)には出入口とみられる突出部が存在する。前者は北向、後者は南向きと全く方向を異にするが、Ⅸ群 a 1 類土器期の竪穴であることは、くり返し述べたところである。

これらの出入口は、縄文期において、いわゆる舌状部と呼ばれている出入口施設のある竪穴の系譜に連なるものであろうと筆者なりに理解してはいるが、前述したように、大川遺跡6年間の発掘調査では舌状部を有する縄文期の竪穴が1例も確認されておらず、説得力のないものとなっている。

図172-18の土器、すなわち大陸系の可能性のある土器他について若干述べておきたい。すでにSH-24の当該ヶ所で尽くされているが、遺構外出土の土器に内外面黒色土器があり、それらの流入経路等ともかかわって話題を呼び、何としても類例を知りたいと考えていたところ、やっとデリュエギン・ウアレリー氏より類例について御教示頂いた。氏によれば、アムール河口部に当該土器の分布が認められ、ズメイカ1遺跡、スタラヤ・カコルマ遺跡、ウゴルナヤ遺跡で出土しているという。また、北サハリンのオハの博物館収蔵資料にも類例が認められるとのことである。

さらに、田村晃一青山学院大学文学部教授を研究代表者とする文部省科学研究費による研究を実施中である。これは、日本と大陸の交流を示す遺物の分析を実施しているもので、当該土器の小破片を1999年6月に提供し、東京学芸大学教育学部化学教室の二宮修治助教授が分析にあっているものである。この分析結果の報告にも期待して、当該土器に関しては、ひとまず鑑査する。

本書第1分冊で報告した墨書土器と鹿書土器については、JH-1覆土出土の墨書須恵器環2点(いずれも「大」、図26-18・19)・JH-5覆土出土の墨書須恵器環1点(「大」?、図54

-23)・JH-14覆土出土の黒書須恵器坏1点(「七」?、筆者の不手際により未掲載、【1993年度大川遺跡発掘調査概報】の図47-8参照のこと)・SH-35床面出土の黒書須恵器坏1点(「七」?、図188-6)・SH-38床面出土の黒書須恵器坏1点(「大刀」、図201-6)・SH-61覆土出土の黒書土師器坏1点(「七」?、図244-20)及びSH-37とSH-63の両竪穴床面出土の黒書土師器坏1点(「夫」、図246-4)の合計8点であった。

これらの文字資料としての解釈については、佐伯有清 1994 「「夫」字記載の出土遺物—大川遺跡文字土師器の意義—」【1993年度大川遺跡発掘調査概報】所収論文及び同概報Ⅲaを、また、拙稿で恐縮ではあるが、1990 「化外の地における銚帯金具出土の意義—北海道余市町大川遺跡出土の銚帯金具と「夫」・「奉」の刻書土師器・須恵器、黒書須恵器をめぐって—」【北奥古代文化】第20号及び 1996 「余市大川遺跡出土古代の文字資料をめぐって」【北奥古代文化】第25号を参照願いたい。

前記諸論文発表後の追加資料としては、佐渡国分寺出土「夫」の字の黒書瓦(新潟県教育委員会 1958 【南佐渡—南佐渡学術調査報告—】及び 真野町文化財審議会編 1995 【佐渡国分寺】 真野町教育委員会)と青森市野木遺跡出土の「夫」の字の黒書土師器坏5点(青森市教育委員会 1999 【いにしえ 青森】VOL.7)他(戸根貴之 1999 【古代文字資料にみる蝦夷】【古代】第106号)があり追加資料の検討もあるが、概ね一区切りついている状況である。いずれ、北海道いや北日本における当該土師器の集成とあわせて再論するつもりである。乞う御期待。

さて、本遺跡の中では、ひときわ大きな竪穴を有するⅣ群C類土器、つまり港大照寺式土器については、筆者があれこれ述べるよりも、若く前途有望なる2人の優れた考古学者(北海道大学と筑波大学の大学院博士課程後期の院生)が、本書第1分冊刊行後、必ず当該土師器を包括する縄文晩期末葉—縄文前期前葉に関する論文を発表するであろう。

彼等は余市に何度も足を運び当該土師器の観察や実測図作成を通じて、筆者以上に当該土師器については明るく、考古学的にもアカデミックな見識を有している。当該土師器に関しては、彼等2人の論文発表に託し、ひとまず置筆。

1999年3月刊の【人舟遺跡における考古学的調査】及び本書作成にあたっては、【重要文化財調査説明書—考古資料の一部—】 1994 文化庁刊 に基づいた、御指導頂いた文化庁文化財保護部美術工芸課 文化財調査官 原田昌幸先生に衷心より感謝申し上げます。(宮)

## 第2節 大川遺跡検出竪穴状建物跡総括

1989年から1994年までの6年間に、大川遺跡で発見された竪穴状建物跡の多くは住居跡と考えられた。

時期は、縄文時代晩期から、統縄文期を経て擦文時代に亘っている。報告書の作成に当たり、時期別に記述したいと思い、何度か方策を考えたが、現状では無理であり、次善の策として発掘順にぬかりなく記述することにした。調査報告としては、これも見識の一つと考えている。すでに、調査年度ごとに刊行されている6冊の概報と補完しながら利用していただければ幸いである。

### 1 北の竪穴住居の特殊性

海岸線と平行に礫を多く含んだ自然堤防があり、今回の調査区域では、ここが最も高い位置にあると見られた。縄文から統縄文にかけての住居は、自然堤防の内側近くに集中し、縄文晩期の家1軒、統縄文の家16軒が発掘された。統縄文の住居のうち、初期の港大照寺式期の住居が6軒あり、他の時期に比較して大型の住居が目立っている。次に恵山式期の住居が10軒あって、最も多く、後北式は、自然堤防から少し離れて、最盛期のB式期が2軒残されている。

これらの住居は、プランがほぼ円形で、共通する特徴は、2枚の床面を持っているようにみられることである。このような所見は、現在までに私が発掘を経験した北海道を含む北方地域の住居跡に共通している。北海道の縄文早期の家の跡でも、統縄文の家の跡でもそうだったし、米国のアラスカ州で発掘した各時期の住居跡もすべてそうであった。はじめに掘り込まれた当時の床面と、直立した壁面が残り、その上部に、もう一つならかな皿状の床面があって、多くの遺物を含んでいる。

例えば、JH-4の港大照寺式期の住居は、本報告の中で最も大型なものだが、中央に竪んだ炉があり、回りに1段高い床面がしつらえられて、斜めに上がる壁へと続いている。これが、最初に造られた時の状態で、その後、埋まりかかった窪地が次の床面になり、再び使われたと考えられる(5層)。それが、さらに埋まる過程で、貝殻などを捨てる送り場として利用された(4層)らしい。他の住居も同じような断面が観察されている。

これは、アラスカの民族考古学的所見で、冬の家として使われた家が、しばらくして、夏の家にも使われる状況と酷似している。夏と冬の温度差が激しく、また、春の雪解け時には水滴が滴まされる北方地域では、夏と冬の2軒の家が必要である。夏の家には、近くにある窪みが選ばれるので、廃墟になった冬の家が格好の床面を提供することになる。北方地域は、腐植が速く堆積に時間がかかるので、何時までも窪みが残ったままになっている。このようなよく似た自然環境の下で、北海道でも竪穴住居の再利用が計られていたものと思われる。また、冬の家は、廃棄する時に使える物をほとんど持ち去るが、夏の家では、ある程度残されたままのことが多く、窪みに物を捨てることもあるので、結果として遺物が多くなるらしい。このことも、今回の調査結果として合致している。



## 2 余市大川遺跡の掘文集落

今回、報告した掘文期の建物跡71軒のうち、57軒が縄文期の住居と同じ地区から発見され、14軒が、自然堤防よりも海側から発見された。この14軒の中には、小型で住居として使われたとは考えられない建物跡がいくつも見られて興味深い。

なかでも、SH-3は、竪穴が深く、良く焼けた炉を持つこと、スラグが発見されたことなどから、小鍛冶建物跡の可能性も考えられた。SH-1・2・4・5などは、キビ・アワ・ヒエ・コメ・ソバなどの炭化種子が数多く発見された、炉も甕もない小竪穴である。そのため住居跡とは考えられず、穀類の倉庫の可能性も示唆される。炭化種子は、SH-6・8・11・13からも発見され、焼失建物が多かったことも手伝って、海岸寄りには炭化種子の発見の中心部になっている。時期は比較的古いものが多い。海側と反対の地区では、川沿いの住居3軒から少しまとまった炭化種子が発見されたに過ぎなかった。時期が新しくなるにつれて、穀物種子の発見は少なくなるように見える。

住居は、隅丸方形が基本形で、大型のもので、辺6 m前後、4 mから5 m位が標準の大きさである。竈と地床炉が併用されていることが多く、冬の寒さに備えている構造と考えられ、寒地北海道の特徴といえよう。竈は、南に造るのが一般的であるが、西向きや北向きの一群も見られ、その理由の解明が待たれる。主柱穴は、無い家が普通で、あっても2本しか見られず、積雪地域の砂地に建てられた構造物について、力学的に分散が図られたものと思われる。この時期の住居で、特筆すべき施設は竈である。竈には、袖石・煙道・蓋石が用いられ、見事なまでに完成された設備が造り出されている。長い煙道は落雪を避けるための構造でもあったと考えられ、煙道の蓋石がこれを助けている。入り口が張出して造られている住居も見られるが、これも寒地対策の一つであろう。

集落の絶対年代については、放射性炭素による年代測定法を用いて測定を行ったが、時代が新しいために年代にばらつきが見られ、にわかに決定し兼ねるものがある。しかし、2か所から得られた測定結果で、それぞれ近い値を示したものについて見ると、SH-13は西暦850年頃、SH-3は西暦1100年頃、SH-7は西暦1300年頃に比定される結果がもたらされた。掘文時代のおおまかな年代が示されたと見るべきであろう。しかし、土器の型式学的な相対年代とは必ずしも一致しないようであり、土器研究から、さらに細かな年代を推定して行くことが必要になってくる。前節で述べられているように、土器研究から掘文集落は3時期あるいは4時期に分けることが出来、集落は河口に近い地区から、しだいに川の上流に向かって広がって行ったと考えられた。遺物の状況や、住居の方向などから分類（グループ分け）すると、6軒から8軒の群れが取り出せる。今後、調査の機会を得て、南東に広がる住居が完掘されれば、集落の様子がさらに明らかになると思われる。

床面の重層化は、この時期にもみられ、覆土から出土する遺物は複雑さを増している。それだけに貴重な資料として、今後の解釈が楽しみな遺跡である。 (岡田)

## 報告書抄録

書名	大川遺跡における考古学的調査 I
副題	一余市川改修事業に伴う1989年度～1994年度大川遺跡発掘調査報告書 第1分冊（総説・竪穴状建物跡篇）一
編著者名	岡田淳子・宮 宏明
発行機関	北海道余市町教育委員会
所在地	北海道余市町朝日町26番地
発行年月日	2000年1月30日

遺跡名	大川遺跡
所在地コード	北海道余市町大川町、市町村（D19）、遺跡番号（6）
遺跡の位置	北緯 43° 12′，東経 140° 48′
調査原因	余市川河川改修事業
調査年度と 発掘調査面積	1989年度（3,500㎡）、1990年度（3,800㎡）、1991年度（3,800㎡） 1992年度（2,410㎡）、1993年度（1,910㎡）、1994年度（1,962㎡）

時代・時期	縄文晩期・統縄文期・擦文期・近世
主要遺構	竪穴状建物跡
主要遺物	黒書須恵器坏・寛書土師器坏・内外黒色壺・大陸系とみられる壺・土鈴
特記事項	焼失の竪穴状建物跡の検出と多量の炭化米他の伴出

---

## 大川遺跡における考古学的調査 I

—余市川改修事業に伴う1989～1994年度大川遺跡発掘調査報告書 第1分冊(竪穴状建物跡篇)—

発 行 余市町教育委員会

北海道余市町朝日町26番地

発行日 2000年1月30日

商工社 久留宮印刷

北海道余市町大川町4丁目98番地

---